歷史學

第十一卷

BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.11

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂
國譯大藏經

LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
v. 11

華嚴經第三 目次

卷第三十九
離世間品第三十三之四……一
卷第四十
離世間品第三十三之五……二四
卷第四十一
離世間品第三十三之六……四七
卷第四十二
離世間品第三十三之七……六五
卷第四十三
離世間品第三十三之八……八八

卷第四十四
入法界品第三十四之一……一二七
卷第四十五
入法界品第三十四之二……一五三
卷第四十六
入法界品第三十四之三……一八一
卷第四十七
入法界品第三十四之四……二〇五
卷第四十八
入法界品第三十四之五……二三一
卷第四十九
入法界品第三十四之六……二五〇
卷第五十
入法界品第三十四之七……二七二
卷第五十一

入法界品第三十四之八……二九〇
卷第五十二
入法界品第三十四之九……三一五
卷第五十三
入法界品第三十四之十……三四七
卷第五十四
入法界品第三十四之十一……三七六
卷第五十五
入法界品第三十四之十二……四〇七
卷第五十六
入法界品第三十四之十三……四三八
卷第五十七
入法界品第三十四之十四……四七四
卷第五十八
入法界品第三十四之十五……四九六

卷第五十九
入法界品第三十四之十六……五三〇
卷第六十
入法界品第三十四之十七……五五二

大方廣佛華嚴經

第三

經典部
第十一卷

大方廣佛華嚴經　巻第三十九

東晋天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

離世間品第三十三之四

【佛子菩薩摩訶薩】第四に三百句を以て十廻向位の廿九問に答へて、行相を明す。三段に分つて初百十句は廻向位行中の行體堅固の義を説く。【十種の寶住】此段正法の住することを明す。

『佛子、菩薩摩訶薩に十種の寶住有りて、阿耨多羅三藐三菩提を成ず。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は悉く能く無量阿僧祇の世界の諸の如來の所に往詣して、恭敬し禮拜し、親近し供養す。是を菩薩摩訶薩の第一の寶住にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は、不可思議の諸の如來の所に於て、法を聞きて受持し、正念して忘れず、智慧もて分別し、勝趣を長養し、智慧を出生して、十方に充滿す。是を菩薩摩訶薩の第二の寶住にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は此土を離れずして、而も異刹に於て受生を示現し、一切の佛法に於て心惑亂せず。是を菩薩摩訶薩の第三の寶住にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は一法を出生し、別相分別して一切の法を知る。一切の諸法は究竟じて無一無異の義なるが故に。是を菩薩摩訶薩の第四の寶住にして阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は煩惱を息むるを知り、煩惱を斷ずるを知り、善く住して菩薩の諸行を修習し、實際を證せず、究竟じて實際の彼

岸に到り、善く學びて巧妙の方便を成就し、本願成滿して心に疲厭無し。是を菩薩摩訶薩の第五の寶住にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は、一切衆生の心に處所無きを知り、而も衆生の心に處所有りと說き、無著無行にして、菩薩の行を修して衆生を化度す。是を菩薩摩訶薩の第六の寶住にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は、一切の法は一性なるを知る。謂ゆる無性にして一無く異無く、來無く去無く、稱量すべからず、讃歎すべからず、悉く實性無ければ、一異を以て求むるに皆得べからず、而も菩薩摩訶薩は決定して、此は是れ佛の法、是れ菩薩の法、是れ緣覺の法、是れ聲聞の法、是れ凡夫の法、是れ善法、是れ不善の法、是れ世間の法、是れ出世間の法、是れ染汚の法、是れ不染汚の法、是れ有漏の法、是れ無漏の法、乃至是れ有爲法、是れ無爲法なりと了知す。是を菩薩摩訶薩の第七の寶住にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は、佛を求むるに得べからず、菩薩を求むるに得べからず、法を求むるに得べからず、衆生を求むるに得べからず、而も亦本願を捨てずして、一切衆生を教化し、無上道を成ず。何を以ての故に。菩薩の修する所の善根は、一切をして無上道を成ぜしめんと欲し、善く衆生の善根を知り、善く衆生の境界を知り、善く衆生を敎化するを知り、善く一切衆生の涅槃を知りて、菩薩の行を修し、一切の大願を成滿せしめんと欲すればなり。是を菩薩摩訶薩の第八の寶住にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は其所應に隨ひて、善巧に法を說きて之を調伏し、巧妙の方便もて涅槃を示現し、實にし

【大乘を莊嚴す等】既に所住貴ぶべく大乘無限齊法に於て、堅固心を以てその際を窮盡するにいふ。

て虛に非ず、亦顛倒に非ざるを知り、而も三世の菩薩の正法に安住し、如如を離れず、實際に住せず、亦衆生を見ず、亦衆生の已に化を受け、今化を受け、當に化を受くべきを見ず。我所行の虛妄たるに非ざるを解り、乃至一法として求め得べき者有ること無きを解了す。生滅無きが故に。而も菩薩の所願は皆悉く虛しからずして、依止する所無し。是を菩薩摩訶薩の第九の寶住にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は不可思議の諸佛の一一の佛所に於て、不可說不可說の受記の法、名號各異り、劫數同じからざるを聞き、一劫の中より次第に法を聞き、乃至不可說不可說の劫に、受記の法を聞く。是法を聞き已りて、驚かず怖ぢず畏れず、菩薩の行を行じて、心に疑惑無し。如來の智は不可思議にして、如來の說きたまふ所の言には二有ること無きを解り、本願滿足して應に化を受くべきに隨ひて、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしめ、一切の願を滿じて法界に了達すればなり。是を菩薩摩訶薩の第十の寶住にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の大智慧の寶を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の金剛心を發して大乘を莊嚴する有り。何等をか十と爲す。謂はゆる菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、「一切諸法は分際有る無く、究竟すべからず」と。菩薩は是の如きの心を發すらく、「我當に三世の一切諸法を覺了して悉く餘り有る無からしむべし」と。是を菩薩摩訶薩の第一の金剛心を發して大乘を莊嚴すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、「一毛端の處に於て無量無邊にして數ふべからざる菩薩有り、何に

【一切を攝取す】無相不壞相を攝取と爲す、無相に相を攝し、相に無相を攝するが故に、一切を攝すといふなり。

況んや一切法界をや」と。菩薩は是の如きの心を發すらく、「我當に大莊嚴を發して自ら莊嚴し、衆生を化度して、皆阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしめ、大般涅槃を以て般涅槃すべし」と。是を菩薩摩訶薩の第二の金剛心を發して大乘を莊嚴すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、「十方の世界は無量無邊にして、分際有る無し」と。菩薩は是の如きの大願を發すらく、「我當に無上清淨の莊嚴を以て、此等の一切の世界を莊嚴し、彼諸の莊嚴は皆實にして虛しからざるべし」と。是を菩薩摩訶薩の第三の金剛心を發して大乘を莊嚴すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、「衆生は無量無邊にして分際有る無く、窮盡すべからず」と。菩薩は是の如きの心を發すらく、「我當に諸の善根を以て、一切衆生に廻向し、無上の大智慧の光を以て、普く一切衆生を照すべし」と。是を菩薩摩訶薩の第四の金剛心を發して大乘を莊嚴すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、「一切諸佛は無量無邊にして、窮盡すべからず」と。菩薩は是の如きの心を發すらく、「我種ゑし所の善根を一切の諸佛に廻向し、奉給し供養し、然る後に、我乃ち等正覺を成ぜん」と。是を菩薩摩訶薩の第五の金剛心を發して大乘を莊嚴すと爲す。菩薩摩訶薩は一切の佛を見、說きたまふ所の法を聞きて、大歡喜の心を發し、自身及び如來身に著せず、佛身は實に非ず虛に非ず、有に非ず無に非ず、有性に非ず無性に非ず、色に非ず無色に非ず、相に非ず無相に非ず、生に非ず滅に非ずと解知し、如來は實に所有無く亦有相を壞せずと解知す。何を以ての故に。一切を攝取するが故に。是を菩薩摩訶薩の第六の金剛心を發して大乘を莊嚴すと爲す。

【不二法に住す】菩提及び我の不二、即ち法思忍なり。

菩薩摩訶薩は若し衆生有りて訶罵し毀辱し、或は手足耳鼻を截ち、或は其目を挑り、或は其頭を級らんも、菩薩は此に因るが故に恚害の心を生ぜず、不可説不可説の劫に於て、菩薩の行を修して衆生を攝取し、心に廢捨せず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は不二の法に住して善く菩薩の所學を學び、清淨の直心もて、一切衆生に於て瞋恚の心無く、衆苦を忍住して心に加報無く、自身に一切の衆苦を堪受すればなり。是を菩薩摩訶薩の第七の金剛心を發して大乘を莊嚴すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、「未來世の劫は無量無邊にして、分際有る無く、窮盡すべからず」と。菩薩は是の如きの心を發すらく、「我當に一切の未來世の、法界虛空界に等しき劫を盡して、一世界に於て菩薩の道を行じて衆生を教化すべし、一世界の如く、盡法界虛空界に等しき一切世界も亦復是の如し、心亦驚かず、怖ぢず、畏れずして菩薩の行を行ぜん。何を以ての故に。菩薩の法は應に是の如く、一切衆生の爲に菩薩の行を修すべければなり」と。是を菩薩摩訶薩の第八の金剛心を發して大乘を莊嚴すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、「阿耨多羅三藐三菩提は心を以て本と爲す。心清淨なるが故に、能く一切の善根を積集し成滿す。若し心自在を得ば、則ち能く無上菩提を成就し、菩薩行を行じ、諸願を滿足し、究竟じて一切衆生を教化せん」と。是を菩薩摩訶薩の第九の金剛心を發して大乘を莊嚴すと爲す。菩薩摩訶薩は佛の不可得、菩提の不可得、菩薩の不可得、一切法の不可得、衆生の不可得、心の不可得、行の不可得、過去の不可得、未來現在の不可得、一切衆生の不可得、有爲無爲の不可得なるを知

【大事】所作の大事に於て發起現前せしむる故に名く

る。菩薩摩訶薩は是の如くして寂靜に住し、甚深に住し、寂滅に住し、無諍に住し、不可得に住し、無二に住し、無等に住し、眞實に住し、成就に住し、解脫に住し、涅槃に住し、實際に住して、而も亦一切の大願を捨てず、一切の智心を發すを捨てず、菩薩の行を修するを捨てず、衆生を敎化するを捨てず、諸佛を恭敬し、供養することを捨てず、法を說くを捨てず、一切の世界を莊嚴するを捨てず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は大願を出生するが故に。善く是の如きの法相を知りて、大悲の無量の功德を長養し、衆生を攝取して衆生を捨てず。一切の諸法は眞實有る無し、凡愚の衆生は知らず覺らず。一切の諸佛は寂滅に安住して、正法を演說し、衆生を敎化し大悲を捨てたまはず。一切衆生は未だ菩提を得ず、佛法未だ足らず、大願未だ滿ぜざるなり。我本一切衆生に請うて、無上の大法施の主と爲り、實語、不虛語、一切諸佛の種姓の語を唱へ、大願門の心を發し、一切衆生を饒益する心を發し、一切の善根を長養する心を發し、善巧方便に安住する心を發し、內身に一切衆生を含受する心を發し、一切衆生の所に平等を生ずる心を發して、一切衆生をして所願を成滿せしめん。我當に云何が未だ衆生を度せざるに而も大悲を捨つべき。是を菩薩摩訶薩の第十の金剛心を發して、大乘を莊嚴すと爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の金剛心を發して大乘を莊嚴すと爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の金剛智明を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の大事を發す有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切諸佛を恭敬

し供養したてまつる。是を菩薩摩訶薩の第一の發大事と爲す。一切菩薩の善根を長養せん。是を菩薩摩訶薩の第二の發大事と爲す。一切如來の滅度の後に、悉く舍利を取りて無量の塔を起し、種種の妙寶を以て莊嚴と爲し、一切の華、一切の鬘、一切の香、一切の塗香、一切の末香、一切の衣、一切の蓋、一切の幢、一切の幡を以て之を供養し、諸佛の正法を守護せん。是を菩薩摩訶薩の第三の發大事と爲す。一切衆生を教化し成就して、阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。是を菩薩摩訶薩の第四の發大事と爲す。諸の佛刹の無上清淨の莊嚴を以て、一切世界を莊嚴せん。是を菩薩摩訶薩の第五の發大事と爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、「我當に一衆生の爲に一一の世界に於て、未來際の阿僧祇劫を盡して菩薩の行を修すべし。一衆生の爲の如く一切衆生の爲にも亦復是の如く、大悲を出生して、一切衆生をして菩提に安住せしめ、乃至一念疲厭の心を生ぜざるべし」と。是を菩薩摩訶薩の第六の發大事と爲す。我當に不可思議阿僧祇劫に於て、彼諸の如來を恭敬し供養したてまつるべし」と。是を菩薩摩訶薩の第七の發大事と爲す。「彼諸の如來の滅度の後は、我當に悉く舍利を取りて塔廟を起し、其塔の高廣なること不可說の諸の世界と等しくし、如來の像を造りて巍巍高大なること不可思議の世界の如くし、不可思議劫に於て、衆の妙寶、幢幡、繒蓋、華香を以て之を供養し、乃至一念休息の心を生ぜず、衆生を教化し、正法を受持し、守護し讚歎して、亦一念休息の心無かるべし」と。是を菩薩摩訶薩の第八の發大事と爲す。「彼諸の善根を修習して、阿耨多羅三藐三菩提を成し、悉く一切

【究竟】前に大事に於て但能く現前に起せしめしも、今所作成滿を明すを以て究竟といふなり。

諸の如來と等しく、一切諸の如來地を逮得せん」と。是を菩薩摩訶薩の第九の發大事と爲す。「我菩提を成じ已りて、一切世界に於て不可說の劫に、微妙の法を說き、如來の不可思議の自在神變を示現し、其身口意は未だ曾て暫くも疲厭の想を生ぜず、但專ら正法を念ずるの心、如來力の心、一切衆生の願を充滿する心、大慈悲の心、諸法の眞實を觀察するの心を發し、實諦に安住して寂滅の法を證し、一切衆生は悉く不可得にして、而も亦一切諸の業に違はず、三世の一切諸佛に隨順して一切の法界虛空界を究竟し、諸法の所有の相無くして不生不滅を觀察し、一切諸佛の無上の大願を具足し成就して、一切諸佛の大事を施作し、悉く能く一切衆生を化度せん」と。是を菩薩摩訶薩の第十の發大事と爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の發大事と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の智慧を得て、一切菩薩の所行を斷ぜざらん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の大事を究竟する有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切如來を恭敬し供養して、大事を究竟し、請ふ所の衆生に隨ひて皆悉く度脫して、大事を究竟し、專ら一切諸佛の正法を求めて大事を究竟し、一切の善根を長養して大事を究竟し、一切諸の如來の法を出生して大事を究竟し、一切の清淨の大願を成滿して大事を究竟し、一切の菩薩の行を行じて大事を究竟し、一切の善知識を恭敬し奉事して大事を究竟し、一切世界の佛所に往詣して大事を究竟し、一切諸佛の正法を聞持し、深く一切諸佛の大衆に入りて大事を究竟す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の究竟大事と爲す。若し菩薩摩訶薩、此

【佛子…不壞信等】以下七十門有りて行體の障を離れ諸勝德を攝するを明す。中に初四十門は信惠善巧を明し、後三十門は心行攝位を明す。

【不壞信】深入法に於て淨信壞せず不信の障を破するなり。

【衆生…壞せず】信は所化悲境の故なり、又その如來藏佛性等あるを信ずる故なり。

【受記】既に内に堅信を懷き、外に記莂を蒙むる故受記あり、前には自ら授記を知るを明し、今は諸佛の與記を明すを以て別となす。

【諦滿し等】初地見諦に記を得るをいふ。

【善根廻向】己れの善根を以て善友に順同するに名く。

法に安住せば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得て智慧の大事を究竟せん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の不壞信有り、何等をか十と爲す。謂ゆる一切の佛に於て不壞信。一切の佛法に於て不壞信。一切の聖僧に於て不壞信。一切の菩薩に於て不壞信。一切の善知識に於て不壞信。一切衆生に於て不壞信。一切の菩薩の大願に於て不壞信。一切の菩薩の行に於て不壞信。一切の諸佛を恭敬し供養したてまつりて不壞信。一切衆生を教化し、菩薩の巧妙の方便を成就して不壞信なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の不壞信と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の智慧の不可壞の信を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の受記有り。何等をか十と爲す。謂ゆる專ら解脫を求めて菩薩は受記す。菩薩の善根を諦滿し諦辦して菩薩は受記す。廣く菩薩の無量の諸行を行じて、菩薩は受記す。現前に菩薩は受記す。祕密に菩薩は受記す。自心に因つて菩提を得て菩薩は受記す。法忍を得て菩薩は受記す。衆生を教化し成就して菩薩は受記す。一切劫を究竟じて菩薩は受記す。一切の菩薩の自在の修行にて菩薩は受記す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の受記と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切の佛所に於て受記を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の善根廻向有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切善根を廻向して善知識の願に同じ、一切善根を廻向して善知識の正直心に同じ、一切善根を廻向して善知識の行に同じ、一切善根を廻向して善知識の善根に同じ、一切善根を廻向して善知識の善根に隨順し、一切善根を廻向して善知識の正念に同じ、一切善根を廻向して善知識の清

【同ず】菩薩の善根廻向と善知識のそれと一體無異なるに名く。

【智慧】廻向の德熟し智能く自在を得る故に名く。

【佛子云云】以下三十門は心行攝位を明す。

【無量無邊の廣心】無限の境に於て稱境の心を發すことを示す。

淨に同じ、一切善根を廻向して善知識の住に同じ、一切の善根を廻向して善知識の入成滿平等に同じ、一切善根を廻向して善知識の不壞の深心に同ず。若し是の如く同ぜば、則ち無異の同なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の善根廻向と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切の無上の善根廻向を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の智慧を得る有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切施に於ける自在の智慧一切の佛法解脫を樂ふ自在の智慧。深く一切如來の無量無邊に入る自在の智慧。問に隨ひて能く答へ一切の疑を滅する自在の智慧。深く實義を解る自在の智慧。一切如來の巧妙の方便を解り、深く一切諸佛の解脫に入る自在の智慧。一切の佛所にて、少善根を種ゑ、必ず能く一切の白淨の善根を滿足して、如來の一切智慧を出生するを解る自在の智慧。菩薩の不思議住を具足し成就する自在の智慧。一念の中に於て悉く能く不可說の佛所に往詣する自在の智慧。一切諸佛の菩提を覺悟して、深く一切法界に入り、一切の佛法を聞持して深く一切如來の莊嚴せる語言に入る自在の智慧なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の智慧を得と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切如來の無上の自在の智慧を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の無量無邊の廣心を發す有り。何等をか十と爲す。謂ゆる無量無邊の廣心を、一切の佛に於て發し、無量無邊の廣心を發して一切衆生を度脫す。無量無邊の廣心を發して、一切衆生、一切世、一切刹をして悉く法界に入らしむ。無量無邊の

【藏】既に大心普周を以ての故、德をして海の奧を窮めしむるなり、藏とは、含攝、蘊積の義なり。

【調順】既に積德盈滿し、剛獷斯れ盡くる故に今明すなり。調順とは所作の行成熟して至順調柔に名くるなり。

廣心を發して、一切法は悉く虛空の如しと觀ず。無量無邊の廣心を發して一切の菩薩の諸行を觀察す。無量無邊の廣心を發して三世の一切諸佛を正念す。無量無邊の廣心を發して不可思議の諸業の果報に了達す。無量無邊の廣心を發して一切諸の如來の刹を嚴淨す。無量無邊の廣心を發して深く一切如來の大衆に入る。無量無邊の廣心を發して一切如來の妙音を觀察す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の無量無邊の廣心を發すと爲す。若し菩薩摩訶薩、此心に安住せば、則ち一切の佛の無量無邊の智慧の大海を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の藏有り。何等をか十と爲す。謂ゆる分別して一切法を數へ知る藏、一切法を出生する藏、普く一切の陀羅尼法を照す藏、一切の法辯を分別し解說する藏、一切の法に於て、不可說の巧方便を覺る藏、一切の佛の自在力、大神變を示現する藏、一切法に於て、平等の巧方便を出生する藏、常に一切の佛を見ることを離れざる藏、不思議劫に入りて、皆悉く幻の如き巧方便の藏、一切の諸佛菩薩に於て、歡喜し恭敬する藏なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の藏と爲す。若し菩薩摩訶薩、此藏に安住せば、則ち一切諸佛の大智慧の藏を得て、悉く能く一切衆生を度脫せん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の調順有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の佛法を謗らざるの調順、一切の佛に於て、信壞すべからざるの調順、一切の菩薩を尊重し恭敬する調順、一切の善知識に親近する調順、一切の聲聞緣覺を遠離する調順、菩薩の一切の三昧を長養する調順、平等に一切の衆生を觀察する調順、究竟じて一切の善根を成滿す。調順、悉く

【十種の自在】以下百二十門有りて行用の自在を明す。中に初十は總じて自在を明す。この十自在とは作用無礙にして延促己れに由る故自在といふなり。
【莊嚴自在】財物自在に名く。
【解脫自在】信解自在に名く。
【神力自在】如意自在に名く。
【十種の自在】以下百十門は別して自在を顯はし、初に十章を列ね、後に百門を以て次第に解釋するなり。
【衆生自在】是れ所化を以ての故なり。

能く一切諸魔を降伏する調順、一切の波羅蜜を成滿する調順なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の調順と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち無上大智の調順を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の自在有り。何等をか十と爲す。謂ゆる壽命自在なり、無量無邊の不可說劫に壽命を住持するが故に。心自在なり、阿僧祇の三昧を出生して深智に入るが故に。莊嚴自在なり、大莊嚴を以て悉く能く一切刹を莊嚴するが故に。業自在なり、隨時に報を受くるが故に。受生自在なり、一切刹に於て生を示現するが故に。解脫自在なり、一切世界に諸佛の充滿したまふを見るが故に。願自在なり、時に隨ひ刹に隨ひて菩提を成ずるが故に。神力自在なり、一切の大神變を示現するが故に。法自在なり、無量無邊の法門を示現するが故に。智自在なり、念念の中に於て如來の十力無所畏を覺悟するを示現するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の自在と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛菩薩の究竟成滿せる一切智の自在を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の自在有り。何等をか十と爲す。謂ゆる衆生自在、刹自在、法自在、身自在、願自在、境界自在、智自在、通自在、神力自在、力自在なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の自在と爲す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の衆生自在と爲す。佛子、菩薩摩訶薩に十種の衆生自在有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生を度脫する自在。一切衆生の想を持する自在、一切衆生の爲に法を說きて、未だ曾て時を失はざる自在。一切衆生に變化する自在。一切衆生を一

毛道に安置して逼迮せざる自在。一切世界の一切衆生の中に於て示現して、王と爲るの自在。一切衆生の中に於て帝釋梵王を示現する自在。一切衆生の中に於て聲聞縁覺の不轉の威儀を示現する自在。一切衆生の中に於て菩薩行を行ずるを示現する自在。一切衆生の中に於て、佛身の相好端嚴なるを示現して一切智力を覺悟する自在なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の衆生自在と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の刹自在有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切刹をして一刹と爲さしむるの自在。一切刹をして一毛道に入らしむるの自在。一切刹に於て深く無盡の方便に入る自在。一切刹に於て一身結跏趺坐して充滿するを示現する自在。一切刹をして現に己が身に入らしむる自在、神力もて一切佛刹を振動して衆生をして恐怖せしめざる自在。一切刹の莊嚴を以て一刹を莊嚴する示現自在。一刹の莊嚴を以て一切刹を莊嚴する示現自在。一如來の身及び其眷屬は、皆悉く一切佛刹に充滿して、佛生に示現する自在。一切刹、小刹、中刹、大刹、廣刹、深刹、翻覆刹、俯刹、仰刹、平正刹、此等の刹を以て、衆生に示現する自在なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の刹自在と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の法自在有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切法は即ち是れ一法なり、一法は即ち是れ一切法にして、而も衆生の法相に違はざる自在。般若波羅蜜は一切法を出生して、一切衆生を覺悟し、了知せざる無き自在。一切法に於て悉く法想を離れ、普く衆生をして勝法に入らしむる自在。一切諸法は一方便に入りて無量の方便を分

【願自在】並に願體無障礙の願力に由り、作意を待たずして自然に成就する故に名く。【識身を遠離し等】凡夫の識身を離れ二乘智身に著せず又取相識身を離れ亦無相智身に著せざるは願力に由るなり。

別し解說する自在。一切諸法は言語の道斷え、而も能く無量の法門を演說する自在。一切法に於て巧方便もて普門の法輪を轉ずる無盡の自在。一切諸法は一法門に入り、不可說の劫に於て分別し解說するも窮盡すべからざる自在。一切法は悉く佛法に入りて、衆生を殊勝にする自在。一切法を無量無邊に示現する自在。一切法は無礙實際にして、無量無邊なること猶し幻網の如く、無量劫に於て衆生の爲に說くも、窮盡すべからざる自在なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の法自在と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の身自在有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生をして己身に入らしむる自在。己身を一切衆生の身に示現する自在。一切の佛身を一佛身に示現する自在。一佛身を一切の佛身に示現する自在。一切刹を己が身內に置く自在。一法身、三世に充滿して衆生に示現する自在。一身、三昧に入れば、無量の身、三昧を起つ自在。一身最正覺を成ずれば、衆生に等しき身を示現する自在。一切衆生の身は一衆生身と作りて、一切衆生の身を示現する自在。一切衆生の身は法身を示現し、法身、一切衆生の身を示現する自在なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の身自在と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に、十種の願自在有り。何等をか十と爲す。一切菩薩の願をば、即ち是れ己が願とする願自在。一切の佛の願力の菩提を以て、衆生に示現する願自在。其所應に隨ひて、悉く阿耨多羅三藐三菩提を成就せしむる願自在。數ふべからざる阿僧祇劫に於て大願斷えざる願自在。識身を遠離して智身に著せず、而も一切身を示現する願自在。己

【境界自在】分齊境界に於て廻轉無礙十種勝劣相違の境中に於て劣皆勝を得劣を現ずる故に自在と稱す。

が事を捨てずして而も能く一切の他の事を成滿する願自在。一切衆生を教化し成熟して退轉せざらしむる願自在。一切の阿僧祇劫に於て、菩薩行を修し、未だ曾て斷絶せざる願自在。一毛道に於て等正覺を成じ、願力もて一切佛刹に充滿し、一一の衆生の爲に、不可說不可說の世界に示現する願自在。一句の法を說きて法雲普く一切法界を覆ひ、實法の雷音を震ひ、解脫の電光を耀明し、甘露の法雨を注ぎて、一切衆生の心願を充滿せしむる願自在なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の願自在と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の境界自在有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩は法界の境界に在りて、而も衆生の境界に在るを示現し、佛の境界に在りて而も衆魔の境界に在るを示現し、涅槃の境界に在りて而も生死の境界を離れず、一切智の境界に在りて、而も菩薩の境界を離れず、寂滅の境界に在りて、而も散亂せる衆生の境界を捨てず。一切の虛妄を離れたる境界に在りて、而も虛妄の境界を離れず。莊嚴力の境界に在りて、而も一切智に非ざる境界を示現し、衆生無き實際の境界に在りて、而も一切衆生を化度する境界を捨てず。諸禪三昧、解脫の通明智、離欲の境界に在りて、而も一切世界の受生の境界を示現し、如來の行菩提もて莊嚴せる境界に在りて、而も聲聞緣覺の寂靜なる威儀の境界を示現す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の境界自在と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の智自在有り。何等をか十と爲す。謂ゆる無盡辯の智自在。一切の陀羅尼に惑はざる智自在。決定して一切衆生の諸根を知る智自在。一念の中に於て無

礙の心智を以て、悉く一切衆生の心心の數法を知る智自在。一切衆生の心心の使、煩惱習氣と、病に隨ひて對治するの法とを知る智自在。一念の中に於て深く如來の十力に入る智自在。無礙の智もて、三世の衆生を隨時に增長せしむるを知る智自在。一念の中に於て等正覺を成じ、一切衆生に示現する智自在。一衆生の想に於て、一切衆生の業行を了達する智自在。一衆生の音聲に於て一切衆生の音聲を示現する智自在なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の智自在と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の通自在有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切世界に示現する身は、一身の境界なる通自在。一如來の大衆の中に於て坐し、正法を聽受して、悉く能く一切諸佛の大衆會の法を聞持する通自在。一衆生の一念の境界に於て、不可說の無上菩提を成就し、一切衆生知らざる者無き通自在。一妙音を出して皆能く一切世界に充遍し、一切の音聲を出生して、各各別異なるを、一切衆生開解せざる無き通自在。一念の中に於て、盡過去際劫の一切衆生の諸業の果報を示現して知らざる者無き通自在。一切世界をして皆悉く莊嚴せしむる通自在。三世の平等なるを觀察する通自在。一切諸佛の菩提及び衆生の願を出生して、大法の光明を放つ通自在。一切の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、帝釋、梵王及び一切の聲聞、緣覺、諸の菩薩等、悉く恭敬し尊重して、善能く諸の如來力と、一切の善根とを護持する通自在なり。佛子、略して菩薩の平等に一切の諸法を觀察する通自在を說けり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の通自在と爲

【力自在】是れ悲智の力なれば前の神力に同ぜざるなり。皆業用に屈せざれば力と爲すなり。

す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の神力自在有り。何等をか十と爲す。謂ゆる不可說の世界を以て、一微塵に入るる神力自在。一微塵の中に於て一切法界に等しき一切佛刹を顯現する神力自在。一毛孔に於て皆悉く一切の大海を容受し、能く持して一切世界に遊行し、衆生をして恐怖の心有らしめざる神力自在。一切世界を以て己が身中に內れ、悉く能く一切の衆事を顯現する神力自在。一毛を以て不可思議の金剛圍山を繫ぎ、悉く持して一切の世界に遊行し、衆生をして恐怖の心有らしめざる神力自在。不可說の劫に一劫を示現し、一劫に不可說の諸の成敗劫を示現して、衆生をして恐怖の心有らしめざる神力自在。一切世界に於て、水火風災の成敗を示現して、衆生をして恐怖の心有らしめざる神力自在。一切世界の水火風災に壞するの時、悉く能く一切衆生の資生の具を住持する神力自在。不可思議の世界を以て掌中に置き、遠く他方に擲ちて不可說の世界を過ぎ、衆生をして恐怖の心有らしめざる神力自在。一切衆生をして、一切佛刹は猶し虛空の如しと解らしむる神力自在なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の神力自在と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の力自在有り。何等をか十と爲す。謂ゆる衆生の力自在なり。衆生を捨てずして、敎化し調伏するが故に。佛刹力自在なり、不可說の莊嚴具を以て諸佛刹を莊嚴し顯現するが故に。法力自在なり、一切の身をして無身に入らしむるが故に。劫力自在なり、一切の菩薩行を斷ぜざるが故に。佛力自在なり、生死に長く寢れる衆生を覺

【十種の遊戯神通】以下七十門に行徳圓備を明す、中初二十門は行徳殊勝を後五十門は行徳圓滿を明す。

悟するが故に。行力自在なり、一切菩薩の行を攝取するが故に。如來力自在なり、一切衆生を度脱するが故に。無師智の力自在なり、自然に一切法を覺悟するが故に。一切智の力自在なり、一切智の人は智もて覺悟するが故に。大悲の力自在なり、一切衆生を捨てざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の力自在と爲す。

佛子、是を菩薩摩訶薩の衆生自在等の十種の自在と爲す。若し菩薩摩訶薩の此十種の自在を成就せん者は無上菩提を成じ、無上菩提を成ぜざらんと欲するも自在にして意に隨はん。菩提を成ずと雖も、而も亦菩薩の諸行を斷ぜず。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は諸の大願を出生するが故に、善巧の方便もて、無量の自在の法門を示現すればなり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の遊戯神通有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は、衆生身に於て佛刹の身を作し、而も衆生身を壞せず。是を第一の遊戯神通と爲す。菩薩摩訶薩は佛刹の身に於て衆生の身を作し、而も佛刹の身を離れず。是を第二の遊戯神通と爲す。菩薩摩訶薩は佛身に於て聲聞縁覺の身を示現し、而も如來の身を減ぜず。是を第三の遊戯神通と爲す。菩薩摩訶薩は聲聞縁覺の身に於て如來の身を示現し、而も聲聞縁覺の身を增長せず。是を第四の遊戯神通と爲す。菩薩摩訶薩は菩薩の身に於て無上菩提の身を示現し、而も菩薩の行を捨てず。是を第五の遊戯神通と爲す。菩薩摩訶薩は無上菩提の身に於て菩薩の身を示現し、而も菩提の身を減せず。是を第六の遊戯神通と爲す。菩薩摩訶薩は涅槃界に於て、生死相續して絶えざるを示現し、而も涅槃界に著せず。是を第七の遊戯神通と

【勝行】遊戲自在を以ての故に、所作をして皆悉く精微ならしむるをいふ。

爲す。菩薩摩訶薩は生死界に於て涅槃界を示現し、亦無餘涅槃を究竟せず。是を第八の遊戲神通と爲す。菩薩摩訶薩は正受三昧して、行住坐臥に諸の威儀を現じ、而も正受三昧を捨てず、是を第九の遊戲神通と爲す。菩薩摩訶薩は一佛所に於て法を聞きて受持し、悉く能く不可說の佛所に往詣して、正法を聽受し、而も本座を離れず、亦分身せず、三昧を起たずして念念に一一の三昧身門に於て、不可說不可說の三昧身門を出生し、一切諸劫は猶窮盡すべくとも、菩薩の出生する三昧身門は窮盡すべからず。是を第十の遊戲神通と爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の遊戲神通と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば則ち一切諸佛の無上の大智の遊戲神通を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の勝行有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切法界は無量の方便門を以て、普く衆生に現ずる勝行。無量の莊嚴を以て一切世界を莊嚴し、普く衆生に現ずる勝行。一切衆生界を出生して、皆悉く化の如きを知る勝行。如來の身に於て菩薩の身を出生し、菩薩の身に於て如來の身を出生する勝行。虛空界に於て世界を出生し、世界に於て虛空界を出生する勝行。生死界に於て涅槃界を出生し、涅槃界に於て生死界を出生する勝行。一衆生の音聲に於て、一切佛法の音聲を出生する勝行。無量の身門に於て一身を示現し、一身門に於て分別一切の諸身を示現する勝行。一身を以て一切世界に充遍する勝行。一念の中に於て、一切衆生をして無量無邊の法門を出生せしめ、等正覺を成ずる勝行なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の勝行と爲す。若し菩薩摩訶

【十種の力】以下五十門に行德圓滿を明す、力とは德勝れ、智用堪能の故に名くるなり。

【無畏】正しく智力功强の故に外に懼るるところ無きをいふ。

薩究行に安住せば、即ち一切諸佛の無上の大智の勝行を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の力有り。何等をか十と爲す。謂ゆる直心の力、一切の世界に於て染著無きが故に。深心の力、一切諸佛の法を壞せざるが故に。方便の力、菩薩の一切行を究竟するが故に。智慧の力、一切衆生の諸の心行を知るが故に。願の力、一切衆生の願を滿足せしむるが故に。行の力、一切未來際を盡す劫に斷絕せざるが故に。乘の力、普現の一切諸乘を出生して大乘を轉せざるが故に。遊戲神通の力、一毛道に於て一切の清淨世界を示現し、一切如來、世に出興したまふが故に。菩提の力、菩提を覺悟して一切衆生の念と等しきが故に。轉法輪の力、一句の法に於て、一切衆生の希望する諸根を說くが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の力と爲す。若し菩薩摩訶薩此力に安住せば、即ち一切諸佛の一切智の無上の十力を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の無畏有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は、悉く能く一切の問難を聞持して、是の如きの念を作さく、「十方の一切世界來りて我に問ふ有らんに、若し答ふる能はずば、是處有ること無し。乃至微畏の相をも見ず」と。微畏の相を見ざるが故に、菩薩は一切の無畏を究竟し、無畏に安住して、一切衆生の共所聞に隨ひて、悉く疑惑を斷ず。是を第一の無畏と爲す。菩薩摩訶薩は、一切の語言音聲、一切の文字、如來の授記無礙の辯才に彼岸を究竟し、是の如きの念を作さく、「十方世界の一切衆生、來りて我に問難せんに、若し答ふる能はずば、是處有ること無し。乃至微畏の相をも見ず」

【福伽羅】プドガラ（Pudgala）人又は衆生の意。

と。微畏の相を見ざるが故に、悉く能く一切の疑惑を除滅して無畏に安住す。是を第二の無畏と爲す。菩薩摩訶薩は一切の法は空にして我我所を離れ、造無く造者無く、知者無く、命者無く、長養者無く、福伽羅無く、陰、界、入を離れ、諸の邪見を離れ、心虚空の如しと知り、是の如きの念を作さく、「一切衆生、若し能く我に身口意の惡を起さしめば、是處有ること無し。何を以ての故に。菩薩は常に我我所を離るるが故に。若し怖畏を生ぜしめば是處有ること無し。乃至微畏の相をも見ず」と。微畏の相を見ざるが故に、菩薩の行を行じて沮壞すべからず。是を第三の無畏と爲す。菩薩摩訶薩は諸佛の爲に護られて如來の力を成じ、如來の行を行じ、如來の威儀を未だ曾て轉易せず。是の如きの念を作さく、「若し能く來りて我威儀を訶する有らば、是處有ること無し。乃至微畏の相をも見ず」と。微畏の相を見ざるが故に、大衆の中に於て微妙の法を說く。是を第四の無畏と爲す。菩薩摩訶薩は身口意淨くして衆惡を遠離し、是の如きの念を作さく、「若し能く來りて我身口意の惡を訶する有らば、是處有ること無し。乃至微畏の相をも見ず」と。微畏の相を見ざるが故に、悉く能く一切衆生を敎化す。是を第五の無畏と爲す。菩薩摩訶薩は、金剛力士常に隨ひて侍衞し、一切の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、帝釋、梵王等、常に隨ひて侍衞し、尊敬し供養し、一切諸佛は常に之を護念したまふ。菩薩は是の如きの念を作さく、「一切の衆魔の眷屬及び諸の外道、有見の衆生、我所に來詣して、能く我無上菩提を障礙せば、是處有ること無し。乃至微畏の相をも見ず」と。微畏の相を見ざるが

故に、無畏に安住し、歡喜して菩薩の行業を修行す。是を第六の無畏と爲す。菩薩摩訶薩は癡を離れて正念し、如來に隨ひて生れ、第一の意根を成就し、是の如きの念を作さく、「一切諸佛の說きたまふ所の正法の句身味身に諸持に隨順す。我若し法の如く受持する能はずば、是の處有ること無し。乃至微畏の相をも見ず」と。微畏の相を見ざるが故に、如來の正法を受持し守護す。是を第七の無畏と爲す。菩薩摩訶薩は巧方便の智慧を具足し成就して、菩薩の諸力の彼岸を究竟し、清淨の直心もて、衆生を教化し、大菩薩の願を發して、衆生の所に於て大悲を起すが故に、煩惱の濁世に於て而も現じて生を受け、現に五欲を受け、妻子及び諸の眷屬を畜養す、衆生を化せんが爲の故に、菩薩は復是の念を作さく、「我此に在りと雖も、惑亂を生じて菩提の修行、三昧の法門、辯才を障へざらん。若し能く障礙せば、是の處有ること無し」、何を以ての故に。菩薩は一切法に於て自在を得て彼岸を究竟し、菩薩の行を修して菩提に安住し、一切の世間に生を受けて、惑亂せんとするも亂す能はざる所なり。若し能く惑亂せば、是の處有ること無し。乃至微畏の相をも見ず」と。微畏の相を見ざるが故に、一切世界に於て受生を示現す。是を第八の無畏と爲す。菩薩摩訶薩は愚癡を捨離して一切智を知り、菩薩の道に住して大乘に乘じ、一切智の心力に住し、聲聞緣覺を示現して威儀を改めず、菩薩は是の如きの念を作さく、「我終に聲聞辟支佛の道を證せじ。我若し證を受けば、是の處有ること無し。乃至微畏の相をも見ず」と。微畏の相を見ざるが故に、無畏に安住して、悉く能く一切の諸乘を示現して、究竟平等の大乘を

具足す。是を第九の無畏と爲す。菩薩摩訶薩は一切諸の白淨法を成就し、善根を積集し、一切の諸願通明を成滿して、菩提に堅住し、菩薩の諸行を具足し成滿し、一切の佛所に於て、如來の一切智の記を頂受して衆生を敎化し、菩薩の行を捨てず。是の如きの念を作さく、「其れ衆生の應に化を受くべき者有りて、若し時に應じて如來の境界を示現する能はずば、是處有ること無し。乃至微畏の相をも見ず」と、微畏の相を見ざるが故に、無畏に安住して、化を受くる者に隨ひ、普く爲に如來の境界を應現し、而も亦菩薩の願行を斷たず。是を第十の無畏と爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の無畏と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の無畏を得て、而も亦菩薩の無畏を捨てざらん。』

【不共法】正しく智力堅猛にして凡小の圖ふ無きを以て名く、又他に由らずして悟り、自心は他と共なるところに非ざるを不共と名く。

大方廣佛華嚴經　卷第四十

東晋天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

離世間品第三十三之五

「佛子、菩薩摩訶薩に十種の不共法有り。何等をか十と爲す。謂はゆる菩薩摩訶薩は六波羅蜜を修習し、他に由りて悟らず、平等の心もて施して慳吝する所無く、持戒清淨にして惡戒を遠離し、忍辱を成就して、心動ずべからず、精進を勤修して、一切劫に於て未だ曾て退轉せず、深く禪定に入りて一切の亂を離れ、智慧を出生して邪見を遠離せり。是を菩薩摩訶薩、六波羅蜜を修習して、波羅蜜の道に隨順し、他に由りて悟らざる第一の不共法と爲す。菩薩摩訶薩は一切衆生を攝して之を饒益するに、常に法施を以てし、一切衆生に於て和顏もて愛語して惡言を遠離し、一切衆生に於て常に樂心を起し、眞實に利益して、一切衆生をして菩提を解悟し、惡心を遠離し、平等の實義を具足し成就せしむ。是を菩薩摩訶薩、衆生を攝取して攝道に隨順し、他に由りて悟らざる第二の不共法と爲す。菩薩摩訶薩は善く迴向を解りて、果報を求めず、隨順して諸佛菩提に迴向し、一切世間の三昧に著せず、佛智に迴向して衆生を饒益す。是を菩薩摩訶薩、善く迴向を解りて、專ら一切諸

佛の善根と無上の智慧とを求めて、衆生を饒益し、他に由りて悟らざる第三の不共法と爲す。菩薩摩訶薩は善巧の方便もて彼岸を究竟し、世間に隨順し、世間に親近して疲厭無く、正しく聖行に向ひて、一切の聲聞緣覺の出要の道を遠離し、一切衆生を教化し成熟して、己が樂に著せず。善く一切の諸禪解脫、三昧を知り、正受三昧より起ちて諸の三昧に於て自在を得。生死の中に於て心に疲厭無く、生死に遊ぶこと園觀の想の如くし、一切諸魔の宮殿に安住して、帝釋梵王の無量の自在を示現し、一切の生死に於て、慧の光明淨くして癡暗を照除し、一切衆生に於て家を捨てて出家し、異見に著せずして、一切世間の書疏、文頌、談論、語言、算術、印法、一切の娛樂を示現し、現じて女身と爲りては才術巧妙にして能く人心を轉じ、世間の法、離世間の法に於て、悉く能く問答して彼岸を究竟し、世間の事、離世間の事に於て、亦悉く究竟じて彼岸に到り、常に衆生を觀じて、一切の聲聞緣覺を示現し、威儀を轉ぜず、大乘を忘れず。念念の中に於て如來の無上菩提を成ずるを現じ、而も亦菩薩の所行を斷ぜず。是を菩薩摩訶薩の巧妙の方便を具足し修習して、彼岸に到り、他に由りて悟らざる第四の不共法と爲す。菩薩摩訶薩は善く俱變三昧、翻覆三昧を知り、智慧の通明に遊戲して、智慧の彼岸を究竟し、常に涅槃に在りて而も生死の門に現じ、無衆生の際を知りて而も一切衆生を教化し成熟し、常に究竟寂滅の彼岸に在りて、而も示現して熾然の煩惱に處し、常に金剛の一妙法身に在りて、而も衆生の無量の身門を現じ、常に能く諸禪三昧を正受して而も衆生の五欲の娛樂を現じ、常に寂靜

を樂ひ、三界を遠離して、而も一切衆生を教化し、善根を長養して常に正法を樂ひ、而も百千の天女に圍遶せられて共に娛樂するを現じ、百福の相好もて其身を莊嚴し、而も貧賤醜陋の相を現じ、常に諸惡を離れ善業を長養して、而も現じて一切の惡道に受生し、究竟じて神智の彼岸に到りて、而も亦菩薩の智身を捨てず。菩薩は是の如き等の無量の智慧を成就して、一切の聲聞緣覺の能く知る者無し。何に況んや一切の童蒙の衆生をや。是を菩薩摩訶薩第五の不共法と爲す。菩薩摩訶薩は身口意の業に於て智慧を首と爲し、一切の威儀、皆悉清淨にして大慈を成就し、永く惡心を離れ、乃至邪見を遠離して正見を具足す。是を菩薩摩訶薩の、身口意の業は智慧に隨ひて行ずる第六の不共法と爲す。菩薩摩訶薩は大悲を成就して、一切衆生を捨てず、一切衆生に代りて諸の地獄、畜生、餓鬼、閻羅王の苦を受け、衆生を利益して心に疲厭無く、一切諸の群生界を度脫す。一切の欲樂に於て、心染著する無く、常に衆生の爲に諸の苦陰を滅して、大悲を捨てず。是を菩薩摩訶薩の第七の不共法と爲す。菩薩摩訶薩は一切衆生の爲に愛敬せられ、帝釋、梵王、四天王等、皆恭敬し供養し、一切衆生は心に常に見んと樂ひて、厭足有る無し。何を以ての故に、菩薩の本より修せし行業は、心に染著無く、皆悉く清淨にして、威儀具足するが故に、一切衆生は見んと樂ひて厭く無し。是を菩薩摩訶薩の第八の不共法と爲す。菩薩摩訶薩は、一切智の心は堅固正直にして、大悲願を以て之を莊嚴し、難處、諸の惡人の處、聲聞緣覺の處に至ると雖も、終に一切智の心、清淨の妙寶を退失せず。譬へば水珠の名

【業】内德不共なるを以て所作を必然ならしむるに名く。

けて淨光と曰へるは、濁水に處すと雖も寶性異る無く、能く濁水をして皆悉く清淨ならしむるが如し。菩薩も亦復是の如く、衆の難、諸の惡人の處、聲聞緣覺の處に在りと雖も、終に一切種智、清淨の寶心を捨離せず。一切衆生をして邪見、煩惱の垢濁を滅除して、一切智、清淨寶の心に住せしむ。是を菩薩摩訶薩の第九の不共法と爲す。菩薩摩訶薩は自覺の智法も彼岸に到り、無師の記を受け、離垢の法繒を以て其頂に冠り、如來の所に於て恭敬し供養するの心を捨てず、亦諸の善知識を捨離せず。是を菩薩摩訶薩の第十の不共法と爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の不共法と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大不共の法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の業有り。何等をか十と爲す。謂ゆる世界の業、悉く能く一切の世界を嚴淨するが故に。如來の業、一切の佛に奉給し供養したてまつるが故に。菩薩善友の業、善根同じきが故に。衆生の業、一切衆生を教化し成熟するが故に。未來世の業、一切の盡未來際を攝取するが故に。神力の業、本處を捨てずして而も能く一切の世界に遊行するが故に。淨光の業、無量無邊の色光を放ち、一一の光端に悉く七寶清淨の蓮華有り、一一の華臺に各菩薩の結跏趺坐する有りて、悉く顯現するが故に。三寶不斷の業、一切諸佛の滅度の後、正法を受持し守護するが故に。變化の業、十方に遊びて法を說き衆生を化するが故に。持の業、發心する所に隨ひて衆生に示現し、一切諸の大願を滿ぜしむるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の業と爲す。若し菩薩摩訶薩、此業に安住

【身】業因既に備はれば、身果現前するが故今明す、是れ廻向位滿じて得るところの十身なり。

【佛子等】以下五百句は前の十地位の行五十問に答ふ中に於て四に分つ初百二十門は十地中の三業殊勝の行を明す、これ初地に寄在するなり、この中初二十は身業行、次四十は口業行、後六十は意業行を顯はす。

せば、即ち一切諸佛の無上の大業を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の身有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩の不來身、一切趣に於て受生せざるが故に。菩薩の不去身、一切趣に求むるも得べからざるが故に。菩薩の不實身、一切世間の得る所の如くなるが故に。菩薩の不虛身、諸の世間は眞實なりと解るが如くなるが故に。菩薩の不盡身、未來際に斷ずべからざるが故に。菩薩の堅固身、一切衆魔も壞する能はざるが故に。菩薩の不動身、一切衆魔及び諸の外道も動ずる能はざるが故に。菩薩の相身、清淨の百福の相を示現するが故に。菩薩の無相身、法相究竟じて衆相無きが故に。菩薩の普至身、悉く三世の如來と等しきが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の身と爲す。若し菩薩摩訶薩、此身に安住せば、則ち一切諸佛の無上の無盡の身を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の身業有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一身を以て一切の世界に充遍する菩薩の身業。一切衆生の前に於て悉く爲に身を現ずる菩薩の身業。趣趣の中に於て悉く受生を現ずる菩薩の身業。一切世界に遊行する菩薩の身業。一切の佛所及び諸の大衆に往詣する菩薩の身業。一手掌を以て悉く能く普く一切世界を覆ふ菩薩の身業。一切の金剛圍山をば、能く手を以て摩でて、悉く微塵の如くする菩薩の身業。己が身中に於て一切衆生と一切の佛刹の成壞とを示す菩薩の身業。能く一身を以て、遍く一切衆生を覆ふ菩薩の身業。己が身中に於て、普く一切の嚴淨せる佛刹を現じ、一切衆生究竟じて無

【身】前問に準じて淨身業と名くべし。

【十種の口】以下四十は口業を明す、今は口業の體を明す、語業といふべし。

上菩提を成就する菩薩の身業なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の身業と爲す。若し菩薩摩訶薩此業に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大法を得て、悉く能く一切衆生を開悟せしめん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の身有り。何等をか十と爲す。謂ゆる波羅蜜の身、正しく菩提に向ふが故に。四攝の身、衆生を捨てざるが故に。大悲の身、一切衆生に代りて無量の苦を受け、疲厭無きが故に。大慈の身、一切衆生を救護するが故に。功德の身、一切衆生を饒益するが故に。智慧の身、一切諸佛の金剛の身なるが故に。淨德の身、諸趣の生死を遠離するが故に。方便の身、普く能く一切衆生に示現するが故に。神力の身、一切の自在力を示現するが故に。菩提の身、一切の時に隨ひて菩提を成ずるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の身と爲す。若し菩薩摩訶薩此身に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大智慧の身を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の口有り。何等をか十と爲す。謂ゆる柔軟の口、一切衆生を安樂にするが故に。甘露の口、一切衆生を淸涼にするが故に。不虛の口、眞實を說くが故に。如實轉の口、乃至夢中にも虛言無きが故に。尊重の口、一切の釋、梵、四天王等、恭敬し尊重するが故に。甚深の口、眞實の法を顯現するが故に。堅固の口、無量の法を說きて盡すべからざるが故に。正直の口、一切の音聲に辯を具足するが故に。莊嚴の口、時に隨ひ、業報に隨ひて普く示現するが故に。一切智の口、其所應に隨ひて衆生を度するが故に。

【清淨業】語業の淨因を顯はしてその語を莊嚴するなり。

【守護を得】發言の誠諦なるに由つて闇冥慈悲の故に守護を加ふるなり。

【大事を成ず】內の誠實に由つて外緣の加護するが故に、語力をして廣大ならしむるを致し、その所作を成ずる故なり。

佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の口と爲す。若し菩薩摩訶薩此口に安住せば、則ち一切諸佛の無上清淨の妙口を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の清淨業有りて菩薩の口業を莊嚴す。何等をか十と爲す。謂ゆる如來の清淨の音聲を樂聞して、菩薩の口業を淨くし、菩薩の清淨の音聲を樂聞して、菩薩の口業を淨くし、一切衆生の樂聞せざる語を說かずして菩薩の口業を淨くし過去世に於て口の四過を離れ、菩薩の口業を淨くし、如來を稱讃し讚歎して菩薩の口業を淨くし、如來の塔廟に於て高聲に佛の如實の功德を讃じて、菩薩の口業を淨くし、一向に普く衆生に正法を施して、菩薩の口業を淨くし、音樂歌頌もて如來を讚歎して、菩薩の口業を淨くし、諸佛の所に於て身命を惜まず、正法を聽受して、菩薩の口業を淨くし、一向に菩薩の法師を捨てずして、正法を聽受し、奉給し供養して、菩薩の口業を淨くす。佛子、之を菩薩摩訶薩の十種の淨業にして、菩薩の口業を淨くし、菩薩の清淨の口業を出生すと爲す。

佛子、菩薩摩訶薩は是の如き清淨の口業を出生すれば、卽ち十種の守護を得ん。何等をか十と爲す。謂ゆる諸の天王、及び諸天の守護、龍王、夜叉王、乾闥婆王、阿修羅王、迦樓羅王、緊那羅王、摩睺羅伽王、梵王及び諸梵天王、一切諸佛法王の共に守護する所なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の清淨の口業を出生して十種の守護を得と爲す。

若し菩薩摩訶薩、是の如き清淨の口業を出生して、十種の守護を得ば、則ち能く十種の大事を成辦せん。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生界をして皆悉く歡喜せしめ、

【佛子…十種の心】以下六十門は意業を明す中、初十門は意業の體を明し後五十門は意業の用を明す。心とは意樂の心なり。

【發心】心體既に理を備ふれば、勝用を發起すべきが故に説く。

一切刹界聞知せざる無く、悉く能く一切の諸根を發起し、悉く能く一切の性界を清淨にし、一切諸の煩惱界を拔出し、一切諸の習氣界を遠離し、一切諸の直心界を明淨にし、一切諸の深心界を長養し、一切諸の法性界を充滿し、一切の大涅槃界を照明にす。是を十と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の心有り。何等をか十と爲す。謂ゆる大地等心、一切衆生の諸の善根を持するが故に。大海等心、無量無邊の諸佛の智慧大法の海を受持するが故に。須彌山王等心、一切衆生をして無上の善根に安住せしむるが故に。摩尼寶心、煩惱を遠離して直心を淨むるが故に。金剛心、決定して一切法を了知するが故に。堅固の金剛圍山心、一切の諸魔外道も壞する能はざるが故に。蓮華等心、一切世法は染むる能はざるが故に。優曇鉢華等心、一切劫に於て値遇すること難きが故に。淨日等心、一切衆生の愚癡暗障の闇を除滅するが故に。虛空等心、一切衆生能く量る無きが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の心と爲す。若し菩薩摩訶薩、此心に安住せば、則ち一切諸佛の無上清淨の大心を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の發心有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生を度脫する心を發し、一切衆生の煩惱を拔出する心を發し、一切の習氣を斷除する心を發し、一切の疑惑を斷除し、具足清淨にして疑惑無き心を發し、一切衆生の苦惱を除滅する心を發し、一切の惡道の諸難を除滅する心を發し、一切諸佛の教に隨順する心を發し、一切菩薩の所

【滿心】前に既に發心し所作を修成し、法界に遍滿する故に云ふなり。

【根】前の心滿ずるに由りて法器たるに堪へ、能く諸の行德を出生するが故に根と名く。

學の心を發し、一切諸佛の菩提を覺悟し、一切衆生に示現し、凡愚の入る所に非ざる心を示現し、大法鼓を撃ちて、音聲一切世界に聞え、普く一切衆生の諸根を照す心を發す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の發心と爲す。若し菩薩摩訶薩、此心に安住せば、則ち一切諸佛の無上の發心を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の滿心有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の虛空界に滿つ、衆生無邊なるが故に。一切法界に滿つ、深く無量無邊に入るが故に。一切の三世に滿つ、一念の中に於て悉く解脫するが故に。一切の佛に滿つ、降神し受胎し、出生し捨家して、道を得、正法輪を轉じ、乃し大般涅槃に至るまで悉く明了なるが故に。一切衆生界に滿つ、決定して希望、習氣、及び諸根を了知するが故に。智慧の光に滿つ、隨順して一切法界を了知するが故に。無量無邊に滿つ、一切法は幻網の如しと解るが故に。無生に滿つ、一切の諸法は自性無きが故に。無礙に滿つ、自心他心障礙無きが故に。自在に滿つ、念念の中に於て現じて菩提を成ずるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の心滿と爲す。若し菩薩摩訶薩此心に安住せば、則ち能く一切佛法の無上の無量の莊嚴を成滿せん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の根有り。何等をか十と爲す。謂ゆる歡喜の根、一切の佛に於て信不壞なるが故に。樂菩薩の根、一切の佛の菩提を覺悟するが故に。不退菩薩の根、一切の事を究竟するが故に。住菩薩の根、一切菩薩の行に安住するが故に。甚深の根、般若波羅蜜の巧方便を覺るが故に。不休息の根、一切衆生の事を究竟するが故に。金剛等の根、

【直心】出生の後體立を以て正しく所作に向ふ故直といふ。

【深心】前の正向に由つて信樂懇至せしむるを深心といふ。

決定して一切法を了知するが故に。金剛光明焔の根、普く一切の佛の境界を照すが故に。不雜の根、一切如來は同一の身なるが故に。無礙際の根、深く如來の十種の力に入るが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の根と爲す。若し菩薩摩訶薩、此根に安住せば、則ち一切諸佛の無上の淨根を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の直心有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の世間法に染まざる直心。聲聞緣覺に染まざる直心。菩提に隨順する直心。一切智の道に違はざる直心。一切の衆魔、及び諸の外道も沮壞する能はざる直心。如來の圓滿なる清淨の智慧に染まざる直心。聞く所の法に隨ひて、悉く能く攝取し受持する直心。一切の受生の處に於て選擇する所無き直心。深く細微の智慧に入る直心。善巧もて一切の佛法を修習する直心なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の直心と爲す。若し菩薩摩訶薩、此心に安住せば、則ち一切諸佛無上の清淨の直心を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の深心有り。何等をか十と爲す。謂ゆる不退の深心、一切諸の善法を長養するが故に。離疑の深心、一切の佛の微密語を解るが故に。正持の深心、菩薩の大願行を捨てざるが故に。無上正直の深心、深く一切諸佛の法に入るが故に。了達の深心、一切の佛法に於て自在を得るが故に。殊勝の深心、深く種種の方便法に入るが故に。爲首の深心、一切の境界に於て悉く究竟するが故に。自在の深心、一切の三昧を莊嚴して、自在に斷絕せざるが故に。具足の深心、本の大願を攝取するが故に。不捨の深心、

【佛子…十種の方便】以下九十門は二地以上の行門を明す中に初三十句は智慧方便行、次三十句は慈悲方便行、後三十は慧智究竟行を明す、今の方便とは巧に正行を修するに名くなり。

【樂修】正しく善巧無礙なるを以て而も能く諸行を欣求する故に云ふなり。

一切の衆生の類を教化するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の深心と爲す。若し菩薩摩訶薩、此心に安住せば、則ち一切諸佛の無上清淨の深心を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の方便有り。何等をか十と爲す。謂ゆる布施の方便、悉く一切を捨てて報を求めざるが故に。一切の學を學び、一切の戒を持し、具に頭陀を行じ、威儀清淨なる方便、他を輕んぜざるが故に。一切の諂、顚倒、瞋恚、我慢を離れ、一切衆生の諸惑を忍ぶ方便、一切の彼我の想を遠離するが故に。精進不退の方便、身口意の業を究竟して、一切の境界を忘失せざるが故に。一切の諸禪三昧、解脫諸道の方便、一切の五欲、諸の煩惱を遠離するが故に。正向智慧の方便、一切の功德を長養して心に厭足無きが故に。大慈の方便、一切衆生に衆生無きを說くが故に。一切衆生に代りて諸の苦惱を受け大悲を捨てざる方便、一切法は自性無きことを解るが故に。十力覺悟の方便、決定無礙の智もて一切衆生に示現するが故に。不退轉の法輪を轉ずる方便、轉じて衆生心に至るが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の方便と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大智の方便を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に、十種の樂修有り。何等をか十と爲す。謂ゆる最勝を樂修す、方便諸の善根を尊重するが故に。莊嚴を樂修す、種種諸の莊嚴を出生するが故に。廣事を樂修す、心彌廣きが故に。寂滅を樂修す、深く甚深の方便法に入るが故に。無邊を樂修す。無量の心を發すが故に。善持を樂修す。一切諸佛に護念せらるるが故に。不壞を樂

【解脫深入世界】樂修已まざるを以て能く解脫の勝力を以て、一切世界を相入し等しからしむるを謂ふ。

【佛子…入衆生性】以下三十句は慈悲方便行を明す、今は無緣の大悲を明し、巧に物性を會するが故に入衆生性と名く。又衆生界をして所入あらしむるが故にも名く。

修す、一切の魔業も壞する能はざるが故に。決定を樂修す、一切諸の業報を解了するが故に。現在を樂修す、意に隨ひて能く自在の神力大變化を現ずるが故に。聽受を樂修す、一切の佛に於て授記を得るが故に。自在を樂修す、意に隨ひ時に隨ひて菩提を成ずるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の樂修と爲す。若し菩薩摩訶薩、此修に安住せば、則ち一切諸佛の無上の樂修を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の解脫深入世界有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切世界は一世界に入り、一世界は一切世界に入り、一蓮華座の一如來の身は一切世界に充滿し。一切世界は、皆悉く虛空なるを示現し、諸佛の莊嚴もて一切世界を莊嚴し、一菩薩の身は一切世界に充滿し、一毛孔の中に於て一切世界を安置し、一切世界、一衆生の身に入り、一佛の道場の一菩提樹は一切世界に充滿し、一の妙音聲は一切世界に充滿し、其所應に隨ひて聞解せざる無くして皆歡喜を爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の解脫深入世界と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の出生する佛刹の無上解脫を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の入衆生性有り、何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生界は無身の性に入り、一切衆生界は悉く一衆生の身に入り、一切衆生界は悉く菩薩の身に入り、一切衆生界は悉く如來の性藏に入り、一切衆生界は悉く一衆生界に入り、一切衆生界は悉く諸佛の法界に入り、一切衆生界は悉く帝釋梵王に入り、衆生の形類に隨ひて普く示現し、一切衆生界は示現して一切の聲聞緣覺の不轉の威儀に入り、一切衆生界は

菩薩の功德莊嚴に入りて、一切衆生を莊嚴し、一切衆生界は如來の相好莊嚴の色身に入り、寂靜の威儀もて衆生に示現す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の入衆生性と爲す。若し菩薩摩訶薩、此性に安住せば、則ち一切諸佛の無上の自在の性を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の習氣有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩提心の習氣。善根の習氣。衆生を教化する習氣。見佛の習氣。清淨の土に於て受生する習氣。菩薩行の習氣。大願の習氣。波羅蜜の習氣。平等法を出生する習氣。種種に境界を分別する習氣なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の習氣と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち能く一切衆生の煩惱の習氣を除滅して、佛の無上の大智の習氣を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に、十種の熾然有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生界を熾然す、教化究竟して成熟せしむるが故に。世界を熾然す、悉く嚴淨するが故に。如來を熾然す、菩薩の一切の行を究竟するが故に。善根を熾然す、如來の功德、諸の相好を積集するが故に。大悲を熾然す、一切衆生の苦を除滅するが故に。大慈を熾然す、一切衆生をして如來の無上樂に安住せしむるが故に。波羅蜜を熾然す、菩薩の諸の莊嚴を積集するが故に。巧方便を熾然す、其所應に隨ひて悉く示現するが故に。菩提を熾然す、無礙の智を得るが故に。略して說くに菩薩は皆悉く一切諸法を熾然す、一切法に明達し了知するが故に。佛子、之を菩薩摩訶薩の十種の熾然と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば即ち能く究竟じて菩薩の諸行を斷ぜず、一切煩惱の熾然を除滅せば、則ち一切諸佛の無上の

【習氣】善く物性に入るに由りて串習の氣分を成ぜしめ以て行因となし即ち習氣を熏成するなり。

【熾然】前の習因既に立てば能く現行を發生し、大用を繁興するに名く

【佛子…趣】以下三十句は悲智究竟の行を明す、今の趣とは到行到果に名く。

【十種の事…佛法を具足す】この十事、現前するに由つて、諸の佛法をして成滿せざるなからしむるをいふなり。

熾然の正法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の趣有り。何等をか十と爲す。謂ゆる波羅蜜に趣き、學に趣き、智に趣き、實義に趣き、正法に趣き、出生善根に趣き、見佛に趣き、菩薩の諸行門に趣き、無上菩提に趣き、轉法輪に趣く。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の趣と爲す。若し菩薩摩訶薩、此趣に安住せば、則ち一切諸佛の無上の趣法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の事有りて、則ち能く一切の佛法を具足す。何等をか十と爲す。謂ゆる深く善知識を信じて佛法を具足す。深く佛教を信じて佛法を具足す。正法を謗らずして佛法を具足す。放逸の行を離れ憍慢を摧滅し、巧妙の方便も善根を廻向して佛法を具足す。深く諸佛の境界の無量を信じて佛法を具足す。深く一切世界に入りて佛法を具足す。法界に安住して佛法を具足す。諸の魔海を離れて佛法を具足す。一切の佛を正念して佛法を具足す。深く如來を信じ十力を成就して、佛法を具足す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の事にして、則ち能く一切の佛法を具足すと爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大智を具足するを得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の佛法を退失する有り、應當に遠離すべし。何等をか十と爲す。謂ゆる善知識に於て憍慢の心を生ぜば、佛法の道を失ふ。生死の苦を畏るれば、佛法の道を失ふ。菩薩の行を厭はば、佛法の道を失ふ。受生を厭ひ惡まば、佛法の道を失ふ。三昧に樂著せば、佛法の道を失ふ。諸の善根に於て疑惑の心を起さば、佛法の道を失ふ。正

【佛子…離生】以下九十句は四地以上七地に至る間の出世間行を明す、中初三十は因行の體廣きを、次二十は行用の殊勝なるを、後四十は行德成就を顯はす、今の離生とは有爲行を捨し、無生を得るに名け、又行熟純して生濫等の過を離るるを顯はす故に名くるなり

【決定法】生の悲を離るを以て能く法決定を得るなり

法を誹謗せば、佛法の道を失ふ。菩薩の行を斷たば、佛法の道を失ふ。聲聞及び緣覺乘を樂ひ求めば、佛法の道を失ふ。瞋恚の心を起さば、佛法の道を失ふ。應當に遠離すべし。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の退失佛法と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法を遠離せば、則ち一切の菩薩の正趣離生と、聖行の正道とを得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の離生有り。何等をか十と爲す。謂ゆる般若波羅蜜を出生するは、菩薩の離生なり。一切衆生を觀察して一切の邪見を遠離し、一切の縛を斷じ、一切衆生を度脫するは、菩薩の離生なり。一切の相を念ぜず、亦著相の衆生を捨離せざるは、菩薩の離生なり。三界に著せず、亦復一切の世界に著せざるは菩薩の離生なり。永く煩惱を離れて、衆生に親近するは菩薩の離生なり。諸法の中に於て離欲の法を得、常に大悲を以て衆生を哀念するは、菩薩の離生なり。現じて眷屬に處して寂靜を樂はしむるは、菩薩の離生なり。世界の生を離れ、此に沒し彼に生るるを現じて菩薩の行を行ずるは、菩薩の離生なり。一切世間の事を行じて而も世法に染まざるは、菩薩の離生なり。決定して無上菩提を了知し、而も亦菩薩の行願を捨てざるは、菩薩の離生なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の離生と爲す。永く世間を離れたる大聖の正法は、一切衆生及び聲聞緣覺と共ならず。

若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切菩薩の十種の決定法を得ん。何等をか十と爲す。謂ゆる一切如來の種姓の中に於て生れ、深く一切如來の境界に入り、深く一切諸

【佛の道法を出生す】法に於て既に決せば、能く縁に從つて聖道を出生する故にいふなり

の菩薩の行を解り、正しく一切諸の波羅蜜に向ひ、一切諸佛の善根を出生し、一切如來の無上姓の中に安住し、一切諸佛の淨力に安住し、一切如來の菩提に隨順し、一切の佛と共に同一身となり、一切の佛と同じく住して異り有ること無し。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の決定法と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の佛の道法を出生する有り。何等をか十と爲す。謂ゆる善知識に隨順すれば、佛の道法を出生す、善根を同うするが故に。深く一切の佛法を信ずれば、佛の道法を出生す、如來の無盡の自在を樂ひ求むるが故に。一切の大願に於て正しき希望を得れば、佛の道法を出生す、廣心を修習するが故に。決定して己身の善根を了知すれば、佛の道法を出生す、行ずる所の諸業は虛妄無きが故に。一切劫に於て菩薩行を修すれば、佛の道法を出生す、盡未來際に疲厭無きが故に。阿僧祇の世界に於て諸處に生を受くれば、佛の道法を出生す、善巧の方便もて一切衆生を敎化するが故に。修習して菩薩の所行を斷ぜざれば、佛の道法を出生す、大悲を長養するが故に。無量の心を以てすれば、佛の道法を出生す、一念の中に於て一切の虛空界に充滿するが故に。深く甚深の諸の大願行に入れば、佛の道法を出生す、本生ぜし善根は壞せず失はざるが故に。一切如來の種姓を善く持して守護すれば、佛の道法を出生す、一切衆生をして菩提心を發し、志常に無上菩提を樂ひ求め、一切の善根を長養せしむるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の出生佛道法と爲す。

【若し菩薩…名號】以下二十句は行用の殊勝を明す。今の名號とは實德內に充つるを以て、嘉名外に彰くをいふ。

【道】名德實を稱し、遂に行解虛通を得る故に名く。

若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち善男子の十種の名號を得ん。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩の名號、菩提の智身なるが故に。摩訶薩の名號、大乘に住するが故に。第一薩埵の名號、最第一の無間道の法なるが故に。勝薩埵の名號、勝菩提を覺るが故に。無比薩埵の名號、智慧比無きが故に。上薩埵の名號、上精進の故に。無上薩埵の名號、無上の法を開示し顯現するが故に。力薩埵の名號、廣く十力を知るが故に。無等薩埵の名號、一切衆生に與等無きが故に。不思議薩埵の名號、其心念に隨ひて菩提を覺るが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩、善男子の十種の名號を得たりと爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の道有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一道は是れ菩薩の道なり。菩提心を捨てざるが故に。二道は是れ菩薩の道なり、智慧と方便とを出生するが故に。三道は是れ菩薩の道なり、空、無相、無願の三昧もて三界に染無きが故に。四行は是れ菩薩の道なり、過を悔いて罪を除き功德に隨喜し、無量の諸佛を恭敬し勸請して、善く廻向を知るが故に。五根を長養するは是れ菩薩の道なり。有信の根に住して沮壞すべからず、大精進を發して一切の事を究竟して退轉せず、正念に安住して亂想を除滅し、三昧の方便もて、決定して智慧の境界を了知し、善巧に分別するが故に。六通の自在なるは是れ菩薩の道なり。天眼もて悉く一切世界の有色の衆生、此に死し彼に生るるを知り、天耳もて、悉く一切諸佛の說きたまふ所の經法を聞きて、皆能く受持して、廣く一切衆生の爲に解說して、無礙の知を出生し、他心智もて、悉く一切衆生の心念を知り、宿

【九次第定】四禪と四無色定と滅盡定となり。

命智通もて、悉く過去の一切阿僧祇劫を知りて善根を長養し、身通自在にして其所應に隨ひて大神變を現じ、漏盡智通もて實際を知見す、菩薩の道を生じて斷絶せざるが故に。七念は是れ菩薩の道なり、佛を念じて、一毛道に於て一切の佛を見て衆生を教化し、法を念じて一如來衆を離れず、一切の佛所に於て對面して法を聞き、悉く能く受持して、衆生の諸根希望に隨應して之を度脱し、僧を念じて不退轉の菩薩の大衆を見、一切衆生をして常に菩薩の大衆を見しめ、施を念じて、一切の菩薩の布施を行じ、正念に菩薩の布施の功德を長養し、戒を念じて菩提心を離れずして、一切の善根を衆生に廻向し、天を念じて、兜率陀天の一生補處の菩薩を念じ、一切衆生を念じて、善巧の方便智慧もて教化し、悉く安隱ならしむ、無上菩提に隨順するが故に。八正道分は是れ菩薩の道なり。謂ゆる正見は邪見を遠離し、正思惟は一切智を正念して虛妄を遠離し、正語は聖教に隨順して口の四過を離れ、正業は一切衆生を饒益し教化して、未だ曾て時を失はず。正命は四聖の種に安住して、頭陀の功德を成じ、淨き威儀を具足して、一切の惡を遠離し、正精進は一切菩薩の苦行を勤修し、佛の十力を修して罣礙する所無く、正念は悉く能く一切の音聲を憶持して、世間の一切の亂想を除滅し、正定は善巧の方便もて、一三昧に於て菩薩の不可思議の法門、一切の三昧を出生するが故に。九次第定は是れ菩薩の道なり。謂ゆる欲惡不善の法を離れ、覺觀に因りて一切の口業を起して、障礙する所無く、法を說きて一切衆生を教化し、一切智を得て喜悅し、退過を遠離し、喜悅を休息して、世の苦樂を離れ、

【佛子…無量の道】以下四十句は行德成就を明す。無量の道とは菩薩の無量智の所遊の路に邊際無きをいふなり。

常に諸佛を見て無上菩提の快樂を逮得し、不動三昧は四無色の定を出生し、亦欲界、色界の受生を捨離せず。滅盡三昧を正受するも、而も亦菩薩の行を息めざるが故に。如來の十力は是れ菩薩の道なり。謂ゆる巧方便もて善く是處と非處とを知り、善く一切衆生の去來現在の業因と果報とを知り、善く一切衆生の種種の諸根を知りて、彼諸根に隨いて爲に法を說き、善く衆生の無量の諸性を知り、善く一切衆生の種種の欲樂を知りて、應に隨いて法を說き、菩薩の淨身は、皆悉く一切衆生、一切刹、一切世、一切劫に充滿し、普く如來の具足せる威儀を現じて、而も亦菩薩の所行を捨てず。善巧の方便もて一切の禪三昧、解脫、垢淨の起るを知り、時と非時とを知りて菩薩の無量の法門を出生し、善く一切衆生の此に死し彼に生ずるを知り、一念の中に於て善く三世一切の阿僧祇劫を知り、善く一切衆生の一切の煩惱、結使及び諸の習氣を除滅するを知り、而も亦菩薩の行を捨てざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の道と爲す。若し菩薩摩訶薩、此道に安住せば、則ち一切諸佛の無上の巧方便の道を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に無量の道、無量の道具、無量の修道、無量の莊嚴道有り。何を以ての故に。菩薩摩訶薩に十種の無量道有るが故に。何等をか十と爲す。謂ゆる虛空界は無量。法界は無量。衆生界は無盡無量。世界は無分齊無量。阿僧祇劫は無盡究竟無量。衆生の語法は無量。如來身は無量。佛の音聲は無量。如來力は無量。一切智は無量なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の無量道と爲す。何を以ての故に。虛空界の無量なるが如く菩薩の積

【道具】前の染淨等際限無きを以て菩薩の起道の緣も同じく無際の故に云ふなり。

【修道】緣に對しての造行に名く、見修等の修には非ず。

集道具も亦復是の如し。法界の無量無邊なるが如く、菩薩の積集道具も亦復是の如し。世界の無分齊無量なるが如く、菩薩の積集道具も亦復是の如し。一切劫は算數して盡すべからざるが如く、菩薩の積集道具も亦復是の如し。一切衆生は悉く共に算數するも盡す能はざる所なり。一切衆生の語言の無量なるが如く、菩薩の積集道具の智慧を出生する、諸の語言法も亦復是の如し。如來身の無量なるが如く、菩薩の積集道具の、一切衆生、一切刹、一切世、一切劫に充滿するも、亦復是の如し。佛の音聲の無量にして、一言音を出して皆悉く一切法界に充滿し、一切衆生聞知せざる無きが如く、菩薩の積集道具も亦復是の如し。如來力の無量なるが如く、菩薩の積集道具の如來力を長養するも亦復是の如し。一切智の無量なるが如く、菩薩の積集道具も亦復是の如し。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の道具と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無量無邊の智慧を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の修道有り。何等をか十と爲す。謂ゆる不著不出の修、身口意に忘失無きが故に。無增減の修、諸法の眞實を知るが故に。非有非無の修、非有非無の性に入るが故に。幻の如く、夢の如く、電の如く、響の如く、鏡中の像の如く、熱時の焔の如く、水中の月の如き修、一切法に於て所著無きが故に。空、無相、無願の修、三界を見て捨てず諸の善根を長養するが故に。不可言說の修、法の施設に著せざるが故に。不壞法界の修、決定して一切法を了知するが故に。如實の際不可壞の修、如如の虛空際は平等に

【莊嚴道】修道の行は互に相交飾するが故に名くるなり。

して一切に至るが故に。菩薩智の修、勇猛精進の力を捨てざるが故に。如來の十力、四無所畏、一切智の平等修、一切法に於て悉く疑惑を除くが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の修道と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の一切智巧方便の修を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の莊嚴道有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は欲界を離れずして、悉く能く色、無色界の禪定解脱を正受し、亦此に因りて彼に於て生を受けず。是を第一の莊嚴道と爲す、菩薩摩訶薩は聲聞道に入りて、亦此道に乘じて三界を出でず。是を第二の莊嚴道と爲す。菩薩摩訶薩は緣覺道に入るも、亦大悲を捨てず。是を第三の莊嚴道と爲す。菩薩摩訶薩は百千の天女の眷屬に圍遶せられ、端嚴殊特にして、顏容倫無く、技術悉く備り、音樂巧妙なりと雖も、菩薩此妙音を聞きて、未だ曾て暫くも諸禪の解脱三昧を捨てず。是を第四の莊嚴道と爲す。菩薩摩訶薩は一切衆生と與に衆の妓樂を設け、共に相娛樂するも、乃至一念も諸禪の解脱三昧を捨てず。是を第五の莊嚴道と爲す。菩薩摩訶薩は一切世間の諸法に著せず、世間を究竟じて彼岸に到るを得て、衆生を度脫す。是を第六の莊嚴道と爲す。菩薩摩訶薩は正智に安住して正道を修習し、邪道に趣きて衆生をして邪道を遠離せしめんと欲するも、此邪道に於て眞實清淨の相を取らず。是を第七の莊嚴道と爲す。菩薩摩訶薩は身口意の惡業を遠離し、常に淨戒を持ち、一向に正しく如來の淨戒を求め、一切の凡愚童蒙の衆生に持戒の威儀を示現す。犯戒の衆生を敎化

【和尚】ウパードヤー(Upadhyaya)親教師と譯す、受戒の時の師。
【阿闍梨】アーチャールヤ(Acarya)軌範師と譯す、軌範となつて弟子の行爲を矯正する徳僧のこと。

し成熟せんが爲の故に。菩薩は一切の清淨功德を具足し成滿して、正しく菩薩の趣に趣き、而も現じて地獄、畜生、餓鬼、閻羅王及び諸の難處に受生す。彼衆生をして惡趣を離れしめんが故に。而も實に菩薩は彼趣に攝せられず。是を第八の莊嚴道と爲す。菩薩摩訶薩は一切の佛法に於て、他に由りて悟らず、無礙の辯、明淨の智慧を得て、普く一切諸佛の正法を照し、一切諸佛の自在に安住し、一切の佛の清淨法身を共にし、一切堅固の大人の明淨の正法を具足し成就し、一切の平等の諸乘に安住し、一切の佛の境界の法門に向ひ、一切衆生の應に讚歎し、恭敬し、供養すべき所にして、一切衆生の爲に無上の師と作り、專ら正法を求めて未だ曾て捨離せず、法に疑有るを示現し、師受を示現して、和尚阿闍梨を恭敬し供養し、而も實には一切の天人無上の法師と爲る。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は、善く方便を知りて菩薩の道に住し、其所應に隨ひて、方便もて示現すればなり。是を第九の莊嚴道と爲す。菩薩摩訶薩は甚深の智慧を具足し成就し、菩薩の一切無上の法行を究竟し、一切の如來は甘露の法を以て其頂に灌ぎ、一切法の自在の彼岸を究竟し、離垢無礙の清淨の法繒を以て其首に冠り、一切世界に於て普く如來の無礙法身を現じ、不可壞の清淨法輪を轉じ、清淨の法身は、一切世界に於て處として至らざる無く、一切法の自在の彼岸を究竟し、一切菩薩の自在の法を具足し成就し、巧妙の方便もて一切刹に於て受生を示現し、三世の佛と共一の境界にして、而も亦菩薩の所行を斷せず、菩薩の法を捨てず、菩薩の業を轉ぜず、菩薩の道を捨てず、未だ曾て菩薩の威儀を廢捨せ

ず、菩薩の熾然を捨てず、善巧の方便を捨てず、菩薩の事を離れず、菩薩の行を修して心に疲厭無く、菩薩の受持法行を離れず。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は速かに阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんと欲するが故に、菩薩の行を捨てずして、衆生を觀察すればなり。是を第十の莊嚴道と爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の莊嚴道と爲す。若し菩薩摩訶薩、此道に安住せば、則ち一切諸佛の無上の道寶の莊嚴を得て而も菩薩の道を捨てず。」

大方廣佛華嚴經　卷第四十一

東晋天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

離世間品第三十三之六

【佛子…足】以下二百門は八地以上の報徳純熟の行を明す、中を五に分つ、中初二十句は手足外用の行を、次三十句は内徳盈滿の行を、次二十句は外相嚴備の行を、次七十句は六根の業用を明す、次六十句は四威儀、動止の行を明す、今のいふ足とは、行用の進抄を表すなり。

【手】行用の取授もてその身手を表す。

『佛子、菩薩摩訶薩に十種の足有り。何等をか十と爲す。謂ゆる淨戒の足、一切の大願を積集し成滿するが故に。精進の足、一切の菩提の枝を積集して不退轉に至るが故に。諸通の足、衆生の願に隨ひて歡喜せしむるが故に。身通の足、一坐を離れずして而も能く悉く一切佛刹に詣るが故に。深心の足、一切の勝妙の法を究竟するが故に。堅誓の足、求むる所の諸事は悉く究竟するが故に。攝善法の足、一切の尊重する教に違はざるが故に。聞法無厭の足、一切の佛の說きたまふ所の法を聞持して、疲倦無きが故に。如法資生具の足、一切衆に入りて諸根異る無きが故に。正向菩薩行の足、一切の惡を離るるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の足と爲す。若し菩薩摩訶薩、此足に安住せば、則ち一切諸佛の無上の勝足を得て、能く一たび足を擧げば、皆悉く遍く一切の世界に至らん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の手有り。何等をか十と爲す。謂ゆる信の手、一切の佛の說きたまふ所の正法に於て一向に信じ、心に究竟じて受持するが故に。財施に著せざる手、來

りて乞ふ者有らば歡喜せしむるが故に。先意善來問訊の手、右の掌相顯現するが故に。一切の佛を恭敬し供養する手、無量の功德を長養して疲厭無きが故に。善解多聞の手、一切衆生の諸の疑惑を除くが故に。三界を遠離する離生寂靜の手、欲の汚泥より衆生の類を拔くが故に。彼岸に安置する手、四流に漂沒せる衆生を救濟するが故に。苦を離れたる法手、盡く能く一切法を開說するが故に。一切の世間離世間の諸論智の手、一切身心の病を除滅するが故に。智慧寶の手、一切の煩惱の癡暗を除滅して、一切の稱說すべからざる法の光明を示現するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の手と爲す。若し菩薩摩訶薩、此手に安住せば、則ち一切諸佛の無上の手を得て、能く一掌を以て普く十方一切の世界を覆はん。

【佛子…腹】次の三十句は内德盈滿を明す。腹とは世人の腹に不淨を含容するが如く、今菩薩の行腹を明し彼に反して淨を說くなり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の腹有り。何等をか十と爲す。謂ゆる諂曲を離れたる腹、直心清淨なるが故に。幻僞を離れたる腹、身口意の業皆眞正なるが故に。事を爲さざる腹、藏惡を離れたるが故に。窮盡する無き腹、一切法に於て所著無きが故に。煩惱を滅する腹、智明淨なるが故に。清淨心の腹、一切の惡を離れたるが故に。一切の食想を觀察する腹、眞實の法を正念するが故に。一切の行を觀察する腹、善く緣起を覺るが故に。善く一切の道を覺る腹、正希望を具足し成就するが故に。一切の煩惱邪見を離れたる腹、一切衆生をして如來の腹を得しむるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の腹と爲す。若し菩薩摩訶薩、此腹に安住せば、則ち一切諸佛の無上の腹を得、悉く能く一切衆生を容受せん。

【藏】前に總じて其の腹を擧げ、今は前腹内の五藏相を明し、攝藏の義あるに似たる故に明すなり。

【心】前に通じて腹内の諸藏を明し、今別して心藏を明す、最勝の故、五藏主の故、中實の故、集起の故に明すなり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の藏有り。何等をか十と爲す。謂ゆる如來の種姓を斷ぜざるは、是れ菩薩の藏なり、廣く佛法を說きて無量の諸の善法を長養するが故に。如來の正法を受持し守護するは是れ菩薩の藏なり、衆生に大智明を開示するが故に。僧寶を長養するは是れ菩薩の藏なり、不退の正法輪を攝取するが故に。正定の衆生を覺悟するは是れ菩薩の藏なり、衆生を度脫して時を失はざるが故に。不定の衆生を敎化し成熟するは是れ菩薩の藏なり、善根相續して因斷せざるが故に。大悲心を發して、邪定の衆生を救護するは是れ菩薩の藏なり、彼未來の善根の因緣を起すが故に。如來の十力を滿足して、沮壞すべからざるは是れ菩薩の藏なり、衆魔を降伏して不退の善根を具足し成就するが故に。四無畏に住して大師子吼するは是れ菩薩の藏なり、一切衆生をして悉く歡喜せしむるが故に。佛の十八不共法を得るは、是れ菩薩の藏なり、一切の智慧至らざる無きが故に。平等に一切衆生、一切刹、一切法、一切佛を覺悟するは、是れ菩薩の藏なり、一念の中に於て深く平等に入るが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の藏と爲す。若し菩薩摩訶薩、此藏に安住せば、則ち一切諸佛の無上の善根、大智慧藏を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に、十種の心有り。何等をか十と爲す。謂ゆる勇猛の心、發す所の事業悉く究竟するが故に。無懈怠の心、相好諸の善根を積集するが故に。勇健力の心、一切諸の惡魔を摧伏するが故に。正思惟の心、一切の煩惱垢を除滅するが故に。不退轉の心、道場に往詣して菩提を究竟するが故に。性清淨の心、覺心所至無く所著無きが故

【佛子…莊嚴】次二十句は外相莊嚴と行を明す、莊嚴とは世人の服飾もて身を莊嚴するが如く徳もて莊嚴すとなり。

【器仗】前既に束帶もて身を嚴にし今は固く器杖を執し持して行く能く障を除くを顯すなり。

に。衆生を知る心、衆生の性に隨ひ、彼を覺悟して解脫を得しむるが故に。大梵天に入りて佛法に住するの心、種種の衆生の性を悉く救護するが故に。空、無相、無願、無行の心、相見を遠離して三界に著せざるが故に。金剛莊嚴の心、衆生數に等しき魔も、乃至一毛だも動かす能はざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の心と爲す。若し菩薩摩訶薩、此心に安住せば、則ち一切諸佛の無上の金剛藏の心を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の莊嚴有り。何等をか十と爲す。謂ゆる大慈の莊嚴、一切衆生を救護するが故に。大悲の莊嚴、一切苦を堪忍するが故に。大願の莊嚴、發願すべき所は悉く究竟するが故に。廻向の莊嚴、一切諸佛の功德妙莊嚴を建立するが故に。功德の莊嚴、一切衆生を饒益するが故に。波羅蜜の莊嚴、一切衆生を度脫するが故に。智慧の莊嚴、一切衆生の煩惱愚癡の暗を除滅するが故に。方便の莊嚴、普門の諸の善根を出生するが故に。一切智の心堅固にして亂れざる莊嚴、異乘を樂はざるが故に。決定の莊嚴、正法の中に於て疑惑を滅するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の莊嚴と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の莊嚴を得て一切の魔を降さん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の器仗有り。何等をか十と爲す。謂ゆる慳悋を遠離して惠施する心の仗、一切の慳貪の垢を除滅するが故に。持戒の仗、一切の諸の惡戒を拔出するが故に。平等に一切法を觀察する仗、一切虛妄の法を遠離するが故に。智慧の仗、衆生の諸の煩惱を除滅するが故に。正命の仗、一切諸の邪命を遠離するが故に。方便の仗、一切

【佛子…頭】以下七十句は六根の業用行を明す、今の頭とは上位を表はす。

【眼】行德淨勝にして緣を照了するが故に眼と云ふ。

に示現するが故に。貪恚癡の一切の煩惱を略說するは是れ菩薩の仗なり。煩惱の門を以て衆生を化するが故に。生死の仗、菩薩の行を斷ぜずして衆生を教化するが故に。實法を說く仗、一切無著の故に。一切智門の仗、菩薩の行門を離れざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の器仗と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち能く一切衆生の長夜に積集せる煩惱、結使、習氣を除滅せん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の頭有り。何等をか十と爲す。謂ゆる涅槃の首、頂を見ること無きが故に。恭敬尊重の首、一切世界の天人恭敬供養するが故に。深妙の首、一切の三千大千世界に於て最第一なるが故に。一切善根の首、三界の衆生應に供養すべきが故に。一切衆生を荷負する首、無上の金剛頂を得るが故に。無量無邊の首、一切の最勝法を攝取するが故に。般若波羅蜜の首、法王の法を樂ふが故に。方便の首、一切衆生に平等の首を示現するが故に。一切衆生を教化し成熟する首、一切衆生の無上の師と爲るが故に。如來の正法を守護する首、三寶を斷ぜざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の頭と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上智の頂を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の眼有り。何等をか十と爲す。謂ゆる肉眼、一切色を見るが故に。天眼、一切衆生の此に死し彼に生るるを見るが故に。慧眼、一切衆生の諸根を見るが故に。法眼、一切法の眞實の相を見るが故に。佛眼、如來の十力を見るが故に。智眼、一切法を分別するが故に。明眼、一切佛の光明を見るが故に。出生死の眼、涅槃を見る

【耳】理の如く聴聞し、聞に依りて行を起すが故なり

【鼻】飲嗅行香は鼻に依りて道を増すが故なり。

が故に、無礙の眼、一切法を見て障礙無きが故に、普眼、平等の法門もて法界を見るが故に、佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の眼と爲す。若し菩薩摩訶薩、此眼を成就せば、則ち一切諸佛の無上の大智慧の眼を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の耳有り。何等をか十と爲す。謂ゆる讃歎の聲を聞きては貪愛を斷除し、毀訾の聲を聞きては瞋恚を斷除し、聲聞縁覺の聲を聞きては求むるの心を起さず、菩薩道の聲を聞きては歡喜奇特の心を發起し、地獄、畜生、餓鬼、閻羅王、阿修羅、一切の難處の貧苦の音聲を聞きては、大悲の莊嚴を發起して自ら莊嚴し、天人趣の勝妙の音聲を聞きては、一切法は皆悉く無常なりと觀じ、佛の功徳の音聲を聞きては、精進を勤修し、究竟じて一切の功徳を滿足し、波羅蜜、四攝、菩薩の經藏の音聲を聞きては、究竟の心を發して彼岸に到る。十方世界の一切の音聲を聞きては悉く響の如しと了る。菩薩摩訶薩は初發心より乃し道場に至るまで、常に法耳を正受して、而も亦一切衆生を教化し成熟するを捨てず。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の耳と爲す。若し菩薩摩訶薩、此耳を成就せば、則ち一切諸佛の無上の大智慧の耳を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の鼻有り、何等をか十と爲す。謂ゆる聞ぐ所の穢氣を不臭なりと觀察し、聞ぐ所の香氣を不香なりと觀察し、聞ぐ所の香臭を平等なりと觀察し、聞ぐ所の香臭を平等なりと觀察し、非香非臭を聞ぎては捨離を觀察し衣服、床褥、臥具、及び身肢節の香を聞げば、則ち彼人の貪、恚、愚、癡、等分の煩惱を知り、大寶藏の諸の藥草の香を聞ぎ

【舌】語業自在を明す、之に依りて善を增すが故なり

【身】身業自在を明す、機に應じて形を現ずるが故なり。

【魔兜魔】マノーマヤ(Manomaya) 意生身と譯す、諸佛菩薩及び諸天等諸の自意に從つて化生する身をいふ。

ては、悉く能く一切寶藏を了知し下は阿鼻地獄に至り、上は非想非非想處に至る衆生の香を聞ぎては、悉く能く諸の根本行を了知し、聲聞の施戒聞慧の香を聞ぎては、一切智に住して、心未だ曾て散亂せず。一切菩薩の行香を聞ぎては、如來の智地を攝取し、一切佛の智境界の香を聞ぎては、菩薩の所行を斷ぜず。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の鼻と爲す。若し菩薩摩訶薩、此鼻を成就せば、則ち一切諸佛の無量無邊の無上清淨の鼻を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の舌有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生の無盡行を分別し解說する舌。無盡の法を分別し解說する舌。諸佛の無盡の功德を讚歎する舌。無盡辯の舌。無盡の大乘法を演說する舌。普く十方の虛空界を覆ふ舌。普く一切の佛の世界を照す舌。平等に一切衆生を讚歎する舌。諸佛に隨順して歡喜せしむる舌。一切の魔及び諸の外道を降し、一切の生死の煩惱を除滅して、悉く衆生をして涅槃に至らしむる舌。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の舌と爲す。若し菩薩摩訶薩、此舌を成就せば、則ち諸佛の無上の大金剛の舌を得て、普く一切の世界を覆はん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の身有り。何等をか十と爲す。謂ゆる人身一切の人を教化し成熟するが故に。非人の身、地獄、畜生、餓鬼、閻羅王を教化し成熟するが故に。天身、欲界、色界、無色界の衆生を教化し成熟するが故に。學身、學地に示現するが故に。菩薩の身、阿羅漢地に示現するが故に。緣覺の身、教化して緣覺地に入らしむるが故に。菩薩の身、大乘を積集するが故に。如來の身、如來智の記を受くるが故に。摩兜摩の身。巧方便もて

【意】意業自在を明す。

【佛子…行】次の六十句は四威儀動止の行を明す。行とは發動遊行の意なり。

無量功德を出生するが故に。無漏法の身、少方便を以て普く一切衆生身を現ずるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の身と爲す。若し菩薩摩訶薩、此身を成就せば、則ち一切諸佛の無上の法身を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の意有り、何等をか十と爲す。謂ゆる上首の意、一切の善根を出生するが故に。佛の教に隨順する意、說の如く修行するが故に。深入の意、一切の佛法を解るが故に。內意、深く衆生の希望に入るが故に。不亂の意、煩惱の爲に亂されざるが故に。淸淨の意、垢染を受けざるが故に。善調伏の意、時を失はざるが故に。正思惟業の意、一切の惡を遠離するが故に。諸根を調伏する意、境界の中に於て諸根馳騁せざるが故に。深定の意、佛の三昧は稱量すべからざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の意と爲す。若し菩薩摩訶薩、此意を成就せば、則ち一切諸佛の無上の意を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の行有り。何等をか十と爲す。謂ゆる聞法の行、樂ひて法を聽受するが故に。說法の行、衆生を利益するが故に。愛瞋癡怖に隨はざる行、自心を調伏するが故に。欲界の行、欲界の衆生を教化し成熟するが故に。色、無色界の三昧行、速かに轉せしむるが故に。義法の行、速かに淨慧を成熟するが故に。一切趣の行、衆生を教化するが故に。一切の佛刹の行、一切の佛を恭敬し禮拜し供養するが故に。涅槃の行、生死の相續を斷ずるが故に。諸佛を成滿する行、菩薩の行を斷ぜざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の行と爲す。若し菩薩摩訶薩、此行を成就せば、則ち一切諸佛の行、非行の如

【住】行に止息あるが故に其住を明すなり。

【坐】住或は疲れあるが故に安坐を明す、菩薩は此に處して行を成じ生を攝するなり。

來行を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の住有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩提心の住、未だ曾て忘失せざるが故に。波羅蜜の住、功德を厭はざるが故に。正義を樂聞する住、明淨の智慧の故に。阿練若處の住、諸の大三昧を成就するが故に。一切智に隨順する頭陀の威儀、四聖種の住、少欲にして足るを知るが故に。隨順の住、正法に順ふが故に。如來に親近する住、佛の威儀を成滿するが故に。諸明の住、大智を滿足するが故に。無生忍の住、受記滿足するが故に。道場菩提の住、力、無畏、一切の佛法を滿足するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の住と爲す。若し菩薩摩訶薩、此住に安住せば、則ち一切諸佛の無上の一切智の住を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の坐有り。何等をか十と爲す。謂ゆる轉輪王の坐、十善を興すが故に。四天王の坐、一切世界の諸佛の正法に於て、自在を得んと欲するが故に。帝釋の坐、一切の衆生に於て最第一なるが故に。梵天の坐、自心と他心とに自在を得るが故に。師子の坐、甚深の義を分別し演說するが故に。正法の坐、陀羅尼、諸力、辯を明さんと欲するが故に。堅固なる三昧の坐、大誓を究竟するが故に。大慈の坐、惡心の衆生をして悉く歡喜せしむるが故に。大悲の坐、能く一切諸の苦惱を忍ぶが故に。金剛の坐、衆魔と諸の外道とを調伏するが故に。佛子、之を菩薩摩訶薩の十種の坐と爲す。若し菩薩摩訶薩、此坐に安住せば、則ち一切諸佛の無上の尊坐を得ん。

【臥】憩息歸靜を顯す。

【住】智に栖止あることを明す。前には能住、此には所住を辨ず。又前は身住、今は心住なり。

【行】前の行は四威儀の行なれば身儀に約し、此は心行に約す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の臥有り。何等をか十と爲す。謂ゆる寂靜の臥、身心憺怕なるが故に。禪定の臥、正念に思惟して、諸法を觀察するが故に。諸の三昧の臥、身心柔軟なるが故に。梵天の臥、自他を惱まさざるが故に。思惟業の臥、後心に悔ゆること無きが故に。正法に順ふ臥、傾動すべからざるが故に。正道の臥、善知識覺悟するが故に。妙願の臥、善く廻向を知るが故に。一切の事畢るの臥、所作究竟するが故に。方便を捨つるの臥、本事を究竟するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の臥と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の道臥を得て、悉く能く一切衆生を覺悟せん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の住有り。何等をか十と爲す。謂ゆる大慈の住、等心に一切衆生を觀察するが故に。大悲の住、未だ學ばざる衆生を輕んぜざるが故に。大喜の住、憂惱を滅するが故に。大捨の住、有爲無爲悉く平等なるが故に。一切の波羅蜜住、菩提心を首と爲すが故に。一切種空の住、善く諸法を解るが故に。無相の住、生を離れ證を受けて退轉せざるが故に。無願の住、受生を捨つるが故に。念慧の住、忍法成滿するが故に。一切法平等の住、授記の法を得るが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の住と爲す。若し菩薩摩訶薩、此住に安住せば、則ち一切諸佛の無上の無礙住を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の行有り。何等をか十と爲す。謂ゆる正念の行、四念處を滿足するが故に。諸趣の行、正しく法趣を覺るが故に。慧行、諸佛に隨順するが故に。波羅蜜の行、一切智を滿足するが故に。波羅蜜の行、一切智を滿足するが故に。四攝の行、諸

【佛子…觀察】以下五百十句は上の因圓果滿行に答ふ。中に初の三百二十句は因圓究竟の行を、後百九十句は現果圓滿行を明す。初の中初百四十門は因行の體性を明し更に初四十は起行の方便、後は十度の行體を明す。今の觀察とは觀解の方便の故、善く所行通塞の相に達するをいふ。

【周遍觀察】審察窮盡の故に、解能く行を起すをいふなり。

の衆生を教化し成熟するが故に。生死の行、一切諸〻の善根を長養するが故に。一切衆生の言戯の行、衆生を拔出するが故に。貪熾然の行、一切衆生の諸根を覺悟するが故に。巧方便の行、般若波羅蜜を長養するが故に。道場の行、一切智を覺りて菩薩の行を斷ぜざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の行と爲す。若し菩薩摩訶薩、此行に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大智慧の行を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に、十種の觀察有り。何等をか十と爲す。謂ゆる善業を觀察す。乃至微色をも悉く照見するが故に。此に死し彼に生るるを觀察す、一切衆生に著せざるが故に。一切衆生の諸根を觀察す、決定して無根の法を了知するが故に。妙法を觀察す、法界壞すべからざるが故に、現前を觀察す、一切の佛法に於て佛眼を修するが故に。智慧を觀察す、器に隨ひて法を說くが故に。無上法忍を觀察す、決定して佛法を得るが故に。佛地を退かざるを觀察す、一切の煩惱を除滅して三界と二乘地とを超出するが故に。甘露の灌頂法を觀察す、一切の佛法に於て自在を得て動せざるが故に。佛の三昧を觀察す、一切の十方に於て佛事を作すが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の觀察と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大智の觀察を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の周遍觀察有り。何等をか十と爲す。謂ゆる周遍して諸の來り求むる者を觀察す、慈心もて施與して彼意を滿すが故に。周遍して諸の戒を犯す者を觀察す、如來の淸淨戒に安置するが故に。周遍して害心の衆生を觀察す、如來の堪忍力

【奮迅】實行内に充ち威德外に溢るるをいふ。

に安置するが故に。周遍して諸の懈怠の者を觀察す、彼衆生をして精進を勤修し大乘を究竟せしむるが故に。周遍して亂心の衆生を觀察す、彼亂心を除きて、如來の一切智に安置するが故に。周遍して愚癡の衆生を觀察す、彼疑惑と一切の有見とを除くが故に。周遍して諸の善知識を觀察す、如來の教に隨ひて佛法に住するが故に。周遍して聞く所の法に隨ふを觀察す、無上の義を具足し成就するが故に。周遍して一切衆生を觀察す、大悲を捨てざるが故に。周遍して一切の佛法を觀察す、一切智を覺るが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の周遍觀察と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大智の周遍觀察を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の奮迅有り。何等をか十と爲す。謂ゆる色奮迅、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等の一切の衆中に於て、最勝を現ずるが故に。象奮迅、象の實心を示現するが故に。龍奮迅、大法の雲を興して普く一切に覆ひ、解脫の電光を曜明し、實義の雷を震ひ、諸の根力、覺意、禪定、解脫、三昧の甘露の法雨を降らすが故に。大金翅鳥王奮迅、愚癡闇啞の殼膜を壞滅し、愛水を消竭し、大苦の海に於て煩惱の諸の惡龍を搏撮するが故に。師子奮迅、無畏に安住して平等大智の鎧仗を被執し、衆魔の諸の外道とを摧伏するが故に。勇健奮迅、能く生死の大戰陣の中に於て、一切煩惱の大怨敵を摧滅するが故に。智慧奮迅、決定して陰、界、諸入、十二緣起を了知し、一切の佛の自在の法を現ずるが故に。陀羅尼奮迅、一切の法を聞持して、未だ曾て妄失せず、廣く群

【師子吼】既に勇健無畏なれば、即ち能く決定して宣唱するが故に名く

生の爲に分別して說くが故に。辯才奮迅、一切の句身味身を分別して、罣礙する所無く、問に隨ひて卽ち答へ、悉く歡喜せしめて言虛しからざるが故に。如來奮迅、師子の座に坐して衆魔を降伏し、外道を調伏し、一切智を滿足し、一念相應の慧を具へ、得る所、知る所、覺る所、成ずる所、皆悉く覺知して無上菩提を成ずるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の奮迅と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の自在の奮迅を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩、十種の師子吼有り。何等をか十と爲す。謂ゆる我必ず成佛せんと、是れ菩提心の師子吼なり。一切衆生に於て大悲心を起し、未だ度せざる者を度し、未だ脫せざる者を脫し、未だ安んぜざる者を安んじ、未だ涅槃せざる者に涅槃を得しめんと、是れ大悲の師子吼なり。守護し受持して三寶の性を斷ぜざれど、是れ如來の恩に報ゆる師子吼なり。一切佛刹をして皆悉く淸淨ならしめんと、是れ究竟大誓の師子吼なり。一切の惡道の諸難を除滅せんと、是れ自ら淨戒を持つ師子吼なり。如來の身口意の相好莊嚴を滿足せんと、是れ功德を積集して厭足無き師子吼なり。一切諸佛の智慧を成滿せんと、是れ智慧の業具を積集して厭足無き師子吼なり。一切の魔事を除滅して專ら正道を求めんと、是れ煩惱を除滅する師子吼なり。一切法は我無く、我所無く、命無く、補伽羅無く、空、無相、願なるを知り、一切法は淨きこと虛空の如しと觀ぜんと、是れ一切法に於て無生忍を得る師子吼なり。一切の補處の菩薩摩訶薩は、一切佛刹を嚴淨し震動し、釋梵四天王は咸悉く降神し下生せんことを請ひ求めて、無礙の慧眼を以て、普く世間を觀ずるに、一切

【師子…淨施】次の百門は十度の行を明す。施とは己れを輟して人に惠むなり。

【戒】三業の非を防ぐなり。

【微密】巧に犯禁を拔くをいふ。

衆生我に勝る者無ければ出生を示現し、遊行すること七歩にして大師子吼すらく、「我は世間に於て最勝第一なり、我は永く生老死の法を究竟せり」と。是れ說の如く修行する師子吼なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の師子吼と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大師子吼を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の淨施有り。何等をか十と爲す。謂ゆる平等心の施、惡衆生無きが故に。隨意の施、一切の願を滿ずるが故に。無亂心の施、退轉せざるが故に。隨應供の施、分別して福伽羅を了知するが故に。選擇せざる施、果報を求めざるが故に。一向施、一切の物に於て心著する無きが故に。內外一切の施、究竟して淸淨なるが故に。菩提に迴向する施、有爲無爲を遠離するが故に。衆生を教化し成熟する施、乃し道場に至るまで捨離せざるが故に。三種の圓滿淸淨の施、施す者と、受くる者と、財物と平等にして淸淨なること虛空の如くなるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の淨施と爲す。若し菩薩摩訶薩、此施に安住せば、則ち一切諸佛の無上の淸淨の大施を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の淨戒有り。何等をか十と爲す。謂ゆる身の淨戒、身の三惡を防護するが故に。口の淨戒、口の四過を遠離するが故に。心の淨戒、永く貪、恚諸の邪見を離るるが故に。一切を具する淨戒、天人の中に於て、最も勝妙なるが故に。菩提心を守護する淨戒、小智を樂はざるが故に。如來の所說を守護する淨戒、乃し微細の罪に至るまで大いに怖畏するが故に。微密の淨戒、能く戒を犯す諸の衆生を拔くが故に。一切の惡を作さざる淨

【忍】情法に安きなり。

【精進】理に順じて勤策するが故に

戒、一切諸の善法を積集するが故に。一切の有見を遠離する淨戒、戒に於て著する無きが故に。一切衆生を守護する淨戒、大悲を出生するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の淨戒と爲す。若し菩薩摩訶薩、此戒に安住せば、則ち一切諸佛の衆惡を遠離する淨戒を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の淨忍有り。何等をか十と爲す。謂ゆる若し他、罵辱せんも悉く能く堪忍せん、彼心を護るが故に。若し他、刀仗もて害を加へんも亦能く堪忍せん、彼我を護るが故に。一切の瞋恚を知る忍、自然に動ぜざるが故に。自在處の忍、能く害不害の故に。衆生歸趣の忍、身命を惜まざるが故に。我慢を遠離する忍、未だ學ばざるを輕んぜざるが故に。肢節を割截する忍、如幻なるを觀察するが故に。一切惡事の忍、自他の想を離るるが故に。煩惱の忍、煩惱の境界を遠離するが故に。一切菩薩の方便智に隨順する忍、無生忍を得て一切智の境界に於て、他に由りて悟らざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の淨忍と爲す。若し菩薩摩訶薩、此忍に安住せば、則ち一切諸佛の無上法忍を得て、他に由りて悟らざらん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の淨精進有り。何等をか十と爲す。謂ゆる淨身業の精進、一切諸佛菩薩、尊重の福田を供養し奉給して、退轉せざるが故に。淨口業の精進、一切諸佛の正法を聞持して未だ曾て忘失せず、如來を讃歎し、所聞の法に隨ひて、廣く人の爲に說きて、疲倦無きが故に。淨意業の精進、巧方便もて慈、悲、喜、捨、禪定、解脫、三昧に入り、相續して起り、退轉無きが故に。淨直心の精進、諂曲を遠離して正直に一切の事、一切の

【禪】心を攝して散ぜざるなり。

方便を究竟じて退轉せざるが故に。淨深心の精進、常に勝趣に趣きて、無上の智慧と白淨の法とを積集するが故に。行虛妄ならざる淨精進、布施、戒、忍、多聞、及び不放逸を攝取して、乃し道場に至るまで中息せざるが故に、一切の衆魔怨敵を降伏する淨精進、悉く能く貪、恚、愚癡、煩惱、邪見、諸纒、障蓋を除滅するが故に。慧光を滿足する淨精進、施作する所有れば悉く善く思惟して、心に中悔無く、衆の事を究竟じて、一切の佛の不共の法を得るが故に。染著する所無き淨精進、心の境界と身口意の相と非相とを離れ、甚深の法門に普く境界を觀じ、決定して眞實如如を了知するが故に。法明を具足し成就する淨精進、次第に一切の諸地に進入して、諸佛の所に於て甘露の灌頂を得て法王の記を受け、無漏の法身は天壽を捨てて世間に降神し、出家し成道して淨法輪を轉じ、大涅槃に入るを現じ、究竟じて普賢の行を具足するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の淨精進と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大淨精進を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の淨禪有り。何等をか十と爲す。謂ゆる常に出家を樂ふ淨禪、一切の有を捨離するが故に。善知識に親近する淨禪、正法の道を諮受し修習するが故に。阿練若の處を樂ふ淨禪、我我所の法を遠離するが故に。諠戲憒閙の處を離るる淨禪、寂滅を樂ふが故に。心柔軟なる淨禪、諸根亂れざるが故に。智慧寂靜なる淨禪、一切の音聲も諸の禪定を刺して亂す能はざるが故に。七覺八道の淨禪、一切境界に於て智慧決定するが故に。味禪等の諸の煩惱垢を離れたる淨禪、欲界を取せざるが故に。諸の通明の

【慧】正解理に照らすなり。

【慈】與樂の意なり。

淨禪、決定して一切衆生の諸根を了知するが故に。少方便を以て現前に遊戯する神通の淨禪、如來の三昧は稱量すべからざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の淨禪と爲す。若し菩薩摩訶薩、此禪に安住せば、則ち一切諸佛の無上の淨禪を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の淨慧有り。何等をか十と爲す。謂ゆる因を知る淨慧、果報を壞せざるが故に。一切の緣を解る淨慧、和合を壞せざるが故に。一切法は不常不斷なるを解る淨慧、緣起の如如なるを了るが故に。一切の邪見を拔出する淨慧、衆生の相を取らざるが故に。一切衆生の心心の所行を解る淨慧、一切法は皆幻の如しと觀ずるが故に。諸辯勝智の淨慧、問に隨ひて能く答へ罣礙する無きが故に。衆魔及び諸の外道を降伏して聲聞緣覺に出過する淨慧、深く如來の方便智に入るが故に。一切の佛の清淨の法身を見、一切の衆生は皆悉く清淨なりと見、一切法は皆悉く寂滅なりと見、一切の世界は皆悉く虛空なりと見る淨慧、一切の相に於て智慧無礙なるが故に。一切の陀羅尼の辯と諸の波羅蜜の巧方便とを攝取する淨慧、一切の勝智を得るが故に。一念相應の金剛智もて一切法の平等を覺る淨慧、無上智を具足し成就するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の淨慧と爲す。若し菩薩摩訶薩、此慧に安住せば、則ち一切諸佛の無上大智を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の淨慈有り。何等をか十と爲す。謂ゆる等心の淨慈、衆生を選擇せざるが故に。饒益の淨慈、一切衆生に於て施作する所有れば、悉く能く辦ずるが故に。救護の淨慈、究竟じて一切衆生を生死の險難より度脫するが故に。哀愍して一切衆生を捨

【悲】拔苦の意なり。

てざる淨慈、有爲の善根を長養するが故に。解脫の淨慈、一切衆生の諸の煩惱を滅するが故に。菩提を出生する淨慈、一切衆生をして菩提を樂ひ求めしむるが故に。一切衆生に於て無礙たる淨慈、無量の光明を放ちて、普く衆生を照すが故に。虛空の淨慈、一切衆生を救護するが故に。法緣の淨慈、眞實の法を覺悟するが故に。無緣の淨慈、菩薩の離生の法を證取するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の淨慈と爲す。若し菩薩摩訶薩、此慈に安住せば、則ち一切諸佛の無上の淸淨の大慈を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の淨悲有り。何等をか十と爲す。謂ゆる不共の淨悲、自ら大悲なるが故に。不厭の淨悲、一切衆生に代りて大苦を受くるが故に。一切惡道に處する淨悲、生死を受けて衆生を度するが故に。一切の天人の中に生を受くる淨悲、一切法は悉く無常なるを示現するが故に。邪定の衆生の爲にする淨悲、無量劫に於て大誓の莊嚴を捨離せざるが故に。已が樂に著せざる淨悲、衆生に樂を與ふるが故に。報を求めざる淨悲、自心淸淨なるが故に。一切衆生の倒惑を除滅する淨悲、實法を說くが故に。一切法は自性淸淨にして、空のごとく所有無けれども、客塵に染せらるるを知り、菩薩は彼に於て淨悲を起す、眞の淨法を說くが故に。一切法は虛空の足跡の如きを解るも、衆生は癡に覆はれて眞實を知らず、菩薩は彼に於て淨悲を起す、衆生をして大乘の心を起し、涅槃を究竟せしめんと欲するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の淨悲と爲す。若し菩薩摩訶薩、此悲に安住せば、則ち一切諸佛の無上淸淨の大悲を得ん。

【喜】物に慶べば益を獲となす。

【捨】情に取著なきなり。

大方廣佛華嚴經　卷第四十二

東晋天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

離世間品第三十三之七

「佛子、菩薩摩訶薩に十種の淨喜有り。何等をか十と爲す。謂ゆる發菩提心の淨喜。一切の有する所を捨つる淨喜。戒を犯す人に於て惡心を生ぜずして教化し成就する淨喜。一切の諍訟する衆生に於て悉く和合して、無上智を得しむる淨喜。身命を惜まずして正法を守護する淨喜。五欲を遠離して常に正法を樂ふ淨喜。一切衆生をして資生の具に著せず、常に正法を樂はしむる淨喜。一切の佛を見て、恭敬し供養して厭足有る無く、而も法界を壞せざる淨喜。一切衆生をして常に禪定、解脱、三昧の相續を樂はしむる淨喜。一切衆生をして專ら寂靜を求め、亂想を除滅し、無上の慧を得て邪見を遠離し、諸願を滿足し、菩薩の苦行を究竟せしむる淨喜なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の淨喜と爲す。若し菩薩摩訶薩、此喜に安住せば、則ち一切諸佛の無上の淸淨の大喜を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の淨捨有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生恭敬し供養すれども愛著を生ぜず、一切衆生、輕慢毀辱すれども瞋恚を生ぜざる淨捨。常に世間を行じ

【佛子…義】以下八十門は、造修方便行を明す、中初四十は自分行、後四十は勝進行なり。今の義とは所詮の旨、義に依てり行を成ずるが故に今明す。

【法】自性執持の故に法を以て行を成ずるなり。

て八法の爲に染汚せられざる淨捨。器に於て時を知り、非器に於て惡心を生ぜざる淨捨。聲聞、緣覺、學無學を求めざる淨捨。五欲の一切の煩惱を遠離し、乃至一念の惡心をも生ぜざる淨捨。二乘を修行し及び生死を厭ふを歎ぜざる淨捨。世間の語、非涅槃の語、非離欲の語、戲笑の語、他を惱す語、聲聞緣覺の語、乃至一切の菩提を障ふる語を遠離する淨捨。若は衆生有り、時を待ちて化を受くる菩薩の淨捨。若は衆生有り、應に佛の化を受くべき菩薩の淨捨。菩薩摩訶薩は二法を遠離し、上無く下無く、取無く捨無く、虛無く實無く、平等を觀察し眞實に安住して忍を得る淨捨なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の淨捨と爲す。若し菩薩摩訶薩、此捨に安住せば、則ち一切諸佛の無上清淨の大捨を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の義有り。何等をか十と爲す。謂ゆる多聞の義、說の如く修行するが故に。法の義、善巧の方便もて分別して解るが故に。空の義、第一空を解るが故に。寂滅の義、一切衆生をして生死を離れしむるが故に。不可說の義、一切の語言は所著無きが故に。如の義、一切の三世を等しく觀察するが故に。入法の義、悉く一味なるが故に。如來の義、如來に隨ふが故に。實際の義、眞實を覺るが故に。大般涅槃の義、一切苦を滅して菩薩行を斷ぜざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の義と爲す。若し菩薩摩訶薩、此義に安住せば、則ち一切諸佛の無上の一切智の義を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の法有り。何等をか十と爲す。謂ゆる眞實の法、說の如く修行するが故に。無害の法、瞋恚を遠離するが故に。無諍の法、一切諸の煩惱を除滅するが

【功德の具】成福の縁をいふ。

故に。寂滅の法、熾然を離るるが故に。離欲の法、永く欲垢の諸の煩惱を離るるが故に。不虛の法、虛妄を離るるが故に。不生の法、一切法は悉く虛空なるが故に。無爲の法、三相を離るるが故に。性淨の法、自然に清淨なるが故に。身を報ゆる煩惱の滅したる無餘涅槃の法、菩薩行を行じ、受持して捨てざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の法と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の功德の具有り。何等をか十と爲す。謂ゆる衆生を勸發して菩提心を起さしむるは是れ功德の具なり。三寶を斷ぜざるが故に。十種の廻向に隨順するは、是れ功德の具なり、一切の不善の法を斷じて、一切の善法を集むるが故に。智慧もて正しく教ふるは、是れ功德の具なり、三界に於て功德最も殊勝なるが故に。心に疲厭する無きは、是れ功德の具なり。一切衆生を度脫して彼岸に到らしむるが故に。悉く能く內外の所有を捨離するは、是れ功德の具なり、一切の物に於て、悉く著する無きが故に。相好滿足して精進不退なるは、是れ功德の具なり。心の馳騁することを止むるが故に。三品の善根を輕んぜざるは、是れ功德の具なり。善巧の方便もて菩提に廻向するが故に。邪定犯戒の衆生に於て、輕慢を起さずして大悲を增長するは、是れ功德の具なり。大人の法を顯現するが故に。一切如來を恭敬し供養して、一切菩薩に於て如來の想を起し、一切衆生に於て所作究竟するは、是れ功德の具なり、正直心を長養し守護するが故に。菩薩摩訶薩は阿僧祇劫に於て、一切善根を具足し修習し、皆悉く能く捨て、一衆生に與へて、心に憂悔

【智具】 成智の因緣の故に名く。

無し、一衆生の如く、一切衆生にも亦復是の如し、是を第十の虚空界に等しき大功德の具と爲す。廣大の智慧を具足し成覺するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の功德の具と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大功德の具を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の智具有り。何等をか十と爲す。謂ゆる眞實多聞の善知識に親近し、恭敬し尊重し、禮拜し供養し、奉給し隨順して、其教に違はざるは、是れ第一の智具なり。諂曲を遠離するが故に。慢を離れて意を下し、心に放逸無く、身口及び意、皆悉く柔軟にして、誑詐有る無く、心常に歡喜して淨戒を護持し、和顏もて愛語し、先意問訊して、邪僞を遠離するは、是れ第二の智具なり。自然に佛法の器を成就するが故に。念慧に安住して正覺を捨てず、亂想を除滅して六念を修習し、六和敬を行じて果報を求めざるは是れ第三の智具なり。十種の智を出生し長養するが故に。法を樂ひ義を樂ひて、正法を勤修し、常に厭足無く、世俗及び世間の語を遠離し離世間の語を聞かんと樂ひ、小乘を遠離して大乘を樂ひ求むるは是れ第四の智具なり。正念を修習して不可思議なるが故に。正しく六波羅蜜を求めて受持し修習し、四種の梵住を具足し成就して、諸の明法に隨ひ、能く智人に問ひ惡趣を遠離して專ら善趣に向ひ、慈心もて調伏して、訶責義論を離れ、他心を防護するは是れ第五の智具なり。說の如く諸佛の眞實の法を修行するが故に。常に出家を樂ひて三界を樂はず、自心を守護して我覺を遠離し惡心を生せず、身口及び意、皆悉く柔軟となり、善く心性を知るは、是れ第六の智具なり。自他の心を俱に淸淨ならしむ

【因陀羅の陣】帝釋が修羅と戰ふ時兵を列ねて空に在るに、影大海に現ずる故なり。

るが故に。陰は幻の如く、界は毒蛇の如く、入は空聚の如しと觀じ、一切法は化の如く焔の如く、水月、鏡像のごとく、夢の如く、電の如く、呼聲の響の如く、旋火輪の如く、空中の雲の如く、因陀羅の陣の如く、日月の光の如く、常に非ず斷に非ず、來無く、去無く、住無しと觀じ、深心に信解して誹謗を起さざるは、是れ生住滅無き第七の智具なり。一切の法空の淨智慧を具足し成就するが故に。我無く衆生無く、福伽羅も無く、思無く義無く、貪恚癡無く、所有無く、毀無く譽無く、取無く捨無く、主無く行無く、究竟じて涅槃なり、若し菩薩摩訶薩、此深法を聞きて能く信じ能く解りて疑惑を除滅するは、是れ第八の智具なり。深解脫を究竟し具足するが故に。正方便を以て止觀を思惟し、諸根を調伏し、一切諸法は造作する所無く、無生無爲にして皆悉く寂滅なり、衆生の我を計する者は、究竟じて所有無く、無縛無脫にして、身口心無く、亦精進も無し、一切衆生、一切法、一切心、一切行を觀察するに、前無く後無く、皆悉く平等なり、是れ第九の智具なり。一切の相を遠離して彼岸を究竟するが故に。菩薩摩訶薩は善く緣起を知るが故に。法の淸淨なるを見る、法の淸淨なるを見るが故に、刹の淸淨なるを見る、刹の淸淨なるを見るが故に、虛空の淸淨なるを見る、虛空の淸淨なるを見るが故に、法界の淸淨なるを見る、法界の淸淨なるを見るが故に、則ち智慧を見るは、是れ第十の智具なり。一切智を積集するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の智具と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の一切法の中の無上の無礙淸淨の大智を得ん。

【佛子…明足】以下四十は勝進の行を明す、明足とは委解を明といひ、周備を足と爲す、又惑闇盡くる故、智用滿ずるが故に名く。

【求法】正法を求むるに依りて以て勝行を成ずとなり

佛子、菩薩摩訶薩に十種の明足有り。何等をか十と爲す。謂ゆる深く佛法を知る明足。一切法の中に癡暗を除く明足。邪見を遠離する明足。慧光清淨にして普く諸根を照す明足。正方便もて精進を勤修する明足。深く菩薩の眞諦に入りて正しく離生に趣く明足。煩惱業を滅して盡智と無生智とを成就する明足。淨慧を思惟する清淨天眼の明足。清淨の憶念もて宿命を念ふ明足。淨池の清淨の諸明を具足して、諸漏を除滅する漏盡智の明足なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の明足と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の一切法の中の無上の大明足を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の求法有り。何等をか十と爲す。謂ゆる直心に法を求む、諂曲、虚僞の心を離るるが故に。精勤して法を求む、懈怠を離るるが故に。一向に法を求む、身命を惜まざるが故に。一切衆生の煩惱を斷ぜんが爲に法を求む、資生の具を求めざるが故に。一切衆生を饒益せんが爲に法を求む、自ら利せざるが故に。深く智慧に入らんが爲に法を求む、彼を輕んぜざるが故に。正法をして常に堅固ならしめんと欲して法を求む、世間を樂はざるが故に。衆生を愍悼せんが爲に法を求む、菩提心を捨てざるが故に。一切衆生の問ふ所に隨ひて能く答へんが爲に法を求む、悉く能く諸の疑惑を除滅するが故に。具に佛法を滿ぜんが爲に法を求む、餘乘を樂はざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の求法と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、即ち一切諸佛の法の中の無上の無礙智を得て、他に由りて悟らじ。

【明了法】既に法を求得して委解照達するが故に云ふなり。

【衆結を除滅す】八十八結見所斷惑を滅し、惡道生死の流を斷ずるなり

【向法】普賢法界に順向するなり。

佛子、菩薩摩訶薩の十種の明了法有り。何等をか十と爲す。謂ゆる世間に隨順する明了法、一切世間の凡夫の善根を長養せんと欲するが爲の故に。無礙不壞の信の明了法、法の眞性を解る信行の人なるが故に。法界に安住する明了法、法行の人の解るが故に。八邪を遠離して八正道に向ふ明了法、八人を解るが故に。衆の結を除滅し生死の漏を斷じ、眞實諦を見る明了法、須陀洹を解るが故に。味は是れ患なりと觀じて還り來りて生を受くる明了法、斯陀含を解るが故に。乃至、須臾も三界を樂はず、受生に著せず、專ら漏の盡きんことを求むる明了法、阿那含を解るが故に。六通自在にして八解脫に遊び、隨意に九次第定を正受する諸辯の明了法、阿羅漢を解るが故に。常に寂靜を樂ひ外緣に因りて解り、少事に足るを知り、他に由りて悟らずして智慧を成就する明了法、緣覺を解るが故に。勝智を成就し諸根明利にして心常に解脫し、無量の功德智慧を長養し、諸佛の十力、四無所畏、一切の佛法を滿足する明了法、菩薩を解るが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の明了法と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の大智慧の明了法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の向法有り。何等をか十と爲す。謂ゆる善知識に隨順し、恭敬する向法。諸天を覺悟する向法。一切の佛に於て、常に慚愧を懷くべき向法。衆生を哀念して、生死を斷ぜざる向法。一切の事を究竟じて、虛妄の心を起さざる向法。餘乘を遠離して、專ら菩薩の大乘を修する向法。邪道を遠離して、專ら正道を求むる向法。衆魔を降

【佛子……魔】以下百門は離障の行を明す、中に初五十門は有障成行、後五十門は離障加持を明す、更に前五十中初二十は所離障の門を、次十は離障の方便を、後二十は見佛成行を顯す、今の魔とは道に於て障あるをいふ、【何等……業】前の魔障に攝れるに對し、今は所門を辨ず。

伏して、煩惱を滅除する向法、佛地に安住して、一切衆生の諸根を知り、應に隨ひて法を聞き、廣く爲に演說する向法。無量無邊の清淨の法界に安住する向法たり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の向法と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の向法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の魔有り。何等をか十と爲す。謂ゆる五陰魔、五陰に貪著するが故に。煩惱魔、煩惱染するが故に。業魔、能く障礙するが故に。心魔、自ら憍慢するが故に。死魔、受生を離るるが故に。天魔、憍慢放逸を起すが故に。善根を失ふ魔、心に悔いざるが故に。三昧魔、味に著するが故に。善知識魔、彼に於て著心を生ずるが故に。菩提の正法を知らざる魔、諸の大願を出生する能はざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の魔と爲す、應に方便を作して速かに之を遠離すべし。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の魔業有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩提心を忘失して、諸の善根を修する、是を魔業と爲す。惡心もて布施し、瞋心もて戒を持ち、惡性懈怠の衆生を棄捨し、亂心無智の衆生を輕慢し厭惡する、是を魔業と爲す。正法を慳惜して法器の衆生を訶責し、利養を貪り求めて人の爲に法を說き、非器の人の爲に深妙の法を說く、是を魔業と爲す。波羅蜜を聞かず、聞くと雖も修行せず、懈怠の心を生じて深妙の無上菩提を求めざる、是を魔業と爲す。善知識を遠離して惡知識に親近し、二乘を樂ひ求め、受生の處に於て離欲寂靜除滅の心を起す、是を魔業と爲す。菩薩の起す所の瞋恚の心に於て、

【捨離魔業】障を對して修治するが故に捨といふ。

【菩提樹】善根を以て廻向せば、必ず此樹に於て菩提を成ずるが故に。

其過惡を說き、彼利養を斷ちて常に罪釁を求め、惡眼もて之を視る、是を魔業と爲す。正法を誹謗して契經を聞かず、聞くも讃歎せず、若し法師有りて法を說くとも、恭敬して意を下す能はず、自ら言はく、「我說は是義なるも、彼が說は非義なり」と、是を魔業と爲す。世間の論を學び、文字に巧にして、句味、手筆、文頌を善くし、樂ひて二乘を說きて深法を隱覆し、雜語を開演し、非器の所に於て甚深の法を說き、菩提を遠離して邪道に安住す、是を魔業と爲す。已に度り已に安んぜる者は、親近し恭敬して之を供養し、未だ度せず、未だ安んぜざる者は、永く親近恭敬供養せず、亦教化せず、是を魔業と爲す。增上慢に墮して諸慢を增長し、衆生を輕蔑し、正法の眞實智慧を求めずして諸根散亂し、化度すべきこと難し、是を魔業と爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の魔業と爲す。菩薩摩訶薩、應に速かに遠離して正しく佛業を求むべし。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の魔業を捨離する有り。何等をか十と爲す。謂ゆる善知識に親近すれば、魔業を捨離す。自ら尊擧せず、自ら讃歎せざれば魔業を捨離す。佛の深法を信じ、誹謗を生ぜざれば魔業を捨離す。未だ曾て一切智の心を忘失せざれば魔業を捨離す。不放逸に安住し、甚深の法を修習すれば魔業を捨離す。菩薩の藏に安住して正しく一切法を求むれば魔業を捨離す。常に法を聽かんと欲し、樂ひて深義を聞き、心に疲倦無ければ魔業を捨離す。十方の一切諸佛に歸依すれば魔業を捨離す。信心に一切諸佛の菩提樹を正念すれば魔業を捨離す。一切菩薩は善根を出生して、皆悉く不二なれば魔業を捨離す。

【見佛】行障既に盡れなば佛境斷に現ずるが故に。

【佛業】前に所見の佛體を明し、今は得佛の因を辨ず。又此れ佛の起行して佛に順ずるが故に佛業と名く。

佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の魔業を捨離すと爲す。若し菩薩摩訶薩、此業に安住せば、則ち一切諸魔の業道を離れん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の見佛有り。何等をか十と爲す。謂ゆる無著佛、世間に安住して正覺を成ずるが故に。願佛、出生するが故に。業報佛、信ずるが故に。持佛、隨順するが故に。涅槃佛、永く度るが故に。法界佛、處として至らざる無きが故に。心佛、安住するが故に。三昧佛、無量にして著する無きが故に。性佛、決定の故に。如意佛、普く覆ふが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の見佛と爲す。若し菩薩摩訶薩、此法に安住せば、則ち能く無上の如來を覩見せん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の佛業有り。何等をか十と爲す。謂ゆる衆生を勸化する、是れ第一の佛業なり、諸佛の法を長養するが故に。夢中に佛を見る、是れ第二の佛業なり、過去の諸の善根を發起するが故に。多く聞くは是れ第三の佛業なり、無礙の決定智を逮得するが故に。悔纏に纏はるる者の爲には、善巧の方便もて悔過の法を說く、是れ第四の佛業なり、一切諸の疑悔を除滅するが故に。若し衆生有りて、慳心、無智心、聲聞心、緣覺心、生心、疑心、憍慢心を起さば、如來心の相好莊嚴を現じて、斯等の類を化す、是れ第五の佛業なり、過去の諸の善根を出生し長養するが故に。正法の難時に、廣く衆生の爲に淨妙の法を說き、衆生聞き已りて、便ち陀羅尼、智慧、神通を具足するを得、應の如く示現して衆生を饒益す、是れ第六の佛業なり、心力淸淨なるが故に。若し魔事起らば種種

【慢業】以下五十は離障加持行を明す中、初二十は離障行を成じ、後三十は外加持行を辨ず。慢業とは我を執て自ら高くし、他を謗るを業と爲す。

の方便もて速かに之を遠離するに虛空界に等しき微妙の音聲を以てし、亦他人を輕蔑せず、一切の魔業を除滅し忍辱を具足す、是れ第七の佛業なり、正直の功德の故に。無量の行を行じて、聲聞緣覺の離生聖行を證せず、諸根未だ熟せざる者には、彼人の爲に解脫の果を說かず、但愛の本を除く、是れ第八の佛業なり、本願を出生するが故に。一切生死の漏縛と、一切の諸結とを斷除して、菩薩行を出生し、一切衆生に於て大悲を長養し、深心に菩薩の所行を信解し、涅槃を究竟す、是れ第九の佛業なり、菩薩行を斷ぜざるが故に。菩薩摩訶薩は自他の爲の故に、解脫の道を求めて厭足無く、一切行及び一切法を離れ、如來の心身に於て染着する所無く、精勤に專ら無礙の智慧を求め、他に由りて悟らず、一切佛刹を嚴飾して淸淨ならしめ、決定して皆悉く虛空なりと了知し、一切衆生を敎化し成熟して、而も無我の性を捨てず、法界に安住して諸通自在に、一切種智を具足し成就して、而も菩薩行を捨てず、淨法輪を轉じて、一切衆生をして皆歡喜を得しめ、廣く衆生の爲に甚深の法を說き、如來の無量の自在を示現して、而も菩薩の身を捨てず、大涅槃を現じて而も一切處生を捨離せず。佛子、菩薩摩訶薩は是の如き等の、乃至翻覆三昧を出生す、是れ第十の佛業なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の佛業と爲す。若し菩薩摩訶薩、此業に安住せば、則ち一切諸佛の無上の無師の大業を得て、他に由りて悟らざらん。

　佛子、菩薩摩訶薩に十種の慢業有り。何等をか十と爲す。謂ゆる尊重の福田なる和尙、阿闍梨、父母、沙門、婆羅門の處に於て、而も尊重し、恭敬し、供養せず、是を慢業と爲す。

諸の法師有りて、勝妙の法を得、大乘に乘じて深く生死を出づるの道を知り、陀羅尼を得て多聞を成就し、智慧の藏を具へて善能く法を說くも、而も信受恭敬供養せず、是を慢業と爲す。法を聽受する時、若は深法を聞きて離欲の心を發し、歡喜無量にして、法師を讚じて衆をして歡喜せしめず、是を慢業と爲す。憍慢の心を起して、自ら高ぶり彼を降し、己が過を省みず、自身を調へず、是を慢業と爲す。我を計する心を起して、功德智慧有る者を見るも、其美を讚ぜず、德無き者を見て反つて其善を說き、若し他を讚ずるを聞かば、彼人の所に於て妬嫉の心を起す、是を慢業と爲す。若し法師有りて、是は法、是は律、是は實、是は佛語と知るも、憎嫉を以ての故に、說いて法に非ず、律に非ず、實に非ず、佛語に非ずと言ふ、他の信心を壞せんと欲するが故に。是を慢業と爲す。自ら高座を敷きて、我は法師たり、應に執事すべからず、應に餘人を宗敬し供養すべからず、諸の梵行を修する尊長有德のものも、悉く應に我に恭敬し供養すべしといふは、是を慢業と爲す。顰蹙、惡眼もて視るを遠離し、彼常に和顏を以て等しく衆生を觀、言常に柔軟にして麤獷有る無く、恚恨の心を離るるも、而も彼法師に於て其過惡を求む、是を慢業と爲す。我慢の心を以て多聞の者に於て往きて恭敬し、聞法留難を起さず、亦何等をか善、何等をか不善、何等をか應作、何等をか不應作と爲し、何等の業を作してか長夜に一切衆生を饒益し、何等の業を作してか衆生を益せざる、何等の業を作してか明より明に入り、何等の行を爲してか冥より冥に入ると諮問せず、是の如きの人輩、我心の爲に漂沒して、出要の正道を見るを

【智業】對治行を顯す、既に障惑を諦つて増長せしめず、情を制して理に從ひ、法行を敬重するが故に智業といふ。

得る能はず、是を慢業と爲す。慢心を起すが故に。諸佛の得難きの法に値はず、宿世に種ゑし所の善根を消盡し、說くべからざるを而も說きて訶責の心を起し、更に相諍論す、是の如きの法に住すれば、應に邪道に入るべし、但菩提心の力の故に。永く菩薩の所行を捨てず、菩薩の道を捨てずと雖も、而も無量百千萬劫に於ても、尙佛に値ひたてまつらず、何に況んや法を聞くべきをや、是を慢業と爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の慢業と爲す。若し菩薩摩訶薩、此慢業を離るれば、則ち一切諸佛の十種の無上清淨の意業を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の智業有り。何等をか十と爲す。謂ゆる因緣を信解して因果を壞せず、是を智業と爲す。菩提心を捨てずして、常に一切の佛を念ず、是を智業と爲す。一切諸の善知識に親近して恭敬し供養し、心に懈怠無し、是を智業と爲す。法を樂ひ義を樂ひ、多く聞きて厭く無く、專ら正法を求めて、邪念を遠離し正念を修習す、是を智業と爲す。一切衆生に於て我の心を起さず、一切菩薩に於て如來の想を起し、菩薩を愛樂すること猶し己の身の如くし、正法を愛重すること、己の命を惜むが如くし、如來を愛敬すること己の目を護るが如くし、戒を持つ者に於ては諸佛の想を生ず、是を智業と爲す。身口意の諸の不善の業を離れ、清淨の身口意業を修行し、諸の賢聖を歎じ菩提に隨順す、是を智業と爲す。緣起に違はずして諸の邪見を離れ、癡暗を除滅して一切法を照す、是を智業と爲す。十廻向に於て慈母の想を起し、諸の波羅蜜に於て慈父の想を起し、巧方便に於て菩提の想を起す、是を智業と爲す。布施、淨戒、多聞に於て、專ら止觀と功德と

【佛子…攝持等】以下三十は外の加持行を辨ず、前中内行理に乖くに由りて外魔便を得るを攝持といふ、又行理に乖くも亦魔の攝なり。

【若し…攝持】既に魔攝を離れば即ち佛加持して邪を遠ざけ正に入らしめ、理宜しき故にいふなり。

智慧とを求めて、心に疲厭無し、是を智業と爲す。若し業にして諸佛に讃ぜられ、能く衆魔を降し、煩惱、諸纏、障礙を滅除して衆生を教化し、智律儀に順ひて正法を攝取し、佛刹を嚴淨にし、正しく通明に向ふ、是を智業と爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の智業と爲す。若し菩薩摩訶薩、此業に安住せば、則ち一切諸佛の出生する巧妙の方便、無上の智業を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の魔に攝持せらるる有り。何等をか十と爲す。謂ゆる懈怠の心は魔に攝持せらる。佛の正法を捨つれば魔に攝持せらる。貪り求めて厭く無ければ魔に攝持せらる。專ら自度を念へば魔に攝持せらる。大願を發さざれば魔に攝持せらる。煩惱を遠離して常に寂靜を樂はば魔に攝持せらる。生死の漏を斷ぜば魔に攝持せらる。菩薩の行を捨つれば魔に攝持せらる。一切衆生を教化し、成熟する心を捨つれば魔に攝持せらる。正法の中に於て疑惑の心を生じ、佛法を誹謗すれば魔に攝持せらる。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の魔に攝持せらると爲す。應に速かに遠離すべし。

若し菩薩摩訶薩、能く此魔に攝持せらるるを棄捨すれば、則ち一切諸佛の十種の攝持を得ん。何等をか十と爲す。謂ゆる佛の攝持の故に。初めて菩提心を發す。佛の攝持の故に、常に生生に於て、未だ曾て菩提の心を忘失せず。佛の攝持の故に、一切の魔事を覺りて能く悉く遠離す。佛の攝持の故に、六波羅蜜を聞きて說の如く修行す。佛の攝持の故に、生死の苦を知りて而も厭惡せず。佛の攝持の故に、甚深の法を觀じて、解脫の果を得。佛

【法攝持】過を捨して法に從ふが故に攝持と云ふ。

【佛子…兜率天】以下百九十門は果用圓滿行を明す。果多く八相化現に就て佛の妙用を示す。今始めの二十は在天の行を明す。

の攝持の故に、衆生の爲に、聲聞緣覺の解脫を說きて而も彼乘を樂はず。佛の攝持の故に、無爲の法を觀じて、心に樂ひ住せず、有爲の法に於て二相を生ぜず。佛の攝持の故に、不相續をして、寂滅の相續を得しむ。佛の攝持の故に、一切智の自在を得て而も衆生種性の所行を捨てず。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の佛の攝持と爲す。若し菩薩摩訶薩、此持に安住せば、則ち一切諸佛の十力の所持を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の法攝持有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切行、無常なれば法に攝持せらる。一切行、苦なれば法に攝持せらる。一切法、無我なれば法に攝持せらる。寂滅涅槃なれば法に攝持せらる。法は緣より起る。緣無ければ則ち起らざるは、法に攝持せらる。正思惟せざるが故に、無明、行、乃至老死を起し、不正の思惟滅するが故に、則ち無明滅す、無明滅するが故に、乃至老死滅するは、法に攝持せらる。三解脫門は聲聞乘を出生し、決定無諍の法は緣覺乘を出生するは、法に攝持せらる。六波羅蜜、四攝法は大乘を出生するは、法に攝持せらる。一切刹、一切法、一切衆生、一切世間は是れ佛の境界なりと知れば、法に攝持せらる。一切念を斷じ、一切取を捨て、過去未來を離れ、涅槃に隨順すれば法に攝持せらる。佛子、是を菩薩摩訶薩の、十種の法攝持と爲す。若し菩薩摩訶薩、此持に安住せば、則ち一切諸佛の無上の法持を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩、兜率天に住して十種の事業有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は欲界の諸天の爲に、離欲の法を說き、「縱逸自在なるは皆悉く無常なり、一切の快樂

は皆悉く苦惱なり」と、彼の諸の天子を勸發し開導して、菩提心を發さしむ。是を兜率天に住する第一の所行の事業と爲す。菩薩摩訶薩は色界の諸天の爲に、諸禪の解脫三昧の、相續して起るを說き、彼の諸禪の支に味著有る者は、味に因りて身見、邪見、無明、煩惱を起すをもて、爲に實智を說き、一切の妙色に於て顚倒の心を起し、妄想して淨を取るものには爲に、不淨を說き、無常を觀察し、彼の諸天子を勸發し開導して菩提心を發さしむ。是を兜率天に住する第二の所行の事業と爲す。菩薩摩訶薩は、兜率天に住して三昧を正受し、光明莊嚴と名け、自身の中に於て大光明を放ち、普く一切の三千大千世界を照し、其所應に隨ひ、種種の音聲を以て爲に法を說く。彼の諸の衆生說法を聞き已りて、皆大いに歡喜し、恭敬の心を起し、命終の後兜率天に生る。復爲に法を說きて、皆悉く菩提の心を發さしむ。是を兜率天に住する第三の所行の事業と爲す。菩薩摩訶薩は無礙の淨眼を以て、普く十方の一切兜率天の菩薩摩訶薩を觀、彼の諸の菩薩も亦此菩薩摩訶薩を見る。各相見し已りて、彼菩薩の爲に、廣く正法を說く。謂ゆる神を母胎に降して世間に出生し、家を捨てて道を求め、道場に往詣し、大莊嚴を以て自ら莊嚴し、過去の所行を發起し、過去の行を憶ひて、功德を成就し、此座を離れずして、是の如き等の一切の諸事を現ず。是を兜率天に住する第四の所行の事業と爲す。菩薩摩訶薩は兜率天に住して、十方一切の兜率天の菩薩は此菩薩摩訶薩を見て、恭敬し供養し禮拜せんと欲するが故に、皆此に來詣す。爾時、菩薩摩訶薩、彼の諸の菩薩をして皆悉く歡喜し、其願を滿ぜしめんと欲するが故に、

大法門を說き、彼菩薩の所住の地の、所行、所斷、所修、所證に隨ひて、具足して廣く說く。彼諸の菩薩は說法を聞き已りて、皆大いに歡喜し、各本刹の住する所の宮殿に還る。是を兜率天に住する第五の所行の事業と爲す。菩薩摩訶薩は兜率天に住して、正法を講說せんとす。時に欲界の主なる天魔波旬は眷屬に圍遶せられて、菩薩の所に詣り、說法を壞亂す。爾時、菩薩、金剛智の所攝なる般若波羅蜜の巧妙方便深入智門に住して、甘露の法を說き、佛の神力を承けて如來の法を說き、皆悉く彼諸魔の衆を降伏せり。時に彼魔衆、菩薩の是の如きの自在神力を見、又說法を聞きて、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。是を兜率天に住する第六の所行の事業と爲す。菩薩摩訶薩は兜率天に住して、欲界の天子は苦を知らざるが故に、聞法を樂はざるを知る。爾時、菩薩摩訶薩、大音聲を放ちて諸の天子に告げたまはく、「今日菩薩摩訶薩は內眷屬を出す、若し見んと欲する者は、應に速かに此に詣るべし」と。是音を聞き已りて無量億那由他の天子は、悉く彼に往詣せり。爾時、菩薩摩訶薩、普く宮內の一切の眷屬を現じたまふ。彼諸の天子は未だ曾て見聞せざりき。見已りて皆大いに歡喜せり。此菩薩の眷屬は音樂の中より、是の如きの聲を出して、之に告げて言はく、「諸の天子、一切の樂行は皆悉く無常なり、一切の樂行は皆悉く大苦なり、一切諸法は皆悉く無我なり、寂滅涅槃なり」と。又復告げて言はく、「汝等皆應に菩薩行を修し、菩提を究竟じて一切智を具ふべし」と。時に諸の天子、是音を聞き已りて、心大いに恐怖し、一向に正しく無上菩提を求む。是を兜率天に住する第七の所行の事業と爲す。

【佛子…示現事】以下十門は現終行を明す。

菩薩摩訶薩は兜率天に住し、兜率天の所坐の處を捨てずして、悉く能く一切の佛所に往詣し、諸の如來を見、恭敬し禮拜し、供養して法を聽けり。爾時、諸佛、菩薩の爲に、甘露の灌頂受記の法と一切の諸明と菩薩の行地とを說き、菩薩をして一念相應の慧を以て、一切枝、一切種を具足して深く一切智に入らしめんと欲す。是を兜率天に住する第八の所行の事業と爲す。菩薩摩訶薩、兜率天に住し、法界虛空界に等しき供養を以て、一切世界の諸佛を恭敬し供養せり。此供養を見し時、無量無邊の衆生は、菩提心を發せり。是を兜率天に住する第九の所行の事業と爲す。菩薩摩訶薩、兜率天に住して無量無邊の法門を出生し、一切世界の中の種種の色、種種の形、種種の威儀、種種の方便を示現し、其所應に隨ひて爲に法を說けり。一切衆生をして悉く歡喜せしめんと欲するが故に。是を兜率天に住する第十の所行の事業と爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の兜率天に住する十種の所行の事業と爲す。若し菩薩摩訶薩、此業を具足せば、則ち能く人間に下生せん。

佛子、菩薩摩訶薩、兜率天に於て命終の時に臨み、十種の示現事有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩は兜率天に於て、命終の時に臨み、足下の相輪に於て大光明を放ち、安樂莊嚴と名け、普く三千大千世界を照す。一切の諸難惡道の衆生、斯光に觸るる者は一切の苦滅して皆安樂を得。爾時、衆生は皆是念を作さく、「今日忽ちに奇特有り、大人世に出現したまはん」と。是を第一の示現する所の事と爲す。菩薩摩訶薩、兜率天に於て命終の時に臨み、眉間の白毫相の光を放つ、名けて覺悟と曰ひ、普く三千大千世界を照し、彼宿

世の同行の菩薩摩訶薩の身に觸る。觸れ已りて咸是念を作さく、「彼菩薩摩訶薩は、兜率天に於て今將に命終らんとす」と。時に諸の菩薩は、卽ち無量無邊の供養の具を化作し、疾かに彼菩薩摩訶薩の所に往詣せり。是を第二の示現する所の事と爲す。菩薩摩訶薩は命終の時に臨み、右掌の中に於て大光明を出し、淨境界と名け、悉く能く三千大千世界を嚴淨す。此世界の中に、若し無漏の諸の辟支佛有りて、斯光を覺せん者は、卽ち壽命を捨てん。若し覺せざらん者は、光明の力の故に、他方の餘の世界の中に徙し置かん。一切の諸魔及び衆の外道と有見の衆生とは悉く皆他方の世界に徙し置かん。如來の住持する所化の衆生をば除く。是を第三の示現する所の事と爲す。菩薩摩訶薩は其兩膝より大光明を放つ、名けて離垢淸淨莊嚴と曰ひ、普く最下の諸天の宮殿を照し、上は淨居の諸天の宮殿に至り明了ならざる無し。時に諸の天子は、咸是念を作さく、「今此菩薩摩訶薩は、兜率天に於て將に壽命を捨てんとす」と。時に諸の天子は、疾かに供具、香華、瓔珞、塗香、末香、衣蓋、幢幡及び諸の音樂を辦じて、菩薩の所に詣り、恭敬し供養し、「我等は咸く皆隨侍し守護して、此命終より乃し大般涅槃を示現するに至らん」と。是を第四の示現する所の事と爲す。菩薩摩訶薩は兜率天に於て命終の時に臨み、其心中より大光明を放つ、名けて金剛淨妙莊嚴と曰ひ、普く一切世界の金剛力士を照す。爾時、百億の金剛力士は、咸是念を作さく、「此は是れ菩薩摩訶薩、兜率天に於て將に命終らんと欲するが故に、此相を以て我等に示現す、我等は咸當に隨侍し守護して、乃し大般涅槃を示現するに至る

べし」と。是を第五の示現する所の事と爲す。菩薩摩訶薩は兜率天に於て命終の時に臨み、一切毛孔より大光明を放つ、名けて分別一切衆生と曰ひ、普く三千大千世界を照し、遍く一切諸の菩薩の身に觸る。觸れ已りて復一切の諸天、世人に觸る。時に諸の菩薩は咸是念を作さく、「我等は當に彼に往詣して、如來を恭敬し供養し、並に復彼諸の衆生を敎化すべし」と。是を第六の示現する所の事と爲す。菩薩摩訶薩は兜率天に於て、命終の時に臨み、摩尼寶藏の正法堂の中に於て大光明を放ち、善調伏と名け、彼菩薩の降神する所の處に隨いて、普く王宮を照せり。彼諸の菩薩は、各是念を作さく、「此菩薩の所生の處に隨はん、若は其家に於て、若は聚落に於て、若は城邑に於て、若は閻浮提の內の受生の處に、我當に彼に生るべし。諸の衆生を敎化せんと欲するが爲の故に」と。是を第七の示現する所の事と爲す。菩薩摩訶薩は、兜率天に於て命終の時に臨み、天の樓閣の中より大光明を放ち、淨莊嚴一切宮殿と名く。斯光明を放ちて所生の母を照す。照し已りて彼菩薩の母は安隱快樂となり、一切の功德を具足し成就し、其母の身內には自然の樓閣七寶もて莊嚴せり。菩薩の身を安處せんと欲するが爲の故に。是を第八の示現する所の事と爲す。菩薩摩訶薩は兜率天に於て命終の時に臨み、足下より光明を放ち、名けて安住と曰ふ。若し諸の天子及び諸の梵天にして其命將に終らんとするも、斯光を蒙るが故に、皆住壽するを得て、菩薩を供養し、此命終より乃し大般涅槃を示現するに至る。是を第九の示現する所の事と爲す。菩薩摩訶薩は、兜率天に於て其小相より大光明を放ち、嚴淨

【神を母胎に降す】以下二十入胎住胎行を明す、今は入胎を明す。

日眼と名け、菩薩の種種の諸業を示現す。時に人天行りて、或は菩薩、兜率天に在るを見、或は命終を見、或は處胎を見、或は出生を見、或は家を捨つるを見、或は成佛を見、或は轉法輪を見、或は如來の大般涅槃を見る。是を第十の示現する所の事と爲す。佛子、菩薩摩訶薩は、或は坐する處に於て、或は樓閣に於て、或は宮殿に於て、是の如き等の百萬阿僧祇の光を放つ。斯光を放つ時に、無量の諸の菩薩の業を顯現す。佛子、菩薩摩訶薩は是の如き等の一切淨業を具足するが故に、兜率天より世間に下生す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の事有るが故に、神を母胎に降す。何等をか十と爲す。謂ゆる小心の衆生を教化し成熟せんが爲の故に、處胎を示現し、小心の衆生をして是の如きの念を作さしめず、「菩薩は自然に化生して、善根智慧は行に從つて得ず」と。是を第一の事にして處胎を示現すと爲す。又復父母諸親をして、宿世に同じく行ひたる善根を長養せしめんと欲するが故に。是を第二の事にして處胎を示現すと爲す。菩薩摩訶薩は、初め受胎の時に、愚癡を遠離して、正念に思惟し、亂想を除滅して念慧を成就し、心未だ曾て亂れず。是を第三の事にして處胎を示現すと爲す。菩薩摩訶薩は母胎に處する時、常に法を講説し、十方世界の諸の菩薩衆、釋梵、四天王來りて菩薩に詣る。菩薩即時に廣く爲に法を説き、菩薩の自在神力を示現す。菩薩摩訶薩は無量無邊の諸の智慧を具足し成就するが故に、是の如き等の奇特の事を現ず。是を第四の事にして處胎を示現すと爲す。菩薩摩訶薩は、母胎の中に於て衆生を化せんが爲の故に、彼衆生の本願を滿せしめんが故に、是

【微細趣】以下十は住胎を明す。今いふ所は、胎中の廣攝を明し、幽微にして知り難きを微細と名く。

を第五の事にして處胎を示現すと爲す。菩薩摩訶薩は人中に於て成道し、應に人の法を具へて受生すべきが故に、是を第六の事にして處胎を示現すと爲す。菩薩摩訶薩は母胎の中に於て、三千大千世界の衆生、普く菩薩の母胎に處するを見るに、明鏡の中に其面像を見るが如し。爾時、大心の諸天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等は、悉く菩薩に詣でて恭敬し供養す。是は第七の事にして處胎を示現すと爲す。菩薩摩訶薩は母胎に處する時、餘方の世界の一生補處にして、母胎に在る者は、悉く共に菩薩の無盡智慧の藏を講說す。是を第八の事にして處胎を示現すと爲す。菩薩摩訶薩は初め受胎の時、離垢三昧を正受し、一切の兜率天宮の一切の供養莊嚴の具は、悉く母胎に入る。三昧力の故に、其母身をして諸の苦患無からしむ。是を第九の事にして處胎を示現すと爲す。佛子、菩薩摩訶薩は母胎に處する時、無量無邊の功德藏を具足し成就するが故に、十方世界の一切の供具は、悉く以て一切の如來を供養す。彼諸の如來は此菩薩の爲に、無量無邊の法界の法門を演說したまふ。是を第十の事にして處胎を示現すと爲す。佛子、若し菩薩摩訶薩、此法門に住せば、則ち能く菩薩の十種の微細趣を示現せん。

何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は母胎に處する時に、初發菩提の心より、乃し甘露の灌頂授記の地に至るまでを示現す。母胎の中に在りて又復兜率陀天に處するを現ず。母胎の中に在りて出生を示現す。母胎の中に在りて童子地を示現す。母胎の中に在りて宮殿の色味の間に在るを現ず。母胎の中に在りて出家を示現す。母胎の中に在りて現に苦

行を行じ、道場に往詣し、等正覺を成ずるを現ず。母胎の中に在りて轉法輪を現ず。母胎の中に在りて大般涅槃を示現す。母胎の中に在りて微細の諸法と一切の菩薩行と一切如來の自在神力と無量の行門とを示現す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の微細趣と爲す。若し菩薩摩訶薩、此趣に安住せば、則ち一切諸佛、無上の智慧の大微細趣を得ん。』

大方廣佛華嚴經　卷第四十三

東晉天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

離世間品第三十三之八

「佛子、菩薩摩訶薩に十種の生有り。何等をか十と爲す。謂ゆる愚癡を離れたる生、大光明網を放ちて、普く三千大千世界を照す生、一切の未來世の最後身を除滅する生、不生の生、三界の諸劫は悉く幻の如しと知る生、十方世界に於て、普く身を現ずる生、一切智身を具足する生、一切如來の光明を放ちて普く照し、一切衆生を覺悟する生、大智自在にして、諸禪三昧の身を正受する生なり。佛子、菩薩の生るる時、一切佛刹は六種に震動し、一切衆生は皆解脱を得、一切惡道は皆悉く除滅し、一切諸魔の光明を映蔽して悉く聚墨の如くして、無量の菩薩は普く來りて雲のごとく集まる。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の生と爲す。衆生の類を化度せんと欲するが爲の故に、是生を示現す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の大莊嚴有りて自ら莊嚴す。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は、是の如きの念を作さく、「一切世間は、五欲の泥に沒す、我一人を除きては彼を濟ふもの無し」と。是の如く知るが故に、大莊嚴を發して自ら莊嚴す。煩惱愚癡は衆生の眼

【佛子…生】次に出胎行を明す。

【佛子…大莊嚴】以下四十は在家の行を明す。中初十は初生未行の前を明す大誓自ら嚴の故なり。

【七步】創起遊行にして自在の貌を顯す。

を覆ひて、皆悉く盲瞽なり、我、今、智慧自在なれば、當に普く衆生の慧眼を開導し、悉く清淨ならしむべし」と、大莊嚴を發して自ら莊嚴す。「我今此假名の身に因るが故に、如來の無上清淨の法身を得て、三世に充滿せん」と、大莊嚴を發して自ら莊嚴す。菩薩摩訶薩は無礙の淨眼を以て、悉く遍く十方一切の諸の梵天の處、乃至大自在天の處を觀察するに、是等の衆生は皆自ら謂へらく「我自在の智慧の力を成就せり」と。菩薩は悉く能く彼我慢の心を摧滅せんとして、大莊嚴を發して自ら莊嚴す。菩薩摩訶薩は、諸の衆生過去世に於て諸の善根を種ゑ、今退沒せんと欲するを見て、我今還つて彼諸の衆生をして、不退地に住せしめん」と、大莊嚴を發して自ら莊嚴す。衆生をして、少善根を種ゑて、無量果を得しめんと欲して、大莊嚴を發して自ら莊嚴す。佛の無量の自在神力を見て、大莊嚴を發して自ら莊嚴す。過去の同行の菩薩は、餘事に染著して、正覺を成ぜざるを觀見して、大莊嚴を發して自ら莊嚴す。菩薩摩訶薩は、諸の天人の疲頓し厭倦して正希望を退くを見て、大莊嚴を發して自ら莊嚴す。菩薩摩訶薩は、一切如來の光明に觸るるが爲の故に、一切の大正希望を長養し、大莊嚴を發して自ら莊嚴す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の大莊嚴と爲す。衆生を教化せんが爲の故に、此莊嚴を發して自ら莊嚴するなり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の事有るが故に、七步を遊行す。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩の力を現ずるが故に七步を遊行し、七寶を現ずるが故に七步を遊行し、地神の願を滿ぜ

【童子地を現ず】幼稚無染なるに學して攝生を現ずるが故なり。

んが故に七歩を遊行し、三界を超出する相を現ぜんが故に七歩を遊行し、大象王、牛王、師子王の最勝の行を現ぜんが故に七歩を遊行し、金剛地の相を現ぜんが故に七歩を遊行し、衆生に力を與へんと欲するが故に七歩を遊行し、七覺の寶相を現ぜんが故に七歩を遊行し、一切の佛法を具足し成就して、他に由りて悟らざるが故に七歩を遊行し、自ら我は世に於て最勝にして倫匹無しと稱せんと欲するが故に七歩を遊行す。佛子、是を菩薩摩訶薩、十種の事の故に七歩を遊行すと爲す。衆生を教化せんが故に是示現を作すなり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の事有るが故に、童子地を現ず。何等をか十と爲す。謂ゆる書數、算計、刻印は方便して此業を現ぜんが故に、童子地を現ず。乘象、馬車乘、弓射、諸の武藝を現ぜんが故に、童子地を現ず。一切世間の巧妙の談論、諸の嬉戲を學ばんと欲するが故に、童子地を現ず。身口意の一切の惡業を離れんが故に、童子地を現ず。正しく般涅槃に向ひ、三昧を正受して、一切諸の世界に充滿せんことを現ぜんが故に、童子地を現ず。菩薩の力は、天、人、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、釋梵、四天王に過ぎたることを現ぜんが故に、童子地を現ず。殊妙の色は、一切の釋梵、四天王に出過するを現ぜんが故に、童子地を現ず。衆生をして五欲を遠離し、常に正法を樂はしめんと欲するが故に、童子地を現ず。正法を尊重し、一切世界の諸の如來を供養するを現ぜんが爲の故に、童子地を現ず。常に正法を樂ひて、普く一切に現じ正法を受持せんが故に、童子地を現ず。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の事の故に、童子地を現ずと爲す。

【中宮に處す】彩女圍遶せるも行無染なるを顯す。

【佛子……出家を示現す】以下六十は捨家斯道の行を明す。

佛子、菩薩摩訶薩、童子地を現じ已りて、十種の事有るが故に、中宮に處するを現ず。何等をか十と爲す。謂ゆる同じく修行する者をして、善根を増長せしめんが故に、中宮に處するを現ず。菩薩の諸の善根を明かにせんと欲するが故に、中宮に處するを現ず。著樂する天人の爲の故に、中宮に處するを現ず。五濁の世に於て、應に隨ひて化せんが故に、中宮に處するを現ず。深宮の內に於て三昧を正受し、菩薩の功德力を明さんと欲するが故に、中宮に處するを現ず。宿世の同行の衆生をして、本願を滿ぜしめんと欲するが故に、中宮に處するを現ず。父母親屬をして、本願を滿ぜしめんと欲するが故に、中宮に處するを現ず。妓樂を以て妙法の音を出し、一切の佛を供養せんと欲するが故に、中宮に處するを現ず。菩薩摩訶薩は其宮內に於て、甚深の三昧に入り、等正覺を成じ、乃至大般涅槃を示現せんが故に、中宮に處するを現ず。隨順して法を守護せんが故に、中宮に處するを現ず。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の事の故に中宮に處するを現ずと爲す。此事を以ての故に、最後生の菩薩は出家を示現す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の事有るが故に出家を示現す。何等をか十と爲す。謂ゆる衆生をして家を厭離せしめんと欲するが故に出家を示現す。家に著する衆生の爲の故に出家を示現す。諸の賢聖の道に隨順するを現ぜんと欲するが故に出家を示現す。出家の法を宣揚し讚歎せんと欲するが故に出家を示現す。衆生をして二見を離れしめんと欲するが故に出家を示現す。衆生をして欲樂我樂を離れしめんと欲するが故に出家を示現す。三界を出

【苦行を示現す】異道に同するを示し、諸邪見を摧くを明す。

【道場に往詣す】邪を捨て正に趣くを明す。

づる相を現ぜんと欲するが故に出家を示現す。自在にして他に由りて悟らざるを顯さんと欲するが故に出家を示現す。如來の十力、四無畏に隨順せんと欲するが故に、出家を示現す。一切の最後生の菩薩は、法應に爾るべきが故に、出家を示現す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の事の故に、出家を示現すと爲す。衆生を化せんが爲の故に。

佛子、菩薩摩訶薩は十種の事の爲の故に、苦行を示現す。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は、小心の衆生を敎化し成熟せんと欲するが故に、苦行を示現す。邪見に著する衆生を拔かんが爲の故に、苦行を示現す。業報を無する邪見の衆生の爲に、業報を知らしめんと欲するが故に、苦行を示現す。五濁の世界の衆生に隨順せんが爲の故に、苦行を示現す。懈怠の衆生の爲の故に、苦行を示現す。衆生をして法を樂ひ求めしめんと欲するが故に、苦行を示現す。欲樂我樂に著する衆生の爲の故に、苦行を示現す。菩薩の殊勝の行を顯さんが爲の故に、苦行を示現す。未來の衆生をして精進を發さしめんと欲するが故に、苦行を示現す。諸天世人の諸根未だ熟せざるは、時を待ちて熟せしめんが故に、苦行を示現す。佛子、是を菩薩摩訶薩、十種の事の爲の故に、苦行を示現すと爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の事有るが故に道場に往詣す。何等をか十と爲す。謂ゆる普く一切世界を照さんと欲するが故に道場に往詣す。一切世界を震動せんが爲の故に道場に往詣す。一切世界に於て普く身を現ぜんと欲するが故に道場に往詣す。一切菩薩、一切の衆生、一切同行を覺悟せんが爲の故に道場に往詣す。道場莊嚴の事を示現せんが爲の故に

【道場に坐す】此に處して道を受くるが故なり。

【奇特未曾有法】大果に臨まんとして奇相先づ現はるるが故に名く。

道場に往詣す。應に化を受くべきに隨ひて莊嚴せる菩提樹を示現せんが爲の故に道場に往詣す。十方世界の一切の佛を對見せんと欲するが故に道場に往詣す。擧足下足に於て、念念に悉く無量の正受、諸の三昧門に入り、等正覺を成ぜんと欲するが故に道場に往詣す。一切の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、乃至釋梵、四天王等の恭敬供養を受け、各相知らざらしめんが故に、道場に往詣す。無礙の智眼もて、普く一切世界を觀じ、一切の佛を正念し、一切刹に於て成佛を現ぜんと欲するが故に、道場に往詣す。佛子、是を菩薩摩訶薩、十種の事の故に、道場に往詣すと爲す。衆生を教化せんが爲の故に。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の事有るが故に、道場に坐す。何等をか十と爲す。謂ゆる種種に一切刹を震動せんが故に道場に坐す。普く一切諸の世界を照さんが故に道場に坐す。一切諸の惡道を除滅せんが故に道場に坐す。一切刹を變じて金剛と爲さんが故に道場に坐す。一切の佛の師子吼するを觀んが故に道場に坐す。一切の虛妄の心を離れ、淨きこと虛空の如くならんが故に道場に坐す。淨身の威儀を示現し隨順せんが故に道場に坐す。圓滿の金剛三昧に隨順せんが故に道場に坐す。一切の佛の淸淨の坐處を受けんが故に道場に坐す。自の善根力もて、悉く能く一切衆生を受持せんが故に道場に坐す。佛子、是を菩薩摩訶薩、十種の事の故に、道場に坐すと爲す。

佛子、菩薩摩訶薩、道場に坐する時、十種の奇特未曾有の法有り。何等をか十と爲す。

謂ゆる菩薩摩訶薩は道場に坐する時、十方世界の一切諸佛は、此菩薩を觀て咸右の手を擧
げて讃じて言はく「善い哉善い哉、無上の導師」と、是れ一の奇特未曾有の法なり。菩薩
摩訶薩、道場に坐する時、一切の如來應供等正覺は、皆悉く護持したまふ、是れ二の奇
特未曾有の法なり。菩薩摩訶薩道場に坐する時、宿世の同行の菩薩は、悉く來りて雲の
ごとく集り、種種莊嚴の具を以て恭敬し供養す、是れ三の奇特未曾有の法なり。菩薩摩訶
薩、道場に坐する時、十方一切の世界の草木叢林のごとき非衆生の類も、皆悉く身を曲
めて道場に歸向せり、是れ四の奇特未曾有の法なり。菩薩摩訶薩、道場に坐する時、三昧
を正受するを、善知法界と名く、此三昧を得るが故に、菩薩の一切の諸行を究竟す、是れ
五の奇特未曾有の法なり。菩薩摩訶薩、道場に坐する時、陀羅尼を得、名けて離垢勝妙海
藏と曰ふ、菩薩摩訶薩は、此陀羅尼に住するが故に、一切の諸佛は甘露の法を降らして、
此菩薩に雨ぐ、是れ六の奇特未曾有の法なり。菩薩摩訶薩、道場に坐する時、神通力を以
て一切の諸佛を恭敬し供養す、是れ七の奇特未曾有の法なり。菩薩摩訶薩、道場に坐する
時、無上智慧の法門に入り、善巧の方便をもて、悉く一切衆生の諸根を知る、是れ八の
奇特未曾有の法なり。菩薩摩訶薩、道場に坐する時、三昧を正受す、名けて善覺と曰ふ、
菩薩摩訶薩、此定に入り已りて、淨法身を得、虛空界の一切の三世に滿つ、是れ九の奇特
未曾有の法なり。菩薩摩訶薩、道場に坐する時、清淨の身業は三世の無礙の智慧を攝取
して、普く一切を照す、是れ十の奇特未曾有の法なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の道場に坐

【降魔】彼魔怨に對して勝幢の獨絕なるを顯すが故なり。

【覺如來力】以下四十門は成佛攝化の行を明す。佛前の降魔は無間道斷障に當り、今は解脫道證果に當る。

する時、十種の奇特未曾有の法を得と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩、道場に坐する時、十種の義有るが故に降魔を示現す。何等をか十と爲す。謂ゆる五濁惡世の衆生は、相征伐せんと樂ふ、菩薩の功德力を顯さんと欲するが故に、降魔を示現す。悉く天人の諸の疑惑を滅せんが故に、降魔を示現す。魔の眷屬を化度せんと欲するが爲の故に、降魔を示現す。諸天世人の征伐を樂ふ者は集めて化を受けしめんが故に、降魔を示現す。天人を集め已りて、菩薩の功德力の破壞すべからざるを顯現して衆生を調伏せんが故に、降魔を示現す。一切衆生の力を發起せんが故に、降魔を示現す。未來の一切衆生を哀愍するが故に、降魔を示現す。乃至道場に魔事有るを現じて、悉く能く衆魔の境を超出せんが故に、降魔を示現す。煩惱の力は勢羸劣にして、大悲善根の勢の强盛なるを顯現せんが故に、降魔を示現す。五濁世の諸の衆生に順ふが故に、降魔を示現す。

佛子、是を菩薩摩訶薩、十種の義の故に道場に坐する時、降魔を示現すと爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の覺如來力有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆魔の事業を超出して煩惱を除滅し、一切菩薩の所行を究竟する覺如來力。一切菩薩の三昧に於て自在を得る覺如來力。一切菩薩の諸禪三昧を具足し成就する覺如來力。一切諸の白淨法を滿足する覺如來力。善法を分別し世間の法を調伏する覺如來力。淨法身を以て一切刹に滿つる覺如來力。出す所の淨音を悉く一切衆生の心と等しうする覺如來力。悉く能く一切の佛法を受持する覺如來力。三世の如來の身口意と等しきを得て、一念の中に於て三世

【轉法輪】大覺既に圓じ機熟し時至り、理宜しく甘露門を開いて授くるに正法を以てすべし。初十は所轉法輪を明す。

【白淨法】能轉の因は是れ常無漏清淨法界を顯すが故に白淨といふ。此に由つて轉じて衆生心中に入り、聞熏種子を成ずるなり。

【出生無相】此種子に依りて無相の聖智を出生するなり。

の法を知る覺如來力。善覺三昧を得て、佛の十力、謂ゆる是處非處の智、乃至、漏盡智を具ふる覺如來力、佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の覺如來力と爲す。菩薩摩訶薩は此力を具ふるが故に、如來と名くるを得。

佛子、是の如くして如來應供等正覺を成ずるを得已りて、能く十行の清淨法輪を轉ず。何等をか十と爲す。一には清淨の四無所畏を具足す。二には四辯の淨妙の音聲を出生す。三には明かに四諦を了る。四には諸佛の無礙の法門に隨順す。五には清淨の等心もて、悉く能く普く一切衆生を覆ふ。六には説く所虛しからず、決定して衆生の苦際を濟度す。七には宿世の大悲に持せらる。八には妙法の音を以て世界に充滿し、一切衆生開知せざる無し。九には阿僧祇劫に常に正法を説きて、未だ曾て暫くも息まず。十には諸の根力、覺意、解脫、諸禪三昧を轉じて、相續して絕えず。佛子、如來應供等正覺は是の如き十行等の無量行の法輪を轉じたまふ。

佛子、如來應供等正覺の清淨法輪は、十種の白淨法に因るが故に、轉じて衆生の心に入り、無相を出生して決定して虛しからず。何等をか十と爲す。謂ゆる過去の願力の故に。大悲の所持の故に。衆生を捨てざるが故に。智慧自在にして其所應に隨ひて爲に法を説くが故に。未だ曾て時を失はざるが故に。彼法器に隨ひて增減せざるが故に。決定して三世の智を了知するが故に。身行最勝なるが故に。口行に虛無きが故に。智行は音聲に隨ひて悉く覺悟するが故に。佛子、是を十種の白淨法に因るが故に、能く法輪を轉

【決定不虚】更に異因なきなり。
【大般涅槃を示現】化緣既に畢り用を息めて眞に歸するが故に名く。
【佛子…大妙法門】上來本會の正說二千の行位、六位の差別を辨じ竟り、以下第六大段結して修學を勸むるを明す。

じて衆生の心に入り、無相を出生して決定して虚しからずと爲す。

佛子、如來應供等正覺は、佛事を究竟じ已りて、十種の義有りて大般涅槃を示現す。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の行は悉く無常なるを明さんが故に。一切の有爲は安隱に非ざるを明さんが故に。般涅槃は最安隱に趣くを明さんが故に。般涅槃は一切諸の怖畏を遠離するを明さんが故に。諸の天人は色身に樂著するを以て、色身は無常なり、是れ磨滅の法なりと明して、常住の淨法身を求めしめんが故に。無常の力強くして轉ずべからざるを明さんが故に。有爲の法は愛に隨はず、行自在ならざるを明さんが故に。三界の法は悉く杯器の如く、堅牢無きを明さんが故に。般涅槃は最も眞實にして、壞すべからざることを明さんが爲の故に。般涅槃は生死を遠離して、起滅に非ざるを明さんが故に。佛子、此十種の義を以ての故に、如來應供等正覺は、大般涅槃を示現したまふ。佛子、一切の如來應供等正覺の法は、皆是の如く所願已に成じ、已に法輪を轉じて應に度すべき所の者は、皆悉く已に度し、已に菩薩の與に尊き記號を授け、一切の佛事は皆悉く究竟し、不變に安住して、大般涅槃を示現したまふ。佛子、是を如來應供等正覺、十義を以ての故に大般涅槃を示現したまふと爲す。

佛子、是を菩薩摩訶薩の清淨勝行の大妙法門と爲す。諸佛の說きたまふ所の無量の深義は能く一切諸の智有る者をして、皆悉く歡喜せしめ、一切菩薩の大願を究竟し、所行を斷ぜざらしむ。佛子、若し衆生有りて、此經を聞かん者は、信心清淨にして誹謗

【功德…義華】是功德の妙行は開ずることの花の如く、以て嚴飾を成ずることゝ上の功德花聚十行の如きに相似せり、花嚴の名此に依りて立つなり。

【此一切の菩薩等】以下は第七大段に表瑞と證成を明す。

を起さず、說の如く修行せば彼諸の衆生は、速かに阿耨多羅三藐三菩提を成せん。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は說の如く行ずるが故に。佛子、是故に菩薩摩訶薩は應に說の如く行じ、一心に敬信して此經を受持すべし。佛子、此經は一切菩薩の諸行の功德、深妙の義華を出生して深く智慧に入り、一切の法門を攝して、世間、聲聞、緣覺を遠離し、一切衆生の共にせざる所の法にして、悉く能く普く一切の法門を照し、善根を長養して衆生を度脫す。是故に、菩薩摩訶薩は、應に一心に攝受して、此經を護持すべし。若し菩薩摩訶薩、此經を受持せば、卽ち能く一切の義華を出生し、少しの方便を以て、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

此『一切の菩薩の諸行の功德、深妙の義華を出生して、深く智慧に入り、一切の法門を攝して、世間、聲聞、緣覺を遠離し、一切衆生の共にせざる所の法にして、悉く能く普く一切の法門を照し、善根を長養して衆生を度脫する』經を說く時に、佛の神力の故に、此經は法是の如くなるが故に、十方無量の阿僧祇の世界は六種に震動し、大光普く照せり。爾時、十方の諸佛、面對して普賢菩薩を稱讚し、歡喜して讚じて言はく、善い哉、佛子、乃ち能く此『一切菩薩の諸行の功德、深妙の義華を出生して、深く智慧に入り、一切の法門を攝して、世間、聲聞、緣覺を遠離し、一切衆生の共にせざる所の法にして、悉く能く普く一切の法門を照し、善根を長養して衆生を度脫する』經を說けり。佛子、汝已に善く此法を學び、善く此法を知り、快く此法を說きぬ。我等諸佛も亦此法を說く。一切諸佛

【爾時普賢等】以下第八大段偈頌分を明す。二百三十一頌あり、四分して初十六頌は德廣くして說き難きを顯す。

も亦復是の如し。是故に佛子、我等は悉く共に此經を守護して、未來の菩薩の未だ聞かざる者をして聞かしめん。」

爾時、普賢菩薩、佛の神力を承けて、十方一切の大衆と、一切法界とを觀察し、偈を以て頌して曰はく、

無量無數劫に、諸の苦行を勤修して
無量の佛を供養したてまつりて、此眞の佛子を生ず
無量の衆を化度して、無上の道に安立する
菩薩の無等の行を、我說かん善く諦かに聽け
無量の佛を供養するも、皆悉く染著無く
一切の衆を化度するも、衆生の想を起さず
常に佛の功德を求めて、其心に所依無し
彼勝妙の行を說きて、衆をして悉く歡喜せしめん
一切の魔を降伏し、三界の煩惱を滅して
已に聖の功德を具へ、童子地を示現す
惡煩惱癡を滅し、其心常に寂然として
無量の行を示現す、我彼功德を說かん
一切の惡を遠離して、究竟じて彼岸に到り

無量の衆生の中に、種種に變化を現ず
心の生住滅を知りて、一切の事を示現す
彼妙功德を說き、衆をして悉く歡喜せしめん
三有の衆生を見るに、無量の苦に逼迫せられ
生死に流轉し、煩惱の火熾んに燃ゆ
彼をして解脫し、一向に菩提を求めしめんと欲し
略して彼功德を說かん、一心に善く諦かに聽け
施、戒、忍、精進、禪定自在を得
慧の方便を具足し、大慈もて衆生を度す
無量無數劫に、悲喜捨を樂修す
我彼功德を說かん、仁等當に諦に聽くべし
枯槁せる無量の身は、常に正しく菩提を求め
其壽命を惜まず、無上の道を究竟す
常に衆生を利せんが爲に、自の安樂を求めず
慈悲心の牟尼、我彼勝行を說かん
無量無數劫に、少分を說くとも盡きざらん
虛空は度量すべく、海水は滴數ふべくとも

【衆生の善根を持し等】次の百三十三偈半は略して三行德の差別の相を明す。中に於て初六十七頌は事に託して法を表し、以て行相の殊勝なるを顯し、後六十六頌半は行用の廣大なるを顯す、前の中に十五種の行相あり°中に初八頌は法樹鳥獸の行を明す°

菩薩の功德の海は、譬喩を爲すべき無し
衆生を饒益せんが故に、略して其少分を說かん
衆生の善根を持して、白淨の法を長養し
憍慢の心を遠離し、法を求めて厭足無し
衆をして安止を得しめんとて、智慧の樹を長養す
菩薩の心は地の如く、一切衆を饒益す
柔軟の慈心の根、無上の大悲の莖
功德の葉、智の華、持戒を妙香と爲す
如來の淨き慧光は、菩薩の華を開敷し
有爲の水に著せず、普く衆生を喜ばしむ
直心を種子と爲し、慈悲を根芽と爲し
智慧方便を莖とし、五度を枝條と爲し
禪を葉とし諸明を華とし、一切の智を果と爲し
法の樹、神力の鳥は、普く三世間を覆ふ
眞實諦を足と爲し、白淨の法を身と爲し
正念を頸頂と爲し、智の首、解脫の頂
慈悲を明淨眼として、實義の幽谷を出づる

【生死を曠野と爲し】以下四頌は道迷治惑の行を說く

【菩薩は法王と爲りて】以下四頌は法輪王の行を明す

菩薩法師子は、一切の魔を調伏す
生死を曠野と爲し、煩惱は諸の惡道にして
邊見を賊難と爲し、癡盲正路に迷ふ
菩薩大導師は、彼迷眞の者を見て
其正道を開示し、引いて安隱の處に至る
貪恚諸の煩惱は、常に衆生を惱害し
無量の衆苦に患ひ、長夜に而も逼切す
菩薩は彼苦を見て、爲に大悲の心を發し
具に八萬門を說き、對治して之を濟度す
菩薩は法王と爲りて、正道もて衆生を化し
惡を遠ざけ衆善を修し、一向に菩提に求めしむ
一切諸佛の所にて、自在智の記を受け
廣く賢聖に珍を施し、七覺の寶を具へしむ
淸淨の戒を轂と爲し、精進を以て輻と爲し
三昧正受の輞、三たび淨法輪を轉じ
淸淨の心を盾と爲し、明利なる智慧の劍もて
諸の煩惱と、外道と衆の魔怨とを摧滅す

【甚深の智慧の海に】以下四頌は大海須彌の行を明す

【深心は金剛の如く】以下四頌は金剛法雨の行を明す

【白淨の法を城と爲し】次の四頌半は法城金翅の行を明す。

甚深の智慧の海に、正法の一味水あり
禪覺の寶充滿するも、一切能く知る莫し
直心淨くして彌廣く、一切智を潮と爲せる
菩薩の智慧の海は、演說すとも盡すべからず
世間に高くして無上なる、彼に於て所著無く
禪明智慧の山は、堅正にして傾動せず
若し親近する者有らば、疾かに彼慧に同ずるを得
智の須彌頂に住して、普く一切世を觀ん
深心は金剛の如く、一切悉く堅固にして
三寶と一切智とに、信心壞すべからず
一切の魔を降伏し、諸の煩惱を除滅して
無所畏に安住して、諸の群生を度脫す
大慈の雲を興起して、普く一切を覆ひ
大悲の電を明曜して、雷のごとく法洪の音を震ひ
四辯は法雨を澍ぎ、八正の甘露水は
煩惱の火を除滅して、一切の義に安住す
白淨の法を城と爲し、智慧を牆壁と爲し

【淨戒圓滿の日は】以下三頌は日月照臨の行を明す。

【自在なる諸の法王は】以下四頌は法王梵王の行を明す。

無上智の樓閣あり、慚愧を深塹と爲す
三空解脱の門あり、正念を防守と爲し
四道を正路と爲し、之に遊びて三界を出で
無上法の幢を建てて、一切の魔を摧滅す
法身の金翅鳥は、四如意を足と爲し
慈悲の明淨眼ありて、一切智の樹に住す
菩薩の金翅王は、生死大海の中に
天人の龍を搏撮して、涅槃の岸に安置す
淨戒圓滿の日は、清淨智の光明あり
神足を疾行と爲し、愛欲の水を消竭し
長夜の衆生を覺し、根力の藥を長養す
菩薩の明淨の日は、一切照さざる無し
圓滿なる法界の月は、衆生觀れども厭く無く
二乘の、小智なる螢火の光を映徹す
菩薩清涼の月は、畢竟空に遊び
光を垂れて三界を照し、心法現ぜざる無し
自在なる諸の法王は、功德の色もて身を嚴り

【一切行を遠離し】以下四頌は離過成德の行。

【無量の方便地に】以下四頌は四大珠寶の行。

方便淨智の眼有りて、勝妙の法に安住す
相好莊嚴の身は、一切觀れども厭く無く
彼法自在の王は、法の如く衆生を治め
欲煩惱を除滅して、三界を超出せしめ
常に樂ひ勤めて、慈悲喜捨の法を修習す
菩薩の大梵王は、普く種種の身を現じて
淨妙の音を演出し、三界に聞かざる無し
一切行を遠離して、境界常に淸淨に
不退の智を逮得して、法の自在を具足す
永く二乘の道を離れて、諸佛に授記せられ
無上の乘に乘じて、一切智を究竟す
心淨きこと虛空の如く、永く一切の有を離れ
世間の事を行じて、其心に所依無し
白淨の法を究竟し、亦衆生をして然らしめ
菩薩の慧は彌廣くして、淸淨なること虛空の如し
無量の方便地に、諸の群生を饒益し
淸涼の慈悲の水もて熾なる煩惱を消滅す
一

【菩薩の功德の華は】華香幢蓋の行

【菩薩は無上の乘】以下四頌は龍象希燈の行。

智慧の猛盛なる火は、煩惱習を燒き盡し
風馳して十方に遊び、廣く諸の佛事を作す
菩薩の如意寶は、衆の貧苦を除滅し
智慧は金剛の如く、諸の邪見を摧滅す
無量の德もて莊嚴し、悉く衆生をして喜ばしめ
無上の行を究竟じて、如來の處に安住す
菩薩の功德の華は、七覺に開敷せしめ
諸願を寶鬘と爲し、世間の頂を嚴飾す
菩薩の淨戒の香は、諸の惡戒を遠離す
此淨戒の香を以て、塗りて一切の衆に熏ず
菩薩の無上の蓋は、普く諸の世間を覆ひ
智慧の幢を建立して、衆魔の幢を摧滅す
菩薩の莊嚴の行、淨妙智慧の幡
慚愧功德の衣は、普く一切の衆を覆ふ
菩薩は無上の乘なり、之に乘じて三界を出づ
其心善く調順して、安住すること寶象王のごとし
菩薩は大龍王なり、自在力を具足して

【菩薩は功德の河】以下四頌は河船園藥の行。

【菩薩は如來に等し】次の六頌は等同佛果の行。

普く甘露の法を降らし、諸の群生を澤潤す
菩薩は甚だ値ひ難きこと、猶し優曇華のごとく
一切の魔を降伏し、諸の煩惱を除滅す
佛の轉じたまふ所の法輪は、彼能く隨順して轉じ
慧の燈は衆の暗を除き、普く正道を見しむ
菩薩は功德の河なり、正道の流に隨順して
常に生死の橋と爲り、人を度して休息無し
菩薩は正法の船なり、汎べて諸の願海に遊び
智慧悉く成滿して、人を度して彼岸に到らしむ
菩薩は淨き園林なり、眞の樂もて衆生を樂ましむ
正法は解脫の華、明淨の智は宮殿なり
菩薩は雪山の頂のごとく、藥樹王を出生して
煩惱の病を除滅し、悉く一切を喜ばしむ
菩薩は如來に等しく、諸の衆生を覺悟し
愚癡の暗を除滅して、等正覺を成ずるを得しむ
最勝の從來したまふ所、菩薩も是の如くして來り
平等の智を逮得して、究竟じて彼岸に到る

【菩薩は悉く等】以下四頌半は障盡德圓の勝行を明す

菩薩は大導師なり、諸の群生を敎化し
自然に正覺を成じて、一切智の境界となる
無量の力を具足して、一切能く壞る無く
無所畏に安住して、法を知り衆生を了る
乃至色界の中の、有ゆる諸の衆生の
一切の語言音に、皆悉く能く隨順す
色を過ぎて無色に至るも、彼一切の事を現ず
一切諸の衆生は、之を說くとも盡すこと能はざらん
菩薩は悉く、是の如き等の功德を成就して
性と非性とを解了し、所有に所有無し
眞實の智を具足して、一切の縛を除滅し
一切智を究竟じて、其心に著する所無し
彼甚深の行を說きて、衆をして悉く歡喜せしめ
一切の法は、皆悉く幻化の如しと了達す
方便の悲を發起し、一切の佛に護持せられ
智の化門を出生して、普く無量の事を現ず
仁等當に、菩薩の諸の功德を諦に聽くべし

【一身に邊際無く】以下六十六頌半行用の廣大を明す。中初六頌は三業深廣の行を明す。

【菩薩の現ずること】以下五頌半は供佛受法の定慧行を明す。

一身に邊際無く、普く無量の身を現じ
心に非ず心の境に非ずして、一切衆に應現す
一妙音を出して、語言の法を究竟し
悉く衆生の類の、一切諸の言音を攝す
煩惱の身を遠離して、應に隨ひて身を示現し
無量の方便身は、一切の音もて法を說く
其心常に寂滅にして、淸淨なること虛空の如く
心を以て刹を莊嚴し、一切衆に示現す
種種の身を示現して、彼に於て著する所無く
一切の生を遠離し、亦彼因を壞せず
一切の趣に隨順して、生を受けて著する所無く
身の虛空の如きを了り、其所應に隨ひて現ず
菩薩の現ずること是の如く、無量無邊の事もて
彼最勝の兩足尊を恭敬し、供養したてまつる
塗香、末香、華、幢蓋、幡、音樂
無上なる供養の具もて、直心に諸佛に供へたてまつる
一佛の會を離れずして、普く諸佛の所に在り

【種種の身を示現】以下四頌半は順逆行と成德滿行を明す。

【或は聲聞乘を現じ】以下五頌半は隨類現身難思の行を明す。

善巧に能く問難して、深妙の法を聽受す
此正法を聞くが故に、諸の三昧を速得す
一一の三昧の中に、無量の定門を生じ
又復能く普く現じて、無量の三昧より起つ
智慧の巧方便もて究竟じて彼岸に到り
一切の法は、皆悉く幻化の如しと覺悟す
種種の身を示現して、無量の音を出生し
衆生の想網に入りて、其心に染著無し
或時は衆生を現じて、世間の義に隨順し
或は菩提の行を示して、無量にして邊行ること無し
布施し淨戒を持ち、忍辱にして精進を勤め
定慧、四無量、四攝法を修行す
或は行成滿することを現じ、或は無生忍を得
或は灌頂の記を受け、或は一生補處となる
或は聲聞乘を現じ、或は復緣覺を現じ
無量の刹に涅槃すれども、菩薩の行を捨てず
或は現じて帝釋と爲り、或は梵天王を現じ

【或は天の宮殿】以下八頌半は八相念劫法印行。

或は天女に圍遶せられ、或は復獨り宴默し
或は比丘の像を現じて、淨戒もて諸根を調へ
或は自在王を現じ、或は現じて法網に入り
或は巧術の女を現じ、或は苦行を修するを現じ
或は現じて五欲に在り、或は復禪定に在り
或は般涅槃を現じ、或は復受生を現じ
或は童子身を現じ、或は復衰老を現ず
若し思議する者有らば、迷亂して心發狂せん
或は天の宮殿に在り、或は終に下生するを現じ
或は母胎に處するを現じ、成佛して法輪を轉じ
或は復出生を現じ、或は般涅槃を現じ
或は童子の術を現じ、或は復出家を現じ
或は道場に坐するを現じ、或は無上の道を成じ
或は復、自在の正法輪を轉ずるを示現し
或は正法を求むるを現じ、或は現じて佛身と爲り
無量の刹に充滿して、菩薩行を退かず
深く無量劫に入り、究竟じて彼岸に到り

【是の如くして衆生は】以下七頌は衆生の根欲を知る行。

無量劫は一念、一念は無量劫なり
一切は劫は劫に非ずして、衆生に劫を示現す
来る無く積集する無くして、諸劫の事を示現す
一微塵の中に於て、普く一切の佛を見
一切諸の群生に、處として佛有さざる無し
一切諸佛の刹と、及び衆生の境界とを
悉く能く分別して知り、一切の諸法印す
一切の劫は盡すべくとも、法印は窮め已ること無し
是の如くして衆生は、無量にして邊有ること無しと知る
彼一衆生に、無量百千萬
那由他に等しき身有り、因縁も亦是の如し
彼一衆生の如く、一切も亦復然り
是の如く究竟して知り、亦一切をして學ばしめ
悉く衆生の根を知るに、上中下同じからず
諸根常に流轉し、是器と非器とを知り
一根は一切根、展轉して相依持す
菩薩の微細智は、皆悉く分別して知り

【菩薩は一念の中】次の七頌半は身心の迅用甚深の行。

亦諸の欲性と、種種の煩惱垢とを知る
過去の心行を了り、未來今現在
悉く衆生の行を知りて、究竟じて彼岸に到る
行と無所行とを知り、衆の爲に妙法を說く
是の如くして心行の、染汚と及び淸淨とを知る
菩薩は一念の中に、一切智を速得して
深く如來の心に入り、究竟じて思議し難し
一念に悉く能く、諸佛の無上智を知り
神力の智を究竟じて、諸の通明を具足す
能く一念の中に於て、悉く十方の刹に詣る
是の如く疾かに遊行して、無量無數劫に
本の坐處を離れずして、甚深の法に安住す
猶工なる幻師の、種種に形色を現ずれども
色に非ず無色に非ず、幻化には所有無きが如く
菩薩も亦是の如く、深く廣き方便を知りて
衆の變化を示現し、一切世に充滿す
譬へば明淨の日の、世間に出現して

【猶し人の夢中】次の六頌半は智慧廣大玄絶の行。

【色は聚沫の如く】次の十一頌は智徳圓明照法の行。

悉く能く衆冥を除き、一切照さざる靡きが如し
菩薩の智慧日も、明淨にして甚だ圓滿に
淨心の境界を出でて、普く一切の法を照す
猶し人の夢中に、種種の事を造作するに
無量の劫は盡すべくとも、夢性は窮盡すること無きが如し
菩薩は一念に於て、夢等の法を示現す
無量劫は盡すべくとも、智慧には終極無し
常に樂ひて山澤に居りて、世間の語を遠離し
語言の道を究竟じて、其心に染著無し
菩薩は悉く、諸法の眞實性を了知し
普く衆生の音を說きて、虚妄の想を起さず
譬へば春月の時に、衆生焰氣を見て
愚なる者は水なりと謂ひ、之を尋ねて渇愛を增すが如し
菩薩は是の如く見る、衆生の煩惱に覆はるるは
焰の渇愛を增すが如しと、一向に解脱を求めて
衆生の實に非ざるを知るも、而も更に大悲を增す
色は聚沫の如く、受は水上の泡の如く

想は春時の焔の如く、衆の行は芭蕉の如しと觀じ
心は工なる幻師の如く、種種の事を示現して
善く五陰を分別するも、其心に所著無し
諸入は悉く空寂にして、自在の事を遠離し
諸界は實性無くして、衆生界の分を示す
第一の眞實諦は、決定して寂滅の性なり
廣く分別の法を演べて、而も心に染著せず
菩薩は五陰を知るに、去來今有ること無し
煩惱業に因由りて、此三苦の輪を轉ず
緣起の法を演說するも、有に非ず亦無に非ず
深く眞實の義を解りて、彼に於て所著無し
菩薩の淨き智慧は、三世の法を解脫して
諸の群生に示現するも、皆悉く是れ一念なり
欲、色、無色界に、衆生の事を示現し
三乘の戒もて解脫し、一切智を究竟す
處と非處とを了知し、業を知り諸根と
欲性と、諸の煩惱と、一切至處の道と

【廣く甚深の道に入り】次の五頌は功德殊勝なる無盡行の德用を結ぶ。

【常に如來の智に依り】以下四十三頌半は正しく前の二千の行法を頌す。前六段ある中、初の六位に應じて四頌は信位の行。

宿命智と、天眼とを知り、諸の煩惱を除滅して
佛の十種の力を知るも、而も尚未だ究竟せず
諸佛の法に隨順して、深く諸法の空を解り
悉く諸の煩惱を滅するも、而も諸漏を盡さず
廣く甚深の道に入りて、諸の群生を教化し
佛子は無畏に住して、菩薩行を捨てず
謬無く消失無く、亦正念を捨てず
精進して三昧を欲し、智慧に損減無し
三種常に清淨にして、三世に明達し
大悲もて衆生を念ひ、一切障礙無く
深く諸の法門に入りて、是の如きの行を具足す
我其少分を說く、莊嚴功德の義は
無量無數劫に、之を說くとも盡すべからず
我說く所の少分は、大地の一塵の如し
常に如來の智に依りて、而も亦所依無く
常に奇特の想を修す、大悲堅強なるが故に
清淨の戒に安住して、常に精進を勤修し

【一切の妙功徳あり】次の四頌は十住位の行。

【一切劫に住持し】次の六頌は十行位の行。

諸くの群生を教化して、眞の佛子の記を受く
佛の功徳を究竟じて、刹を知り衆生を知り
三世の劫を分別して、其心に疲倦無し
陀羅尼力を具して、深く眞實の義を解り
無等の法を思惟して、無上の道を逮得す
一切の妙功徳あり、發願して菩提を求め
慈悲因縁の力もて、菩提をして淨勝ならしめ
波羅蜜を具足し、隨順して善く究竟し
諸くの智力を決定して、無上の道を覺悟す
方便智を成就して、甚深の法を樂說し
隨順して常に守護し、法王の處を逮得す
勝妙の法に安住して、彼に於て所著無く
智慧の華を出生して、勝れたる菩提を覺悟す
一切劫に住持して、菩薩は正望を得
甚深の法に安住して、衆生の疑を除滅す
甚深の智を修習して、善能く法を分別し
定慧の境を究竟じて、一切智を覺悟す

【金剛妙寶の法】次の六頌は十廻向位の行。

智は諸の解脱に入りて、究竟じて彼岸に到り
諸の通明を具足して、離垢の清涼園となる
白淨の法を具足して、種種の行を具足し
普く莊嚴の法を現じ、皆悉く議るべからず
善く衆生の心を知り、能く說きて究竟せしめ
清淨の菩提の印は、智光一切を照し
一切能く稱る莫く、懈怠の法を遠離して
安住すること山王の如く、功德の智海を具ふ
金剛妙寶の法は、大莊嚴に安住し
諸の大事を究竟じて、一切能く壞する莫し
菩提は記を授かることを得て、廣大の心に安住し
佛の無盡藏を得て、一切法を覺悟す
世智常に自在にして、諸の神通に遊戲し
一切法の境界は、自在にして障礙無し
身の願行自在にして、諸の神通に遊戲し
一切法の境界は、自在にして障礙無し
身の願行自在にして、智慧も亦自在たり

【清淨身の身業】次の十頌は十地位の行。

無量億の自在もて、一切に示現す
諸の自在を具足して、諸の神通に遊戯し
深く佛の境界に入りて、一切能く壞る莫し
黠慧に莊嚴せられたる、無畏、不共の法は
佛子の業を修行して、一切の惡を遠離す
清淨身の身業と、清淨口の口業とは
諸佛守護したまふが故に、十の大事を成辦す
心心所の起住にて、無上の事を顯現し
諸の根定を安住して、最勝の根を逮得す
清淨の正直心は、諸の諂曲を遠離し
深く衆生性に入りて、種種の事を示現す
煩惱習を除滅して、無上の行を究竟し
深智慧を具足して、一切智を逮得す
一切の惡を遠離し、方便もて寂滅に趣き
功德の道を出生して、善く一切の學を學ぶ
無量道の心境を、修習して所著無く
深智慧に安住して、道の莊嚴を示現す

【善逝の智を觀察するに】次の十三頌は因圓果滿究竟意の行。

手足及び心腹は、無上の智慧藏なり
其心は金剛の如く、智慧を器仗と爲す
智慧觀察の頂は、深く菩提の行に入り
清淨の戒を鼻と爲し、諸の燒然を除滅す
四辯の廣長舌と、處として至らざる無き身と
淨妙の智慧の身とは、諸の善行を行と爲す
道場は安隱の住にして、師子の床を座と爲し
梵住を安臥と爲すは、無礙の第一義なり
善逝の智を觀察するに、普く一切を照し
遍く衆生の行を觀ずるに、種種の妙功德あり
此を以て奮迅と爲し、貪を離るるを淨施と爲す
不慢は清淨の戒、不動を淨忍と爲し
不轉は淨精進にして、自在を淨禪と爲す
愚癡を行ぜざるは智にして、虛空を慈として普く救ひ
憂惱せざるを悲と爲し、清淨の法を喜と爲す
諸の煩惱を離るるは捨にして、寂靜を深義と爲し
境界を正法と爲し、迴向は功德の具なり

智具は利劍の如く、普く照すを衆明と爲し
法を聞きて厭足無し、是を正しく法を求むると爲す
身の壽命とを惜まざるは、是を明正法と爲し
諸佛の教に隨順して、諸の魔道を除滅するなり
清淨の正直心は、諸佛の業を攝取して
衆魔の業を遠離し、諸の智慧を長養す
魔の所持を遠離して、諸佛の持に安住し
究竟じて法持を得、無住の智慧に住せん
作業已りて命終し、神を降して母胎に入り
微細の趣を示現し、又復出生を現じ
現じて我を最勝と稱し、七歩を行ずるを示現し
現じて童子地と爲り、復深宮に處するを現ず
出家學道を現じ、諸の道場を莊嚴し
普く無量の光を放ちて、諸の群生を覺悟し
一切の魔を降伏して、無上道を成ずるを得
淨法輪を轉ずるを現じ、如來地を示現し
白淨の法を增長して、大般涅槃を現ず

【菩薩諸行を修す】以下三十八頌は結して修學を勸む。三に分つ中初一頌は總じて所說を結す。【無量劫に修習して】以下三十三頌は別して徳用を結する中先の二十一頌半は別して徳用の廣大を結す。

菩薩諸行を修すること、無量にして邊有る無し
我向に說く所の如きは、略して其少分を擧ぐるのみ
無量劫に修習して、衆をして菩提に住せしめ
衆生の諸の法行は、彼に於て染著無し
是の如きの具足の行は、力自在を成就し
無量の諸刹を以て、一毛道に安置し
常に無量の刹を持して、遍く諸の世界に遊び
還つて本處に置くも、衆生に恐怖無し
菩薩は一切の、嚴淨せる諸佛刹を以て
一毛孔に安置し、衆生見ざる無し
能く一毛孔を以て、悉く一切海を受くるも
大海增減せず、衆生嬈害無し
是の如き等の、一切諸事の相を示現す
無量の金剛山を、手もて摩して微塵と爲し
此一切塵を以て、遍く諸佛の刹に散じ
復末塵を刹に下して、遍く餘の世界に布かんに
一切の塵は知るべくとも、智慧は盡すべからず

一毛孔の中に於て、淨き光明を放演して
普く一切世を照し、悉く日月の光を蔽ふ
珠火、天神の光も、隱沒して悉く現ぜず
惡道の苦を除滅して、爲に無上の法を說く
菩薩の一言の音は、一切の音を出生し
一切諸の衆生、悉く聞かざる者無し
此法音を聞くを以て、皆大歡喜を得
具足して廣く、諸佛の說きたまふ所の法を宣暢す
過去の一切劫を、未來今に安置し
未來現在の劫を、過去世に廻置す
十方一切の刹は、皆悉く成壞を現じ
一切衆生を以て、一毛道に安置す
過去及び現在の、一切諸の如來は
自在力を具足して、悉く身中に於て現じたまふ
深く變化の法を知り、善能く所應に隨ひて
普く無量の身を現じ、彼に於て悉く著する無し
帝釋、梵王の身、四天、大王の身

【淨身は虛空に等し】以下十二頌は別して行德の殊勝を結す。

諸天の清淨身、一切衆生の身
聲聞緣覺の身、如來の清淨身は
普く一切の身を現じて、善く菩薩の行を修す
現じて衆の想網に入り、上中下の諸品
一切智に持せられ、普く佛及び刹を現ず
深智慧を具足して、諸の網想を除滅し
菩薩の行を示現して、究竟じて菩提を成ず
是の如き等の、無量の自在力を示現して
一切現ぜざる無く、世を擧げて能く知る莫し
示現するも所現無く、究竟じて上有る無く
隨順して衆生に應じ、爲に決定の行を說く
淨身は虛空に等しく、妙音世間に滿ち
淨戒を塗香と爲し、慚愧の衣普く覆ふ
離垢正法の繒、一切智の摩尼
功德莊嚴の身は、無上王を拜署す
波羅蜜の金輪は、諸通を象寶と爲し
神足を馬寶と爲し、淨慧は無上の珠なり

妙行を女寶と爲し、四攝は寶藏の臣
方便は主兵の寶、無上の轉輪王は
勝妙の三昧の城、空觀の妙宮殿
慈悲の大莊嚴、智慧を利劍と爲し
堅强正念の弓は、明利の根を箭と爲し
諸佛の護持は蓋にして、智慧の幢を建立し
直に諸魔の軍に入り、忍力もて悉く摧滅す
陀羅尼は平地、淨妙の行は流水
深智を涌泉と爲し、淨慧は淸涼の林
空を澄淨の池と爲し、七覺の妙華敷き
神足を以て莊嚴し、三昧を娛樂と爲し
法門を歌頌と爲し、正法を思惟する女
甘露法の食、解脫の味を漿と爲し
調御して三乘に順じ、無上の園に遊戲す
此等の諸の勝行と、及び餘の無上法とを
無量劫に修學するも、其心に疲倦無し
一切の佛を供養し、一切刹を嚴淨し

普く一切衆をして、一切智に安住せしむ
一切刹の微塵は、悉く其數を知るべく
一切の虛空界は、皆悉く度量すべく
一切衆生の心は、念念も數を知るべくとも
佛子の諸の功德は、之を說くとも盡すべからず
此功德と、及び餘の勝妙の法とを具へんと欲し
一切の苦を滅して、諸の群生を安樂にせんと欲し
諸の如來の、身口意と齊等ならんと欲せば
應に金剛の心を發して、此勝行を究竟すべし

【入法界品】本經の末會第八會祇洹重閣會の說法にて、善財童子が南方に五十五の善知識を歴訪して道を求め法界の理に證入する始末を說くなり。
【爾時、佛云云】本會の序分、三世間の圓滿を叙す。
【舍衞城】シュラーヴスティー(Śrāvastī) 聞者城といひ、拘薩羅國の都城なり。
【祇樹給孤獨園】ジェータヴァナギハーラ(Jetavanavihāra)祇園精舍のこと。
【夜光幢等】以下百四十一大位を擧ぐる中初十に皆幢といふは行德の高出を顯すなり。
【大地端嚴等】次十同じく端嚴といふは福智二嚴を表すなり。
【大地藏等】次十を同じく藏といふ。

大方廣佛華嚴經　卷第四十四

東晉天竺三藏佛馱跋陀羅譯す

入法界品第三十四之一

爾時、佛、舍衞城の祇樹給孤獨園の、大莊嚴重閣講堂に在したまふ。五百の菩薩摩訶薩と倶なり。普賢菩薩、文殊師利菩薩を而も上首と爲す。夜光幢菩薩、須彌山幢菩薩、寶幢菩薩、無礙幢菩薩、華幢菩薩、離垢幢菩薩、日光幢菩薩、正幢菩薩、離塵幢菩薩、明淨幢菩薩、大地端嚴菩薩、寶端嚴菩薩、大慧端嚴菩薩、金剛智端嚴菩薩、離垢端嚴菩薩、法日端嚴菩薩、功德山端嚴菩薩、智光端嚴菩薩、普妙德端嚴菩薩、大地藏菩薩、虛空藏菩薩、蓮華藏菩薩、寶藏菩薩、日藏菩薩、淨德藏菩薩、法印藏菩薩、明淨藏菩薩、臍藏菩薩、蓮華藏菩薩、善德眼菩薩、普見眼菩薩、淸淨眼菩薩、離垢眼菩薩、無礙眼菩薩、普眼菩薩、善觀眼菩薩、靑蓮華眼菩薩、金剛眼菩薩、寶眼菩薩、虛空眼菩薩、善眼菩薩、天冠菩薩、普照法界慧天冠菩薩、道場天冠菩薩、普照十方天冠菩薩、生諸佛藏天冠菩薩、一切世間最上天冠菩薩、明淨天冠菩薩、無量法天冠菩薩、受一切如來師子座天冠菩薩、普照法界虛空天冠菩薩、梵王周羅菩薩、龍王周羅菩薩、一切佛化光明周羅菩薩、道場周

は德備りて含攝せることを表す。
【善德眼等】次十二を同じく眼と名くるは法界を照らすことを明す。
【天冠等】次十を天冠と名くるは淨德を心頂に冠むれるを表す。
【梵王周羅等】次十を周羅（チューラカ Curaka 頂髻と譯す）と名くるは德重く學高きことを表す。
【大光等】次十を光と稱するは身智の光を具することを表はす。
【功德幢等】次の十を幢と名くるは降伏の義を表す。
【梵音等】次の十を音と名くるは美音機を悦ばすことを明す。
【法上等】次十を上と名くるは德衆表に勝るるが故なり。
【光妙德等】妙德とは吉祥にして勝

羅菩薩、一切願海音摩尼寶王周羅菩薩、出生如來光業寶自在周羅菩薩、莊嚴一切虛空寶摩尼寶王周羅菩薩、一切如來自在光幢摩尼王網普覆周羅菩薩、一切佛音轉法輪周羅菩薩、三世慧音周羅菩薩、大光菩薩、離垢光菩薩、寶光菩薩、離塵光菩薩、夜光菩薩、法光菩薩、寂靜光菩薩、日光菩薩、自在光菩薩、天光菩薩、功德幢菩薩、智幢菩薩、法幢菩薩、諸通幢菩薩、光幢菩薩、華幢菩薩、摩尼幢菩薩、菩提幢菩薩、梵幢菩薩、普光幢菩薩、梵音菩薩、海音菩薩、大地音菩薩、世主音菩薩、山相擊音菩薩、充滿一切法界音菩薩、一切法海雷音菩薩、降伏一切魔音菩薩、大悲方便雲雷音菩薩、滅一切苦安慰音菩薩、法上菩薩、勝上菩薩、智上菩薩、功德須彌山上菩薩、功德珊瑚上菩薩、稱上菩薩、普光上菩薩、大慈上菩薩、智海上菩薩、如來性起上菩薩、光妙德菩薩、勝妙德菩薩、上妙德菩薩、明淨妙德菩薩、法妙德菩薩、月妙德菩薩、虛空妙德菩薩、寶妙德菩薩、妙德幢菩薩、智妙德菩薩、娑羅林王菩薩、法王菩薩、衆生王菩薩、梵王菩薩、山王菩薩、寶王菩薩、離垢王菩薩、寂靜王菩薩、不動王菩薩、仙王菩薩、勝王菩薩、寂靜音菩薩、無礙音菩薩、說大地音菩薩、大海雷音菩薩、雲音菩薩、法光音菩薩、虛空音菩薩、一切衆生善根雷音菩薩、開悟過去願音菩薩、圓滿道音菩薩、智須彌山音菩薩、虛空覺菩薩、離垢覺菩薩、無礙覺菩薩、善覺菩薩、普照三世覺菩薩、廣覺菩薩、普光覺菩薩、法界光覺菩薩、是の如き等の五百の菩薩なり。此諸の菩薩は皆悉く普賢の行を出生す。境界無礙にして一切諸佛の刹に充滿するが故に。無量身を持して悉く能く一切佛に往詣するが故に。無礙の淨眼を具足

を顯すが故に。
【婆羅林王等】王とは法に於て自在の故に。
【寂靜音等】音とは今は巧みに妙法を詮表する義を顯す。
【虛空覺等】覺とは理を鑑み機を察する義なり。
【眞諦を覺し】見道なり、又證實際とは修道、深入性とは無學道なり。又此に由つて、理を證して滿足し、分段を捨離する故に生死の海を離るとなり。
【爾時、諸の菩薩等】本會の第二請分、念所請中總じて六十句、中初十句は所請の果法を念ず。
【一切の天人等】次十は深玄にして測り難きを明す。

して一切佛を見ること明自在なるが故に。無量處に至りて、一切諸佛の正覺を成じたまふ時、悉く能く往詣して、現前に佛を見、休息無きが故に。無量智の光は、普く一切諸法の海を照すが故に。無量劫に於て說くとも盡すべからざる辯は淸淨なるが故に。虛空界を究竟する智慧の境界は悉く淸淨なるが故に。依止する所無くして其所應に隨ひて色身を現ずるが故に。癡瞖を除滅し善く分別して衆生界を知るが故に。虛空のごとき智慧は大光網を放ちて普く一切諸の法界を照すが故に。

復五百の大聲聞と倶なり。悉く眞諦を覺し、如實の際を證し、深く法性に入り、生死の海を離れ、如來の虛空境界に安住し、結使の縛を離れ、一切に著せず、虛空に遊行し、諸佛の所に於て疑惑悉く滅し、深く入りて諸佛の大海を信向せり。復諸の天王と倶なり。悉く已に過去の諸佛を恭敬し供養して、長夜に一切衆生を饒益し、心常に慈を行じて未だ曾て忘失せず、群生を守護して勝智門に入らしめ、一切衆生を捨てず、諸佛の正法の境界を出生し、佛法を守護し、佛性を受持し、如來の家に生れ、專ら一切の智門を求めたり。

爾時、諸の菩薩、聲聞、天人、及び其眷屬は、咸是念を作さく、「如來の行、如來の智境界、如來の持、如來の力、如來の無畏、如來の三昧、如來の作、如來の勝妙の功德、如來の身、如來の智、如來の法、一切の天人能く知る無く、能く度る無く、能く底を得る無く、能く受くる無く、能く思惟する無く、能く觀察する無く、能く分別する無く、能く開發す

【佛の持力等】以下十は綵會知るべきを明す。【持力等】持力は佛の持力、自在力とは神通力、威神力とは世尊無畏の力、德を以て加へしむる力、本願力とは佛往昔の本願力なり。【又諸の大衆の等】以下三十句、初十は念德の請、中十は機の受くるに堪へたるの德を歎ず。【世尊往昔等】次二十は佛能證の德を歎ず、中初十は因圓滿を、後十は果德備を說く。【菩薩の莊嚴】總じて諸行を說くに皆二嚴を具するが故にいふ。【菩薩の方便莊嚴】別して一行の巧に一切を攝するを嫌はず、互に相嚴飾するが故に方便嚴といふなり。【出生方便海】利他行巧多端を明す。

る無く、能く宣明する無く、能く人の爲に如實に解說する無し。佛の持力、自在力、威神力、如來の本願力、過去の善根力、善知識に親近するの力、淸淨信心の方便力、勝妙の法を樂ひ求むる力、淸淨正直の菩提の心力、深心の一切智願力をば除く。又、諸の大衆の種種の意、種種の欲、種種の解、種種の諦、種種の地、種種の根、種種の方便、種種の心境界、種種如來に依るの功德、種種樂聞の法、世尊往昔一切智の願を發して求めたまへる一切智、菩薩の諸願、淸淨の波羅蜜、菩薩の諸地、菩薩の滿足行、菩薩の莊嚴、菩薩の方便莊嚴、菩薩の道莊嚴、菩薩出生方便海の莊嚴、菩薩の自在莊嚴、菩薩の本生海、菩提門の自在海、如來の自在の轉法輪、如來剎の淸淨自在、如來の方便もて衆生海を莊嚴したまふ如來法王の法、如來の道明普く一切を照し、如來は自在に一切衆生の處に入り、如來は一切衆生の爲に最上の福田と作りたまふ、如來は一切衆生の爲に功德ある噠嚫を說き、王輪もて一切衆生を化度したまへることを、唯願くば世尊、大悲慈愍もて具足して顯現したまへ。

爾時、世尊、諸の大衆の心の所念を知り、大悲の身、大悲の門を以て、大悲を首と爲し、大悲方便の法に隨順して、師子奮迅三昧に入り、一切衆生をして淸淨の法を樂はしめたまふ。

三昧に入り已りし時、大莊嚴の重閣講堂は忽然として廣博なること無量無邊にして、破壞すべからず。金剛の寶地は淸淨に莊嚴せられ、一切の摩尼寶王は、遍く其地に布かれ、

無量の寶華、奇妙の衆の寶を散じ、瑠璃を柱と爲し、明淨の寶を以て之を莊嚴し、衆寶の莊嚴は微密にして間無し。閻浮檀寶を以て樓閣を爲し、衆寶の欄楯却敵を撩廻し、阿僧祇の欄楯を以て嚴飾し、諸天王の寶と堅固の衆寶ともて之を莊嚴し、摩尼寶網を其上に彌覆し、衆の寶幢を建て、諸の幡蓋を懸け、大光網を放ちて普く法界を照せり。又不可說の衆の雜妙の寶を以て其外を莊嚴し、門邊の階道は、衆の寶もて合成せられたり。爾時の佛、神力の故に、祇洹林は忽然として廣博となり、不可說の佛刹微塵數の世界と等しからしめぬ。衆寶もて莊嚴せられ、不可說の寶は遍く其地に布かれ、阿僧祇の寶を以て垣牆と爲し、寶多羅樹は道の側に列べ植ゑられ、無量の香河には微流盈滿し、一切寶華を以て波浪と爲し、皆悉く右に旋りて、一切佛法の音聲を演說し、不可思議の分陀利華は皆悉く開敷して水上に彌布し、衆の寶華樹は高顯榮茂して、其岸に列べ植ゑられ、不可思議の樓閣は、摩尼の寶網其上に羅覆し、阿僧祇の妙寶もて莊嚴せられ、光明は普く照せり。阿僧祇の摩尼寶王は其地を嚴飾し、衆の妙香を出し、無量の摩尼王の幢、香幢、衣幢、幡幢、繒幢、華幢、莊嚴具の幢、鬘幢、寶瓔帶の幢、衆寶の蓋幢、大摩尼の幢、普照摩尼寶の幢、出佛音の幢、師子寶王の幢、出一切佛本生界の幢、一切法界の幢、摩尼寶王の幢を建立して、以て莊嚴を爲せり。時に祇洹林の上の虛空の中に、不可思議の天の寶宮殿雲、不可思議の衆の香樹雲、不可說の須彌山雲有りて虛空を莊嚴せり。不可說不可說の衆寶の樂器は、妙法音を演べて如來を讚詠し、不可說の寶樹雲は虛空に彌覆せり。不可說の衆寶の座雲は

が故にいふ。

【自在莊嚴】二利無礙雙融究竟して各一切を攝し普賢行を成ずるが故に。

【本生海】多劫に身を受けて恆に勝行を修するが故、本生身多きを顯すが故に海の如く多身修行の行も亦廣多なり。

【噠嚫】ダクシナー（Dakṣinā）財施又は右手と譯す。右手を用て他の所施を受くるを以てなり、今佛衆生に功德を施與するを明すが故に功德噠嚫といふ。

【三輪】身業神通輪、語業正教輪、意業憶念輪。

【隨時世尊等】以下第三三昧分、入定を叙す。

【師子奮迅三昧】定業の用を明すに師子奮迅の時諸根開張し身毛皆竪ちその威勢を現ずれば、哮吼の相は餘

の默頌をして威を失ひ實伏せしむる如く、佛の法界の法門を現ずるも亦是の如きを喩ふ。

【三昧に入り已りし時等】第四に淨土を現ずることを敍す、三に分つ中今器世間の圓滿を現ず。

【埤堄】城の周圍に築かれし高塀。

【多羅樹】ターラ(Tāla)重と譯す、形棕櫚に似て堅く花白くして大、果は赤くして栝樓の如し。印度にては之を尺度の稱謂に用ひたり。

【如來充滿し等】智正覺世間滿。

【菩薩は一切如來の等】以下衆生世間滿。

覆ふに法衣を以てし、菩薩上に處して佛の功徳を歎じ、不可說の天の寶像雲を以て莊嚴と爲し、不可說の白淨の眞珠の網雲を以て莊嚴と爲し、不可說の解脫樓閣雲を以て莊嚴と爲し、不可說の妙解脫の音樂の雲雨を以て莊嚴と爲せり。何を以ての故に。如來の善根は不可思議なるが故に。如來の白淨法は不可思議なるが故に。如來の威神は不可思議なるが故に。如來の一身は一切法界に充滿して自在なること不可思議なるが故に。一切佛刹の莊嚴は、一佛身に入りて不可思議なるが故に。一微塵の中に一切の佛、一切法界を現じて不可思議なるが故に。一毛孔の中に過去際を盡して、一切の如來次第に顯現して不可思議なるが故に。一光明を放ちて一切刹を照し不可思議なるが故に。如來の一毛孔の中より一切の佛刹微塵に等しき化身雲を出し、一切世界に充滿して不可思議なるが故に。如來の一毛孔の中より一切の佛刹の成壞を現じて不可思議なるが故に。此祇樹給孤獨園に、嚴淨の佛刹を見るが如く、一切法界虛空界の一切世界に、見る所の嚴淨も亦復是の如し。

如來充滿して祇洹に來詣し、菩薩は一切如來の大衆海に充滿して安住し、普く一切妙莊嚴雲を雨らし、一切衆寶光明普照一切摩尼王雲を雨らし、一切蓋雲、莊嚴一切天身雲を雨らして、一切華樹雲、莊嚴一切雜色衣雲を雨らし、一切鬘雲、流注莊嚴一切摩尼寶王莊嚴雲を雨らし、一切衆生身の雜色香雲を雨らし、寶華雲、諸の天女雲を雨らし、各妙寶を持して、虛空の中に於て廻轉し莊嚴し、一切衆寶の鉢曇摩華の雜寶の師子の座は虛空を莊嚴せり。

【爾時東方等】新に十方より大衆の集まることを叙す。

爾時、東方、不可說の佛刹微塵に等しき世界海を過ぎて世界有り、金剛雲明淨燈莊嚴と名け、佛を明淨妙德王と號けたてまつる。彼大衆の中に菩薩有り、明淨願光明と名け、不可說の佛刹微塵に等しき菩薩と俱に來りて、此土に向ひ、種種の雲を興して虛空を莊嚴せり。謂ゆる天の華雲を興し、天の末香雲を散じ、天の鬘帶雲を垂れ、天の寶雲、天の莊嚴雲、天の寶蓋雲、天の寶衣雲、天の幢蓋雲を雨らして虛空に充滿し、悅樂すべき衆寶を以て莊嚴し、佛所に來詣して、禮拜し供養せり。則ち東方に於て、一切莊嚴の樓閣と、寶蓮華藏の師子の座とを化作し、如意寶の網もて其身を羅覆し、其眷屬と與に結跏趺坐せり。

南方、不可說の佛刹微塵に等しき世界を過ぎて世界有り、金剛藏と名け、佛を普照妙德王と號けたてまつる。彼大衆の中に菩薩有り、不可壞精進勢王と名け、不可說の佛刹微塵に等しき菩薩と俱に來りて此土に向ひ、皆悉く一切の妙香を齎持し、神力持の故に、普く一切の佛の世界海に熏じ、一切の摩尼の寶網、華鬘、瓔珞、寶衣、寶像、妙德光明の諸の莊嚴具を執持し、一切妙師子の寶を以て莊嚴と爲し、神力持の故に、一切の諸の佛世界に充滿し、佛所に來詣して、禮拜し供養せり。卽ち南方に於て白淨妙寶の樓閣と、普照十方寶蓮華藏の師子の座とを化作して結跏趺坐し、寶華の網を以て其身を羅覆せり。

西方、不可說の佛刹微塵に等しき世界を過ぎて世界有り、寶燈須彌山幢と名け、佛を法界智燈と號けたてまつる。彼大衆の中に菩薩有り、無上普妙德王と名け、世界海微塵に等し

き菩薩と倶に來りて此土に向ひ、不可說の佛刹微塵に等しき種種色の香の須彌山雲を興し、一切法界に充滿せり。不可說の佛刹微塵に等しき種種色の香水の須彌山雲は一切法界に充滿し、不可說の佛刹微塵に等しき種種色の摩尼寶王の須彌山雲は一切法界に充滿し、不可說の佛刹微塵に等しき種種色の光明莊嚴寶幢の須彌山雲は一切法界に充滿し、不可說の佛刹微塵に等しき種種色の金剛藏摩尼寶王の須彌山雲は一切法界に充滿し、不可說の佛刹微塵に等しき閻浮檀寶幢の須彌山雲は一切法界に充滿し、不可說の佛刹微塵に等しき摩尼寶王遍照一切法界の須彌山雲は普く虛空を覆ひ、一切如來の不可說の佛刹微塵に等しき相好摩尼寶王普照の須彌山雲は一切衆生の境界に充滿し、一切如來の菩薩たりし時の不可說の佛刹微塵に等しき所行の須彌山雲は法界に充滿し、一切如來は不可說の佛刹微塵に等しき莊嚴の道場を示現し、佛所に來詣して、禮拜し供養せり。即ち西方に於て、一切の香王樓閣を化作し、眞珠の寶網を以て其上に羅覆し、帝釋幢の如き寶蓮華藏師子の座に結跏趺坐し、金色の寶網もて其身を羅覆し、如意寶王を髻の明珠と爲せり。

北方、不可說の佛刹微塵に等しき世界を過ぎて、世界有り、寶衣光明幢と名け、佛を法界虛空妙德と號けたてまつる。彼大衆の中に菩薩有り、無礙妙德藏王と名け、世界海微塵に等しき菩薩と倶に來りて此土に向ひ、一切寶繪の雲を以て虛空を莊嚴し、神力持の故に虛空に充滿せり。雜寶の衣雲、雜香熏の衣雲、日幢摩尼寶の衣雲、金色の妙衣雲、衆寶網の衣雲、閻浮檀金色の莊嚴衣の雲、白淨寶の衣雲、明淨寶王の衣雲、妙光寶の衣雲、

海莊嚴寶王の衣雲もて虛空を莊嚴せり。神力持の故に、皆悉く一切の虛空に充滿し、佛所に來詣して禮拜し供養せり。即ち北方に於て大海摩尼寶王の樓閣と、瑠璃の寶蓮華藏師子の座とを化作して、結跏趺坐し、妙寶王の網もて其身を羅覆し、淸淨の寶王の髻の明珠と爲せり。

東北方、不可說の佛刹微塵に等しき世界を過ぎて、世界有り、放離垢歡喜光明網と名け、佛を無礙眼と號けたてまつる。彼大衆の中に菩薩有り、法界善化願月王と名け、世界海微塵に等しき菩薩と俱に來りて此土に向ひ、寶の樓閣雲を興し、皆悉く一切世界に充滿せり。香の樓閣雲、香燄の樓閣雲、華の樓閣雲、旃檀の樓閣雲、金剛の樓閣雲、金の樓閣雲、寶衣の樓閣雲、鉢曇摩の樓閣雲は、皆悉く普く一切佛刹を覆ひ、佛所に來詣して、禮拜し供養せり。即ち東北方に於て、一切法界門寶山の樓閣と、不可稱香王の寶蓮華藏師子の座とを化作して結跏趺坐し、摩尼華網もて其身を羅覆し、妙莊嚴藏摩尼寶王を以て天冠と爲せり。

東南方、不可說の佛刹微塵に等しき世界を過ぎて、世界有り、香雲莊嚴幢と名け、佛を龍自在王と號けたてまつる。彼大衆の中に菩薩有り、法義慧焰王と名け、世界微塵に等しき菩薩と俱に來りて此土に向ひ、無量の金色の圓滿光雲を興して、普く虛空を覆へり。無量寶色の圓滿光雲、佛の白毫相の圓滿光雲、衆寶雜色の圓滿光雲、寶蓮華藏の圓滿光雲、衆寶樹華の圓滿光雲、如來無見頂相の圓滿光雲、閻浮檀金色の圓滿光雲、日光の圓滿光雲、

月光の圓滿光雲は普く虚空を覆ひ、佛所に來詣して禮拜し供養せり。即ち東南方に於て明淨摩尼寶王樓閣と、金剛寶蓮華藏の師子の座とを化作して、結跏趺坐し、寶焔光の網もて其身を羅覆せり。

西南方、不可說の佛刹微塵に等しき世界を過ぎて、世界有り、名けて光藏と曰ひ、佛を法月普照智王と號けたてまつる。彼大衆の中に菩薩有り、壞散一切衆魔智幢王と名け、世界微塵に等しき菩薩と俱に來りて此土に向ひ、一一の毛孔に普く虚空界に等しき寶華の焔雲を興し、遍く一切世界を照せり、焼香の焔雲、衆寶の焔雲、金剛の焔雲、香煙の焔雲、大龍自在電光の焔雲、明淨摩尼寶の焔雲、金色寶の焔雲、妙德藏摩尼寶王網の焔雲、一一の毛孔に、各虚空界に等しき如來光明海雲を放ちて普く三世を照し、佛所に來詣して禮拜し供養せり。即ち西南方に於て、一切方門光網普照法界摩尼の樓閣と、香燈焔寶蓮華藏の師子の座とを化作して結跏趺坐し、摩尼寶藏王妙光明の網もて其身を羅覆し、一切衆生向解脫音摩尼寶王冠を冠れり。

西北方、不可說の佛刹微塵に等しき世界を過ぎて世界有り、淨願摩尼寶藏と名け、佛を普明淨妙德須彌山王と號けたてまつる。彼大衆の中に菩薩有り、明淨願智幢王と名け、世界微塵に等しき菩薩と俱に來りて此土に向ひ、念念の中に於て一切の相好、一切の毛孔より、皆三世一切の諸佛の身雲を出して、一切虚空界に充滿せり。又一切の菩薩の身雲、一切如來の眷屬の身雲、一切如來の變化の身雲、一切如來の本生の身雲、一切の聲聞緣覺

の身雲、一切如來の道場の菩提樹の雲、一切如來の自在の雲、一切の世界王の身雲、一切の嚴淨せる佛刹雲を出せり。念念の中に於て、一切の相好、一切の毛孔より、皆是の如き等の雲を出して虛空に充滿し、佛所に來詣して、禮拜し供養せり。即ち西北方に於て、諸方清淨摩尼妙寶樓閣と、清淨一切衆生摩尼寶蓮華藏の師子の座とを化作して結跏趺坐し、堅固光明眞珠寶の網もて其身を羅覆し、首に普覆摩尼寶の冠を冠れり。

下方、不可說の佛刹微塵に等しき世界を過ぎて世界有り、一切如來光明滿淸淨と名け、佛を無礙虛空智幢王と號けたてまつる。彼大衆の中に、菩薩有り、壞散一切障智慧勢王と名け、世界微塵に等しき菩薩と倶に來りて此土に向ひ、一切の毛孔に於て、一切衆生の語海の音雲、三世の菩薩の行海の音雲、一切菩薩願の音雲、一切菩薩の成滿清淨波羅蜜の音雲、一切菩薩の行妙音聲雲、一切世界に充滿する一切菩薩の積集自在の音雲、一切菩薩の道場に往詣し衆魔を降伏し、最正覺を成ずる自在の音雲、一切諸佛の正法輪を轉ずる修多羅の音雲、其所應に隨ひて衆生を化度する方便の音雲、一切衆生をして隨時に方便して妙智慧と善根とを得しむる音雲を出し、佛所に來詣して禮拜し供養せり。即ち下方に於て、諸佛寶光明藏莊嚴の樓閣と、寶蓮華藏の師子の座とを化作して結跏趺坐し、普く道場を照し、摩尼寶王の髻の明珠と爲せり。

上方、不可說の佛刹微塵に等しき世界を過ぎて世界有り、說無盡覺と名け、佛を圓滿普智光音と號けたてまつる。彼大衆の中に、菩薩有り、分別法界智通王と名け、世界海微塵

【是諸の菩薩と等】總じて來會の大衆の德を讚歎す。四十句あり。

に等しく菩薩と倶に來りて、娑婆世界の釋迦牟尼佛の所に向ひて、一切相好、一切毛孔、一切肢節、一切身分、一切莊嚴具、一切衣服の中より、盧舍那等の過去の一切諸佛と、未來の一切已に記を受けたる佛と、未だ記を受けざる佛と、現在の十方一切世界の一切諸佛と及び眷屬雲とを出せり。皆悉く過去に行せし所の檀波羅蜜と、及び施を受けし者とを顯現し、皆悉く過去に修せし所の尸波羅蜜の持戒清淨、過去の羼提波羅蜜にて肢節を割截して心動亂せざりしこと、過去に修習せし毘梨耶波羅蜜、過去に修習せし一切如來の禪波羅蜜海、過去に修習せし一切如來の淨法輪を轉じたまひしこと、過去の一切悉く捨てて壽命に著せざりしこと、過去に歡喜して諸の菩薩道を樂ひ求めしこと、過去に菩薩の清淨の大莊嚴の願を出生せしこと、過去の一切菩薩の力波羅蜜と、過去の一切菩薩の圓滿の智慧とを顯現して、皆悉く具足せり。是の如き等の諸の自在雲を出して、法界に充滿し、皆悉く顯現して、佛所に來詣して禮拜し供養せり。即ち上方に於て金剛莊嚴藏の樓閣と、靑金剛寶蓮華藏の師子の座とを化作して結跏趺坐し、一切の寶網もて其身を羅覆し、三世佛號摩尼寶王を髻の明珠と爲せり。

是の諸の菩薩と及び其眷屬とは、皆悉く普賢の行願を具足せり。三世の諸佛の清淨智眼を成就し、一切の佛の淨妙の法輪を轉じ、諸佛の勝妙の音聲の修多羅海を攝取し、一切菩薩の自在を具足して彼岸を究竟し、念念の中に於て悉く一切如來の所に詣り、自在力を現じて、一身一切の世界に充滿し、能く一切如來の衆中に於て清淨身を現じ、一微

【爾時諸の大聲聞等】第六に聲聞と菩薩と相對して比べ、擧失顯德す。

塵に於て悉く能く一切世界を示現し、應化の所に隨ひて衆生を成熟し未だ曾て時を失はず、一毛孔に於て一切の佛の妙法の雷音を出せり。衆生界は皆悉く幻の如しと知り、一切の佛は悉く電光の如しと知り、一切の有趣は皆悉く夢の如しと知り、一切の果報は鏡中の像の如しと知り、一切衆生は熱時の焰の如しと知り、一切世間は皆變化の如しと知り、如來の十力無所畏の法を具足し成就せり。大衆の中に於て能く師子吼し、深く無盡の一切辯海に入り、決定して一切衆生の語言法海を了知し、淨法界に於て無礙の行を行じ、一切法は皆悉く無諍なりと知り、菩薩の諸の通妙智を具足し、精進を勤修して諸魔を摧伏せり。三世の勝妙の智慧に安住して、染著する所無く、淸淨の妙行は佛の莊嚴せる一切智地を得たり。一切の有は悉く所有無しと知りて、深く一切法界の智海に入り、不壞の智を以て一切世界に入り、一切世界に於て普く自在を現じ、一切世界の受生を示現し、一切世界の種種の形色を知り微細の境界を以て廣き佛刹を現じ、廣き佛刹を以て微細の境界を現じ、一念の中に於て一切の佛住に住し一切の佛住を得て智身を持し、淸淨の慧を得て十方一切刹海を了知し、一念の中に於て悉く能く無量の自在を出生して遍く十方一切世界海に滿てり。此諸の菩薩は、皆悉く是の如き等の無量の功德を成就して祇洹林に滿てり。皆是れ如來の威神力の故に。

爾時、諸の大聲聞なる、舍利弗、目揵連、摩訶迦葉、離婆多、須菩提、阿泥盧豆、難陀、金毘羅、迦旃延、富樓那彌多羅尼子、是の如き等の諸の大聲聞は祇洹林に在りて、

而も悉く如來の自在を見ず。如來の莊嚴、如來の境界、如來の變化、如來の師子吼、如來の妙功德、如來の自在行、如來の勢力、如來の住持力、清淨の佛刹、是の如き等の事を、皆悉く見ず。亦復不可思議の菩薩の大會を見ず。菩薩の境界の自在の變化、菩薩の眷屬の來る所の方に隨ふ妙寶莊嚴の諸の師子座、菩薩の宮殿、三昧自在にして周遍し觀察すること、菩薩の奮迅勤行し精進して諸佛を供養すること、菩薩の記を受けて善根を長養すること、菩薩の受身、清淨の法身、智身、願身、色身、相好無量にして光明もて圓滿に莊嚴し大光網を放つ變化身雲、菩薩の一切方網に充滿せること、菩薩の諸行圓滿に具足すること、是の如き等の事を一切の聲聞の諸の大弟子は皆悉く見ず。何を以ての故に。別異の善根行を修習せしが故に。本能く如來の自在を見るべき善根を修習せず、亦佛土を淨むる行を修習せず。又佛の自在を見て、得し所の功德を讃歎せず。生死の中に於て衆生を教化し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さず。亦衆生をして佛の菩提に安立せしめず。亦如來種姓を守護して斷絕せざらしめず。亦一切衆生を攝取せず。亦諸の波羅蜜を成就せず。衆生の爲に勝妙の智慧眼の地を稱歎せず。亦一切の智行を修習せず。諸佛の離世の善根を求めず。亦自在の淨刹を出生せず。菩薩の諸の通明眼を求めず。菩薩の境界の不壞の善根を修せず。亦佛力の住持せる菩薩の大願を出生せず。又亦諸法は幻の如く、菩薩の集會は悉く皆夢の如きを知らず。亦菩薩の離生聖行の心を修習せず。普賢の清淨の智眼を得ず。是諸の功德は聲聞辟支佛と共ならず。是因緣を以て諸の大弟

【舍利弗】シャーリプトラ（Śāriputra）身子又は鷲子と譯す、佛十大弟子の一、智慧第一と稱せらる。

【目犍連】マウドガリヤーヤナ（Maudgalyāyana）胡豆と譯す、佛十大弟子の一、神通第一と稱せらる。

【摩訶迦葉】マハーカーシャパ（Mahākāśyapa）大飲光と譯す、頭陀行第一と稱せらる。

【離婆多】レーヴァタ（Revata）室星。

【須菩提】スブーティ（Subhūti）善現と譯す、解空第一と稱せらる。

【阿泥盧豆】アニルッダ（Aniruddha）無滅と譯す、天眼第一と稱せらる。

【難陀】ナンダ（Nanda）喜木と譯す、調伏第一と稱せらる。

【金毗羅】クンビーラ（Kumbhīra）

子は見ず聞かず、入らず知らず、覺せず念ぜず、能く遍く觀ぜず、亦意を生ぜず。何を以ての故に。此は是れ菩薩の智慧の境界にして、諸の聲聞の智慧の境界に非ざればなり。是故に諸の大弟子は祇洹林に在りて、如來の自在神力を見ず。亦三昧の淸淨の智眼ありて、微細の處に於て諸の境界を見る無く、亦法門神力の境界無く、亦諸力の勝妙の功德無く、亦是處の智無く、亦智眼の能く見聞覺知し、及び意念を生ずる無し。亦樂說せず、讚歎する能はず、顯現する能はず、施與する能はず、勸化して衆生を彼妙法に安立せしむる能はず。何を以ての故に。聲聞乘を以て三界を出づるが故に。又聲聞道に滿足し、聲聞の果に住して無所有の智を具足して眞實諦に住する能はず、常に寂靜を樂ひ、大悲を遠離して、常に自ら調伏し、衆生を捨離するを以てなり。是故に如來と對面して坐すと雖も、神變自在を覺知する能はざるなり。

譬へば餓鬼の裸形にして飢渴し、擧身燒然して、諸の虎狼毒獸の爲に逼られて、恆河に往詣して水を求めて飮まんと欲するも、或は枯竭せるを見、或は灰炭を見るが如し。所以は何ん。悉く宿行の罪業障に由るが故に。一切の聲聞も亦復是の如し。祇洹に在りと雖も如來の自在神力を覩ず。所以は何ん。無明の障瞖、淨眼を覆ふが故に。譬へば人有り、大會の中に於て昏寢し、夢に諸天の城郭、帝釋の宮殿、園觀、林流の、衆寶もて莊嚴し、諸の雜華を散じ、寶樹行列し、妙衣を上に覆ひ、諸天の男女其中に遊戲し、自然の妙音ありて共に相娛樂し、天の快樂を受けしを見るに、其人自ら覩て此處に安住し、天

【迦旃延】黃頭と譯す。マハーカーティヤーヤナ(Mahākātyāyana)大剪髮種男といふ論議第一。
【富樓那彌多羅尼子】プールナマイトラーヤニー、プトラ(Pūrnamaitrayanī-putra)滿願子といひ、說法第一と稱せらる。
【如來…見ず】以下法界の佛果を見ざるを明す。
【亦復…大會を見ず】以下法界の菩薩を見ざるを明す
【何を以ての故、別異の等】以下不見の所由を釋す、先づ因時にその見因を修せざれば見る能はざるを明す。
【亦三昧の淸淨等】次に因行劣の故に果時に小果を得るが故に、この法に於て分を絕して入るなきなり。
【譬へば餓鬼の等】以下十喩を擧げて

勝劣を示す、一に餓鬼恆河に對する喩、二乘は所知障あるが故に殊勝の境を見ざるに喩ふ。

【譬へば人有り等】覺を夢境に對する喩、二乘人は劣を守りて勝に乖くが故に見ざるを喩ふ。

【譬へば雪山に等】三に愚人雪山に對する喩、二乘人は狹心にして悲なきが故に見ざるを喩ふ。

【譬へば地中に等】四に呪の伏藏を見る喩、二乘人は淨慧眼なきが故に見ざるを喩ふ。

【譬へば盲人の等】五に盲人寶洲を見ざるの喩、二乘人淨眼なきが故に見ざるに喩ふ。

の宮殿の無量の莊嚴を見るも、其餘の大會は悉く知見せざるが如し。所以は何ん。覺と夢と異るが故に。一切菩薩、世界の諸王も亦復是の如し。彼夢中に見ざる所無きが如く、深く菩薩の妙法の門に入るが故に。善根を積集して一切の智願を出生するが故に。決定して明かに佛の功德を了るが故に。正しく菩薩の弘誓の道に向ふが故に。一切智を滿足するが故に。普賢の諸の行願を滿足するが故に。一切菩薩の圓滿地を得るが故に。一切菩薩の三昧自在を得るが故に。一切菩薩の無礙智を行ずるが故に。是故に、一切諸の大菩薩は悉く如來の不可思議の神變の境界を覩、深く入り明かに達して彼岸を究竟するも、一切聲聞の諸の大弟子は、皆知る能はず。譬へば雪山に諸の藥草有り、賢明なる良醫は悉く分別して知るも、捕獵放牧人等有りて彼山に遊止すと雖も、悉く知る能はざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。一切智を具足し、一切の菩薩の自在を出生して、明かに如來の神足變化を了れり。彼諸の聲聞の大弟子衆は、祇洹に處すと雖も、悉く覺知せず。所以は何ん。常に自ら安きを求めて廣く濟はざるが故に。譬へば地中に諸の寶藏有り、唯呪術者のみ、悉く能く別知して庫藏を記錄し、以て自ら資給して父母に奉養し、親屬を賑卹し、貧乏を拯濟するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。淨慧眼を以て佛の自在と不可思議の神力の境界とに入り、普く無量の方便大海と、諸の三昧海とに入り、一切諸佛を恭敬し供養して正法を守護し、四攝法を以て衆生を攝取せり。諸の大聲聞は祇洹に處すと雖も、如來の自在神變を覩ず。譬へば盲人の大寶の洲に至るも、行住坐

【譬へば人有り等】六に塗眼して身を隱くす喩、二乘人は深智なきが故に見ざるを喩ふ。
【譬へば比丘等】七に遍處定境の喩かの二乘深定なきが故に見ざるを喩ふ。
【天】空處識處。【衆生境界】靑黃赤白なり。
【譬へば人有り等】八は瞖身して自ら見る喩、彼二乘深行なきが故に見ざるを喩ふ。
【人の生…二種の天等】二天の人に隨ふ喩、二乘人は密智なきが故に見ざるを喩ふ。
【譬へば比丘の等】十に滅定無見の喩かの二乘の住位は

臥に衆寶を見ざるが如し。此の諸の聲聞も亦復是の如く、祇洹林の大法の寶洲に在りて親しく世尊に侍するも、如來の自在神變と、菩薩の大衆とを覩ず。所以は何ん。菩薩の清淨眼を得ざるが故に。次第に法界を覺する能はざるが故に。譬へば人有り、明淨の藥を以て而も用ひて眼を治し、夜の暗き中に於て大衆に處在し、悉く衆人の行住坐臥を見るも餘人は見ざるが如し。如來も亦爾り、無礙清淨の智眼を逮得して、悉く能く一切の世間を知見し、無量の自在神變と及び菩薩衆とを示現したまふも、諸の大聲聞は如來の自在と菩薩衆とを覩ず。譬へば比丘、大會の中に在りて、一切處の定、謂ゆる地水火風、天、衆生の境界に入るも、其餘の大衆は悉く地水火風、乃至境界と諸の一切處とを見る能はざるが如し。如來の現する所の不可思議は、菩薩悉く見るも、諸の大聲聞は知らず見ざるなり。譬へば人有り、翳身藥を以て自ら其目に塗り、行住坐臥に能く見る者無く、唯彼人のみ悉く能く覩見する有るが如し。如來も亦復是の如し。永く世間を離れて能く見る者無し、唯一切智の菩薩のみの境界なり。諸の聲聞の能く知る所に非ず。人の生に從ひて二種の天有り、常に隨つて侍衞せり、一には同生と曰ひ、二には同名と曰ふ、天は常に人を見るも、人は天を見ざるが如し。如來の神變も亦復是の如し。諸の聲聞の能く知見する所に非ず、唯諸の菩薩のみ乃ち能く覩見す。譬へば比丘の大衆の中に於て、滅盡定に入るが如し、諸根を捨せず亦滅度せず、而も諸の大衆の事を知見せず。所以は何ん。滅定の力の故に。諸の大聲聞も亦復是の如く、祇洹林の大衆の中に處して、諸根現

求むることを息むるが故に見ざるを喩ふ。

【爾時明淨願光等】第七偈頌歎德分、十方菩薩の說を擧げて十段に分つ、初段中十頌にありて前の三昧の業用を明す、前五頌は佛の身上の無礙を、次四頌は菩薩の衆德を歎じ、後一頌は用の所依を結す

前するも、而も如來の神變を覩見せず、入らず知らず、覺せず念ぜず、心意を生ぜず。所以は何ん。如來の境界は甚深にして彌曠く、知り難く見難く、原底を得難く、限量有ること無く、世間を遠離し、不可思議にして能く壞する者無く、諸の聲聞緣覺の境界に非ざればなり。

爾時、明淨願光菩薩、佛の神力を承け、十方を觀察して偈を以て頌して曰はく、

堅固の人を瞻察せよ、菩提は思議し難く
祇洹林に、無量自在の法を顯現せり
如來の神力持にて、無量の德を顯現するも
世間は悉く迷惑して、諸佛の法を知らず
法王の甚深の法は、無量にして思議し難く
大變化を顯現して、一切能く測る莫し
如來の莊嚴の相は、讚歎すとも盡すべからず
法は無相なるを以ての故に、一切の佛を宣明したてまつる
最勝は祇洹に於て、自在力を顯現したまひ
甚深にして議るべからず、語言の道を遠離せり
無量の德を觀察して、菩薩の衆は雲のごとくに集り
不思議の刹より來りて、最勝を供養したてまつる

【眞の佛子を等】第二の十頌中、初二は衆の具德を、次二は處に衆の集まるを、次一は斷障證理を、次二は不動にして普遍なるを、次一は佛力を結歸し、後二は佛法を了達せることを明す。

悉く諸の大願を滿たし、常に無礙の行を修し
一切の諸の世間は、能く其心を知る莫し
一切諸の緣覺と、無量の大聲聞とは
皆悉く、菩薩行の境界を知る能はず
菩薩の大智慧は、一切能く壞る莫く
諸の亂想を遠離して、深智の地を究竟せり
最大名稱の人は、深く無量の定に入り
自在力を顯現して、諸の法界に充滿せり

爾時、不可壞精進勢王菩薩、佛の神力を承けて、十方を觀察し、偈を以て頌して曰はく、

眞の佛子を瞻察せよ、功德智慧の藏は
菩薩の道を究竟じて、諸の世間を安隱にせり
無量の智は明瑩にして、禪定の心動せず
智慧甚だ深廣にして、境界は測るべからず
閑靜の祇洹林に、無量の妙莊嚴あり
菩薩は皆充滿して、悉く正覺に依りて住す
無量の大衆海は、一切所著無く
十方より來りて此に會し、華の師子座に處せり

【堅固の人を等】第三頌十中初三は法說、後七は喩說

衆の虚妄を除滅して、一切所染無く
垢を離れたる無礙の心は、諸の法界を究竟せり
智慧の幢を建立して、動かざること金剛の如く
諸法に變化無くして、無量の變を示現せり
一切十方界の、無量億の佛刹に
悉く能く遍く往詣して、而も亦身を分たず
釋師子を瞻仰するに、無量力自在なり
佛の威神を以ての故に、十方より大衆集まれり
佛子は悉く、一切の諸言道を究竟し
佛法は壞すべからず、法界地に安住せり
法性は壞すべからず、牟尼の甚深の法は
句身と及び味身と、分別するに窮盡すること無し

爾時、無上普妙德王菩薩、佛の神力を承けて十方を觀察し、偈を以て頌して曰はく、

堅固の人を瞻察せよ、智慧廣く圓滿にして
善く時と非時とを知り、衆の爲に法を演說せり
諸の外道を遠離し、諸の論師を調伏し
其所應に隨ひて化し、爲に自在力を現ぜり

【譬へば明淨の等】一、智三際に達するの喩。
【譬へば十五日の】二、無漏圓德の喩
【譬へば虛空の中に】三、自在遍知の喩。
【譬へば虛空の性の】四、德に限礙なき喩。
【譬へば大地の性の】五、法輪荷載の喩。
【譬へば大風の性の】六、無礙速遍の喩。
【譬へば大水輪の】七、智輪を本となす喩。

正覺は量法に非ず、亦無量の法に非ず
牟尼は悉く、有量無量の法を超越したまへり
譬へば明淨の日の、一切の闇を除滅するが如く
導師の智も亦然なり、普く三世の法を照す
譬へば十五日の、圓滿明淨の月の如し
最勝も亦是の如く、白淨の法圓滿なり
譬へば虛空の中に、淨日の光明曜きて
普く一切を照すが如く、佛の自在も亦然なり
譬へば虛空の性の、一切障礙無きが如く
世間の燈も是の如く、自在にして障礙無し
譬へば大地の性の、能く諸の群生を持するが如く
世間燈の法輪も、能く持すること亦是の如し
譬へば大風の性の、飄疾にして障礙無きが如く
佛法も亦是の如く、速かにして諸の世間に遍し
譬へば大水輪の、世界の依住する所なるが如く
智慧輪も亦然なり、三世佛の所依となる

爾時、無礙妙德藏王菩薩、佛の神力を承けて十方を觀察し、偈を以て頌して曰はく、

【譬へば大寶の山の】第四の十頌、九喩を擧ぐ、今一德山含物の喩、

【譬へば大海の水の】二、悲海除熱の喩。

【譬へば須彌山の】三、行高深證の喩。

【譬へば大海の中に】四、次の二頌は智海出生の喩。

【譬へば工なる幻師の】五、巧現應機の喩。

【譬へば如意珠の】六、隨願畢遂の喩。

【譬へば明淨の寶の】七、種智普照の喩。

【譬へば隨方の寶の】八、隨方現法の喩。

譬へば大寶の山の、諸の群生を饒益するが如く
如來の功德の山の、饒益も亦是の如し
譬へば大海の水の、清涼にして澄淨なるが如く
如來も亦是の如く、能く熱の渇愛を除く
譬へば須彌山の、大海に安峙するが如く
如來の山も亦然なり、深法の海に安住したまふ
譬へば大海の中に、能く一切の寶を出すが如く
無師の智も亦然なり、難を覺し無難を覺す
導師の甚深の智は、無量にして數有ること無く
自在力を顯現して、能く思議する者無し
譬へば工みなる幻師の、種種の事を示現するが如く
佛の智も亦是の如く、諸の自在力を現ず
譬へば如意珠の、能く一切の意を滿すが如く
最勝も亦是の如く、悉く諸の淨願を滿す
譬へば明淨の寶の、悉く能く一切を照すが如く
導師の智も是の如く、普く一切法を照す
譬へば隨方の寶の、正しく諸方に作して現ずるが如く

【譬へば淨水の珠の喩】九、見佛淨根の喩。右の九喩は序の如く大福、大悲大定、理智、量智悲用、種智、鏡智慈用を釋す。
【譬へば靑寶珠の】第五の十頌中、初一は見佛の益を歎じ、次三は菩薩を益することを頌し、次、一は三世間を現じ、次三は法を現じて益を成ずることを頌し、後二は法輪を轉じて世を益することを頌す

無礙の燈も亦然なり、諸法中に於て現ず
譬へば淨水の珠の、諸の濁水を淸淨ならしむるが如く
佛を見ることも亦是の如く、諸根悉く淸淨となる

爾時、法界善化願月王菩薩、佛の神力を承けて十方を觀察し、偈を以て頌して曰はく、

譬へば靑寶珠の、能く一切の色を靑からしむるが如く
若し佛を見る者有らば、皆悉く菩提に同ぜん
一一の微塵の中に、最勝は自在を現じて
悉く能く無量、無邊の諸菩薩を淨めたまふ
甚深の法を逮得せる、種種の莊嚴の事は
唯諸の菩薩のみの境にして、世間能く測ること無し
諸の莊嚴を具足せる、如來の淨妙の行は
菩薩の道を成就して、深く諸の法界に入らしむ
正覺の示現する所の、不可思議の刹に
一切の現在の佛と、菩薩とは悉く充滿せり
釋師子は、無量の自在法を成就して
大神變を示現すること、無量にして邊有ること無し
菩薩の種種の行は、無量にして邊有ること無く

【最勝は三世に等】第六の十頌中、初三は凡小の知る能はざるを頌し、次四は所不知の德を顯し、後三は能知の德を顯す。

如來の自在力は、之が爲に悉く顯現せり
佛子善く、甚深の諸の法界を修學して
無礙の智を成就し、一切法を明了せよ
如來の威神力は、衆の爲に法輪を轉じ
勝れたる功德を出生して、世をして悉く清淨ならしむ
如來の淨き境界は、甚深の圓滿の智
實智の大龍王にして、一切衆を度脫す

爾時、法義慧焰王菩薩、佛の神力を受けて、十方を觀察し、偈を以て頌して曰はく、

最勝は三世に有したまふも、聲聞の諸の弟子は
皆悉く、如來の擧足の事を知る能はず
古來今現在の、一切の諸の緣覺も
亦復如來の擧足の事を知る能はず
何に況んや世の凡夫の、結使に纏縛せられ
愚暗淨眼を覆ひて、而も能く導師を知らんや
最勝の無量の德は、諸の智慧を具足し
語言道を超出せるをもて、一切能く知る莫し
譬へば明淨の月の、光明は能く知るもの無きが如く

導師も亦是の如く、功德は議るべからず
如來の一方便は、無量の化を出生し
無數劫に思算するも、少分をも知る能はず
如來の一方便は、無量の德を出生す
一切智の正法は、皆悉く能く知る無し
若し菩提を求め、菩薩の行を修習する有らば
是れ彼境界にして、能く分別して知る所なり
不思議の方便もて、生死の海を超度せんは
若し吾我の心を滅せば、是れ則ち能く究竟するなり
淸淨の心無量にして、大願悉く成滿せば
佛の菩提と、最勝の境界とを逮得せん

大方廣佛華嚴經　卷第四十五

東晉天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之二

爾時、壞散一切衆魔智幢王菩薩、佛の神力を受けて十方を觀察し、偈を以て頌して曰はく、

大智無礙の身は、非身にして思議し難く
如來の淨法身は、一切能く測る莫し
不思議の行業は、此淸淨身を起し
無量の妙莊嚴は、三界に染せられず
普く一切を明照し、諸の法界を淸淨し
菩提の門を開發して、深定智を出生す
永く諸の垢染を離れ、一切の障を除滅して
世間の明淨の日のごとく、普く慧の光明を放てり
永く生死の流を絕ち、悉く三界を淨からしめ

【大智無礙の身等】第七の十頌中初五は佛の體德圓備なるを、次三は妙用測り難きを歎じ、後二は總結。

【癡を離れたる清淨の念等】第八の十頌中初二は智德を出すこと、次三は堅固の行、後五は斷德の行を頌す

菩薩の德を具足して、佛の菩提を成就せり
無量の色を顯現して、彼に於て所染無く
現すべき所の衆色は、一切能く思ふ莫し
人王の勝れたる智慧は、能く念念の中に於て
無量の菩提を具するも、一切能く知る莫し
無盡の智を具足するも、一切能く壞る莫く
彼一念の中に於て、三世の佛に明達す
一切の業を分別し、正念に菩提を思ふ
思に於て而も思に非ず、思の法は寂滅なるが故なり
甚深にして說くべからず、語言の道を遠離す
如來は此より起り、佛の業は思議し難し

爾時、明淨願智幢王菩薩、佛の神力を受けて十方を觀察し、偈を以て頌して曰はく、

癡を離れたる清淨の念は、一切法を聞持し
深慧は能く、諸佛の無盡海を分別す
菩薩の決定心は、菩薩行を修習して
甚深の智を出生し、諸の疑惑を除滅す
其心に疲厭無くして、懈怠を遠離し

常に精進を勤修して、諸佛の法を究竟す
信と智慧とを具足し、安住して動かすべからず
常に甚深の智を樂ひ、觀察に所著無し
無量無邊の劫に、諸の功德を積集し
專心に常に、諸佛の甚深の法に迴向す
生死の中に在りと雖も、其心に染著無く
諸佛の法に安住して、常に如來の行を樂ふ
世間の諸の所有、陰界等の諸法を
無畏もて悉く除斷し、佛の正法に安住す
世間は顚倒の惑にて、生死の輪常に轉ずれば
無礙の行を修習して、實に衆生を利益す
菩薩行は稱り難く、一切能く知る莫し
一切苦を除滅して、諸の群生を安樂ならしむ
善く菩提の智を覺して、普く諸の世間を照し
愚癡の暗を除滅して、一切衆に度脫す

爾時、壞散一切障智慧勢王菩薩、佛の神力を承けて十方を觀察し、偈を以て頌して曰はく、

【無量無數劫にも】第九の十頌中初二は佛の語業の利益、次二は身業の利益、次二は身語の雙益を歎ず、後四は見聞の利益を頌す。

無量無數劫にも、佛音は聞くを得難し
何に況んや親しく奉覲して、諸の疑惑を除滅せんをや
如來は世間の燈にして、一切法を究竟し
無上の勝福田もて、衆をして悉く清淨ならしめたまふ
如來の妙色身は、一切能く思ふ莫し
無量劫に諦觀するも、其心に厭足無し
佛子、善く、如來の妙色身を觀察して
一切障を除滅せば、究竟じて菩提を成ぜん
如來の妙色身は、淨妙の音を出生し
無礙の諸の辯才は、廣く菩提の門を開く
普く一切衆を照し、無量にして思議し難く
大乘の智を建立して、授くるに菩提の記を以てしたまふ
功德圓滿の日、出興して世間を照し
一切世の、無量の功德身を長養す
若し如來に値ふこと有らば、諸の惡道を遠離し
一切苦を除滅して、智慧の身を具足せん
若し如來を見ること有らば、能く無量心を發し

【菩薩は如來を等】第十の十一頌中初二は佛の菩薩を利益することを、次五は佛が衆生の爲に忍苦したまふ大悲の深厚を歎じ、次の一は忍苦の所以を述べ、後三は佛を見て益を成ずることを明す。

無數の智を長養して、諸の導師に値遇せん
若し如來を見ること有らば、定菩提心を得
能く自ら決定して、我は必ず菩提を成ずべしと知らん

爾時、分別法界智通王菩薩、佛の神力を承けて十方を觀察し、偈を以て頌して曰はく、

菩薩は如來を見るに、無量の淨功德あり
皆悉く善く迴向して、一切智を究竟す
衆生を饒益するが故に、如來は世間に出で
大悲心を具足して、世の爲に法輪を轉じたまふ
一切能く、大仙の普き慈恩に報ゆる無し
不可思議劫に、衆に代りて苦を受けたまふが故に
無量億劫の中に、諸の地獄の苦を受け
一切衆を捨てず、悉く佛を見ることを得しむ
普く能く衆生に代りて、具に無量の苦を受くるも
其心に疲倦無し、一切を度せんが爲の故に
一切、諸の世間の、有ゆる惡道の苦
如來は常に中に處して、悉く正法を聞かしめたまふ
一一の地獄に住し、不可思議劫に

【爾時、普賢菩薩以下】第八普賢開發分を明す、衆生をして信を生ぜしむる故なり。

具さに無量の苦を受くるも、終に諸佛を離れず
無量劫に、常に三惡道に在る所以は
諸の群生をして、智慧を長養せしめんと欲ふが故に
衆生は如來を見ば、諸の苦惱を除滅し
大智の、一切の佛の境界に安立せん
若し佛を見る者有らば、一切障を除滅して
功德藏を長養し、究竟じて菩提を成ぜん
如來は能く、世間の諸の疑惑を除滅し
其所應に隨ひて化し、悉く彼大願を滿ぜしめたまふ

爾時、普賢菩薩、一切の大衆を觀察して、重ねて開發し顯現し照明せんと欲し、法界に等しき方便を以て、廣く師子奮迅三昧を說けり。法界に等しく、虛空界に等しく、三世に等しく、一切衆生界に等しく、一切劫に等しく、一切業性に等しく、衆生の希望に等しく、衆生の欲に等しく、法の光明に等しく、隨時の教化に等しく、一切衆生の根に等しく、諸の菩薩の爲に十種もて廣く獅子奮迅三昧を說けり。何等をか十と爲す。謂ゆる廣く一切法界の中の、一切の佛刹微塵に等しき佛、次第に世に興り、正法を演說したまふを說く。廣く虛空界に等しき一切の佛刹の中の、盡未來劫の一切諸佛の所說を說く。廣く一切佛刹の中の一切の如來、現じて正覺を成じたまふを說く。廣く虛空界に等しき、一切佛

【爾時、普賢等】上述の重頌。

【一一の毛孔等】十頌あり次第に前の十法を頌す。

刹の中の佛、道場に坐し眷屬に圍遶せられ、菩薩大衆皆悉く往詣するを説く。廣く一念の中の三世一切の佛、變化身を出し、一切法界に充滿したまふを説く。廣く一身、一切の世界海に充滿し、一切の佛刹海を平等に照持したまふを説く。廣く一一の境界の中に、三世一切の諸佛の自在の功德地を顯現するを説く。廣く一一の微塵の中に、三世一切の佛刹微塵に等しき佛の、自在神力に顯現するを説く。廣く一一の毛孔より、三世一切の佛の大願海音を出し、盡未來劫の一切菩薩を開發し化導するを説く。廣く法界に等しき師子の座に處して、大衆に圍遶せられ、道場を莊嚴し、各其處に隨ひて妙法輪を轉じ、盡未來劫にも未だ曾て斷絶せざるを説く。佛子、此師子奮迅三昧は、是の如き等の不可説の佛刹微塵に等しき廣説有り。唯是れ如來の智慧境界なり。

爾時、普賢菩薩摩訶薩、重ねて師子奮迅三昧を明さんと欲し、佛の神力を承けて如來を觀察し、大衆を觀察し、如來の不可思議の境界を觀察し、諸佛の三昧を觀察し、不可思議の世界を觀察し、不可思議の智慧を觀察し、一切法の皆悉く如幻なるを觀察し、不可思議の諸佛の平等を觀察し、無量無邊の一切の音聲語言道を觀察せんが故に、偈を以て頌して日はく、

一一の毛孔の中に、普く最勝の海を現じ
佛は如來の座に處して、菩薩衆に圍遶せらる
一一の毛孔の中に、無量の諸佛海あり

道場にて華坐に處し、淨妙の法輪を轉じたまふ
一一の毛孔の中に、一切の刹塵に等しき
最勝は跏趺して坐し、普賢の行を演說したまふ
最勝は一刹に坐して、十方界に充滿し
無盡の菩薩は雲のごとくに、佛所に來詣せり
無量億の佛刹に、塵數の菩薩集まり
如來を圍遶して、爲に諸の法界を說く
諸の佛刹を顯現して、法界の智海に入り
普賢の行に安住して、諸佛の行を滿足せり
如來の、一切諸の世界に安住して
深く菩薩の行に入り、勝法雲を開かんと樂ふ
一一の刹にて無量、億劫に諸行を修し
彼行を修習し已りて、深法海を究竟し
大願海を滿足して、如來地に安住せり
最勝の法を出生し、普賢の行を具足し
功德海を成就して、無量の自在を得
如來身は雲の覆ふがごとく、一切諸佛の刹に

【爾時世尊】第九毫光示益分、衆をして法界に證入せしむるが故に、初に佛の放光を擧げて示法の緣を爲す。

【時に祇洹林】以下衆の緣に依りて法を見るを明す。

【其れ衆生の等】以下見法得益中初に見法の因緣と所得の益とを明す。

普く甘露の法を雨らし、衆をして佛道に住せしめたまふ

爾時、世尊、諸の菩薩をして師子奮迅三昧に安住せしめんと欲するが故に、眉間の白毫相より光を放ちたまひ、普照三世法界門と名け、不可說の世界微塵に等しき光明を以て眷屬と爲し、普く十方一切の世界海を照したまへり。時に祇洹林の菩薩大衆、普く雲集せる者、悉く一切法界虛空界に等しき、一切の佛刹、種種の色、種種の淸淨、種種の安住、種種の形、是の如き等の一切世界の諸大菩薩、現に道場に坐し、菩薩圍遶し、諸天供養し、等正覺を成ずるを見、或は不可說の佛刹微塵に等しき諸の眷屬の中に於て、妙音聲を出し、法界に充滿して淨法輪を轉ずるを見、或は天の宮殿に在り、龍の宮殿、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、及び人非人等の諸の宮殿の中に在るを見、或は人の聚落城邑、大王の京都に在りて、種種の身、種種の姓名、種種の色、種種の圓光、種種の光網、種種の辯、種種の眷屬、種種の敎持、種種の音聲を現じて、爲に法を說くを見る。此間の如來、諸の菩薩の爲に甚深の三昧、神力變化を現じたまへるが如く、一切法界虛空界に等しき十方一切の世海界の中に、國土身及び衆生身を現じ、諸業の起す所、乃至一毛孔の中に、一切悉く現ずるも亦復是の如し。而も三世を壞せず、衆生を壞せず、普く一切諸の衆生心を照し、色身淸淨にして應に化すべき所に隨ひて、普く一切衆生類の前に現じ、一切諸佛の妙法を開示して、衆生を調伏し、如來の自在神力を顯現す。

其れ衆生の如來の自在神通力を見聞し念知する者有るは、皆佛の宿世の善知識なり。皆

悉く四攝の善根を修習し、一向に專ら無上菩提を求め、諸の善根を攝して方便を成就せり。如來の不可思議の自在三昧を逮得して、悉く法界虛空界と等しく、或は法身を得、或は色身を得、或は菩薩の具足せる諸行を得、或は淸淨の諸波羅蜜を得、或は菩薩の圓滿の淨行を得、或は菩薩の諸地を得、或は菩提の自在を得、或は如來の不壞の三昧を得、或は如來の諸行の智力を得、或は如來の無礙辯才を得たり。此諸の菩薩は、是の如き等の十不可說の佛刹微塵に等しき諸の妙功德を得たり。謂ゆる種種の道、種種の門、種種の入、種種の度、種種の方便、種種の至、種種の方、種種の光明、種種の功德、種種の功德具、種種の自在なり。深く菩薩の諸の三昧海に入れり。謂ゆる普く法界を莊嚴する菩薩の三昧、普く三世を照して無礙なる三昧、不壞法界智の三昧、隨時に深く如來の境界に入る三昧、普く虛空を照す三昧、如來力を行ずる三昧、如來の無畏莊嚴師子奮迅三昧、一切法界の方便藏三昧、無礙法界の淨月三昧、淸淨莊嚴の法雲三昧、癡障を除滅する法王幢三昧、一一の境界の中に悉く一切の佛海を見る三昧、一切世間不可壞の身の淸淨なる光明智幢三昧、深く佛身に入る無壞三昧、一切世藏に隨順する三昧、諸法の無跡無依三昧、圓滿なる普照寂滅三昧、無所有にして善く化し普く化して遍く照す三昧、一切佛刹を攝持する三昧、一切佛刹を莊嚴して成菩提を現ずる三昧、一切の正法を行ずる三昧、一切衆生の境界を行じて無礙なる三昧、一切諸佛を生ずる三昧、一切の佛德海を究竟する三昧、一一の境界より盡未來際の功德を出生する三昧、一切如來の本生海を解了する三

昧、盡未來際に一切如來の種姓を護持する三昧、現在の十方一切の佛刹海を悉く淨めしなる三昧、一念の中に於て普く一切の佛住を照す三昧、障礙を遠離して深く一切の境界に入る三昧、一切刹を一佛刹に入らしむる三昧、一切の佛の化身を出す三昧、決定智慧の金剛王もて一切の根源に入る三昧、一切の佛身を住持するに皆一身藏にして差別無き三昧、一念の中に於て一切の佛の法界に住して方便盡くる無き三昧、一切法界の佛刹の中に於て涅槃を示現する三昧、無上地に住する三昧、一切世界の衆生をして、悉く其身を見しめて別異無き三昧、一切の佛智現前する三昧、一切法の實相を知る三昧、一念の中に於て具に分別して三世を知る三昧、一念の中に於て一切の法界藏を知る三昧、皆隨順して如來智の師子の行を知る三昧、一切境界に於て慧眼圓滿なる三昧、十力の境界に等しき三昧、一切境界に於て平等眼を以て示現する三昧、一切の妙色を出生して衆生見るに厭足無き三昧、無動藏の三昧、一法に一切法を攝する三昧、一音に普く一切の音聲を說く三昧、一切の佛の無二法の三昧、三世を離れたる三昧、一切劫を分別する不壞智の三昧、微細の方便もて十力に入る三昧、一切劫に菩薩の行を出生して斷ずる無き三昧、一切十方に普く現前する三昧、菩提は自在にして法界に無礙なる三昧、一切の覺を分別する正希望安隱幢の三昧、一切の莊嚴もて虛空を莊嚴する三昧、念念の內に於て化雲を出生する三昧、垢を離れたること空の如き如來の月光三昧、一切の佛持空の如き三昧、一切法の莊嚴法光三昧、一切法の義燈を開く三昧、十力の圓滿光三昧、三世一切の佛幢三昧、一切の佛の同一藏三

【彼諸の菩薩には等】次に法に因りて德を成ずること

昧、念念の中に於て一切事を發起し究竟する三昧、無盡の功德藏三昧、無量無邊の諸佛の境界を示現する三昧、一切法に住する金剛師子座の三昧、一切如來の變化出生し顯現して知見せざる無き三昧、一切のもの如來日を念ずる三昧、一日に悉く三世を覺る三昧、自然に寂靜解脫する三昧、一切の佛を見る三昧、鉢曇摩華もて莊嚴せる一切法界の決定智三昧、一切法に著無き虛空淨眼三昧、一方に十方海を攝する三昧、深く無底の法界に入る三昧、一切の法界三昧、一切の光を放つ寂靜身の三昧、一念に一切の通明願を出生する三昧、一切時一切處に菩提を成ずる三昧、一切の法界一莊嚴に入る三昧、一切の佛の住持する三昧、一切衆生の勝地智明三昧、一念の中に一身法界に充滿する三昧、一身の中に淸淨法界を顯現する三昧、普門より法界に入りて大莊嚴を顯現する三昧、一切の佛法の圓滿の輪智を住持する三昧、一切法の方便もて一方便を莊嚴する三昧、因陀羅網に衆生界の諸願を攝して精進住持する三昧、一切の世界輪を分別する三昧、蓮華の妙德自在の三昧、一切衆生身を分別する三昧、一切衆生身に對現する三昧、一切の音聲海を分別する三昧、一切の衆生地を了知する三昧、不可壞の大悲藏三昧、一切の佛は如來際に入る三昧、一切の佛の法門を修習する三昧、師子奮迅を觀察する菩薩の三昧なり。是の如き等の不可說の佛刹微塵に等しき三昧門は如來海に入り、一切の佛の自在三昧に入り、念念の中に於て法界に充滿せり。

彼諸の菩薩には一一皆妙師子の座有りて、悉く十方世界と等し。大自在甚深の智慧

を明す、別して十德を擧ぐ、一、深智を成就する德。【悉く衆生の爲に等】以下二に法を了して師となるの德。【寂滅の法を樂ひて等】以下は三に緣に隨つて著することなき德。【莊嚴せる妙法の等】以下四に衆生を成就する德。【一切衆生は等】以下五に解深くして行を具する德。【十力を具足して等】以下六に得法智能の德。【巧妙の方便等】以下七に巧便勝智の德。

を現じ、悉く諸地の明淨の智慧を得、普く一切は智性より生ずと觀じ、專ら一切智を求め、離癡の慧眼を具足し成就せり。悉く衆生の爲に調御師と作り、諸佛の平等の正法を修行して、決定して一切境界を了知し、分別して一切世界を了知す。寂滅の法を樂ひて世間を遠離し、常に閑靜を好み、諸の佛刹に遊びて染著する所無く、一切法に於て心所依無し。莊嚴せる妙法の宮殿に安住して、一切衆生を敎化し成熟して、一切衆生の爲に佛刹を顯現し、無上の智門を具足し成就し、離欲際に順じて智慧身を得、一切諸の有爲海を消竭して、一切衆生の爲に眞實際を顯し、法海の慧光具足し圓滿して、皆悉く堅固三昧に安住せしめ、大悲心を以て常に衆生を念ひ、一切衆生は皆悉く夢の如く、一切の如來は皆悉く電光の如く、一切の音聲は皆悉く響の如しと解り、一切法は皆悉く化の如しと解りて、諸願を滿足し、菩薩行を具へ、普智圓滿に、方便滿淨にして、心寂靜を樂ひ、一切諸の陀羅尼の智慧境界を成滿せり。十力を具足して、恐怖を遠離し、法界に安住して淨法眼を具し、一切法無所有の門を得て、無量智慧の大海を修行し、究竟じて智慧の彼岸に到り、悉く般若波羅蜜の力を得、神通波羅蜜を成就して衆生海を度し、三昧と波羅蜜とに於て悉く自在を得、善く一切を知りて智に錯謬無し。巧妙の方便もて法藏を開示し、辯才を具足して大願を成就し、諸力を具足して法雲盡くる無く、大衆の中に於て能く師子吼して、畏るる所無く、常に正法を求めて心に所著無く、淨慧眼を以て癡闇を滅除し、智月圓滿にして世の生滅を照し、智慧を成就して大光明を放ち、一切の諦を

【一切法の無礙の等】以下八に理智眞に契ふ德。

【淨法の光を等】以下九に攝生見佛の德。

【如來の甚深の地等】以下十に照法圓融の德。

照し、善巧の方便と智慧功德とは金剛の山のごとく、三世一切の法王を超出して無所畏を覺し、智の功德幢は諸の魔幢を滅し、精進圓滿の智幢を建立して、無上身を具足し成就せり。一切法の無礙の智慧を得、無盡智の眞實際を覺了して眞際に安住し、決定の無相三昧を修行し、巧方便は諸の菩薩行を生ず、無二の智慧は諦かに境界世間諸趣を見、普く佛刹を照して染著する所無く、一切法に於て癡闇を除滅し、智慧を究竟じて皆悉く圓滿ならしむ。淨法の光を放ちて十方界を照し、一切衆生の爲に不虛の福田と作る、若し見聞せん者は願ふ所成滿し、一切世間の功德の須彌と爲り、恐怖を遠離し、諸の外道を伏し、微妙の音を以て一切刹に遍く、常に諸佛を見て心に厭足無く、如來の自在法身を成就し、其所應に隨ひて而も之を化度し、能く一身を以て一切刹に滿ち、少方便を以て淸淨の自在神力を具足し、普く十方に遊びて障礙する所無く、智慧圓滿にして遍く法界を照し、一切衆の爲に明淨の日を曜かし、其所應に隨ひて功德を讚歎し、一切衆生の諸根の希望を了り、一切法に於て無諍の境界を得、分別して諸法の自性と大小の相攝とを了知せり。如來の甚深の地を決了して、句味身を說き、諸法の深義は窮盡有る無く、一言の中に於て普く一切の修多羅海を說き、一切諸の陀羅尼の廣き智慧身を究竟じて、無量劫の陀羅尼を究竟し、一念の中に於て決定して不可說の劫を了知し、一念の中に於て三世の法陀羅尼に了達し、普く無量の諸佛の法海を照し、一切衆生の爲に淨智慧を起して、正法輪を轉じ、能く壞する者無く、如來の智慧境界を成就して、常に善現三昧正受に入り、障礙を遠

【爾時彼諸の等】以下徳に因りて用を起すことを明す

讚して深く諸法に入り、一切法に於て勝智の自在を得、清淨に一切境界を莊嚴して、深く十方甚深の法界に入り、十方一切の法界を攝取し、一一の微塵の中に於て成正覺を現じ、無色の性に於て、一切色を現じ、能く一方を以て一切方を攝す。彼の諸の菩薩は是の如き等の無量の功德智慧の藏を具足し成滿して、常に一切の諸佛の爲に讚歎せられ、句味身を以て、其功德を說くとも、窮盡する能はず、皆悉く祇洹林に雲集せり。

爾時、彼諸の菩薩は、深く如來の功德大海に入る。入り已りて菩薩の身中及び樓閣の中、莊嚴具の中、師子座の中に於て、樂法の力を以ての故に、不可思議力の故に、念念の中に於て、各無量の光明雲を放ち、普く法界を照して、衆生を覺悟せしめたり。謂ゆる一切の寶香光明雲を出して、三世の諸佛の功德を讚歎し、微妙の音聲、十方に充滿せり。一切衆生雲の境界の光明を出して、一切衆生の清淨の業報を說き、微妙の音聲は十方に充滿せり。一切の菩薩の願行莊嚴光雲を出して、一切菩薩の願行功德を說き、一切の佛の變化身雲を出し、一切如來の微妙の音聲は十方に充滿せり。一切菩薩身雲を出して相好莊嚴し、一切佛刹に於て微妙の音を以て諸佛を讚歎し、十方に充滿せり。三世の佛の莊嚴道場雲を出し、一切の佛の成等正覺を現じて十方に充滿せり。一切境界の中に於て龍王雲を出し、一切香を雨らして十方に充滿せり。一切の佛身雲を出して普賢の行を歎じ、十方に充滿せり。一切佛刹の淨光明雲を出し、一切如來の轉法輪の音は十方に充滿せり。時に諸の菩薩は、威神力の故に、此法の力の故に、是の如き等の不可說の佛刹

【爾時文殊等】以下第十、文殊述分德。

【祇洹の中を等】以下は先づ述讃の頌に十三半頌あり、初五は祇洹中に顯示せられたる、三世間の法を歎じ、次の餘は諸菩薩等の得法業用を歎ず。

微塵に等しき雲を出せり。

爾時、文殊師利菩薩摩訶薩、佛の神力を承けて十方を觀察し、祇洹林の中の無量の莊嚴を讃歎せんと欲して、偈を以て頌して曰はく、

祇洹の中を觀察するに、如來の自在力にて
一切の境界より、無量の功德雲を出せり
無量の淨妙の色もて、種種に莊嚴し
皆悉く普く、十方諸佛の刹を照現せり
佛子の身の毛孔より、佛の音聲雲を出し
種種の寶莊嚴は、十方の刹に充滿せり
其身は梵王の如く、威儀常に安靜にして
遍く十方の刹に遊び、妙音聲を演出せり
如來の毛孔より、不可思議の身を出し
皆悉く普賢の如く、衆命の相もて莊嚴せり
菩薩は普く、三世の功德海を成就し
虛空に充滿して、莊嚴雲を出生せり
此祇洹の中に於て、妙音聲を演出して
普く一切衆の、善淨の業果報を說けり

【時に彼一切諸の等】次に德益を顯す中三段に分つ、今所得の行體を明す。
【一一の毛孔に等】次に所得の行相。

一一の境界の中に、悉く佛の刹海と
三世の諸の如來の、無量の自在力とを現ぜり
如來の毛孔の中より、一切諸の世界の
微塵に等しき佛刹は、皆悉く分別して現ぜり
一切境界の中より、諸佛雲を出生し
無量の善方便もて、一切衆を度脫せり
華雲、香焰雲、淸淨の摩尼雲
種種の莊嚴雲は、十方に充滿せり
三世一切の佛の、莊嚴せる妙道場は
此祇洹林に於て、一切悉く顯現せり
普賢等の佛子は、無量種に莊嚴し
衆生に等しき劫の中にて、修せし所の嚴淨の刹
是の如きの諸の世界は、悉く祇洹林に現ぜり

時に彼一切諸の菩薩衆は、如來の三昧を以て照されしが故に、一一皆不可說の佛刹微塵に等しき大悲の法門を得て、衆生を饒益し安樂にし攝取せり。彼諸の菩薩は、一一の毛孔に於て各不可說の佛刹微塵に等しき光明を出し、一一の光明の端に、各不可刹の佛刹微塵に等しき菩薩を出し、其身は尊重にして、諸の世間に於て最も殊勝と爲す。

【其所應に隨ひ等】以下次に行の勝用を明す。【不可說の佛刹等】行用を明す中先に總じて大用を辨じ以下別して悲用を顯す、中に五門化益あり、一に厭欣門、二に十度門、三に三輪門、四に三世間身、五に三業門序を以て知るべし。

其所應に隨ひて皆悉く顯現し、法界に充滿して衆生を教化し、未だ度せざる者を度し、一切未だ脫せざる者は脫せしむ。不可說の佛刹微塵に等しき諸天の宮殿の無常死の相と、一切諸法の皆悉く夢の如きとを現じ、道場を讚歎して一切菩薩の諸の大願門を說けり。或は一切世界に於て受生を示現し、一切衆生の爲に、廣く檀波羅蜜門を現じ、或は一切諸佛の圓滿の淨戒の功德、尸波羅蜜門を現じ、或は一切の肢節を斷ずる羼提波羅蜜門を現じ、或は精進を勤修する毘梨耶波羅蜜門を現じ、或は一切菩薩の禪定三昧相續解脫の法門と、如來の圓滿の智慧の光明とを現じて、專ら一切の佛法を求め、一一の句身味身の義の爲の故に、能く無量無數の身を捨てて、諸佛の所に詣りて無量の法門を問へり。善く時會を知り、其所應に隨ひて爲に法を說き、一切衆生をして一切智に住して方便智光海門を逮得せしめ、悉く能く諸の佛菩薩を供養し、衆魔を降伏し、諸の外道を制して、悉く能く菩薩の力門を顯現し、一切の技術と明淨の智地とを知り、衆生をして勝妙の法を得しめんと欲して、悉く能く衆生の諸根煩惱、習氣と、種種の業報と及び智慧地とを了知せり。是の如き等の不可說の佛刹微塵に等しき法門を以て、衆生を教化せり。或は天宮を現じ、或は龍宮、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等の宮を現じ、或は梵宮を現じ、或は人宮を現じ、或は閻羅王宮を現じ、或は地獄、餓鬼、畜生の處を現ぜり。大悲智慧と及び諸の大願とは沮壞すべからず、衆生を攝取して方便を捨てず。或は名號を以て教化し、或は憶念を以て教化し、或は音聲を以て教化し、或は圓滿の光明を以て教化し、

【爾時文殊師利童子等】以上にて本會を明し竟り、下は末會を明す、初めに發起能化の緣を明す。【本願具足の天等】以下十天八王を擧ぐ。法門の神並に法門の自在を擧ぐ並に文殊の威德を顯すのみ。

或は光明の網を以て教化し、其所應に隨ひて悉く其前に現じ、是處の莊嚴を現じて佛所を離れず、樓閣の座を離れずして而も普く十方に現じ、或は化身の雲を放ち、或は無二の身を現じて、十方に遊行し、衆生を教化し、或は聲聞の色像を現じ、或は梵天の色像を現じ、或は一切の苦行の色像を現じ、或は良醫の色像を現じ、或は商人の色像を現じ、或は正命の色像を現じ、或は伎人の色像を現じ、或は天の色像を現じ、或は一切の技術の色像を現じ、或は一切の城邑、聚落、京都の色像を現じ、其所應に隨ひて其所に往詣せり。或は種種の色身音聲を現じて衆生を教化し、或は諸の語言の法、種種の威儀、種種の菩薩行、種種の巧術を現じて、一切の智明は世間の燈と爲り、普く衆生の業報莊嚴を照し、諸方を分別し、悉く圓滿の菩薩の諸行を行じ、悉く一切の城邑、聚落、京都を現じて衆生を化度せり。

爾時、文殊師利童子は、善安住樓閣より出づ。一切同行の諸の菩薩と倶なり。金剛力士は常に隨ひて侍衞せり。本願具足の天、樂つて法を聞く池天、常に大悲を習ふ泉池方天、愚癡を除滅する夜天、佛を出生する晝日天、正法界虛空を莊嚴する河天、衆生の生死を度する海天、一切の善根薩婆若を長養する山天、一切の衆生身を莊嚴し、諸願を滿足して一切の佛を供養する身天、一切衆生を守護する城天、一切衆生を守護する夜叉王、一切衆生をして歡喜せしむる乾闥婆王、一切の餓鬼趣を除滅する鳩槃茶王、生死海に於て衆生を拔濟する迦樓羅王、正しく薩婆若を求むる阿修羅王、佛を見て歡喜し厭足無き摩睺羅伽王、常に生死を厭ふ諸天王、常に佛を敬禮する諸の梵天王等、倶に佛所に詣りて、頭面に足

【爾時尊者舍利弗は等】以下次に教化を成ずることを明す、初に攝比丘會中に先づ身儀の攝益を明す。
【自房より出て】小涅槃を捨つることを表す。
【文殊……に向ふ】一乘道に趣向するの義。
【新に出家】羅漢果を得ざる故、染習深からず、廻し易きを明す故なり

を禮し、諸の供養を設け已りて、南方に辭退せり。

爾時、尊者舍利弗は、佛の神力を承けて、文殊師利童子の、菩薩の莊嚴を以て自ら莊嚴して、祇洹林に出でて南方に遊行するを見たり。見已りて是の如きの念を作さく、『我今當に文殊師利菩薩と倶に行くべし。』爾時、尊者舍利弗は、六千の比丘の眷屬の與に圍遶せられ、自房より出でて佛所に來詣し、足を禮して辭退し、文殊師利に向へり。此六千の比丘は是れ舍利弗の共行の弟子にして、皆新に出家せるなり。其名を海智比丘、大善調伏比丘、大童子比丘、功徳光比丘、電光興比丘、淸淨行比丘、天妙徳比丘、因陀羅慧比丘、梵天比丘、寂靜慧比丘と曰へり。是の如き等の六千の比丘は、已に曾て過去の諸佛を供養し、諸佛の所に於て諸の善根を植ゑ、性樂淸淨にして信心明徹し、諸の大願を行じ、佛の境界を觀じ、法の實智を了りて衆生を饒益し、常に樂つて專ら諸佛の功徳を求めたり。此等の比丘は皆是れ文殊師利の化度する所なり。

爾時、尊者舍利弗、大衆を觀察して海智比丘に告げて言はく、『汝は、文殊師利菩薩の淸淨の身は、相好莊嚴して、一切の天人の能く思議する莫く、光明圓滿にして、無量の衆生をして歡喜の心を發さしめ、大莊嚴の妙光明の網を放ちて、衆生の無量の苦惱を除滅するを觀察すべし。其眷屬の善根を成就せるを觀ぜよ。其遊歩は威儀庠序にして、遊行する處は自然に平正にして、十方無礙なるを觀ぜよ。其功徳所行の道路は、其傍に、悉く衆妙の寶藏有りて、自然に發れ出づるを觀ぜよ。其過去の諸佛を供養したる善根の依果

【爾時文殊……諸比丘等】第二に諸業の攝益を明す中先づ自分法を授く

は、衆の林樹より莊嚴藏を出すを觀ぜよ。彼一切諸天の大王の恭敬し禮拜して供養したる雲雨を觀ぜよ。海智、汝、文殊師利を觀ぜよ。一切如來の眉間の毫相より、無量の光を放ちて諸佛の法を說き、悉く其頂に入る。

爾時、尊者舍利弗、諸の比丘の爲に文殊師利の無量功德と、諸の大莊嚴とを讃說せり。彼の諸の比丘は讃歎を聞き已りて皆悉く歡喜し、其心淸淨にして諸の垢穢を離れ、身體柔軟にして諸根を調伏し、障礙を遠離して現に諸佛を見、正しく菩提を求めて菩薩の淸淨の諸根を逮得し、菩薩の力を具へ、大悲を長養し、諸の波羅蜜に入り、弘誓の願を發し、悉く十方の諸の如來海を見たり。時に諸の比丘、尊者舍利弗に白して言はく『唯然り、大師、願くば俱に往いて文殊師利に詣でよ。』爾時、尊者舍利弗、諸の比丘と與に其所に往詣せり。到り已りて文殊師利に謂く『此諸の比丘は、皆新に出家して仁者を見んと欲す。』

爾時、文殊師利童子、卽ち爲に菩薩の自在を顯現し、象王の廻るが如く比丘を顧視せり。時に諸の比丘は頭面に足を禮し、却きて一面に住し、合掌して立ち、是の如きの念を作さく『我等、此禮拜の功德を以て、法の實相を知ることは、和上舍利弗、釋迦牟尼世尊の如く、淸淨の身と相好の音聲と、神力の自在とを得るは、文殊師利の如くならん。』

爾時、文殊師利、諸の比丘に告げたまはく『汝等當に知るべし、若し善男子善女人、十種の大心を成就せば、則ち佛地を得ん。況んや菩薩地をや。何等をか十と爲す。謂ゆる

【如來十眼の境界】所見の境界廣大無邊の故に。

廣大の心を發して一切善根を長養し、不退を究竟じて心に厭足無く、一切の佛を見て恭敬し供養して心に厭足無く、正しく一切佛法を求めて、心に厭足無く、遍く菩薩の諸波羅蜜を行じて心に厭足無く、一切の菩薩三昧を具足して心に厭足無く、一切三世の流轉に於て心に厭足無く、佛刹を嚴淨し、十方に充滿して心に厭足無く、一切衆生を教化し成熟して心に厭足無く、一切刹に於て、一切劫の中に菩薩行を行じて心に厭足無く、廣大の心を發して一切の佛刹微塵に等しき諸波羅蜜を修習し、一切衆生を度脫して佛の十力を具へしめて心に厭足無し。若し善男子善女人、是の如き十種の大法を成就せば、則ち能く一切善根を長養し、生死の趣と一切世間性とを離れ、聲聞緣覺の地を超出して、如來の家に生れ、菩薩の大願を具足し成就し、菩薩行を行じ、菩薩地に住し、如來の功德力を成就し、衆魔を降伏し、諸の外道を制せん。」彼の諸の比丘、此法を聞き已りて、皆無礙の淨眼三昧を得、悉く十方一切の如來と及び其眷屬と無量の衆生とを見、亦種種の世界の形類と衆寶の宮殿と及び諸の微塵とを見、乃至如來の十眼の境界をも皆悉く覩見し、彼の諸の如來の、種種の句身味身と種種の辯才微妙の音聲とを以て說きたまふ所の法海を皆悉く聞知し、彼世界の中の一切衆生の心念と諸根とを皆悉く了知し、彼衆生の過去未來の諸趣の受生を知れり。又能く彼過去未來各十劫の事を知り、彼如來の十種の本生、十種の菩提を成就する自在、十種の轉法輪、十種の神力、十種の教誡、十種の說法、十種の辯才を知れり。此三昧を得たる時、十種の實際菩提心と、一萬の三昧と、一萬の淨波羅蜜とを具足

【爾時……諸の比丘を等】次に勝進の法を授くることを明す。

【不死の通明】大悲を因となし業繫を離るるが故。分段を離るるが故。

【爾時……彼諸の比丘の等】第二に龍王を攝して法界に入らしむる會。

【時に覺城の人】以下は通じて第三に攝萬財會。初に十信行を成ぜしむる中、四段あり先づ衆集を明して所被の機を顯す。

し成就して、大智慧の圓滿の光明と菩薩の十明を得て菩提心に住せり。

爾時、文殊師利菩薩は、諸の比丘を勸めて普賢行を修し、普賢行に住ぜしめ、彼諸の比丘は大願海を出生せり。大願海を生じ已りて身心清淨にして、不死の通明を得たり。是明を得已りて、此處を離れずして、一切如來の法身を出生して十方に充滿し、一切の佛法を具足せり。

爾時、文殊師利菩薩は、彼諸の比丘の菩提心を建立し已りて、其眷屬と與に漸く南方に遊び、覺城の東に至り、莊嚴幢娑羅林の中の大塔廟の處に住せり。過去の諸佛の遊止せられし處にして、亦是れ過去の諸佛の菩薩たりし時、苦行を修せし所なり。此處は常に一切の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、人非人等に供養せらる。時に文殊師利は、即ち此處に於て普照一切法界修多羅を說き、百萬億の修多羅有り、以て眷屬と爲す。此法を說きし時に大海の中に於て無量千億の龍王有り、眷屬と倶に文殊師利に來詣して、此法を聞き已りて龍趣を厭離し、正しく佛道を求め、龍身を捨て已りて天人の中に生じ、一萬の龍王は阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。

時に覺城の人、文殊師利莊嚴幢娑羅林の中の大塔廟の處に在すを聞けり。聞き已りて、優婆塞、優婆夷、童男、童女、皆悉く往いて文殊師利に詣でたり。時に優婆塞有り、名けて大智と曰ひ、千の優婆塞の眷屬と倶なり。其名を須達多優婆塞、婆須達多優婆塞、功德光優婆塞、名稱德優婆塞、寂靜德優婆塞、歡喜德優婆塞、善慧優婆塞、大慧優婆塞、賢優婆塞、

【優婆塞】ウパーサカ(Upāsaka)善宿男、近事男等と譯す。

【優婆夷】ウパーシカー(Upāsikā)近事女と譯す。

【爾時文殊師利等】二に機を觀察して爲に方便を說授することを明す。

賢妙德優婆塞と曰へり。是の如き等の千優婆塞と倶に、頭面に足を禮して退きて一面に坐せり。復五百の優婆夷有り、其名を大慧光優婆夷、善光優婆夷、善身優婆夷、可樂身優婆夷、跋陀羅優婆夷、賢德優婆夷、賢光優婆夷、光明幢優婆夷、妙德光優婆夷、善眼優婆夷と曰へり。是の如き等の五百の優婆夷と倶に、頭面に足を禮して退きて一面に坐せり。復五百の童子有り、其名を善財童子、善行童子、善戒童子、善威儀童子、善精進童子、善心童子、善慧童子、善覺童子、善眼童子、善臂童子、善光勝童子と曰へり。是の如き等の五百の童子と倶に頭面に足を禮して退きて一面に坐せり。復五百の童女有り。其名を善行童女、跋陀羅童女、悅樂顏童女、堅固慧童女、妙功德童女、勝體童女、梵天與童女、功德光童女、善光明童女と曰へり。是の如き等の五百の童女と倶に頭面に足を禮して、退きて一面に坐せり。

爾時、文殊師利、覺城の大衆集り已れるを知り、此所應に隨ひて、大慈の力を以て彼をして淸涼ならしめ、大悲現前して將に法を說かんが爲に甚深の智慧もて其心を分別し、大辯力を以て爲に法を說かんとして、善財童子を觀察せり。「何の因緣を以てか名けて善財と曰ふや。」と。此童子は、初め受胎の時、其宅內に於て七大寶藏有り、其藏より普く七寶の樓閣を出し、自然に金、銀、瑠璃、玻瓈、眞珠、硨磲、碼碯を周備せり。此七寶より七種の牙を生ぜり。時に此童子は胎に行ること十月にして出生し、端正の肢體具足せり。此七種の寶牙は、高さ二尋にして廣さ七尋なり。又其家の內に自然に五百の寶器を具有し、衆寶を盛滿せり。金の器に銀を盛り、銀の器に金を盛り、金剛の器に衆香を盛り、衆香の器に

寶衣を盛り、玉石の器に上味饌を盛り、摩尼の器に雜寶を盛り、種種の寶器に酥油蜜及び醍醐、資生するの具を盛り、瑠璃の器に衆寶を盛り、玻瓈の器に硨磲を盛り、硨磲の器に玻瓈を盛り、碼碯の器に赤珠を盛り、赤珠の器に碼碯を盛り、火珠の器に淨水の珠を盛り、淨水珠の器に火珠を盛れり。是の如き等の五百の寶器は自然に行列せり。又衆寶を雨らして諸の庫藏に滿てり。此事を以ての故に、婆羅門の中の善く相を明す師は、字けて善財と曰へり。此童子は、已曾過去の諸佛を供養し、深く善根を種ゑ、常に清淨を樂ひ、善知識に近づき、身口意淨くして、菩薩の道を修し、一切智を求め、諸佛の法を修し、心の淨きこと空の如くして、菩薩の行を具へたり。

爾時、文殊師利菩薩、象王の廻るが如くに善財を觀察して、之に告げて曰はく、「吾當に汝が爲に微妙の法を説くべし。即ち爲に諸佛の正法を分別し、諸佛の次で世に興るの法、淨き眷屬の法、轉梵輪の法、諸佛の色身相好清淨莊嚴の法、一切諸佛の法身を具するの法、諸佛の音聲妙莊嚴の法を分別し、一切如來の平等の正法を説くべし。」

爾時、文殊師利は、善財等の一切大衆、此法を説くを聞きて、皆大いに歡喜し、菩提心を發せるを知り、過去の諸の善根を顯明し已りて本座を捨てず、應の如く覺城の衆生を化度し已りて南方に遊行せり。

爾時、善財童子は文殊師利に從ひて、佛の是の如き諸の妙功德を聞き、專ら菩提を求めんとて、文殊師利に隨從し、偈を以て頌して曰はく、

【爾時文殊師利等】三に正しく所授の法を説くを明す。

【爾時文殊師利等】以下四に勝進行を引成することを明す。

【過去の諸の善根を顯明し】彼過去所修の善根をして今菩提心に由るが故に更に增長を得

しめ、失沒せざらしむる故に顯明といふなり。

【本座を捨てず】覺城を離れずして遍遊するを明すなり。

【三有を城郭となし】頌に三十四頌初四は己れの迷論して自ら出づる能はざるを傷み、後三十は文殊の德を歎じて救濟を請求するなり。

【圓滿無上の悲】三十頌中初九は文殊の九種功德を歎じて、その救厄を求めて、生死の苦を離れんと悕ふ九種の德とは、一悲智德、二慈慧德、三法化德、四願滿德、五救苦德、六自在德、七力用德八善淨德、九淨明德。

三有を城郭と爲し、高慢を垣牆と爲し
諸趣を却敵と爲し、染愛を深塹と爲し
愚癡の闇に覆蔽せられ、三毒常に熾んに燃え
惡魔を君王と爲し、童蒙依止して住す
貪愛に纏縛せられ、諂曲は正行を壞り
疑惑は慧眼を障へて、諸の邪道に流轉す
慳嫉に繫縛せられ、餓鬼の難に趣向し
生老病死逼りて、愚癡は趣輪を轉ず
圓滿無上の悲と、清淨の智慧の日とは
煩惱の海を消竭す、願くば顧みて少しく觀察したまへ
圓滿無上の慈と、慧光ともて衆生を安んじ
一切曜さざる無し、月王、願くば我を照したまへ
一切法界の法は、淨法を四兵と爲し
常に正法輪を轉じたまふ、願くば我を化するに妙法もてしたまへ
菩提の願を具足し、功德藏を積集して
一切衆を饒益す、大師、願くば我を度したまへ
忍鎧もて身を莊嚴し、智慧の劍を執持して

【諸の顛倒を遠離し】以下二十頌は德を歎じてその果法を求め、成行得果を悕ふ。

魔の險惡道に於て、我を濟ひ衆難を免れしめたまへ
法の須彌頂に住し、妙定の天女侍り
阿修羅を降伏す、帝釋、我を觀察したまへ
離垢の力を具足して、一切有を分別したまふ
世間の明淨の燈、願くば我に正趣を示したまへ
諸の惡道を遠離して、悉く善趣を淨からしめ
我に解脱の門を開きて、諸の世難を超出せしめよ
常、樂、我、淨に著して、生死に迷惑するも
淸淨の智慧眼もて、願くば解脱の門を開きたまへ
諸の顛倒を遠離し、無畏にして正道を知り
諸の正趣に了達せり、我に菩提を示現したまへ
正見地に安住せる、諸佛の功德樹は
常に正覺の華を雨らす、願くば我に菩提を示したまへ
世間の明淨の日なる、三世の諸の如來は
法の如く來去したまふ、願くば我をして悉く見しめたまへ
一切の業を分別して、深く諸法の性を知れる
決定智慧の乘、我に摩訶衍を示したまへ

諸願の輪成滿して、大悲盡すべからず
淨妙の德もて莊嚴せり、我を菩提の乘に安んぜしめたまへ
淨法界を具足し、大慈もて觀察を爲し
功德の華もて莊嚴せり、我に第一乘を賜へ
梵行の座に安住し、三昧の女朝に侍り
微妙法の音樂あり、我に法王の道を示したまへ
無盡の四攝藏、功德莊嚴の智
光明は一切を照す、願くば速かに勝道を示したまへ
施慧の圓滿なる光あり、旃檀の戒を身に塗り
忍辱もて大莊嚴せり、願くば速かに正道を示したまへ
深く諸の禪定に入り、群生の類を教化して
方便乘を具足せり、我を勝法の乘に安んぜしめたまへ
諸願の圓滿なる輪は、永く生死の輪を絶ち
持智の力を具足せり、我を妙法の乘に安んぜしめたまへ
一切悉く殊妙にして、大悲もて衆生を觀じ
勝妙の行を究竟せり、我を實智の乘に安んぜしめたまへ
金剛の慧に安住し、一切智を究竟じて

諸の障礙を除滅す、我を賢聖の乘に安んぜしめたまへ
慈悲甚だ彌廣にして、諸の群生を安樂にし
法界に等しき淨眼あり、我を無上の乘に安んぜしめたまへ
衆の苦陰と、諸の業煩惱の輪とを除滅し
一切の魔を降伏せり、我を正法の乘に安んぜしめたまへ
智慧十方を照し、諸の法界を莊嚴し
衆生の願を滿足せしむ、我を勝妙の乘に安んぜしめたまへ
心の淨きこと虛空の如く、邪見愛を除滅して
一切衆を饒益す、我を勝法の乘に安んぜしめたまへ
安住すること風輪の如くに、普く一切刹を持して
衆をして定地に住せしむ、我を殊勝の乘に安んぜしめたまへ
安住すること大地の如くに、大悲の力を具足して
智慧もて衆生を益す、我を最勝の乘に安んぜしめたまへ
四攝の光圓滿にして、群生の類を饒益し
總持清淨の光あり、我に明淨の日を示したまへ
淨慧眼を開發したる、莊嚴妙智の王は
冠るに無上冠を以てしたまふ、法王、慈もて我を顧みたまへ

大方廣佛華嚴經　卷第四十六

東晉天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之三

【爾時文殊師利等】以下第三に文殊攝受分。

【善い哉功德の藏】以下偈頌中初一は善財が已成の行を歎じ、後九は普賢行を歎じて修せしむ。

爾時、文殊師利、象王の廻るが如く、善財童子を觀じて、是の如きの言を作さく、『善い哉善い哉、善男子。乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、善知識を求め、善知識に親近し、菩薩行を問ひ、菩薩の道を求めんとせり。善男子、是を菩薩第一の藏にして一切の智を具すと爲す。謂ゆる善知識を求めて親近し恭敬して之を供養するなり。是故に善男子、應に善知識を求めて親近し恭敬し、一心に供養して厭足無く、菩薩行を問ふべし、「云何が菩薩道を修習し、云何が菩薩行を滿足し、云何が菩薩行を清淨にし、云何が菩薩行を究竟し、云何が菩薩行を出生し、云何が菩薩道を正念し、云何が菩薩の境界道を緣じ、云何が菩薩の道を增廣し、云何が菩薩の普賢行を具するや」と。』

爾時、文殊師利、善財童子の爲に、偈を以て頌して曰はく、

善い哉功德の藏、能く我所に來詣して
廣大の悲心を發し、專ら無上道を求めたり

【先づ諸の大願等】此一頌は發大願を敎へて行の本となさしむ。

【若し諸の菩薩】以下二頌は普賢行を擧げ、彼を勸めて求めしむ。

【無量にして邊有る等】以下六頌は普賢行を辨ず、一多く法を聞くの行、二多く佛を見るの行、三敎に順じて修行すること、四一切處の行、五一切時の行、六大益を成ずるの行。

先づ諸の大願を發し、衆生の苦を除滅し
菩薩行を究竟して、無上道を成就せよ
若し諸の菩薩有り、生死の苦を厭はずして
普賢の行を具足せば、一切能く壞ること莫けん
功德の光勝れてより、淸淨の功德海となる
正しく普賢の行を求めて、一切の衆を饒益せよ
無量にして邊有ること無き、世界の諸佛の所に
淨き法雲を說くを聞き、受持して忘失せざれ
悉く十方界に於て、普く無量の佛を見たてまつり
諸の願海を成滿して、菩薩行を具足せよ
方便海を究竟して、如來地に安住し
諸佛の敎に隨順して、一切智を逮得せよ
一切世界の中に、法王の積劫の行なる
普賢の道を具足して、佛の菩提を究竟せよ
一切刹の劫海に、菩薩の行を修習し
諸の大願を滿足して、普賢乘を成就せよ
無量の諸の衆生、彼名號を聞かん者は

普賢の願を修習して、無上道を成ずるを得ん

爾時、文殊師利、此偈を說き已りて、善財に告げて言はく、『善男子、此南方に於て一國土有り、名けて可樂と曰ふ、其國に山有り、名けて和合と曰ふ、彼山中に一比丘有り、功德雲と名く。汝彼に詣りて問へ、「如何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修し、乃至云何が普賢の行を具するや」と。善男子、彼比丘は善能く菩薩の所行を顯說せん。』

時に善財童子、文殊師利に從ひて法を聞き、歡喜して頭面に足を禮し、遶ること無數匝して瞻仰し悲戀し、泣涕して辭退し、漸漸に南に行けり。可樂國に向ひて和合山に登り、彼山中に於て十方に周遍し、一心に觀察して、大師を求覓すらく、「何の所に在すと爲すや」と。是の如く尋求すること乃し七日に至る。爾時、善財、彼比丘は乃し山頂に在して、靜思して經行したまへるを見已りて馳せ詣り、頭面に足を禮し、右遶して住し、大聖に白して言さく、『我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。我、大師の善能く宣揚したまふを聞けり。唯願くば慈を垂れて、具足し演說したまへ。』時に彼比丘、善財に告げて言はく、『善い哉善い哉、善男子。乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發して菩薩行を問へり。善男子、是の如き事は難中の難なり。謂ゆる能く菩薩の所行を問ひ、菩薩の道を修し、菩薩の境界に入り、清淨の菩薩道を出生し、菩薩の淸淨の廣心を求め、諸願を具足し、世間の應に化すべき所の者に隨順し、生死の中に於て解脫の門を求め、有爲無爲、心に染著せず。善男子、我解

【爾時、文殊師利等】以上にて文殊の攝化に依りて信位成滿せるを以て十住初發心住の知識を指示して進趣せしむ。文に五分あり、初に法を擧げて修を勸む。

【時に善財童子等】第二に敎に依りて趣入することを明す。

【可樂國等】以下第三に推求簡擇を明す。

【爾時、善財】以下第四に正しく法界を得ることを明す。中に於て五あり、一に人を見、二に禮を設け、三に諮問し、四に讚問し、五に正說す。

【解脫】定に依りて發すところの作用の無礙なるを解脫といふ。

【陀羅尼】ダーラニ(Dhāraṇī)總持といふ、諸の善法を憶持して失はざる義。

【豈能く菩薩の等】以下第五に抑推勝進を明す、初一句は總、餘は別、これに二十一門あり、初十は念佛の勝德圓備を明し、後十一門は念佛の妙用自在を顯す。

脫の力に於て清淨の方便の慧眼を逮得し、普く照して一切世界を觀察するに、境界無礙にして、一切障を除く。一切の佛の化の陀羅尼力は、或は東方の一佛、二佛、十、百、千、萬、十億、百億、千億、百千億の佛を見、或は百億那由他、千億那由他、百千億那由他の佛を見、或は無量阿僧祇、不可思議、不可稱、無分齊、無邊際、不可量、不可說、不可說不可說の佛を見、或は閻浮提の微塵に等しき佛を見、或は四天下の微塵に等しき佛を見、或は小千世界の微塵に等しき佛を見、或は二千世界微塵に等しき佛を見、或は三千大千世界の微塵に等しき佛を見る。南西北方四維上下も亦復是の如し。種種の形色、種種の自在、遊戲神通、種種の眷屬莊嚴、大光網を放ち、種種清淨に莊嚴せられたる佛刹は、受化の者に隨ひて自在の菩提の法門を示現し、諸の如來の大衆の中に於て師子吼したまふを見る。善男子、我は唯此普門光明觀察正念諸佛三昧を知るのみ。豈能く菩薩の圓滿清淨の智行を了知せんや。諸の大菩薩は圓滿にして普く照す念佛三昧門を得て、悉く能く一切の諸佛と及び其眷屬と嚴淨の佛刹とを觀見し、一切衆生の顚倒を遠離する念佛三昧門を得て、一切衆生の所應に隨ひて悉く淸淨ならしめ、一切力究竟の念佛三昧門を得て諸佛の十力を正念し修習し、諸法の中に心顚倒無き念佛三昧門を得て、悉く一切の佛雲を觀見るを得、彼佛の所に於て聞法し受持す。十方一切の如來を分別する念佛三昧門を得て、悉く一切世界海中の諸の如來海を見。不可見不可入の念佛三昧門を得て、微細の境界に於て一切の佛の自在の境界を見。諸劫不顚倒の念佛三昧門を得て一切劫に於て常に諸佛を見、未だ曾て遠離せ

【爾時、功德雲等】上來初住を竟り、次に第二治地住を明す、文中五段あること前に準ずべし。
【具因の善根等】具因とは地前の善根、大地とは地上、大力とは是れ佛地の善なり。

す。隨時の念佛三昧門を得て一切の時に於て常に諸佛を見。佛刹を嚴淨する念佛三昧門を得て一切佛刹を起して能く壞する者無く、普く諸佛を見。三世不顚倒の念佛三昧門を得て悉く三世の諸佛及び其眷屬を見る。無壞境界の念佛三昧門を得て一切境界に於て悉く諸佛を見。寂靜の念佛三昧門を得て一念の中に於て悉く一切世界中の一切如來の涅槃を示現したまふを見。離月離時の念佛三昧門を得て一日の中に於て悉く一切如來の遊行し敎化したまふを見。廣大の念佛三昧門を得て一佛身結跏趺坐して法界に充滿したまふを見、微細の念佛三昧門を得て一毛孔に於て一切の佛、等正覺を成じたまふを見、莊嚴の念佛三昧門を得て、一念の中に於て一切の佛の一切世界に於て等正覺を成じ神力自在なるを見、淸淨事の念佛三昧門を得て一切佛の慧光普く照し妙法輪を轉じたまふを見、淨心の念佛三昧門を得て自心明了にして一切佛を見、淨業の念佛三昧門を得て一切衆生の諸業を見るに鏡中の像の如し。自在の念佛三昧門を得て一切の莊嚴せる法界に諸佛の充滿したまふを見、虛空に等しき念佛三昧門を得て、如來の身は普く法界及び虛空界を照したまふを見るなり。」

爾時、功德雲比丘、善財に告げて言はく、『善男子、南方に國有り、名けて海門と曰ふ。彼に比丘有り、名けて海雲と曰ふ。汝應に彼に詣りて菩薩行を問ふべし。善男子、彼比丘は能く分別して善根と具因の善根と大地の善根と大力の善根とを說き、能く菩提の因緣を讚歎し、摩訶衍を廣め、波羅蜜力を增廣し、一切の菩薩の行海を顯現し、善能く大願を淸

【爾時、海雲比丘】以下正しく法界を示す、中初に善財の法器を歎ず。
【善男子若し等】正しく其德を歎ず初めに總じて、次に別して歎ず。

淨圓滿ならしめ、能く清淨の普門の莊嚴法門を出生せしめ、大悲の力を生ぜしめん。』時に善財童子、功德雲比丘に從ひ、法を聞きて歡喜し、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、眷仰し顧戀して、辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、一心に善知識の教と、智慧光明の菩薩の法門と、菩薩の三昧とを正念し、一切菩薩の諸の方便界と、圓滿功德とを觀察し、心常に一切菩薩を見んと樂ひ、一切の佛の次第に世に興る。清淨功德を念じ、漸く南方の海門國土に趣き、海雲比丘に詣りて、頭面に足を禮し、右に遶り畢りて、退いて一面に住し、白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、一切智慧の大海に度らんと欲したるも、而も未だ知らず。菩薩は云何が生死の性を離れ、不退轉を得て如來の家に生れ、生死の海を度りて、如來の一切智海を逮得し、凡夫地を捨てて如來地を得、生死の流を斷ちて菩薩の流に入り、諸趣の輪を滅して諸願の輪を滿じ、衆魔を降伏して佛の功德を具し、愛欲の海を渇して大悲の海を長じ、諸の惡道を閉して天人の路、諸の解脫門を開き、三界の執を出でて一切智の城に到り、一切玩好の具を捨離して、弘誓の願を發し、衆生を攝取せん。』

爾時、海雲比丘、善財に告げて言はく、『善男子、汝已に阿耨多羅三藐三菩提心を發せしや。』答へて言はく、『唯然り。』『善男子、若し深く善根を植ゑざれば、則ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發さじ。普門の善根と普照光明の法門とを得て、正道を長養し、三昧の慧光は、種種功德の海藏を出生し、白淨の法を長じて、未だ曾て退失せず。善知識に親

【善門の善根】次に別歎中初に能發の德を擧ぐ、謂はくくの此德を具するものは當に能く發心す。

【大悲の心】次に所發の德を擧ぐ、謂はく此十德を具する是れ菩提心なり。

【善男子等】以下已が法界を示す中に五段あり、初に證大海を觀察して門の方便となす。

【十有二年】有人は十二因緣の大海を觀ずるが故に十とし、有には菩薩十二住の故に等の釋あり。

【復是念を作すらく】以下海門既に開いて、法界の依正を見ることを明す。

近して、恭敬し供養し、身命を惜まず、藏積する所無く、諸の高慢を離れ、心安くして動ぜざること猶し大地の如く、大慈もて一切の群生を愍念し、一切諸の生死の門を遠離し、好んで佛の境界を樂はん者は、能く菩提心を發さん。大悲の心、一切衆生を救護するが故に。大慈の心、一切衆生を安樂にするが故に。疲倦する無き心、一切衆生の諸の苦惱を滅するが故に。饒益の心、一切衆生の不善の法を滅するが故に。無畏の心、一切諸の惱害を除滅するが故に。無礙の心、一切障を滅するが故に。廣大の心、一切法界に充滿するが故に。無邊の心、虛空界に等しきが故に。廣心、一切の如來を見るが故に。清淨の心、三世の法に於て智達はざるが故に。智心、一切の智海を究竟するが故に。

善男子、我此海門國に住すること十有二年、大海を境界として大海を觀察せり。大海の無量無邊を思惟し、大海は甚深にして源底を得難きを思惟し、大海の漸漸に深廣なるを思惟し、大海は無量の妙寶もて之を莊嚴せるを思惟し、大海は無量の水聚れるを思惟し、大海の水の色は種種不可思議なるを思惟し、大海は大身の衆生の依止する所なるを思惟し、大海は水性の所居なるを思惟し、大海は大雲彌覆せるを思惟し、大海は未だ曾て增減せざるを思惟せり。

善男子、我是の如く思惟せる時、復是念を作すらく、「世間には頗し更に法の此大海よりも廣く、此大海よりも深く、此大海よりも莊嚴せられたる者有りや、不や」と。是念を作し已りて、卽ち海底の水輪の際を見るに、妙法蓮華は自然に涌出せり。伊那尼羅の寶を莖と

爲し、閻浮檀金を葉と爲し、沈水香の寶を臺と爲し、碼碯の寶を鬚と爲して、大海に彌覆せり。百萬の阿修羅王は、悉く共に百萬の摩尼寶もて莊嚴せる網羅を執持して、其上に覆ひ、百萬の龍王は雨らすに香水を以てし、百萬の迦樓羅王は妙寶の繒帶を銜みて垂下し莊嚴し、百萬の羅刹王は慈心もて觀察し、百萬の夜叉王は恭敬し禮拜し、百萬の乾闥婆王は讃歎し供養し、百萬の天王は天の香華、末香、幢幡、妙寶の衣雲を雨らし、百萬の梵王は稽首し敬禮し、百萬の淨居天は各敬禮し已りて、合掌して住し、百萬の轉輪王は七寶もて莊嚴し、百萬の海神王は大海より出でて恭敬し禮拜し、百萬の夜光は寶光明の網もて普く一切を照し、百萬の淨寶は百萬の明淨の寶を以て莊嚴と爲し、百萬の寶藏は無量の光明を出して普く一切を照し、百萬の閻浮檀寶は安住莊嚴し、百萬の金剛師子寶は沮壞すべからず。清淨に莊嚴し、百萬の日藏寶は明淨の光明もて普く一切を照し、百萬の不可壞の摩尼寶は一切の善行を出生し長養し、百萬の如意寶珠は無盡に莊嚴せり。彼寶蓮華は如來の無上の善根の起す所にして、悉く一切の菩薩の諸願を成滿せしめ、十方世界に顯現し出生せざる無く、一切の諸法は幻の如く、淨法より生じ、無諍の方便法の莊嚴する所、如夢の法を行じ、無爲の法印にして、究竟じて無礙の方便に到り、普く十方一切の法界を覆へり。唯佛のみの境界なり。世間に隨順して、無量阿僧祇劫に、歎ずとも盡すべからず。彼華の上に、一の如來在して結跏趺坐したまへるを見る。彼佛の淨身は、上は非想非非想天に至りて充滿せざる無く、彼如來は此莊嚴せられたる寶蓮華の座に坐したまひ、

【時に彼如來】以下三に所流の教法を受くることを明す。

不可思議の大衆に圍遶せられたるを見、不可思議の圓滿の光明莊嚴を見、不可思議の相好莊嚴を見、不可思議の神力自在を見、不可思議の如來の妙色を見、不可思議の無見頂相を見、不可思議の廣長舌相を見、不可思議の清淨の音聲を念じ、不可思議の圓滿の音聲を思惟し、不可思議の如來の諸力を見、不可思議の清淨の無畏を解了し、不可思議の一切の諸辯を解了し、菩薩の過去の不可思議大劫の本行を憶念し、不可思議の菩提の自在を見、不可思議の正法の雲を見、不可思議の普門の莊嚴身を見、不可思議の身の左右の端嚴を見、一切の不可思議の事を辦じて、衆生を饒益したまふを見る。時に彼如來、即ち右の手を申べたまひて我頂を摩で、普眼經を說きたまへり。唯是れ如來のみの境界にして、一切菩薩の淨行を出生し、普く一切法界を照し、圓滿の一切法界を攝取し、普く一切の嚴淨の佛刹を照し、一切の衆魔外道を降伏し、悉く一切衆生をして歡喜せしめ、普く一切衆生の所生を照し、其所應に隨ひて顯現せざる無く、普く一切衆生の根輪を照せり。善男子、我佛に從ひて此普眼經を聞き、皆悉く受持し讀誦し通利し、正念に思惟せり。善男子、假使人有りて、大海に等しき墨と、須彌聚の筆とを以て、此經を書寫せんとするも、一一の品、一一の法門、一一の方便、一一の生法門、一一の句の中の義味をも猶盡す能はじ。善男子、我佛所に於て千二百歲、此經を聞受せり。一一の日に於て、阿僧祇品を受けたるは多聞陀羅尼の光明力の故なり。阿僧祇品を究竟したるは百門陀羅尼の光明力の故なり。阿僧祇品を攝取したるは無量旋陀羅尼の光明力の故なり。阿僧祇品を分別した

【其れ十方の諸天】以下四に衆生に傳授して同じく法界に入らしむ。

【善男子我唯等】五に已が所知を結す。

【豈能く盡く】以下第五に抑推勝進を明す。

【善男子汝南方等】第三修行住位の善友を說く、文に五段あること前の如し。

【六十由旬】古人は六度行を修するが故にと釋せりと探玄記は謂ふ。

るは隨順分別諸地陀羅尼の光明力の故なり。阿僧祇品を淨めたるは嚴勝陀羅尼の光明力の故なり。阿僧祇品を出生したるは隨嚥莊嚴陀羅尼の光明力の故なり。阿僧祇品を說きたるは明淨音聲陀羅尼の光明力の故なり。阿僧祇品を照したるは、虛空藏陀羅尼の光明力の故なり。阿僧祇品を廣めたるは樹提沙陀羅尼の光明力の故なり。阿僧祇品を成じたるは海藏陀羅尼の光明力の故なり。

其れ十方の諸天、天王、諸龍、龍王、夜叉、夜叉王、乾闥婆、乾闥婆王、阿修羅、阿修羅王、迦樓羅、迦樓羅王、緊那羅、緊那羅王、人、人王、梵天、梵天王有り、若し來りて我に問はば、我卽ち彼等に開發し顯現し、分別し演說して、悉く此普眼經に安住せしめん。

善男子、我唯此一の法門を知るのみ。豈能く盡く菩薩の所行を知らんや。何を以ての故に。諸の菩薩等は一切の行を究竟したるが故に。大願の海を究竟じて、一切劫海にも斷絕せざるが故に。衆生海に入りて、應に化を受くべき者に、悉く隨順するが故に。深く一切衆生の心海に入りて、如來の十力智の光明を出生するが故に。悉く一切衆生の諸根を知りて、應に化すべき所に隨いて時を失はざるが故に。一切の佛刹海に入りて、佛刹の堅固の願を出生するが故に。究竟じて一切の佛海を恭敬し供養する大願力の故に。一切法海を渡る解脫智の故に。深く功德海に入り說の如く修行するが故に。一切衆生の語言海に度り、十方の刹に於て法輪を轉ずるが故に。善男子、汝南方六十由旬に詣れば、一國土有り、名けて海岸と曰ふ。彼に比丘有り、名けて善住と曰ふ。應に往きて彼に問ふべし、「云何が

菩薩は清淨の行を修するや」と。」時に善財童子、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、眷仰無量、辭退して南に行けり。

爾時、善財童子は、善知識の敎を正念し、普眼經を正念し、彼佛の自在神力を思惟し、彼佛の句味の法雲を受持し、正法を修習し、深法の海に入りて法の源底を盡し、勝法を攝取して疑曀を除滅し、法寶の洲を了りて海岸國に至り、十方に周遍して大師を推求すらく、『今何の所にか在す。』彼比尼は、虛空を經行し、阿僧祇の天の眷屬に圍遶せられたまふを見る。時に諸の天衆、善住比丘を供養せんが爲の故に、虛空の中に於て諸の天華を散じ、衆の妓樂を作し、微妙の音を出し、阿僧祇の寶蓋もて虛空を莊嚴せり。時に諸の龍王は供養せんが爲の故に、不可思議の沈水香の雲を興して、遍く虛空に滿せしめ、緊那羅王は、供養せんが爲の故に、諸の妓樂を作し、妙音聲を出して虛空に充滿せしめ、諸の海神王は供養せんが爲の故に、和雅の音を囀き、阿修羅王は供養せんが爲の故に、不可思議の寶雲を興して虛空を莊嚴し、不可思議の光明を放ちて普く一切を照し、不可思議の珍玩の具を以て、虛空を莊嚴せり。不可思議の緊那羅王は、虛空に充滿して、殺害の心を離れて、善住比丘を恭敬し供養せり。不可思議の諸の羅剎王は、諸の惡形羅剎鬼等の眷屬の與に圍遶せられて虛空に充滿せり、善住比丘の大慈力の故に。不可思議の諸の夜叉王は夜叉衆と俱に虛空に充滿せり、善住比丘を守護せんが爲の故に。周匝し圍遶せる不可思議の諸の梵天王は、虛空の中に在りて合掌し敬禮し、大音聲を以て彼比丘を讃じ、一面

【爾時善住比丘】以下正しく法界を示す、初に法器を發するを歎ず。
【我已に等】己が法界を示す、中初に總じて法門を標す。
【我已に修習】以下次に之を釋す。

に於て住せり。不可思議の諸々の淨居天は、宮殿と倶に、供養せんが爲の故に。善住比丘に詣りぬ。

爾時、善財童子、虛空の中の是の如きの供養を見て、合掌して善住比丘を敬禮し、白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が正に佛法に向ひ、專ら佛法を求め、佛法を恭敬し、諸佛の法を修して、佛法を長養し、佛法を積集し、佛法を熏修し、諸佛の法を淨め、遍く佛法を淨め、諸佛の法に至るやを知らず。我大聖は善能く諸々の菩薩の法を教授したまふと聞く。云何が菩薩は佛法を修習して、常に諸佛を見て未だ曾て遠離せず。常に菩薩を見て其善根を同うし、佛法を離れずして智慧滿足し、大願を捨てずして一切衆生に於て其事を究竟し、一切劫に於て菩薩行を修して心に疲倦無く、佛刹を捨てずして普く能く一切世界を莊嚴し、悉く能く諸佛の自在を知見し、有爲を離れずして菩薩行を修し、悉く如幻なるを了りて一切趣に入り、生死を受くるを現じて而も起滅無く、常に正法を聞きて未だ曾て遠離せず、悉く能く諸佛の法雲を受持して慧光を離れず、普く三世を照すや。』

爾時、善住比丘、善財に告げて言はく、『善い哉善い哉、善男子。乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發して、能く佛の法と、一切智の法と、及び無師の法とを問へり。善男子、我已に菩薩の無礙の法門を成就せり。我已に修習し分別して、明了に無礙の明淨慧光を逮得せり。慧光を得已りて一切衆生の心行を觀察するに障礙する所無く、一切衆生の此に死

【刹那】クシャナ(Kṣaṇa)最短の時間。
【羅婆】ラヴ(Lava)六十四刹那をいふ。
【摩睺婦路】ムフールタ(Muhūrta)三十羅婆なり、三十摩睺婦路を日一夜と名く。
【無所有】理性に稱ふ故、無作とは無功用の故。
【我此神通力を】三に法門の業有を明す。
【我唯此一の無礙等】四に已が所知を結す。
【云何が等】以下第五に抑推勝進。

し彼に生ずるを觀ずるに障礙する所無く、宿命智に於て障礙する所無く、未來智に於て障礙する所無く、現在世に於て一切衆生を知りて障礙する所無く、一切衆生の語言法の中に於て障礙する所無く、若し一切衆生來りて問難せん者には悉く能く應答して障礙する所無く、一切衆生の根を知りて障礙する所無く、衆生を敎化して障礙する所無く、一切の刹那、羅婆、摩睺婦路を分別し了知して障礙する所無く、三世海に於て障礙する所無く、已が身は十方佛刹に充滿して障礙する所無し。何を以ての故に。所有無き無作の神通力に依るが故に。善男子、我此神通力を得たるが故に、虚空の中に於て行住坐臥し、十方に遊騰す。一念の中に於て遍く東方の一佛世界、百佛世界、千佛世界、百千佛世界、無量佛世界、乃至不可說不可說の諸佛世界、閻浮提の微塵に等しき世界、乃至不可說不可說の佛刹微塵に等しき世界に至り、悉く彼世界の中の一切の諸佛及び其眷屬を觀見するを得、一切の華香、末香、塗香、寶鬘、幢幡、雜綵の繒蓋、衆妙の寶網、一切の形像を、彼如來、應供、等正覺に供養し、彼諸の如來の開現し、宣明し、讃歎したまふべき所は、悉く聞きて受持し、分別し通達せり。彼佛の有ゆる過去の淨刹は我悉く憶念せり。南西北方四維上下も亦復是の如し。若し衆生有りて我を見るを得ん者は、皆悉く阿耨多羅三藐三菩提を畢定せん。我見る所の一切衆生の如きは、若は大、若は小、若は好、若は醜、若は苦、若は樂なるも、化度せんが爲の故に、其所應に隨ひて彼に同じき身を現ぜん。若し衆生有りて來りて我所に至らば、悉く此正法に安住せしめん。善男子、我唯此一の無礙の法門を知るのみ。云何が能く菩薩の

【善男子此南方】以下は第四生貴住中の善友、友に五段あること前に準ずべし。

【彌伽】メーガ(Megha)雲の義、能く法雨を注いで衆生を潤益する故なり。

大悲を修する戒、諸の波羅蜜戒、大乘に乘ずる戒、菩薩道を捨てざる戒、障礙を滅す戒、菩薩藏の戒、菩提心を捨てざる戒、一切佛法の深心の戒、一切智を念じて忘失せざる戒、虚空の如き戒、一切世間の所依無き戒、壞すべからざる戒、譬喩無き戒、不濁の戒、不雜の戒、離疑の戒、清淨の戒、離塵の戒、離垢の淨戒を說かん。善男子、菩薩には是の如き等の無量の功德有るも、我豈能く如實に解說するを知らんや。善男子、此南方に於て一國土有り、名けて自在と曰ひ、城を呪藥と名く。彼に良醫有り、名けて彌伽と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩の行に向ふや」と。』時に善財童子、善住比丘の足を禮し、乃至辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、一心に法光法門を正念して法力を具足し、諸佛を正念して三寶を斷せず、離欲の性を歎じ、善知識を念じて普く三世を照し、諸の大願を念じて一切法界の衆生を究竟し、一切の有爲に於て心に所著無く、一切諸法の無常を觀察し、悉く能く一切佛刹を嚴淨して心に懈怠無く、一切の佛及び其眷屬に於て心に所著無く、漸く彼國に至り、呪藥城に入りて良醫彌伽を求むらく、『今何の所にか在す。』爾時、童子、彼良醫の正法の堂に處して說法の師子の座に坐し、一萬の大衆の與に前後に圍遶せられ、爲に輪字莊嚴光經を說きたまふを見る。時に善財童子、良醫彌伽に詣りて、頭面に足を禮し、右遶し畢りて退きて一面に住し、合掌して白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行に向ひ、云何が菩薩行を學び、云何が生死の中に於

て常に能く菩提の心を失はざるや、云何が平等の心を得て而も所趣無く、云何が堅固正直の心を逮得して一切世間能く壞する者無く、云何が大悲の力を生じて憂惱無く、云何が淨普門の陀羅尼力を證し、云何が智慧の光を生じて一切法に於て癡闇を除滅し、云何が諸の辯力を證して諸法の眞實の藏を分別し、云何が正念の力を得て一切淸淨の法輪を受持し未だ曾て忘失せざるや、云何が淨趣の力を得て一切趣に於て普く諸法を照し、云何が智慧の力を得て一切法に於て決定智を得、眞實の義を了らんやを知らず。』

爾時、良醫、善財に謂ひて言はく、『善男子、汝已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せしや。』答へて言はく『唯然り。』

爾時、良醫、師子の座を下りて五體を地に投じ、善財を敬禮せり、禮し已りて妙金華、諸の雜寶華、無價の摩尼、勝末の栴檀を散じ、無價の寶衣を以て之を覆へり。是の如き等の衆妙の供具を以て之を供養し敬重し讃歎して、是の如きの言を作さく、『善い哉善い哉、善男子。乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。善男子、若し能く阿耨多羅三藐三菩提心を發す者有らば、則ち一切の佛を守護することを爲す性、一切諸佛の刹を嚴淨する性、衆生を化する性と爲り、一切衆生に如法を說く性、一切の業に順ずる性、一切菩薩の行を成滿する性、一切諸の大願を斷ぜざる性、離欲を解る性、智慧明淨にして普く三世一切の法を照す性、解脫を建つる性と爲り、一切の佛の護持したまふ所と爲り、一切諸佛の常に共に護念し、善能く一切菩薩に隨順し、一切の賢聖は皆悉く隨喜し、一切の梵天は

恭敬し禮拜し、一切の諸天は恭敬し供養し、一切の夜叉王の建立する所と爲り、一切の羅刹王は恭敬し供養し、一切の龍王は之を頂戴し、一切の緊那羅王は敬心に讃歎し、一切の世界王は皆悉く敬念す。彼は一切衆生を安慰せんが爲に、三惡道を滅し、衆難を遠離し、一切貧窮の根本を救拔して、天人の快樂の處に安置し、善知識に遇うて未だ曾て遠離せず、佛の妙法を聞きて菩提心を發し、淨菩提心の枝に因りて明淨の光を得、菩薩の道を照し、菩薩の智に順じ、菩薩地に住するなり。

善男子、當に知るべし、菩薩は能く一切衆生の爲に甚だ難き事を作し、値ひ難く見難し、一切衆生の爲に而も父母と作りて衆生を莊嚴し、一切の諸天と世人とを攝取し、衆生の無量の苦難を除滅し、衆生を守護して憂惱を遠離せしむ。菩薩を大風輪と爲す、衆生を安持して三惡道に墜落せしめざるが故に。菩薩を大地と爲す、一切諸の善根を生長するが故に。菩薩を大海と爲す、無盡の功德藏を具足するが故に。菩薩を日と爲す、明淨の慧光は普く世間を照して癡闇を滅するが故に。菩薩を須彌山王と爲す、功德善根最も高大なるが故に。菩薩を月と爲す、一切衆生をして悉く淸涼ならしむるが故に。菩薩を大將と爲す、悉く能く一切の魔を降伏するが故に。菩薩を善丈夫と爲す、法城の中に於て君王と爲るが故に。菩薩を火と爲す、能く衆生の諸の貪愛を燒くが故に。菩薩を雲と爲す、甘露の法を雨らすが故に。菩薩を正見と爲す、悉く能く諸の妙根を長養するが故に。菩薩を方と爲す、法海を顯すが故に。菩薩を橋と爲す、諸の衆生をして生死の海を度らしむ

【善男子此南方】以下第五方便具足住中の善友、文に五段あること亦前の如し。

るが故に。」

爾時、良醫は、善財童子及び諸の菩薩を稱揚し讚歎し已りて、即ち口中より大光の雲を放ち、普く三千大千世界を照せり。照し已りて、時に大千世界の大神力天、乃至諸の梵天等は、悉く良醫に詣りぬ。時に彼良醫は、即ち爲に方便して隨順し分別し、廣演し顯現して、輪字莊嚴光經を說きたまへり。時に彼大衆此經を聞き已りて、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得。應に作すべき所已りて、還りて本座に升り、善財に告げて言はく、『善男子、我已に所言不虛の法門を成就して、三千大千世界の諸天の語言、諸の龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の一切語言を分別し了知せり。此三千大千世界の如く、十方無量無邊の不可說不可說の三千大千世界も亦復是の如し。善男子、我唯此菩薩の所言不虛の法門を知るのみ。云何が能く諸の菩薩行を說かんや。彼諸の菩薩は、隨順して深く衆生の一切相海に入り、隨順して深く衆生の一切施設海に入り、隨順して深く諸の名號海に入り、隨順して深く諸の語言海に入り、隨順して深く諸句の相續海に入り、隨順して深く諸の解脫句の次第海に入り、隨順して深く諸の解脫句の相續次第海に入り、隨順して深く諸の如來海に入り、隨順して深く分別諸句海に入り、隨順して深く一切衆生の諸の語言海に入り、一切の圓滿莊嚴微妙の音聲を逮得して、諸の文字輪を出生し分別せり。善男子、此南方に於て一國土有り、名けて住林と曰ふ。彼に長者有り、名けて解脫と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩の道に向ひ、菩薩

の道を修し、菩薩の道を成じ、菩薩の道を思ふや」と。時に善財童子は、良醫の所に於て此法門を聞き、深淨の信心を發して恭敬し、法に於て知見を決定し、善知識に因りて薩婆若を得、頭面に足を禮し、乃至辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、菩薩の所言不虛の法門を正念し、菩薩の語言海に入り、一切衆生の微細の方便海を念じ、菩薩の諸の垢淨の法を思惟し、菩薩の善根光明を出生し、菩薩の衆生を教化する巧方便門を淨修し、菩薩の衆生を攝する智を明淨にし、菩薩の正直心の力を堅固にし、菩薩の深心の力を長養し、菩薩の種種欲の力を淨修し、菩薩の心に諸惡を遠離せるを信じ、願心堅固にして大莊嚴を以て而も自ら莊嚴し、心に疲倦無く勇猛精進して心退轉せず、壞すべからざる淨き信心の力を具へて、金剛那羅延も壞る能はざる所なり、一切の善知識の敎を攝取して、無礙の境界は皆悉く清淨となり、無垢の境界は妙心に現前せり。普眼の方便光明陀羅尼地を逮得して、法界地を了し、心常に現前して、平等地と非地とを知り、莊嚴清淨にして我所に著せずして、無二の境界に、清淨無礙の智慧を逮得し、法地を了知して障礙する所無く、諸の方地を知りて而も退轉せず。一切の業地を分別し了知して、諸佛の大地を嚴淨し顯現し、智慧輪を得て三世を分別し、普樂光明三昧を逮得して、遍く身心を照し、一切諸の境界地に順至して、如來の智慧は普く境界を照し、一切智慧の波浪を興起して、身常に佛法の勢力を離れず、諸の如來の護持したまふ所と爲りて、其心は悉く一切の佛と等しく、隨順智慧は普く一切を照し、其身

【十二年】自分勝道の各に六度を修するが故に表すと古釋はいふ。

は一切の刹網に充滿して、大願を成就し、己が身に一切法界を容受せり。是の如く念じ已りて、漸漸に遊行し、十二年を經て住林國に至り、周遍して解脱長者を推求せり。見已りて足を禮し、一面に於て住して、是の如きの念を作さく、「我は善利を得て善知識を見るも、善知識は世に出興すること難く、其所に至ること難く、値遇を得ること難く、見知を得ること難く、親近を得ること難く、共住を得ること難く、其意を得ること難く、隨順を得ること難し。」念じ已りて白して言さく、「大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發して、一切の佛に値はんと欲し、一切の佛を見んと欲し、一切の佛の意を得んと欲し、一切の佛の心を知らんと欲し、一切の諸佛の三昧を得んと欲し、一切の佛の一切の大願に隨順して、一切の佛の一切の大願を滿ぜんと欲し、一切の佛の智慧光明を求めんと欲し、自身の中より一切の佛を出さんと欲し、諸明を得て一切の佛の自在神通を知らんと欲し、一切の佛力無畏の法を淨めんと欲し、一切の佛の法を聞きて心に厭足無からんと欲し、一切の佛法を受けんと欲し、一切の佛法を持せんと欲し、一切の佛法を分別せんと欲し、一切の佛の教を護らんと欲し、一切諸の菩薩と同じからんと欲し、菩薩と同じく善根の友たらんと欲し、菩薩の諸の波羅蜜を具へんと欲し、一切諸の菩薩の行を滿ぜんと欲し、菩薩の清淨の大願を發さんと欲し、一切の諸佛菩薩の因緣法藏を得んと欲し、一切菩薩の無量の法藏智慧光明を得んと欲し、一切菩薩の諸の三昧藏を得んと欲し、一切菩薩の諸の通明藏を出生せんと欲し、大悲藏を發し衆生を教化して窮盡有る無からんと欲し、分

【時に解脱長者】以下第四に法界を示す中三あり、初に入定默示。【入り已りて】以下法界業用無礙の相を明す。

別して遊戲神通藏を知らんと欲し、分別して自在の藏を知らんと欲し、自在藏に於て心に自在を得んと欲し、十種の藏を清淨にせんと欲し、一向に專ら此諸の功德を求めて、長者の所に詣れり。諸願を滿せんと欲し、生死を超出せんと欲し、自在の法を得んと欲し、恭敬門を具へんと欲し、方便門を具へんと欲し、諸の垢を遠離せんと欲し、清淨の莊嚴を欲し、身心の柔軟を欲し、諸根を調伏せんと欲す。白して言さく、「我聞く大聖は善く菩薩の方便正道を敎へて、普く一切を照し、妙法を顯現して、津濟を示導し、正法の門を開きて、顚倒を除滅し、疑惑の刺を拔き、心迷垢を離れて、重闇を照除し、諸の煩惱を離れて、永く清涼を得しめ、諂曲を棄捨して、生死を超出し、不善根を離れて善根を長養し、諸趣を遠離して染著する所無く、一切障を滅し、薩婆若を求めて、法王城に詣り、其心を大慈大悲に安住せしめ、菩薩行を敎へて、諸の三昧を修めしめ、其心は隨順の法門に安住して、廣大の心を發し、諸力を具足して一切諸の群生の心を照明したまふと。唯願くば大聖、我爲に分別したまへ、云何が菩薩は菩薩道に向ひ、菩薩行を修し、旣に修習し已りて、速かに菩薩行を清淨ならしめ、具に菩薩の圓滿の淨行を成ずるや」と。

時に解脱長者は、過去の善根力と、佛の威神力と、文殊師利の憶念力とを以ての故に、菩薩の三昧門に入る。其三昧門を攝一切佛刹無量旋陀羅尼と名く。入り已りて清淨身を得、其身內に於て十方に各十佛世界微塵に等しき佛と及び嚴淨せる刹とを見る。一切大衆の過去の所行、彼諸の如來の自在神力、一切の大願功德の具、諸の清淨行、正道を

【爾時、解脱長者】以下出定告示。

【無礙莊嚴】無礙に四義あり、一に一一の如來に各一切無礙莊嚴を具す二に一一の如來互に遍じて無礙なり、三に一切如來の莊嚴悉く皆此長者の身内に入る。四に長者十方の佛海を徹見す、今この文四を具する故無礙といふ。

莊嚴し、等正覺を成じ、淨法輪を轉じ、衆生を敎化し、諸法を究竟することを、其身内に於て皆悉く顯現して、而も雜亂無く、相障礙せず、本相の如く住し、形色同じからず、種種に莊嚴し、菩薩大衆圍遶し莊嚴して、一切諸佛の自在を顯現し、諸の願門を說き、無量の自在神力を示現せり。或は一刹に於て兜率天に處して佛事を作し、或は一刹に於て命終を示現し、或は受胎を現じ、或は處胎を現じて、自在力を顯し、或は出生を現じ、或は中宮に處するを現じ、或は出家を現じ、或は莊嚴せる道場に往詣するを現じ、或は降魔を現じ、或は成佛を現じ、或は天宮、夜叉、乾闥婆の諸の世界王、大衆に圍遶せられ、請ぜられて法輪を轉ずるを現じ、或は諸趣に入るを現じ、或は般涅槃を現じ、或は分舍利を現じ、或は塔を起して種種に彼諸の如來を莊嚴し、種種の衆生、諸の衆生海の爲に種種の方便、種種の根、種種の煩惱習氣を現じ、或は小衆に於て而も大衆を現じ、謂ゆる一由旬の衆に十由旬の衆を現じ、乃至不可說の佛刹微塵に等しき由旬の衆に而も爲に法を說く。彼諸の如來は微妙の音を以て說きたまふ所の正法を、善財童子は悉く聞きて受持せり。又彼佛の自在神力と、不可思議の菩薩の三昧とを見たり。

爾時、解脱長者、三昧より起ちて、善財に告げて言はく、『善男子、我已に如來の無礙莊嚴の法門を成就せり。此法門を得已りて、東方の閻浮檀光世界に、星宿王如來應供等正覺と明淨藏菩薩等の一切大衆とを覩見す。又南方の諸力世界に、普香如來應供等正覺と心王菩薩等の一切大衆とを見る。又西方の香光世界に、須彌燈王如來應供等正覺と無礙心

菩薩等の一切大衆とを見る。又北方の樂服幢世界に、自在神力無有能壞如來應供等正覺と自在勢菩薩等の一切大衆とを見る。又東北方の一切樂寶世界に、無礙眼如來應供等正覺と無礙化菩薩等の一切大衆とを見る。又東南方の香焔光世界に、香智如來應供等正覺と自在慧焰光菩薩等の一切大衆とを見る。又西南方の普照慧日世界に、法界輪幢如來應供等正覺と散一切華幢菩薩等の一切大衆とを見る。又西北方の普淨現世界に、一切佛寶無上幢如來應供等正覺と法幢王菩薩等の一切大衆とを見る。又上方の無盡佛性世界に、無量慧光圓滿幢如來應供等正覺と法界地幢王菩薩等の一切大衆とを見る。又下方の佛解脱光世界に、無礙慧幢如來應供等正覺と一切衆生世界幢王菩薩等の一切大衆とを見る。善男子、我十方に各一萬の佛刹微塵に等しき如來を見る。彼の諸の如來は此に來至したまはず、我彼に往かず。善男子、我若し安樂世界の無量壽佛を見んと欲せば、意に隨ひて即ち見る、妙樂世界の阿閦如來、善住世界の師子如來、普現圓滿光明世界の月覺如來、寶師子莊嚴世界の毘樓遮那如來、善男子、是の如き等の一切諸佛を、意に隨ひて即ち見る。彼の諸の如來は此に來至したまはず、我彼に往かず。一切佛は從來する所無く、我至る所無きを知る。一切佛と及與我心とは皆悉く夢の如しと知り、一切佛は悉く電光の如しと知り、己が心は水中の像の如しと了知す、一切佛は皆悉く幻の如しと知る、己が心も亦爾なり。一切佛の音聲は響の如しと知る、己が心も亦爾なり、是の如く知り、是の如く解し、是の如く入るは、善男子、當に知るべし。菩薩は皆己が心に由りて、諸佛の法を得、菩薩行を修し、

【善男子我唯】以下第五に抑推勝進

【善男子此南方】以下第六正心住中の善友、文に亦五あり、前に同じ。

一切刹を淨め、衆生を敎化し、諸の大願を出し、一切の智城、遊戲の神通、不思議門、諸佛菩薩の一切の自在無礙の境界は皆己が心に由り、甚深の智を具し、一切法を了る。是故に、善男子、諸の善根を以て己が心を增長し、甘露の法を雨らして其心を潤澤し、境界の中に於て心を淸淨ならしめ、精進を勤修して心を堅固ならしめ、專ら正法を念じて心を不亂ならしめ、智慧明淨にして心垢を遠離し、明淨の慧光もて其心を觀察し、自在の心を生じ、廣大の心を發して、諸佛と等しく、如來の十力を以て其心を照すべし。

善男子、我唯此如來の無礙法門を修するのみ。云何が能く菩薩の諸行と無障礙の智と無礙の淨行とを說かんや。現在を觀察する諸佛の三昧に安住して、無涅槃の三昧を得、三世平等の正法を具足して、善く平等三昧の境界地を知り、淨身を具足して、諸佛の住したまふ不壞の境界に住し、一切諸方の法門の境界は、智門圓滿にして、智慧觀察し、普く一切を照し、己身の中に於て悉く一切世界の成壞を現じ、而も己身と及び諸の世界とに於て二想を生ぜず、衆の行を究竟じて功德具足せり。

善男子、此南方に於て一國土有り、名けて莊嚴閻浮提頂と曰ふ、彼に比丘有り名けて海幢と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、『云何が菩薩は菩薩道に向ひ、菩薩行を修するや』と。」

時に善財童子は、頭面に解脫長者の足を敬禮し、右遶し畢りて、無量阿僧祇の功德を讚歎し、眷仰し觀察して、心に厭足無く、悲泣して淚を流し、專ら善知識を念ひ、善

知識に順じ、善知識を觀じ、善知識に由りて一切智を得、善知識に於て諂曲を遠離し、善知識に於て慈母の心を發せり、一切無益の法を遠離するが故に。善知識に於て慈父の心を發せり、能く一切諸の善法を生ずるが故に。辭退して南に行けり。

【三昧正受し】以下第四に法界を示す。七科あり、初に法體を辨ず。

【其足下より】以下法界の業用を示す、十四門文につきて知るべし。

大方廣佛華嚴經　卷第四十七

入法界品第三十四之四

東晉天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

爾時、善財童子、解脫長者の教を正念し思惟し、不可思議の菩薩の法門を念じ、不可思議の菩薩の慧光を思惟し、隨順して深く不可思議の甚深の法界に入り、菩薩の不可思議の淨妙の功德を攝取し、如來の不可思議の自在神力を顯現し、不可思議の莊嚴せる佛刹を解了し、佛の不可思議の住持の莊嚴、安住の境界を分別して知り、不可思議の菩薩の境界三昧の莊嚴を思惟し、不可思議の世界の究竟無礙を分別し、不可思議の菩薩の堅固の淨業深心に向ひ、不可思議の淨業諸願を受持して、漸く南方に趣き、莊嚴閻浮提頂國に至り、周遍して海幢比丘を推求し、靜處に在して結跏趺坐したまへるを見る。

三昧正受し、出入の息を滅して、身安んじて動ぜず寂然として覺無し。其足下より阿僧祇の長者と、阿僧祇の婆羅門とを出せり、皆悉く頂に衆寶の天冠を冠り、各妙寶、上味の飮食、一切の寶衣、香華、寶鬘、末香、塗香、資生の具を齎し、諸の貧窮を攝して、安慰し、撫接し、衆の寶物を雨らし、一切衆生をして皆大いに歡喜せしめ、十方に充滿

【刹利】クシャトリヤ(Kşatriya)土田主と譯す、王種なり。
【婆羅門】ブラフマン(Brahman)僧侶の階級。
【腰の兩邊より等】多く斷常に著するを以ての故に兩邊に出づ。

せり。其兩膝より刹利、婆羅門を出せり、皆悉く聰慧にして形色、威儀、服飾、莊嚴、皆悉く同じからず、微妙の音を以て衆生を訓導し、惡を離れ善を修し、眞實の義に住し、四攝法を說きて衆生をして歡喜せしめ十方に充滿せり。腰の兩邊より一切衆生數に等しき五通の仙人を出せり、或は草衣を服とし、或は樹皮の衣をつけ、皆澡瓶を執り、三岐の杖を持ち、威儀庠序として變異有ること無く、虛空に遊行して三寶を讃歎し、衆生の爲に清淨の梵行を說き善根を調伏して眞實の義を演べ、世間を攝取し、諸の衆生をして智慧の海に入らしめ、又復世間の諸論を演說して次第に一切の善根に住せしめ、十方に充滿せり。其兩脇より不可思議の龍と、不可思議の龍女とを出し、不可思議の諸の龍の自在を顯現して衆生を攝取し、不可思議の香の莊嚴雲、華の莊嚴雲、鬘の莊嚴雲、寶蓋の莊嚴雲、寶幡の莊嚴雲、衆寶の莊嚴雲、無價摩尼寶の莊嚴雲、寶瓔珞の莊嚴雲、寶座の莊嚴雲、寶宮殿の莊嚴雲、寶蓮華の莊嚴雲、寶冠の莊嚴雲、天形像の莊嚴雲、天女の莊嚴雲を雨らせり、是の如き等の雲を雨らし、各不可思議にして、普く十方一切の世界を照し、而も以て一切如來を供養し、普く衆生をして皆大いに歡喜せしめ、法界に充滿せり。胸の德字より無量阿僧祇の阿修羅王を出せり、阿修羅王の不可思議なる自在神力を示現して、一切諸の大海の水、及び百千の世界を震動し、諸山王をして皆相衝撃せしめ、一切諸の天宮殿を震動し、一切諸魔の光明を映蔽して悉く聚墨の如くし、一切諸魔の軍衆を降伏し、衆生の放逸憍慢を除滅し、忿害の心を離れ不善の法を滅し、煩惱の山を壞し、戰諍を棄捨

【背より……聲聞等】大乘の正面と相背くが故、是他財を貪るが故なり

せり、又神力を以て衆生を覺悟し、諸惡を遠離して永く生死を絶ち、諸趣に著せず、普く衆生をして常に寂滅を樂はしめ、菩提心に住し、菩薩行を淨くし、諸の波羅蜜に住し、菩薩地を究竟じて、一切法を照し、普く諸佛の方便の法を照して、法界に充滿せり。其背より阿僧祇の聲聞緣覺を出せり、二乘を以て化度すべきの衆生なるが故なり、我見に著する者には不淨觀を教へ、貪欲多き者には慈心觀を教へ、瞋恚多き者には緣起觀を教へ、愚癡多き者には方便智もて諸法を觀察するを教へ、等分を爲す者には無著の法を說き、境界に著する者には妙願の境界を說き、寂滅を樂ふ者には諸趣に入りて衆生を饒益するを教へて法界に充滿せり。其兩肩より阿僧祇の諸の夜叉王、諸の羅刹王を出せり、種種の惡身に長短の形色あり、種種の乘に乘じて各共衆の與に自ら圍遶せらる、其れ衆生有りて能く善を行ふ者及び諸の賢聖、諸の菩薩等の若は正道に向ひ、若は果證を得るは、皆悉く防衛して之を守護せり、或は金剛力士と作りて、諸佛及び佛の住處を守護せり。若し衆生有りて諸の恐怖に遭ふも、亦之を防護して悉く畏るる無からしめ、諸の疾病の者は除愈するを得しめ、諸の難に在る者は悉く解脫せしめ、橫死を除滅して諸の熱惱を離れしめ、衆生を教化して實利を得しめ、生死の輪を壞して法輪を讚歎し、外道の輪を摧きて、法界に充滿せり。其腹より百千の阿僧祇の緊那羅王を出せり。各百千阿僧祇阿僧祇の緊那羅女眷屬の與に圍遶せらる。百千の阿僧祇の乾闥婆王を出せり、各百千の阿僧祇阿僧祇の乾闥婆女眷屬の與に圍遶せらる。百千の阿僧祇天の娛樂音を出して實相

の法を說き、諸佛を讃歎し、菩提及び菩薩行を稱美し、菩提門を歎じ、法輪門に入り、好んで一切の自在の法門を樂ひ、一切の般涅槃門を演說し、一切諸佛の教門を攝持し、一切諸佛の門を歡喜し、一切の諸佛の刹門を嚴淨し、一切諸の法界門を講說し、一切諸の障礙門を除滅し、一切諸の善根門を宣明して、法界に充滿せり。其口より百千阿僧祇の轉輪聖王を出せり。七寶具足して四兵に圍遶せられ、無慳の光を放ち、摩尼の寶を雨らし、諸の貧苦なる者は悉く富樂ならしめ、財施無き者は惠施を得しめ、諸の群生の爲に殺盜、邪婬を離れたる法を歎じて、慈心を修習せしめ、常に愛語を說きて衆生を饒益し、妄語を除滅し、惡口を遠離して衆生を攝取し、兩舌を遠離して和合の語を說き、無義語を離れて甚深の法を說き、悉く衆生をして口過を遠離せしめ、大悲を讃歎して、衆生をして歡喜せしめ、瞋恚の心を離れ、世間の一切正法を分別し、因緣を觀察し、眞諦を照明し、諸の群生の邪見の毒刺を拔き、疑惑を除滅し、一切の障を離れ、法の實義を明して、法界に充滿せり。其兩目より百千阿僧祇の日を出せり。普く十方を照して一切の闇を滅し、悉く衆生をして垢曀を除滅せしめ、一切の惡道苦毒を遠離し、寒者をして溫を得しめ、垢濁の佛刹に於て明淨の光を放ち、廣く說かば乃至普く金銀瑠璃等の一切世界及び衆生の類を照し、衆生の心の重闇を除滅して悉く歡喜せしめ、能く衆生の無量の事業を辨じ、一切世界の妙法の境界を莊嚴して、法界に充滿せり。其眉間より百千阿僧祇の天王帝釋を出せり。無量の雜寶を以て莊嚴と爲し、釋王の法を持して普く一切の諸の天宮殿を

照し、一切の須彌山王を震動して、悉く諸天をして天の境界に於て厭離の心を生ぜしめ、功德力を歎じ、智慧力を明し、直心の力を起し、深心の力を長じ、念力を嚴淨し、菩提心を堅固にし、欲樂を遠離し、一切佛を樂見せんことを讚歎し、境界の樂を樂ふを歎ぜずして聞法の樂を歎じ、世間の樂を離れて諸法の智慧の樂を觀察し、阿修羅の戰鬪恐怖を離れて、煩惱の軍を滅し、死の畏を遠離して衆魔を降さんと願ひ、妙法の山を興して須彌山に等しき廣大の法句を說き、能く衆生の無量の事業を辦じて、法界に充滿せり。其額上より無量の梵天を出せり。妙色端嚴なる世界に倫無く、威儀庠序として、妙音を演出して諸佛を讚歎し、說法を勸請して衆生を歡喜せしめ、乃至能く衆生の無量の事業を辦じて法界に充滿せり。其頭上より阿僧祇の諸の菩薩衆を出せり。種種の形色、相好の嚴身は無量の光網を放ちて、檀波羅蜜を現じ、布施を讚歎し、慳吝を遠離して貪著する所無く、一切世界を莊嚴して淨戒を稱揚し、惡戒を遠離して衆生を菩薩の律儀に安立せしめ、大乘戒を歎じて大悲の功德藏を出生し、一切の有は皆悉く夢の如しと說き、五欲の樂は滋味有ること無しと說きて、衆生を煩惱を離れたる法に安立せしめ、金色の身業を稱揚し讚歎し慈心を讚歎し殺害を遠離して、畜生趣を滅し、多聞の力を歎じて衆生を忍辱力に安立せしめ、普照の自在を歎じ、放逸を遠離して衆生を不放逸に安立せしめ、禪波羅蜜を歎じて心に自在を得て邪見の刺を拔かしめ、正見の般若波羅蜜を讚歎して智自在を樂はしめ、世間に隨ひて生死を遠離して而も諸趣に於て自在に生を受くるを歎じ、願力滿足して諸の通

【頂上より……佛を出す】極果尊勝を明すが故に、中に先十二は菩薩衆を後の二十事は雜類衆を攝す。

【平等の法雲】道場の菩薩をして速に佛果を成じ諸古佛に齊しからしむるなり。

【普門の法雲】因位既に滿じ別を攝して普に歸せしむなり。

【普莊嚴の法雲】灌頂の受職を以て普く法門を嚴にして第九住を授け共をして修學せしむ。

【堅固山の法雲】第八住中三業に過を離れて不動を成ずるが故なり。

【海藏の法雲】第八住の無生藏海を以て第七に授與して修學せしむ。

【普境界の法雲】

明を出し、自在の壽命を歎じて、一切の陀羅尼力を讃歎して願力の淨三昧力を出生して、自在の生を現じ、智慧を讃歎して普く一切衆生の諸根を照し、諸の心心の行を分別し演說し、十力智を照し、自在の薩婆若を讃歎して法界に充滿せり。其頂上より百千阿僧祇の佛を出せり。身分具足し、相好莊嚴せること猶し金山の如く普く一切を照し、妙音聲を出して法界に充滿し、無量無邊の神力自在を顯現して普く一切甘露の法雲を雨らせり。道場に坐する菩薩の爲には平等の法雲を雨らし、灌頂の菩薩の爲には普門の法雲を雨らし、深忍の菩薩の爲には普莊嚴の法雲を雨らし、童眞の菩薩の爲には堅固山の法雲を雨らし、不退の菩薩の爲には海藏の法雲を雨らし、成就直心の菩薩の爲には普境界の法雲を雨らし、方便道の菩薩の爲には自性地音聲の法雲を雨らし、生貴の菩薩の爲には隨順世間の法雲を雨らし、修行の菩薩の爲には厭離の法雲を雨らし、治地の菩薩の爲には長養法藏の法雲を雨らし、初發心の菩薩の爲には精進の法雲を雨らし、信行の者の爲には無盡門の法雲を雨らし、色界の衆生の爲には無盡平等の法雲を雨らし、大梵天の爲には普藏の法雲を雨らし、大自在天の爲には生力の法雲を雨らし、魔、天王の爲には心幢の法雲を雨らし、化樂天の爲には淨念の法雲を雨らし、兜率天の爲には淨意の法雲を雨らし、夜摩天の爲には歡喜の法雲を雨らし、帝釋天の爲には莊嚴虛空の法雲を雨らし、夜叉王の爲には歡喜の法雲を雨らし、乾闥婆王の爲には自在圓滿の法雲を雨らし、阿修羅王の爲には大境界の法雲を雨らし、迦樓羅王の爲には無量世界の法雲を雨らし、緊那羅王の爲には饒益衆生勝智

七住中の善巧周遍所緣境法を以て第六に授與して修せしむ。
【自性地音聲の法雲】六住中讃毀自性の但言聲あるを五住に授與す。
【隨順世間の法雲】第四住を五住の世間に隨ふ五明等の法に進修せしむ。
【厭離の法雲】第三住をして世間を厭離し第四出世住に向はしむ。
【長養法藏の法雲】第三住の聞持陀羅尼甚深の法を受持せしむ。
【精進の法雲】初心を策して更に進修して後に至らしむ。
【無盡門の法雲】住前信中の菩薩に普賢無盡行を修せしむ。
【無盡平等の法雲】色究竟天は長壽と雖も遂に有盡に歸するを以て今說く
【普藏の法雲】初

の法雲を雨らし、諸の人王の爲には不可樂法雲を雨らし、諸の龍王の爲には歡喜幢の法雲を雨らし、摩睺羅伽王の爲には寂靜の法雲を雨らし、地獄の衆生の爲には不亂念莊嚴の法雲を雨らし、諸の畜生の爲には智慧の法雲を雨らし、閻羅王處の爲には無畏の法雲を雨らし、餓鬼處の爲には正希望の法雲を雨らし、悉く衆生をして賢聖門に向はしめ法界に充滿せり。彼の諸の如來は一一の毛孔より各阿僧祇の淨光明網を放ち、阿僧祇の妙色、阿僧祇の莊嚴、阿僧祇の境界有りて、阿僧祇の事を辦じ十方に充滿せり。

爾時、善財一心に海幢比丘を觀察し、彼三昧の法門を念じ、不可思議の菩薩の境界を思惟し、無量無作の現在莊嚴普門の法門を思惟し、法界莊嚴の智慧を觀察し、佛智に依りて住し、菩薩の力を出し、菩薩の願力を建て菩薩の諸行を增廣せり。是の如く正意に觀察すること、一日一夜、乃至、七日七夜、半月一月、乃至六月六日なり。此を過ぎ已りて後海幢比丘は三昧より起てり。爾時、善財は未曾有なるを歎じ合掌して白して言さく「甚だ奇なり、大聖、此の如きの三昧を最も甚深と爲す、此の如きの三昧を最も廣大と爲す、此の如きの三昧は境界無量なり、此の如きの三昧は不可思議なる神力自在なり、此の如きの三昧は稱量すべからず、此の如きの三昧は慧光明淨なり、此の如きの三昧は阿僧祇の莊嚴を以て莊嚴と爲す、此の如きの三昧は境界壞すべからず、此の如きの三昧は退轉有ること無し、此の如きの三昧は普く十方の一切世界を照す、此の如きの三昧は具に無量の義趣方便を有す。大聖、其れ菩薩有りて此三昧に入らば能く一切の爲に衆苦を除滅し、永く地

禪の梵王は慈あるも普からざるを以て。

【生力の法雲】自在天は世中の大力と雖も終に滅盡に歸せば爲に法身を說いて善根力を生ぜしむ。

【心幢の法雲】正法幢を建てかの邪心を除すは此亦他化天の攝なり。

【淨念の法雲】化樂自ら念じて樂具を化作せば爲に淨念を說いて法門を念ぜしむ。

【淨意の法雲】爲に出世淨意樂を說くが故に、其をして執手染心を遠離せしむ。

【歡喜の法雲】夜摩の喜樂も終に無常に覺れば、爲に出世眞法の歡喜を說く。

【莊嚴虛空の法雲】かれ地居有爲莊嚴に著せば、爲に福智莊嚴性空を說く

【歡喜の法雲】こ

獄、餓鬼、畜生の一切の楚毒を絶ち、諸の難を遠離し、天、人趣をして悉く寂靜を得しめ、衆生をして歡喜せしめ、常に甚深なる禪定の境界を樂ひ、有爲を厭離して三界を超出せしめ、菩提心を發して、智慧功德の因緣を長養し、彌廣き無上の大悲を長養し、大願力を生じ、菩薩道を照し、智慧もて六波羅蜜を莊嚴し、究竟じて大乘の境界を出生し、智慧遍くして普賢の所行を照し、菩薩の諸地の智慧光明を得、一切菩薩の清淨の願行を具し一切の智境を證せしめん。大聖、此三昧は名けて何等とか爲す。』『善男子、此三昧は普眼捨得と名け、又清淨光明般若波羅蜜の境界と名け。又清淨莊嚴普門と名く。善男子、般若波羅蜜を修習するが故に此三昧を得たり。此三昧を得たる時に即ち百萬阿僧祇の三昧を得たり。』『大聖、此三昧は唯此功德の境界行るのみなりや、復餘有りや。』『善男子、此三昧は一切世界に遊行して障礙する所無く、一切世界を分別して障礙する所無く、一切世界を莊嚴して障礙する所無く、一切世界を究竟じて障礙する所無く、一切世界を修治して障礙する所無く、一切世界を嚴淨して障礙する所無く、一切佛を見て障礙する所無く、一切佛の功德を觀じて障礙する所無く、一切佛の自在神力を知りて障礙する所無く、一切佛力を究竟じて障礙する所無く、一切佛の功德大海を度りて障礙する所無く、一切佛の淨妙の法雲を雨らして障礙する所無く、一切佛法を度して障礙する所無く、一切佛の轉法輪智の破壞すべからざるを得て障礙する所無く、一切佛の清淨の大衆海の源底を得て障礙する所無く、隨順して普く十方世界に入りて障礙する所無く、隨順して十方の佛法を

の夜叉をして悪を捨離し衆生の命を護らしむる故歡喜といふ。

【自在圓滿の法雲】かの属諸天自在ならざれば、爲に出世法樂の圓滿にして他に繫属せざるを説く。

【大境界の法雲】修羅の大力も天の爲に伏せらるれば爲に出世法身大境物の能く過ぐるなきを説く。

【無量世界の法雲】かの金翅鳥大力ありと雖も只一界に遊ぶのみなれば、今爲に法身の金翅を説いて無量世界を復ふ。

【饒益衆生勝智の法雲】緊那羅樂を作すも愚なれば無益に著せば、爲に出世勝智益生自他倶樂を説く。

【不可樂法雲】人王世間の五欲に樂著せば、爲に欲の過を説くを不可樂

觀察して障礙する所無く、大悲もて十方衆生を攝取して障礙する所無く、大慈もて十方世界に充滿して障礙する所無く、十方佛を見、心に厭足無くして障礙する所無く、隨順して遍く衆生の大海に入りて障礙する所無く、衆生の一切根海を了知して障礙する所無く、一切の諸の衆生海を分別して障礙する所無し。善男子、我唯此清淨の光明般若波羅蜜三昧の法門を知るのみ。云何が能く諸の大菩薩の究竟の行を説かん。諸の大菩薩は皆悉く深く智慧の大海に入り、善能く清淨法界を分別し、智慧は一切の法趣を究竟じ、慧光を無量にして一切に充滿し、大陀羅尼の自在光明を得、一切三昧は圓滿清淨にして一切の自在通明を出生し、深く一切の無盡辯海に入り、一切諸地の音聲を雷震して、悉く能く一切衆生を救護せり。我尚彼所行を説く能はず、況んや其功德をや。其境界を顯し其境界を説き、其法門を照し其積聚せる諸の功德藏を明し、其正道諸の三昧海と平等の智慧とを説かんや。善男子、此南方に於て一住處有り名けて海潮と曰ふ。彼に園林有り、普莊嚴と名け、優婆夷有り、名けて休捨と曰ふ。汝彼に詣りて問へ「云何が菩薩道を修し、菩薩道を淨めんや」と。『時に善財童子、歡喜無量にして、海幢比丘の所に於て不堅固の中に而も堅固を得、不實の中に於て而も眞實を得て功德妙藏の境界を究竟じ、明淨の智を得て普く一切を照し、甚深の三昧の光明を逮得して淨解脫に到り、方便もて一切世界を觀察し、諸の法門を淨め、明淨の智慧は普く十方を照し頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、眷仰し觀察して辭退して南に行けり。

と名く。【歡喜幢の法雲】龍に熱沙金翅等の憂あれば、爲に無我を說いて彼をして歡喜せしむ。【寂靜の法雲】摩睺は惡性事中に因を好めば、爲に靜比深の寂靜を說く【不亂念莊嚴の法雲】地獄は苦に逼められ心亂るる故爲に說法し心を安んじ正念を得しむ【智慧の法雲】智を說いて癡を治す【無畏の法雲】閻羅王處の苦は具にして畏るべければ說法して之を除くなり。【正希望の法雲】餓鬼の惡希望を說法に由て蠲ぜしむ【爾時、善財】以下第三に善財觀見の法界を明す。【是の如く正意に等】次に第四に定を出でて德を歎ず【大聖此如き三昧】以下第五に問答し

爾時、善財童子、海幢比丘を正念し思惟して心未だ曾て捨てず、見んことを樂ひて厭くこと無く、聖音を顧戀し、慈顏を目想し、其心の境界と三昧の境界と願行の境界とを正念し思惟し、明淨の智慧を正念し思惟し、善知識を敬ひ、善知識に向ひ、善知識の教を念ひ、善知識に於て愛を起して恭敬せり。又是念を作さく、「善知識に因りて諸佛を見るを得たり、善知識は一切佛法を開示し顯現したまへり、善知識は是れ奇特の法なり、人をして諸佛の法を見るを得しむるが故に。善知識を明淨の眼と爲す、人をして佛の虛空の如きを見しむるが故に。善知識を善き津濟と爲す、人をして佛の華池に於て源底を得しむるが故に。漸漸に南に行けり。海潮の處に至りて、普莊嚴園林を見るに、七寶の垣牆は周匝し圍遶し、諸の妙寶樹は行列して莊嚴し、一切の華樹は華を雨らすこと雲の如くに其地に布散し、香樹の芬馨は普く十方に薰じ、鬘樹は鬘を垂れ、寶樹は寶を雨らし、遍く布きて莊嚴し、衆の寶衣の樹は一切に彌覆し、諸の音樂の樹は微妙の音を出せり。是の如き等の諸の珍玩具を以て而も以て莊嚴せり。此園林の中に一萬の講堂有り、衆寶合成し、一萬の樓閣は閻浮檀金を以て其上に覆ひ、一萬の宮殿は毘樓遮那の寶藏もて莊嚴し、一萬の浴池は衆寶合成し、七寶の欄楯は周匝し圍遶し、八功德の水は湛然として盈滿し、閻浮檀金の沙と淨水の寶珠とは遍く池底に布き、四面の寶階は端嚴にして齊正に、寶の多羅樹は周匝して行列し、鳧、鴈、鴛鴦、孔雀、哀鸞のごとき、異類の衆鳥は其中に遊戲して和雅の音を出し、覆ふに金網を以てし、風は自然に起りて微妙の聲を出し、衆寶の帳を設け

て名を顯す。

【普眼捨得】法界を見、障盡きざるなく、理證せざるなき故なり。

【大聖此三昧は】以下六に問答して業用を顯す、答廿三句中初六句は器世間自在を、次十一句は智正覺世間自在を、後六句は衆生世間自在を明す。

【善男子我唯等】七に唯一を知ることを決す。

【云何が能く等】以下第五に抑推勝進。

【善男子此南方】以下第七不退住の善友、文に五段あり。

【爾時善財】以下第二教に依りて趣入するを明す。

【海潮の處に至り】第三見已りて敬請するを明す。

て寶樹を周遍し、阿僧祇の殊勝の寶幢を建て、大光明を放ちて百由旬を照し、百萬の池沼には黑旃檀の泥、池底に凝積し、寶蓮華を生じて其中に充滿し、彼蓮華よりは大光明を出して普く一切を照せり。彼園林の中に大宮殿有り、莊嚴幢と名く、海藏の妙寶を以て其地と爲し、瑠璃の寶柱は莊嚴殊妙に、巍巍として高大なる猶し金山の若く、衆生を見る者は喜樂せざる無し。阿僧祇の淨摩尼寶有りて、普く一切を照し自然の香を出せり。謂く、明相香、香王香、覺語香等なり、衆寶の座を敷けり。謂く、蓮華藏の座、照諸方藏の座、明淨藏の座、衆生悅樂藏の座、師子藏の座、離垢寶藏の座、不思議の座、普門の摩尼妙寶藏の座、光嚴藏の座、大海藏の座、金剛師子藏の座ありて、無量の窓牖は妙寶もて莊飾せり。又一萬の衆の妙寶の帳を張れり。謂く、寶衣の帳、妙寶華の帳、寶樹枝の帳、摩尼寶の帳、金の帳、莊嚴の帳、香の帳、娛樂の帳、自在龍王の帳、馬王の帳、釋天の莊嚴寶の帳あり。一萬の寶網は其上に交絡せり。謂く、金鈴の網、珍寶蓋の網、衆寶像の網、海藏珠の網、青瑠璃摩尼寶の網、師子吼の網、月摩尼の網、香像の網、衆寶山の網、寶玉の網あり。一萬の光明は普く世界を照せり。謂く、夜光摩尼の光明、日藏摩尼淨寶の光明、月幢摩尼妙寶の光明、香焰の光明、妙藏摩尼寶の光明、鉢曇摩の光明、夜光摩尼淨寶の光明、大燈摩尼淨寶の光明、普照諸方摩尼の光明あり。又十種の大香電光を出し、十種の雲を雨らして諸天に出過せり。謂く、十種の黑旃檀の雲、十種の曼陀羅華の雲、十種の莊嚴の雲、十種の鬘の雲、十種の雜色衣の雲、十種の寶の雲、十種の天子の雲、十種の天女の雲、十種の菩薩の雲

【吉由羅】ケーユーラ(Keyūra)臂印といふ、臂の莊嚴具。

【答へて言はく】以下第四正しく法界を示す、四段あり、初に法門の體用を擧ぐ。

あり、常に聞かんと樂へり。爾時、休捨優婆夷は金色藏の座に處して、海藏寶もて莊嚴せる網羅にて其身を覆ひ、吉由羅の莊嚴は諸天に出過し、大摩尼の網もて其首を莊嚴し、師子珠寶と無量の如意の淨摩尼寶ともて其身を嚴飾し、無量億の衆は恭敬し圍遶し合掌して住せり。東方の無量の衆生、諸の梵天王、梵身、大梵、梵輔、他化自在天王乃至人及び非人一切の諸の王は、來りて其所に詣でたり。南西北方四維上下も亦復是の如し。其れ此優婆夷を見るを得る有る者は、一切衆の病皆悉く除愈す。心淨くして垢を離れ、邪見の刺を拔き、障礙を除滅し、無礙地を淨め、彼地の中に於て善根を長養し、諸根の方便を成就し、一切智を攝して、一切陀羅尼門と、一切三昧門とは、皆現在前し、一切の願門を發し、一切の行門を究竟し、一切の淨門を出生し、其心廣大にして一切の通を出生し、無礙身を得て至らざる所靡し。

爾時、善財童子、普莊嚴園林に入り、周遍觀察して、休捨優婆夷の金色の座に處したまふを見、往きて其所に詣り、頭面に足を禮し、遶ること無數匝にして白して言さく、「大聖、我已に先の阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも而も未だ知らず、菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するや。唯願くば我爲に具足して演說したまへ。」答へて言はく、『善男子、我唯一法門を成就せるのみ。若し我を見聞し念知し親近せん者は、皆悉く虛しからず。善男子、若し衆生有りて善根を種ゑず、善知識に親近せず、諸佛の爲に護念せられざる者は彼諸の衆生、我を見る能はざらん。善男子、若し衆生有りて能く我を見ん者は則

【善財白して】以下二に往因の厚薄を明す。

ち阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得ん。東方の諸佛は常に我所に來り、寶師子座に處して、我爲に法を說きたまへり。南西北方四維上下の一切諸佛も、悉く我所に來り、寶師子座に處して、我爲に法を說きたまへり。善男子、我常に諸佛菩薩を見、未だ曾て遠離せず。善男子、我此大衆に八萬四千億の菩薩有り、皆我と同行にして阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。此普莊嚴園林の一切衆會も亦阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。』善財白して言さく、『大聖、菩提心を發したまひてより來、久如なりと爲すや。』答へて言はく、『善男子、我過去を念ふに、定光佛の所に於て出家求道して梵行を淨修し、恭敬し供養して法を聞きて受持せり。次に離垢佛の所に於て出家求道して梵行を淨修し、恭敬し供養して、法を聞きて受持せり。次に妙幢佛、妙德佛、功德藏佛、毘樓遮那佛、普眼佛、梵壽佛、自在佛、善天佛に於てせり。善男子、我是の如き等の三十六恆河沙の佛所に於て出家求道して梵行を淨修し、恭敬し供養して法を聞きて受持せり。一切諸佛の智慧を了知し、初めて菩薩の心を發して、法界に充滿し、無量の大悲もて衆生を攝取し、諸の菩薩の無量の大願を發して十方法界を究竟じ、無量の大悲は普く衆生を覆ひ、一切刹一切劫の中に於て菩薩の無量の諸行を修習し、無量の三昧力は菩薩の正道を捨てず轉ぜず、菩薩の無量の陀羅尼力は善能く一切衆生を護持し、菩薩の無量の淨智慧力は方便し正念して普く三世を照し、菩薩の無量諸の通明力は遍く一切諸の世界網に遊び、菩薩の無量の諸の辯才力は能く一言を以て一切衆を悅ばしむ。善男子、我は菩薩の無量の自在神力

【善財白して】以下三に乘果の久近を明す。

を有し、能く一身を以て一切刹に滿ぜしむ。』

善財白して言さく、『大聖、久如して當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべきや。』『善男子、菩薩は一衆生を敎化せんが爲の故に菩提心を發さず、百衆生を敎化せんが爲にせず、乃至不可說不可說轉の衆生を敎化せんが爲の故に、菩提心を發さず、廣く說かば阿僧祇品の如し、一世界の衆生を敎化せんが爲の故に菩提心を發さず、乃至不可說不可說世界の衆生を敎化せんが爲の故に菩提心を發さず、閻浮提の微塵に等しき衆生を敎化せんが爲の故にせず、三千大千世界の微塵に等しき衆生を敎化せんが爲の故にせず、乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵に等しき衆生を敎化せんが爲の故に菩提心を發さず、菩薩は一如來を恭敬し供養せんが故に菩提心を發さず、乃至不可說不可說の諸の如來を恭敬し供養せんが爲の故に菩提心を發さず、菩薩は一刹に淨めんが爲の故に菩提心を發さず、乃至不可說不可說の刹を淨めんが爲の故に菩提心を發ざず、菩薩は閻浮提の微塵に等しき刹を淨めんが爲の故に菩提心を發さず、乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵に等しき刹を淨めんが爲の故に菩提心を發さず、菩薩は一佛法を護持せんが爲の故に菩提心を發さず、廣く說かば上の如し。菩薩は一願を滿ぜんが爲の故に菩提心を發さば、一刹を莊嚴せんが爲の故にせず、一佛の眷屬も知らんが爲の故にせず、一佛法を受持せんが爲の故にせず、一衆生の心海を知らんが爲の故にせず、一衆生を根海を度せんが爲の故にせず、一世界の諸劫の次第に成敗するを知らんが爲の故にせず、一衆生の煩惱習氣を知らんが爲の故にせず、一

【大聖此法門は等】四に法門の名字を顯す。
【離憂安隱幢】大心多劫に苦に遭へば憂なく、正行を造修し安隱にして倦むなく、大志獨拔の故に幢といふ。
【諸の大菩薩は等】以下第五に抑推勝進。

衆生の煩惱を斷ぜんが爲の故にせず、一衆生の行を滿ぜんが爲の故に菩提心を發さず、一切諸佛を恭敬し供養せんと欲し、一切佛刹を嚴淨せんと欲し、一切佛法を守護し受持せんと欲し、一切大願を滿足せんと欲し、一切佛の眷屬を知らんと欲し、一切衆生の心海を知らんと欲し、一切衆生の心心の所行を知らんと欲し、一切衆生の諸根輪を知らんと欲し、一切世界、一切劫數の次第を成敗するを知らんと欲し、一切衆生の煩惱習氣を知らんと欲し、一切衆生の煩惱を斷ぜんと欲し、一切衆生の行を滿ぜんと欲するが故に菩提心を發す。善男子、略して說くに、菩薩に是の如き等の百萬阿僧祇の方便の法門有り、菩薩は悉く應に究竟じて隨順智慧を了知し、究竟じて菩薩等の行を修習し、一切佛刹を淨くして心に倒惑無かるべし。善男子、是故に、我此願を發して一切刹を淨むれば、我願乃ち滿じ、一切衆生の煩惱習氣を斷ぜば、我願乃ち滿ず。』『大聖、此法門は名けて何等と爲すや。』『善男子、此法門は離憂安隱幢と名く。我唯此法門を知るのみ。諸々の大菩薩は其心海の如く、悉く能く一切佛法を容受せり。我當に云何が能く其行を知るべき。諸々の菩薩は心堅固にして正直なること須彌山の如し。諸々の大菩薩は則ち良藥爲り、若し見る者有らば煩惱を除滅せん。諸々の大菩薩は則ち淨日爲り、一切衆生の癡暗を除滅す、諸々の大菩薩は則ち大地爲り、悉く能く一切衆生を載持す。諸々の大菩薩は則ち智風爲り、一切衆生の實義を長養す。諸々の大菩薩は則ち自在爲り、淨智の光を以て普く一切を照す。諸々の大菩薩は則ち慶雲爲り、其所應に隨ひて甘露の法を雨らす。諸々の大菩薩は則ち淨月

【善男子此南方】以下第八章眞住の善友を擧ぐ、文に五段あること前に準ずべし。

【毘目多羅】ヰマクタゴーシャ（Vimuktaghoṣa）最上無恐怖聲と譯す、一切智の微妙の普を以て無邊の衆生界を安慰するが故に此名あり。

【尼拘律】ニヤグローダ（Nyagrodha）無節縱廣樹と譯す。

爲り、諸の功德の光明網を放つ。諸の大菩薩は則ち帝釋爲り、悉く能く一切衆生を守護す。我當に云何が能く共行を知るべき。「善男子、此南方に於て一國土有り、名けて海潮と曰ふ。彼に仙人有り、毘目多羅と名け、善能く菩薩の諸行を解說す。汝彼に詣りて問へ。時に善財童子、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、觀察して厭く無く、悲泣して淚を流し、正念し思惟すらく「菩提を得るは難く、善知識に遇ふは難く、上人と共に同止するを得るは難く、菩薩の善根を得るは難く、菩薩の正直心を滿足するは難く、同意の善知識に値遇するは難く、眞實を觀ずるは難く、法の如く正しく敎ふるは難く、妙心を出生するは難く、一切智を思ふは難く、法明を長養するは難し。」是念を作し已りて辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、菩薩の正敎に隨順して菩薩行を淨めんと思惟し、心に能く菩薩の德力を長養し、心に諸佛を見、心に菩薩を欲し、心に能く大願を發起し長養し、心十方の一切諸法を照し、心に法の實を見、心一切を覆ひて散亂有ること無く、心淨く智慧もて諸の法界を觀じて癡闇を除滅し、心淨く正直もて障礙を除滅し、心能く一切衆魔を降伏し、漸漸に遊行して海潮國に至り、周遍して仙人毘目多羅を推求せり。時に彼仙人は大林中に在り。阿僧祇の樹は此林を莊嚴し、寶葉普く覆ひ、諸の華果の樹は常に以て嚴飾し、寶樹は寶を雨らして遍く其地に散じ、大旃檀の樹は周匝して行列し、諸の沈水の樹は常に妙香を出し、尼拘律の樹、閻浮檀の樹は甘香の果を雨らし、優鉢羅、鉢曇摩、分陀利華を以て

莊嚴と爲せり。爾時、善財、彼仙人を見るに、此林中に在して樹皮の衣を服け、縈髮にして草を座とし、一萬の仙人を以て眷屬と爲し、旃檀の林の如く旃檀に圍遶せらる。往きて其所に詣りて五體もて敬禮し、善知識は能く我を薩婆若門に開導せんと念ひ、善知識は眞實道を現せんと念ひ、善知識は能く我を一切智地に安置せんと念ひ、善知識は智寶の燈を然し、明淨の慧光は、十力の智慧の光明を長養せんを念ひ。善知識の道は即ち一切智の無盡の藏なり、善知識を燈と爲す、一切智の境界を照すが故に。善知識を橋と爲す、生死を度らしむるが故に。善知識を蓋と爲す、大悲の力を生じて一切を覆ふが故に。善知識を不虛と爲す、一切法の眞實相を照すが故に。善知識を海潮と爲す、大悲を滿足するが故に。是念を作し已りて、遶ること無數匝して、合掌して立ち白して言さく、「大聖、我已に先の阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學び、菩薩道を修するやを知らず。」時に彼仙人、大衆を觀察して是言を作さく、「汝等當に知るべし、此童子は已に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、一切衆生に請うて普く無畏を施して、一切衆生を饒益し、深智の海に向ひて、一切諸佛の法雨を飲まんと欲し、一切法海の源底を盡さんと欲し、世間の智慧の大海を成ぜんと欲し、大悲の重雲を興さんと欲し、甘露の法雨を雨らさんと欲し、世間を出でて淨き智月を明かにせんと欲し、世間の諸の煩惱の闇を滅せんと欲し、一切衆生の善根を長養せんと欲せり。」爾時、大衆は、各種種の金色の妙華香の悅樂すべきを持して、童子の上に散じ、頭面に足を禮し、躬を曲めて敬遶し、是の如きの言を作さく、

【無壞幢智慧の法門】此位中高く功用の表に出づる故に、然も相惑に動かされざるを以て無壞といふ、智慧は法體なり。
【境界】業用の分齊。

「此童子は悉く能く一切衆生を救護し、三惡道を滅し、閻羅趣一切の諸の難を離れしめ、欲の海を消渇して、苦陰を除滅し、愚癡の闇を捨て、貪愛の縛を斷ち、能く功德の金剛圍山に昇りて、世間に智慧の須彌を建立し、世間に於て明淨の智月を出して、一切善根の諸法を顯曜し、世間を示導して、明かに善惡を知らしめん。」時に彼仙人、大衆に告げて言はく、「若し能く阿耨多羅三藐三菩提心を發す者あらば、一切智を得、一切佛の功德の地を淨めん。」時に彼仙人、善財に告げて言はく、「善男子、我已に菩薩の無壞幢智慧の法門を成就せり。」善財白して言さく、「大聖、彼法門は境界云何。」時に彼仙人は即ち右の手を申べて善財の頂を摩づ。摩で已りて善財の手を執れり。即時に善財自ら其身を見るに十方の十佛世界の微塵に等しき佛所に在り。彼諸佛の相好莊嚴を見るに、阿僧祇の寶珍玩の具を以て其刹を莊嚴せり。又彼佛の眷屬大海を見るに、從つて聞く所の法は悉く能く受持し、乃至一句一味をも失はず。正法の梵輪を分別し受持し、諸の法雲を受けて佛の大願に入り、諸力を淨修し、願行を清淨にし、諸の功德藏を究竟せり。彼諸佛の應化に隨ひて、一切衆生を度したまふを見、一切の佛の清淨圓滿の大光明の網を見る。見已りて、無礙の智慧光明に隨順して佛力を究竟せり。或は自ら身一佛所に於て一日一夜なるを見、或は復自ら餘佛所に於て七日七夜なるを見る、是の如く次第して餘佛の所に於て或は半月、一月、一歲、百歲、千歲、或は百千歲、百千億歲、或は百億那由他歲、或は半劫、一劫、百劫、千劫、百千劫、或は百億那由他劫乃至不可說不可說那由他劫、或は閻浮提の微塵

【善男子此南方】以下第九法王子住の善友を明す。

に等しき劫乃至不可説不可説の世界の微塵に等しき劫行り。爾時、善財は無壞幢智慧の法門の爲に照さるるが故に、明淨藏三昧を得。無盡法門三昧に照さるるが故に、一切方に遊ぶ陀羅尼の光明を得。金剛圓滿光明の法門に照さるるが故に、分別智意樓閣三昧を得。平地の莊嚴法藏に住する般若波羅蜜の精進に照さるるが故に、佛の虚空藏三昧の光明を得。一切諸佛の法輪三昧の光明の相に照さるるが故に、三世圓滿智無盡の光明を得たり。時に彼仙人、善財の手を放てり。爾時、善財、卽ち自ら身を見るに還つて本處に在り。

時に彼仙人、善財に問うて言はく、「汝憶念するや。」答へて曰はく、「唯然り、大聖の善知識力の故に。」「善男子、我唯此菩薩無壞幢智慧の法門を知るのみ。我豈能く大菩薩行を知らんや。諸の大菩薩は皆一切衆生の自在三昧を得たり。一切時輪に於て自在を得、諸佛の無盡の智慧を出生して、一切の佛の嚴淨の慧燈を證し、一念の中に於て三世の事を了り、一切の世間に於て淨慧の身を現じて、法界に充滿し、衆生の所應に隨ひて悉く其前に現じ、一切衆生の所行を了知し、圓滿淸淨にして悉く愛樂すべし。我豈能く大菩薩行を知らんや。妙功德の願、嚴淨の佛刹、善く輪機を察する、智慧の境界、甚深の三昧、神力の自在なる、解脫の境界、遊戲神通、法身の音聲、究竟の智慧、是の如き等の事は、我境界に非ず。善男子、此南方に於て一國土有り、名けて進求と曰ふ。婆羅門有り、方便命と名く。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩の道に向ひ、菩薩の道を修するや」と。」

時に善財童子、歡喜無量にして、恭敬し禮し已りて、遶ること無數匝し、瞻仰し觀察して、

辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、無壞幢智慧法門の爲に照されて、諸佛の不可思議の自在神力を決了し、善く菩薩の不可思議の法門を知れり。又不可思議の菩薩の三昧の智慧を以て其心を照し、一切時三昧の光明を得、一切相三昧の境界の光明を得、明淨智を得て、一切衆生をして勝妙の處を得しめ、一切至處道の法門を得て世間行に隨順し、心に二有る無く、明淨の智を以て普く境界を照し、一切聲聞の明淨の忍藏を得、無生忍を得て法の實相を知り、常に菩薩行を行じて、菩薩の心を捨てず、薩婆若心を增長し、十力の明を得て普く一切を照し、妙法の音を樂ひて心に厭足無く、說の如く修行して薩婆若に住し、一切智の境界を究竟じて、無量の菩薩の莊嚴心を出生し、菩薩の清淨の大願を滿足し、一念の頃に於て遍く一切諸佛の刹網に至り、無量の衆生海を教化し成熟して心に懈倦無く、悉く菩薩の無量の行の境界を見、悉く分別して一切世間を見、諸の佛刹の種種に莊嚴せられたるを見、微細の境界に於て悉く能く無量の世界を安置し、又能く彼種種の莊嚴を見て、悉く能く無量の世界の諸の語言の法を分別し、又無量の衆生の欲樂を知り、諸の衆生の無量の所行を知り、無量の方便を以て衆生を教化し、善く殊れる方を知り、其所應に隨ひて衆生を化度し、善知識を念じ、漸漸に遊行して進求國に至り、周遍して彼波羅門を推求せり。時に波羅門は諸の苦行を修して一切智を求め、四面の火聚は猶し大山の如く、中に刀山有り、高峻なること極り無し、彼山上より自ら火聚に投じたり。爾時、善財、

【答へて言はく】以下正しく法界を示す、六段あり初に法を示して修を勸む。

【爾時、善財】次に善財之に對して疑を起す。

【是念を作せる時】三に菩薩加被して勸めて修せしむ。中に欲界の梵天色界の六天、龍神八部との勸誡あり。

婆羅門に詣りて頭面に足を禮し、合掌して立ち白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。願くば我爲に說きたまへ。』答へて言はく、『善男子、汝今若し能く此刀山に登り、火聚に投ぜば菩薩の諸行は皆悉く清淨ならん。』爾時、善財、是の如きの念を作さく、『人身を得るは難く、諸難を離るるは難く、無難を得るは難く、淨法を得るは難く、佛世に値ふは難く、諸根を具するは難く、佛法を聞くは難く、善知識に遇ふは難く、與に同止するを得るは難く、正教を聞くを得るは難く、正命を得るは難く、正法に順趣するは難し。此れ將魔か魔の使ふ所に非ざるか。善知識に非ずして而も善知識の相を現じたるか。將惡菩薩に非ざるか。而も今我爲に壽命の難を作し、善根の難、薩婆若の難を作す、此れ正しき敎に非ずして險惡の道なるのみ。法門薩婆若等の一切佛法を遠離せり。』是念を作せる時、十萬の梵天虛空の中に在りて、是の如きの言を作さく、『善男子、是念を作す莫れ。是念を作す莫れ。此は是れ大聖なり。金剛智慧の光明を具足し、精進して退かず、悉く已に一切境界を究竟じて、一切衆生の貪愛の大海を竭さんと欲し、一切諸の邪見の網を裂かんと欲し、一切衆生の煩惱を燒き、愚闇を除滅して、普く一切を照し、一切衆生をして生死の險難を離れしめ、三世の愚癡闇冥を除滅し、淨光明を放ちて普く一切を照さんと欲したまへり。』時に諸の梵天及び自在天、衆生主天等の諸の邪見天は、是の如きの言を作さく、『我は衆生を作れり、我は一切世間の最勝爲り、我は最上爲り、我は第一爲り。』是諸天等

【四種の道】 四無礙智道なり。

は婆羅門の大苦行を修して、五熱に身を炙るを見たり。是の如きを見已りて、各諸禪に於て慈味を得ず、來りて其所に詣りぬ。時に婆羅門は自在力を以て爲に法を說き、邪見を滅し、我心を捨離し、大慈悲を發して普く衆生を覆ひ、菩提正直の心を長養し、四種の道を聞きて、佛の法身を求め、所應化に隨ひて悉く能く示現し、佛の微妙の音は一切悉く聞きて障礙有ること無からしめたまへり、復一萬の魔有り、虛空の中に在りて種種の摩尼寶の華を以て婆羅門に散じ、善財に告げて言はく、『善男子、此婆羅門は苦行の力の故に、大光明を放ち、我宮殿、諸の莊嚴具をして、悉く聚墨の如くならしめ我復樂まず、即ち無量の諸天、天女眷屬の與に圍遶せられ、來いて其所に詣りしに、我爲に法を說き、悉く阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得しめたまへり』。復一萬の他化自在天有り、虛空の中に在りて、各天華を持し恭敬し供養して是の如きの言を作さく、『善男子、此婆羅門は苦行の力の故に、大光明を放ち、我宮殿、諸の莊嚴具をして悉く聚墨の如くならしめ、我復樂まず、即ち眷屬と與に來りて其所に詣りしに、我爲に法を說き、我をして心に於て自在を得、煩惱の中に於て自在を得、受生の中に於て自在を得、障礙を除滅して自在を得、一切の三昧に於て自在を得、莊嚴具に於て自在を得、壽命の中に於て自在を得しめたり。乃至我をして一切佛法に於て自在を得しめたまへり』。復一萬の化自在天有り、虛空の中に在りて天の妓樂を以て恭敬し供養して、是の如きの言を作さく、『善男子、此婆羅門は五熱に身を炙り、大光明を放ちて我宮殿及び莊嚴具を照し、照し已りて悉く我等

【曼陀羅華等】大小白蓮華の義。

【伊那槃那難陀】伊那は樹、槃那は葉、過去に樹葉を壞せるを以て、龍中に墮在す。

をして五欲を樂まず、欲樂を求めず、身心を柔軟ならしめたれば、眷屬と倶に來りて其所に詣りしに、我爲に法を說きて心を淨くし、心を明淨にし、善く心を奇特にし、心を柔軟にし、心を歡喜せしめ、乃至淸淨の十力を逮得し、離生を長養して、無量の淸淨身を出生し、乃至佛の淸淨法身を得、淸淨の口を得、微妙の音聲は遍く一切に至りて障礙する所無からしめ、乃至一切智を得しめたまへり。』復一萬の兜率陀天有り、其眷屬と與に虛空の中に在りて一切の末香の雲を雨らし、恭敬し供養して是の如きの言を作さく『善男子、此婆羅門は五熱に身を炙りし時、我自ら宮殿に於て須臾を樂はず、來りて其所に詣りしに、我爲に無著の法を解說したまひ、少欲にして足るを知り、善根を長養し、菩提心を發し、乃至一切の佛法を究竟せしめたまへり。』復一萬の諸天、三十三天及び阿修羅有り、眷屬と倶に虛空の中に在りて曼陀羅華の雲、摩訶曼陀羅華の雲を雨らし、恭敬し供養して是の如きの言を作さく『善男子、此婆羅門は五熱に身を炙りし時、我天の樂に於て須臾も樂著せず、來りて其所に詣りしに、我爲に法を說きて、欲樂を遠離せしめ、乃至我爲に無常の法は變易して住せざるを說きて、一切の放逸高慢を斷除し、菩提を發起するの心を長養せしめたまへり。又善男子、我此婆羅門を見し時、須彌山の頂は六種に震動せり、我爾時に於て心大いに恐怖し、專ら一切智を求めたり。復一萬の大龍王、伊那槃那難陀、跋難陀等有り、黑栴檀香の雲を興し、諸の龍王女は妙なる樂音を出し、天華の雲、天香水の雲を雨らし、恭敬し供養して是の如きの言を作さく『善男子、此婆羅門は五熱に身を炙り

し時、大光明を放ちて普く一切の龍王の宮殿を照し、諸々の龍王をして熱沙の苦と、金翅鳥の怖とを離れしめ、瞋恚の熱を滅して身體清涼となりて、歡喜の心を發さしめたまへり。喜の心を發し已りしとき、爲に法を說きて惡龍趣を厭ひ、至誠に過を悔い、業障を除滅して阿耨多羅三藐三菩提心を發し、乃至一切智に住せしめたまへり。「復一萬の夜叉王有り、種種に此婆羅門及び善財を供養し、是の如きの言を作さく、「善男子、此婆羅門は五熱に身を炙りし時、我及び羅刹、鳩槃茶等は、悉く衆生に於て大慈心を發して嬈害する所無し、慈心の力の故に、宮殿を樂まず、眷屬と倶に來りて其所に詣りしに、彼婆羅門は大慈の心を以て、我等を蔭覆し、我をして歡喜し、身心柔軟にして、安隱快樂ならしめ我爲に法を說きて乃至無量の夜叉、羅刹、鳩槃茶等をして、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめたまへり。「復一萬の乾闥婆王有り、虛空の中に在りて是の如きの言を作さく、「善男子、此婆羅門は五熱に身を炙りし時、大光明を放ちて我宮殿を照し、悉く我等をして不思議の樂を得しめたれば、來りて其所に詣りしに、我爲に法を說きて乃至阿耨多羅三藐三菩提心を發し、不退轉を得しめたまへり。「復一萬の阿修羅王有り、虛空の中に在りて右膝胡跪し、一心に合掌し恭敬し供養して、是の如きの言を作さく、「善男子、此婆羅門は五熱に身を炙りし時、一切の阿修羅の宮殿、大地、大海は皆悉く震動せり。我等爾時、高心を除滅したれば、來りて其所に詣りしに、我爲に法を說きて、一切の諂曲幻心を遠離し、深法忍を得、不動に安住して、十力を具足せしめたまへり。復一萬の迦樓羅王、勇力持等有

【爾時、善財】以下四に疑を除き過を悔ゆ。

り、化して外道の童子と爲り、虚空の中に在りて是の如きの言を作さく「乃至我爲に法を說きて、大慈に安立し、大悲を讃歎し、生死海にて五欲の泥に沒する者を度し、淨き直心門を歎じ、慧方便の翅を生ぜしめ、其所應に隨ひて皆悉く化度したまへり。」「復一萬の緊那羅王有り、虚空の中に在りて是の如きの言を作さく「善男子、此婆羅門は五熱に身を炙りし時、我寶多羅樹の中、金鈴網の中、寶瓔珞の中、諸の寶樹の中、種種の樂器の中に於て、自然に微妙の音聲を演出せり。佛の聲、法の聲、比丘僧の聲、不退轉の諸菩薩の聲、菩提心の聲、某方某國に某の菩薩有りて菩提心を發し、苦行を修行し、大布施を修し、道場を莊嚴し、道場に往詣して正覺を成じたりといふ聲なりき。善男子、我是聲を聞きて即ち大いに歡喜し、來りて其所に詣りしに、我爲に法を說きて、無量の衆生をして、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得しめたまへり。」「復無量の欲界諸天有り、虚空の中に在りて供養し恭敬して是の如きの言を作さく「善男子、此婆羅門は五熱に身を炙りし時、大光明を放ち、乃至普く阿鼻地獄を照して苦痛を除滅せり。若し衆生有りて斯光を見ん者は命終して天に生ぜん。報恩を知るが故に、五欲の樂を捨てん。來りて其所に詣り、觀んと樂ひて厭く無かりしに、我爲に法を說きて、乃至無量の衆生をして菩提心を發さしめたまへり。」爾時、善財童子、奇特の法を聞きて、心大いに歡喜し、婆羅門の所に於て、眞實の善知識の心を發起し、頭面に足を禮し、是の如く白して言さく「向に聖教を疑ひ、知識の教に違へり。唯願くば大聖、我悔過を受けたまへ。」

【爾時、善財】五に說の如く修行し正しく法界を證す。

【時に婆羅門】以下六に唯一を知ることを結す。

【無盡法門】智大定に依りて法界を遍照するが故にいふなり。

【善男子此南方】以下第十灌頂住の善友を明す。

【彌多羅尼】マイトラーヤニー(Maitrāyaṇī)慈女の義、智德内に圓に慈相外に彰るが故に名く。

時に婆羅門、善財童子の爲に偈を說きて言はく、

菩提を求めんと欲する者は、當に知識の敎に順ひ
諸の疑惑を除滅して、一心に常に恭敬すべし
正道を修習し、法の眞實相を知らば
道場に安住して、佛の菩提を成就せん

爾時、善財童子、卽ち刀山に登りて、自ら火聚に投じ、未だ中間に至らざるに卽ち菩薩の安住三昧を得たり。既に火焰に至れば、復菩薩の寂靜にして安樂なる照明三昧を得たり。三昧を得已りて白して言さく「甚だ奇なり、大聖。是の如きの刀山及び大火聚も我身觸るるの時、安隱にして快樂なり。」時に婆羅門、善財に告げて言はく「善男子、我唯此菩薩の無盡法門を成ぜるのみ。法王諸菩薩の行を明淨にし、諸の願を滿足し、悉く衆生の煩惱邪見を滅し、不退轉、不可盡の心を得て懈怠の心を離れ、一切畏るる無く、金剛那羅延藏を得て大境界を究竟し、疲倦有ること無く、諸垢を遠離し、動ぜざること風輪の如く、精進して退かず、大莊嚴を以て自ら莊嚴し衆生を饒益せり。是の如きの法門は我當に云何が能く知り能く說くべき。』善男子、此南方に於て城有り、師子奮迅と名く、一童女有り、彌多羅尼と名く、汝彼に詣りて問へ「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。」時に善財童子、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、觀察して厭く無く辭退して南に行けり。

大方廣佛華嚴經　卷第四十八

東晋天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之五

爾時、善財童子、不可思議の恭敬心を起し、好んで淨法を樂ひ、專ら大乘に向ひ、諸佛の智を求め、如來に親近し、法の境界を觀じて障礙する所無く、實際を決定して實の境界に住し、三世の際に至りて、三世を解了するに虚空際の如く、決定して三世の法際を了知して法際に住せず、無礙際に住して業際に違はず、決定して佛の際と非際とを了知して如來の住に住し、一切の妄想を滅し、一切佛、一切眷屬、一切世界に著せず、一切衆生は非我無實にして、一切音聲は語言の道を離れたるを知り、一切色は猶し電光の如しと解り、漸漸に南に行けり。彼城に至り已りて周遍して彌多羅女は何の所にか在すと爲すやと推問せり。時に人有り、答ふらく、『今は師子幢王宮内に在す。』と。聞き已りて即ち門下に詣り、彼女に見えんと求む。時に無量の人衆は悉く宮中に入れり、善財問うて言はく、『諸人、今、何の所にか詣りたまふ。』答へて言はく、『我等は彌多羅女に詣りて正法を聽受せんと欲す。』

爾時、善財、是の如きの念を作さく、『此王宮門は自在に出入して障礙する所無し。』善財即ち入りて彼女人を見るに、明淨なる寶藏の法堂に處在せり。地は玻瓈の色にして、瑠璃を柱と爲し、金剛を壁と爲し、閻浮檀金の欄楯あり、窻牖は光明普く照し、阿僧祇の摩尼寶もて之を莊校せり。又千の寶藏摩尼寶の鏡は圓滿に莊嚴し、衆生の樂ふ所の明淨の妙寶を以て嚴飾と爲せり。又阿僧祇の摩尼寶の網を其上に羅覆し、百千の金鈴は微妙の音を出せり。是の如き等の不可思議の衆寶の校具有りて、講堂を莊嚴せり。彼女人を見るに身は眞金の如く、目髪は紺色にして、淨水香の寶師子座に處して、覆ふに金網を以てし、衆寶の衣を敷き、大衆に圍遶せられ、梵音聲を以て爲に法を說きたまへり。見已りて頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、合掌し恭敬して、一面に於て住し白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發したるも而も未だ菩薩は、云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。』答へて言はく、『善男子、汝此法堂の莊嚴を諦に聽け。』

爾時、善財、一一の瑠璃の柱の中、一一の金剛の壁の中、一一の摩尼の鏡の中、一一の形像の中、一一の寶の中、一一の莊嚴の中、一一の金鈴の中、一一の寶樹の中、一一の寶形像の中、一一の寶瓔珞の中を見るに、悉く法界に等しき一切の如來、初發心より菩薩行を修し、大願を成滿して、功德に莊嚴せられ、等正覺を成じ、淨法輪を轉じ、乃至無餘涅槃を示現したまふを見る。淨水の中に月の影像を見るが如く、善財童子は一切の境界莊嚴具の中に於て、一切佛の初發心より、乃し無餘涅槃を示現するに至るまでを見るも、亦

【般若波羅蜜普莊嚴の法門】般若とは第十住位に智度滿ずる故、卽ち智自在にして法界に依止するなり、普莊嚴とは智に依りて用を起し具德圓備するなり。
【彼諸如來異門を以て等】別を攝して普に歸するが故一切を成ずるが故一甚深の故に廣多を顯すが故なり
【平等を生ぜし時】正證相應の時を明す、法門の體を得るなり。
【普門陀羅尼等】總じて所得の業用を明す、此中に陀羅尼門三摩提地門を得て法界に依止するを以ての故。
【謂ゆる等】以下別して所得を顯す中に百十六門あり分けて十位となす

復是の如し。皆是れ彼女の過去の善根の果に依る力の故なり。爾時、善財、諸佛を正念し、恭敬し合掌して白して言さく、「大聖、此れ何の法門なるや。」答へて曰はく、「善男子、是れ般若波羅蜜普莊嚴の法門なり。我三十六恒河沙の佛の所に於て此法門を修せり。彼諸の如來は、各異門を以て我をして此般若波羅蜜普莊嚴法門に入らしめたまへり。」善財白して言さく、「大聖、此法門は境界云何。」答へて言はく、「善男子、我此法門に入りて、正念し思惟し、分別し受持して平等を生ぜし時、普門陀羅尼等の百萬阿僧祇の陀羅尼門を得て、以て眷屬と爲せり。謂ゆる佛刹陀羅尼門、佛陀羅尼門、法陀羅尼門、衆生陀羅尼門、過去陀羅尼門、未來陀羅尼門、現在陀羅尼門、實際に安住する陀羅尼門、功德陀羅尼門、功德具陀羅尼門、智陀羅尼門、智具陀羅尼門、諸願陀羅尼門、諸願を分別する陀羅尼門、行陀羅尼門、修集行陀羅尼門、淨行陀羅尼門、滿足行陀羅尼門、業陀羅尼門、業に違はざる陀羅尼門、業流陀羅尼門、業所作陀羅尼門、惡業を遠離する陀羅尼門、正業に向ふ陀羅尼門、業自在陀羅尼門、善行陀羅尼門、善行三昧陀羅尼門、三昧陀羅尼門、三昧に隨順する陀羅尼門、三昧を分別する陀羅尼門、無壞三昧陀羅尼門、諸通明陀羅尼門、心海陀羅尼門、種種心陀羅尼門、淨心地陀羅尼門、普く重惡の心を照す陀羅尼門、心に調御師を喜ぶ陀羅尼門、衆生を發起する陀羅尼門、煩惱陀羅尼門、習氣陀羅尼門、煩惱方便陀羅尼門、欲陀羅尼門、衆生の所行陀羅尼門、衆生の種種の業行陀羅尼門、衆生世間の自性陀羅尼門、衆生相陀羅尼門、方陀羅尼門、說法陀羅尼門、大悲陀羅尼門、大慈陀羅尼門、寂滅陀羅尼門、諸の言語道陀羅尼門、方便非方便の陀羅尼門

隨順陀羅尼門、分別陀羅尼門、攝取陀羅尼門、無礙實際陀羅尼門、普陀羅尼門、佛法陀羅尼門、菩薩法陀羅尼門、緣覺法陀羅尼門、聲聞法陀羅尼門、世間法陀羅尼門、出世間法陀羅尼門、世界起陀羅尼門、世界滅陀羅尼門、世界形色陀羅尼門、淨世界陀羅尼門、垢世界陀羅尼門、淨世界に於て垢濁の刹を現ずる陀羅尼門、垢世界に於て清淨刹を現ずる陀羅尼門、純淨世界陀羅尼門、純垢世界陀羅尼門、平等世界陀羅尼門、翻覆世界陀羅尼門、伏住世界陀羅尼門、入因陀羅網陀羅尼門、迴轉世界陀羅尼門、住相陀羅尼門、小處に大を置く陀羅尼門、大處に小を置く陀羅尼門、佛身を分別する陀羅尼門、佛の莊嚴光明網を放つ陀羅尼門、如來の圓滿音聲を分別する陀羅尼門、佛正法輪陀羅尼門、佛の法輪を生ずる陀羅尼門、佛の法輪を分別する陀羅尼門、佛の法輪を壞すること無き陀羅尼門、佛辯法輪陀羅尼門、佛の法輪に向ふ陀羅尼門、能く佛事を作す陀羅尼門、諸佛衆に向ふ陀羅尼門、諸佛の大衆を分別する陀羅尼門、諸佛の無盡の大眷屬海陀羅尼門、普照佛力陀羅尼門、如來三昧陀羅尼門、如來三昧神力自在陀羅尼門、佛事を究竟する陀羅尼門、佛の所住する陀羅尼門、佛持陀羅尼門、佛化陀羅尼門、佛衆生の心心の所行を知る陀羅尼門、佛神力自在陀羅尼門、兜率天に住する陀羅尼門、乃至入般涅槃を示現する陀羅尼門、無量の衆生を饒益する陀羅尼門、諸の甚深法陀羅尼門、諸の莊嚴法陀羅尼門、菩提の心色方便陀羅尼門、菩提心の起色陀羅尼門、願色陀羅尼門、行色陀羅尼門、通明色陀羅尼門、出生死色陀羅尼門、淸淨智色陀羅尼門、淸淨慧色陀羅尼門、菩提無量色陀羅尼門、自心淨色陀羅尼門なり。善男子、我、唯此般若波羅蜜普莊嚴法門を知る

初八門は所理の理事を明す總持。

【功德陀羅尼門等】以下十門は願行の總持。

【業陀羅尼門等】以下八門は業の總持。

【善行三昧陀羅尼門】以下六門は定用の總持。

【心海陀羅尼門】以下五門は知他心の總持。

【衆生を發起する陀羅尼門】以下十一門は知所化の總持。

【大悲陀羅尼門】以下十五門は起能化の總持。

【世界起陀羅尼門】以下十七門は知刹海自在の總持。

【佛身を分別する陀羅尼門】以下二十七門は知佛海自在の總持。

【菩提の心色方便陀羅尼門】以下十門は知色海無礙の總持。

【善男子此南方】以下十行位の善知識を明す、初に歡喜行の善知識。

【頻婆果】ビンバ(Bimba)赤色の果實。

のみ。諸の大菩薩の心は虚空の如く、深法界に入りて功德成滿し、出世の法に安住して、世間行を遠離し、清淨の離癡の慧眼を具足し、決定して無量の法界を了知し、智慧無量にして虚空と等しく、無礙眼を得て、一切境界に於て障礙地藏に住し、普く一切を照して、善能く一切の法義を分別し、一切世間に能く壞する者無く、世間の行を行じて染著する所無く、善巧の方便もて一切衆生を饒益し攝取し、其所應に隨ひて悉く能く示現し、一切時に於て正法輪を轉じて自在を得たり。是の如きの功德は、我當に云何が能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て一國土有り、名けて救度と曰ふ、彼に比丘有り、名けて善現と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。』時に善財童子、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し辭退して南に行けり。

爾時、善財童子は、甚深の法門を正念し思惟し、甚深の法界を思惟し、甚深の報地を思惟し、甚深の衆生を思惟し、甚深の諸行を思惟し、甚深の衆生心の流を思惟し、甚深の衆生の光の如きを思惟し、甚深の諸法の性を思惟し、甚深の衆生の語法を思惟し、甚深の法界の圓滿莊嚴を思惟し、甚深の種の諸の業行を思惟し、甚深の世間業の莊飾する所を思惟し、漸漸に遊行して救度國に至り、城都、聚落、村邑、市里、仙人の住する處の山林曠野に於て、周遍して善現比丘を推求し、彼比丘、林に在して經行したまへるを見る。形貌端嚴にして、顏容姝妙なり、其髮は右に遶りて紺青色の如く、頂に肉髻有り、身色紫金にして其目は長廣にして青蓮華の如く、脣口は丹色にして頻婆果の如く、頸項は圓直にして

【七處平滿】如來三十二相の一、兩足下、兩手、兩肩、頂の七處皆平滿端正なり。

【答へて言はく】以下己が法界を示す中に三あり、初に緣に依りて法を得たることを明す【年既に少くして等】行位に入る故年少創めて十住の家を離れしが故日近しといふ。

修短所を得、胸に德字有り、勝妙に莊嚴せられ七處平滿せり、其臂は纖長に手の指に縵網あり、金輪もて莊嚴せられ、腨腓鹿蹲にして、腰腹は師子上に現れず、身は淨居天の如く、其身圓滿なること尼拘樹王の如く、相好莊嚴せられたるは、雪山王の諸の良藥を出すが如く、圓光一尋にして諸根は調伏せられ、目視安諦にして智慧の無礙なる猶し大海の如し。其心動ぜず、一切世間壞する能はざる所なり、天龍八部恭敬し圍遶せり。彼比丘の經行せる時、地天は地を持し步天は寶蓮華を出して隨ひて其跡を覆ひ、無盡圓滿天は衆闇を除滅し、覺天は雜華の雲を雨らし、不動藏天は諸の寶藏を現じ、普光勝虛空天は虛空を莊嚴し、妙德海天は寶を散じて供養し、離垢藏須彌山天は合掌して禮侍し恭敬し供養し、無礙力天は香華風の雲を起して之を供養し、夜天は莊嚴せる身を以て五體敬禮し、常覺日天は明淨の寶幢を持して虛空を莊嚴し闇冥を除滅せり。爾時、善財童子は、往きて其所に詣り、頭面に足を禮し、白して言さく、「大聖、我は阿耨多羅三藐三菩提に向ひ、菩薩行を求む。我、大聖は善能く諸の菩薩道を開導したまふと聞けり。云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや。願くば分別して說きたまへ」と。答へて言はく、「善男子、我年既に少くして出家の日近きも、我生れてより來、三十八恆沙の佛の所に於て梵行を淨修せり。或は一佛の所に於て七日七夜梵行を淨修し、或は餘佛の所にて半月一月、一歲百歲、億那由他歲、乃至不可說不可說歲、或は一小劫、半劫一劫、或は阿僧祇劫、乃至不可說不可說の阿僧祇劫に梵行を淨修せり。彼諸佛の所にて法を聞きて受持し其教に違はず。諸の願を

【善男子我此經行の處等】以下次に法の業用を顯す。

莊嚴し、究竟じて菩薩の諸行を淨修し、六波羅蜜を具足して、菩提の境界を知り、種種の法輪を知り、佛法を守護して乃し正法の滅盡するに至る。一切諸佛の世界を淸淨せり、三昧を出生する大願力の故に。菩薩の一切淨行を究竟せり、菩薩の一切行を出生する願力の故に。一切の佛の諸波羅蜜を淨めたり、普賢の諸行を出生する力の故に。善男子、我此經行の處を離れずして悉く十方を見る、智慧無礙なるが故に。一切法界は悉く現じて前に在り、一念の中に於て不可說不可說の諸の世界を過ぐるが故に。一念の中に於て不可說の諸佛の世界を嚴淨す、大願力を出生するが故に。不可說不可說の衆生の方便門は悉く現じて前に在り、十力智を具して普賢菩薩の行願力を出生するが故に。不可說不可說の諸佛悉く現じて前に在すを見、一念の中に於て不可說不可說の世界微塵に等しき佛を恭敬し供養す、如來を恭敬し供養する願力の故に。不可說不可說の諸佛の法雲を能く聞きて受持し、阿僧祇の諸法の趣を分別し了知す、法輪の陀羅尼力を出生するが故に。不可說不可說の菩薩行は悉く現在前して、一切の諸行は皆悉く淸淨なり、菩薩の因陀羅網の行願力を滿足するが故に。不可說不可說の諸の三昧海は悉く現在前して、一切の三昧は皆悉く淸淨なり、一三昧を滿じて一切の三昧力を出生するが故に。不可說不可說の諸根海は皆現じて前に在り、一切の根輪、隨順時輪は諸根際に安住する願力を出生するが故に。不可說不可說の時輪は悉く現在前して、能く一切時に淨法輪を轉ず、衆生を究竟する願力を出生するが故に。一切の三世海は悉く現在前して

【我唯此隨順等】三に名を結す。
【隨順菩薩燈明の法門】遠照顯煥を燈明といひ、卽ち十不可說等常に用ひて竭くるなきを隨順と名く。
【諸の金剛燈菩薩】以下五に抑推勝逆

【善男子此南方】以下第二饒益行の善知識を明す。
【輸那】チュナ(Cuna)淨又は善と譯す、大江の名戒行を持し業非を捨離するを明す。

一切世界の三世を分別す、隨順智慧の光明願力を出生するが故に。善男子、我唯此隨順菩薩燈明の法門を知るのみ。諸の金剛燈菩薩は諸佛の家に生れ、不死の命根を具足し成就し、無盡の智慧ありて無壞の身を成じ、肢體具足し、其所應に隨ひて悉く能く顯現し、妙形色を具へて世に倫匹無く、毒刄火災も害する能はざる所、身は金剛の如く沮壞すべからず、衆魔を降伏し諸の外道を制し、身は眞金色にして世間を超出し、其所應に隨ひて見聞せざる無く、普く世間を觀じて甘露の法を雨らし、普く一切を照して諸の障礙を滅し、見る者厭く無く、一切諸の不善根を拔斷して、妙善根を起し、遇ひ難く見難し。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て一國土有り、名けて輸那と曰ふ。彼に童子有り、釋天主と名く。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。時に善財童子、專ら菩薩の莊嚴正道を求め、菩薩の諸の力は心を照し、菩薩の無壞無盡の諸の功德行を修行し、菩薩の堅固の大願を成滿し、大莊嚴を以て而も自ら莊嚴し、一切畏る無くして、堅固の正直心を退かず、一切菩薩の行雲を受持し、菩薩の正法雲を受持して厭足無く、一切菩薩の功德を恭敬し、一切衆生を攝取し、常に生死の曠野を超出せんと欲し、善知識を見聞し恭敬し親近せんことを樂欲して、心に厭倦無く、頭面に足を禮して、恭敬無量にして敎誨に隨順し、辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、天龍の大衆眷屬の與に圍遶せられて輸那國に至り、周遍して釋天主童

【善城】 輸那の譯名。
【相黶子の法】護戒の故に相を知る法。
【算數法】十善は吉十惡は因と戒相一に非ざるをいふ。
【印法】戒品數多なるも、善惡因果の理決定の故に名く。

子を推求せり。時に虚空の中に諸の天龍有りて之に告げて曰はく、『善男子、此童子は善城の門外、河水の側に在す。』爾時、善財は釋天主、一萬の童子と與に沙を弄びて嬉戯したまふを見て、即ち其所に詣りて、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し合掌し恭敬して一面に於て住し、白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。唯願くば解說したまへ』答へて言はく、『善男子、文殊師利は我に相黶子の法、算數の法、印の法を教へたり。我此三種の法を知るに因るが故に、一切の巧術智慧の法門を得たり。善男子、我此法門に因るが故に、黶子、算數、印性を知れり。疾病、中毒、鬼の爲に著かれ、諸魔に持せらるるも、悉く能く消伏す。大小の城、都邑、聚落を立つる善惡の相、田業、商估、一切衆生の身肢節の相、善趣惡趣の行業の相、此衆生の善趣に之くを知り、此衆生の惡趣に之くを知り、此は聲聞、此は緣覺、此は如來地、諸の方便相、是の如き等の事は我悉く了知し、普く衆生をして此法を修學せしむ。復次に善男子、我亦菩薩の算數の法を了知せり。謂ゆる百千を一羅叉と爲し、百千羅叉を一拘利と爲し、百千拘利を一那由他と爲す、廣く說くこと阿僧祇品の如し。善男子、若し無量百由旬に等しき大沙聚有るも、我悉く分別して其數を算知せん。善男子、算法の能く沙聚を知り、東方の一切世界を算知するが如く、南西北方四維上下も亦復是の如し。一切世界の中の一切劫、一切佛、一切菩薩、一切業を算知す。一切世界の中の一切の四諦の名號を、算數し了知するも亦復是の如し。善男子、我唯此巧術智慧法門を知

【善男子此南方】以下第三無瞋恚行の善知識を明す

るのみ。諸の大菩薩は深く一切の算數の法門に入りて、一切法を算數し、深く三世の算數の法に入りて、一切衆生を算數し、一切法を算數し、一切佛を算數し、一切佛の名號を算數し、一切菩薩を算數し、一切の轉自在輪菩薩を算數す。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說き、境界を發明し、諸力を讚歎し、正直心を顯し、功德の具を說き、諸の大願を說き、清淨の諸波羅蜜を顯現し、功德藏の勝妙の智慧を說くべき。善男子、此南方に於て城有り、名けて海住と曰ふ。優婆夷有り、名けて自在と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し菩薩道を修するや」と。」時に善財童子は善知識の敎を聞きて歡喜無量にして、未曾有の奇特なる正直心の寶を得、其心弘廣にして普く衆生を覆ひ、諸佛の次第に出世する自在の法門を算數するを得、淨法圓滿し、智慧究竟じて、一切諸趣を分別し顯現し、三世の境界に於て障礙する所無く、無盡の功德海の心を出生し、大智慧の自在光明を得て、三界の縛を斷ず、頭面に足を禮し、右に遶ること三匝し辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、善知識に於て心厭足無きこと、猶し大海の衆流を呑納するが如し。善知識の日のごとく、明淨の慧光は其心を開發す。猶し蓮華の敷くがごとく、一切の善根の萌芽、莖節、枝葉、功德の大樹を長養せり。善知識は月のごとく、能く清涼の敎法の光明を以て、衆の熱惱を除く。善知識は夏の雪山の衆獸の集り樂む所となるが如し。善知識の心は猶し大海の衆寶充滿せるが如し。善知識の敎は法身を長養する、閻浮樹の華果具足し

て、心常に樂住するが如し。善知識の教法は譬へば龍王の虚空の中に於て神變自在なるが如し。善知識の教は大寶山を起し一切を顯現す。善知識の教を以て而も自ら閑適するは、猶し帝釋の阿修羅を降して能く壞する者無きが如し。漸漸に遊行して海住城に至り、周遍して自在優婆夷を推求せり。時に人有り、言はく、『善男子、此優婆夷は此城中の深宮の內に在す。』善財聞き已りて往きて宮門に詣り敬心して立てり。彼優婆夷の所住の所は廣博にして嚴飾し、衆寶の垣牆は周匝圍遶し、四門を開置し、阿僧祇の寶を以て莊嚴と爲せり。

善財進み入りて、優婆夷を見るに、師子座に處して年盛美に在り、容色は殊妙にして覩る者厭く無く、莊嚴の具を除きては、素服にして被髮し、身色光明あり、佛菩薩を除きては餘の能く及ぶもの無し。其宮內に於て十億の床を敷き、天人に出過せり。菩薩の宿世の行業の造る所なり、衣服、飲食、衆妙の寶物、諸の莊嚴具を、常に四門を開きて周く一切に給し、而も窮盡無し。一萬の女衆の眷屬に圍遶せらる、容色威儀は悉く諸天の如く、猶し莊嚴せられたる衆妙の寶樹の如し。口常に天の妙音聲を演出し、敬ひ樂ひて此優婆夷を觀察し禮拜し供養せり。彼諸の女は身常に妙香を出し、普く大成に熏ず。若し聞ぐ者有らば皆菩提を退かざるの心、怒害無き心、怨敵無き心、慳嫉無き心、幻僞無き心、諂曲無き心、貪愛無き心、瞋恚無き心、懈怠無き心、無量の心、平等の心、大慈の心、衆生を益する心、淨く戒を持つ心、求欲無き心を得ん。彼音聲を聞かば皆悉く歡喜し身心柔軟とならん。其れ見る者有らば皆欲を離るるを得ん。爾時、善財、頭面に彼優婆夷の足を禮して敬心に右に

【答へて言はく】以下」の法界を示す。

【無盡功德藏莊嚴の法門】業用を出生して窮竭するなきを以て無盡藏と名け、所出物を利し勝德を具する故功德莊嚴と名く。

遶り、一面に於て住し、白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。』答へて言はく、『善男子、我無盡功德藏莊嚴の法門を成就し、一器の食を以て百の衆生に施し、其所欲に隨ひて皆充滿を得しめ、千の衆生、百千の衆生、億の衆生、千億の衆生、百千億の衆生、那由他の衆生、百那由他の衆生、百千那由他の衆生、乃至不可說不可說の衆生、閻浮提の微塵に等しき衆生、乃至不可說不可說の佛刹の微塵に等しき衆生に、其所欲に隨ひて皆悉く充滿せしめて而も損減無し。又復上味の美膳、輦輿、衣服、華鬘、妙香、末香、塗香、寶莊嚴具を施與し、又床座、車乘、妙蓋、幢幡を施し、是の如き等の種種諸の物を、其所欲に隨ひて悉く充滿せしめ、皆大いに歡喜せり。善男子、東方の一世界、乃至不可說不可說の世界、閻浮提の微塵に等しき世界、乃至不可說不可說の佛刹の微塵に等しき世界の中に於て一切の聲聞緣覺は我食を食し已りて、悉く道果を成ぜり。又東方の乃至不可說不可說の佛刹の微塵に等しき世界の中に於て、一生補處の菩薩は、我食を食し已りて降魔し成道せり。南西北方四維上下も亦復是の如し。善男子、汝我此一萬の眷屬女を見るや不や。』『唯然り、已に見る。』『善男子、是の如き等の百萬の阿僧祇の菩薩は、悉く我と行を同うし、願を同うし、善根を同うし、修道を同うし、欲性を同うし、淨正念を同うし、清淨の趣を同うし、菩提の無量を同うし、同く諸根を得、心の依果を同うし、境界を同うし、正趣離生を同うし、眞實義を同うし、同く正法を明し、同じく菩薩の清淨の妙色を具へ、無量力を同うし、堅き

【善男子此南方】以下第四に無盡行の善知識を明す。

精進を同うし、正法の音を同うし、語言の道を同うし、諸の功德を同うし、清淨の業を同うし、清淨の報を同うし、同く清淨の大悲もて一切を救護し、同く清淨の業、因緣に違はず、同じく清淨の口業もて、一切の佛の衆に於て其所應に隨ひて悉く爲に法を說き、同く諸佛を恭敬し供養し、同く決定して一切の諸法を知り、同く菩薩の清淨の諸地を得たり。此諸の菩薩は我器の食を取りて、一念の頃に於て遍く十方に遊び、一切の聲聞、緣覺、菩薩、諸佛を供養し、及び餓鬼に施して悉く滿足せしめ而も我器の食は損減する所無し。善男子、我此器の食は應に隨ひて諸天を悉く充滿せしめ、乃至人に施すも亦復是の如し。善男子、且く待つこと須臾せよ。汝自ら之を見ん。」善財は卽ち無量の人衆、四門より入り、彼優婆夷は皆安坐せしめ、適樂する所に隨ひて充悅せしめたまふを見る。「善男子、我唯此無盡功德藏莊嚴の法門を得るのみ。諸の大菩薩の無盡功德藏海は、猶し虛空の如く、無量の功德を以て其心を熏修せり。隨意の寶の如く、一切衆生の願を滿足せしむるが故に。大功德藏は悉く一切諸の貧苦を滅するが故に。功德の須彌は衆寶を雨らすが故に。大功德藏は法城の門を開くが故に。功德の燈明は貧の暗を滅するが故に。大功德の蓋なる、勝妙の善根は一切衆生を覆ふが故に。我當に云何が彼功德の行を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て城有り、名けて大興と曰ふ。彼に長者有り、甘露頂と名く。汝彼に詣りて問へ、云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。』時に善財童子、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し憶念して捨てず、辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、無盡の功德光明の法門を得て、正念に彼功德海を思惟し、彼虛空のごとき功德を觀察し、彼功德聚に趣き、彼功德山に登り、彼功德藏を攝して、彼功德の底を盡し、彼功德の海に度り、彼圓滿の功德を淨め、周遍して彼諸の功德を觀察し、彼功德藏に隨ひ、彼功德の教を持し、彼功德の性を淨め、漸漸に遊行して、大興城に至り、周遍して長者甘露頂を推求し、善知識を樂ひ求め、善知識を以て其身心に熏じ、善知識に於て正直心を起し、善知識を觀じて常に厭足無く、善知識を學びて勇猛精進し、善知識の一切善根を求め、善知識の一切善根に同うし、善知識に於て嫌恨の心無く、功德藏を滿し、善知識の種種の方便を學し、他に由りて悟らずと雖も而も常に諸の善知識に親近して、諸の善根を長じ、菩提正直の心を淨修し、一切菩薩の諸根を增長し、一切善根を成就し大願を滿足し、廣大の悲を發し、一切智に近づきて諸佛を離れず、普賢菩薩の所行を增長して、如來の光明常に其心を照せり。爾時、善財、甘露頂を彼城內に見るに、七寶堂の阿僧祇寶師子座上に處して、金剛伊尼羅寶を以て座足と爲し、離垢の寶藏を以て校飾し、五百の寶像を以て莊嚴と爲し、衆の寶幢を建て、寶の繒幡を垂れ、衆寶の帳を張り、無量の寶網を其上に羅覆せり。人有り、手に閻浮檀金の蓋を執り、瑠璃を竿と爲せり。復離垢の寶拂を執持するもの有りて、左右に侍立し、衆妙の雜香を以て之に熏じ、天華の雲を雨らし、五百種の勝妙の妓樂を作して娛樂せり。城內の一萬の大衆は周匝し圍遶せり、顏容姝妙にして天人に倫無く、菩薩の直心の莊嚴を成就し、衆生悉く常に甘露頂の教に隨順

せり。宿世に同く諸の善根を修したるが故なり。
爾時、善財、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、恭敬し合掌して、一面に於て住し白して言さく、『大聖、我一切衆生を利益せんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。謂ゆる一切衆生の苦惱を滅し、安隱に住して快樂を究竟せしめ、生死の海を度りて法寶の洲に到らしめ、貪愛を銷竭して大悲の念を修め、五欲の渇を除きて一切智を樂はしめ、究竟じて生死の曠野を度り、常に一切諸佛の功德を樂ひ、三界を超出して薩婆若城に至らしめん。而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修し、一切衆生を攝するやを知らず。』
長者、答へて言はく、『善い哉善い哉、童子。乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。若し能く發心して菩薩道を學し、菩薩行を修すれば、此人得難く、善知識を求め善知識に見えて親近し恭敬し善知識に於て其心退せずして厭足無けん。善男子、汝我此一萬の眷屬を見るや不や。』『唯然り、已に見る。』『我本彼が爲に種種の法を說きて阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、如來の家に生じ、白淨の法を修し、無量の諸波羅蜜を滿足して、佛の十力を具へ、世間の姓を離れて如來の姓を立て、生死の輪を壞りて淨法輪を轉じ、三惡道を滅して正法趣に立たしめたり。善男子、當に知るべし、菩薩は悉く能く一切衆生を救護す。善男子、我此如意功德寶藏の法門を成就して、其須むる所に隨ひて悉く彼願を滿せしむ。謂ゆる衆寶の車乘、象馬、僮僕、衣服、飲食、香華、末香、燈明、湯藥、幢幡、繒蓋、隨意の眷屬、天冠、寶飾、一切の珍玩資生の具を以て、盡く之を給施し、乃至法を以て廣く衆生に施せり。

【善男子此南方】以下第五に離癡亂行の善知識を明す

善男子、且く待つこと須臾せよ、汝自ら之を見ん。」即時に善財、諸方の國城邑聚落を見るに、一切衆生來りて其所に詣り、悉く命じて坐せしむ。時に甘露頂、仰きて虛空を觀、諸の來り會れる一切の須むる所に隨ひ、悉く空より下して其願を滿足せしむ。既に願を充し已りて爲に正法を說き、悉く諸の功德藏を長養せしめ、生死の愛を消して佛法を渴仰せしめ、乃至大人の味味の相を具足して貧窮の苦を滅し、甘露の財を富にし、衆魔を降伏して能く壞する者無く、十力無上の智慧を成就せしめたり。是の如き等の類悉く願を滿し已りて、皆大いに歡喜し、來りし所の方に隨ひて各本處に還れり。『善男子、我唯此如意功德寶藏の法門を知るのみ。諸の大菩薩は、一切の自在功德を具足し、寶手を成就して一切刹を覆ひ、無量の雲を雨らす。謂く、衆寶の雲、種種の色莊嚴の雲、種種の色寶天冠の雲、種種の色衣の雲、種種妙聲の雲、種種の華の雲、種種の周羅摩尼寶の雲、種種の色香の雲、種種の色蓋の雲、種種の色幢幡の雲なり。皆悉く一切世界、一切佛刹に充滿して、一切諸佛及び其眷屬は一切衆生を敎化して、一切佛を供養せしめんが爲の故なり。我當に云何が彼菩薩行を能く知り能く說きて、其自在を顯すべき。善男子、此南方に於て城有り、師子重閣と名く。彼に長者有り、法寶周羅と名く。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩の道を修するや」と。』時に善財童子、歡喜踊躍して頭面に敬禮し、遶ること無數匝し、弟子の法の如くして、是の如きの念を作さく、『善知識に因りて一切智を得、善知識に於て無壞の心を生じ、善知識の敎を聞きて、悉く能く隨順して諸根を調伏せり。』

是念を作し已りて辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、如意功德寶藏の法門を正念し、彼功德藏を守護し、彼功德の須彌山王を淨め、彼功德海の源底を得、彼功德藏を開き、彼功德藏の圓滿を觀じ、彼功德藏を淸淨にし、彼功德藏を攝し、彼功德藏の力を出生し長養して、漸漸に遊行して彼城に至り、周遍して長者法寶周羅を推求せしに、道に於て遇見たれば、頭面に足を禮し合掌し恭敬して、一面に於て住し、白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。』時に彼長者、善財の手を執り、將ゐて其家に歸れり。『善男子、且く我家を見よ。』爾時、善財、遍く舍宅を見るに、悉く閻浮檀金色にして、七寶を牆と爲して周匝し圍遶し、瑠璃もて莊嚴し、硨磲を柱と爲し、赤眞珠寶の師子の座を敷き、師子寶の幢を建て、瑠璃の寶帳を張り、如意珠の網を其上に羅覆し、阿僧祇の寶もて之を莊嚴せり。碼碯寶の池には、八功德水其中に盈滿し、一切の寶樹は周匝して圍遶し、其宅の廣大なること十重にして八門あり。爾時、善財、最も下重を見るに、衆の肴膳を設けて一切に惠み施せり。第二重を見るに雜寶の衣を施し、第三重を見るに一切の寶の莊嚴具を施し惠み、第四重を見るに內眷屬を施せり、悉く善行を履み語言に巧なり。第五重を見るに、乃至五住の菩薩は其中に雲集して正法を結集し、世間の樂を離れ、一切の論、諸の陀羅尼、三昧法印を出し、三昧の智慧光明を分別せり。第六重を見るに般若波羅蜜を得たる菩薩其中に充滿し、甚深の智を具へ、寂靜明の智慧

【響忍の菩薩等】七地に殊勝の行を得て種種の教法に別異義なきを知る。【常住菩薩等】八地に無增減の法界を證得するなり。神通刹等とは三世間に自在の故なり。一切に詣るとは九地に佛法を受持するを明す。【補處の菩薩】十地受職位等亦是れ等覺位を明す。【一切如來】妙覺位なり。

藏地、無礙法門を得て、三有を超出し、境界無礙にして不二の法を念じ、般若波羅蜜門を結集し、般若波羅蜜門を分別し解說せり、謂ゆる寂滅藏般若波羅蜜門、一切衆生を分別する般若波羅蜜門、不動轉般若波羅蜜門、離欲普照般若波羅蜜門、不可壞藏般若波羅蜜門、一切衆生淨眼般若波羅蜜門、海藏般若波羅蜜門、普眼般若波羅蜜門、一切無盡方便海般若波羅蜜門、隨順衆生普照無礙般若波羅蜜門、慶雲漸下般若波羅蜜門なり、是の如き等の百萬阿僧祇の般若波羅蜜門を結集し、彼菩薩衆は不可說の莊嚴にて之を莊嚴せり。第七重を見るに響忍の菩薩其中に充滿し、方便智慧を出し、悉く能く諸佛の法雲を聞持せり。第八重を見るに常住菩薩其中に充滿し、諸の神通を具へて一切刹に遍く、一切衆生、一切法界を照し、法身を具足し、一切佛に詣りて障礙する所無く、悉く能く一切佛法を受持せり。第九重を見るに補處の菩薩其中に充滿せり。第十重を見るに一切如來其中に充滿し、初發心より菩薩行を修し、生死を超出し、大願を滿足し神力自在にして、一切佛刹及び其眷屬は淨法輪を轉じて衆生を化度し、顯現し住持せり。爾時、善財、是の如き等の奇特の事を見已りて白して言さく、『大聖、我未だ曾て是の如き清淨大衆を見ず。昔何の處に於て諸の善根を種ゑたまひ、今是の如き勝妙の果報を得たまへるや。』善男子、我過去を憶ふに、無量光明法界普莊嚴王如來、應供、等正覺、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊、世に出興したまひ、彼佛、城に入りたまひしに、我香華妓樂を以て之を供養したり。供養し已りて此善根を持して三處に廻向せり。謂ゆる貧苦を滅除し、常に諸佛菩薩及

【大願を滿足する法門】宿願所求の三處稱ひ、遂に之を十重に成滿するが故に名く。

【善男子此南方】以下第六善現行の善知識を明す。

び善知識を見、恆に正法を聞かんとなり。故に斯報を得たり。善男子、我唯此大願を滿足する法門を知るのみ。諸の大寶海菩薩は不可壞の淸淨法身と、不可壞の法雲とを得て普く一切を覆ひ、不可壞の功德と不可壞の大功德の網とを具足し、普く一切を覆ひ、不可壞の三昧の境界に入り、菩薩の不可壞の善根を具足し、不可壞の如來の所住に住し、不可壞の智慧もて三世を究竟じ、一切劫に住して疲倦無く、不可壞の普眼の境界地に住せり。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て一國土有り、實利根と名け、城を普門と名く。彼に長者有り普眼妙光と名く。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。『時に善財童子、頭面に法寶周羅の足を敬禮し已りて、辭退して南に行けり。

大方廣佛華嚴經　卷第四十九

東晋三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之六

爾時、善財童子、諸佛の無量の法門を思惟し、菩薩の無量の諸行と、菩薩の無量の妙方便道とを逮得し、普く身心を照し、無量の方便の法門を樂ひ求め、菩薩の清淨解脱、菩薩の無量清淨の諸根、菩薩の無量の諸の清淨力を成就し、心菩薩の無量の諸行に隨ひ、菩薩の無量大願力を出生し、菩薩の沮壞すべからざる妙智慧幢を逮得して、普く一切を照し、漸漸に遊行して彼國に至り、普門城を求めて心に休息無く、精進して退かず、善知識を念ひ、善知識を讃じ、善知識に隨順し、諸根專ら普門の法門に向ひ、一切諸の放逸行を遠離し、淨慧眼を開き、生死海を度り、普門城を見るに百千の小城、周匝し圍遶し、高峻堅固にして妙巧比無く、種種に莊嚴せられ、普眼妙香長者は此城中に於て樂香の座に坐したまへり。往きて其所に詣り、頭面に足を禮し、恭敬し合掌して、一面に於て住し、白して言さく、「大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。」答へて言はく、『善い哉善い哉、善男子。』乃

ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。善男子、我一切衆生の病を知れり。風寒熱病及び諸の雜病、枉横病、鬼著病、毒病、諸の呪術病、是の如き等の類の一切諸病を、我悉く療知し、其所應に隨ひて皆能く療治す。善男子、十方衆生の諸の病有る者は、來りて我所に詣らば、我悉く能く治せん。其患を除き已りて、香湯に沐浴し、香華瓔珞、名衣上服もて之を莊嚴し、肴膳飲食もて之を供養し、無量の珍寶もて之に惠施し、然る後に爲に種種の法門を說き、貪欲多き者には不淨觀を教へ、瞋恚多き者には慈心觀を教へ、愚癡多き者には法相觀を教へ、等分行の者には勝れたる法門を教へん。諸佛の功德を稱揚し讚歎す、菩提心を發さしめんが故に。大悲を長養するを說く、無量の生死の苦に於て心厭はざらしめんが故に。諸の波羅蜜を分別し廣說す、無量の淨智慧を長養せしめんが故に。諸の大願を說く、一切衆生を教化し成熟せんが故に。普賢菩薩の行を說く、清淨尸波羅蜜を顯現せんが故に。不可思議如來の功德を說く、羼提波羅蜜を顯現せんが故に。如來の壞する無き清淨法身を說く、毘梨耶波羅蜜を顯現せんが故に。如來は與等の者無きを說く、如來の禪波羅蜜を顯現せんが故に。清淨法身を說く、般若波羅蜜を顯現せんが故に、一切の淨法身を說く、一切衆生をして皆悉く觀見しめ、方便波羅蜜を顯現せんが故に、生死の中に於て一切劫に住するを說く、願波羅蜜を顯現せんが故に。嚴淨せる一切佛刹を說く、諸の力波羅蜜を顯現せんが故に。淨法身は其所應に隨ひ、悉く歡喜せしむるを說く、智波羅蜜を顯現せんが故に。常に清淨法身を樂見せんことを說く、一切不善の法を遠

【新頭】シンヅパーラ(Sindhupara)信度河の河岸に生ずる香。

【善男子此南方】以下第七無著行の善知識を明す。

離せんが故に。善男子、我是の如き等の種種の法施を以て、悉く滿足し歡喜せしめて還さん。善男子、我又善く衆の香を和する法を知れり。謂ゆる不可稱王香、新頭香、勝香、覺香、明相香、沈水香、堅固香、栴檀香、雲香、不動諸根香なり。是の如き等の一切諸香を知り、此香を燒く時は一心に佛に向ひ、大誓の心を發し、一切の願を滿ぜん。謂ゆる一切衆生を救護し、一切佛刹を嚴淨し、一切諸佛を恭敬し供養し、乃至一丸の香を燒く時は、十方一切法界の一切如來及び其眷屬に充滿し、香帳もて一切法界を莊嚴せん。香の宮殿、香の垣墻、香の樓閣、香の欄楯、香の却敵、香の窓牖、香の半月、香の蓋、香の幢、香の幡、香の網、香の形像、香の光明、香の莊嚴具、香の雲雨は、十方一切法界、一切諸佛及び其眷屬を莊嚴せん。善男子、我唯此一切衆生をして歡喜せしむる普門の法門を知り、一切佛身を見るのみ。諸の大藥王菩薩は若し聞見し親近し憶念し、名號を執持する有らば皆悉く虛しからじ。其れ見る有らん見は煩惱悉く滅して、諸の如來法の源底を得ん。苦陰を除滅し、永く一切生死の恐怖を離れて無所畏を得、一切智を具し、無量の生死の高山を破壞し、正法に安住せん。我當に云何が彼功德行を、能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て城有り、名けて滿幢と曰ひ、王を滿足と名く。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。時に善財童子、頭面に普眼妙香長者を敬禮して遶ること無數匝し辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、次第に諸の善知識を憶念して、善知識の教を正念し思惟して、復是

念を作さく、『善知識は能く我を攝取し、能く我を守護し、我をして阿耨多羅三藐三菩提を退せざらしむ。』是の如く思惟して大歡喜心、無量の歡喜心を得、清淨心、寂滅心、廣大心、莊嚴心、無著心、無礙心、虛空心、諸佛菩薩を見るの心、自在心、諸法に順ふの心、一念の中に於て一切佛刹に充滿する心、如來を見るの心、十力を念ずるの心、諸佛善知識を捨てざるの心を發して、漸く人衆の城邑聚落を經て、滿幢城に至りて問はく、『滿足王は今何の所にか在す。』人有り答へて言はく、『今は正殿に在して王法を行ひ、衆生を敎化して、應に攝取すべき者は之を攝取し、應に罰すべき者は罰し、應に治すべき者は治し、諸の諍有る者は其諍訟を斷じ、恐怖有る者には施すに無畏を以てし、不殺、不盗、不邪婬、不妄語、不兩舌、不惡口、不無義語、無貪恚癡を讚歎したまへり』と。爾時、善財、遙に彼王、金剛の師子座に處したまふを見るに阿僧祇の寶を以て莊嚴し、無量の寶像を以て莊飾と爲し、種種の香雲もて普く之に熏じ、無量の寶衣を以て其上に敷けり。又復無量の寶幢、無量の寶幡を建立し、周遍して垂下し、衆寶の帳を張り、頂に如意摩尼寶の冠を冠り、閻浮檀金の半月にて莊嚴し、髮は紺青の色、耳は普く垂睡し、身には無價の摩尼の瓔珞を佩び、百千の寶網を其上に羅覆し、閻浮檀金の蓋あり、衆寶を鈴と爲して、常に妙音を出し、瑠璃を竿と爲す、夜光の寶藏ありて普く諸方を照せり。彼滿足王には大勢力有りて、諸の怨敵を離れ、無量自在なり。一萬の大臣は各常位に處して王事を修理し、勇將一萬、仗を持して侍衛せり。爾時、善財、無量の衆生の王法を犯す者を見るに身に五縛を被り、或は

【幻化の法門】所修の門を出す、謂はく迷相不實の故に以て名をなす。

手足を斷じ、或は耳鼻を截ち、或は雙目を挑り、或は身首を斬り、或は沸灰に投じ、或は髮を纏ひて油を灌ぎ、火を以て之を焚けり。是の如き等の無量の楚毒もて之を苦治せり。爾時、善財は是の是きの念を作さく、『我一切衆生の爲の故に、菩薩行を學し、菩薩道を修す、今此王を見るに大惡逆にして、諸の不善法を行ふ、此れ乃ち惡中の惡にして第一の惡人なり。』是念を作す時、虛空に天有り、之に告げて曰はく、『善男子、汝當に普眼妙香善知識の教を憶念すべし。』善財即時に仰ぎて虛空を觀て、之に答へて言はく、『我常に憶念す。』天又語りて言はく、『若し常に憶念せば、何が故に疑ひ怪むや、善男子、菩薩の方便は不可思議なり、菩薩の智慧は不可思議なり、衆生を攝取すること不可思議なり、衆生を調伏すること不可思議なり、衆生を敎化すること不可思議なり、衆生を憐念すること不可思議なり、衆生を度脫すること不可思議なり。』爾時、善財、天の教を聞き已りて、彼王の所に詣り、頭面に足を禮して白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。』時に滿足王は王の事訖已りて、手に善財を執り、將ゐて宮内に入り、命じて寶師子座に就かしめ、而も之に告げて曰はく、『善男子、汝我家を觀よ。』善財即ち觀るに廣大極まり無く、七寶の垣牆は周匝し圍遶し、七寶の講堂は無量百千の衆寶の樓閣にて之を莊嚴し、乃至不可思議摩尼の寶網を其上に羅覆し、五百の侍女は端嚴なる天の如く、上の說く所の如し。『善男子、我此報の所因の業を見るや不や。』答へて言はく、『已に見たり。』『善男子、我菩薩の幻化の法門を成就

【善男子此南方】以下第八尊重行の善知識を明す。

せり。我此國土の殺生偸盜、乃至邪見の諸の群生の類は、教化して諸の惡業を離れしむべからず。我調伏して解脫せしめんが爲の故に、人衆の種種の苦治を化作し、十不善の道と、一切の諸惡とを捨てて、十善を具足し、究竟樂を得て、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、一切智を具足せしむ。善男子、當に知るべし、我身口意は乃し蟻子に至るまでも害心を生ぜじ、何に況んや人をや。人は是れ福田にして諸の善根を生ず。善男子、我唯此幻化の法門を知るのみ。諸の大菩薩は無生法忍を得て、一切有趣は皆悉く幻の如しと知り、菩薩行は悉く變化の如く、一切世間は悉く電光の如く、一切諸法は皆悉く夢の如しと知り、深く無礙の法界に入り、菩薩の妙行を具へ、境界礙ふる無く、一切行を攝し、無量の旋陀羅尼に於て自在を得たり。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て城有り、名けて善光と曰ふ。王を大光と名く、汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。』時に善財童子、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、一心に彼王の智慧幻化の法門を正念し、一切法は皆悉く幻の如しと觀じ、諸業を分別して專ら正法を求め、一心に彼王の變化して衆生を救度せしを思惟し、世間の一切は幻の如しと思惟し、三世の願行は悉く幻化の如しと分別し了知して、淨法界に入り、漸く人衆の聚落城邑、曠野の諸難を經て心に疲倦無く、善光城に至りて衆人に問うて曰はく、『此城を何とか名く。』答へて言はく、『善光なり。』爾時、善財は是の如

きの念を作さく、「我善知識は此城中に在せり。我今必定して善知識に見え、菩薩行、菩薩の正法及び諸の法門、菩薩の功德の不可思議、境界の不可思議、自在の不可思議、平等法門の不可思議、勇猛力の不可思議を聞かん。」我今必ずや菩薩の究竟の境界を聞かん。是念を作し已りて善光城に入れり。城を見るに七寶にて無量に莊嚴せられ、七重の深き塹は周匝し圍遶し、八功德水は其中に盈滿して、底に金沙を布き、優鉢羅、鉢曇摩、拘牟頭、分陀利華は遍く其中に滿ち、七寶の垣牆は七重に圍遶せり。謂ゆる金剛師子の垣牆、不可壞金剛の垣牆、精進金剛の垣牆、不可壞精進の垣牆、無底金剛の垣牆、淨網の垣牆、離欲淸淨金剛の垣牆なり。是七重の垣牆は阿僧祇の寶にて之を莊嚴せり。其城は奇特にして高峻廣大なり。十億の街巷あり、一一の街巷に各無量億那由他阿僧祇の人衆有り。阿僧祇の閻浮檀金の樓閣は瑠璃の寶網を其上に羅覆し、不可思議の白銀の樓閣は赤眞珠の網を其上に羅覆し、不可思議の瑠璃の樓閣は莊嚴藏摩尼の寶網を其上に羅覆し、不可思議の玻瓈の樓閣は離垢摩尼寶藏の網を其上に羅覆し、不可思議の明淨寶の樓閣は日藏摩尼の寶網を其上に羅覆し、阿僧祇の因陀羅尼寶の樓閣は妙寶光明の網を其上に羅覆し、阿僧祇の堅固寶の樓閣は夜光寶焰網を其上に羅覆し、不可思議金剛の樓閣は不可壞幢摩尼の寶網を其上に羅覆し、不可思議沈水栴檀の樓閣は摩訶曼陀羅華網を其上に羅覆せり。是の如き等の稱說すべからざる妙寶の樓閣は種種の網を以て其上に羅覆せり。不可思議妙寶の網、不可思議金鈴の網、不可思議香の網、不可思議華の網、不可思議衣の網を其上に羅覆せり。

【二十八大人相】因位未だ滿ぜざるを現ず三十二相中無見頂、眉間、白毫梵音長舌の四相を缺く。

又不可思議なる諸の妙寶の帳を張り、不可思議珍妙の寶蓋を以て其上に覆ひ、不可思議雜寶の幢幡を建立して之を莊嚴せり。此城中に當りて一樓閣有り、名けて衆生樂見無厭と曰ふ。阿僧祇の摩尼寶を以て莊嚴せり。彼大光王は常に其中に處したまふ。爾時、善財、此一切の嚴飾の珍妙なるに於て心に染著無く、一心に善知識を見んと樂欲せり。大光王、法堂の師子座に處して結跏趺坐したまふを見るに、衆寶もて莊嚴し、敷くに寶衣を以てし、萬阿僧祇の寶像を以て莊嚴と爲し、種種の伎樂もて之を娛樂し、二十八大人の相有り、八十種好を以て莊嚴し、身は眞金色にして明淨の日の如く、普く一切を照し、盛滿の月の衆星の中に明かなるが如く、梵天王の大衆に處するが如く、大海の中に衆の珍寶有るが如く、雪山の中より諸の良藥を出すが如く、大龍王の諸法寶相の音聲を雷震するが如く、虛空の淸淨にして、塵垢を受けざるが如く、須彌山の四種の寶色普く衆生の性海を照すが如く、譬へば寶洲の智寶充滿するが如し。彼王殿の前、及び諸の街巷、城の四門の外には、處處に衆の珍寶聚及び諸の寶衣を安置し、無量億那由他の諸の婇女樂あり、容飾端嚴にして五欲倫無く、姿好巧妙にして天人を廻動す、六十四術備に擧げざる無し。無量の乳牛あり、其角は金色、乳味甘くして香し、一穀に一石あり。又無量の諸の莊嚴具、種種の甘香百味の肴膳、無量の音樂、及び諸の湯藥資生の具有り。一一の街巷には兩邊に各二十億の菩薩有り、此一切資生の具を以て而も用ひて惠施しぬ。衆生を攝せんが故に、衆生を悅ばしめんが故に、衆生の心を淨めんが故に、衆生の煩惱を減せしめんが故に、衆

【大慈幢の行】義勝出離染圓滿備の故。

生をして實義を解らしめんが故に、衆生を一切智に安立せしめんが故に、衆生をして惡心を離れしめんが故に、衆生の邪見の刺を拔出せんが故に、衆生の業道を淨めんが故なり。

爾時、善財、五體にて大光王を敬禮し已りて、右遶すること一匝し一面に於て住し、白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。我大聖は善能く解說したまふと聞けり。唯願くば敎導したまへ。』答へて言はく、『善男子、我は菩薩の大慈幢の行を成就し、清淨に滿足せり。我無量不可說不可說の諸佛菩薩の所に於て、此妙法を聞きて觀察して清淨に修習し莊嚴せり。善男子、我此行に住して如法に國を治め、衆生を觀察して世間に隨行し、如法に衆生を敎化し、衆生を攝取し、衆生を安置し、衆生を饒益し、如法に衆生に熏じ、如法に衆生を敎へ、善根を修し、法の眞實を觀ぜしめ、諸の衆生をして慈心、大慈心、大慈力心、饒益心、離恐怖心、衆生を攝する心、衆生を捨てざる心、大願を發し、諸の苦を滅せしむる心を得しめ、衆生を安隱にして快樂を得しめ、身心柔軟にして心の垢を遠離し、生死の樂を捨てて常に正法を樂ひ、煩惱の垢を除きて清淨心を得、一切の善を以て衆生の心に熏じ、生死の流を斷ちて深法海に入り、諸の有趣を滅して無礙の心を出し、一切智を得て、諸の心海を淨め、信力堅固にして能く壞する者無からしめたり。善男子、我是の如く此行に安住するを以て如法に國を治め、諸の人民をして衆の怖畏を離れしむ。貧窮の者有り、來りて我所に至らば、求索する所に隨ひて常に庫藏を開き、而も之に告げて曰はく、

「意を恣にして之を取り、衆の惡を作すこと勿れ」と。此城の衆生は悉く大乘に向へり。各此城を見るに種種同じからず。或は垢穢と見、或は清淨と見、或は木石と見、或は瑠璃と見、或は無壞の幢幡周匝し圍遶すと見、或は不可思議樓閣と見る。阿僧祇の寶を以て莊嚴し、正直心を以て諸の善根を修して諸佛の所に於て一切智を求め、我宿世の所攝たりし衆生にして菩薩行を修する者は、乃ち此城を衆寶嚴淨なりと見るも餘は垢穢なりと見る。善男子、此城の衆生は五濁惡の時に諸の不善を行へり、我彼を愍念して菩薩の大慈を首と爲し、世に順ずるの三昧に入らしめたり。此定に入る時、彼諸の衆生の惡心、惱心、諍心、害心は、皆悉く除滅せり。所以は何ん。此三昧力は法是の如くなるが故なり。善男子、且く待つこと須臾せよ、汝自ら之を見ん。」時に王即ち大慈を首と爲す順世の三昧に入れり。入り已りて善光の大城は六種に震動し、諸寶の垣牆、樓閣、宮殿、欄楯、窓牖、却敵、半月の寶鈴、羅網、諸寶の形像は妙音聲を出して彼王を讃歎せり。其城の內外一切の人民は、皆大いに歡喜し、一心に合掌して彼王を禮し、諸の畜生等も慈心もて相向ひ、亦彼王を禮せり。山原樹林も皆悉く躬を曲めて彼王に向ひ、河池泉流も皆悉く王に向ひ、一萬の龍王は黑重雲を興し、雷震曜電して衆の香水を雨らし、一萬の釋天王、夜摩天王、刪兜率天王、化自在天王、他化自在天王等は虛空の中に於て億那由他の妓樂音聲を作し、阿僧祇の天の婇女は衆の妙音もて歌頌し、阿僧祇の華雲、香雲、末香雲、鬘雲、蓋雲、雜色衣雲、阿僧祇の寶幢幡蓋もて虛空を莊嚴して彼王を供養し、伊那槃那龍王は、大蓮華を敷き

【毘舍闍】ピシヤーチヤ(Piśāca)噉精鬼と譯す、持國天所領の鬼。

【善男子此南方】以下第九善法行の知識を明す。

て普く虛空を覆ひ、阿僧祇の妙綵の繒帶を垂れ、阿僧祇の寶もて之を莊嚴し、阿僧祇の寶鬘瓔珞、天の莊嚴具、諸の妙華香は、虛空に充滿して彼王を稱讚し、阿僧祇の羅刹鬼等は常に大海閻浮提に在りて住し、血を飮み肉を食ひ、水陸の惡獸は常に衆生を害したるも、皆慈心及び寂靜心を得て、明かに後世を信じ、諸の惡を遠離して心大いに歡喜し、五體を地に投じて彼王を敬禮し、皆無量の身心の快樂を得たり。阿僧祇の毘舍闍鬼及び四天下の毒害の衆生、三千大千世界、乃至十方の各百萬億那由他の世界の中の毒害の衆生も、亦復是の如し。時に大光王、三昧より起ち、善財に告げて言はく、『善男子、我唯此菩薩大慈幢行三昧を知るのみ。諸の大菩薩は大慈の蓋を以て普く覆ひて、一切衆生を救護し、上中下品無二なりと等觀し、慈は大地の如く衆生を栽育す。菩薩は滿月のごとく功德の光を出し、衆の惱熱を除く。菩薩は淨日のごとく、智慧の光明は普く一切を照す。菩薩は明燈のごとく重闇を除滅し。菩薩は淨水の珠のごとく衆生の心海の煩惱、垢濁を滅し、菩薩は如意寶珠のごとく、衆生の心に隨ひて悉く滿足せしめ、菩薩は疾風のごとく速かに衆生をして三昧を修習し、一切智の城に入らしむ。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說き、彼功德の山を讚歎し稱量し、彼功德を觀じて大願の風輪を知り、眞實地を得て大乘を莊嚴せる普賢菩薩の修行する所及び諸の三昧を分別し了知して大悲雲を讚ずべき。善男子、此南方に於て城有り、名けて安住と曰ふ。優婆夷有り、名けて不動と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。』時に善財童子は彼王を敬禮し

【如來使天】佛力所攝の神。
【隨菩薩天】已業行の神。

て、逮ること無數匝し辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、正念に大光王の教を思惟し、菩薩の大慈幢行の大慈を首と爲し、世間に隨順する三昧は、不可思議功德の願力を出生し、菩薩の不可思議の堅固の智慧を長養するを思惟し、菩薩の不共の法を思惟し、不可思議の諸法の實相を思惟し、菩薩の不可思議の眷屬を思惟し、菩薩の不可思議の衆事を思惟せり。是思惟を作し已りて歡喜心、離欲心、極踊躍心、謙下心、離垢心、明淨心、堅固心、無畏心、無盡心を得たり。是念を作し時、悲泣して涙を流し、復是念を作さく、「善知識を見れば即ち能く一切功德を出生し、菩薩行を起し、清淨に陀羅尼を正念し、菩薩の三昧の光明を出生し、一切の佛を見、諸佛の法雲を雨らし、菩薩の諸願を分別し解說し、菩薩の不可思議の智慧光明を出生し、菩薩の堅固の諸根を長養し、善知識は能く險道を離るるを念ひ、善知識は正路を開示するを念ひ、善知識は平等法に順ずるを念ひ、善知識は摩訶衍を顯すを念ひ、善知識は普賢菩薩の所行を究竟するを念ひ、善知識は一切智の城を現ずるの念ひ、善知識は一切法界海を度るを念ひ、善知識は普く三世一切の法海を照すを念ひ、善知識は一切諸の賢淨法を長養するを念ひ、善知識は一切諸の賢聖法を成滿するを念へり。善財は是の如く悲心に念ずる時に、如來使天、隨菩薩天は虛空の中に於て之に告げて曰はく、『善男子、其れ善知識の教に隨順する有らば諸佛歡喜したまひ、其れ善知識の教に隨順する有らば一切智に近づかん。善知識の教に於て心厭く無きが故に、一切の諸義は悉く現じて前に在らん。善男子、

汝安住王城の不動優婆夷の所に詣れ。是れ汝が知識なり。久しからずして當に見るべし。」と。爾時、善財、智慧光明三昧より起ちて、漸漸に遊行して安住城に至り、不動優婆夷は今何の所に在すやを推問せり。時に人有り言はく、「善男子、不動優婆夷は其家の内に在して、父母守護し、親近し、眷屬周匝し圍遶し、無量の衆の爲に正法を演說したまふ。」と。爾時、善財、歡喜無量にして、即ち其門に詣り、彼家の内に入れり。其宮殿を見るに金色の光明ありて皆悉く普く照せり、斯光に觸るる者は身心柔軟となる。爾時、善財は光明身に觸れて、即ち五百の三昧門を得たり。謂ゆる覺一切三昧門、奇特幢三昧門、寂靜三昧門、遠離一切衆生三昧門、普眼三昧門、如來藏三昧門なり。是の如き等の五百の三昧門を得て身心柔軟なること、七日の胎の如し。又妙香を聞ぐに天人に出過せり。前んで其所に詣り、合掌し恭敬し、一心に觀察して、彼形色を見るに天龍八部の諸の婇女衆の及ぶ能はざる所なり。十方世界の一切の天人も與に等しき者無く、容色の妙絶なる十方に倫無し、況んや勝るる者有らんをや。唯諸佛をば除く。其宮殿の嚴飾も、十方世界に與等しき者無し、口より妙香を出し、十方世界に與等しき者無し。其莊嚴具も十方世界に與等しき者無し。其眷屬衆も十方世界に與等しき者無し。何に況んや勝るる者有らんをや。如來衆をば除く。是の如きの勝妙は衆生をして染著の心を起さしめず。其見る者有らば、煩惱を除滅すること、梵天王に欲界の煩惱現前せざるが如し。其れ此優婆夷を見るを得るもの有らば、一切煩惱は皆悉く除滅し、十方衆生樂觀して厭く無けん。唯明行足をば除く。爾時、

【無壞の法門】所修の大行は緣能く壞するに非ざる故

善財、彼女人の不可思議の法、不可思議の三昧、不可思議の無比の妙色、無量の光明網は一切障ふる無く、不可思議に衆生を饒益し、窮盡すべからざる諸の眷屬海を見て、不可思議の身を觀察して厭足有る無し。

爾時、善財、偈を以て頌して曰はく、

常に清淨戒を持ち、精進して忍辱を修せば
譬へば盛滿月の、星の中に獨り明曜なるが如し

爾時、善財、偈もて讚歎し已りて、白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず、我大聖は善能く解說したまふと聞けり。願くば爲に敷演したまへ。』爾時、彼女、善語、愛語を以て、善財に答へて言はく、『善い哉善い哉、善男子。乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。我菩薩の無壞の法門を成就し菩薩の堅固の行を修學して、一切法の平等地陀羅尼を得、一切法の平等法門を得、離有莊嚴三昧を得たり。』善財白して言さく、『菩薩の無壞の法門、乃至離有莊嚴三昧の境界は云何。』『善男子、是處は知り難く說き難し。』善財白して言さく、『唯願くば大聖、佛の神力を承けて、我爲に解說したまへ。我當に善知識に因りて信知し分別し、正念に觀察して一心に隨順し、虛妄を遠離して平等を解了すべし。』爾時、優婆夷答へて言はく、『善男子、過去世離垢劫の中に於て、如來、應供、等正覺有して、號けて修臂と曰ひ、世に出興したまひき。時に國王有り名けて電光と曰ひ、我は王女爲り。中夜寂靜

にして音樂を廢するの時、五百の侍女は皆悉く昏寐せるも、我樓上に在り、仰ぎて星宿を見て、彼如來の虚空中に在すを見るに、寶山王の如くにして、天龍八部、不可思議大菩薩衆に恭敬し圍遶せられ、大光明の網を放ちて、普く十方を照したまへり。彼佛の毛孔よりは微妙の香を出せり。我是香を聞ぎて、身體柔軟にして心大いに歡喜し恭敬し禮拜して、一心に合掌し、仰ぎて彼佛の不見頂相を觀、身の左右を觀るに邊際を見ず、相好莊嚴せられて見るに厭足無かりき。善男子、我爾時に於て是の如きの念を作さく、「何等の業を修してか是の如きの身を出生し、是の如きの身を長養し、是の如きの身の清淨、是の如きの身の自在、是の如きの身の光明を具足し、眷屬、諸の莊嚴具、功德智慧、三昧陀羅尼、諸の辯才藏ありて、譬喩すべからざるや」と。善男子、時に彼如來、我心念を知りたまひて、我に告げて言はく、「汝應に不可壞の心を發して煩惱を除滅し、勝妙の心を發して一切の有に著せず、不懈怠の心を發して隨順して深く方便の法に入り、忍辱の心を發して衆生の諸の惡心海を調伏し、離癡の心を發して一切諸の生死趣を遠離し、無厭の心を發して一切佛を見、心に厭倦無く、無知足の心を發して悉く一切諸佛の法雲を飮み、寂靜の心を發して一切の佛の方便を以て世間に隨順し、守護心を發して一切諸佛の法輪を護持し、分別心を發して其所應に隨ひて法寶を演說し、皆歡喜せしむべし」と。善男子、我爾時に於て、彼如來に從ひて此法教、清淨の法門を聞き、一切智、如來の十力、所言の不虚、光明の莊嚴、清淨の法身、相好の莊嚴、如來の眷屬、嚴淨の佛刹、如來の威儀、

如來の壽命を求めたり。我是心を發せし時、一切の煩惱、聲聞、緣覺、金剛の諸山も壞する能はざる所なり。善男子、我此心を發し已りて、閻浮提の微塵に等しき劫に於て、欲想を生ぜず、何に況んや其事をや。爾所の劫に於て、自ら眷屬に於て瞋心を生ぜず、何に況んや餘人においてをや。爾所の劫に於て我見心を生ぜず、況んや我所心をや。爾所の劫に於て愚癡心を生ぜず、無記心を生ぜず、乃至胎中にも常に正念を起せり、何に況んや餘の時に於てをや。爾所の劫に於て乃至夢中にも一切佛を見る、況んや十眼もて觀ずるをや。爾所の劫に於て一切諸佛の法雲を聞持して、未だ曾て一句も忘失せず、乃至世間の語言をも尙忘失せず、況んや如來の語をや。爾所の劫に於て悉く一切諸佛の法海を飮み、乃至世法をも亦分別して知り、一切方便と、諸の三昧門とを出生して心に虛妄無し。爾所の劫に於て一切諸佛の法輪を受持し、法輪の中に於て一法をも失はず、乃至二智有る無し、衆生を化するを除く。爾所の劫に於て一切の佛海及び諸の化佛を見、彼佛所に於て大願を滿足せり。爾所の劫に於て一切菩薩海の所に於て、清淨菩薩の行海を具足し出生せり。爾所の劫に於て若し衆生有りて我を見るを得ん者は、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、乃至一念も二乘の心を生ぜじ。爾所の劫に於て一切佛法に於て、乃至一句一味にも疑惑を生ぜず、二想有る無く、虛妄の想無く、種種の想無く、染著の想無く、好醜の想無く、愛恚の想無し。善男子、我初め發心してより來、常に諸佛菩薩及び善知識を見、佛の大願を聞き、菩薩行、諸の波羅蜜、智慧の諸地、無盡の法藏を修し、普く無量無邊の一切世界に入りて、無量の衆生界を分別し、

清淨智慧の光明を離れずして、一切衆生の煩惱を除滅し、衆生の善根を長養し發起し、其所應に隨ひて悉く能く顯現して、未だ曾て捨離せず。微妙の音聲は其聞く者有らば皆悉く歡喜せん。善男子、我此無壞の法門に入りて一切法の平等陀羅尼を觀察し、無量の自在神變を顯現せり。汝見んと欲するや、不や。」「唯然り。見んと欲す。」爾時、不動優婆夷は、萬の三昧門に入り、正念に觀察せり。謂ゆる專ら正法を莊嚴して心に疲厭無き三昧門、離癡莊嚴三昧門、十力三昧門、佛無盡藏三昧門を求め、是の如き等の三昧門に住せし時、十不可說の佛刹微塵に等しき世界は六種に震動し、淨きこと瑠璃の如く、一一の世界中に、各百億の如來を見、一一の如來は大衆に圍遶せられ、大光明を放ちて普く十方を照し、或は兜率天に現じ、或は一切世界に現じ、妙音聲を以て淨法輪を轉じ、乃至大般涅槃を示現したまへり。時に優婆夷三昧より起ち、善財に告げて言はく、「善男子、汝此を見しや不や。」「唯然り。已に見たり。」「善男子。我唯此無壞の法門を成就して、一切衆生の爲に微妙の法を說きて、皆歡喜せしむるのみ。諸の大菩薩は十方に遊行して障礙有る無し。金翅鳥王の悉く衆生の大海の源底を得るが如く、若し衆生の菩提の因有るを見ば、生死海より之を撮取して菩提に安置せしめたまふ。譬へば商人の大寶の洲に入るが如く、專ら如來の十力の大寶を求めて生死海に遊び、衆生海に遊び、衆生を教化して煩惱を除滅す。明淨の日の如く、愛水を消渴して一切衆生の蓮華を開敷せしむ。譬へば疾風の如く十方に遊行して一切衆生の邪見煩惱の樹枝を摧滅す。譬へば大地の如く、一切衆生の善根を長養し、轉

【善男子此南方】以下第十眞實行の善知識を明す。

【日沒の時に】行位の終極を表はす。

【天明】障盡きて位顯はるるを、山に登るとは位相應を得るなり。

【一切處に至る】十行滿ずるを明す故、第十智度遍知の故なり。

輪王の如く、四攝法を以て衆生を攝取したまふ。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て一國土有り、不可稱と名け、城を知足と名く、出家外道有り、名けて隨順一切衆生と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。時に善財童子は、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、一心に彼優婆夷は是れ我眞の善知識と正念し、彼正教を念ひ、彼所說を念ひ、彼所發を念ひ、彼所開を念ひ、彼示現を念ひ、彼所數を念ひ、彼所明を念ひ、彼廣演を念ひ、彼修習を念ひ、隨順し思惟して、遍修寂靜の寂滅を修し、照明に觀察して、漸漸に城邑聚落を經由し、日沒の時に於て、知足城に入り、周遍して隨順一切衆生外道は今何の所に在すやと推求せり。中夜の時に於て彼城の北を見るに一の大山有り、光明照り曜くこと、日の初めて出づるが如し。爾時、善財、天明に城を出でて彼山上に登り、遙に外道を見るに靜處に經行し、妙色を成就したまふこと梵王に超踰し、一萬の梵天眷屬に圍遶せられたり。往きて其所に詣り頭面に足を禮し、卻きて一面に住し、白して言さく、「大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。」答へて言はく、「善い哉善い哉、善男子、乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。善男子、我已に一切處に至る菩薩行に安住し、普觀三昧の法門と無依無作の神足とを成就し、平等の般若波羅蜜の光明を以て、一切の諸趣、一切の衆生此に死し彼に生じ、諸有に流轉し、種種の雜類、形色の好醜、種種の欲樂、諸趣の受生

を觀察し分別せり。謂ゆる天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、地獄、餓鬼、畜生、閻羅王の處、人非人の處なり。彼の諸の衆生、或は邪見に著し、或は二乘を好み、或は大乘を樂ひ、彼の菩薩の種種の方便を以て衆生を饒益し、或は世間の種種の技藝を敎へて、衆生をして諸の巧術陀羅尼門を得しめんと欲し、或は四攝を以て衆生を攝取して、一切をして薩婆若を得しめんと欲し、或は諸の波羅蜜を歎じて、衆生をして一切智の廻向を得しめんと欲し、或は大菩提心を歎じて、衆生をして諸の善根に於て、沮壞すべからざらしめんと欲し、或は菩薩行を歎じて、衆生をして佛刹を嚴淨し、大願を滿足し、衆生を敎化せしめんと欲し、或は惡業の法を說きて、衆生をして惡行の果は三塗の苦を受くるを知らしめんと欲し、或は淨法を說きて、衆生をして歡喜心を發し、諸佛の所に於て、衆の德本を植ゑ、一切智の果を得しめんと欲し、或は如來應供等正覺を歎じて、衆生をして弘誓の願を發し、一向に專ら淸淨の法身を求めしめんと欲し、或は如來の功德を歎じて、衆生をして一向に佛の無壞の身を樂ひ求めしめんと欲し、或は如來の無比の妙法を歎じて、衆生をして佛の一切の無壞功德を得しめんと欲す。復次に善男子、此知足城內の一切の人民、男女長幼をば、其所應に隨ひて、我悉く化度せるも、彼の諸の衆生は我の誰なるやを知る莫し。此閻浮提の九十六種の外道邪見は我悉く彼の爲に種種に說法し、其邪見を斷じ、三千大千世界、乃至十方一切世界の諸の衆生海を、種種の智方便の法門と、種種の諸事、色像、音聲とを以て、化度し饒益せるも亦復是の如し。善男子、我唯此菩薩の一切

【善男子此南方】次下十廻向位の善知識を說く、第一救護衆生離衆生相廻向を明す。

處に至る行の法門を知るのみ。諸の大菩薩の身は一切衆生の數と等しく、悉く一切衆生の身を分別する三昧を得て、變化の輪を出生し、遍く一切世界の一切の諸趣に遊び、普く十方一切衆生の前に現ず。其見る者有らば、樂觀して厭く無く、悉く能く一切の善根を長養し、一切の劫に住して大願を捨てず、因那羅莊嚴光明の行を得て、一切に著せず、專ら實義を求めて衆生に隨順し、三世平等にして無我界を照し、無盡大悲の藏を具足せり。我當に云何が彼清淨行、功德智慧を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て一國土有り、甘露味と名く。彼に長者有り、青蓮華香と名く。汝彼に詣りて問へ「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。『時に善財童子は、頭面に彼外道の足を敬禮して、遶ること無數匝し辭退して南に行けり。

爾時、善財童子は、身命を惜まず、財寶に著せず、熾然を遠離し、諸趣に著せず、世間の五欲の快樂に著せず、眷屬の勢力自在なるに著せず、常に樂ひて一切衆生を化度し、一切諸佛の世界を嚴淨し、一切諸佛を恭敬し供養して、心に厭足無く、一切法の眞實の相を知り、一切菩薩功德を巨海に得んと欲し、大願を滿足し、一切劫に於て菩薩行を修し、一切佛及び眷屬海に詣りて、一切菩薩の三昧に入り、悉く能く一切菩薩の神力自在を顯現し、一毛孔に於て一切佛を見、心に厭足無く、悉く一切諸佛の正法輪の雲を聞きて受持し、心に厭足無く、專ら此等の一切の菩薩、諸佛の功德を求め、漸漸に遊行して、甘露味國に至り、青蓮華香長者の所に詣りて、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し一面に於て

【龍の闘等】香の業用を知るを喩を以てす、龍闘生とは生起を、大光網雲等は所行を、香

作し、白して言さく、「大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無上道に向ひ、一切諸佛の智慧を志求し、一切諸佛の大願を滿せんと欲し、一切諸佛の色身を淨めんと欲し、一切諸佛の法身を見んと欲し、一切諸佛の智身を知らんと欲し、一切菩薩の諸行を淨滿せんと欲し、一切菩薩の諸三昧門を照さんと欲し、一切菩薩の諸の陀羅尼を成就せんと欲し、悉く一切の障礙を除滅せんと欲し、遍く一切諸佛の世界に遊ばんと欲するも、未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修し、一切智を生ずるやを知らず。」答へて言はく、「善い哉善い哉、善男子。乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。善男子、我能く一切の諸香を知れり。一切和香、一切熏香、一切塗香、一切末香、一切香王、一切天香、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等の香、一切衆の疾病を除滅する香、憂惱を除滅する香、一切衆生に諸の喜樂を生ずる香、諸の煩惱を長養する香、諸の煩惱を除滅する香、有爲を喜樂する香、有爲を遠離する香、放逸の香、不放逸の香、諸佛を念ずる香、正法に隨ふ香、賢聖人の香、一切諸の菩薩を分別する香、一切菩薩地の香、一切菩薩の作する香なり。是の如き等の香を、我悉く了知せり。彼香の生起と所行と成就と具足と淸淨と安隱と方便と境界と行業と根本とを皆悉く了知せり。善男子、人中に香有り、大象藏と名く、龍の闘に因つて生ず。若し一丸を燒かば大光網雲を興して甘露味國を覆ひ、七日七夜香水の雨を降らさん。若し身に著けば、身則ち金色とならん。若し衣服宮殿樓閣に著けんも、亦悉く金色とならん。若し衆生有りて此香を聞ぐを得ば、七日七

水の雨等は成就を身に著けん、金色とは具足を、聞香歡樂とは淸淨を、滅一切病等とは安穩を知るなり。專向等とは是方便、我彼を知り已りて等は境界、爲に法を說くと是行業不退轉を得しむとは是れ根本なり。

夜、歡喜悅樂して、一切の病を滅し、枉横有る無く、恐怖危害の心を遠離し、專ら大慈に向ひ、普く衆生を念はん。我彼を知り已りて、而も爲に法を說き、無量の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退轉を得しむ。」

大方廣佛華嚴經　卷第五十

東晉天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之七

善男子、復香有り、牛頭栴檀と名け、離垢山王より生ず、若し以て身に塗らば火も燒く能はじ。復香有り、不可壞と名け、大海より生ず、若し以て身を塗らば、妙音聲を出し怨敵を降伏せん。復香有り、蓮華黑沈水と名け、阿耨達池の四岸の邊より生ず、若し一丸を燒かば、悉く能く普く閻浮提界に熏ぜん、若し衆生有りて此香を聞ぐを得ば、一切の惡を離れ、清淨戒を具せん。復香有り、名けて明相と曰ひ、雪山王より生ず、若し衆生有りて此香を聞がん者は、諸の垢染を離れて心清淨を得て、爲に法を説き、彼をして悉く菩薩の離垢圓滿の三昧を得しめん。復香有り、名けて海藏と曰ひ、羅刹國より生じ、轉輪王に應ず、若し一丸を燒かば、四種の兵をして虛空に列住せしめん。復香有り、清淨莊嚴と名け、善法堂より生ず、若し一丸を燒かば、悉く諸天をして念佛三昧を得しめん。復香有り、名けて淨藏と曰ひ、夜摩天より生ず、若し一丸を燒かば、彼諸天をして皆悉く雲集して夜摩天王に詣り、正法を聽受せしめん。復香有り、先陀婆と名け、兜率天より

【善男子此南方】以下第二不壞廻向の善知識を明す。

生じ、常に補處の菩薩の座の前に在り、若し一丸を燒かば大香雲を興し、普く十方一切法界を覆ひ、無量の莊嚴を雨らし、一切佛及び其眷屬に供へん。復香有り、名けて轉意と曰ひ、化自在天より生ず、若し一丸を燒かば、化自在天に於て七日七夜莊嚴の雨を雨らしめん。善男子、我唯此香を知るのみ。諸の大菩薩は一切不善の習氣を遠離し、永く五欲を離れ、煩惱を除滅し、衆魔を降伏し、一切の縛を斷ち、三有の趣を離れ、智慧の妙香もて自ら莊嚴せり。一切世間に染著する所無く、無礙の戒香を具足し、成就して、障礙を除滅し、智慧の境界は通達して滯る無く、心常に平等なり。我當に云何が彼功德行と淸淨の戒門と、身口意の業の一切の惡を離れたるとを能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て城有り、名けて樓閣と曰ふ。彼に海師有り、名けて自在と曰ふ。汝彼に詣りて問へ「云何が菩薩は菩薩行を學び、菩薩道を修するや」と。」時に善財童子は、頭面に彼長者の足を敬禮して、遶ること無數匝し、辭退して南に行けり。

爾時善財童子は、樓閣城に向ひ、正道を觀察して專ら正道を求め、夷險の道、垢淨の道、安危の道を觀じて復是念を作さく、「善知識に因りて菩薩道と、諸の波羅蜜の道とを得、衆生を攝取して無礙法界に入らしめ、一切衆生に隨順して、一切煩惱の熾然の一切の邪見を除滅し、一切の不善の刺を拔き、一切生死の海に度り、必ず一切智の城に至らしめん。何を以ての故に。善知識に因りて一切の善根を得、善知識に因りて一切智を得たればなり。」と。是念を作し已りて漸漸に遊行して樓閣城に至り、周遍して自在海師を推求せしに、海

【大悲幢淨行の法門】殊勝の大悲にても生死の海に於て衆生を拔出するを淨行となす。

【菩提心を發し等】起心論を引いて發菩提心とは三種の心を發す、一は眞心正しく眞心の法を念ずる故、二には深心一切の諸善行を樂修する故、三には大悲心一切苦の衆生を救拔する故にと探玄記はいふ。

岸の船舶の處に在して住したまふを見る。十萬の商人、及び無量衆は之を圍遶して、勝法の入大海の法、佛功德海の法を聞かんと欲せり。往きて其所に詣りて頭面に足を禮し、却きて一面に住し、白して言さく「大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學び、菩薩道を修するやを知らず。」答へて言はく「善い哉善い哉、善男子、乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、能く我に大乘の妙寶生死の海を度り、一切智の洲に到り、不可壞の摩訶衍の法を得、二乘の難を離れ、寂滅の樂に住して、生死洄澓の流淵を遠離し、菩薩の至處道法陀羅尼輪、菩薩の莊嚴道、薩婆若道の波浪を逮得し、普法門を成就して、一切法に於て障礙する所無く、一切智の海に度るを諮問せり。善男子、我大悲幢淨行の法門を成就して、此海邊の樓閣城中に在り、貧窮の者の爲に諸の苦行を修し、一切をして意に求むる所に隨ひて悉く充足せしめ已りて、廣く爲に法を說き、皆歡喜せしめ、善根を發起して功德智慧の藏を長養し、菩薩の根を利にして菩提心を發し、菩薩の直心を淨め、菩薩の深心を增益し、大悲の力を出生し長養して、生死の苦を除き、生死の海に遊びて疲倦無く、衆生海を攝取して功德海に住せしめ、一切法の智海、光明を得て、一切の佛海を見、一切智海に度らしめんと欲す。善男子、我此城に住して、是の如く思惟し、是の如く正念して衆生を饒益せり。善男子、我海中の一切寶洲、一切寶相、一切生寶、一切淨寶、及び不淨寶を知れり。一切寶價、一切寶器を知り、一切寶の隨つて應用する所を知り、一切寶を作るを知り、一切寶の境界を知り、一切寶の光明

【善男子此南方】以下等諸佛廻向善知識を明す。

を知り、一切の龍宮殿を知りて、一切の龍難を滅し、一切の羅刹の宮殿を知りて一切の羅刹の難を滅し、一切の大身衆生の宮殿を知りて一切の大身衆生の難を滅し、趣を知り、洄澓の恐怖を捨て能く波浪を離るるを知り、水の色を相するを知り、日月星宿を知り、諸の算數を知り、晝を知り、夜を知り、刹那、羅婆、摩睺始路を知り、去を知り、安危に住するの法を知り、海の船舶の牢不牢の法を知り、明かに風相を候ひて之を廻轉し、所至の處を了せり。善男子、我已に是の如きの智慧を成就して、衆生を利益せんが故に大海に入り、因りて爲に法を説き、悉く歡喜して生死の怖を離れて一切智海に入り、愛欲の海を竭して、三世の光明智海を逮得し、一切の苦海を度らしめ、一切衆生の心海を清淨にし、一切諸佛の刹海を嚴淨し、遍く一切十方界の海に遊びて障礙する所無く、一切衆生の諸根願海を知りて、一切衆生の行海に隨順し、一切衆生の隨所應海を知る。善男子、我此大悲幢淨行の法門を成就せり、若し我を見聞し憶念する者有らば、皆悉く虚しからじ。善男子、我唯此法門を知るのみ。諸の大菩薩の行は、生死煩惱の大海に於て、染著する所無く、邪見の海を離れて實法の海に入り、善方便を以て衆生海を攝し、一切智の海に住して一切衆生の諸の放逸海を滅し、善く分別して時と非時との海を知り、善方便もて衆生海を化するを知り、未だ曾て時を失はず。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て城有り、名けて可樂と曰ふ、彼に長者有り無上勝と名く。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。時に善財童子

は、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、悲泣して涙を流し、辭退して南に行けり。
爾時、善財童子は大慈を增廣し、大悲潤澤して、功德智慧の莊嚴を長養し、煩惱の垢を離れて平等法に入り、心放逸ならずして不善の刺を拔き、一切障を滅し、精進堅固にして、菩薩の不可思議三昧を修習し、慧光普く照し、寂靜を快樂とし、功德水の池に解脫の華敷き、大願を滿足し、法界に充滿して障礙する所無く、一切智に趣き、一向に專ら菩薩の正道を求め、漸漸に遊行して、可樂城に至り、周遍して無上勝長者を推求せり。城の東に林有り、離憂樹妙莊嚴幢と名く。時に彼長者此林中に在し、無量の長者に周匝圍遶せられて國事を理斷し、因に爲に法を說きて、我我所及び一切有を離れ、嫉妬を遠離して心瀨を清淨にして淨心に安住して常に諸佛を見、無垢の信力を得て諸佛の法を受け、菩薩力を起して菩薩行を行じ、菩薩の諸の三昧力を出生し、菩薩の諸の智慧力を顯現し、菩薩の正念力を演說して、樂ひて無上菩提の心を發さしめたり。爾時、善財、長者の所に詣りて、法を敬ふを以ての故に、五體を地に投じ、良久しくして乃ち起ちて、白して言さく、「大聖、我は是れ善財なり、我は是れ善財なり。我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修し、衆生を教化し、常に諸佛を見、正法を諮問し、悉く能く諸佛の法雲を受持し、專ら一切諸の方便門に向ひ、一切世界に於て、一切劫の中に菩薩行を行じ、一切佛の自在神力を知り、能く一切諸佛の持する所を受け、諸佛の力を得るやを知らず」。時に彼長者、善財に告げて言はく、「善い哉善い哉、

【一切趣に至る菩薩の等】神力遍く衆生の所に至るを一切趣に至るといひ、中に於て説法して生を益するを淨行荘嚴と名け、この一切處に至るに功用に由らずして任運に遍至する故無依無作といふ。是れ則ち法性のいひなり。

【種種の論】五明等の論をいふ。

善男子、乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。善男子、我一切趣に至る菩薩の淨行荘嚴の法門と無依無作の神足の力とを成就せり。善男子、何等をか一切趣に至る菩薩の淨行荘嚴の法門と爲すや。善男子、此三千大千世界の一切の阿修羅の世間、一切の迦樓羅地獄、餓鬼、夜叉、羅刹、鳩槃荼、乾闥婆、人、非人等の世間、三十三天、須夜摩天、兜率天、乃至魔天の世間、欲界所住の一切生趣、一切の龍宮、一切の夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等の宮、人中の國土、城、邑、聚落中に於て法を説きて諍訟を滅除し、諸の恚害の心は悉く繋縛を解き、皆獄を出でしめ、諸の恐怖を離れしめ、不善の業、衆生を殺害すること、乃至邪見を滅し、諸の王事、及び國土の事を斷ち、不善の法を遠ざけ、悉く衆生をして諸惡を除滅せしめ、教ふるに巧術、及び種種の論を以てし、一切を饒益して皆歡喜せしめ、一切諸の外道衆に隨順して、勝妙智を現じ、邪見を遠離して佛法を樂ひ、乃至梵天にも廣く爲に法を説けり。此三千大千世界の如く、乃至十方の不可説不可説の億那由他の佛刹微塵に等しき世界中にも、廣く正法を説けり。謂ゆる佛法、菩薩法、衆生法、聲聞法、緣覺法なり。地獄、餓鬼、畜生、閻羅趣の法説きて、惡道の苦を現じ、諸の天趣を説きて天趣の樂を現ぜしめ世間の法を説きて、世間法を離れしめ菩薩道を顯はして、生死の惡を離れしめ、一切智と諸の妙功德とを説きて、愚癡の苦及び諸の障礙を滅して、衆生をして離世の樂を得しめ、諸の虚妄を離れ、眞實の法を解り、惡業を遠離し、諸の煩惱を滅し、淨法輪を轉ぜしめんと欲す。善男子、我唯此一切趣に至る菩薩の淨行

【善男子此南方】次下第四一切處迴向の善知識を明す。

【迦陵伽婆提】カリンガヴァナ（Kaliṅgavana）鬪諍時林と譯す、彼菩薩この林中にあつて說法して障を破する故鬪諍といふ。

【波利質多羅】パリチトラ（Pāricitra）香遍樹と譯す、忉利天上にある樹木の名、枝葉華果皆香なり。

莊嚴の法門と、無依無作の神通の力とを知るのみ。諸の大菩薩は、諸の神通明と、佛刹に等しき身とを具足し成就して、普眼地を得、語言道を知り、神力自在にして智慧を具足し、諸の諍訟を離れ、大人の廣長舌の相を逮得して微妙の音を出して、能く壞する者無く、一切三世の諸佛を分別して、亦二想無く、明淨の智慧は三世の法を照し、境界無量にして、淨きこと虛空の如し。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て、一國土有り、名けて難忍と曰ひ、城を迦陵伽婆提と名く、比丘尼有り、師子奮迅と名く。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。』時に善財童子、頭面に彼長者の足を敬禮して、遶ること無數匝、眷仰し觀察し、辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、漸漸に遊行して彼國の城に至り、周遍して彼比丘尼を推問せり。時に無量の男女の大衆有り、善財に答へて言はく、『此比丘尼は、今王の園なる日光林中に在して、法を以て一切衆生を饒益したまふ。』爾時、善財、彼園林に詣りて周遍し觀察し、一の大樹を見る、名けて滿月と曰ひ、大光明を放ちて百由旬を照せり。復大樹を見る、名けて普覆と曰ひ、其形は蓋の如くにして青光明を放てり。復華樹を見る、名けて華藏と曰ひ、高きこと雪山の如く、衆の華雲を雨らすは、天帝釋の波利質多羅樹の如し。復大樹を見る、名けて柔軟と曰ひ、光明普く照して常に果實有り。復大樹を見る、名けて明淨と曰ひ、譬喩をなすべからず、摩尼もて莊嚴し、阿僧祇の清淨妙寶を出せり。復衣樹を

【八功德水】輕、冷、軟、美、淨、不臭、飲時調適、飲已無患。

見る、阿僧祇の妙寶衣藏を出せり。復歡喜樹を見る、自然に微妙音聲を演出せり。復普莊嚴香薰樹を見る、一切香を出し、普く十方に薰じて障礙する所無し。復彼園の泉流淵池を見る、栴檀の行樹は、周匝圍遶し、七寶の欄楯を以て莊嚴と爲し、黑栴檀の泥は其底に凝渟し、布くに金沙を以てし、八功德水は其中に充滿し、優鉢羅、鉢曇摩、拘牟頭、分陀利華は、敷き榮え、鮮かに茂りて遍く其上に覆ひ、寶樹周遍して端嚴殊妙なり。一一の樹下に各無量の師子の座を敷き、布くに寶衣を以てし、熏ずるに衆香を以てし、衆寶の帳を張り、白淨の寶網を其上に羅覆し、金鈴の網中より妙音聲を出せり。或は樹下に蓮華藏師子座を敷く有り、或は樹下に香藏座を敷く有り。或は樹下に龍莊嚴藏座を敷く有り。或は樹下に寶衆師子座を敷く有り。或は樹下に明淨普照藏座を敷く有り。或は樹下に師子樂藏座を敷く有り。彼一一の座に各十萬の寶師子座有りて、眷屬圍遶し、無量に莊嚴し、無量の寶を散じて其中に充滿すること海の寶洲の如し。寶衣を布施し、柔軟妙好にして踏めば則ち足沒し、擧ぐれば則ち還復す。異類の衆鳥は和雅の音を出し、帝釋の歡喜の園に超越せり。種種の華樹は常に華雲を雨らし、帝釋の照明の園に超勝せり。妙香普く熏じ、帝釋の善法講堂に超えたり。寶樹、樂樹は微妙聲を出し、善口の天女の歌音に超過せり。無量百千の樓閣は莊嚴せられ、觀る者厭く無く、帝釋の善現大城に超踰せり。此園の一切諸の莊嚴具は梵天宮の如く衆生見んと樂ふ。爾時、善財、此園林を見るに皆是れ菩薩の業行の成す所、諸の世間を出でたる善根の起す所、不可思議の諸佛を供養して得る所に

【婆樓那】ヷルナ(Varuna)水と名く、水天なり。
【淨居天…不盡の法門を說く】彼天形中最も淨なるも無常有盡なれば、爲に出世無盡の性を說くなり。
【悅樂梵等…普妙音聲の等】彼れ世中に於て自ら好聲と謂ふ故、爲に法界勝流普妙音を說くなり。
【心藏旋復の法門】大廻向不退轉を說くなり。

して、能く壞る者無し。此れ皆師子奮迅比丘尼の法の如幻なるを了り、功德藏を長養したる善根の成ずる所なり。三千大千世界の天龍八部、無量の衆生、悉く此園に入りて、而も迫迮せず。何を以ての故に、此比丘尼の不可思議威神力の故に。爾時、善財、比丘尼を見るに、遍く一切の寶師子座に處して、端嚴殊妙にして、威儀庠序なり。其心寂靜にして諸根を調伏すること譬へば龍象の如く、澄淨の淵、如意寶珠の如し。五欲に染まざるは猶し蓮華の如く、心畏るる所無きは師子王の如く、淨戒に安住して傾動すべからざるは須彌山の如く、衆生の諸の煩惱熱を除滅するは、涼香王の如く、衆の病を除滅するは良藥王の如く、見る者虛しからざるは婆樓那天の如く、善根を長養するは猶し良田の如し、一座に處すを見るに淨居天衆の眷屬に圍遶せられ、爲に無盡の法門を說き、又處座を見るに、悅樂梵等の梵衆に圍遶せられて、爲に普妙音聲の法門を說き、又處座を見るに無量の他化自在天王等の天子、天女の眷屬に圍遶せられて、爲に菩薩の清淨自在の法門を說き、又處座を見るに、化自在天王等の天子、天女の眷屬に圍遶せられて、爲に清淨の一切莊嚴の法門を說き、又處座を見るに刪兜率天王等の天子、天女の眷屬に圍遶せられて、爲に心藏旋復の法門を說き、又處座を見るに夜摩天王等の天子、天女の眷屬に圍遶せられ、爲に無量莊嚴の法門を說き、又處座を見るに釋天王等の天子、天女の眷屬に圍遶せられて、爲に厭離の法門を說き、又處座を見るに娑伽羅龍王、十光明龍王、難陀跋難陀龍王、摩那斯龍王、伊那槃那龍王、阿耨達龍王等の龍子、龍女の眷屬に圍遶せられて、爲に善方便救護

【提頭賴吒】ドクタラーシュトラ(Dhrtarāśtra)持國天四天王中東方の守護天。

【佛行光明の法門】佛正行智光を説いて著樂を破せしむ

【佛喜の法門】蛇性嗔多きを以て、佛を聞いて則ち喜ぶなり。

【勝智光明の法門】小患を捨てて大乘の智光を樂しましむなり。

衆生の法門を說き、又處座に見るに、提頭賴吒天王等の乾闥婆の男女の眷屬に圍遶せられて、爲に無盡の法門を說き、又處座を見るに摩睺羅伽、阿修羅王等の眷屬に圍遶せられて、爲に法界方便智莊嚴の法門を說き、又處座を見るに大勢力迦樓羅王等の眷屬に圍遶せられて、爲に生死海に於て無畏なる法門を說き、又處座を見るに屯緊那羅王等の眷屬に圍遶せられて、爲に佛行光明の法門を說き、又處座を見るに雲山摩睺羅伽王等の眷屬に圍遶せられて、爲に佛喜の法門を說き、又處座を見るに無量の男子女人、童男童女の眷屬に圍遶せられて、爲に勝趣の法門を說き、又處座を見るに常に衆生の命を奪ふ羅刹王等の眷屬に圍遶せられて、爲に大慈大悲を起す法門を說き、又處座を見るに聲聞を樂ふ者の眷屬に圍遶せられ、爲に勝智光明の法門を說き、又處座を見るに緣覺を樂ふ者の眷屬に圍遶せられて、爲に明淨如來功德光明の法門を說き、又處座を見るに大乘を樂ふ者の眷屬に圍遶せられて、爲に普門三昧智慧光明の法門を說き、又處座を見るに初發心の菩薩の眷屬に圍遶せられて、爲に一切の佛の大願の法門を說けり。又處座を見るに二地の菩薩の眷屬に圍遶せられて、爲に離垢三昧の法門を說き、又處座を見るに三地の菩薩の眷屬に圍遶せられて、爲に寂靜莊嚴の法門を說き、又處座を見るに四地の菩薩の眷屬に圍遶せられて、爲に一切智勢力境界の法門を說き、又處座を見るに五地の菩薩の眷屬に圍遶せられて、爲に明淨に淨心華藏の法門を說き、又處座を見るに六地の菩薩の眷屬に圍遶せられて、爲に普地藏の法門を說き、又處座を見るに七地の菩薩の眷屬に圍遶せられて、爲に普地藏の法門を

【智慧金剛の法門】十地滿後に金剛喩定智を說いて微細著等を破するなり

說き、又處座を見るに八地の菩薩の眷屬に圍遶せられて、爲に法界法身の境界の法門を說き、又處座を見るに九地の菩薩の眷屬に圍遶せられて、爲に無有無著莊嚴の法門を說き、又處座を見るに十地の菩薩の眷屬に圍遶せられて、爲に無礙三昧の法門を說き、又處座を見るに金剛力士の眷屬に圍遶せられて、爲に智慧金剛の法門を說けり。是の如き等の一切諸の座に處するを見て、一切諸趣の一切衆生の眷屬に圍遶せられ、善根を種うる者には、爲に善根を說き、善根を長ずる者には爲に一切善根を增長するを說き、其所應に隨ひて爲に法を說き、乃至阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得しむ。何を以ての故に。此比丘尼は百萬阿僧祇の般若波羅蜜門を成就せるが故に。謂ゆる普眼般若波羅蜜門、一切佛法を說く般若波羅蜜門、法界を分別する般若波羅蜜門、一切障礙を壞散する般若波羅蜜門、一切衆生の善法を出生し長養する般若波羅蜜門、勝莊嚴の般若波羅蜜門、無礙藏の般若波羅蜜門、法界圓滿の般若波羅蜜門、清淨心藏の般若波羅蜜門、一切衆生の樂藏の般若波羅蜜門なり。是の如き等の百萬阿僧祇の般若波羅蜜門を得て、此園中に於ける有ゆる衆生は皆阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。

爾時、善財、師子奮迅比丘尼の諸の奇特の事を見たり。謂ゆる園林の資生の具、經行の威儀、寶師子座、大衆の眷屬、諸の妙功德、神力の自在、微妙音聲、是の如きの一切諸の奇特事なり。又微妙清淨の音聲を聞くに不思議の法を宣揚し讚歎せり。無量の法雲に潤澤せられて、身心柔軟に、五體を地に投じて、恭敬し禮し已りて將に遶旋せんと欲

【菩薩の一切智底の法門】三義あり一位菩薩に居し百萬僧祇般若の智用を得、佛一切智の原底を盡し、乃至等覺地菩薩の爲に法を説くは下地の關るところに非ざる故に斯法を得、二智光頓に三際を照らし種智の境を窮むる故に名く、三廣く供養を興して佛八相智の原底を盡くす故この名を得。【智光莊嚴】般若の具德を明すなり

して、比丘尼を見るに、一切の座に遍し、自ら已身及び無量の衆の樹木園林を見るに皆悉く右旋し、遶ること無數匝なり。是の如きを見已りて合掌し恭敬して、一面に於て住し白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。唯願くば大聖、我爲に解説したまへ。』『善男子、我は菩薩の一切智底の法門を成就せり。』『大聖、此の如きの法門は體性云何。』『善男子、此法門は智光莊嚴にして、一念の中に於て普く三世を照す。』『大聖、此智光莊嚴の法門は境界云何。』『善男子、此法門に入らば現前に一切の法林三昧を正受せん。時に十方一切世界の諸佛、兜率天に處す者は彼一一の佛所に於て其自身より不可說不可說佛刹微塵に等しき摩兜摩身を出生して恭敬し禮拜す。又不可說不可說の佛刹微塵に等しき華香瓔珞諸の妙寶鬘、末香塗香、衣蓋幢幡、種種の寶華の雲、乃至一切莊嚴具の雲、寶網寶帳、莊嚴網等の種種の寶座を齎し、是の如き等の諸の供養具を以て、如來を供養す。兜率天に興す所の供養の如く、神を母胎に降し、王宮に出生し、家を捨てて道を學し、菩提樹に詣りて最正覺を成じ、淨法輪を轉じて諸の天上、人、非人中に在り、乃至般涅槃の興す所の供養も亦復是の如し。若し衆生有りて我供養を知らば、皆阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得ん。其れ衆生有り、來りて我所に至らば、即ち彼が爲に般若波羅蜜を說かん、我は衆生の想を起さず、衆生の相を取らず、一切の語言を知りて語言に著せず、一切佛を見、佛の相を取らず、深く法身を解るが故なり。一切諸佛の法輪を受持して、亦法輪の相を取

【善男子此南方】以下第五無盡功德藏迴向の善知識を明す。
【婆須蜜多】ヴスミトラー（Vasumitra）世友又は天友と譯す、巧に能く諸世間を引攝する故に。

らず、諸佛の眞實相を解了するが故なり。念念の中に於て悉く能く一切法界に充滿して、一切亦法界の相を取らず、一切法は猶し幻の如しと了るが故なり。善男子、我唯此菩薩の一切智底の法門を知るのみ。諸の大菩薩は法界を究竟じて一切著する無し。一身結跏趺坐して法界に充滿し、自身の中に於て悉く能く一切佛刹を顯現し、一念の中に於て悉く能く一切の佛所に往詣し、自身の內に於て悉く能く諸佛の神力を顯現し、能く一毛を以て不可說不可說の諸佛世界を擧げ、一毛孔に於て不可說不可說の世界の成敗を現じ、一念の中に於て不可說不可說の衆生を攝取し、一念の中に於て不可說不可說の劫を攝取せり。我當に云何が彼功德の行を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て一國土有り、名けて險難と曰ひ、城を寶莊嚴と名く。一女人有り、婆須蜜多と名く。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。時に善財童子、頭面に比丘尼の足を敬禮し、遶ること無數匝し、眷仰し觀察して、辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、大慧の光明を以て其心を照し、一切種智を具足し長養し、一心に諸法の實相を思惟し、一切語言の陀羅尼藏を建立し、廣く修して一切の法輪陀羅尼を受持し、衆生の歸と爲りて大悲力を長じ、方便もて一切種智を觀察し、法界に等しき清淨の大願を滿じ、明淨の慧光普く十方衆生を照し、一切莊嚴と諸の通明力とは十方一切世界に充滿し、究竟じて菩薩の諸業を成滿し、漸漸に遊行して、險難國の寶莊嚴城に至り、婆須蜜多女は今何の所に在すやと推問せり。爾時に人有り、彼女の深き智慧を知らざる者は、

是の如きの念を作さく、「今此童子は威儀庠序にして、其心寂靜に、諸根を調伏し、放逸、顛倒、惑亂を遠離し、念慧現前して、視瞻は詳審に、言音は和雅にして、形色に著せず、甚深の法相を正念し思惟して、懈倦を遠離し、心は大海の如し、此染欲顛倒の人に非ず、情欲の想無く、欲泥に沒せず、諸根に隨はず、行は魔界を出で、五欲に服せず、一切諸の魔の爲に縛せられず、作すべからざる所をば已に能く作さず、何等の意有りてか而も此女を求むるや。」其中に人有り、先に彼女の智慧有るを知れる者は、是の如きの言を作さく、「善い哉、童子。大善利を得んとして、乃ち能く深智の女人を推求す。當に知るべし、童子は一向に佛を求めて、悉く一切衆生を攝取し、諸欲の刺を拔き、淨想を壞散せんと欲す。善男子、今此女人は此城中の深宮の内に在す。」と。爾時に善財、此語を聞き已りて、心大いに歡喜し、往きて其門に詣り、彼宮宅を見るに嚴飾廣大にして、十重の寶牆は周匝圍遶し、十行の寶多羅樹を列べ植ゑ、十重の深き塹には、八功德水其中に充滿し、底に金沙を布き、寶妙蓮華、優鉢羅、鉢曇摩、拘牟頭、分陀利は敷き榮え、鮮かに茂り、水上に彌覆し、微妙の香を出して、能く人心を轉じて垢染を生ぜしめず。衆寶の宮殿、臺觀樓閣は、阿僧祇の寶を以て嚴飾と爲し、紺瑠璃の地には灑ぐに香水を以てし、熏ずるに沈香を以てし、塗るに旃檀を以てし、寶網を羅覆し、閻浮檀金を以て垂鈴と爲して和雅の音を出し、衆寶の華を散ずること猶し降雪の如く、諸の妙莊嚴は說くとも盡すべからず、金剛の摩尼、眞珠の寶藏は宅内に充滿せり。十種の園林を以て莊嚴と爲せり。

【離欲實際清淨の法門】二義あり、一自行に約すに、悲願惑を留めて欲處を示現するも、大智は欲を照らして則ち體性空なるを實際淨と名く、二に利生に約するに惑を留めて欲にあるを示現するも欲に處するの衆生要ず離欲してこの實際清淨法を得しむるなり。

爾時、善財、彼女人を見るに、寶師子座に處して、顏貌端嚴にして、妙相成就し、身は眞金の如く、目髮は紺色にして長からず短からず、白からず黑からず、身分具足し、一切欲界に與に等しき者無し、何に況んや勝る者有らんをや。言音は婉妙にして、世に倫匹無く、善く字輪技藝諸論を知り、幻智菩薩の方便を成就し、阿僧祇の寶を以て其身を莊嚴し、寶網を羅覆し、首に天冠を冠り、大衆に圍遶せらる。皆悉く善を修し、其願行を同うし善根を成就して、沮壞すべからず、無盡の功德の寶藏を具足して身より光明を出し、普く一切を照す。斯光に觸るる者は、歡喜し悅樂して、身心柔軟に、煩惱の熱を滅す。

爾時、善財、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、恭敬し合掌して、一面に於て住し、白して言さく、「大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。」答へて言はく、「善男子、我已に離欲實際清淨の法門を成就せり。若し天、我を見ば我は天女と爲り、若し人、我を見ば我は女人と爲り、乃至非人、我を見ば我は非人女と爲らん。形體殊妙に、光明の色像も殊勝にして比無し。若し衆生有りて欲に纏はるる者、來りて我所に詣らば、其が爲に法を說きて、皆悉く欲を離れ無著の境界三昧を得しめん。若し我を見る有らば歡喜三昧を得ん。若し衆生有りて我と語らん者は無礙の妙音三昧を得ん。若し衆生有りて我手を執らん者は一切佛刹に詣る三昧を得ん。若し衆生有りて我と共に宿せん者は解脫光明三昧を得ん。若し衆生有りて目に我を視ん者は寂靜諸行三昧を得ん。若し衆生有りて我嚬呻を見ん者は壞散外道

【阿梨宜】アーリンギタ(Aliṅgita)抱捺摩觸と譯し、攝受の相にして三昧を得しむ。
【阿衆鞞】アーチュンビン(Acumbin)嗚口と譯す、此攝受に依りて言教密藏の定を得しむ。
【善男子此南方】以下第六隨順平等善根廻向の善知識を明す。

三昧を得ん。若し衆生有りて我を觀察せん者は一切佛境界光明三昧を得ん。若し衆生有りて我を阿梨宜せん者は攝一切衆生三昧を得ん。若し衆生有りて我を阿衆鞞せん者は諸功德密藏三昧を得ん。是の如き等の類の一切衆生、來りて我に詣らん者は、皆離欲實際の法門を得ん。」善財白して言さく、「大聖、昔何の所に於てか諸の善根を種ゑ、何等の業を修してか、此法門を得たまへるや。」答へて言はく、「善男子、過去に佛有し、號して常住如來、應供、等正覺と曰ひ、世に出興したまひき。彼佛は諸の群生を哀愍し饒益したまはんが故に、安樂城に入りて、足門閫を蹈みたまひしに、即時に大地六種に震動し、其城は自然に奇妙廣博にして、衆寶もて莊嚴し、諸の雜華を散じ、自然に娛樂の音を演出し、大光明を放ち、一切諸天虛空に充滿せり、廣く說かば佛入城經の中に奇特の事を現ずるが如し。善男子、我爾時に於て長者の婦と爲り、名けて善女と曰ひき。是の如き等の諸の奇特の事を見て、夫の長者に從ひ、道巷に出でて、彼如來に妙寶の天冠を奉ぜり、時に文殊師利は佛の侍者と爲り、我爲に法を說き、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめたり。善男子、我唯此離欲實際の法門を知るのみ。諸の大菩薩は無量の方便と、智慧廣大の智藏とを成就し、智慧の境界は能く壞する者無し。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て城有り、首婆波羅と名く。彼に長者有り、名けて安住と曰ふ。彼は常に栴檀の佛塔を供養せり。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。」時に善財童子、頭面に彼女人の足を敬禮して、乃至辭退して南に行け

【首婆波羅】ヹーステイラ（Vesthila）善妙到岸、又は安住と譯す。

【不滅度際菩薩の法門】諸佛の常身を不滅度と名け、因位照達を菩薩法門といふ。

【佛の涅槃……無きを見る等】但他心に變異して出沒を見せしむ、其實常身は出なく滅なきなり。

【梅檀の佛塔の戸等】佛法身の常を見、佛の體性限盡なきを見るを以ての故、以て塔を開くとは其事相を開くなり。

り。

爾時、善財童子、漸漸に遊行して彼城に至り、長者の所に詣りて、乃至白して言さく、「大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。」答へて言はく『善男子、我已に不滅度際菩薩の法門を成就せり。此法門に住するが故に、普く十方一切の世界の去來今の佛の、涅槃したまふ者無きを見る、衆生を化する方便の滅度をば除く。善男子、我梅檀の佛塔の戸を開きし時、念念に無盡佛性三昧門を正受し、念念の中に於て無量無邊の勝妙の諸法を得たり。』白して言さく、「大聖、此三昧は境界云何。」答へて言はく『善男子、我此三昧に入りし時、此世界の迦葉佛、拘那含牟尼佛、尸棄佛、毘婆尸佛、提舍佛、弗沙佛、無上勝佛、無上蓮華佛を見る。是の如き等の不可說不可說の諸佛の閻浮提の微塵に等しき佛、乃至不可說不可說の佛刹微塵に等しき佛を見る。此諸佛は初發心より神力自在にして、一切の大願、清淨の妙行、諸の波羅蜜もて次第に菩薩の諸地を成就し、深法忍を得て衆魔を降伏し、自在の菩提を長養し成就し、諸の佛刹の種種の大衆を淨め、衆生を教化し、大光明を放ちて淨法輪を轉じ、神力變化したまふを見る、皆悉く受持し、正念し、思惟し、智慧もて彼諸佛の法を分別し、衆生を顯現し、未來の彌勒佛等の一切諸佛、現在の盧舍那佛等の一切諸佛を見知するも、亦復是の如し。此世界の如く、十方三世の一切諸佛、聲聞、緣覺、菩薩を見知するも、亦復是の如し。善男子、我は唯此不滅度際菩薩の法門を知るのみ。諸の大菩薩は一

【善男子此南方】以下第七隨順等觀一切衆生廻向の善知識を明す。
【觀世音】アヷローキテーシュヷラ(Avalokiteśvara)光世音、觀自在ともいふ。

念に悉く三世の諸法を知り、念際平等にして二有ること無く、佛の所住に住し、一切劫に於て而も劫の想無く、諸佛の平等なる正法に隨順し、如來、及び我と一切衆生とは、等しくして二有ること無く、莊嚴智を淨め、三世間を照し、諸佛の不轉の威儀を成就し、一切法界の境界を分別せり。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て山有り、名けて光明と曰ふ。彼に菩薩有り、觀世音と名く、汝彼に詣りて問へ「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。時に善財童子、頭面に彼長者の足を敬禮して、遶ること無數匝し眷仰し觀察して、辭退して南に行けり。

大方廣佛華嚴經　卷第五十一

東晋天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之八

爾時、善財童子、正念に彼長者の教を思惟し、菩薩の解脱の藏に隨順し、菩薩の諸の憶念力を正念し、次第に一切諸佛及び諸佛の法を分別し、一心に諸佛の法流を正念し、彼の諸佛の法と及び佛の莊嚴とは、菩提を長養するを憶念し受持し、一切諸佛の不思議の業を思惟し正念し、漸漸に遊行して光明山に至り、彼山上に登り、周遍して推求し、觀世音菩薩、山の西阿に住せるを見る。處處に皆流泉浴池有り、林木欝として茂り、地草柔軟にして、金剛寶座に結跏趺坐したまひ、無量の菩薩恭敬し圍遶して、爲に大慈悲經を演説し、普く衆生を攝す。見已りて歡喜し踊躍して自ら勝ふる能はず。合掌し諦觀して目暫くも眴かず。是の如きの念を作さく、「善知識は則ち是れ如來なり、善知識は一切法雲なり、善知識は諸の功德藏なり、善知識は十力の妙寶なり、善知識は見難く遇ひ難し、善知識は無盡の智藏なり、善知識は功德の山王なり、善知識は一切の智門を開發し示導して、能く一切をして薩婆若海に入りて清淨の無上菩提を究竟せしめたまふ。」と。時に觀世音、遙に善

【山の西阿】山阿に據りて東に面して住するなり。

【大悲の法門光明の行】大悲とは同體の悲なり、又無緣の悲なり、光明の行とは悲光物を益するを以て行を成ずるなり。

財を見て、告げて言はく、『善くぞ來りし、童子。專ら大乘を求めて衆生を攝取し、直心、深心もて佛法を樂ひ求め、大悲を長養して一切を救護し、普賢の行に向ひて、清淨に一切大願を成滿し、一切諸佛の一切法雲を聞きて受持せんと欲し、善根を增長して而も厭足無く、善知識に順じて其教に違はず、文殊師利の智慧功德の大海より起る所、善根を成就して、佛の勢力光明三昧を得、懈怠の心を離れて、專ら正法を求め、常に諸佛を見、衆惡を遠離して諸の善行を修し、智慧成滿して淨きこと虛空の如し。』爾時、善財、觀世音に詣りて頭面に足を禮し、遶ること無數匝し恭敬し合掌して、一面に於て住し、白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。』答へて言はく、『善い哉善い哉、善男子。乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。善男子、我已に大悲の法門光明の行を成就し、一切衆生を教化し成熟して、常に一切諸佛の住する所に於て、應に化すべき所に隨ひて普く其前に現じ、或は惠施を以て衆生を攝取し、乃至同事もて衆生を攝取し、妙身の不可思議の色を顯現して衆生を攝取し、大光網を放ちて衆生の諸の煩惱の熱を除滅し、微妙の音を出して之を化度し、威儀もて說法し、神力自在にして方便もて覺悟し、變化身を顯し、同類身を現じ、乃至同止して衆生を攝取せり。善男子、我大悲の法門光明の行を行ぜし時に、弘誓の願を發せり。名けて攝取一切衆生と曰ひ、一切衆生をして險道の恐怖、惱の恐怖、愚癡の恐怖、繫縛の恐怖、殺害の恐怖、貧窮の恐怖、不活の恐怖、諍訟の恐怖、大衆の恐熱怖、死

【爾時、東方に】以下第八如相廻向の善知識を明す。

の恐怖、惡道の恐怖、諸趣の恐怖、不同意の恐怖、愛不愛の恐怖、一切惡の恐怖、身に逼迫する恐怖、心に逼迫する恐怖、愁憂の恐怖を離れしめんと欲せり。復次に善男子、我現在正念の法門を出生せり、字輪の法門と名くるが故に。一切衆生に等しき身を出現し、種種の方便もて、其所應に隨ひ、恐怖を除滅して、爲に法を說き、阿耨多羅三藐三菩提心を發して不退轉を得しめ、未だ曾て時を失はず。善男子、我唯此菩薩の大悲の法門光明の行を知るのみ。諸の大菩薩は一切普賢の大願を成滿し、究竟して普賢の所行を成就して、一切諸の善根の流を斷ぜず、一切菩薩の諸の三昧の流、一切劫の流を斷ぜず、菩薩行を修して未だ曾て斷絕せず、三世の流に順じて善く一切の成敗、諸の世界の流を知り、一切衆生の不善根の流を斷じ、一切衆生の諸の善根の流を出生し、一切諸の生死の流を除滅せり。我當に云何が彼功德の行を能く知り能く說くべき。」

爾時、東方に一菩薩有り、名けて正趣と曰ふ。來りて此土に詣りて、金剛山の頂に住せり。此山に至りし時、娑婆世界は六種に震動し、衆寶もて莊嚴し、大光明を放ちて日月を映蔽し、釋梵天龍八部の光明は悉く聚墨の如く、普く地獄、餓鬼、畜生、閻羅王の處に現じ、衆苦を除滅し、煩惱及び諸の病苦を斷除し、普く寶雨を雨らして佛刹に充滿し、乃至普く一切莊嚴の雲雨を雨らして如來を供養し、其所應に隨ひて其身を示現し、然る後に來りて觀世音の所に詣りぬ。時に觀世音、善財に告げて言はく、『善男子、汝此衆中の正趣菩薩を見るや不や。』答へて言はく、『唯然り、已に見る。』『善男子、汝彼に詣りて問

【普門速行の法門】十方無際を普門といひ、一念遍至を速行といふ。

へ、云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。『時に善財童子、頭面に觀世音の足を敬禮して、遶ること無數匝し觀察して厭く無く、聖教を正念して、深く智海に入り、辭して正趣に詣り、頭面に足を禮し、右遶し畢りて恭敬し合掌して、一面に於て住し、白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。』

『善男子、我已に菩薩普門速行の法門を成就せり。』『白して言さく、『大聖、何の佛所に於て、此法門を得、從來したまふ所の刹は此を去ること幾何にして、發し來りたまへること久如しきや。』『答へて言はく、『善男子、此處知り難し、一切諸の天、人、非人等の能く了らざる所なり。唯精進して退かず、善知識に近づき、佛に護念せられ、善根を具足し、正直心を淨め、菩薩の根を得、智慧の眼を開き、多く聞き多く知れる菩薩のみの境界なり。』『唯願くば大聖、我爲に解說したまへ、我は當に佛の神力と善知識の力とを承けて信解するを得べし。』『答へて言はく、『善男子、我從來する所の刹は、名けて妙藏と日ひ、佛を妙德と號したてまつる。』『彼佛所に於て、此法門を得たり。彼を發してより來、已に不可說の佛刹微塵に等しき劫を經たり。一念の中に於て不可說の佛刹微塵に等しき步を行き、一步にして不可說の佛刹微塵に等しき世界を過ぎ、經し所の諸國には佛皆現在し、一切菩薩の諸の供養具を以て之を供養し、悉く能く彼世界の中の諸の群生海を了知し、諸根を分別し、其所應に隨ひて爲に法を說き、大光網を放ちて普く十方を照し、妙音聲を出して正法を演

説し、彼の諸の衆生を饒益し度脱したまへり。乃至十方も亦復是の如し。善男子、我唯此菩薩普門速行の法門を知るのみ。諸の大菩薩は、普く十方に於て至らざる所無く、境界無量にして能く壊する者無し。清淨法身は法界に充滿し、諸の衆生の道を分別し了知して一切刹に滿ち、一切法に順じ、三世を等觀して平等の法を説き、世間に隨順して佛道に著せず、普く諸道に至りて著する無く礙ふる無し。我當に云何が彼功德の行を能く知り能く説くべき。善男子、此南方に於て城有り、婆羅波提と名く。彼に一天有り、名けて大天と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。時に善財童子、頭面に正趣菩薩を敬禮して、遶ること無數匝し眷仰し觀察して、辭退して南に行けり。

爾時、善財童子、正念に菩薩の無障礙の行を思惟し、一向に專ら正趣菩薩の智慧の境界を求め、通明の境界を出生し、一切の功德は精進堅固にして、歡喜無量に不思議の遊戲神通を得、決定して諸の功德地、諸の三昧地、陀羅尼地、諸の大願地、諸の辯才地を了知し、諸力地を具へ、漸漸に遊行して彼城に至り、『大天は今何の所に在すや』と推問せり。時に人有り、言はく、『善男子、此城内の大法堂上に在して、其身を化現したまひ、大衆に圍遶せられて、爲に法を説きたまふ。』爾時、善財、其所に往詣し、頭面に彼大天の足を敬禮し、遶ること無數匝し恭敬し合掌して、一面に於て住し、白して言さく、『大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修す

【善男子此南方】以下第九無縛無著解脱廻向の善知識を明す。

【婆羅波提】ドヴァーラパティ（Dvārapati）有門城と譯す。

【四の長き臂等】四無礙方便用なり四海水を取るとは法界勝流の義を相應するなり、其面を洗ふとは己が應機の面を淨むなり

【雲網の法門】六度の行法には潤益の義、遍覆の義あり、之を喩ふれば雲の滂沱の義、隱映の義あるが如ければ網といふ、則ち六度行を以て體となすなり。

【吉由羅】ケーユーラ（Keyūra）瓔珞のこと。

【彌拘羅】メーカラ（Mekhala）金帶と譯す。

るやを知らず。「爾時、大天は四の長き臂を出して、四海の水を取り、其面を澡洗したまひ、洗ひ已りて諸の金華を取り、以て善財に散じ、是の如きの言を作さく、「善男子、菩薩は聞き難く見難し。乃ち是れ世間奇特の法なり。諸の善男子の中の分陀利華は、衆生の歸依と爲りて、衆生を攝取し饒益し、載育して、普く一切を照し、正道を顯現して愚癡を遠離し、衆生の師と爲りて正法を救護し、衆生の將と爲りて救護し安隱ならしめ、悉く一切の智城に至るを得しめ、淨き身口の業を具足し成就して永く衆惡を離れ、衆生の類に於て常に愛語を以て其所應に隨ひ、悉く其前に現じて、未だ曾て時を失はず。善男子、我已に菩薩の雲網の法門を成就せり。」白して言さく、「大聖、此法門は境界云何。」爾時、大天、善財の前に於て、天金聚を積むこと猶し山王の如く、白銀、瑠璃、玻瓈、硨磲、碼碯、夜光、離垢藏の寶、明淨の寶、諸の方便門の摩尼寶、周羅の寶、瓔珞の寶、吉由羅の寶、髮を莊嚴する寶、童子を莊嚴する寶、彌伺羅莊嚴の寶、彌拘羅の寶、赤眞珠の寶、一切諸の肢節を莊嚴する寶、如意珠の寶、皆悉く積聚して、猶し山王の如し。一切華、一切香、一切塗香、一切末香、一切鬘、一切衣、一切蓋、一切幢、一切幡、一切娛樂具、五欲の境界、是の如き等の積みたるは悉く山王の如し。又復阿僧祇の諸の童女衆を顯現して、善財に語りて言はく、「善男子、汝此諸の物を取りて如來を供養し、一切惠施して衆生を攝取し、悉く衆生をして檀波羅蜜を修し、檀波羅蜜を學び、一切を捨離せしめよ。善男子、我此物を以て汝に惠施を教へ、一切衆生を教ふるも亦復是の如く、悉く衆生をして無貪の善根を以て、普く身心

【善男子此閻浮提の內に】以下は第十法界無量廻向の善知識を明す。【摩竭提】マガダ（Magadha）。

に熏じ、善知識に近づき、諸佛菩薩を恭敬し供養して、一切善根を出生し長養し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめん。復次に善男子、若し衆生有りて五欲を貪らん者には、彼が爲に不淨の境界を顯現し、若し瞋恚、放逸、憍慢、諍訟ありて、羅刹鬼の血を飲み肉を食ふが如きものには、悉く彼等に大慈悲を修するを教へ、皆永く瞋恚放逸を離れしめん。若し懈怠なる者には、爲に水火、盜賊、惡王、怨讐等の難を現ぜん。善男子、是の如き等の類の諸の惡衆生には、種種の方便もて不善根を滅し、善根を長養し、一切の波羅蜜を障礙する怨敵を除滅して、諸の波羅蜜を具足し成滿し、障礙を超出して無礙の法を得しめん。善男子、我唯此菩薩の雲網の法門を知るのみ。諸の大菩薩は、帝釋天王のごとく、一切煩惱、阿修羅の難を滅し、諸の菩薩の水は、煩惱の火を滅し、諸の菩薩の火は、能く一切衆生の貪愛を燒き、諸の菩薩の風は、能く一切、諸の染著心を散じ、菩薩の金剛は一切の吾我の相を摧滅す。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此閻浮提の內に一國土有り、摩竭提と名く、道場地神有り、名けて安住と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。

時に善財童子は、頭面に彼大天の足を敬禮し、乃至辭退して摩竭提國に趣き、彼道場安住地神に詣りぬ。爾時、一萬の地天、各此言を作さく、「此に來る童子は能く衆生を攝す、即ち是れ佛藏なり。能く一切衆生の無明殼膜を破りて法王の家に生れ、垢を離れたる無礙の寶繒を以て其頂に冠り、智慧の寶藏は外道の輪を摧くべし。時に安住地天等の一萬の

【不可壞藏の法門】住持して失はず成佛決定を以ての故に不可壞藏と名く。

地天は、衆の香水を雨らし以て其地に灑ぎ、掃ふに香風を以てし、而も以て莊嚴し、大光明を放ちて普く三千大千世界を照し、衆寶もて莊嚴し、一切華樹は開敷し鮮茂し、一切果樹は悉く果實を成じ、一切泉源河池の流に相灌注し、種種の娛樂の音聲を演出し、諸天の衆寶もて莊嚴せる樓閣あり、異類の衆鳥は皆悉く歡喜して哀和の音を出し、無量の寶藏は自然に涌出せり。爾時、安住地神、善財に告げて言はく、『善くぞ來りし、童子。汝、自ら曾て此處に於て種ゑし所の善根の果報を見んと欲するや不や。』爾時に善財は、頭面に彼地神の足を敬禮して、恭敬し合掌して、一面に於て住し、白して言さく、『大聖、唯然り、見んと欲す。』時に彼地神、即ち足の指を以て地を按ぜしに、無量の阿僧祇那由他の寶藏開發し顯現せり。『善男子、汝、昔植ゑし所の善根の果報は此寶藏を致せり。自在に汝に隨はん。善男子、我已に菩薩不可壞藏の法門を成就せり。我然燈佛より來、常に菩薩を護り、菩薩行を修習して、深く智慧の境界に入り、其源底を盡くし、大願成滿して菩薩行を淨め、菩薩の一切の通明を出生し、菩薩の諸力の功德を具足し、菩薩の不可壞の法を成就して諸佛の刹に遊び、一切佛の受記したまふ所の法を聞きて、一切法輪、一切修多羅の法雲を轉じ、大法の光明を以て衆生を教化し、諸佛の自在神力を受持せり。善男子、乃し往古の世、須彌山微塵に等しき劫を過ぎて劫有り、莊嚴と名け、世界を月幢と名け、佛を善眼と號けたてまつりき。彼佛所に於て此法門を得、修習し長養して此法門を淨め、其中間に於て常に不可說不可說の佛刹微塵に等しき佛に遇へり。彼諸の如來の道場に往

【善男子此閻浮提に等】以下十地位行の善知識を明す。初に第一歡喜地の善知識。

【迦毘羅婆】カピラヴスツ(Kapilavastu) 黃物城と譯す。

【婆娑婆陀】ヴサンティ(Vasanti) 春主當又は依止不畏と譯す。

【東門より入り等】是れ開明の初、入證の始、中城住とは邊を離るるを表すなり。

【日沒】地前分別智の息み盡すをいふなり。

詣したまふ自在の神力を皆悉く奉覲し、此佛所に於て善根を修集せり。善男子、我唯此法門を知るのみ。諸の大菩薩は常に能く一切諸佛に隨侍し、悉く彼諸佛の法を聞きて受持し、深く諸佛の祕密の教法に入り、念念の中に於て淨法身に等しき一切佛と、佛の影藏とを出し、一切の佛法を出し、所行壞する無し。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此閻浮提に城有り、名けて迦毘羅婆と曰ふ。彼に夜天有り、婆娑婆陀と名く。汝彼に詣りて問へ、云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するやと。時に善財童子、頭面に安住地神を敬禮し、遶ること無數匝し、辭して彼城に詣りぬ。

爾時、善財童子、正念に安住天の教なる菩薩不可壞藏の法門を思惟し、諸の三昧を修し、諸の三昧を明め、菩薩の諸の法律儀、菩薩の自在の遊戲神通を觀察し、菩薩の一切の淨法を觀察して、深く菩薩の甚深の智慧に入り、菩薩の無壞の法門を究竟して、菩薩の無壞の法門に隨順し、深く菩薩の諸の法門海に入り、漸漸に遊行して彼城に至り、東門より入りて、中城に住せり。

爾時、善財、日沒して未だ久しからざれば、一切菩薩の教ふる所に隨順して、一心に婆婆娑陀夜天を見んと欲し、善知識に於て如來の想を發し、普眼の境界は諸方の智慧を顯現して、悉く一切境界に至らしめ、清淨の法眼は普く一切の諸の法界海を見、大智の慧眼は十方を觀察し、彼夜天、彼城の上の虛空の中に住したまふを見るに、寶樓閣の香蓮華の座に處して、身は眞金の如く、目髮は紺色にして端嚴殊妙なれば、見る者厭く無し。

【善男子我已に】以下正しく己が法界を示す、初に名體を標す。
【光明普く…法門】正しく法界を證す壞散等とは異性の障を破し二愚を遣するなり。

身に朱衣を服し、衆寶もて莊嚴し、頂上に髪を結びたるは猶し梵王の如し。其身上に於て一切の星宿及び其光明を現じ、無量の世界の衆生を化度して惡道を遠離せしめ、一毛孔に於て、皆悉く所化の衆生を觀見し、或は天に生ずる有り、或は聲聞、緣覺を得るあり、菩薩行を修するあり。種種の方便、形色、音聲、諸の語言法にて說く所の正教もて衆生を化度し、經し所の劫に隨ひて、諸の菩薩は等しく衆生を教化して、悉く菩薩の諸の行を修習せしめ、勇猛に精進して、諸の三昧、諸の神力門、菩薩の自在神力の境界、菩薩の所作、菩薩の光明、菩薩の奮迅を修し、菩薩の法門を以て衆生を化し、一毛孔に於て皆悉く見聞せしむ。

爾時、善財、此を見聞し已りて、心大いに歡喜し、頭面に彼夜天の足を敬禮して、遶ること無數匝し恭敬し合掌して、一面に於て住し、白して言さく、『天神、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、善知識に因りて諸の佛法を得んと信解せり。唯願くば天神、一切智の道を開示し顯現したまへ。若し菩薩有りて此道に向はん者は、十力地を得ん。』爾時、夜天、善財に告げて言はく、『善い哉善い哉、善男子。善知識を敬ひて其教に隨順せよ。若し菩薩有りて其教に隨はん者は、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ん。善男子、我已に菩薩の光明普く諸法を照し、衆生の愚癡を壞散する法門を成就せり。善男子、我惡衆生に於て大慈の心を發し、不善業の衆生に於て大悲の心を發し、善を修する衆生に於て歡喜心を發し、善惡の衆生に於て無二の心を發し、染汚の衆生に於て清淨の心を發し、邪道の衆

【我惡衆生に於て】以下業用を明す。先に長行、次に偈頌。

生に於て正道の心を發し、不淨を樂ふ衆生に於て淨を樂ふ心を發し、生死を樂ふ衆生に於て、法輪に隨順する心を發し、聲聞、緣覺を樂ふ衆生に於て一切智道に安立する心を發さしめん。善男子、我常に是の如く思惟して衆生を敎化し、夜闇く人靜まりて、鬼神盜賊の遊行するの時、比丘の威儀を離るるの時、重雲煙塵の日月を昏蔽して色を見ざるの時に於て、若し衆生有りて、城邑、聚落、山巖、曠野、八方の大海に在らん、乃至一切水陸の衆生をも、此衆生に於て種種の方便を以て其恐怖を滅せん。若し衆生有りて海の難、雲の難、山の難、大風の洄澓及以波浪に遭ひ、迷惑して道を失ひ、邊岸を見ざる、是の如き等の種種の海難に遭はば、我爾時に於て、或は船の形と作り、或は馬王、象王、狗王、阿修羅王、海神王の形と作り、是の如き等の形と作りて、方便もて衆生の海の難を度脫せしめん。陸地の衆生の爲には、或は淨月及び諸の星宿、炬火、電光、諸寶の光明、天身の光明、菩薩の光明と作り、是の如き等の無量の方便を以て衆生を救護せん。是の如きの心を發して、我一切衆生の爲に常に歸依と作りて煩惱を除滅し、死を畏るる者をして無畏の法を得しめ、貧窮の者をして皆富樂を得しめ、山に在る衆生の爲には或は果樹と作り、或は流泉、迦陵、頻伽鳥等と作りて、妙音聲を出し、或は山神と作り、或は平地と作り、是の如き等の無量の方便を以て衆生を度脫せしめん。是の如きの心を發して諸の衆生をして此山の難を免れしむ。又一切をして生死の山を越えしめ、曠野の衆生の爲には種種の方便もて其をして悅樂して、正見の道に入り、飢渴を除滅せしめん。是の如き等の無量の難の中に於て

衆生を救ひ已りて復是念を作さく、「願くば衆生をして速かに衆苦を滅し、一切の安隱の智道を究竟せしめん。國土に樂著する衆生の諸の苦惱を受くるを見ば、種種の方便もて其樂著を滅せしめん」と。是の如きの念を作さく、「願くば衆生をして五陰の著を除き、一切佛の薩婆若の境に住せしめん。聚落に著する衆生の諸の苦惱を受くるを見ば、種種に方便して爲に法を說き、其をして厭離し、法を以て之を攝せしめん」と。復是念を作さく、「一切衆生をして六入の空聚を離れ、生死を超出し、究竟じて一切智の城に得入せしめん」と。復次に善男子、若し衆生有りて十方に迷ひ東を以て西と爲し、西を以て東と爲し、乃至上を以て下と爲し、下を以て上と爲さば、此衆生の爲に無量の方便もて、其迷惑を斷ぜん。若し出でんと欲せん者には門戶を開示し、若し道を失ふ者には正路を示導し、若し度らんと欲する者には示すに津濟を以てし、舟楫無き者には之を資給し、方域を知らざるものには其樂ふ土を示さん。是の如き等の無量の方便を以て顯現し開導して之を度脫せしめん。是の如きの心を發すらく、「我已に長夜の昏冥を照除して、世間の衆事は宣敍せざる無し。又衆生をして永く癡暗を滅し、淸淨の眼を得、衆生相及び諸の邪見を離れしむ。常、樂、我、淨あり、衆生、及び福伽羅、陰界諸入に計著し、因果を了らず、不善の道を行ひ、衆生を殺害して乃至邪見にして父母に孝せず。沙門、婆羅門に供養せず、正道を遠離して不善業を行ひ、正道を誹謗して法輪を壞らんと欲し、菩薩衆を毀り、大乘を憎惡して菩提を讚ぜず、賢聖を毀呰して惡人の法を行ひ、五逆の業を造らん。是の如き等の類の諸の

【我が成ぜし所の等】次に偈頌、二十一頌あり、初一は法門の名體を明す。

惡衆生をは、我明淨の慧光を以て其愚闇を除き、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、普賢菩薩の所著を究竟じて、十力の道を開き、生死を遠離して、一切智城と、諸佛の境界と、諸佛の神通とを現じ、諸力を具足し、法持力を現じ、諸佛の平等の正法に安住して、一切佛は悉く同一身なるを現ぜしめん。復次に善男子、我貧苦老病の衆生を見ば、種種に方便して之を救濟せん。復是念を作さく、「無上法を以て彼衆生を攝し、諸の煩惱を滅して解脱を得、生老病死、憂悲苦惱、惡道の諸難を離れしめ、善知識に近き、深く法界に入り、諸の惡業を離れ、佛の法身を淨め、老病死無き常住の法界に置かん」と。復次に善男子、我諸の惡衆生の正道を遠離し邪經に趣き、諸の倒見に著し、虚妄に迷惑して、具に不善の身口意業を行ひ、種種放逸にして惡法に依止し、非正覺に於て正覺の想を爲し、正覺の所に於て非正覺の想をなし、惡知識に近き、諸の苦惱を受くるを見んに、我之を見已りて無量の方便もて其邪惑を除き、正見を安立し、天人に於て最も殊勝と爲らしめん。」復是念を作さく、「諸の衆生をして出世間無上の正道を得て、復一切智より退轉せず、普賢菩薩の大願を滿足して一切智を得、而も亦菩薩の諸地を離れず、衆生の性を壞せざらしめん」と。』

爾時、夜天、重ねて此法門の義を宣明せんと欲して、佛の神力を承け、十方を觀察して、即ち善財の爲に偈を以て頌して曰はく、

我成ぜし所の妙法は、時と諸門の地とを知り

【無量無數劫に】次の四頌は四無量心を明す。是れ能救生心なり。

【我淨き天眼を以て】次の十頌は六處の殊勝を明す、初三眼、次二耳、次一鼻、次一舌、次一身、次一意。

愚癡の闇を照除して、普く一切法を觀ず
無量無數劫に、我常に大慈を修して
普く諸の群生を覆ふ、善財應に速かに具ふべし
大悲海を成就して、三世の佛を出生し
一切苦を除滅す、善財速かに究竟せよ
佛子、心に歡喜して、世間の惡を遠離し
三界の苦を超出して、諸の賢聖の樂を受けよ
有爲の惡を遠離し、聲聞の智を解脫して
如來力を滿足す、佛子應に究竟すべし
我淨き天眼を以て、普く十方刹を見るに
彼世界の中に於て、佛の道場に處すを見る
相好莊嚴の身は、無量の衆に圍遶せられて
大光明海を放ち、普く照して衆生を化したまふ
諸の群生の類を見るに、此に死し彼に生れ
五趣の中に廻り流れて、常に無量の苦を受く
淨き天耳海を以て、普く十方の音を聞き
一切の語言海を、皆悉く能く受持せり

【我神通力を以て】以下六頌は業用の廣大を明す。初一は神通の、次三智慧の次二所見の廣大をいふ。

一切諸の如來の、無量の微妙の聲もて
轉じたまふ所の淨き法輪を、悉く聞きて能く受持せり
我淨き鼻根を以て、法海の中に礙ふる無く
能く諸の法門に入れり、善財應に究竟すべし
我大人の相を成じて、清淨の廣長舌もて
應に隨ひて妙法を演ず、佛子應に究竟すべし
清淨の妙法身は、三世如如に等しく
其所應に隨ひて化し、一切現ぜざる無し
我心に所著無くして、清淨なること虛空の如く
普く一切佛を攝して、而も所著無し
無量の刹の、群生の諸の心海を了知し
一切根を分別して、諸の虛妄を遠離せり
我神通力を以て、遍く無量の刹に遊び
普く一切衆を覆ひて、諸の衆生を調伏す
智慧は虛空の如く、無比の無盡藏なり
諸の如來を供養して、一切衆を饒益す
清淨の廣き智慧は、諸法の海を分別し

【爾時、善財】以下得法の因緣を明す。

衆生の惑を除滅す、佛子應に究竟すべし
三世の法に通達して、深く諸佛の海に入り
明かに一切法を了り、能く測量する者無し
一一の微塵の中に、悉く佛刹海を見
又諸の如來を覩る、此は是れ普力の地なり
盧舍那佛、道場に正覺を成じたまひて
十方刹の微塵に、悉く正法輪を轉じたまふを見る

爾時、善財童子、白して言さく、『天神、阿耨多羅三藐三菩提心を發してより幾ばく時とか爲す。此法門を得て其已に久如して、乃ち能く是の如く衆生を饒益したまふや。』答へて言はく、『佛子、乃し往古の世、須彌山の微塵に等しき如き劫を過ぎて、世界有り、寶德と名け、劫を寂靜と名け、五百億の佛有して、世に出興したまひき。時に大城有り蓮華光と名け、轉輪聖王有り、善法度と名け、聖王の法の如く七寶を成就したまへり。城の東に林有り、名けて妙德と曰へり。此林中に於て菩提樹有り、一切佛自在光明と名けぬ。爾時、一切法雷王佛、此樹下に坐して等正覺を成じ、大光明を放ちて普く一切の世界を照したまひき。王の玉女寶を法慧月蓮華光と名け、彼城内に於て一夜天有り、名けて淨月と曰へり。中夜の時に於て微妙の音を出し、此玉女に告ぐらく、「汝應當に知るべし、一切法雷王佛、世に出興して、彼佛の功德を稱揚し讚歎し、如來の自在の神力を顯現して、阿耨多羅三藐

三菩提心を發し、普賢菩薩の一切の願行を讃歎したまふ」と。時に王の玉女は、彼佛及び諸の菩薩と、諸の聲聞衆とを供養せり、善男子、爾時、玉女、法慧月蓮華光は豈異人ならんや。我身是なり。善男子、我彼佛に於て善根力を種ゑたれば、須彌山微塵に等しき劫に於て、地獄、餓鬼、畜生、閻羅王の處に墮せず、下賤の家に生れず、諸根を具足し、衆苦を除滅し、常に天人の中に於て勝れ、善知識と諸佛菩薩とを離れず、五濁劫の中に生ぜず。彼諸佛菩薩の所に於て善根を增長したれば、八十須彌山微塵に等しき劫に於て、安隱快樂なるも、而も未だ菩薩の善根を滿足せず。復次に善男子、此須彌山微塵に等しき劫を過ぎ已りて、復一萬劫を過ぎて劫有り、離憂と名け、世界を離垢勝と名けたり。須彌寂靜眼如來應供等正覺等の五百の如來有して、世に出興したまひき。其佛の國土は或は淨あり、或は穢あり。彼世界の中に一四天下有り、名けて離垢と曰ひ、城を莊嚴と名けき。我爾時に於て明勝長者の女と爲り、勝慧光と名け、端正殊妙なりき。彼淨月天の本願力を以て此城中に生れたり。復夜天と作り、淸淨眼と名けたり。時に彼夜天、復中夜に於て來りて我家に詣りて妙色を顯現し、如來を讃歎し又我を勸め導きて、彼如來に詣らしめしとき、大光明を放ちて前に在りて引導せり。我爾時に於て父母と倶なりき。及び其眷屬も須彌寂靜眼如來の所に往詣し、供養し恭敬して、佛の說法を聽き、菩薩の三昧を得、名けて、佛を見て衆生を敎化し明淨の慧光普く三世を照すと曰へり。此三昧を得已りて、過去の須彌山微塵に等しき劫に見し所の諸佛を憶念し、又彼佛の說きたまひし所の經法を

【善男子此閻浮提等】以下第二離垢地の善知識を明す

聞きて、光明普く諸法を照して、衆生の愚癡を壞散する法門を得、大光明を放ちて十佛刹の微塵に等しき世界を照せり。彼刹の中の一切如來を見、其所に往詣して彼衆生の諸の語言法、心根欲性を知り、彼衆生の爲に善知識と作り、其所應に隨ひて其身を顯現し、念念の中に於て此法門を長養せり。一身は世界微塵に等しき世界に充滿し、乃至世界海微塵に等しき世界海に充滿して、悉く彼世界海微塵に等しき世界海の中の一切如來を見、往きて其所に詣り、彼佛の說法を我悉く聞持し、彼諸の如來の本事の願海を分別し了知し、彼諸の如來は佛刹を嚴淨し、我も亦嚴淨せり。彼世界の中に於て其所應に隨ひて、其身を示現して衆生を化度し、念念に此法門を長養して法界と等し。善男子、我唯此光明普く諸法を照し、衆生の愚癡を壞散する法門を知るのみ。諸の大菩薩は無量無邊の普賢の所行を究竟じて深く法界海に入り、智慧の幢を建て、諸の三昧、遊戲神通を得て大願成滿し、十方世界の一切佛法を守護し受持して、念念の中に於て悉く能く一切佛刹を嚴淨し、功德海を滿じ、念念の中に於て一切諸の群生海を教化し、智慧の淨日は普く三世の一切世界を照し、一切衆生を教化し、離垢の淨月は、一切衆生の熱惱と疑惑と癡闇とを除滅し、一切有海に於て心に所著無く、淸淨にして圓滿の妙音を演出して、十方一切法界に充滿し、一一の微塵の中に於て、一切の自在神力を顯現し、明淨の慧光は普く三世を照す。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此閻浮提摩竭提國に、一夜天有り、甚深妙德離垢光明と名く。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、

【我清淨身を等】教に依りて趣入する中初に十偈を以て夜天の德を歎ず中初二は身智甚深、次二は身智廣大、次一は毛光の化用、次一は本因莊土、次一は見聞得益、後一は無盡を結歎す。

菩薩道を修するや」と。」

爾時、善財、即ち偈を以て彼夜天を讚じて曰はく、

我清淨身を見るに、相好自ら莊嚴したまふこと
文殊師利の如く、亦寶山王の如し
淨法身を具足して、三世悉く平等に
普く諸の群生を攝して、其心に所著無し
普く淨光明を放ちて、遍く一切趣を照し
一毛孔の中に於て、悉く諸の星宿を見る
垢を離れたる清淨心は、空の十方に滿てるが如く
諸の法王の、明淨の深智慧を攝取す
一一の毛孔の中より、悉く無量の光を放ち
十方の諸佛の所に、普く功德の雲を雨らす
一一の毛孔の中より、諸の變化身を出して
十方界に充滿し、方便もて衆生を度す
本菩薩爲りし時、不思議の刹を淨めしに
一一の毛孔の中より、皆悉く顯現するを得たり
若し見聞する者有らば、悉く功德の利を獲

專ら菩薩道を求め、佛の菩提を成就せん
若し見聞する者有らば、大歡喜の心を發し
惡道の難を遠離して、諸の煩惱を除滅せん
千刹の微塵劫に、其功德を讚歎せんに
諸劫は猶盡すべくも、功德は窮め已ること無し

時に善財童子は、頭面に彼夜天の足を敬禮して、遶ること無數匝し、睠仰し觀察して、心に厭足無く、辭退し遊行して、摩竭國に向へり。

爾時、善財童子は、一心に彼夜天神の初發の道心の圓滿淸淨なるを思惟し、是を思惟し已りて、卽ち深く諸の菩薩藏に入るを得て、菩薩の諸の大願海を出生し、諸の菩薩の波羅蜜道を淨め、菩薩の圓滿の諸地を逮得し、諸の菩薩の圓滿の行業に住し、菩薩の發趣道海を窮盡し、善能く深く一切智の海に入り、皆悉く一切衆生を救護して、大慈悲の雲を長養し增廣し、一切刹に於て普賢の諸の大願行を出生し、漸漸に遊行して、甚深妙德離垢光明夜天の所に至り、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、恭敬し合掌して、一面に於て住し、白して言さく、『天神、我先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を修して、諸地を具足するやを知らず。』答へて言はく、『善い哉善い哉、童子。乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、菩薩行は諸地を具足するを問へり。善男子、菩薩は十法を成就すれば、則ち能く菩薩の所行を具足す。何等をか十と爲す。一

【寂滅定樂精進の法門】寂滅定樂とは本智の內證、精進とは後智策修なり。下に準じて四禪四勤を以てその體性となすなり。

には現前三昧を得て一切佛を見、二には清淨眼を得て一切佛の相好嚴身を見、三には一切諸佛の無量無邊の功德の大海を分別し了知し、四には無量無邊の佛の光明海は、悉く能く普く一切法界を照し、五には一一の毛孔に於て一切衆生數に等しき大光明海を放ちて其所應に隨ひて衆生を度脫し、六には一一の毛孔に於て悉く一切の寶光焰海を見、七には念念の中に於て一切佛の變化の大海を出して、法界に充滿し、一切諸佛の境界を究竟し衆生を敎化して而も障礙無く、八には一切佛の妙音聲海を出して、三世佛の清淨の法輪を轉じ、九には一切の修多羅雲を演說し、佛音を究竟じて深く一切諸の如來海に入り、十には不可思議の佛の自在神力を現じて衆生を化度す。善男子、若し菩薩行りて此十法を具へなば、則ち能く一切諸行を滿足せん。善男子、我已に菩薩の寂滅定樂精進の法門を成就して、悉く三世の嚴淨せる佛刹と、一切の諸佛及び眷屬海と、無量無邊の佛の神力海とを見、佛の名號海と轉法輪海とを分別し了知し、彼諸佛の壽命は無量、音聲は微妙、法身は清淨にして法界に充滿せるを知り、亦如來の一切の諸相に著せず。何を以ての故に。如來は過去に非ず、世間の一切取を除滅するが故に。如來は未來に非ず、所起無きが故に。如來は現在に非ず、無生の身なるが故に。如來は滅に非ず、語言の道を離るるが故に。如來は實に非ず、幻の法を現ずるが故に、如來は虛妄に非ず、一切衆生を饒益せんとして世に出興したまふが故に。如來は去るも至る所無し、此に滅死し彼に生ずるが故に。如來は壞すべからず、法性は無壞なるが故に。如來は一性なり、語言の道を離るるが故に。如來は

【家も家に非ざる等】俗家を捨てて非家に入らしむるの義。

無性なり、法性を究竟するが故に。善男子、我是の如く一切如來を了知して、菩薩の寂滅定樂精進の法門を開發し增廣し、照明に莊嚴して、深く平等に隨順する堅固の境界に入り、分別し了知して虛妄を遠離し、大悲を發起して衆生を攝取し、未だ曾て一心の寂定を捨離せずして初禪を正受し、意業を除滅し、寂智の力を得、衆生を攝取して歡喜し悅樂して第二禪に入り、生死を捨離し、寂滅涅槃して衆生の性を觀じて、第三禪を修して、一切衆生の諸の煩惱苦を滅して第四禪を修して、一切智、菩提の心願を增長し、菩薩の一切の三昧海を出生し、巧妙の方便もて菩薩の一切法門海を究竟し、菩薩の遊戲神通を成就し、菩薩の自在の所行を出生し、明淨の智慧は深く普門の法界に入れり。善男子、我是の如く菩薩の寂滅定樂精進の法門を修習し、種種の方便もて衆生を度脫す。在家の放逸にして貪欲なる衆生には、不淨の想、不樂の想、憂惱の相、逼迫の想、繫縛の想、羅刹の想、無常の想、苦の想、無我の想、空の想、不自在の想、老死の想を修せしめ、彼衆生をして五欲を遠離し、常に正法を樂ひ、家も家に非ざるを信ぜしめ、出家して道を學し、思惟し坐禪するものには爲に亂聲を障へ、鬼神の怖を除き、若し中夜に於て出行せんと欲する時は、爲に門戶を開き、光明もて路を照して闇冥を除滅し、佛法僧及び善知識を讚じ、又復善知識に近くを讚歎し、諸の衆生をして未だ生ぜざる惡法は方便して生ぜざらしめ、已に生じたる惡法は方便して滅せしめ、未だ生ぜざる善法は方便して生ぜしめ、已に生じたる善法は方便して增廣せしめ、菩薩行を行じ、波羅蜜を修し、大願を滿足して一切智を出生し、

大慈悲を習して衆生をして人天の樂を得、妄想を除滅し、善法を增長し、薩婆若に順ぜしめんと欲す。善男子、我唯此菩薩の寂滅定樂精進の法門を知るのみ。諸〻の大菩薩は普賢の願を滿じ、普賢菩薩の所行を具足し、究竟じて癡闇を離れたる法界を得、善根を具足し、如來の智力の光明を成就し、佛の境界に於て障礙する所無く、生死の中に住して心に所染無く、薩婆若の願を具足し成滿して、深く一切諸佛の刹海に入り、一切諸佛の大海を攝取し、一切佛の妙法雲海を受け、一切衆生の生死の闇海を滅し、薩婆若の光は生死の夜を照せり。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此を去ること遠からずして如來の右面に一夜天有り、名けて喜目觀察衆生と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。

爾時、甚深妙德離垢光明夜天、重ねて此法門の義を宣明せんと欲し、偈を以て頌して日はく、

現前定に入りて、普く三世の佛を見
垢を離れたる清淨の眼は、諸佛の海を分別す
諸佛身を觀察するに、相好自ら莊嚴したまひ
一念に無量力ありて、自在に法界に滿てり
盧舍那如來、道場に正覺を成じ
一切法界の中に、淨法輪を轉じたまふ

【善男子此を去ること等】以下第三明地の善知識を明す。

【現前定に入りて】以下擧法勸修の重頌、十三偈あり、頌中前十二は前法を後一頌は後位を指示す。前中初二は定に依りて三世の佛を見ることを頌す。

【盧舍那如來】次十は舍那佛を見ることを明す、中に初三は體の圓備、後七は妙用自在を頌す。

最勝は法相を知り、寂滅にして二有ること無く
妙色の相に莊嚴せられ、一切衆に顯現したまふ
佛身は思議し難く、悉く諸の法界に滿ち
普く十方刹に於て、應に隨ひて悉く現前したまふ
一念に光明を放ちて、一切の刹塵に等しく
無量にして微妙なる色は、普く諸の法界を照す
如來の一毛孔より、不思議の光を放ちて
普く諸の群生を照し、衆の煩惱を除滅す
如來の一毛孔より、無盡の化海を出し
諸の法界に充滿して、衆生の類に顯現す
如來の一妙音は、諸の法界に充滿し
普く甘露の法を雨らして、菩提の心を發さしむ
無量劫に修行して、諸の群生を攝取し
普く諸の佛刹を見るに、皆悉く電光の如し
如來世間に出でたまひ、普く群萠の類に現じて
衆生の性境界を、悉く能く分別して知りたまふ
一切諸の菩薩の、住する所の諸の法門は

佛の一毛孔に於て、悉く能く分別して知りたまふ
遠からずして夜天有り、喜目觀察と名く、
汝往きて彼に詣りて、云何が菩薩行なると問へ
時に善財童子は、頭面に彼夜天の足を敬禮して、遶ること無數匝し、眷仰し辭退して、
喜目觀察衆生夜天に向へり。

大方廣佛華嚴經　卷第五十二

東晉天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之九

爾時、善財童子は、專ら善知識を求め、善知識に因りて諸の善法を生ぜんと念ひ、『善知識は見難く遇ひ難く、善知識に見えて諸の亂想を滅し、善知識に見えて一切諸纒の障礙を除滅し、善知識に見えて薩婆若の智慧の光明を得、善知識に見えて深く佛海に入り、善知識に見えて正念法雲陀羅尼を得て一切佛の淨法輪雲を受持し、善知識に見えて大悲海を具して衆生を救護し、善知識に見えて智慧明淨となり、悉く能く普く諸の法界海を照さん。』時に喜目觀察衆生夜天、威神力を以て、善財童子に加し、善知識を讚じ、善知識に詣りて、恭敬し供養せしむ。善知識は則ち是れ菩提なり。善知識は則ち是れ精進なり。善知識は見難く遇ひ難し。善知識は是れ不可壞の力なり。善知識に因りて遍く十方に遊び、生死の流を斷じ、悉く能く一切の大事を成辦し、正道を莊嚴して普門の法門を得、一切礙ふる無し。善知識に見え、本處を離れずして、遍く十方の一切の佛所に至らしむ。

爾時、善財、即時に善知識に見えて、無量の諸の大願海を成滿し、一切智を得て衆生

【彼夜天を見る】以下已に法界を示す、先づ法門の體狀を明す。

【一切の毛孔に於て等】以下次に業用を明す、中、先づ大業用を現じ、初に毛孔より身雲を出して十度を行じて衆生を化す。

を饒益し、未來無量劫の苦を滅除し、大莊嚴を以て自ら莊嚴し、一一の微塵の中に一切諸の法界の法を修行し、十方海を見、未來劫の諸の語言法及び菩薩行を知り、一切諸の菩薩行を究竟じて、念念の中に於て一切智と神力自在と諸の莊嚴道とを得、三世の佛の淨法界の流に等しく、法界の境界を離れずして、而も能く法界に充滿せる善知識の所に往詣するを了知せり。

爾時、善財、往きて喜目觀察衆生夜天に詣り、彼夜天を見るに、如來の所に在して、大衆の中に於て寶蓮華の師子座に處し、菩薩の普光喜幢の法門を正受し、一切の毛孔より衆の妙雲を出し、其見る有る者は、欣悅して厭く無し。謂ゆる智慧行の雲は衆生を饒益して諍訟を離れ、諸法に著せずして、平等の心を以て普く衆生を攝し、三世の菩薩の布施を修行して、悉く內外捨て難き物を捨つるを顯し、十方の衆生は皆悉く覩見す。又一切の毛孔に於て、衆生數に等しき菩薩の變化の身雲を出して法界に充滿し、衆生の前に現じて不動三昧を顯示し正受し、衆生を覺悟して三界を樂はず、世間を遠離して生死を除滅し、天人の中の種種の成敗を現じて、諸の衆生に不淨觀を修して淨想の倒を除くを教へ、有爲の行は無常にして變易苦惱の法なるを說きて、諸の衆生をして深く佛戒に入り、未だ曾て暫くも離れざらしめ、諸佛の清淨の禁戒を受持して、無疑の戒及以香戒を現じ、戒香は普く一切衆生に熏す。又一切の毛孔に於て、衆生數に等しき妙色身雲を出して、衆生、諸の肢節を截つも、皆悉く能く忍ぶを顯示し、衆苦を堪受して一切の訶責惡罵も、

皆悉く忍んで受け、彼衆生に於て恚心を生ぜず、恭敬し讚歎して愛心を生ぜず、一切衆生に於て我慢を起さず、諸法の自性の忍を顯現し、無盡の菩提心の智を顯現して、一切衆生の煩惱を除滅し、忍法を修習し、菩薩行を行じて、清淨の金剛身を顯現し、如來の清淨の無上色身を顯現し、其所應に隨ひて衆生を教化す。又一切の毛孔に於て諸趣の種種の色身雲を出し、勇猛精進して一切智を現じ、勇猛精進して菩提の境界を現じて退轉せず、勇猛精進して諸魔を降伏し、勇猛精進して生死の海に於て悉く能く一切衆生を救度し、勇猛精進して一切惡道の諸難を除滅し、勇猛精進して無智の山を壞り、勇猛精進して一切如來を恭敬し供養して心に疲倦無く、勇猛精進して諸佛の法輪を受持し守護し、勇猛精進して一切諸の障礙の山を壞散し、勇猛精進して一切諸の如來刹を嚴淨し、諸の如來の清淨精進を得て、一切衆生を教化し度脫す。又一切の毛孔に於て、種種の色身雲を出して、諸の方便を以て衆生の愁憂、苦惱を除滅し、悉く歡喜せしむ、五欲を厭惡し、慚愧を讚歎し、諸根を調伏し、無上の清淨梵行、身口意の善を修行し、世間の一切所欲は皆樂むべからざることを顯現し、衆生を建立して正法を樂はしめ、九次第定を出生し正受して、衆生の一切煩惱を除滅し、菩薩の諸の三昧海、通明自在神力の境界を顯現し、諸の衆生をして皆悉く歡喜し、身心柔軟にして、煩惱の熱を滅し、清涼の樂を得て正法を長養せしむ。又一切の毛孔に於て諸種の種種の身雲を出して、一切刹の諸佛、師長、善知識の所に詣りて恭敬し供養して、心に疲倦無く、一切諸佛の法輪を受持して一

切佛海を究竟し、一切法海を顯現し、一切諸法の實相を顯現し、一切諸の三昧門を顯現し、清淨の智慧は一切衆生の心海を分別し、金剛の智慧は一切衆生の諸の邪見の山を壞散し、圓滿にして明淨の慧日を出生し、一念の中に於て悉く能く一切衆生の愚癡闇冥を除滅して、諸の衆生をして皆悉く歡喜して薩婆若を得しむ。又一切の毛孔に於て、一切衆生の數に等しき身雲を出し、種種の色身の不思議身を現じ、其所應に隨いて悉く其前に現じ、無量の音を以て諸の衆生の爲に世間の功德の藏を演說し、世間の行業、一切の三界は皆樂むべからず、三界の諸の惡邪見を離るるを歎じ、邪道を遠離して一切智に向ひ、聲聞緣覺の地を超出して、有爲無爲に於て心に所著無く、生死を背捨して正しく涅槃に向ひ、而も亦諸趣の往來を捨てず、發菩提心を捨てずして等正覺を成じ、衆生を教化して一切智を得しむ。又一一の毛孔に於て一切の佛刹微塵に等しき變化身雲を出し、普く一切諸の衆生の前に現じ、普賢の行を修し、普賢の願を滿じ、一切の大願を讚歎し究竟して、念念の中に於て一切諸の世界海を嚴淨し、念念の中に於て一切諸佛を恭敬し供養し、念念の中に於て悉く能く一切の法海を受持し、念念の中に於て一一の微塵中に一切世界海の微塵に等しき法界の方便海を出生して一切刹を住持し、一切劫に一切の智道を淨めて未だ曾て休息せず、念念の中に於て悉く一切諸の如來力に入り、三世の方便海を究竟し、一切刹に於て自在力を現じ、一切衆生をして菩薩行を修し、大願を成滿し、一切智を得しむ。又一一の毛孔に於て一切衆生身に等しき身雲を出し、悉く一切諸

【又一切の毛孔……顯現】以下次に毛孔に於て夜天自ら所修の本行を現ずるを明す。

の衆生を前に現じ、無量の一切智力を顯現して、窮盡すべからず、能く壊する者無く、不退轉の菩薩の諸行を修して、生死の法に於て心に所染無く、衆魔を降伏し、煩惱を滅する力、一切障礙の山を壞散する力、大悲を具する力もて、一切劫に於て菩薩行を修し、心に疲倦無く、一切諸佛の世界を震動して、衆生をして淨法輪を轉じ、法幢を建立し、諸の外道を制するを喜び、菩薩行、力波羅蜜を修して、一切智を得しむ。又一一の毛孔に於て、一切衆生の心に等しき種種の色身雲を出して無量の諸の衆生海に充滿し、其所應に隨ひて菩薩行を現じ、智力精進して衆生海を度し、一切衆生の心心の所業界と、一切衆生の諸根海と、一切衆生の行海とを分別し了知して、衆生を教化して未だ曾て時を失はず、明淨の智慧は法性を究竟し、念念の内に於て明淨の智慧は法界に充滿し、一切世界の成敗と及び其莊嚴と、自在神力とを充滿し、諸佛の所に詣り、恭敬し供養して、正法輪雲を守護し受持す。是の如く智波羅蜜を顯現して、悉く衆生をして皆大いに歡喜し、熙怡快樂し、身心柔軟にして、熱惱を除滅し、憂戚を遠離し、衆惡を棄捨し、諸根を調伏し、心に解脫を得、一切智に於て不退轉を得しむ。諸の波羅蜜を顯現して、衆生を化度するが如く、菩薩の一切功德を顯現して、衆生を化度することも亦復是の如し。又一切の毛孔に於て、喜目觀察衆生夜天の初發心より爲す所の功德を顯現し、善知識を求め、諸佛に往詣して、恭敬し供養して、善根を修習す。檀波羅蜜を行じて、捨て難きを能く施し、尸波羅蜜を行じて、天下の宮殿眷屬を棄捐し、出家學道して禁戒を淨修し、羼提波羅蜜を行じて、一切

【又一切の毛孔……無量の身雲】以下、次に諸趣身雲を現じて夜天の本行を説くを明す。

衆生悉く惡言無量の逼切を加ふるも皆悉く能く忍び、毘梨耶波羅蜜を行じて、諸の苦行を修して專ら菩提を求め、其心堅固にして退轉せず。禪波羅蜜を行じて、諸の方便道は清淨の禪波羅蜜を滿足し、諸の三昧に於て自在を得、一切諸の三昧海を究竟し、相續次第して未だ曾て斷絶せず。般若波羅蜜を行じて、菩薩の圓滿の智慧を清淨にし、明淨の慧日を出し、無盡の慧藏は智海を究竟し、方便波羅蜜を行じて一切諸の方便身、方便功德、方便清淨、方便本事を出生し、願波羅蜜を行じて、一切の諸願、淨身の成滿する諸願、意に隨つて行ずべき願、及び願波羅蜜の本事とを出生す。力波羅蜜と力波羅蜜の因緣功德と力波羅蜜の方便海とを行じて、力波羅蜜の本事を分別し演說し、智波羅蜜、智波羅蜜の出生、智波羅蜜の淨身、智波羅蜜の藏、智波羅蜜の境界、智波羅蜜を所攝、智波羅蜜の光明、智波羅蜜の本事、智波羅蜜の分別行、智波羅蜜の深入、智波羅蜜を行じて諸法の攝取し、隨順して法を知り、業を知り、刹を知り、劫を知り、三世を知り、佛の出世を知り、佛智を知り、菩薩を知り、菩薩智を知り、菩薩住を知り、菩薩の功德を知り、菩薩の廻向を知り、諸の大願を知り、轉法輪を知り、分別法を知り、入法界を知り、方便海を知り、法の旋流を知り、諸法の趣を知る。是の如き等の一切の智波羅蜜は、一切の毛孔に於て皆悉く顯現して衆生を化度す。

又一切の毛孔に於て無量の身雲を出す。謂ゆる阿迦尼吒天の身雲、淨居天の身雲、善現天の身雲、不熱天の身雲、果實天の身雲、遍淨天の身雲、無量淨天の身雲、少淨天の身

雲、淨果天の身雲、無量淨果天の身雲、少淨果天の身雲、光音天の身雲、無量光音天の身雲、少光音天の身雲、大梵天の身雲、梵輔天の身雲、梵衆天の身雲、他化自在天王、及び他化自在の天子、天女の身雲、化自在天王、及び化自在の天子、天女の身雲、兜率天王及び兜率の天子、天女の身雲。夜摩天王及び夜摩の天子、天女の身雲。三十三天王及び三十三天の天子、天女の身雲。提頭賴吒天王、及び一切乾闥婆の男女の身雲。毘樓勒叉天王、及び一切鳩槃荼の男女の身雲。毘樓博叉天王、及び一切龍の男女の身雲。毘沙門天王、及び一切夜叉の男女の身雲。緊那羅王、及び一切緊那羅の男女の身雲。摩睺羅伽王、及び一切摩睺羅伽の男女の身雲。迦樓羅王、及び一切迦樓羅の男女の身雲。阿修羅王、及び一切阿修羅の男女の身雲。閻羅王、及び一切閻羅王の男女の身雲。人王の身雲。男子、女人、童男、童女の身雲。是の如き等の一切諸趣の身雲を出す。聲聞、緣覺、仙人の身雲。地水火風神、海神、河神、山神、林神、樹神、穀神、味神、藥草神、園觀神、城郭神、道場神、夜神、晝神、虛空神、方神、道路神、身形神、金剛力士神、是の如き等の一切の身雲を出し、十方一切の世界法界に充滿す。一切衆生の爲に喜目觀察衆生夜天の初發心より行ぜし所の功德を現じ、無量の諸の波羅蜜を積集し、次第に生を受け、此に死し彼に生れ、及び其名號、善知識に近き、諸佛に値遇し、正法を聞持し、菩薩行を行じ、諸の三昧を得、次第に一切佛刹及び諸の如來を覩見し、次第の諸劫に、淨き智慧を得て、深く法界に入り、衆生を觀察して衆生の此に死し彼に生ずるを知り、淨天耳を得て次第に悉く一切の音聲を聞

【爾時、善財】以下善財の見聞法界に證入するを明す

き、他心を知る智にて、次第に衆生の心念を了知し、無依の神足にて、次第に自在に十方に充滿し、諸の菩薩の次第の法門を得て、菩薩の諸の法門海を究竟す。菩薩の自在、菩薩の精進、菩薩の得證、正趣離生、衆生の想、菩薩の想、菩薩の勝妙の清淨の功德なり。是の如き等の中の一切功德をば、彼化身雲、悉く衆生の爲に諸の音聲を以て分別し解說し、開示し顯現せり。謂ゆる風輪の音聲、水輪の音聲、火焰の音聲、大海の音聲、大地震動の音聲、山王相擊の音聲、天城震動の音聲、天寶の音聲、諸天の音聲、龍王の音聲、夜叉王、乾闥婆王、阿修羅王、迦樓羅王、緊那羅王、摩睺羅迦王等の音聲、人王の音聲、梵王の音聲、天女の歌頌する音聲、天樂の音聲、摩尼寶王の音聲、如來の音聲、菩薩の音聲、如來化身の音聲なり。是の如き等の種種の音聲を以て、諸の衆生の爲に善目觀察衆生夜天の初發心よりの一切功德を分別し演說す。彼一一の身雲は此法を說く時、念念の中に一一の方に於て、不可說不可說の諸佛の世界を嚴淨し、無量無邊の衆生は惡道の苦を滅し、無量無邊の衆生は天の樂を成就し、無量無邊の衆生は生死海を度り、無量無邊の衆生は聲聞辟支佛地に安立し、無量無邊の衆生は菩薩の不可思議の喜幢自在の法門を得、念念の中に於て、無量無邊の衆生は如來地に住せり。

爾時、善財童子は、皆上の如き一切諸の奇特の事を見聞するを得、正念に思惟し、觀察し、分別して深く定智に入り、平等に安住せり。何を以ての故に。彼夜天と先に行を同うせるが故に。佛護念したまふが故に。不可思議の諸の善根を成就するが故に。菩薩の

【爾時、善財は】以下善財の偈讃。

【無量無數劫に】正しく偈もて讃ず十偈中初二は勝門に依りて用を現ずる益、次二は法身に依りて化を現ずる益、次二は物を益して著なく、次二は定に依りて奇を現ずることを歎じ、後二は總じて現身說法の益を結す。

根を具足するが故に。佛家に生ずるが故に。善知識の力を得るが故に。一切諸佛の神力に持せらるるが故に。盧舍那佛の本願力の故に。善根熟するが故に。普賢菩薩の行を堪受するが故に。

爾時、善財は、菩薩の歡喜淨光明海を得、十方の一切諸の如來力を得、彼夜天の離垢喜幢の法門を得て、即ち恭敬し合掌して、偈を以て彼夜天を讃歎して曰はく、

無量無數劫に、深く最勝の法を學し
應に隨ひて化を受くる所に、妙色身を顯現す
諸の群生の、愚癡轉倒の惑を了知して
種種の身もて方便して、衆生の類を度脫す
清淨妙法身は、煩惱の熱を除滅し
二に非ずして二有るを現ず、衆生を化せんが爲の故なり
陰入及び諸界は、皆悉く所著無し
行及び色身を具して、一切衆を度脫す
內外の法に著せずして、生死の海を越度し
明淨の智慧の光は、普く一切を照す
喜目天は著無く、衆の虛妄を除滅す
衆生は世に樂著す、爲に佛の法力を現ず

【偈時、善財等】以下得法の因緣を明す。

【過去の世】偈に八十九半あり、初七十七頌半は發心の時節を答ふ。後十復次あり、初寂靜音劫中に五、初八頌は夜天の本身を顯す。

無礙の三昧力は、一一の毛孔の中より
諸の化身雲を出し、十方佛を供養す
念念の中に、諸佛の方便力を出生して
諸の衆生を攝取し、一切法を究竟せしむ
諸の有海を觀察し、業行にて身を莊嚴し
無礙の法を演說す、衆をして淸淨たらしめんが故なり
相好自ら莊嚴すること、猶し普賢身の如く
應に化を受くべき者に隨ひて、無量身を顯現す

爾時、善財童子、偈もて讚歎し已りて、白して言さく、「天神、阿耨多羅三藐三菩提心を發してより幾ばく時とか爲したまふ、此法門を得たまひて、其れ已に久如しきや。」

爾時、夜天、偈を以て答へて言はく、

過去の世、無量刹塵劫を憶念するに
爾時に一劫有り、名けて寂靜音と曰へり
都有り香水と名け、其王を智慧と名け
十二億百千、那由の四天下なり
彼輿轉輪王の、淸淨妙色身は
三十二相具り、八十好に莊嚴せらる

【日光既に沒し等】以下十一頌は最初佛を見るを明す。

妙身は清淨の藏、閻浮檀金の色あり
光明一切を照し、庠步して虛空に遊ぶ
彼王に千子有り、勇猛にして身は端正なり
大臣一億有り、智慧ありて悉く賢明なり
婇女十億有り、端嚴なること天后の如く
大慈の心柔軟に、瞻奉して王に給侍せり
彼聖轉輪王は、常に正法を以て治め
諸の山地、一切の四天下を統領せり
我は時に寶女と爲り、淨梵音を具足し
身より金色の光を出し、周く四萬里を照せり
日光既に沒し已りて、中夜閑にして寂然たり
我爾時に當り、神瑞にて善夢を降せり
佛の世間に出でたまふを見る、號して功德海と曰ひ
自在力を顯現して、十方界に充滿したまへり
大光明海を放ちて、一切刹の塵に等しき
無量自在の身は、十方に充滿せり
大地六種に動き、自然に妙音を出し

【我時に】以下三頌は往いて佛所に到るを明す。

如來世に興出したまひて、天人悉く歡喜せり
一切の毛孔の中に佛の化身海を出して
十方海に充滿し、應に隨ひて法を說きたまへり
我夢に是の如きを見て、如來の自在力にて
深妙の法を說くを聞き、其心大いに歡喜せり
一萬の夜天神は、虛空の中に充滿して
彼如來を讚歎したてまつれり、聞き已りて卽ち覺悟しぬ
彼天我に告げて言はく、賢慧女、速かに起て
佛已に汝が國に興りたまへり、劫海にも值遇すること難しと
此音を聞きて歡喜し、卽ち明淨の光を見て
何れより來りしやを觀察せしに、道場の樹王の所よりたり
時に如來の身を見るに、猶し寶山王のごとく
一切の毛孔の中より、大光明海を放ちたまへり
佛の自在力を見て、其心大いに歡喜し
卽ち弘誓の願を發すらく、我をして此德を獲しめたまへと
我時に大王を覺まし、普く諸の眷屬に及びて
彼佛の光明を見しめしに、歡喜の心無量なりき

【時に彼如來】以下三頌は聞法發心を明す。

【是より後】以下五頌は發心を明す。

我時に彼王と、無量那由他の
眷屬と四種の兵と與に、如來の所に往詣せり
我二萬歳に於て、彼如來を供養し
七寶四天下の、一切を悉く施し奉れり
時に彼如來、功德普雲經を說き
大願海を莊嚴して、應に隨ひて衆生を度したまひき
我是の如きの願を發すらく、來世は夜天と作りて
諸の放逸有る者は、悉く之を遠離せしめんと
爾時我初めて、無上菩提の心を發し
生死有爲の中に、未だ曾て忘失する有らざりき
是より後、十億那由他の佛を供養し
生死海に樂を受け、諸の群生を饒益せり
初の佛は功德海、第二は功德燈
第三は寶幢佛、第四は虛空智
第五は蓮華藏、六は無礙音月
第七は法月王、八は圓滿智燈
第九は寶焰佛、無上なる・天人の尊

【未得其眼】信位中に在りて、未だ十迴の正見眼を得ざるが故に。

【次第に復劫有り】二天妙勝劫中四頌半。

【未離五陰】正智を得ざれば猶欲樂に著するなり。

【次第に復劫有り】三莊嚴梵音劫中五頌半。

第十は化音聲なり、我已に悉く
是の如き等の諸佛を供養すること、十億那由他なるも
猶未だ慧眼を得て、生死海を究竟せざりき
次第に復劫有り、名けて天妙勝と曰ひ
世界を寶光と名け、五百の佛世に興りたまひき
初の佛は圓滿月、第二は明淨日
第三は光明佛、四は須彌山王
第五は華焔海、第六は智慧海
第七は然燈佛、第八は天德藏
九は光明王幢、第十は普智王なり
是の如き等の諸佛を、我已に悉く供養せしも
未だ五陰を樂むことを離れずして、非樂に樂の想を生ぜり
次第に復劫有り、莊嚴梵音と名く
爾時世界有り、蓮華燈雲と名けき
彼に無量の佛、及び其大眷屬有り
我已に悉く供養して、正法を聞きて受持せり
初の佛は寶須彌、第二は功德海

法界須彌幢、第四は法須彌
第五は法幢佛、第六は法地佛
第七は法力佛、第八は虛空慧
第九は光焰山、第十は照明山なり
是の如き等の諸佛を、我已に悉く供養せしも
猶未だ眞實を了りて、諸法海を究竟せざりき
次第に復劫有り、名けて歡喜德と曰ひ
爾時世界有り、名けて功德幢と曰へり
彼劫に八十、那由他の諸佛有し
無量の供養の具を、彼の諸の最勝に奉りき
初は乾闥婆王、二は壽命樹王
三は功德須彌、第四は寶眼佛
第五は盧舍那、六は光明莊嚴
第七は法勝佛、第八は明淨德
第九は世間主、十は一切法王なり
是の如き等の諸佛を、我已に悉く供養せしも
猶未だ妙智を得て、深く法界海に入らず

【猶未だ眞實】十行位中に如實に眞實行を行ずるに至らざるが故。
【次第に復劫有り】四歡喜德劫中五頌半。
【猶未だ妙智】巧便十廻向智の法界等無量廻向に稱ふを得ざるなり。

【次第に復等】五寂靜慧劫中五頌半

【猶未だ眞法】地上本智の眞如法を解證することを得ざるが故に

【次第に復】六香燈雲劫中五頌あり

次第に復劫有り、名けて寂靜慧と曰ひ
爾時世界有り、普光明雲と名けき
千佛有りて世に興りたまひ、無量の德に莊嚴せられ
煩惱の垢を除滅して、一切衆は淸淨たりき
初の佛は無諍と號け、第二は無礙力
三は法界光明、四は一切燈王
五は婆樓那天、第六は衆生師
七は忍圓滿燈、八は法具足燈
九は光明幢海、第十は光明王なり
是の如き等の諸佛を、我已に悉く供養せしも
猶未だ眞法を得りて、一切刹に遊行せざりき
次第に復劫有り、名けて香燈雲と曰ひ
爾時世界有り、名けて淸淨超と曰へり
一億の佛世に興りたまひて、一切の劫を嚴淨したまひ
彼佛の說きたまひし所の法を、我悉く聞きて受持せり
初の佛は無量稱、第二は法海佛
第三は勇猛王、四は功德法王

【八正道を成就】初地見道を得しが故に。

【次第に復】七明淨堅固劫中六頌あり。

【嚴淨最勝道】二三四五地中勝道行成ずるも、六地緣生の深順忍を得ざるなり。

【次第に復】八勝主劫中五頌あり。

第五は勝法雲、第六は天冠佛
第七は智焰佛、第八は虛空音
第九は等勝起、第十は妙德光なり
彼諸佛を供し已りて、八正道を成就せり
次第に復劫有り、明淨堅固と名く
爾時世界有り、名けて寶幢王と曰へり
五百の佛世に興りたまひ、彼諸の如來等を
我已に悉く供養して、無礙の法門を求めたり
初の佛は圓滿德、第二は寂靜音
第三は功德海、第四は日王佛
第五は功德王、第六は須彌相
第七は法王佛、第八は功德王
第九は須彌山、第十は光明王なり
是の如き等の諸佛を、我已に悉く供養したてまつり
我皆悉く、一切の最勝の道を嚴淨せしも
猶未だ、究竟の深法忍を具足するを得ざりき
次第に復劫有り、名けて勝主と爲せり

【彼に於て正道】六地に在りて縁生中道觀を修するなり。

【次第に復】九千功德劫中五頌半あり、七地位に在りて八地無生忍を得ざる故なり。

爾時世界有り、寂靜音聲と名け
八十那由他の、諸佛世に出興したまひ
我已に悉く供養して、彼に於て正道を修したり
初の佛は華聚と號け、第二は海藏佛
第三は功德起、第四は天周羅
第五は摩尼藏、第六は金山佛
第七は寶聚佛、第八は寂靜幢
第九は法幢佛、第十は智王佛なり
是の如き等の諸佛を、我已に悉く供養せり
次第に復劫有り、名けて千功德と曰ひ
爾時世界有り、善化幢燈と名け
六億那由他の、諸佛世に出興したまひ
我已に悉く、彼一切の如來を供養せり
初の佛は寂靜幢、第二は智慧幢
第三は百燈佛、四は功德雲王
寂靜光明王、第六は明淨日
第七は法燈佛、第八は光焰佛

【次第に復】十無著莊嚴劫中五頌あり、供佛を明す。

【功德幢如來】以下十二頌得法の久近に答ふ。

【陀羅尼の念力】九地に四無礙解及

九は天功德藏、第十は智慧燈なり
是の如き等の諸佛を、我已に悉く供養せしも
未だ無生忍を得て、諸法海を究竟せざりき
次第に復劫有り、無著莊嚴と名け
爾時世界有り、無量勝光と名けたり
時に三十六、那由他の佛有りて出でたまひ
是の如き等の諸佛を、我已に悉く供養せり
初は功德須彌、第二は虚空心
第三は莊嚴智、第四は莊嚴藏
五は法音聲海、六は持法音聲
第七は化音聲、第八は功德海
九は功德海燈、第十は功德幢なり
彼の諸の如來等に、我皆悉く値遇せり
功德幢如來、世に出興したまひし時
我は功德天と爲りて、彼最勝を供養せり
時に佛我爲に、莊嚴大願海を說きたまひ
陀羅尼の念力にて皆悉く能く受持せり

持成就を得、如來所說の法爾を領受するなり。
【我明淨眼、三昧陀羅尼】十地法門を得るを明す。
【心淨きこと虛空の如く】微細障亦盡くるを明す。
【諸佛の力】則ち十地の受位、佛數に墮在するなり。

我明淨眼、三昧陀羅尼を得て
一一念の中に於て、悉く最勝海を見る
大悲藏を出生して、深く方便雲に入り
心淨きこと虛空の如く、悉く諸佛の力を得たり
諸の衆生を觀察するに、常樂我淨倒にして
愚癡の闇に覆はれ、煩惱は虛妄を起し
邪見貪欲等、無量の諸の惡業あり
一切諸趣の中に、具に不善の報を受け
一切諸趣の中に、種種の業身を受け
生老病死の患、無量の苦に逼迫せられたり
我無上心を發して、彼衆生を安樂にし
諸佛の所に至り、如來の力を成滿せしむ、
大願雲を滿足して、常に一切佛を見
正道を修習して、諸の功德を具足し
一向に廣く專ら、無量の功德雲を求め
法門波羅蜜、諸の法界に充滿せり
佛子、我爾時、即ち普賢行を得

【善男子此佛の衆中】以下第四焰地の善知識を明す。

深法界を分別して、一切法を攝取す
一切地を成滿して、三世の方便海に
無礙の行を修習し、一念に佛智を具へたり

「善男子、爾時の智慧轉輪王は、豈異人ならんや、文殊師利童子是なり、轉輪王の姓を紹繼して、諸の如來種を斷絕せざらしむ。時の王の賢慧寶女は我身是なり。爾時の夜天我を覺悟せし者は、普賢菩薩の變化する所なり。我爾時に於て初めて阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。道心を發し已りて、佛刹微塵に等しき劫に於て惡道に墮せず、常に天人に生れて諸佛を覩見し、乃至功德幢佛の所にて、此普光喜幢の法門を得たり。此法門を得已りて、無量の衆生を饒益し化度せり。善男子、我唯此法門を知るのみ。諸の大菩薩は、念念の中に於て、普く一切諸の如來の所に詣りて、精進の大海を具足し成就し、念念の中に於て一切諸の大願海を滿足し、念念の中に於て一切未來劫の菩薩の諸行を出生し、一一の菩薩の行の中に於て、一切の佛刹微塵に等しき身を出生し、彼一一の身は一切諸の法界海に充滿し、一一の法界の中に於て、一切佛刹を顯現し、其所應に隨ひて菩薩行を現じ、一一の佛刹の中に於て、一切の佛刹微塵に等しき諸佛海を究竟し、一一の佛の所に於て一切法界に等しき如來の自在神力を究竟し、一一の如來の所にて、過去の諸劫に行せし菩薩行を分別し、一一の如來の所にて一切の法輪を守護し受持して、三世の如來の諸の方便海を究竟せり。我當に云何が彼功德の行を能く知り能く說くべき。善男子、此佛の衆

【爾時、夜天は】以下已が法界を示す、下見敬中請と合して辨ず。初に現法加證。

【離垢圓滿三昧】離垢とは眼膜盡くる故、圓滿とは淨智具する故、能見の法なり。

【此三昧を得已りて】次に用を見て禮讚す。初に彼の大用を見る。

中に一夜天有り、名けて妙德救護衆生と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩行を具し、菩薩行を淨むるや」と。「時に善財童子は、頭面に喜目觀察衆生夜天の足を敬禮して、辭退して行けり。

爾時、善財童子、正念に普光喜幢の法門を思惟し、分別して深く入り、開發し顯現して、善知識の教に隨順し、一向に專ら善知識に見えんことを求め、身心諸根は普く方面に遊びて、善知識を求め善知識の道を思念し、勇猛精進して乃ち値遇するを得、善知識の一切の善根に同うし、深妙の方便を具足し成就し、善知識に因りて一切善根を出生し長養し、諸の大願を發し、一切劫に於て善知識を離れず。往きて妙德救護衆生夜天の所に詣りぬ。

爾時、夜天は善財童子の爲に菩薩の一切世間を敎化する法門の境界を顯現して、相好もて身を嚴り、眉間の白毫相の中より大光明を放ち、名けて普慧焰燈淨幢と曰ひ、無量の光明を以て眷屬と爲し、普く一切世界を照せり。照し已りて善財の頂に入り、其身に充滿せり。爾時、善財即ち菩薩の離垢圓滿三昧を得たり。此三昧を得已りて、一切の地水火風の微塵に於て、衆寶の微塵、香の微塵、金剛の微塵、摩尼の微塵、碎末の微塵、一切莊嚴具の微塵、一切境界の微塵、是の如き等の一一の微塵の中に於て、悉く佛刹微塵に等しき世界の成敗、風輪、水輪、金剛輪、地輪、種種に莊嚴せる衆山に圍遶せられたる無量の大海、諸天の宮殿、諸の雜寶樹にて種種に莊嚴せられたる諸の龍王殿、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の城郭、宮殿、地獄、餓鬼、畜生、閻羅王の處を

【世界趣の淨】衆生染土中にあつて淨土行を修する故趣不淨とは不善業をなして惡道に向ふ故なり。

見る。悉く五道の衆生の此に死し彼に生ずるを見、彼の諸の世界を分別し了知するに、或は世界の淨き有り、或は世界の不淨なる有り、或は世界趣の淨なる有り、或は世界趣の不淨なる有り、或は世界の淨にして不淨なる有り、或は世界の不淨にして淨なる有り、或は世界の一向に淨なる有り、或は世界の其形平正なる有り、或は世界の其形伏せるが如き有り、或は世界の其形四方なる有り、是の如き等の一切世界の一切趣の中に彼夜天を見るに、一切時に於て、普く一切諸の衆生の前に現じ、其所應に隨ひて之を度脱したまへり。地獄の衆生の爲には諸の楚毒を滅し、諸の畜生の爲には惱害の畏を滅し、餓鬼の衆生の爲には飢渇の苦を除き、諸の龍等の爲には一切の畏を滅し、欲界の衆生の爲には欲界の苦を除き、諸の人類の爲には、闇冥の畏、不活の畏、惡名の畏、大衆の畏、惡道の畏、死の畏、善根を失ふの畏、菩提心を失ふの畏、惡知識に近くの畏、善知識を失ふの畏、聲聞縁覺地の畏、生死の畏、不同意の畏、非時に生を受くる畏、惡人の家に生るる畏、惡業を行ふの畏、業障の畏、煩惱障の畏、報障の畏、諸の貪著の畏、諸の繫縛の畏を除き、是の如き等の一切の怖畏を滅せり。又復四生の衆生を教化す、謂ゆる卵生、胎生、濕生、化生、有色、無色、有想、無想、非有想、非無想の衆生なり、常に其前に現じ之を教化せり、大願力を滿ぜんが故に、菩薩の三昧力の故に、諸の通明力の故に、普賢菩薩の行力を出生せんが故に、大悲海を出生し長養せんが故に、無礙の大慈もて一切衆生を覆はんが故に、一切衆生を安樂にせんが故に、一切衆生を攝取せんが故に、深く菩薩の自在な

【爾時、善財】二に善財禮を設く。

【爾時、夜天】三に本形を現ずるを明す。

【善財合掌し等】四に善財の偈讃中二十頌半あり、初一は總頌。【我尊き妙身を等】以下別頌、初九頌半は夜天の身光の利益を歎ず。

る境界の法門に入らんが故に、普く一切諸佛の刹の中に現じて嚴淨を爲さんが故に、一切法中に在りて智慧覺悟せんが故に、一切の佛所に在りて恭敬し供養せんが故に、一切の佛法の中に在りて正法を守護せんが故に、一切衆生の心海の中に在りて衆生を度脱せんが故に、一切衆生の諸根の中に在りて諸根を調伏せんが故に、一切衆生の欲界の中に在りて障礙を除き、清淨を得しめんが爲の故に、一切衆生の愚癡の闇中に在りて一切智の光明を出生せんが故に。

爾時、善財、彼夜天の自在神力の不可思議の菩薩の境界は、一切世界に衆生を教化し、菩薩の一切法門の自在神力を成就するを見、歡喜すること無量にして、頭面に足を禮し恭敬し合掌して一面に於て住し、一心に觀察せり。爾時、夜天、即ち相好妙莊嚴の身を捨て、夜天の形を現じ、而も自在の神力を捨離せず。

爾時、善財、偈を以て頌して曰はく、

善財合掌して住し、諦觀して厭足無く
無量の神力を見て、其心大いに歡喜せり
我尊き妙身を見るに、相好自ら莊嚴し
清淨なること虛空の如く、一切能く壞る莫し
放つ所の殊勝の光は、無量の刹塵に等しく
種種の微妙の色は、普く十方を照す

【喜日觀察天は】以下十頌は前所見を述ぶ。

一一の毛孔より、衆生に等しく光明を放ち
一一の光明の端に、寶蓮華を出生し
華より化身を生じて、衆生苦を除滅す
諸の香の光明を放ちて、普く十方界に熏じ
無量の華雲を雨らして、諸の最勝を供養す
無量の寶光を放ち、一一須彌の如くにして
普く一切衆を照し、愚癡の闇を除滅す
口より淨き光明を放ちて、猶し無量の日の如く
普く盧舍那の、無量の境界を照す
眼より淨き光明を放ちて、猶し無量の月の如く
普く群生の類を照し、愚癡の瞖を除滅す
妙相は衆生に等しく、化身の海を出生して
諸の法界に充滿し、三有の海を度脱す
清淨の微妙の身は、一切見ざる無く
水火の賊、王等の一切の難を遠離す
喜日觀察天は、我を敎へて尊の所に詣らしめ
尊を見るに白毫相より、明淨の光を演出したまふ

普く十方海を照して、一切の闇を除滅し
自在力を顯現して、我頂上より入る
光明身に入り已りて、擧體柔軟にして樂しく
卽ち離垢定を得て、普く十方の佛を見る
悉く能く分別して、一切諸の微塵を知り
一一の微塵の中に、普く十方刹を見る
或は淨き世界有り、或は不淨の刹有り
不淨の世界の中の、衆生は諸の苦を受く
不淨世界の中の、衆生は苦を受くるが故に
三乘の像を示現して、往きて之を救度す
淸淨の佛の國土は、無量の寶もて莊嚴せられ
諸佛大菩薩は、常に樂ひて中に於て住せり
一一の微塵の中に、普く淨き刹海を見る
盧舍那は積劫に、彼土を淸淨ならしめたまへり
一切の佛刹の中に、菩提樹に坐して
最正覺を成ずるを得て、淨き法輪を轉じたまふことを現ず
我妙德天を見るに、彼嚴淨せる刹の

【爾時、善財】第三に得法の因緣を明す。

【佛子】以下正しく因緣を說く、前に長行、三大段あり、初に離垢圓滿劫中に於て佛を供養し修行せしことを明す。十科あり、初に總じて本事を擧ぐ。

【其佛の世界は】二に本生の處を顯はす。

一切の如來の所に詣りて、恭敬して供養せり

爾時、善財、偈もて讃歎し已りて、白して言さく、『天神、甚だ奇なり、甚だ特なり。此菩薩の法門は最も甚深と爲す。此法門は名けて何等と爲し、此法門を得て其れ已に久如しきや、本何の行をか修して、之を致したまへるや。』『善男子、此處甚深にして、一切の人天、聲聞緣覺の知る能はざる所なり。何を以ての故に。普賢菩薩の行を滿ずる者の境界なり、大悲菩薩の境界なり、一切衆生を救護する菩薩の境界なり、一切の惡道の諸難を除滅する菩薩の境界なり、一切佛刹の中に、一切の佛法を守護して斷絕せざらしむる菩薩の境界なり、一切劫の中に菩薩行を修して大願海を滿ずる菩薩の境界なり、明淨の慧光を具足し成就して、一切衆生の愚癡の闇障を滅し、普く一切を照す菩薩の境界なり、一念の中に於て明淨の智慧は、普く三世の諸の方便海を照す菩薩の境界なればなり。善男子、諦に聽け諦に聽け。我當に佛の神力を承けて汝が爲に解說すべし。

佛子、乃し往古の世、世界微塵に等しき劫を過ぎて、劫有り離垢圓滿と名け、世界を明淨妙德幢と名け、須彌山の微塵に等しき如來有して、世に出現したまひき。其佛の世界は七寶もて合成し、衆寶にて莊嚴せられ、其土は圓滿にして、離垢清淨の寶網もて羅覆し、金剛圍山は周匝圍遶し、十萬億那由他の四域の天下有り。或は天下清淨にして衆生も亦淨なる有り、或は天下不淨にして衆生も不淨なる有り、或は天下淨、不淨雜り、衆生も亦雜る有り、或は天下清淨にして、一化衆生は善根具足し、諸の疾患無きもの有り、或は

【時に彼城中に】三に本生の父母を明す。

【彼に一女有り】以下四に本生の身を明す。

天下嚴淨殊勝にして、但諸の菩薩のみなる有り、彼世界の東際金剛山に近く、四天下有り、華燈幢と名く。妙寶の樓閣、臺觀、宮殿、上味の飲食、自然に具足し、瞻蔔華樹は、普く一切を覆ひ、種種の香樹は妙香雲を出し、諸寶の鬘樹は普く鬘雲を雨らし、諸の雜華樹は、不思議の衆妙の華雲を雨らし、諸の末香樹は末香雲を雨らし、諸の香王樹は妙香雲を雨らし、摩尼寶樹は種種の寶を雨らし、諸の音樂樹は、微風に吹動せられ、和雅の音を出して虚空に充滿し、日月明淨にして妙寶の光明普く一切を照せり。彼四天下に百萬億那由他の諸王の京都有りて、一一の王都に千の渠水有り、微流廻り映じて衆華普く被ひ、自然に天の音樂の聲を演出し、岸に寶樹を植ゑ、行列莊嚴し、衆寶を地と爲せり。一一の水間に十億千の城有り、彼一一の城に十億百千那由他の聚落有りて圍遶せり。彼一一の城及び一一の聚落に、各無量億那由他の妙寶の樓閣有りて之を莊嚴せり。彼閻浮提に一王都有り、寶華燈と名け、安隱豐樂にして人民熾盛なりき。此諸の衆生は十善の業道を具足し修行せり。

時に彼城中に轉輪王有り、名けて明淨寶藏妙徳と曰ひ、大法王と爲りて治むるに正法を以てし、蓮華より生じて三十二の大人の相を具へ、七寶成就せり。王に千子有り、端正にして勇猛なり、十億の大臣有り。王に寶女有り、妙徳成滿と名け、端嚴姝妙にして、目髮は紺色にして、身は天金の如く、梵音清淨にして、身より光明を出し、千由旬を照せり。彼に一女有り、妙徳眼と名け、一切の諸行は皆悉く具足し、端正殊特にして觀る

【時に彼城の北に】五に佛出世の利益を明す。中先づ道場處を明す。

【最初の妙德幢佛】以下佛興の攝化を明す。初に放光驚覺、十二重を擧ぐ

者厭く無し。十億百千那由他の諸の婇女衆有りて、皆聖王と善根の行を同うし、身は眞金の色にして一切の毛孔より皆妙香を出し、衆寶もて莊嚴し、天女に超踰せり。爾時、衆生の壽命は無量なりき。或は不定なる有り、或は中夭なる有り、形色同じからず、長短、名號、音、聲、善根、精進、方便も亦悉く同じからず、好有り醜有り、讃むる有り毀る有り。爾時に人有り、一人に謂ひて言はく「我色は端嚴なり、汝が形は鄙陋なり」と、共に相凌ぎ毀り、惡業を作し已りて、壽命、色力、受くる所の快樂は皆悉く損滅せり。

時に彼城の北に、道場樹有り、普光明妙法音幢と名け、衆寶を根と爲し、能く壞する者無し。莖節枝葉は衆寶もて合成し、皆悉く齊等にして、衆の寶雲を出して普く一切を覆ひ、衆の寶光を放ちて普く十方を照し、妙音聲を演べて、如來の自在神力を宣揚せり。其樹の前に於て、香水の池有り、寶華光明眞法音雲と名け、衆寶を岸と爲し、十億百千那由他の寶樹有りて圍遶し、彼一一の樹は菩提樹の如く、寶瓔珞樹周匝して垂下し、清淨の妙寶を以て莊嚴と爲せり。衆寶の樓閣は無量無數にして道場を周遍せり。彼香池の中に一蓮華有り、三世一切佛莊嚴境界雲と名け、最初の妙德幢佛は、彼華の上に於て等正覺を成じたまひき。衆生を化せんが故に大光明を放つ、名けて萬歲と曰へり。衆生の見ん者は、後萬歲にして佛當に世に出でたまふべきを知る。次で後に光を放つを一切衆生離垢歡喜燈と名く、衆生の見ん者は九千歲にして佛當に世に出でたまふべきを知る。次で後に光を放つを離垢燈妙德藏と名く、衆生の見ん者は悉く妙色を覩て、八千歲にして佛當

【佛子彼佛は】以下次に地を動かして衆を集む。

に出でたまふべきを知る。次で後に光を放つを一切衆生業報音聲と名く、衆生の見ん者は自己の業報を分別し了知し、七千歳にして佛當に世に出でたまふべきを知る。次で後に光を放つを起一切善根音聲と名く、若し衆生の諸根具はらざる有りて斯光明に觸れば、皆悉く具足し、六千歳にして佛當に世に出でたまふべきを知る。次で後に光を放つを名けて顯現不可思議諸佛境界音聲と曰ふ、衆生の見ん者は悉く明淨自在の心を發し、五千歳にして佛當に世に出でたまふべきを知る。次で後に光を放つを名けて嚴淨一切佛刹と曰ふ、衆生の見ん者は一切如來の嚴淨せる佛刹を見て、四千歳にして佛當に世に出でたまふべきを知る。次で後に光を放つを一切佛不可壞境界明淨燈と名け、衆生の見ん者は佛は自在にして至らざる所無きを知り、三千歳にして佛當に世に出でたまふべきを知る。次で後に光を放つを普照三世一切諸佛本事音聲と名け、衆生の見ん者は一切如來の過去の本事の無量大海を知り、二千歳にして佛當に世に出でたまふべきを知る。次で後に光を放つを離癡暗智如來淨燈と名け、衆生の見ん者は平等の淨眼を得て、普く一切の嚴淨せる佛刹と一切如來と一切衆生とを見、一千歳にして佛當に世に出でたまふべきを知る。次で後に光を放つを一切衆生見諸如來長養善根と名け、衆生の見ん者は、後七日にして佛當に世に出でたまふべきを知る。次で後に光を放つを一切衆生歡喜音聲と名け、衆生の見ん者は一心に歡喜して如來を見たてまつらんと欲す。

佛子、彼佛は一萬歳の中に於て、是の如き等の無量の光明を放ちて、衆生を教化し、

【一切の金剛圍山】以下次に讃頌して供養を興す。

【時に彼三世等】次に會衆説法を明す。

七日を滿じ已りて、佛の神力の故に、一切世界六種に震動せり。爾時に衆生、念念の中に於て一切の佛刹を見るに、皆悉く清淨にして、衆寶もて莊嚴せり。時に彼世界の衆生は悉く道場に詣りぬ。一切の金剛圍山、須彌山王、一切の諸山、一切の變化、一切の音聲、一切の大地、一切の城邑、垣牆、宮殿、是の如き等の一切の諸物は微妙の音を出し、歌頌もて佛を讃ず。又一切の香雲、一切の寶光明雲、一切の寶形像雲、一切の寶衣雲、一切の華雲、一切の末香雲、一切の寶莊嚴雲、一切如來の圓滿光雲、一切如來の大願聲雲、一切如來の妙音聲雲、一切如來の諸の相好雲、顯現不可思議如來の瑞應相雲を出せり、是の如き等の一切の妙雲を出して、如來を供養せり。時に彼三世一切佛莊嚴境界雲は、蓮華に周匝せられて、十佛世界の微塵に等しき衆寶蓮華を出生せり。彼一一の蓮華の鬚上に、寶蓮華藏の師子の座有り、彼師子の座の上に、十佛世界の微塵に等しき菩薩摩訶薩有り。爾時、妙德幢佛、一切の世界に於て其所應に隨ひて淨法輪を轉じたまひ、無量の衆生をして惡道の苦を離さしめ、無量の衆生をして人天の中に生れしめ、無量の衆生をして聲聞緣覺の地に立て、無量の衆生をして勇猛精進の菩薩の行を立て、無量の衆生をして離垢幢精進菩薩の行を立て、無量の衆生をして法光明菩薩の行を立て、無量の衆生をして清淨根菩薩の行を立て、無量の衆生をして平等諸力菩薩の行を立て、無量の衆生をして一向に專ら求めて正法城に入れる菩薩の行を立て、無量の衆生をして一切處に至りて破壞すべからざる神力自在の菩薩の行を立て、無量の衆生をして一切方便菩薩の行を立

【發菩提心】十住位に進入せしむ、彼是れ初發心位の故。
【菩薩道】十行位
【清淨諸波羅蜜】十廻向中前十度行を淨ならしむるなり。
【大願殊勝】是れ等覺位中の行。
【普賢菩薩…願行】一乘無障礙の普く五位に遍ずる行願なり。
【爾時、普賢菩薩】六に普賢の引導を明す。

て、無量の衆生をして菩薩の三昧を出生する安住菩提を立て、無量の衆生をして一切の淨行を修する安住菩提を立て、無量の衆生をして發菩提心を立て、無量の衆生をして住菩薩道を立て、無量の衆生をして清淨諸波羅蜜を立て、無量の衆生をして菩薩の初地を立て、乃至無量の衆生をして菩薩の十地を立て、無量の衆生をして菩薩の大願殊勝の行を立て、無量の衆生をして普賢菩薩の清淨の願行を立たしめたり。何を以ての故に、如來は不可思議自在の法輪を轉ずるが故に、念念の中に於て其所應に隨ひ、種種の身、種種の方便、種種の說法を以て、無量の衆生を度脫したまへばなり。

爾時、普賢菩薩、寶華燈城の王都の衆生は自ら色貌を恃み、他人を陵蔑するを知り、妙身の端嚴殊妙なるを化現して、彼城に往詣し、大光明を放ちて普く一切を照せり。時に彼聖王の身の光明、諸寶の光明、寶女の光明、寶樹の光明、日月星宿の光明は、皆悉く映蔽せられて、猶し聚墨の如し。眞金山に或る普賢菩薩の身色の光明の、衆光を映蔽するも亦復是の如し。爾時、衆生各是念を作さく、「今此光明は悉く我等を蔽ひて復顯現せず、是れ梵天、諸天の光と爲すや」と。』

大方廣佛華嚴經　卷第五十三

東晉天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之十

『爾時、普賢菩薩、彼聖王の寶宮殿上に在して、虛空の中に於て之に告げて言はく、「大王、當に知るべし、佛世に興りて、今、普光明妙法音幢菩提樹下に在したまふ」と。時に彼衆生普賢菩薩の相好嚴身と無量の光明とを見、妙音聲を聞き、歡喜無量にして、是の如きの願を發すらく、「我等の作す所の善根にて、此妙身の相好莊嚴を得て威儀異る無く、神力自在にして一切衆生の愚闇を除滅し、一切佛世に興りたまふを覺悟し、趣趣に生を受け、願くは常に此善知識を離れざらしめん」と。時に彼聖王は、其寶女及び諸の眷屬、千子、大臣、並に四種の兵と與に虛空に上昇して大光明を放ち、四天下を照し、普く衆生の爲に偈を以て頌して曰はく、

如來世間に出でて、普く諸の群生を救ひたまふ
汝等應に速かに起ちて、導師の所に往詣すべし
無量無數劫に、或は佛有して世に興り

【如來世間に出でて】輪王普告の十偈、中初一は總じて往詣を勸め、次五は佛積德の故出世し給ひ値ひ難きことを歎じ、次三は佛巳に出で大利益現前するを明し、後一は供具を辦じて佛を供養せしむることを明す。

深妙の法を演說し、一切衆を饒益したまふ
普く諸の群生を見るに、愚癡顚倒の惑にて
生死の苦に流轉せり、彼に於て大悲を起したまふ
無量無數劫に、菩薩行を修習し
衆生を化せんが爲の故に、無上の悲を發起したまふ
頭目手足等の、捨て難きを悉く能く施し
無量無數劫に、專ら佛の菩提を求めたり
無量無邊劫にも、如來に値遇すること難し
其見聞する有らん者は、一切悉く虛しからざらん
如來道場に在りて、佛の正法の座に處したまひ
一切の魔を降伏して、最正覺を成ずるを得たまへり
如來身を觀察するに、無量の光を放演し
種種微妙の色は、一切の闇を除滅す
一一の毛孔の中より、光を放つこと不思議にして
愚癡の曀を除滅し、衆をして悉く歡喜せしむ
各衆の供具を辦じ、大精進の心を發して
咸如來の所に詣りて、恭敬して供養を設くべし

【爾時、妙德眼女】七に妙德女の供を興すことを明す。

爾時、轉輪聖王、佛を讃歎し已りて、轉輪王の功德善根を以て、十種の雲を興して、普く虛空を覆ひ、道場に往詣して如來を供養せり。謂ゆる一切の寶雲、一切の華雲、一切の衣雲、一切の寶衣雲、一切の寶網金鈴雲、一切の堅固香雲、一切の如意珠雲、一切の妙寶幢雲、一切の寶宮殿雲、一切の莊嚴雲なり。普く一切を覆ひて虛空を莊嚴し、如來を供養して、佛所に往詣し、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、退きて普照寶藏の座に坐せり。

爾時、妙德眼女は即ち身上の諸の莊嚴具を解きて如來に散じ奉れり。時に莊嚴具は虛空の中に於て變じて寶蓋と成り、衆寶の莊嚴は悉く一切諸の宮殿と等しく、端嚴にして齊整なり。十寶もて莊嚴せる金剛圍山は周匝圍遶し、其形猶し明淨なる樓閣の衆寶もて莊嚴せるが如し。無量の龍王は、悉く共に寶樹を執持して圍遶し、妙香普く熏せり、其蓋の中に於て菩提樹有り、枝葉榮茂して普く法界を覆ひ、無量の莊嚴を以て之を莊嚴せり。盧舍那佛、此樹下に坐したまふを見るに、不可說の佛刹微塵に等しき大菩薩と倶にして、皆悉く普賢菩薩の一切の所行を具足し、菩薩の住に住して能く壞する者無し。又一切世界の諸王、如來を圍遶せるを見る、又彼佛の神力自在を見る、又一切諸劫の次第と世界の成敗とを見る、又一切の諸佛次第に出世したまふを見る、又普賢菩薩、一切佛所に在りて、恭敬し供養して衆生を教化するを見る、又彼一一の世界の中に、悉く佛刹微塵に等しき世界、種種の安住、種種の莊嚴、種種の清淨、種種の劫、種種の如來世に出興したまひ、種種の三世、種種の國土、種種の法界、種種の諸道、種種の入法界、種種の虛空、

【爾時、妙德幢佛】下八に聞經得益を明す。

種種の道場、種種の佛光、種種の諸佛莊嚴の師子の座、種種の如來の眷屬、種種の如來の方便、種種の轉法輪、種種の如來の妙音、種種の音聲海を說き、種種の修多羅雲を說きたまふを見る。時に彼女人是の如きを見聞して歡喜無量なり。

爾時、妙德幢佛、大衆の中に於て修多羅を說きたまひ、一切如來法輪妙音と名け、十佛世界の微塵に等しき修多羅を以て眷屬と爲せり。時に彼女人、此經を聞き已りて、即ち一萬の三昧を得、身心柔軟なること初めて受胎するが如し。又衆生の初に勝業の果報を受くるが如く、又初生の堅固吉樹の如し。謂ゆる現在の一切諸佛を見る三昧、普く一切の佛刹を照す三昧、深く三世に入る三昧、一切如來の妙音轉法輪の三昧、一切の佛の願海を知る三昧、一切衆生の生死の苦惱を滅する三昧、一切衆生の癡闇を滅し大願を滿足し莊嚴する三昧、一切衆生の諸苦を滅する三昧、一切衆生をして快樂を具足せしむる三昧、一切衆生を教化して心に疲倦無き三昧、一切菩薩の無礙幢三昧、菩薩の降神母胎莊嚴三昧なり、是の如き等の一萬の三昧を得たり。復淨三昧の心、不動の心、歡喜の心、正希望の心、廣大の心、善知識の教に順ずる心、甚深の薩婆若の心、方便海に隨順する心、一切に著する無き心、一切世間の境界を捨離する心、如來の境界を究竟する心、普く一切の色海を照す心、瞋恚を滅する心、愛念の心、平等の心、疲倦無き心、不退轉の心、懈怠を離るる心、一切法の寂靜なるを觀ずる心、一切法海に隨順する心、隨順して一切法を分別する心、一切衆生海を分別する心、一切衆生を救護する心、普く一切世界を照す心、一切佛の大願海を

【善男子復是より等】九に宿因の昔因なるを明す。是よりとは過普圓滿劫を指す。【善男子爾時】十に古今を結會す。

滿ずる心、一切障礙の山を壞散する心、無量の功德山を積集する心、佛の十力に向ふ心、普く一切菩薩の境界を照す心、一切菩薩の諸の功德を長養する心、一切十方海に充滿する心、平等を發すの心、佛刹微塵に等しき諸の願海を成滿する心、一切如來刹を願ひ淨むる心を得たり、是の如き等の心は十佛世界の微塵に等しき法門を出生せり。謂ゆる一切衆生を教化する法門、一切法界を分別する法門、一切法海を究竟する法門、一切世界に於て盡未來劫に菩薩行を出生する法門、一切世界に於て盡未來劫に菩薩行に住する法門、一切の佛所に往詣する法門、一切の善知識に値遇する法門、一切佛を恭敬し供養する法門、念念の中に於て一切智を出生し、菩薩行を斷ぜざる法門なり。是の如き等の十佛世界の微塵に等しき法門を出生し、普賢菩薩の願行を出生し、專ら一切智を求めたり。時に彼女人は諸の如來の初發心の願を得たり。

善男子、復是より前に十大劫を過ぎて、世界有り日輪光照と名け、佛を因陀羅妙德幢と號けき。此妙德眼女は普賢菩薩の善知識に因るが故に、蓮華の如來像を造り、衆寶もて莊嚴し、菩提心を發せり。善男子、爾時、明淨寶藏妙德轉輪聖王は、豈異人ならんや。今の彌勒菩薩是なり。時の寶女妙德成滿は、今の寂靜音夜天是なり。妙德眼女は我身是なり。善男子、我莊嚴具を以て妙德幢如來を供養せしが故に、佛の無量の自在神力を見、正法を說きたまふを聞けり。正法を聞き已りて、即ち一切衆生を教化する法門を得、須彌山の微塵に等しき一切如來を恭敬し供養して、彼諸佛の說きたまひし所の經法を聞きて、皆

【其後に劫有り】次に第二大段、大光明劫中佛を供養して修行するを明す。

【其最初の佛】以下別して九佛各生を轉じ供養し經を聞いて受持するを明す。

悉く受持し、一念の中に於て彼一切佛刹の一切如來及び菩薩衆を見たり。

善男子、其後に劫有り、大光明と名け、世界を種種莊嚴と名け、五百の佛有して世に出興したまひ、我悉く此諸の如來を恭敬し供養せり。其最初の佛を大悲幢と名け、我夜天と爲りて恭敬し供養せり。次後の如來を金剛那羅延幢と名け、時に我轉輪王と爲りて恭敬し供養せり。彼佛我爲に修多羅を說きたまひ、次後の如來を起一切如來性と名け、十佛世界の微塵に等しき修多羅を以て眷屬と爲せり。次後の如來を金剛無礙妙德と號け、時に我轉輪王と爲りて恭敬し供養せり、彼佛我爲に修多羅を說きたまひ、普照一切衆生諸根と名け、須彌山の微塵に等しき修多羅を以て眷屬と爲し、悉く聞きて受持せり。次後の如來を明淨焰妙德山莊嚴と名け、時に我長者と爲りて恭敬し供養せり、彼佛我爲に修多羅を說き、普照三世藏と名け、閻浮提の微塵に等しき修多羅を以て眷屬と爲し、悉く聞きて受持せり。次後の如來を一切法海起王と名け、時に我阿修羅と爲りて恭敬し供養せり、彼佛我爲に經を說きたまひ、分別一切法界と名け、五百の修多羅を以て眷屬と爲し、悉く聞きて受持せり。次後の如來を甚深妙法海光と名け、時に我龍女と爲りて如意摩尼の寶雲を雨らして恭敬し供養せり。彼佛我爲に修多羅を說きたまひ、長養歡喜海と名け、百萬億の修多羅を以て眷屬と爲し、悉く聞きて受持せり。次後の如來を寶焰功德山燈と名け、時に我海神と爲りて、衆寶の華雲を雨らし、恭敬し供養せり、彼佛我爲に修多羅を說きたまひ、法界方便海と名け、世界微塵に等しき修多羅を以て眷屬と爲し、悉く聞きて受持せり。次

【佛子是の如く】以下は最後佛邊の所得法益を明す。

【佛子是の如き等の】以下第三大段總じて塵數劫中佛を供養し修行するを結す。

後の如來を功德海光圓滿妙德と名け、時に我仙人と爲り雪山に在りて住し、六萬の仙人と倶に彼佛に往詣し、寶華の雲を雨らし、恭敬し供養し、彼佛我爲に修多羅を說きたまひ、法燈無所著と名け、六萬の修多羅を以て眷屬と爲し、悉く聞きて受持せり。次後の如來を明淨妙德藏と名け、時に我地天と爲り、出生平等義と名け、無量の地天と倶に彼佛に往詣し、一切の寶、一切の寶藏、一切の莊嚴雲を雨らして、恭敬し供養し、彼佛我爲に修多羅を說きたまひ、起一切如來智藏と名け、無量の修多羅を以て眷屬と爲し、悉く聞きて受持せり。佛子、是の如く五百の如來次第に世に興りたまへり。其最後の佛を法界虛空寶山妙德燈と名けたてまつる。時に我妓人と爲り、名けて善口と曰ひ、彼佛の、城に入りたまひしとき、我空中に在りて一千の偈を以て如來を讚歎せり。爾時、世尊、眉間の白毫相より大光明を放ち、普照法界莊嚴と名け、普く十方を照したまへり。照し已りて我身中に入り、即ち法界方便不退藏の法門を得たり。

佛子、是の如き等の世界の微塵に等しき劫に、諸佛世に興りたまひ、我悉く恭敬し供養せり、彼諸の如來所說の正法を悉く聞きて受持し、未だ曾て一句一味をも忘失せず。一一の佛所に於て三世甚深の法界と清淨法身とを得、一切の智光普く一切を照して、普賢菩薩の所行を攝取し、念念の中に於て悉く無量無邊の諸佛を見て、無量無邊の淨慧の光明を得、普く一切を照し、先に未だ得ず、未だ證せざりし普賢の所行を、今悉く成滿せり。何を以ての故に、無量無邊を說くが故に。

【爾時、妙德等】以下第二に重ねて頌す。
【善財應に等】頌に三十八頌半あり、初二頌は所得の法門を與へて諦を誡め說を許す。
【過去久遠の世】以下正しく前文を頌す。

爾時、妙德救護衆生夜天、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

善財應に諦に聽くべし、甚深にして見難き法は
普く三世を照し、深法界を分別す
我初發心の如く、專ら無上道を求め
隨つて得し所の法門を、諦に聽く我今說かん
過去久遠の世、佛刹微塵の劫に
爾時に一劫有り、離垢圓滿と名け
時に世界有り、明淨妙德幢と名け
須彌の微塵に等しき、如來世に出興したまひき
初め佛は妙德幢、二は普慧光焰
法幢德須彌、第四は師子佛
第五は寂靜王、六を除滅惡と號け
第七は功德聚、第八は須彌山
第九は妙德佛、第十は明淨月なり
是の如きの十如來、彼劫の初に世に出でたまひき
次に復十佛有せり、初は虛空方便
第二は普光明、三は安住諸方

第四は功德海、第五は高無上
六は最勝雲、第七は功德佛
第八は光焔山、第九は蓮華佛
第十は法界化なり、是を第二の十と爲す
初は光明幢王、第二は智慧佛
第三は心義佛、四は陀羅妙德
第五は妙天佛、第六は勇猛王
第七は智慧德、第八は光明幢
第九の如來を、超出一切世と號け
第十は蓮華佛なり、是を第三の十と爲す
第一は光焔山、第二は功德海
第三は法光明、第四は妙蓮華
第五は衆生眼、第六は香光明
七は妙德寶山、八は乾闥婆王
第九は明淨智、第十は寂靜色なり
初の佛は光智慧、第二は寶光明
三は虛空妙德、第四は妙相佛

圓滿功德光、第六は那羅延
第七は妙須彌、八は功德轉輪
九は不可壞王、第十は寶山佛なり
初の佛は婆羅王、第二は妙德藏
第三は光明王、第四は眞實起
第五は光明德、六は陀羅尼德
七は光明甚深、八は法海音佛
第九は須彌幢、光明妙德佛
寶光焰如來なり、是を第十の佛と爲す
初の佛は梵光焰、第二は虛空音
第三は法界光、第四は圓滿光
第五は分別光、第六は光明幢
第七は虛空燈、第八は樂妙德
第九は明淨光、妙功德如來
十は寂靜妙德、大悲雲如來なり
初の佛は力光慧、二は衆生現前
第三は無上福、第四は妙德光

第五は法起佛、六は風速妙德
第七は淨幢佛、第八は寶蓋佛
第九は妙德佛、十は普照三世なり
初の佛は願海と號け、第二は光明德
第三は金剛身、四は須彌妙德
第五は正念佛、六は幢王妙德
第七は智慧燈、第八は無量寶
第九は方便、明淨法界佛と號け
第十は法海、明淨智妙德と號く
初の佛は法寶と號け、功德轉輪王
第三は功德雲、第四は忍辱燈
第五は寂靜音、第六は寂靜幢
第七は衆生燈、第八は大願佛
第九の如來は、不可壞幢王と號け
第十を智慧、焰起妙德佛と號けたり
初の佛は法王と號け、第二は無礙智
三は照語言海、第四は妙音聲

【善男子此道場に於て】以下第五離勝地の善知識を明す。

第五は妙德音、第六は自在佛
七は十方一切、衆生現前佛
第八は平等意、九は無上如來
第十を自然、寶妙德最勝と號けたり
是の如き等の一切の、須彌の塵數の佛
彼の諸の如來等を、我已に悉く供養せり
佛刹微塵劫に、出でたまひし所の諸の如來を
悉く恭敬し供養して、此法門を逮得せり
我無量劫に於て、修行して法門を得たり
善財聞きて思惟し、應當に速かに究竟すべし

「善男子、我唯此衆生を教化する菩薩の法門を知るのみ。諸の大菩薩は無量無邊の菩薩の所行を究竟し、悉く種種の性海の中より起り、種種の正直身心は諸根海に滿ち、一切諸の大願門を具足し、無量の諸の三昧門を修行し、無量の神力を具足し成就し、無量の智慧行を修行し、種種の智に入りて諸法の光明普く一切を照せり。我當に云何が彼功德行を能く知り、能く說くべき。善男子、此道場に於て我を去ること遠からずして、一夜天有り、寂靜音と名け、寶幢蓮華藏の師子座に處して、百萬阿僧祇の諸天の眷屬に圍遶せらる。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。」時に

【善い哉】以下已が法界を示す。初に法の名體を顯す。

【無量歡喜莊嚴の法門】一に莊嚴法を以て無量の衆生を化して歡喜せしむる故、二に佛の因果莊嚴の法を見て無量の歡喜を生ずる故。以下この二義を具す、即ち悲智適悦を以て性となすなり。

【天神此法門は】以下業用を辨ず。先づ問、四問あり。初に法門の所作を問ひ、正しくその業用を顯はし、二に法門の境界を問ひ、その所觀を明し、三に法門の方便を

善財童子は、頭面に妙德救護衆生夜天の足を敬禮し、遶ること無數匝し敬心に辭退せり。

爾時、善財童子、寂靜音夜天の所に往詣し、頭面に足を禮して、遶ること無數匝し恭敬し合掌して一面に於て住し、白して言さく、『天神、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せり、我善知識に依りて菩薩行を學し、菩薩行に入り、菩薩の行地に入り、菩薩の行住に住せんとす、唯願くば天神、我爲に解說したまへ。』爾時、夜天、善財に告げて言はく、『善い哉善い哉、善男子。乃ち能く善知識に依りて菩薩道を求む。善男子、我菩薩の無量歡喜莊嚴の法門を成就せり。』白して言さく、『天神、此法門は何の所作と爲すや。境界は云何、何等の方便もて何等の行をか爲す。』答へて言はく、『善男子、我能く一切衆生の心海を淸淨にし、塵垢を除滅し、淸淨莊嚴の心を斷ぜずして、境界を退せざる堅固の心、動ずべからざる心、決定して功德の寶山莊嚴を了知して染著無き心、常に前に現じて一切衆生を護る心、一切の佛、諸の菩薩海を見て厭足無き心、淸淨の菩薩の正直力の心、普く一切の智慧海を照す心を得たり。善男子、我衆生の爲に憂惱と無量の衆苦とを滅除して、其をして永く諸の惡の色聲香味觸意法を離れしめ、衆生の愛別離苦、怨憎會苦及び餘の一切の諸の惡因緣、壞敗の大苦、往生死の苦、生老病死憂悲惱の苦を除滅して、如來の無上の快樂を得しめ、一切の城邑聚落の衆生を、我悉く救護して安樂を得しめ、廣く爲に法を說き、敎へて漸く一切種智を求めしむ。若し衆生の在家宮殿に心樂著する者を見ば、彼が爲に法を說きて、諸法の眞實の性を知らしめ、若し衆生の父母兄弟と歡娛し讌集

問うてその善巧を明し四に法門の因行を問うて正しくその所因を顯す。答は此問に應じて四段あり。

【善男子我能く等】所作の業用に答ふ

するを見ば、彼が爲に法を說きて諸佛菩薩と共に會せしめ、若し衆生の妻子歡び會するを見ば、彼が爲に法を說きて、生死愛欲の海を竭し、大悲を具足して、一切を等觀せしめ、若し衆生の王宮の殿に處するを見ば、彼が爲に法を說きて、悉く賢聖の快樂を逮得せしめ、若し衆生の境界に著する者を見ば、彼が爲に法を說きて、如來の甚深の境界を得しめ、若し衆生の瞋恚を起す者を見ば、彼が爲に法を說きて、如來の羼提波羅蜜を得しめ、懈怠の者の爲には正法を演說して菩薩の清淨毘梨耶波羅蜜を得しめ、亂心の者の爲には正法を演說して如來の禪波羅蜜を得しめ、邪癡の者の爲には正法を演說して般若波羅蜜を得しめ、三界に著する者の爲には正法を演說して三有を出でしめ、小法を樂ふ者の爲には正法を演說して其をして菩薩の大願を滿足せしめ、自ら安んずる者の爲には正法を演說して大願を具して一切を饒益せしめ、心の劣れる者の爲には正法を演說して菩薩の力波羅蜜を得しめ、無智の者の爲には正法を演說して菩薩の智波羅蜜を得しめ、無色の者の爲には正法を演說して、如來の清淨色身を得しめ、危脆の身の者の爲には正法を演說して無上清淨の法身を得しめ、惡色の者の爲には正法を演說して如來の清淨妙色を得しめ、苦惱する者の爲には正法を演說して如來の無上快樂を得しめ、貧窮の者の爲には正法を演說して菩薩の諸の清淨藏を得しめ、園觀の者の爲には正法を演說して一向に諸佛の妙法を求めしめ、路に在る者の爲には正法を演說して一切智の道を得しめ、聚落の者の爲には正法を演說して三界を出でしめ、國土の者の爲には正法を演說して聲聞緣覺及び菩薩地を過ぎて

【復次に善男子】次に境界の問に答ふ。

如來地に住せしめ、城郭に在る者の爲には正法を演說して法王城に入りて普く一切を照さしめ、隅に在る者の爲には正法を演說して三世平等の智慧を得しめ、方に在る者の爲には正法を演說して一切智常に現在前して一切法を觀ぜしめ、貪欲多き者の爲には正法を演說して不淨を觀じて生死の愛を滅せしめ、瞋恚多き者の爲には正法を演說して大慈の海を究竟せしめ、愚癡多き者の爲には正法を演說して智慧を得て諸法海を觀ぜしめ、等分の者の爲には正法を演說して其をして諸の勝れたる願海を分別し、生死の樂を離れ、生死の苦を滅し、佛の正法を顯し、五陰に著せず、常に妙法を行ぜしめ、懈怠の者の爲には正法を演說して莊嚴の勝れたる道を得しめ、憍慢の者の爲には正法を演說して一切諸法の平等なるを觀ぜしめ、諂曲の者の爲には正法を演說して菩薩の清淨直心を得しめん。善男子、我是の如き等の無量の法施を以て衆生を攝取し、惡道の苦を滅し天人の樂に處し、永く三界を離れしめ、諸の功德を具して種種の方便もて之を化度し、歡喜無量なり。

復次に善男子、我常に菩薩大海を觀察するに、種種の願行、種種の淨身、種種の淨光、種種の光焰あり、種種諸の道は薩婆若に趣き、種種の三昧海に入り、種種の自在神力を顯現し、種種の妙音聲海を出生し、種種の妙莊嚴身は種種の方便もて如來海に入り、種種の諸佛の刹海に往詣し、種種諸の如來海を究竟し、深く種種諸の辯才海に入り、普く種種の如來の境界を照し、種種諸の智慧海を成就し、種種の三昧印海を超度し、種種の遊戲法門に安住し、種種の門を以て薩婆若に趣き、種種に虛空法界を莊嚴し、種種の莊

嚴の雲は普く虚空を覆ひ、種種諸の大寶海と、十方世界の一切刹の中の諸の如來の所の菩薩眷屬とを觀察し、普く種種の妙莊嚴の雲を雨らし、皆悉く來會して種種の莊嚴の座に安處し、深く如來の方便大海に入り、諸の法海を行じ、種種の智海に度る。我此を見已りて無量の歡喜を起して佛の力と等し。又善男子、盧舍那佛の不可思議の清淨色身は、相好莊嚴したまふ、我此を見已りて無量の歡喜を起せり。盧舍那佛は念念の中に於て法界に等しき光を放ち、普く一切諸の法界海を照したまふ。我是を見已りて無量の歡喜を起せり。盧舍那佛は念念の中に於て、一一の毛孔より無量の佛刹微塵に等しき光を放ち、一一の光明に無量の佛刹微塵に等しき光有りて以て眷屬と爲し、普く一切を照して法界に充滿し、衆生の一切の苦惱を除滅したまふ。我是を見已りて無量の歡喜を起せり。盧舍那佛は念念の中に於て頂の上、兩肩の上より、一切の佛刹微塵に等しき寶光山雲を放ち、普く一切を照して法界に充滿したまふ。我是を見已りて無量の歡喜を起せり。盧舍那佛は一一の毛孔より一切の佛刹微塵に等しき香雲を放ち、普く十方一切の佛刹に熏じたまふ。我是を見已りて無量の歡喜を起せり。盧舍那佛は一一の相の中より、一切の佛刹微塵に等しき相を出し、一切諸の世界海に充滿したまへり。我是を見已りて無量の歡喜を起せり。盧舍那佛は一一の毛孔より一切の佛刹微塵に等しき自在力雲を出したまひ、初發心等の清淨の波羅蜜は菩薩の諸地を莊嚴せり。我是を見已りて無量の歡喜を起せり。盧舍那佛は一一の毛孔より念念に不可說不可說の佛刹微塵に等しき諸の龍王身を出生したまふ、龍

【起る者も起るに非ず】用ひて常寂を明す故に、能起所起倶に平等無性なり。

【佛子此法門は】以下法門の方便善巧の義を明す。

身を見て化を受くるものの爲の故なり。又不可說不可說の佛刹微塵に等しき諸の夜叉身、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等の身を出したまふ。彼身を見て化を受くるものの爲の故なり。我是を見已りて無量の歡喜を起せり。盧舍那佛は一一の毛孔より不可說不可說の佛刹微塵に等しき轉輪王の身雲を出し、七寶成就し、神力自在にして法界に充滿したまふ、彼身を見て化を受くるものの爲の故なり。我是を見已りて無量の歡喜を起せり。盧舍那佛は一一の毛孔より不可說不可說の佛刹微塵に等しき梵王の身雲を出し、淨梵音を出し、衆生の爲に法を說く、彼を見聞して化を受くるものの爲の故なり。我是を見已りて念念の中に於て無量の歡喜を起し、悉く法界の薩婆若と等し、起る者も起るに非ず、得る者も得るに非ず、見る者も見るに非ず、入る者も入るに非ず、度る者も度るに非ず、滿つる者も滿つるに非ず、聞く者も聞くに非ず。何を以ての故に。法界の性を分別し了知するが故に。三世の法は悉く一性なりと解るが故に。佛子、此菩薩の無量歡喜莊嚴の法門には、是の如き等の無量の境界有り。

佛子、此法門は無量無邊なり、方便諸法海を究竟するが故に。此法門は損減すべからず、薩婆若の心は壞すべからざるが故に。此法門は究盡すべからず、衆生の妄想は盡すべからざるが故に。此法門は破壞すべからず、菩薩智の知る所なるが故に。此法門は最も廣大と爲す、一切の佛の境界なるが故に。此法門は破壞すべからず、菩薩智の知る所なるが故に。此法門は稱量すべからず、破壞すべからずして法界に滿つるが故に。此法門は即ち是れ

普門なり、一相の中に於て一切の自在力を攝取するが故に。此法門は是れ第一法なり、一切法は身無く行に二無きが故に。此法門は生に非ず、一切諸法は悉く幻の如くなるが故に。此法門は電の如し、薩婆若の諸の大願を攝するが故に。此法門は化の如し、善能く菩薩行を變化するが故に。此法門は大地輪の如し、一切諸の衆生を饒益するが故に。此法門は大水輪の如し、廣大の悲を以て衆生を潤すが故に。此法門は大火輪の如し、衆生の諸の貪愛を消竭するが故に。此法門は大風輪の如し、一切衆生を薩婆若に立つるが故に。此法門は猶し大海の如し、功德もて一切衆生を莊嚴するが故に。此法門は須彌山の如し。一切功德海中に起るが故に。此法門は大城郭の如し、一切法の街巷にて莊嚴するが故に。此法門は猶し虛空の如し。三世諸佛の自在最も無上の故に、此法門は猶し慶雲の如し、普く衆生に甘露の法を雨らすが故に。此法門は猶し白日の如し、普く一切を照して癡闇を滅するが故に。此法門は猶し滿月の如し、衆生の功德海を滿足するが故に。此法門は如の如し。一切に至るが故に。此法門は影の如し、善能く諸の業報に應化するが故に。此法門は響の如し、其所應に隨ひて爲に法を說くが故に。此法門は猶し電光の如し、其所應に隨ひて悉く照知するが故に。此法門は猶し樹王の如し、一切諸佛の功德の妙華は一切智の果實を成就するが故に。此法門は猶し金剛の如し、一切世間能く壞する無きが故に。此法門は隨意の寶王の如し、無量の自在力を出生するが故に。此法門は離垢寶の如し、悉く分別して三世の佛を知るが故に。此法門は猶し寶幢の如し、一切佛の平等法輪、妙

【喩に非ざるを喩と爲す】理實にこの法は世喩能譬に非ず、略して少分喩を擧ぐるなり。
【爾時、善財】以下は再び問を發し第四法門の因行を明す。

【善財白して言さく】以下六に法根の深淺を明す。初に問。
【答へて言はく】次に答、初に長行中に四あり、初に過去普照幢劫中の發心修行を知ることを明す。中に三、初に最初佛邊に於て發心して定を得るを明す。

音聲を出すが故に。佛子、此の如きの諸の蹄は喩に非ざるを喩と爲せるなり。』

爾時、善財、寂靜音夜天に白して言さく、『菩薩は何等の法を修してか此法門を得たまへる。』答へて言はく、『佛子、菩薩は十の妙法を修行するが故に此法門を得たり。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩は布施を修行して、一切衆生海をして皆悉く歡喜せしめ、淨戒を修行して諸佛の功德の大海を成滿し、忍辱を修行して一切諸法の眞性を了知し、精進を修行して薩婆若に於て堅固にして退かず。禪定を修行して一切衆生の煩惱を除滅し、智慧を修行して一切法海を分別し了知し方便を修行して一切衆生海を教化し成熟し、大願を修行して一切佛刹海に於て未來劫を盡して菩薩行を修し、諸力を修行して念念の中に於て一切刹に現じて等正覺を成じ、無盡智を修行して三世の法を了知し障礙する所無し。佛子、是を十の妙法と爲す。菩薩摩訶薩は此法を修行し、此法門を起し、此法門を得、此法門を淨め、此法門を成じ、長養し增廣して沮壞すべからざるなり。

善財白して言さく、『天神、阿耨多羅三藐三菩提心を發してより久如しと爲すや。』答へて言はく、『佛子、乃し往古の世、二佛刹微塵に等しき劫を過ぎて劫有り、普照幢と名けき。此蓮華藏莊嚴世界海の東に於て、十世界海を過ぎて一世界海有り、名けて離垢衆寶莊嚴と曰へり。彼世界海の中に世界性有り、一切佛光明願音と名けたり。彼世界性の中に一世界有り、離垢光金色莊嚴と名け、一切の寶雲にて之を莊嚴し、衆寶を地と爲し、堅固にして動ぜず、形は一切香妙德王の莊嚴せる樓閣の如く、皆悉く清淨にして、諸天の宮

【彼道場の上に】以下生を轉じて更に餘佛に値ひ法を得るを明す。

殿其中に充滿せり。彼に王都有り、名けて普滿妙德藏王と曰ひ、彼に道場有り、一切衆寶莊嚴月光明と名け、其佛を不退法界妙音と號け、此道場に於て阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。我爾時に於て菩提樹神と爲り、功德燈無量光幢と名けたり。我彼佛の等正覺を成じ、無量の自在神力を顯現したまふを見て、我爾時に於て阿耨多羅三藐三菩提心を發し、彼佛所に於て三昧を逮得し、普照佛功德海と名けたり。彼道場の上に、次に如來有して世に出興したまひ、法樹功德山と名けたり。彼菩薩樹神、命終の後に還りて此處に生れ、菩提樹夜天と爲りて、妙德慧功德光明と名け、彼如來の正法輪を轉じたまひしを聞き、復無量の歡喜を得て、普く一切の境界三昧を照せり。彼道場の上に次に如來有して世に出興したまひ、一切法海妙音聲王と號け、彼如來に値ひたてまつりて復三昧を得、成就一切法地と名けたり。彼道場の上に、次に如來有して世に出興したまひ、寶光焰燈幢王と號け、彼如來に値ひたてまつりて、復三昧を得、分別一切普照雲と名けたり。彼道場の上に、次に如來有して世に出興したまひ、功德須彌光王と號け、彼如來に値ひたてまつりて、復三昧を得、照諸佛海と名けたり。彼道場の上に次に如來有して世に出興したまひ、法雲妙音聲王と號け、彼如來に値ひたてまつりて、復三昧を得、一切法海燈と名けたり。彼道場の上に、次に如來有して世に出興したまひ、智慧燈明淨燈王と號けたり。時に我は天女と爲りて、彼如來に値ひたてまつりて復三昧を得、明淨燈滅衆生苦と名けたり。彼道場の上、次に如來有して世に出興したまひ、法勇幢妙德と號け、彼如來に値ひたてまつりて復

【是の如く次第に以下十刹塵佛及び受生得法を結す。】

【彼佛刹に於て等】次に佛世界塵數劫の修行を明す。

【最後に命終して】次にこの賢劫中に於て、修行して法を得しことを明す

三昧を得、三世佛普照藏と名けたり。彼道場の上、次に如來有して復三昧を得、明淨智普照一切無所障礙と名けたり。彼道場の上、次に如來有して世に出興したまひ、智力山王と號け、彼如來に値ひたてまつりて復三昧を得、普照三世衆生根行と名けたり。佛子、彼普照幢劫の離垢光金色莊嚴世界に、是の如く次第に十佛世界微塵に等しき如來有して世に出興したまひ、我爾時に於て、或は天王、龍王、夜叉王、乾闥婆王、阿修羅王、迦樓羅王、緊那羅王、摩睺羅伽王と爲り、或は人王、梵王、男子女人、童男童女と爲りて皆悉く彼一切の如來に値ひたてまつりて、恭敬し供養し、彼佛の説法を悉く聞きて受持せり。彼佛刹に於て二佛世界微塵に等しき劫に、菩薩行を修し、佛刹微塵に等しき受生を經たり。最後に命終して、此蓮華藏莊嚴世界海の娑婆世界の中に生れ、道場夜神と作りて、拘樓孫如來に値ひたてまつり、三昧眼を得、離垢一切香王光明と名けたり。次に拘那含牟尼如來に値ひたてまつりて復三昧を得、隨順普照一切刹海と名けたり。次に迦葉如來に値ひたてまつりて復三昧を得、妙音聲海分別一切衆生音海と名けたり。今復盧舍那佛、道場に坐し、菩提樹の下に等正覺を成じ、念念の中に於て無量の自在力海を顯現したまふに値見して、復菩薩の無量歡喜莊嚴の法門を得たり。法門を得已りて、深く十不可說不可說の世界海微塵に等しき法界方便海に入れり。此法界方便海を以て一切の佛刹微塵に於て、一一の微塵の中に、悉く十不可說不可說の佛刹に等しき世界、及び彼諸佛を見、彼諸の如來の所說の正法を悉く聞きて受持せり。又盧舍那佛は、念念の中に於て、一切世界の道

場に坐して、等正覺を成じたまひ、無量の自在神力を出生し、一一の神力は法界海に滿つるを見て、我悉く彼に詣りて說きたまふ所の正法を悉く聞きて受持せり。又復彼一切の諸佛、一一の毛孔より化身海を出して、法界海に滿ち、種種の自在神力を顯現し、一切の佛刹海、一切世界性、一切世界、一切諸趣、一切衆生の中に於て、其所應に隨ひて、正法輪を轉じたまふを見、我精進聞持陀羅尼を以ての故に、悉く能く受持し、正念に思惟して味を知り、明智慧藏は圓滿淸淨にして、一切法海を分別し了知せり。三世の諸佛の平等を觀察して、一切の方便法門を出生し、一一の方便に於て一切の修多羅雲を出生し、一一の修多羅雲は一切諸の正法海を成就し、一一の法海は一切諸の廻轉法を攝取し、一一の廻轉法は普く一切諸の妙法雲を出し、一一の法雲は一切諸法の波浪を出生し、一一の波浪は一切の歡喜法海を逮得し、一一の歡喜法海は一切諸の功德地を出生し、一一の功德地は一切諸の三昧海を出生し、一一の三昧海は一切佛海を見、一一の佛所にて一切の光明海を得、一一の光明海は普く三世を照せり。圓滿の智地を得て、普く十方を照し、無量の佛の過去の行海を知りて、一切佛の無量の本事海を照し、捨て難きを能く施して、無量の淨戒を持ち、無量の忍を行じて、淸淨の菩薩の精進を長養し、無量の諸の禪定海を淸淨にして、如來の般若波羅蜜海を了知し、普く如來の無量の方便海を照して、如來の功德智慧を長養する力波羅蜜を了知し、如來の無量の智波羅蜜海を分別せり。普く如來の過去の無量の菩薩の諸地と無量の佛地の神力自在と無量劫の中に修

【善男子、汝が問ふ所】以下答を結す。

【爾時、寂靜音等】次に偈頌十偈、初一は聽を誡め學を勸む、次二は修因の曠遠なるを明し、次二は供養して恩田に報ひ、次四は衆生の苦難を救ひ、後一は己が大願を顯す。

習し起す所とを照し、無量の佛の過去の菩薩地を淨め、無量の佛の過去の智地を修し、無量の佛の諸の智慧地を照し、無量の佛の菩薩たりし時に相續せる善根を知り、無量の佛の菩薩たりし時に、一切の劫海の中に於て、一切の佛海を修せし所の菩薩行を知り、無量の佛の菩薩たりし時、佛刹海に出生し、無量の菩薩行は法界に充滿し、種種の方便門もて衆生を教化し、普く十方諸の世界海を照し、諸の衆生の爲に自在力を現じたるを知り。普く如來の一切智地を照し、淨法輪を轉じ、悉く聞きて一切法雲を受持し、無量の菩薩の自在神力を顯現し、普く諸佛の相海、行海、力海を照し、念念の中に於て彼諸佛の初發心より乃至無餘涅槃したまひ遺法の滅盡するを知れり。善男子、汝が問ふ所の我發心してより已來、幾時とか爲すとは、上の所說の如し。乃至此刹に來生して盧舍那佛を供養せり。此世界に拘樓孫佛、乃至盧舍那佛を供養せるが如く、賢劫の未來の諸佛を供養せんことも亦復是の如し。賢劫の諸佛を供養せるが如く、一切世界の未來の諸佛を供養せんことも亦復是の如し。而も彼離垢光金色莊嚴世界は今も猶現在せり。是故に善男子、汝當に一心に此法門を修すべし。」

爾時、寂靜音夜天、重ねて此法門の義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

善財應に諦に聽くべし、我此法門を說く
應に歡喜の心を生じ、勤修して究竟せしむべし
無量の諸の劫海に、菩薩行を修習し

心淨きこと虛空の如くにして、一切智藏に入れり
三世佛の法を聞き、一心に樂ひ專ら求め
彼如來の所に於て、諸の功德を修習せり
我過去の佛を見て、恭敬して悉く供養し
佛の正法を說きたまひしを聞きて、歡喜の心無量なりき
亦已に悉く恭敬して、父母を供養し
一心に樂ひ專ら求めて、此法門を究竟せり
老病貧窮等、諸根の具らざる者には
彼苦惱を除滅して、悉く安樂を得しめ
水火官賊の難、怨敵、諸の恐怖
及び海中の諸難は、我皆之を救濟す
衆生の煩惱業、種種の受報の苦も
生死の山を摧破して、諸の群生を救護す
一切諸の惡道、心量の楚毒の苦
生、老、病死の痛も、我當に悉く除滅すべし
我願くば無量劫に、一切樂を安隱にし
常に一切佛を見、生死の苦を滅除せん

【善男子此道場】以下第六現前地の善知識を明す。

【爾時、善財】敎に依りて趣入する中初に偈讚十頌あり。

『善男子、我唯此無量歡喜莊嚴の法門を成就せるのみ。諸の大菩薩は深く法海に入りて、一切劫を分別し、善く一切諸の世界海の成敗の事を知れり。我當に云何が彼功德行を能く知り、能く說くべき。善男子、此道場の上の如來衆の中に一夜天有り、名けて妙德守護諸城と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。』

爾時、善財、寂靜音夜天を讚歎せんとして、偈を以て頌して曰はく、

我知識の敎を受け、來りて天神の所に詣り
無量の淨身を見る、天寶の座に安處したまふ
虛妄に諸相を取り、一切法に染著する
無智の衆生等は、境界を知る能はず
淸淨の妙色身は、一切諸天の衆
無量劫に諦觀するも、其心厭足無し
五陰を遠離して、一切著する所無く
世の疑惑を超出して、自在力を顯現す
內外の法に染まず、無礙の心動ぜず
明淨の智慧の眼もて、佛の自在力を見る
身を正法藏と爲す、心は是れ無礙の智なり

佛の智慧光を成じて、普く諸の群生を照す
分別して心業を說き、諸の世間を莊嚴し
心業の自性を知り、身を現ずること衆生に等し
世は悉く夢の如きを知り、佛は電光の如く
一切の法は響の如しと了り、衆をして著する所無からしむ
念念に悉く、三世の衆生の惑を除滅し
三世の相を取らずして、而も能く法を演說したまふ
一切の佛刹海と、一切の諸佛海と
無量の衆生海とに、著すること無く法門を修す

時に善財童子は、頭面に彼夜天の足を敬禮し、遶ること無數匝し、敬心して辭退せり。

爾時、善財童子、正念に思惟し智慧もて分別し、隨順して正しく趣き、廣身を修し、無量の歡喜もて莊嚴せる法門を證し、往きて妙德守護諸城夜天の所に詣り、彼夜天を見るに、普照一切宮殿の寶師子の座に處したまひ、不可說の諸天の眷屬に圍遶せられ、隨方面の身、一切衆生色の身、普く一切衆生の前に現ずる身、一切衆生無所著の身、一切衆生身の身、一切衆生の無上身、隨順して一切衆生を教化する身、十方に遊ぶ身、一切十方に至る身、究竟の佛身、究竟して一切衆生を教化する身あり。善財此身を見已り、歡喜無量にして、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し、恭敬し合掌して、一面に於て住し、白して言さく、

【善男子、我已に】以下正しく己が法界を示す、初に法の名體を標す。【甚深妙德自在音聲の法門】正しく法界を證するを甚深、後智續辯を妙德、教を宜べ機に隨つて廣略無礙なるを自在音聲といふ。【是故に佛子】以下業用を顯す。初に總說。

『天神、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩道を學し、衆生を饒益し、無上の攝法を以て衆生を攝取し、如來の業に順ひ、法王に親近するやを知らず。』時に彼夜天、善財に告げて言はく、『善い哉善い哉、佛子。一切衆生を救護せんが爲の故に菩薩行を問へり。一切佛刹を嚴淨し、一切佛を供養し、一切劫に住し、一切衆生を救護し、一切如來の種姓を守護し、十方一切の法界海の平等心を究竟して一切に充滿し、一切諸佛の轉じたまふ所の法輪を、悉く聞きて受持し、其所應に隨ひて甘露の法を雨らさんが爲の故に、菩薩行を問へり。

善男子、我已に甚深妙德自在音聲の法門を成就せり。是故に、佛子、我は勝れたる大法師なりと爲す、罣礙する所無く、一切法に於て心に著する所無く、如來の一切法藏を分別し、如來の大慈大悲に安住し、衆生を菩提心に建立して、一切の利を得、菩提心を捨てず、一切善根を長養せしむ。一切衆生の調御の大師と爲る、衆生を一切智道に安立せんが故に。一切世界に於て明淨の日と爲る、一切衆生の無量の善根を照すが故に。等心に一切衆生を觀察して、一切衆生を捨てず、一切善根を出生し長養せしめ、甚深の智慧もて淨爾焰を觀じ、一切不善の業を斷ち、諸の善業を行ぜしめ、衆生を救護して、一切諸佛の世界を顯現し、修行して諸の本事業を嚴淨し、一切衆生を清淨善根に立て、一切諸の善知識に値はしめ、能く壞る者無く、一切衆生を佛の正教に立たしむるが故なり。佛子、我常に法施を以て首と爲し、諸の白淨の法を出生し長養し、一切智の心堅固にして動

【復次に佛子】以下別說、初に甚深の義を釋す。
【觀察】智照の故
隨順とは趣向の故
攝取とは正證の故
【佛子我是の如く】下次に妙德の義を釋す。

ぜず、金剛藏の如く沮壞すべからず、心常に佛力、魔力、善知識力に依止し、心一切諸の結業の山を破し、心能く專ら一切智の圓滿なる、白淨の法、無礙の法門の、一切種智を求めたり。佛子、我是の如きの智慧光明を以て、諸の衆生を淨め、無量の善法もて一切を饒益す。

復次に佛子、我十行を以て法界を觀察し、法界に隨順し、法界を攝取す。何等をか十と爲す。謂ゆる法界の無量を知る、智慧無量の故に。法界の無量無邊を知る、悉く一切諸の如來を見るが故に。佛の法界の無量無邊を知る、一切刹に詣りて一切佛を恭敬し供養するが故に。法界の分齊無きを知る、一切の世界海に於て菩薩行を行ずるが故に。法界の壞すべからざるを知る、如來の沮壞すべからざる圓滿智を究竟するが故に。法界は一なるを知る、如來の妙音は一切衆生聞かざる無きが故に。法界は自然に清淨なるを知る、一切衆生を敎化して、佛の願を滿ずるが故に。法界は遍く衆生に至るを知る、深く普賢菩薩の行に入るが故に。法界の一切莊嚴を知る、普賢菩薩の行は自在に莊嚴するが故に。法界は滅すべからざるを知る、一切智の善根は法界に充滿して諸の衆生をして悉く清淨ならしむるが故に。佛子、我此十行を以て法界を觀察し、善根を增長し、佛の奇特の境界の不可思議なるを知る。佛子、我是の如く正念に思惟して、一萬の陀羅尼を以て衆生の爲に法を說く。謂ゆる一切諸法を攝取する圓滿陀羅尼、一切法を持する圓滿陀羅尼、一切法雲雷震する圓滿陀羅尼、諸佛の起住圓滿陀羅尼、一切佛の名號輪を轉ずる圓滿陀羅尼、三世

諸佛の大願海を分別し演說する圓滿陀羅尼、一切乘海を攝する圓滿陀羅尼、一切衆生の業海を照す燈藏圓滿陀羅尼、一切法現前して旋流勇猛なる圓滿陀羅尼、一切智の勇猛なる圓滿陀羅尼なり。是の如き等の萬の陀羅尼を以て、一切衆生の爲に分別して法を說く。」

大方廣佛華嚴經　卷第五十四

東晉天竺三藏佛馱跋陀羅譯す

入法界品第三十四之十一

「復次に佛子、我或は衆生の爲に聞慧の法を說き、或は衆生の爲に思慧の法を說き、或は衆生の爲に修慧の法を說き、或は一有を說き、或は一切有海を說き、或は一佛海を說き、或は一切佛の名號海を說き、或は一世界を說き、或は一切の世界海を說き、或は授一記を說き、或は授一切記海を說き、或は一佛の眷屬海を說き、或は一切佛の眷屬海を說き、或は一佛の法輪を說き、或は一切佛の法輪界を說き、或は一修多羅を說き、或は一切佛の修多羅海を說き、或は一會を說き、或は一切會海を說き、或は一薩婆若心を說き、或は一切の菩提心海を說き、或は一乘を說き、或は一切乘海を說く。佛子、是の如き等の無量の方便を以て、諸の衆生の爲に、不可說不可說の法を敷演す。佛子、我深く此無壞の法界に入りて、皆悉く如來の正法を究竟じ、無上の法施を以て衆生を攝取し、未來劫を盡して普賢菩薩の所行を修習す。佛子、我已に此甚深妙德自在音聲の法門を成就して、念念の中に於て悉く能く一切法門を長養して法界に充滿せり」

【復次に佛子】以下次に自在音聲の義を釋す。

【佛子是の如き等】以下四に總結。

【爾時、善財】以下得法の久近を辨じて法根の深淺を明す。初に問。
【答へて言はく】以下答、初に離垢光明劫中の供佛修行を明す。

爾時、善財、夜天に白して言さく、「妙なる哉、天神。此の如きの法門は最も甚深と爲す。此法門を得たまひて其已に久如きや。」と。答へて言はく、「佛子、乃し往古の世に、轉世界の微塵に等しき劫を過ぎて劫有り、離垢光明と名け、時に世界有り法界妙德雲と名け、四天下の微塵に等しき香須彌山有りて莊嚴し、蓮華の中に於て、一切佛の妙願の音聲を出せり。一切衆生の淨業の起す所なり。衆寶合成し、形蓮華の如く、淸淨無垢にして、須彌山微塵に等しき衆の妙寶樹有りて周匝圍遶し、須彌山微塵に等しき衆の妙寶香有り、以て莊嚴を爲せり。須彌山微塵に等しき諸の四天下の莊嚴世界有り。一一の四天下に、各不可說不可說の城有り、彼世界の中に四天下有り、莊嚴幢と名け、彼四天下に王の都城有り、普寶華光と名け、彼城外に於て道場有り、法王宮殿光明と名け、其道場の上に須彌山微塵に等しき佛有して、世に出興したまひき。其最初の佛を法海雷音光明王と號けたてまつる。時に轉輪王有り、離垢光明と名け、彼佛所に於て正法を守護し、正法の修多羅海を聞持し、佛の滅度の後に出家學道せり。正法滅せんと欲して、大劫の中に於て惡劫の起る有り、煩惱熾盛にして、衆生は恚怒し、忿毒し、交諍し、諸の比丘衆は功德の利に背き、心放逸を樂ひ、常に王論、賊論、女論、國論、海論、世間の論を好み、是の如き等の種種の諸論を樂へり。時に王比丘は是の如きの念を作さく「如來は無量阿僧祇劫に妙法を修習したまへり、云何が此諸の比丘は而も共に毀滅するや」と。彼王比丘、即ち虛空に昇りて大光明雲を放ち、無量種の色は普く十方一切の世界を照し、一切衆生の煩

惱を除滅して、無量の衆生を無上菩提に立てしめ、復正法をして六萬五千歳に於て興盛なるを得しめたり。時に比丘尼有り法輪化光と名けたり。是れ彼轉輪王の女にして、十萬の比丘尼を以て眷屬と爲せり。父王比丘の光明神變を見て、即ち阿耨多羅三藐三菩提心を發し、一切佛の燈明三昧と甚深の妙德自在音聲の法門とを得たり。得已りて身心柔軟にして、法海雷音光明王佛の神力自在と一切の功德とは悉く現じて前に在りき。佛子、時の轉輪王の彼如來に隨ひて、正法輪を轉じ、法を興隆せし者は豈異人ならんや、今の普賢菩薩摩訶薩是なり。法輪化光比丘尼は、我身是なり。我爾時に於て佛法を守護し、十萬の比丘尼衆を建立して、不退轉の地を得しめ、又一切如來の法門三昧、法輪光明三昧とを攝取せしめ、又復一切法海に入る方便般若波羅蜜を建立せしめたり。

佛子、次に如來有して世に出興したまひ、離垢法山と名け、我値遇したてまつるを得たり。次に如來有して法圓滿光明閻羅と名け、次に如來有して法日妙德雲と名け、次に如來有して法海分別妙音聲王と名け、次に如來有して法日圓滿燈と名け、次に如來有して法化幢雲と名け、次に如來有して法焔山幢王と名け、次に如來有して甚深法妙德月と名け、次に如來有して法智普光明藏と名け、次に如來有して普智境界覺悟衆生と名け、次に如來有して妙德山王と名け、次に如來有して普門普現須彌山と名け、次に如來有して一切法精進幢と名け、次に如來有して寶華妙德雲と名け、次に如來有して寂靜甚深光明閻羅と名け、次に如來有して法焔大慈光明月と名け、次に如來有して光焔明德海と名け、次に

如來有して智慧日普照一切と名け、次に如來有して圓滿普智と名け、次に如來有して無上智覺明王と名け、次に如來有して功德焰華燈と名け、次に如來有して智慧師子幢王と名け、次に如來有して普日光明王と名け、次に如來有して須彌相莊嚴と名け、次に如來有して勇猛日普光明と名け、次に如來有して法網覺妙德月と名け、次に如來有して法蓮華敷善德妙音と名け、次に如來有して相日普光明と名け、次に如來有して普光妙德王法音聲と名け、次に如來有して無畏妙德那羅延師子と名け、次に如來有して普智健幢と名け、次に如來有して敷法蓮華身と名け、次に如來有して功德華妙法海と名け、次に如來有して道場覺妙德月と名け、次に如來有して法炬妙德月と名け、次に如來有して普照光明周羅と名け、次に如來有して法幢燈と名け、次に如來有して妙德海幢雲と名け、次に如來有して名稱山妙德雲と名け、次に如來有して栴檀妙德月と名け、次に如來有して明淨普妙德華と名け、次に如來有して普照衆生光明王と名け、次に如來有して鉢頭摩華妙功德藏と名け、次に如來有して香焰光明王と名け、次に如來有して鉢頭摩因と名け、次に如來有して明淨相山と名け、次に如來有して普稱功德幢と名け、次に如來有して普門光明須彌山と名け、次に如來有して妙德法城光明と名け、次に如來有して明淨功德山と名け、次に如來有して勝相妙德と名け、次に如來有して法力勇猛幢と名け、次に如來有して法輪光明妙音と名け、次に如來有して功德光焰樓閣智光と名け、次に如來有して無上妙法輪月と名け、次に如來有して明淨法鉢頭摩覺幢と名け、次に如來有して寶鉢頭摩光藏と名け、次

に如來有して寶尸棄雲燈と名け、次に如來有して智覺華と名け、次に如來有して種種焰妙德須彌山藏と名け、次に如來有して圓滿焰德王と名け、次に如來有して功德雲莊嚴光明と名け、次に如來有して法山雲幢と名け、次に如來有して普明淨功德山と名け、次に如來有して法日雲燈王と名け、次に如來有して法雲名聲自在王と名け、次に如來有して法圓滿雲と名け、次に如來有して善覺明淨智幢と名け、次に如來有して法圓滿善覺妙德月と名け、次に如來有して金色山賢法と名け、次に如來有して明淨賢妙德須彌山と名け、次に如來有して普智慧雲妙聲と名け、次に如來有して法力妙德樓閣と名け、次に如來有して香焰妙德王と名け、次に如來有して金色摩尼山妙聲と名け、次に如來有して白毫藏一切法圓滿光明と名け、次に如來有して明淨法輪と名け、次に如來有して無上清淨尸羅山と名け、次に如來有して普精進炬光照雲と名け、次に如來有して廣三昧海天冠光明と名け、次に如來有して寶焰妙德王と名け、次に如來有して法炬寶帳妙聲と名け、次に如來有して法雲空光明師子と名け、次に如來有して、相好莊嚴幢月と名け、次に如來有して光明焰山電雲と名け、次に如來有して無礙虛空法光と名け、次に如來有して樂智華敷と名け、次に如來有して世間主光明妙聲と名け、次に如來有して法三昧光明妙音と名け、次に如來有して法音眞實藏と名け、次に如來有して法光明焰妙聲海と名け、次に如來有して普照三世相幢と名け、次に如來有して法圓滿山光明と名け、次に如來有して法界師子光明と名け、次に如來有して法界師子焰と名け、次に如來有して明淨妙德須彌

【復次に佛子】以下佛、刹塵數劫中に於ける供佛修行を明す。

【善男子此佛の衆中】以下第七遠行地の善知識を明す

山と名け、次に如來有して一切三昧海師子と名け、次に如來有して普智光明燈と名けたり。佛子、離垢光明劫の中に於て、是の如き等の須彌山微塵に等しき如來世に出興したまへり。其最後の佛を法界城明淨智燈と名けたてまつる。彼諸の如來を我悉く恭敬し供養して、法を聞きて受持し、出家學道して佛法を守護し、彼諸佛の所に於て種種の方便もて、此甚深の妙德自在音聲の法門に入り、種種の方便を以て衆生海を化せり。

復次に佛子、復佛刹微塵に等しき劫の中に諸佛有して世に出でたまひ、我亦皆悉く恭敬し供養せり。是故に佛子、一切衆生は長く生死に纏ぬるも、唯我のみ獨り覺めたり。復能く一切衆生を覺悟し、心の城を守護して三界の城を離れ、一切智無上法の城に入らしめん。

善男子、我唯此甚深の妙德自在音聲の法門を成就して、衆生の兩舌の口過を除滅し、淨實に語らしむるのみ。諸の大菩薩は、衆生の諸の語言道を決了し、一念の中に於て一切衆生の心を覺悟し、深く衆生の語言音海に入り、善く衆生の施設する語法を知り、一切法海を分別し了知して、深く入りて一切諸法の陀羅尼海を攝取して善巧方便もて衆生の爲に一切の法雲を出し、究竟じて一切衆生を度脫し、衆生を攝取して無上業を立てしめ、淨智に隨順して業藏を分別し、能く師子吼して、一切に法施し、諸法地圓滿陀羅尼を得しむ。我當に云何が彼功德行を能く知り、能く說くべき。善男子、此佛の衆中に一夜天有り、開敷樹華と名く、汝彼に詣りて問へ、云何が菩薩は一切智を學び、衆生を薩婆若に安立せ

【佛子深き法門は】以下前法を頌す、十四半中、初二は總じて境智法を頌し、次十一頌は離垢光劫中の供佛修行を頌し、後一頌半は轉刹塵劫中修行して此法を淨治するを結す。

しむるや」と。
爾時、妙徳守護諸城夜天、重ねて此法門の義を明さんと欲して、偈を以て頌して曰はく

佛子、深き法門は、虚空如如の性にして
三世の佛の、無量の諸の法界を分別す
無量の門、不思議の諸法を出生して
無礙の智を長養し、三世の法を了達す
轉刹塵劫を過ぎて、劫あり離垢光と名け
世界は妙徳雲、城は寶華光と名けき
彼劫に次第に、須彌の塵に等しき佛有せり
初の佛は法海、雷音光明王と號け
後の佛は法界城、明淨智慧燈なり
我皆悉く供養して、法を聞きて大いに歡喜せり
法海雷音、光明王如來を見る
衆の妙相に莊嚴せられたること、猶し須彌山の如し
佛を見て即ち發心し、專ら一切智を求め
心の大なること虚空の如く、其性は如如に同じ
三世に充滿する、諸佛菩薩の衆は

【爾時、善財】以下善財の聞繹得益を明す。

大悲の心もて普く、一切刹の衆生を覆ひ
清淨の妙法身は、諸の佛刹に充滿し
其所應化に隨ひ、悉く爲に身を顯現し
我初發心の時に、一切刹を震動して
諸の群生を教化し、悉く大いに歡喜せしめたり
次に第二佛に値ひたてまつりて、法を聞きて供養し
卽時に十刹海塵の佛を、覩見するを得たり
是の如く次第に、須彌の塵に等しき佛に値ひたてまつり
彼一切諸の如來を、恭敬し供養し
法を聞きて悉く受持し、此法門を逮得し
廣く一切衆を度し、究竟じて彼岸に到らしめたり
轉刹の塵に等しき劫に、諸佛世に興出したまひ
我亦悉く彼に詣りて、恭敬し供養し
法を聞きて悉く受持し、此法門を淸淨にせり

爾時、善財、此甚深の妙德自在音聲の法門を得て、菩薩の無量無邊の諸の三昧海に入り、無量無邊の陀羅尼海を出生して、菩薩の神通諸明の光曜を得、諸辯海に入りて、一切の甚深法海を長養し、彼妙德守護諸城夜天を讚歎せんと欲して、偈を以て頌して曰はく、

【智慧の海成滿して】以下偈もて夜天を讚ず、十四頌。中初四は悲智甚深、次四は度生廣大、次二は離障攝德、次三は時衆の除安を見る、後一は川佛果に同ず。

智慧の海成滿して、永く生死の海を度り
智慧藏を長養して、普く十方を照す
內外の法は、皆悉く虛空の如しと了達して
無礙の淸淨の慧は、三世を究竟す
念念に能く、無量にして邊有る無き
一切諸の境界を分別して、心に著する所無し
無量の大悲心もて、衆生海を度脫し
明淨の智慧の眼もて、衆生の無性なるを了る
深く佛の法海に入りて、其源底を窮盡し
種種の巧方便もて、諸の群生を化度す
普く一切法に於て、其眞性を了達し
薩婆若を修習して、衆をして悉く淸淨ならしむ
天は是れ調御師にして、一切智を究盡し
諸の法界に充滿して、法を說きて衆生を化したまふ
盧舍那の願に順ひて、無礙に衆生を度し
至處の道に安住して、普く十方の佛を見る
天の心は甚深にして妙なり、煩惱の熱を除滅して

清淨なること虛空の如く、垢を離れて染著無し
三世の、佛刹の　諸の如來と
一切の菩薩衆と、一切群生の類とを攝取す
一念に分別して、刹那及び羅婆
晝夜、月、半月、乃至無量劫を知り
十方の　諸の群生、有色及び無色
有想無想等の、此に死し彼に生るゝを知る
一切衆の、虛妄顚倒の想を除滅し
善く語言の法を知り、菩提の道を顯現す
盧舍那の願を出して、一切の佛法海にいり
無礙の法身の心は、應に隨ひて衆生に現ず

時に善財童子、偈を以て彼夜天を讚歎し已りて、頭面に足を禮し、遶ること無數匝し敬心し辭退せり。

爾時、善財童子、正念に甚深の妙德自在音聲の法門を思惟し增廣して、開敷樹華夜天の所に往詣せり。彼夜天を見るに衆寶香樹樓閣の內に在して、寶樹の芽の師子の法座に處し、百萬の諸天眷屬に圍遶せられたまへり。爾時、善財、頭面に彼夜天の足を敬禮して、遶ること無數匝し恭敬し合掌して一面に於て住し、白して言さく、「天神、我已に先に阿耨多羅

【答へて言はく】以下已が法界を示す中初に法の義を顯す。

【我已に】次に法の名を立つ。【歡喜知足光明の法門】放逸の衆生を化して知足行を修せしめ、次に十波羅蜜を授與して

三藐三菩提心を發せり。云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修し、薩婆若に趣くや。唯願くば天神、我爲に解說したまへ。」答へて言はく、「善男子、我日沒に於て優鉢羅、鉢曇摩華皆悉く還り合す。若し諸の人衆の園觀に遊ぶ者は、縱逸を廢捨して其家に歸る時、爲に光明を放ちて、險しき徑に在る者には照して平かなる路を示し、彼をして專ら一切智の道を求めしめ、若し山巖、深水、曠野に於て、是の如き等の種種の難處に在らば、悉く光を放ちて照し、衆苦を免れ安隱の樂を得しむ。又善男子、若し諸の衆生五欲に放逸なれば、其が爲に生病死の苦を顯現して、悉く覩見して放逸を捨離し、善根を修習せしめ、慳貪の者の爲には布施を讚歎し、若し戒を犯す者には淨戒を安立し、瞋恚の者の爲には、大慈を讚歎して忍辱に安立し、若し懈怠の者には敎へて菩薩の精進を修行せしめ、若し亂心の者には敎へて諸禪の三昧を修習せしめ、若し愚癡の者には其をして深く般若波羅蜜に入らしめ、小法を樂ふ者には敎ふるに大乘を以てし、三界に著する者には菩薩の願滿無著の諸波羅蜜に住せしめ。若し諸の衆生の功德羸弱にして衆の結業に逼迫せらるるものの爲には、菩薩の力波羅蜜に住せしめ、無智に順ふ者には菩薩の智波羅蜜に住し癡闇を捨離せしめん。善男子、我已に無量の歡喜知足光明の法門を成就せり。」

善財白して言さく、「天神、此法門は境界云何。」答へて言はく、「善男子、如來の方便光明は衆生を攝取したまふ。佛子、若し衆生有りて快樂を受けん者は、悉く佛力、諸の光明力を蒙らん。如來の敎と佛の威神力とに隨ひ、佛道に隨順して佛の正法を聞き、佛の善

十障を破せしめ歡喜行を釋成する故【善財白して言さく】三に問を擧げて業用を明す。【境界】業用の分齊を以ての故に名く。【答へて言はく】答中先づ佛果力用益生を擧げて己が所學を彰はす。【佛子我此法門】以下次に菩薩の因行業用を知るを明し、己が同成を顯はす。

根に入り、如來の圓滿明淨の智日と如來の性淨業力とは、普く一切を照し、悉く是の如きの功德力を蒙るが故に、普く衆生をして諸の快樂を受けしむ。佛子、我此法門に入る時、正念に思惟して、深く盧舍那如來、應供、等正覺の過去に行じたまひし所の菩薩の行海に入れり。善男子、我菩薩本菩薩地の心を發せし時、諸の衆生の我我所に著し、無明に覆蔽せられて諸の邪見に入り、貪愛に隨順して欲恚に縛せられ、心亂れて顚倒し、慳嫉に纏はれ、貧窮に逼切せられ、生死の中に於て衆の苦惱を受け、諸佛に値ひたてまつらざるを見んに、是の如きを見已りて、大悲の心を發して衆生を攝取し、諸の苦患を除きて普く之を饒益し、一切染著する無き心を得しめ、諸の施物に於て果報を求めず、一切の因緣と諸法の實相とを分別し了知して、大慈大悲の圓滿の法蓋を具足し成就して、普く衆生を覆ひ、知足の法を以て智慧の力を養ひ、一切諸の煩惱の山を摧散して、衆生を安樂ならしめ、所應化に隨ひて甘露の法を雨らし、衆法の利を以て等しく衆生に施し、十力の果と、無上の快樂とを得しめ、菩薩の通力自在を成就して法界に充滿し、悉く一切諸の衆生の前に現じ、一切の物を雨らして悉く歡喜して其意を充足せしめ、衆生を救護し、生死の苦を滅して恩報を求めず、一切衆生の心寶を嚴淨し、悉く一切諸佛の善根に同じからしめ、薩婆若を增長し、一切衆生を教化し成熟し、無上の淨法を以て諸の佛刹を淨め、念念の中に於て一切法界に滿ち、明淨の智を以て三世を分別して虛空に充滿し、一切時に於て淨法輪を轉じて衆生を教化し、諸の衆生をして一切智を生ぜし

め、諸持を清淨にし、一切諸佛の菩提を覺悟し、一切の未來の諸劫を分別して、一切劫に於て菩薩行を行じ、心に二行ること無く、悉く能く遍く一切世界に遊び、其身に一切刹海を容受し、悉く能く一切世界を攝取し、一切世界の種種の形色、種種の莊嚴、種種の衣住を分別し解說し、或は不淨にして淨あり、或は淨にして不淨あり、或は純清淨なるあり、或は純垢穢なるあり、或は廣或は狹なるあり、或は大或は小なるあり、或は覆けるあり、或は仰げるあり、是の如き等の諸の世界海の中に、菩薩行を生じて、菩薩行を證し、念念の中に於て菩薩の諸の自在行を出生し、念念の中に於て衆生の爲に三世諸佛の清淨法身を現じたまひしを知る。佛子、盧舍那佛は、過去世に於て菩薩行を行じたまひし時、諸の群生を見るに、智の功德無くして愚癡に覆はれ、我我所に著して無明に曀障せられ、正しく思惟せずして諸の邪見に入り、因果を識らずして煩惱の業に順ひ、聖道を修して無作の法を得ず、常に生死の險道に於て流轉し、種種の苦を受けたれば、大悲を發起して、諸の衆生をして菩薩の無量の諸行を出生し、一切諸の波羅蜜を修習し、堅固なる勝妙の善根に安立せしめ、衆苦を除滅して、功德の藏を長じ、因果を了知して業報に違はず、法の眞實を知りて、悉く分別して衆生の欲樂と及び一切刹とを知り、一切の佛法を守護し受持して斷絕せざらしめ、不善の法を滅して薩婆若を滿ぜしめたまへり。佛子、是の如き等の無量の法施を以て、衆生を攝取し、一向に薩婆若の法を求め、菩薩の諸波羅蜜を修行し、賢聖の利を具へ、薩婆若を長じ、善根海を滿じ、如來の無量自在

【善財白して言さく】四に法根の深淺厚薄この義を辨ず。初めに深くして辨じ難きを歎ず。先づ長行。この中難しとは聞慧の能く知るに非ず。思慧の能く信ずるに非ず、修慧の能く入るに非ず、上の心行處滅し、言語の路絶え、二乗智の能く證得するに非ず。

【爾時夜天】次に偈頌、二十一頌半中、初一は境の甚深なることを擧げ、次四は知る能はざる人を明し、次の十四頌半は能智の人を示し、次二は勸學許說。

を顯現せしむ。是の如き等の種種の方便を以て衆生を攝取して、如來の無量の功德を顯現し、衆生を菩薩諸攝の智慧に安立せしむ。』

善財白して言さく、『天神、阿耨多羅三藐三菩提心を發したまひしより、其已に久如しきや。』答へて言はく、『佛子、此事知り難く信じ難く入り難く說き難く得難し。一切の諸天聲聞、緣覺の知る能はざる所なり。佛の神力をば除く、善知識に依りて善根を成滿し、正直心を淨めて、諂曲を遠離し、諸の染汚を滅して、普照智慧の光明を逮得し、衆生を哀愍し、諸魔を降伏し、煩惱の樹を拔きて、必ず一切種智を成就せんと欲し、生死の憂悲惱海を除滅して如來の樂を得、佛の功德精進の海に入りて佛地に安住し、如來の一切智力を滿足して十力を究竟する、是の如きの人は乃ち能く信解し能く知り能く入り能く說き能く得ん。何を以ての故に。此は佛の境界にして一切衆生及び諸の菩薩の知る能はざる所なればなり。我當に佛の神力を承けて、衆生を調伏せんが爲に、直心清淨に、廣く善根を修して甚深の心を得、此法を樂ひ聞かん、是の如き等の爲に其所應に隨ひて分別し解說せん。』

爾時夜天、重ねて此義を明さんと欲して、三世の諸佛の境界を觀察し、偈を以て頌して曰はく、

佛子、此法門は、甚深なる佛の境界にして
不思の刹塵劫に、之を說くとも窮盡すること無し

貪欲、瞋恚、癡、高慢の衆生等は
皆悉く、最勝たる寂靜の法を知る能はず
慳嫉にして心諂曲、煩惱業に覆はるる者は
一切、甚深の佛の境界を知る能はず
諸の陰入界に著し、及び吾我の見を起し
心の想見顚倒するものは、佛の境法を知らず
清淨にして虛妄を離れたる、如來の深き境界をば
生死に依住する者は、皆悉く知る能はず
如來の家に出生して、諸佛常に守護したまひ
佛の法藏を奉持するものは、慧眼の境界たり
善知識に親近して、白淨の法を滿足し
諸佛の力を究竟するものは、此法を聞きて歡喜す
心淨くして虛妄を離れたること、猶し虛空の性の如く
慧燈もて癡闇を除きたるものは、是れ彼の境界たり
大慈悲心を以て、普く諸の衆生を覆ひ
等心に一切を觀ずるは、是れ彼の境界たり
其心大いに歡喜し、衆生の類を等觀して

一切を捨離するは、離垢の境界なり
心を淨くして、諸の惡を離れ、乃至微罪をも畏れて
諸佛の法に隨順するは、離垢の境界なり
忍辱の法に安住して、其心動ずべからず
寶の如く業に違はざるは、無盡心の境界なり
勇猛に勤めて精進し、不退心に安住して
薩婆若を究竟するは、調伏の境界なり
寂定心に入りて、煩惱の熱を除滅し
深く智慧海に入るは、寂靜起の境界なり
群生の類と、諸法の眞實相と
深法の境界とを了達するは、是れ慧燈の法門なり
衆生の性を覺悟して、諸の有海に著せず
普く一切の心を照すは、是れ導師の法門なり
悉く三世佛の清淨の願性より生じ
普く一切刹に於て、未來劫を窮盡し
菩薩の行を修習するは、是れ普賢の法門なり
諸の方便海に入りて、遍く諸の刹海を觀じ

【佛子乃し往古の世】以下二に正しく發心の久近を說く。先に長行、初に過去、大王の起行を明す、先づ總じて時處等を擧ぐ。

【彼世界海の中に】二に別して本處を擧げて輪王の興化を明す。

無礙の深智慧もて、悉く刹の成敗を知る
一一の塵の中に、諸佛道場に坐して
成佛して衆生を化したまふを見たてまつるは、無礙眼の法門なり
善財我所に至り、善知識に親近して
此甚深の法を聞き、精進し勤めて修習せよ
此れ盧舍那の境にして、甚深にして思議し難し
我佛の神力を承けて、汝が爲に分別して說かん

「佛子、乃し往古の世、世界海の微塵に等しき劫を過ぎて、一切世界海有り、明淨山と名けき。彼に如來有して世に出興したまひ、智慧法界山諸方寂靜普照王如來、應供、等正覺と號けたてまつりき。彼佛の菩薩たりし時に、彼世界海を淨めたまへり。彼世界海の中に、佛刹の微塵に等しき世界性有り、彼一一の世界性の中に、世界の微塵に等しき佛有して世に出興したまひ、一一の如來、世界の微塵に等しき修多羅を說き、一一の修多羅の中に、佛刹の微塵に等しき諸の菩薩に記を授け、如來の種種の神力を顯現し、無量の方便、種種の諸乘もて衆生を教化したまひき。佛子、彼世界海の中に一世界性有り、普門莊嚴と名け、彼世界性の中に一世界有り、名けて一切寶色妙德普照と曰ひ、一切の寶華海を以て莊嚴と爲し、衆寶を體と爲し、狀は天城の如く、淸淨に嚴飾して、普く一切諸佛の道場を照し、諸佛の變化せる光明を顯現せり。彼世界の中に須彌山の微塵に等しき四天下有

【彼大劫の中】三に惡劫の起ることとあるを明す。

【彼時の】以下四に苦の人、王に於て上訴して救を求め、大悲の境をなすを明す。

り、彼四天下の中に一四天下有り、寶山幢と名く、彼四天下に閻浮提有り、縱廣十萬由旬なり。彼閻浮提の内に十萬の大城有り、彼諸城の中に一王都有り、堅固法莊嚴雲燈と名け、一萬の城有りて周匝圍遶し、人壽は萬歳なりき。時に大王有り、一切法師子吼圓滿妙音と名け、五百の大臣、六萬の婇女有り、七百の王子は端正にして勇健なり。爾時、彼王の威徳は、普く一閻浮提を被ひて怨敵有る無し。彼大劫の中に惡劫の起る有りて五濁熾然なりき。爾時、人民は十惡業を行ひて、十善を遠離し、死して惡道に入り、壽命は短促にして形色は鄙陋、貧窮下賤にして苦多く樂少く、更相諍訟し、互に相誹毀して、他の眷屬を離れ、深く邪見に入り、諸の貪著を以て非法を行ぜしが故に、風雨時ならず、卉木叢林、百穀苗稼、皆悉く枯槁せり。彼時の人民は饑饉に病み痩せて、悉く王都に詣りて高聲に大呼せり。時に諸の人衆は無量無數に王城を圍遶して、或は兩手を擧げ、或は復合掌し、或は天に號び地を扣き、或は身を擧げて自ら撲ち、或は右膝を地に著け、或は弊衣を著けて眼に光色無く、悲しき聲もて大いに呼び、咸大王に言さく「我等は今者大いに苦しむ、大いに苦しむ、飢渇、寒凍、疾病、危困して、歸依する所無く、救濟する者無く、牢獄に在るが如く、種種の苦に逼られ、轉死路に趣く」と。是の如き等の無量の楚毒の悲聲を作して上に訴へ、自の全濟と、安隱快樂とを求むらく「大王は則ち是れ衆生の寶藏なり、清涼の池なり、善正の治法なり、大智大乘なり、大寶州と爲りて眞實に利益し、能く衆生に天人の樂を與へたまへ」と。

【時に彼大王等】互に境に對して心を起し大悲の行を發ずるを明す。

時に彼大王、此悲苦楚毒の音聲を聞きて、即ち百萬阿僧祇の大悲の法門を得、一心に思惟して、即ち十の大悲の語を發せり。何等をか十と爲す。謂ゆる嗚呼痛しい哉、一切衆生は底無き生死の深坑に墜ちて、歸依する所無し、我當に彼が爲に歸依者と作りて、悉く如來の地を逮得せしむべし。哀なる哉、衆生は煩惱の爲に亂されて救濟有る無し、我當に彼が爲に救護者と作りて、悉く一切善業を安立せしむべし。哀なる哉、衆生は生老病死して、救護有ること無し、我當に彼が爲に救護者と作りて、一切の身心の苦痛を除滅せしむべし。哀なる哉、衆生は諸の恐怖有りて救護有る無し、我當に彼が爲に救護者と作りて一切智安隱の處に住せしむべし。哀なる哉、衆生は身見、疑の覆翳する所と爲る、我當に彼が爲に明淨の燈と作りて、普く一切を照し、明淨の智を現ぜしむべし。哀なる哉、衆生は愚癡の爲に覆はる、我當に彼が爲に大明炬と作りて一切智正法の城を現ずべし。哀なる哉、衆生は諸の慳嫉、諂曲、幻僞の爲に其心を濁亂せり、我當に彼をして悉く無上清淨の法身を得しむべし。哀なる哉、衆生は生死の長流の漂溺する所と爲る、我當に彼をして生死の海を度り、佛の彼岸に到らしむべし。哀なる哉、衆生は生れてより盲瞽なり、我當に彼をして眞實の義を見しめ、一切の佛に同ぜしむべし。哀なる哉、衆生は根調伏せず、我當に彼をして諸根を調伏し、障礙を除滅し、一切智を得しむべし」と。時に彼大王、是の如き等の十の大悲語を發して、鼓を撃ちて一切衆生に宣令すらく「安隱にして怖るる勿れ、汝の須むる所に隨ひて、我皆資給すべし」と。即時に閻浮提の内の大小の

諸城、都邑、聚落に班下して悉く庫藏を開くに、金銀、珍寶、衣服、肴膳、香華、瓔珞、床座、被褥、宮殿、宅舍、諸の妙寶幢、夜光の寶幢、摩尼の寶幢、醫師湯藥あり、種種の諸器に衆の雜寶を盛り、諸の金剛の器に衆の妙香を盛り、種種の香器に諸の衣服を盛り、種種の車乘、幡綵、幢蓋あり。又復鼓を撃ちて宣令すらく、「天下の一切の諸城、都邑、聚落は、今汝等に國土、城邑、聚落、妻子、頭目、齒舌、心肝、血肉、腸胃、手足、一切の肢節を施さん」と。時に城の東門外に大會の處有り、名けて明淨摩尼妙德と曰へり。其地は平正にして、廣博清淨、諸の雜穢無く、衆寶を地と爲し、雜寶の華を散じ、熏ずるに衆香を以てし、一切の香雲は虛空に充滿し、寶樹圍遶し、無量の華網及び諸の寶網は其上に羅覆し、自然に無量億那由他の娛樂の音聲を演出せり。是の如き等の無量の珍妙有りて之を莊嚴せり、皆是れ菩薩の淨業の果報なり。彼會中に於て王の住する所の處は、十寶を地と爲し、十寶の欄楯、十種の寶樹ありて周匝圍遶し、形色は金剛のごとくにして沮壞すべからず、衆寶もて莊嚴し、諸の寶幡を懸け、白淨の寶網、金鈴の寶網、衆華の寶網、摩尼の寶網、雜衣の寶網、其上に羅覆し、熏ずるに名香を以てし、自然に無量の微妙の歌頌の音聲を演出せり。時に彼大王師子の座に處して、端嚴殊妙にして大人の相を具し、肢節周備し、那羅延身も沮壞すべからず。王姓の中に生れ、正を以て國を治め、財と法とに於て、悉く自在を得、功德無量にして命に違ふ者無く、衆妙の寶蓋を以て其上に覆ひ、其蓋は常に無量の光明を出して、閻浮金色なり、覆ふに淨妙の摩尼の寶網を以てし、金寶の諸鈴は

和雅の音を出して善行を宣揚せり。爾時、閻浮提内の無量阿僧祇の衆生は、悉く來りて歸命し、大王を讃じて言はく、「王は是れ智人なり、天下の第一なり、功徳は須彌のごとく、功徳の明淨なること猶し滿月の如し、菩薩の心を得て衆生を等觀し、普く一切に施したまふ」と。時に王、見已りて歡喜無量にして、彼大衆に於て大悲の心、善知識の心を發し、求むる所の者に隨ひて悉く充足せしめ、之を攝取せり。時に王即ち無量の快樂を得、釋提桓因より乃し化自在天王に至るまで、無量百億那由他劫に受くる諸の快樂も及ぶ能はざる所なり。他化自在天王の不思議劫に受くる諸の快樂も、亦及ばざる所なり。大梵天王の不可思議劫に梵住の樂に住するも亦及ばざる所なり。乃至淨居天の無分齊の劫に寂靜の樂に住するも亦及ばざる所なり。復次に善男子、譬へば人有り、仁慈至孝にして世事の難に遭ひ、父母に違離し、年歳を經歷して後忽ち遇會し、親の顏を瞻奉し、忻慰踊悅して自ら勝ふる能はざるが如し。時に彼大王、來り求むる者を見て心大いに歡喜するも亦復是の如く、信心堅固にして菩提を長養す。何を以ての故に、此菩薩は專ら一切智を求め、一切衆生を饒益安樂にして、大願を成滿し、不善の法を遠ざけ、諸の善を修行し、衆生を救護して薩婆若の門を開き、一切智を攝して衆生の願を滿し、一切佛の諸の功徳海に入り、一切の煩惱、魔、業障の山を壞り、一切諸の如來の敎に隨順して深智の流に入り、正道に違はずして諸法の流を出し、大願を成滿し、大人の法に住し、普門善根の藏を滿足し、一切の惡心を離れて染する所無く、諸法に了達する猶虛空の如し。

【時に彼會中に】以下第二に本生身同じく勝行を修するを明す。

復次に佛子、時に彼大王、諸の衆生を見て、一子の想、父母の想、福田の想、恩を報い難きの想、師の想、佛の想を發し、大慈悲心もて悉く普く之を覆ひ、其須むる所に隨ひて、衣服、飲食、華香、末香、塗香、鬘蓋、幢幡、諸の莊嚴具、床座、被褥、舍宅、宮殿、園觀、浴池、車乘輦輿、象馬、衆寶の住する所の宮殿、及び其眷屬內の諸の庫藏、城邑、聚落、是の如きの一切を悉く衆生に施し、普く充足せしめたり。

時に彼會中に一童女有り、寶光明と名け、端正殊妙にして、顏容倫無く、身は眞金の如く、目髮は金色にして、口に妙音を演べ、身に妙香を出し、衆寶もて莊嚴し、常に慚愧を懷ひ、正念にして亂るること無く、威儀庠序として諸の師長に於て恭敬し尊重し、諸根寂靜にして念慧現前し、聞く所の諸法は能く持し能く解し、宿世に無量の善根を長養し、諸の妙善の法は其身を潤澤し、善知識に近き、好んで大乘を樂ひ、心虛空の如くにして自ら安んじ彼を安んじ、常に樂ひて佛を見、薩婆若を求めたり。六十の童女と倶に、王を去る遠からずして、一心に恭敬し合掌して住し、是の如きの念を作さく、「我善利を得て善知識を見、善知識に遇へり、彼王の所に於て大師の想、善知識の想、慈悲の人の想を起さん」と。此念を生ぜし時、歡喜無量にして、莊嚴具を脫ぎ、彼王の前に置き、是の如きの願を發すらく、「今此大王は無量無邊の衆生を安隱にしたまへり、願くば我も來世に亦復是の如くならん。大王の智慧、大王の正道、大王の所乘、大王の相好、大王の財寶は能く壞る者無し、願くば我も來世に亦復是の如くならん。所生の處に隨ひて、我も亦隨ひて生

【時に彼女人】以下女人偈を說いて王德を讃ず、五十二頌中初二十五頌は總じて大王出世の利益を顯す。
【大王未だ等】初六は大王未だ興らざる時の損を明す次二偈は王興の益次十頌は王世に興り損を轉じて德を成ずるを顯し、次七頌大王の聲教利益を明す。

ぜん」と。時に彼大王、此女に告げて言はく、「我今悉く內外の珍とする所のものを捨てたり、恣に汝之を取れ」と。

時に彼女人、倍增歡喜し、偈を以て頌して曰はく、

大王未だ世に興りたまはざるときは、堅固莊嚴の都も
一切樂むべからざること、猶し餓鬼の處の如し
衆生相殘害し、竊盜し縱に婬佚し
兩舌不實の語、無義麤惡の言あり
他の財物を貪利し、瞋恚害心を懷き
邪見にして不善を行じ、命終して惡道に墮せり
是の如きの衆生等、愚癡に覆蔽せられ
種種に諸の惡を行じ、天旱にして澤を降さず
時雨無きを以ての故に、百穀悉く生ぜず
草木皆枯槁し、泉流も亦乾渴せり
大王未だ世に興りたまはざるとき、一切諸の河池
皆悉く乾きて枯凋せるは、猶し大曠野の如し
大王初めて生れし時、天は慶重の雲を起し
雨を降らして普く流澤し、河池悉く盈溢せり

一切惡を除滅し、諸の恐怖を遠離し
人民は皆歡喜せり、大王世に生れしが故なり
往昔は諸の群生、各各相殘害して
人の血肉を飲食したるも、今は悉く慈心を修む
百穀昔は生ぜず、卉木皆枯燥し
飢渴に逼迫せられ、種種に苦惱を受けたるも
大王既に世に興りたまひて、粳米自然に生じ
樹は妙衣服を出せり、王は世の歸する所なるが故に
昔日は微利を競ひ、强弱相陵奪したるも
今は種種に莊嚴して、釋難陀の園の如し
昔人は貪欲重く、種種なる放逸の行あり
他の妻色を浸犯し、而して共に相危害せり
今日は諸の人民、衆寶もて妙に莊嚴し
貞潔にして邪婬無きこと、猶し兜率天の如し
昔日は諸の衆生、妄言非法語をなし
口に無義の言を縱にし、諂曲にして人意を取れり
今日は群生の類、諸の惡語を遠離し

愛眼もて衆生を視、口に柔和の音を發す
昔日は諸の衆生、種種に邪見を行じ
合掌し恭敬して、牛羊犬豕の類を禮したり
今は王の正法を聞きて、諸の邪見を遠離し
善く苦樂の法は、悉く因緣より起ると知る
大王は妙音を演べたまひ、愛樂せざる者無く
梵、釋等の音聲も、皆悉く及ぶ能はず
大王の衆の寶蓋は、虛空の中に懸處し
覆ふに諸の寶網を以てし、普く妙香を出して熏ぜり
金鈴は自然に、如來の和雅の音を出して
甚深の法を宣揚し、衆の煩惱を除滅す
次に復廣く、十方諸佛の刹
一切諸劫の中の、如來及び眷屬を演說す
又復次第に、過去の十方佛
一切諸劫の中の、如來及び眷屬を說く
又微妙の音を出して、天下に充滿し
梵王と諸の群生は、悉く業の果報を聞く

【父王を浄光】以下二十七頌は別して、本生の利益を明す、中初四頌は前王の世末を、次八頌は王興るの先相を明し、次三頌は父王池に遊ぶ、次五頌は童子出生の益を、後七は王の利益を出すを明す。

衆生音を聞き已りて、自ら諸の業藏を知り
惡を離れ衆善を修め、專ら無上道を求め
父王を淨光と名け、母を蓮華光と曰ひ
父は五濁世に於て、正法もて天下を治めたり
五百の蓮華の池は、寶樹悉く圍遶し
底には布くに金沙を以てし、寶華悉く敷き茂れり
彼池の岸上に於て、諸の妙法堂有り
衆寶を欄楯と爲し、種種の寶もて莊嚴せり
末世に惡法起り、積年雨降らず
池流皆枯渇して、卉木悉く焦然す
七日にして王當に生るべし、先つ靈瑞の相を降し
諸人見て歡喜すらく「救護のもの世間に出でたまふ」と
彼時中夜に於て、大地六種に動き
自然に妙光を演べ、猶し明淨の日の如し
浴池五百有り、功德の水充滿し
一切諸の寶樹は、本の如く悉く榮茂し
河流、諸の泉源は、一切皆盈滿し

靈澤普く霑接して、閻浮提を沾洽し
樹木、諸の叢林、雜卉、衆の藥草
百穀苗稼等は、生長して普く滋え茂り
巖嶇たる諸の高山と、幽邃なる深き險谷と
普及一切の地とは、自然に悉く平正となり
山陵の諸の卉木、沙礫雜穢等は
悉く一念の中に於て、變じて衆の寶玉と成れり
人此奇特を見て、歡喜して言を發すらく
「快い哉大善利、我清涼の池を得たり」と
時に彼淨光王は、内眷屬と倶に
一切の大臣等と、歡喜して園觀に遊べり
五百の浴池の中に、池有り歡喜と名く
池上の妙法堂に、王と眷屬と遊止せり
時に王、夫人に語らく、「我願悉く成滿して
國土還つて豐樂に、人民普く安隱なり」と
時の彼浴池の中に、千葉の寶蓮生じ
普く清淨の光を放ち、明かに須彌頂を曜す

明淨の金剛の莖あり、衆寶を華葉と爲し
閻浮檀金を臺とし、諸の妙香を鬚と爲す
彼華華の中に於て、一童子を出生せり
相好莊嚴の身は、諸天悉く敬禮す
王見て大いに歡喜し、池に入れて之を撫掬し
后の膝の上に安置していはく、汝子應に欣慶すべしと
寶藏普く踊出し、寶樹妙衣を生じ
天の樂奏の妙聲は、虛空の中に充滿せり
時に彼の諸の人民、合掌し恭敬して禮し
歡喜して是の如く言はく、此は是れ世の歸依なりと
身より大光明を放ちて、普く一切を照す
若し斯光に遇ふもの有らば、諸漏悉く除滅し
一切の惡鬼神、毒害の衆生の類も
悉く不善の心を捨てて、自然に慈愍を生ぜん
惡名にして善利を失ひ、疾病鬼持せらる
是の如きの衆の苦は滅して、一切皆歡喜し
天下の諸の群生は、相視ること父母の如く

【善男子爾時の】以下第三に古今を會す。

　　惡を離れて慈心を修め、專ら一切智を求めん
　　諸の惡趣を遠離して、廣く天人の路を開き
　　無上の道を顯現して、諸の群生を度脫せん
　　我等は善利を得、斯大施主に遇ふ
　　衆生正路を失ふも、導師今世に出でたまへり

爾時、寶光明童女、偈もて王を讚じ已りて、頭面に足を禮して、遶ること無數匝し、恭敬し合掌して、一面に於て住せり。王は女を讚じて言はく「善い哉善い哉、乃ち能く他人の功德を信知せり是を希有と爲す。若し愚癡有りて報恩を知らず、智慧有ること無く、濁心にして邪見なる、是の如き等の非法を具へたる衆生は、諸佛菩薩の淸淨の功德と一切智の境とを知らず信ぜず。汝今專ら無上菩提を求め、菩薩行を修し、衆生を攝取し、安隱にし饒益すべし」と。王は女を讚じ已りて、無價の衣を以て手自ら授與して之に告げて曰はく「汝自ら之を著けよ」と。時に彼女人、膝を以て地に著け、敬禮し合掌し、頂受して著けたり。時に王復六十の女衣有り。彼衣を著け已りて、眷屬と倶に遶ること畢りて辭退せり。諸の女衣の中より、普く一切星宿の光明を出し、衆人見已りて、咸之を歎じて曰はく「此諸の女等は皆悉く端正なること、淨夜の天の星宿に莊嚴せられたるが如し」と。善男子、爾時の一切法師子吼圓滿妙音王は、豈異人ならんや、今の盧舍那如來、應供、等正覺是なり。淨光王は今の淨飯王是なり。蓮華光夫人は、摩耶夫人是な

【爾時開敷樹華等】第二重頌、十偈中初二は天眼、次一は天耳、次一は他心、次一は宿命、次四は廣く諸佛の因果等の事を知る

り。時の國人は今の大衆是なり。悉く阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得、或は初地乃至十地に住し、大願成就し、諸の法門に住し、方便道を修し、一切智を求め、諸の解脱に住せり。』

爾時、開敷樹華夜天、重ねて此義を明さんと欲して、偈を以て頌して曰はく、

我に清淨眼有りて、悉く世界海の
生死五趣の中に、衆生は常に流轉するを見る
諸佛菩薩、菩提樹に往詣して
道を得て法輪を轉じ、諸の群生を化度したまふを見る
我淨天耳を以て、境界の一切の音
諸佛の說きたまふ所の法を、悉く聞き歡喜して持てり
我に無二の智有り、一切無等等にして
能く一念の中に於て、衆生の心海を了る
我宿命智を得て、一切の劫海を念ふに
自身及び他人を、分別して悉く了達す
我一念に於て、諸の刹海塵劫の
諸佛及び菩薩と、五道の衆生類とを知る
彼佛初め願を發して、專ら佛の菩提を求め

【佛子此道場に於て】以下第八不動地の善知識を明す

究竟して悉く、無量の菩薩行を滿足し
等正覺を覺了して、種種の巧方便もて
淨妙の法輪を轉じ、諸乘海を顯現し
衆の爲に法を演說して、一切を度脫し
乃至遺法の住するを、我悉く一念に知れり
我無量劫に於て、此法門を修習せり
眞の佛子應に速かに、此法門を究竟すべし

『佛子、我唯此菩薩の無量歡喜知足光明の法門を知るのみ。諸の大菩薩は一切佛所に於て、一切諸佛の行海を修行し、一切智を求め、清淨に一切の大願を滿足し、一菩薩地に於て、一切の菩薩地海を修行し、一菩薩行に於て一切菩薩行海を攝取し、一法門に於て自在に一切法門を修攝す。我當に云何が彼功德の行を能く知り能く說くべき。佛子、此道場に於て一夜天有り、願勇光明守護衆生と名く。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修し、衆生の無上菩提を成就し、諸の佛刹を淨め、一切佛に値ひたてまつり、一切如來の正法を修習するや」と。』時に善財童子は、頭面に彼夜天の足を敬禮し、遶ること畢りて辭退せり。

大方廣佛華嚴經　卷第五十五

東晋天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之十二

爾時、善財童子、願勇光明守護衆生夜天の所に往詣せり。彼夜天を見るに大衆の中に在して、普照摩尼王藏の師子の座に處したまひ、摩尼王網もて其身を羅覆し、光明普く一切法界を照し、一切の日月星宿の光明を以て其身と爲し、一切衆生の形類色像は、悉く中に於て現ぜり。又一切諸の色海身、諸の威儀身、諸の方面身、一切衆生の前に應現する身、十方に遊行して自在力なる身、一切の時に於て衆生の前に現じ時を失はざる身、諸佛の所に詣りて之を敬禮するの身、一切諸の善根を長養する身、一切佛の正法雲を受持して忘失せざる身、一切菩薩の願を滿足する身、普く一切諸の世界を照す身、癡暗を除滅して普く一切を照す明淨燈の身、法の如幻を知り離垢の深慧もて諸法を了る身、一切を覺悟して普く意を現ずる身、熾然を離れたる身、不可壞の身、所住無くして佛の行持に住する身、染汚有る無き淸淨法身を現ぜり。善財見已りて五體を地に投じ、佛世界の微塵に等しき念を起して、彼天の身を念ひ、良久しくして乃ち起ち、恭敬し合掌して一心に善

【爾時善財】以下現に法界を證することを明す、中に四段あり、初に法體を證得するを示す。復中に三ある中初に先づ共法を得。

【共法】共に得るところの法故、若し勝進に約せば諸如來と同じく共所得法の故に名く、此處に八十四種の共法を列し、一一皆初に名を標し、次に義を列す。

知識を諦觀して、十種の心を得たり。何等をか十と爲す。謂ゆる自己の心を得、勇猛に精進して薩婆若を求め、能く受持するが故に。一切智法を具する心を得、一切の正教道に隨順するが故に。自の受生の心を得、無上の正法門に安住するが故に。同行の心を得、普賢菩薩の諸の行願と共なるが故に。一切の功德藏を具する心を得、一切の白淨法を長養するが故に。勇猛の心を得、諸佛の大精進を長養するが故に。一切諸の善根を具する心を得、一切の諸大願を成滿するが故に。一切の大利益を辦ずる心を得、菩薩の自在力を具足するが故に。是を善知識に於て十種の心を得たりと爲す。

爾時、善財、一心に彼夜天を觀察し已りて、世界の微塵に等しき菩薩の共法を得たり。謂ゆる正念の共法、十方三世の一切佛を念ずるが故に。大慧の共法、一切法海を分別し了知するが故に。諸趣の共法、一切佛の法輪は壞すべからざるが故に。覺悟の共法、智は虛空の如く普く三世の一切方便海を照すが故に。諸根の共法、明淨の慧を以て普く衆生の一切根海を照すが故に。淨心の共法、菩薩道を修して一切智の無礙の功德莊嚴を得るが故に。境界の共法、明淨の智慧は佛の境を照すが故に。方便に隨順するの共法、一切智の方便海を究竟して普く一切を照すが故に。義を知るの共法、一切法の眞實性を知るが故に。法無畏の共法、一切諸の怨敵を壞散するが故に。淸淨色身の共法、其所應に隨ひて淨身を現ずるが故に。諸力の共法、薩婆若に於て退轉せざるが故に。無畏の共法、淨き正直心は虛空の如くなるが故に。精進の共法、一切劫に於て菩薩行を行じて退轉せざるが故に。

辯才の共法、明淨の智慧は深く諸法に入りて一切を照すが故に。無比の共法、一切の衆生能く勝るもの無きが故に。語言の共法、大衆の中に於て淨妙の法を說きて畏るる所無きが故に。妙聲の共法、能く師子吼して微妙の聲を出し、一切の法海に滿つるが故に。淨音の共法、一切衆生悉く樂ひ聞くが故に。淨德の共法、一切衆生をして悉く清淨ならしむるが故に。智地の共法、一切佛に於て法輪を受くるが故に。梵行の共法、一切佛の境界に安住するが故に。大慈の共法、念念の中に於て普く一切衆生海を覆ふが故に。大悲の共法、甘露の法を雨らして一切衆生を救ふが故に。身業の共法、一切衆生に於て所作に隨ふが故に。口業の共法、一切の語言法を分別するが故に。意業の共法、一切衆生に薩婆若心を立てしむるが故に。莊嚴の共法、一切諸佛の刹を嚴淨するが故に。詣一切佛の共法、一切佛の世に出興したまふを見るが故に。勸請の共法、諸の如來に法輪を轉ぜんと請ふが故に。供養の共法、一切諸の如來を供養するが故に。教化の共法、一切諸の衆生を度脫するが故に。光明の共法、一切法を照すが故に。三昧の共法、一切衆生の心海に於て不動を得るが故に。充滿の共法、諸の菩薩等の自在神力は諸の佛刹に滿つるが故に。菩薩の法門の共法、菩薩の自在力を出生するが故に。眷屬の共法、菩薩と共に同止せんと樂ふが故に。深入の共法、一切諸の世界を分別するが故に。了心の共法、廣く佛刹を淨むるが故に。隨順の共法、一切佛の世界海に入るが故に。充滿方便の共法、一切世界を分別し了知するが故に。無上の共法、普く一切諸の佛刹に現ずるが故に。不退の共

法、十方に遊行して障礙無きが故に。一切の愚癡を除滅する共法、一切佛の圓滿智を得るが故に。不生の共法、一切の佛の爲に眷屬と爲るが故に。一切佛刹網に滿つる共法、一切恭敬し供養するが故に。決定智の共法、諸の法海を分別し了知するが故に。説の如く修行する共法、順じて一切諸の法門に入るが故に。專求の共法、一切諸の淨法を求めんと欲するが故に。清淨の共法、諸佛の功德は身口意を莊嚴するが故に。淨意の共法、一切法に於て智滿淨するが故に。勇猛の共法、一切事を究竟して善根を滿ずるが故に。淨行の共法、一切菩薩行を滿足するが故に。無礙の共法、諸法の相を分別し了知するが故に、方便の共法、自在智の法門を具足するが故に。淨入の共法、其所應に隨ひて境界を現ずるが故に。菩薩の共法、一切諸佛の法を修行するが故に。護持の共法、一切諸佛に護持せらるるが故に。離生の共法、次第に菩薩地を逮得するが故に。安住の共法、一切の菩薩住に安住するが故に。演說の共法、諸佛の授記法を了知するが故に。禪定の共法、一念の中に於て悉く一切諸の三昧に入るが故に。三昧起の共法、一切の佛事は種種の相なるが故に淨念の共法、一切念を知るが故に。菩薩行の共法、盡未來劫に菩薩行を行じて、斷絶せざるが故に。淨信の共法、歡喜して佛の智慧を增長するが故に、長養の共法、一切諸の障礙を除滅するが故に。不退智の共法、一切佛の智慧と等しきが故に。受生の共法、隨時に一切衆生に應化するが故に、住の共法、一切智に住するが故に。境界の共法、法界の境界の故に、無著の共法、心一切の有に染著せざるが故に。善く法相を知るの共法、等心に

【爾時善財】以下此共法に因りて更に直心の無邊を得るを明す。

【我無上心を以て】次に讃頌十中初三は前法を頌し、後七は後行を請ふ。

一切法を觀察するが故に。容受の共法、己の身内に於て一切諸佛の法を受持するが故に。通明の共法、一切世間を分別し了知するが故に。神力の共法、小方便を以て一切の佛刹海に遊行するが故に。陀羅尼の共法、普く一切の陀羅尼海を照すが故に。一切佛の法輪を持するの共法、悉く能く一切の修多羅法を受持するが故に。深入の共法、一切法は虛空の如しと解るが故に。淨光の共法、普く一切諸の世界を照すが故に。明淨の共法、其所應に隨ひて衆生に現ずるが故に。震動の共法、諸の佛刹を動じて諸の衆生の爲に自在を現ずるが故に。不虛の共法、見聞し念ずる者は悉く虛しからざるが故に。聖道の共法、一切願と十力智とを滿ずるが故に。是の如き等の佛刹微塵に等しき菩薩の共法を得たり。爾時、善財、是の如き等の菩薩の共法に入りて、善知識に於て無量無邊の淨き正直心を得、偏へに右の肩を袒ぎ、恭敬し合掌して、偈を以て彼夜天を讃歎して曰はく、

我無上心を以て、專ら佛の菩提を求め
今善知識に於て、自己の心を起せり
諸の惡業を遠離して、淸淨行を成就し
善知識を見るに由りて、無盡の白法を得たり
我知識を見已り、功德もて心を莊嚴し
未來の刹劫を盡して、菩薩道を修行せん
唯願くば善知識、哀愍して我を攝取し

【爾時善財】以下第二に法の名義を顯す。

我爲に悉く、正教眞實の法を顯現したまへ
諸の惡趣を閉塞して、廣く天人の路を開き
佛の一切智の道を、我爲に悉く顯現したまへ
彼善知識の、一切の功德藏を念ひ
我念念に於て、虛空のごとき功德海を得たり
我に波羅蜜の、不思議なる功德を授け
諸の善福を長養し、智繒を速かに頂に冠らしめたまへ
我善知識の、一切種の智道を念ひ
善知識に依止して、白淨の法を滿足せん
衆の善利を具足して、功德普く成滿し
一切法を究竟じて、薩婆若を成就せん
知識は大師なり、無上の法に安立せしめたまふ
無量無數劫にも、其恩や報ゆる能はざらん

爾時、善財、偈を說きて讚じ已りて、白して言さく、『天神、向に顯現したまひし所の不思議の法、此法門は名けて何等とか爲す。道心を發してより來、幾ばく時とか爲したまふ。久如して當に無上菩提を成じたまふべきや。』答へて言はく、『善男子、此法門は應化に隨ひて衆生を覺悟し善根を長養すと名く。善男子、我此法門に入りて一切諸法の平等を覺悟し、

一切法の眞實の相を知り、世間を遠離して染著する所無く、一切の色は一に非ず異に非ざるを解り、色は非色なりと了りて、而も能く無量の諸色を顯現す。謂ゆる種種の色、清淨の色、莊嚴の色、一切の莊嚴を放つ色、普現の色、一切衆生に同ずる色、一切世間現前の色、普照の色、見て厭く無き色、相好の淨き色、離惡の色、勇猛を現ずる色、甚深の色、一切世間能く盡す無き色、歎無盡の色、種種雲の色、諸の形像色、無量の自在神力を顯現する色、愛樂すべき色、一切の善を起す色、應に隨ひて現前する色、應に隨ひて衆生を度する色、普く照して無礙なる色、離垢の色、淨身を壞せざる色、不思議の法方便光明の色、比に非ず無比に非ざる妙絕の色、明闇に非ざる色、一切の闇を滅する色、一切の白淨法を積集する色、功德大海の生ずる所の色、過去に修行せし恭敬より生じたる色、淨直心より生じて虛空の如き色、勝れたる廣大の色、無斷無盡の色、海光明の色、一切世間依止する所無く壞すべからざる色、一切十方に充滿して無礙なる色、念念の色、海色、一切衆生をして大いに歡喜せしむる色、一切衆生を攝取して堅固なる色、一切の毛孔の中の如來の功德師子吼の色、一切衆生の深心を淨むる色、一切法の義を顯現する色、圓滿なる光明無礙の色、垢を離れたること虛空に等しき色、垢に依らざる無著の色、普く離垢の法界を照す色、不可稱の色、眼に隨ひて見る色、諸方を照す色、時に隨ひて顯現し衆生に應ずる色、寂靜の色、一切の煩惱を滅する色、一切衆生の功德福田光明の色、見て虛しからざる色、大智光の色、無礙の法身一切に滿つる色、威儀を顯現して虛しからざる色、

大慈海を積集する色、功德を具足する須彌山の色、普く一切趣を照す色、淨き大智の色、一切の世間を正念する色、一切寶光の色、淨き寶藏の色、淨き衆生を壞せざる色、薩婆若に趣く色、衆生の眼を悅ばしむる色、一切の寶もて莊嚴せる勝れたる光明の色、一切衆生を取らず捨てざる色、決定する無く究竟する無き色、自在に諸の持力を顯現する色、一切の自在神足の色、佛の種姓の色、衆惡を遠離して法界に滿つる色、悉く一切の諸佛大衆に詣でて一切を照す色、諸海を成ずる色、善行の果に依る色、隨ひて化し授くる色、一切世間を見て厭く無き色、種種の光明普く照す色、三世の一切を顯現する色、一切海を顯現する色、一切の光明海を放つ色、種種の光色、一切の世間を過ぎたる一切香の光色、圓滿の諸の日雲を顯現する色、圓滿の淨月雲を持する色、須彌山妙華雲を放つ色、種種の寶雲を出す色、一切の鉢曇摩華雲を顯現する色、一切の香像雲法界に充滿する色、一切の末香雲を散ずる色、一切佛の淨願身を現ずる色、一切の音聲師子吼の法界海を出す色、普賢菩薩の淨身の色、念念の中に於て是の如き等の色を現じて十方に充滿して衆生を敎化す。或は見或は念じて得度を得しめ、或は轉法輪を現じ、或は隨時の應を現じ、或は親近を現じ、或は覺悟を現じ、或は自在神力を現じ、或は種種の變化を現じ、或は不可思議の自在神力の變化を現じて衆生を度脫し、不善の法を滅して善法を安立し、大願一切智の勢力と菩薩の法門の勢力とを滿足し、大慈大悲を具足し成就せしむ。佛子、我此法門に住して無量の色身を現じ、一切の色界を分別し了達して、無量無邊の法雲を放ち、普

【佛子汝が】問所以下第三に法根の深厚を明す。中に初に深厚を歎じて許說するに五喩を擧ぐ。

【譬へば日の性は】是れ日性無闇の喩菩薩の智に妄なく能く妄を破すに喩ふ。

【譬へば淨日等】是れ日光遍照の譬菩薩の寂にして常用の義に喩ふ。

【譬へば大船の等】是れ虛舟濟物の喩菩薩無住攝生の義に喩ふ。

く一切諸佛の世界を照して無量無邊の諸佛を現じ、無量無邊の自在神力を現じて衆生を覺悟し、善根を長養し、念念の中に於て不可思議衆生をして阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得しむ。

佛子、汝が所問の如く、此法門を得てより幾ばく時とか爲すとは、我今佛の神力を承けて汝が爲に解說せん。佛子、菩薩の圓滿智慧は、一切の虛妄を離れ、本性清淨の一切種智は一切諸の障礙の山を超出し、應に化すべき所に隨ひて皆悉く普く照す。佛子、譬へば日の性は闇冥有ること無けれども、但日沒し已れば天下則ち闇となり、出づれば則ち大いに明なるが如し、菩薩の圓滿の明淨の智日も亦復是の如く、一切の虛妄を離れて普く一切を照し、衆生を敎化す。佛子、譬へば淨日閻浮提に出でて、普く天下の衆寶の山樹を照し、影は一切の大海河池に現じ、衆生の類對見せざる無けれども日も亦來りて此池流に入らざるが如し。菩薩の智日も亦復是の如く、三有の海を出でて佛の實法は虛空の中に於て行き、寂滅に住して一切趣趣の生處に應現し、衆生身に同じて之を化度するもの實には生死せず、染著する所無く、一切の虛妄を離れ、修短の想無し。何を以ての故に、佛子、菩薩摩訶薩は諸の顚倒を離れ、一切世は悉く夢幻の如しと了り、眞實の法を解り、衆生有る無く、圓滿の大悲もて皆悉く一切衆生に對見して之を敎化すればなり。佛子、譬へば大船の此岸に依らず、彼岸に樂はず、中流に著せず、大海の中に於て衆生を濟度するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、波羅蜜力の船を以て、生死の海に於て衆生を濟度

【譬へば虛空の等】是れ空性無礙の喩、菩薩無功益物の義に喩ふ。

【譬へば化人の實形等】是れ化無形質の喩、菩薩用つて常寂の義を喩ふ。

【乃し往古の世】正しく問に答へて所說を述ぶ。初に長行、三段中初に善光劫中の供佛修行を明す。

し、此岸に依らず、彼岸を樂はず、而も衆生を度して一切劫に於て菩薩行を修し、劫想を起さず、亦劫に修短の相有るを見ず。佛子、譬へば虛空の法海を出過し、一切世界には成有り敗有るも、而も彼虛空の本性は清淨にして染汚する所無く、沮壞すべからず、恐怖と一切の障礙とを遠離して、能く普く未來の諸劫の一切佛刹を持するが如し。菩薩摩訶薩の心も亦復是の如く、虛空に等しき圓滿の智慧を以て其心を莊嚴し、一切の大願の風輪を發起して、一切衆生を持し、惡道を滅して諸の善趣を生じ、心に憂喜無く、衆生を一切智道に安立せしめ、煩惱生死の過患を除滅せしむ。佛子、譬へば化人の實形の生老病死飢渴等の苦有る無きが如し。菩薩の如化の智慧の沮壞すべからざる妙色を出生する法身も亦復是の如く、一切劫の諸の生死の中に於て衆生を化度して而も著する所無く、亦恐怖無く、無貪恚にして、一切熾然の煩惱を除滅し、心に一切趣生を貪樂せず。佛子、菩薩の智慧は復是の如く甚深にして測り難しと雖も、我當に佛の神力を承けて汝が爲に解說し、未來世の諸の菩薩等をして大願を滿足し諸力を成就せしむべし。

佛子、乃し往古の世、世界海の微塵に等しき劫を過ぎ、復是數を過ぎて劫有り、善光と名けき。彼に世界有り名けて寶光と曰ひ、彼劫中に於て萬の如來有して、世に出興したまひき。最初の如來を法輪音聲虛空燈と號けたてまつる。彼閻浮提の中に寶莊嚴の王都有り、彼に大林有り、善光明と名け、此林中に於て一道場有り、名けて善華と曰ひ、彼道場の上に寶蓮華の師子の座有り。時に彼如來、此座上に於て阿耨多羅三藐三菩提を成じたまひ

き。爾時、人民の壽は十千歲にして殺、盜、淫佚、妄言、兩舌、惡口、綺語、貪恚、邪見、是の如き等の十不善道を行へり。時に彼如來、百歲の中に於て道場に坐したまひ、諸の菩薩及び諸の天王、並びに閻浮提の宿殖の德者の爲に說法を爲し、其餘の衆生の善根の熟するを待ちたまふ。爾時、國王を名けて勝光と曰へり。時に彼人民は十不善を行ひ、五欲に貪著し、種種の惡を作して善法を遠離し、父母に孝せず。沙門、婆羅門を敬はず。無量の衆生有りて王の治法を犯して囹圄に囚執せられ、諸の楚毒を受けたり。爾時、彼王に一太子有り、名けて善伏と曰ひ、端正殊特にして妙色を成就し、二十八の大人の相を具へ、中宮に處在して婇女に圍遶せられ、彼獄人の楚毒の音聲を聞けり。聞き已りて憂惱し、大悲の心を起して彼獄中に入り、諸の罪人を見るに裸形にして髮を亂し、繫縛し榜笞せられ、悲號して涙を流し、苦毒無量なり。太子見已りて大悲の心を發し、之を慰喩して曰はく、「恐るる莫れ、怖るる莫れ、我今能く汝等をして解脫せしめん」と。是に於て太子は往きて王の所に詣りて、白して言さく、「大王、獄中の罪人に、願くば無畏を施したまへ、大王、哀愍して幸に矜赦を垂れたまへ」と。時に彼大王諸の群臣を召して共に參議すらく、「此事云何」と。群臣答へて言さく、「彼諸の罪人は官物を竊盜し、大王を謀殺し、宮人を侵犯せり。是の如きの罪有り、必ず應に刑戮すべし。若し彼を救はば罪應に死に至るべし」と。時に彼太子、大悲深至にして彼を救護せんが故に、是の如きの言を作さく、「我代りて獄に囚はれ、諸の楚毒を受けん、願くば我を苦治せよ、我彼を救はんが爲には身命をも

惜まず、罪囚をして悉く解脱を得しめんと欲す。所以は何ん。若し我此衆生を救はざれば、云何が能く三界の牢獄を濟はん。諸の生死の牢獄に在る衆生は、悉く貪愛の爲に纒縛せられ、愚癡に蔽はれて種種の苦を受け、身形鄙陋に、心常に放逸にして出要の道を知る能はず。智慧の光無くして諸の法界に著し、福慧有る無くして實智を遠離し、結垢に業縛せられて苦獄に幽閉し、惡魔に隨順して生老病死し、常に憂惱の逼迫する所と爲る。我當に云何が彼をして解脱せしむべき。我今應當に自の身命を捨てて之を救拔すべし」と。

爾時、五百の大臣、威聲を發して言はく、「大王當に知るべし、太子の意の如く獄囚を放たば、王法を毀壞し、危きこと我等に及ばん。太子を治せざれば、國久しく立たず」と。王此言を聞きて卽ち威怒を發して、太子を誅せしむ。王后之を聞きて容を毀ち服を降し、千の婇女と與に馳せて王の所に詣り、頭面に足を禮して是の如く請うて言はく、「大王當に知るべし、太子罪有るも、願くば慈愍を垂れたまひて、其壽命を賜へ」と。時に彼大王卽ち太子を召す、太子旣に至る、復王に白して言はく、「願くば哀を垂れて、獄囚に苦める人を救したまへ。若し矜赦したまはずんば、我代りて苦を受けん」と。王の言はく、「隨意なれ」と。爾時に太子は、卽ち獄中に入りて諸の罪人を放ち、代りて楚毒を受け、曾て中に悔ゆる無く、一向に一切種智を正念し、大悲を首と爲し、衆生を饒益せり。夫人、王に白すらく、「願くば太子外に在ること半月、施を布き福を修することを聽したまへ。然る後に王に隨ひ法の如く苦治したまへ」と。王卽ち聽許したまへり。

時に彼都城の北に一大林有り、名けて日光と曰ふ。太子、彼に詣りて大施會を設け、食を須めば食を與へ、衣を須めば衣を與へ、乃至車乘、華鬘、塗香、末香、幢幡、繒蓋、及び餘の一切の寶莊嚴具を與へたり。期限既に滿ちたり。爾時、國王及び諸の群臣、長者、居士、男女、大小、並に諸の外道皆悉く雲集せり。爾時、法輪音聲虛空燈如來、諸の衆生の應に化すべき時の至れるを知して、大衆と與に天王に圍遶せられ、龍王は供養し、夜叉王は守護し乾闥婆王は讚歎し、阿修羅王は禮侍し、迦樓羅王は淸淨心を以て諸の雜寶を散じ、緊那羅王は歡喜して過去の諸佛を讚歎し供養し、摩睺羅伽王は悲泣正歎し、是の如き等の無量の大衆の與に圍遶せられて、彼會に來詣したまへり。爾時、太子及び諸の大衆は、遙に佛の來りたまふを見るに、端嚴殊特にして諸根寂定なること大象王の如く、神心澄明にして、淨きこと淵海の若く、如來の自在の境界と勝妙の功德とを顯現し、相好に身を嚴り、圓滿の光明は普く一切を照し、十方無量の世界を震動し、一切の毛孔は普く如來の微妙の香雲を出し、普く種種諸の莊嚴雲を雨らし、佛の威儀を行ひ、一切衆生の煩惱を除滅せり。爾時、太子、既に如來を見て歡喜無量なり。五體を地に投じ、合掌して白して言さく、「善くぞ來りたまひし、世尊。念哀して我を取りたまへ、唯願くば世尊、摩尼の座に處したまへ」と。諸の菩薩衆皆寶座に就きて、周匝し圍遶せり。時に佛坐し已りて一切衆生の苦患を除滅し、諸の障蓋を離れ、聖法の器に堪へしめたまへり。爾時に如來、諸の衆生の應に化を受くべき者を知して、爲に圓滿因緣修多羅を

演說したまひき。時に彼大衆正法を聞き已りて、八十那由他の衆生は皆離垢清淨法眼を起して無學地を得、一萬の衆生は大乘道を得、普賢菩薩の行願を滿足し、十方佛の正法輪を轉じて自在力を現じたまふを見、佛世界の微塵に等しき衆生は、摩訶衍を具へて、十方世界の無量の衆生の惡道の苦難を滅し、天人の趣に生ぜり。時に彼太子は應に化すべきに隨ひて衆生を覺悟し善根を長養するの法門を得たり。

佛子、爾時の太子は豈異人ならんや、我身是なり。我一切衆生に於て大悲の心を起し、普く之を饒益して三界に著せず。又亦名譽果報を求めず、憍慢を捨離して他人を輕しめず、彼に惡を加へず、財利を貪らず、三有を遠離して大乘を莊嚴し、一切智門を開き、普く菩薩の無量の諸行を行へり。佛子、我爾時に於て此法門を得たり。時の諸の大臣は今の五百の惡人、調達の眷屬是なり。彼諸人等を佛は皆教化して阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめたまへり。未來世須彌山の微塵に等しき劫を過ぎて等正覺を成ぜん。所住の世界を同く寶光と名け、國界莊嚴し、父母種姓、受胎し出生し、家を棄てて道を學び、道場に往詣して正法輪を轉じ、修多羅を說く、語言、音聲、光明、眷屬、壽命、法住及び其名號は皆悉く同からず。其最初の佛を饒益月と號け、第二の佛を大悲師子と號け、第三の佛を救護衆生と號け、最後の如來を大醫王と號けん。佛子、當に知るべし、本の諸の罪人の、我救ひし所の者は、卽ち拘樓孫等の賢劫の千佛、及び百萬阿僧祇の諸の大菩薩なり。無量精進妙德悲佛の所に於て阿耨多羅三藐三菩提心を發し、今悉く十方の國土に現在して菩薩

行を行じ、此應に化すべきに隨ひて衆生を覺悟し、善根を長養するの法門を修習し增廣せる者是なり。佛子、時の王勝光は今の薩遮尼揵子大論師是なり。時の王、宮人、諸の眷屬は、卽ち彼尼揵の六萬の弟子、師と倶に來りて佛と共に論議し、悉く之を降伏して阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたる者是なり。此諸人等、當に正覺を成ずべし。世界と劫號とは皆悉く同からず。

佛子、我爾時に於て罪人を救ひ已りて、父母は我の國土、妻子、眷屬を捨離して、法輪音聲虛空燈佛の所に於て、出家學道するを聽したまひ、五百歲の中に梵行を淨修せり。此中間に於て、一萬の三昧、一萬の陀羅尼門、一萬の諸明、一萬の法藏、一萬の薩婆若勇猛精進、一萬の清淨忍門、一萬の寂滅禪定、一萬の方便般若波羅蜜を得たり。各十方に於て現前に一萬の如來を對見し、一萬の菩薩の大願を出生し、菩薩の一萬の諸力を長養し、又菩薩の一萬の神通を得て、念念の中に於て各十方の一萬の佛刹に遊び、念念の中に於て各十方の一萬の佛海を憶ひ、彼如來の一萬の化海を見、普く十方に遊びて衆生を敎化し、念念の中に於て十方世界の衆生を見、諸趣の中に於て此に死し彼に生れ、或は好あり或は醜あり、或は善處に之き、或は惡道に入り、彼衆生の諸の心心の法、心意の所行、及び諸根海を知り、行業善根に皆悉く明達せり。

佛子、我爾時に於て命終の後に、卽ち復彼閻浮提の中の王宮に於て生を受け、轉輪王と作り、彼法輪音聲虛空燈如來の滅度の後は、我爾時に於て正法を守護し、次に法虛空妙德

【次に復劫有り等】以下第二に日光劫中の供佛修行を明す。

【一切世界の中の等】以下第三に總じて塵數劫中の供佛修行を結す。

王佛に値ひ、次に釋王と爲りて卽ち彼道場にて天藏佛に値ひ、次に焰摩天王と爲りて卽ち彼世界にて大地功德山佛に値ひ、復法輪光音聲王佛に値ひ、次に化樂天王と爲りて卽ち彼世界にて虛空燈智王佛に値ひ、次に阿修羅王と爲りて卽ち彼世界にて一切法雷音王佛に値ひ、次に他化自在天王と爲りて卽ち彼世界にて不可壞力幢佛に値ひ、次に梵王と爲りて卽ち彼世界にて法輪化普光音佛に値ひたてまつれり。佛子、彼寶光世界に於て、善光劫の中に一萬の如來世に出興したまひ、我悉く値遇しぬ。

次に復劫有り名けて日光と曰ひ、六十億の佛、世に出興したまへり。時に我王と爲り、大智慧と名け、最初の相好功德山佛に値ひ、復妙音聲佛に値ひ、次に大臣と爲りて離垢童子佛に値ひ、次に阿修羅王と爲りて勇猛精進佛に値ひ、復究竟相好佛に値ひ、次に商人と爲りて離垢臂佛に値ひ、次に城天と爲りて師子行佛に値ひ、次に毘沙門天王と爲りて天周羅佛に値ひ、次に乾闥婆王と爲りて法王上名稱佛に値ひ、次に鳩槃茶王と爲りて光明天冠佛に値ひたてまつりて恭敬し供養せり。佛子、我諸趣に身を受けて、是の如き等の六十億佛を供養せり、一一の佛所に於て無量無邊の衆生を敎化し、我一一の佛所に於て種種の三昧門、種種の陀羅尼門を得、諸辯種種の智慧、種種の法を具足し、光は十方海と諸佛刹海とを照して、諸佛海を見、一劫の中に諸佛に値遇して、恭敬し供養せしが如く、世界の微塵に等しき劫に於て、一切世界の中の諸佛世に興りたまふに、我悉く値遇して恭敬し供養し、法を聞きて受持し、正法を守護することも、亦復是の如くにして、諸佛の所に

【爾時頌勇等】以下次に重頌三十六偈中初一は承力許說を、次六は古世佛興昔人造惡を、次七は太子の悲救命を代ふるを、次五頌は初佛說法利益得益を頌す。次一は一萬佛を結す、次一は塵數劫等を、次四は得法を結す、次八は法門の業用を、後三は長時益物下自分を結す。

於て此法門を修せり。」

爾時、願勇光明守護衆生夜天、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

歡喜恭敬の心もて、能く甚深の法を問へり
我當に佛力を承けて、汝が爲に分別して說くべし
不可思議の、世界海塵劫を過ぎて
爾時に一劫有り、名けて善光と爲す
彼時に世界有り、名けて寶光と爲す
彼世界の中に於て、十千の佛世に興りたまへり
我彼諸佛に値ひたてまつりて、恭敬して悉く供養し
彼如來の所に於て、此法門を修習せり
爾時に王都有り、名けて可愛樂と曰ひ
廣博にして悉く平正、種種に妙莊嚴せり
衆生の雜行起り、世界に淨穢有り
時に彼諸の衆生、多く不善の法を行へり
爾時に大王有り、號けて勝光と爲す
正法もて天下を治め、一切に等心なりき
彼王に太子有り、號を名けて善伏と曰ひ

端嚴にして甚だ殊妙に、相好もて身を莊嚴せり
時に彼の諸の人民、王法を犯す者有りて
幽閉せられて牢獄に在り、太子悉く之を救へり
爾時に諸の臣等、倶に大王に白して言さく
太子は王を危くせんと欲す、宜しく應に苦治を加へたまふべしと
時に王は臣の言を用ひて、法の如く太子を治し
諸臣は太子を送りて、彼刑戮の處に往けり
王后此を聞き已りて、來りて大王に白して言さく
願くば十五日、布施して功德を修するを聽したまへと
時に王即ち聽許したまひ、其をして福業を修せしめ
衣膳、車乘等、欲するに隨ひて悉く之を給せり
期する所の日已に盡きて、將に刑戮の處に至らんとす
彼時に一切衆、悲感して悉く號泣せり
時に法輪音聲、虛空燈如來
衆生の根の熟せるを知りたまひ、大衆の所に往詣し
自在力を顯現して、圓滿經を演說したまひ
無量の諸の衆生に、悉く菩提の記を授けたまへり

爾時に王の太子は、即ち菩提心を發すらく
願くば我悉く、一切諸の群萠を度脫せんと
彼如來を供養して、即ち佛に隨ひて出家し
勇猛の精進の力もて、專ら無上道を求めたり
此法門を具足して、大悲もて衆生を念ひ
法の眞實相を知り、劫海に菩提を修せり
一切諸の導師、次第に世に出興したまふも
我皆悉く恭敬し、供養して法を護持すべし
刹海の微塵に等しき、一切諸劫の中に
如來世に出興したまふも、恭敬して悉く供養すべし
善伏我身は是れ、大悲心を修習して
身と壽命とを惜まず、彼苦める人を救護し
此法門を逮得して、劫海に常に修習し
念念に悉く、無量の諸の功德を增長せり
見る所の諸の最勝は、方便もて我爲に說き
聞き已りて即ち、此寂滅の法門を修習せり
無量劫に此、不思議の法門を修し

佛は甘露海を闡らし、我已に悉く之を飲めり
此法門に依止して、普く十方海に遊び
一念に悉く、三世諸佛の刹を分別せり
此法門に依るが故に、三世の佛海を見
諸の最勝の所に於て、身を現ずること電光の如し
此法門に依るが故に、遍く十方佛に詣りて
各大神力と、勝妙の威儀の法とを現ぜり
此法門に依るが故に、能く問難海を爲し
不思議の諸佛の、說きたまふ所を聞きて受持せり
此法門に依るが故に、十方世界の
諸佛大衆の中に於て、自在に神變を顯せり
此法門に依るが故に、種種に色身を現じ
能く一身の中に於て、諸佛の身を顯現せり
此法門に依るが故に、一一の毛孔の中より
大光明海を放ちて、衆生の煩惱を除けり
此法門に依るが故に、一一の毛孔の中より
無量身を出化し、法雨もて衆生を濟へり

【善男子此閻浮提に】以下第九善慧地の善知識を明す

【流彌尼】ルンビニー(Lumbini)藍毘尼とも書く、釋尊誕生の園林、義翻せば花菓等勝妙事具足といふ。

此法は思議し難く、菩薩の修學する所なり
此法門に依住して、來劫を盡して修行せり
諸の邪見を除滅して、應化の衆生に隨ひ
悉く一切種智の地に、安住するを得しめ
不可思議の趣に、種種の身を顯現し
其所應化に隨ひて、爲に法を演說せり

佛子、我唯此法門を成就せるのみ。諸の大菩薩は世間を超出して普く諸趣を照し、悉く能く一切境界を究竟じて、障礙の山を壞り、法相に了達して、善巧の方便もて諸法を分別し、法の無我なるを解りて、衆生を攝取し敎化し度脫し、皆悉く三世法界を了知し、善く一切の話言道海を知る。我當に云何が能く是の如きの大智慧の海大智の境界、三昧解脫の法門自在に入るべき。善男子、此閻浮提に一園林有り、流彌尼と名け、彼に天有り妙德圓滿と名く。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を行じ、如來の家に生れ、世間の燈と爲り、盡未來劫に菩薩行を修して、心に疲倦無きや」と。』時に善財童子は、頭面に彼夜天の足を敬禮し、遶り畢りて辭退す。

爾時、善財童子、正念に彼夜天の敎を思惟し、應に化すべき所に隨つて衆生を覺悟し善根を長養する法門を、修習し增長して、漸漸に遊行して彼林中に至り、周遍して妙德圓滿林天を推求せしに、衆寶の樓閣の上に坐したまふを見る。一萬那由他の諸天に圍遶せられ、

【答へて言はく】以下正しく己が法界を授く、初に法義を顯す、中先長行。

爲に菩薩受生海經を説き、如來の家に生れ、菩薩の功德を長養せしめたまへり。爾時、善財頭面に足を禮して白して言さく、「天神、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せり、云何が菩薩は菩薩行を行じ、如來の家に生れ、世間の燈と爲るや。」答へて言はく、「佛子、菩薩に十種の受生法有り、若し菩薩有りて是法を行ぜん者は、如來の家に生れ、念念の中に於て善根を長養し、退かず怖れず、惱まず亂れず、懈らず悔いず、一切智に至り、法界を順知し、解脫道を修し、一念の中に於て一切の諸波羅蜜を長養し、世間を捨離し、佛地を具足し、智慧猛盛にして佛法現前し、眞實の義に順じて薩婆若を滿ぜん。何等をか十と爲す。謂ゆる一切佛を供養する方便虛空願藏菩薩の受生法、菩提心の枝藏を滿ずる菩薩の受生法、現前に方便して寂滅虛空藏を觀察する菩薩の受生法、淨直心を以て普く三世藏を照す菩薩の受生法、普く一切藏を照す菩薩の受生法、如來の家藏に生ずる菩薩の受生法、佛の光明力藏の菩薩の受生法、薩婆若門藏を具足し分別する菩薩の受生法、一切法界に莊嚴藏を化する菩薩の受生法、勇猛精進して佛地の藏に至る菩薩の受生法なり。佛子、何等をか一切佛を供養する方便虛空願藏の受生法と爲す。此菩薩摩訶薩は、是の如きの願を發すらく、『我當に一切諸佛を恭敬し供養し、無量の喜心もて佛を見て厭く無く、不壞の信を具へ、功德を積集し、諸佛を供養して、心に厭足無けん』と。佛子、是を初の受生法と爲す、薩婆若の初門にして善根を長養するが故なり。

佛子、何等をか菩提心の枝藏を滿足する受生法と爲す。此菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐

三菩提心を發して大悲の心を起す、一切衆生を救護するが故に。佛に値遇するの心、常に佛を見るが故に。正法を求むる心、惜む所無きが故に。大莊嚴の心、薩婆若に向ふが故に。大慈を發す心、普く一切衆生を覆ひ攝取するが故に。一切衆生を捨てざる心、薩婆若の莊嚴は壞すべからざるが故に。諂曲を離るるの心、實智を得るが故に。說の如く行ずる心、菩薩道を得るが故に。一切佛を欺かざる心、諸佛の大誓願を滿足するが故に。薩婆若の爲に大願を發す心、未來の一切衆生を教化するが故に。是の如き等の佛刹の微塵に等しき菩提心の枝、滿足して如來の家に生れん。佛子、是を第二の受生法と爲す。

佛子、何等をか現前に方便して寂滅虛空藏を觀察する受生法と爲す。此菩薩摩訶薩は寂滅なる一切法海を觀察する心、一切智の道を究竟し滿足して疲倦せざるの心、善法の業界を正念するの心、一切菩薩の諸の三昧海の清淨心、一切菩薩の諸の功德を具する心、一切菩薩の莊嚴道を出生する心、無量劫に於て勇猛精進して休息せざる心、普賢の行を出生して一切衆生を化する心、善く威儀を學び、菩薩の德に住し、一切の諸有は悉く有に非ざる心を起す。佛子、是を第三の受生法と爲す。

佛子、何等をか淨直心を以て普く三世藏を照す受生法と爲す。此菩薩摩訶薩は、淨き直心界に佛の菩提を照し、深く菩薩の方便法界に入り、深心壞せざること猶し金剛の如く、一切の有と諸の生死の趣とに背き、一切佛に向ひ、自在力を具へ、諸の道に趣き、菩薩の根を增益し、垢を離れたる淨心は動轉すべからず、大願を長養して常に諸佛の護念す

る所と爲り、一切諸の障礙の山を壊散して悉く衆生の爲に歸依と作る。佛子、是を第四の受生法と爲す。

佛子、何等をか普く一切藏を照す受生法と爲す。此菩薩摩訶薩は方便を具足して衆生を教化し、財利を貪らず、清淨心を以て悉く一切を捨て、無量の淨戒を持ち、佛の境界に住し、忍法を具足して、一切佛の忍光明の法を得、勇猛精進して一切智の境界を究竟し、諸禪を修習して清淨圓滿たる普門の三昧智慧を具足し、明淨の慧日を以て普く法界を照し、無礙の眼を得て一切の佛界を見、深く一切諸法の源底に入り、智者に讃ぜられ、衆生をして歡喜して正法を修習し、眞實相を見しむ。佛子、是を第五の受生法と爲す。

佛子、何等をか如來の家藏に生ずる受生法と爲す。此菩薩摩訶薩は如來の家に生れ、諸佛の教に隨ひ、一切の甚深法門を具足し、三世の一切諸佛の大願に同うし、三世の一切諸佛の善根に同うし、三世の一切諸佛の法身に同うし、世間を遠離して離世間の趣に向ひ、白淨の法を長養して大功德の法門に住し、佛の持定を得て諸の如來を見、應に化すべき所に隨ひて諸の衆生を淨め、大願を捨てず、法を聞きて受持す。佛子、是を第六の受生法と爲す。

佛子、何等をか佛の光明力藏の受生法と爲す。此菩薩摩訶薩は深く佛力に入り、遍く十方に遊び、諸佛を供養して心に疲倦無く、一切法は幻の如く夢の如く、色は電光の如しと知り、化の如き自在の通明を成就し、一切の有と生趣とは影の如しと知り、一切佛の轉

じたまふ所の法輪は皆悉く響の如しと知り、悉く究竟して一切法界を説く、佛子、是を第七の受生法と爲す。

佛子、何等をか薩婆若門藏を具足し分別する受生法と爲す。此菩薩摩訶薩は童子身を以て菩薩の住に住し、薩婆若を觀じ、無量劫に於て一一の諸の智慧門を觀察し、劫は猶盡すべくとも、諸の智慧門は窮盡すべからず、菩薩の自在の境界と諸の三昧門とを究竟し、念念に悉く十方の佛所に詣り、不可壞の三昧の境界、不可壞の法、不可壞の智に入り、無邊の境界に非境界を得、少境界に於て悉く具足して不可說の地を得、無量の中に於て有量の法を得、諸の世間は假名の施設なりと知り、一切の語言法を分別す。佛子是を第八の受生法と爲す。

佛子、何等をか一切法界に莊嚴藏を化する受生法と爲す。此菩薩摩訶薩は種種に無量の佛刹を莊嚴し、衆生究竟し、諸の變化身と、佛の應化身とに依止する所無く、清淨の法化は悉く一切の無礙法界に行はれ、應に化を受くべき者には彼が爲に身を現じて、種種諸の菩薩行を教示し、善能く諸の障礙を離れたる一切智の門を出生し、淨き智慧藏もて衆生を教化し、未だ曾て時を失はず。佛子、是を第九の受生法と爲す。

佛子、何等をか勇猛精進して佛地の藏に至る受生法と爲す。此菩薩摩訶薩は悉く三世の諸の如來の所に於て灌頂の法を受け、一切世界の境界に障礙無く、菩薩は悉く三世の衆生の此に死し彼に生るるを知り、菩薩行を修し、諸の衆生心の次第に起るを知り、

【時に彼林天】以下重頌、次第に前十法を頌す。文顯の故に知るべし。

三世の佛の次第に正覺を成じたまふ善巧の方便を知り、法の次第を知り、一切劫の次第に成敗するを知り、應に隨ひて衆生に莊嚴を顯現して等正覺を成じ、次第に正法輪を轉ずるを顯現して、無量無邊の衆生を教化す。佛子、是を第十の受生法と爲す。

菩薩摩訶薩は是法に住し已りて種種に一切佛刹を莊嚴し、無量の億劫、無量の法界、無量の境界に衆生を教化し、無量の諸の法界流を覺悟し、諸佛の不可思議の虛空に等しき如き深法の境界を顯現し、無量の諸行もて、衆生を攝取して轉法輪を現じ、一切世界に於て佛法を護持し、悉く一切境界に於て、微妙の音を以て不可說の佛の正法雲を說き、諸の法門に住し、無礙の道に趣き、一切法を以て道場を莊嚴し、應に度すべき所に隨ひて、佛と成り、世に興り、無邊の衆生を教化し成熟す。

時に彼林天、重ねて此義を明さんと欲して、偈を以て頌して曰はく、

清淨の正直心は、先に是の如きの願を發すらく
普く一切佛を見て、供養して厭足無けんと
皆悉く淨く、三世の諸の佛刹を莊嚴し
願を以て心を莊嚴し、諸の群生を度脫す
寂滅の法を修習して、其心に厭足無く
三世に障礙無く、身心は虛空の如し
深く大悲の海に入り、直心は須彌の如く

【我此無量の境界等】二に法名を立つ、菩薩物の爲に生を現ずるを明す故に自在といひ、奇瑞一に非ざるを無量境と名く。

大智の海を窮め盡す、是を人中の雄と爲す
大慈一切を覆ひて、諸度の海を增廣し
諸の群生を教化す、此は是れ無上の人なり
法の眞實相を知り、三世の佛の家に生れ
諸の法海を究竟す、是を智慧の者と爲す
淸淨の妙法身は、其心に障礙無く
己身は十方に滿ちて、如來力を具足す
甚深の智慧の中に、自在力を逮得して
專ら一切智を求め、三昧海を究竟す
諸の佛刹を嚴淨し、一切衆を教化して
自在力を顯現す、是を稱して莊嚴と爲す
深く最勝力に入り、薩婆若を長養し
法界に障礙無し、此は是れ眞の佛子なり

『佛子、菩薩摩訶薩は此十法を具へて、如來の家に生れ、世間の燈と爲る。佛子、我此無量の境界自在の法門を成就せり。』

爾時、善財白して言さく、『天神、此法門は境界云何。』答へて言はく、『佛子、我已に一切菩薩の受生の大願を具足せり。是故に、我此林中に來生す。本願力の故に、菩薩の受生の

【爾時、善財白し等】以下三に法門の境界を明す。初問。

【答へて言はく】次に答中三あり、初に下生に十瑞應あるを明す。

【佛子摩耶夫人は】次に生時に十光明あるを明す。

法を正念し、後百年に於て、菩薩は彼兜率陀天より降下して下生せん。時に此林中に十種の瑞相有り。何等をか十と爲す。一には此林は忽然として廣博となり地の平なること掌の如し。二には土石雜穢は變じて金剛衆妙の莊嚴と爲る。三には寶婆羅樹周匝して行列す。四には時に此林中に沈水末香、諸天の種種の莊嚴に出過す。五には諸の妙華鬘の寶莊嚴具は皆悉く充滿す。六には諸の寶樹の中より自然に種種の妙寶を流出す。七には諸の池水の中より芙蓉の華を出す。八には時に此林中の娑婆世界に欲色の諸天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽は恭敬して禮を作し、合掌して住す。九には天女乃至摩睺羅伽女は供養の具を齎し、合掌し恭敬して一面に於て住す。十には十方一切佛の齊中より光明を放つ、名けて菩薩の受生自在燈と曰ひ、普く此林を照す。彼一一の諸の光明の中に於て、一切佛の受生自在、出家自在、一切菩薩の功德自在を現ず。又如來の微妙音聲を出す。佛子、是を林中の十種の瑞相と爲す。此相を現ずる時、諸の天王等は必ず當に菩薩有りて下生すべしと知る。我此瑞を見、歡喜無量なり。

佛子、摩耶夫人は迦毘羅城を出でて此園林に入り太子を生みし時、自然に十種の光明有り、此光に因るが故に。一切衆生は法の光明を得たり。何等をか十と爲す。謂ゆる寶芽藏の光、一切香の光、鉢曇摩の光、微妙の聲を出して善生を讚ずる光、十方菩薩の初發心の光、一切菩薩諸地に得入する自在法の光、一切菩薩の諸波羅蜜大智慧の光、菩薩の無量の大智願を出生する光、方便もて衆生を化度する智光、普く一切法界を照す諸佛の受

【佛子摩耶夫人は】次に受生に十自在あるを明す。
【畢利叉】ギラクシャ(Vilaksa)義翻して高顯樹といふ。釋尊此樹下に誕生したまふ。

胎、出生、棄家、學道、成正覺の光なり。佛子、是を十種の光明と爲す。此光は普く無量無邊の諸の衆生の心を照せり。

佛子、摩耶夫人は此林中に於て、畢利叉樹下に在りて坐せる時、菩薩の十種の受生自在を現ず。何等をか十と爲す。爾時、欲界の一切の天王、天子、天女、色界の諸天及び龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽並びに其眷屬は、皆悉く雲集せり。彼菩薩を供養せんと欲するが爲の故なり。爾時、摩耶夫人は大功德妙色の光明を放ちて、普く一切を照し、其餘の光明は悉く蔽はれて現はれざること猶し聚墨の如く、衆生の一切の煩惱、一切の惡道の苦を除滅せり。又一切諸の毛孔の中に於て大光明を放ち、普く十方を照して障礙する所無し、是を菩薩の第一の受生自在と爲す。復次に佛子、摩耶夫人の腹内に悉く能く三千大千世界を容受し、又能く百億の四天下を顯現し、彼百億の閻浮提の中に於て、王都、京邑、所住の園林、名字各異れり。摩耶夫人は遍く彼處に坐して、諸天に圍遶せられ、悉く爲に不可思議の智慧の自在を顯現す。是を菩薩の第二の受生自在と爲す。復次に佛子、摩耶夫人の一一の毛孔の中、如來過去世に於て菩薩たりし時、諸佛を恭敬し尊重し供養し、彼諸の如來の所說の正法を、毛孔の中に於て皆悉く聞くを得ることを顯現す。譬へば明鏡、淨地水の中に日月の像を見るが如し。摩耶夫人の諸の毛孔の中に如來の過去世に於て菩薩たりし時、諸佛を恭敬し尊重し供養し、彼諸の如來の說きたまひし所の正法を、皆悉く聞くを得ることを顯現するも亦復是の如し。是を菩薩

の第三の受生自在と爲す。復次に佛子、摩耶夫人の一一の毛孔の中に、如來の過去世に諸の世界の中の城邑、聚落、山林、河池、一切諸の所に於て、菩薩行を行ぜしを顯現し、彼諸劫に隨ひて値ひたてまつりし所の諸佛の清淨の善根、壽命、名號と及び善知識との是の如き等の事を皆悉く顯現し、菩薩は彼諸の受生の時に於て摩耶夫人は常に其母と爲る。是を菩薩の第四の受生自在と爲す。復次に佛子、摩耶夫人の一一の毛孔の中に如來の過去世に於て菩薩たりし時、其身色の相、行業の威儀、受けし所の苦樂を顯現す。是を菩薩の第五の受生自在と爲す。復次に佛子、摩耶夫人の一一の毛孔の中に、如來の過去世に於て菩薩たりし時、行ぜし所の布施を顯現し、身體、手足、眼耳鼻舌、骨齒髓腦、心血皮肉、妻子眷屬、城邑聚落、宮殿寶物、一切の內外のもの幷びに諸の受けし者を皆悉く顯現し、又求むる者の言ひし所の音聲を聞く、是を菩薩の第六の受生自在と爲す。復次に佛子、摩耶夫人の身中より、普く過去の諸佛の本菩薩の最後生と爲りし時、莊嚴せる佛刹、衆生、樹林、華鬘、諸の香、塗香末香、摩尼寶王、娛樂讚歎を出し、是の如き等の事は此林に充滿して皆悉く見聞す。是を菩薩の第七の受生自在と爲す。復次に佛子、摩耶夫人の身中より又諸天の宮殿、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽及び人の宮殿を出し、衆寶もて莊嚴し、妙香普く熏じ、能く壞る者無く、諸天に出過す、彼菩薩を供養せんと欲するが爲の故に、此林に充滿す。是を菩薩の第八の受生自在と爲す。復次に佛子、摩耶夫人の身中より、又十不可說の億那由他の世界の微塵に等しき菩薩を出し、其身の色像は相好もて莊

嚴し、光明自在なり、及び其眷屬も皆悉く彼盧舍那佛に同じ。是の諸の大士は彼より出で已りて菩薩を讃歎す。是を菩薩の第九の受生自在と爲す。復次に佛子、菩薩の生るる時、摩耶夫人の前の地の金剛輪の中に於て、大蓮華を生じ、金剛を莖と爲し、十世界微塵に等しき寶葉有り、摩尼寶王を以て其臺と爲す、衆寶香鬘あり、阿僧祇の寶網を以て其上に羅覆し、一切の天王共に執持する所なり、一切の乾闥婆王は普く香雲を雨らして過去の諸佛の功德を讃歎し、一切の夜叉王は圍遶し守護して、自然に衆の妙寶華、娛樂の音聲を出生し、一切の阿修羅王は皆悉く降伏して頭面に敬禮し、一切の迦樓羅王は寶の繒幡を以て虛空を莊嚴し、一切の緊那羅王は歡喜し諦觀して心に厭足無く、菩薩の功德を讃歎し歌頌し、一切の摩睺羅伽王は歡喜踊躍して、普く種種の莊嚴の雲を雨らす。是を菩薩の第十の受生自在と爲す。佛子、摩耶夫人、菩薩を生みし時は、虛空の中に明淨の日を現じたるが如く、雷電の光の如く、山の雲を起すが如く、闇中の燈の如し。菩薩爾時に生を現出すと雖も、而も悉く一切諸法は電、夢、幻の如く、不來不去、不生不滅なりと解達せり。佛子、我一念の中に悉く菩薩の此閻浮提に受生自在、出生自在なるを知る。亦百億の閻浮提に受生自在、出生自在なるを知る。亦三千大千世界の微塵に等しき佛刹、十佛世界の微塵に等しき佛刹をも知る。乃至悉く一切世界の微塵に等しき佛刹に、菩薩の受生自在、出生自在なるを知るも、亦復是の如し。

【爾時、善財】以下法根の深厚を明す。【答へて言はく】答中初に長行。

大方廣佛華嚴經　卷第五十六

東晉天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之十三

爾時、善財、圓滿妙德林天に白して言さく、「天神、此菩薩の受生自在の法門を得たまひてより、其已に久如しきや。」答へて言はく、「佛子、乃し往古の世、億の佛刹の微塵に等しき劫を過ぎて劫有り、可悅樂と名け、彼に世界有り、一切寶と名け、彼劫の世界の中に八十那由他の佛有して世に出興したまひ、其最初の佛を不可壞自在幢王と號けたてまつりき。彼世界の中の一閻浮提に、一王都有り莊嚴幢と名け、王を寶焔眼光と名け、第一の夫人を善喜光と名けたり。此世界にて摩耶夫人は盧舍那佛の母と爲るが如く、彼世界の中にて善喜光夫人は最初の如來の母と爲るも亦復是の如し。善喜光夫人の菩薩を生みし時、二百萬那由他の諸の婇女衆と與に金色園林に詣り、寶樹の枝を攀て彼如來を生みたまへり。時に乳母有り離垢光と名く。諸の天王等は雜香の湯を以て太子を洗浴し、抱きて乳母に授く、乳母敬ひて受け歡喜無量にして卽ち菩薩の普眼境界の三昧を得たり。三昧を得已りて、十方の佛を見るに障礙する所無く、復菩薩の受生自在の法門を得たり。佛子、譬へば

【佛子汝が問ふ所の】次に重頌二十三頌半中、初一頌は誠聽許說、次八頌半は初佛所發心の得法を明し、次十三は更に多佛を供養して淨修增廣を明し、後一は無盡を結歎す。

初め受胎の識の、速疾に無礙なるが如く、此法門を得て、一切佛の受生自在を知るも亦復是の如し。佛子、意に於て云何。彼乳母は豈異人ならんや。我身是なり。我是より來、念念に常に菩薩の受生自在の法海と、盧舍那佛の衆生を敎化したまふ自在の神力とを見る。佛子、我念念の中に悉く三千大千世界の微塵に等しき淨智慧の眼を得て、常に一切世界の微塵に等しき刹と及び彼諸佛とを見、彼如來の自在受生を知る。又復盧舍那佛の初發の大願を了知し、乃至悉く十方諸佛の初發の大願を知るも亦復是の如し。亦彼諸の如來を恭敬し供養し、彼佛の說法を我悉く聞くを得て、受持し修行せり。」

時に彼林天、佛の神力を承けて十方を觀察し、重ねて此一切の境界菩薩の受生自在の法門の義を明さんと欲するが故に、偈を以て頌して曰はく、

佛子汝が問ふ所の、最勝の寂滅の境を
一心に善く諦に聽け、我今因緣を說かん
億の刹塵劫を過ぎて、劫あり可悅樂と名け
八十那由他の、如來世に出興したまひき
最初の如來を、無壞自在幢と名く
我時に彼佛の、金色林の中に生れたまへるを見たりき
乳母は離垢光なり、今は則ち我身是なり
太子の金色の身を、天王抱きて我に授けたり

無上人を敬受して、不見頂を觀察し
圓かなる體は思議し難く、之を觀るに厭足無し
離垢の清淨身は、相好もて自ら莊嚴し
我妙寶の像を見て、歡喜の心無量なり
思惟もて思議し難く、功德海を長養し
彼自在力を見て、我菩提心を發せり
專ら佛の功德を求め、諸の願海を具足し
諸の世界を嚴淨し、三惡道を遠離す
諸の世界の中に於て、一切佛を供養し
專ら大願海を求めて、衆生の苦を除滅し
彼初の佛の法を聞きて、此法門を成就せり
我億刹の塵、一切諸劫の中に於て
菩薩行を修習し、此法門を嚴淨せり
彼劫中の諸佛を、我已に悉く供養して
其正法を守護し、法門海を淨修せり
億刹の塵に等しき劫に、諸佛世に出興したまひ
彼正法輪を持して、議り難き法門を修せり

一念に悉く、一切刹の微塵を了知し
一一の微塵の中に、無量の刹海を見る
彼佛の初め生れたまひし時、自在力を顯現したまへるを
我一念の中に於て、皆悉く分別して見る
不可思議の刹に、彼の諸の菩薩は
或は兜率天に處して、專ら佛の菩提を求むるを見る
無量刹海の中に、彼生は自在にして
無量衆に圍遶せられ、其爲に法を說きたまふを見る
一念の中に悉く、無量の諸の刹海の
一切諸の菩薩は、出家して道場に詣り
不可思議の刹に、最正覺を成ずるを得
諸の方便を顯現して、衆生の苦を除滅し
一一の微塵の中に、無盡の法輪を轉じ
無盡の妙音海もて、普く甘露の法を雨らすを見る
念念の中に悉く、一一の微塵の中の
億刹の塵に等しき佛は、般涅槃を示現したまふを見る
無量の刹海に、如來の初の受生を見

【佛子、迦毘羅城】以下第十法雲地の善知識を明す。
【瞿夷】ゴーピカー(Gopikā)明女と譯す、悉達太子の夫人。
【爾時、彼天は】以下第三は見敬申請中先づ方便して推求す。中に四あり初に天衆迎讃。

一一の諸佛の所にて、無量の身もて供養せり
不思議の刹海の、無量の諸の群生に
我諸の方便を以て、爲に甘露の法を說けり
佛子、我此不思議の法門を知る
無量の諸の劫數に、稱讃すとも盡すべからず

「佛子、我唯此菩薩受生自在の法門を知るのみ。諸の大菩薩は、能く諸劫を以て一念の藏と爲し、一切諸の妙方便を顯現し、諸佛を供養し、大願を滿足し、一切諸佛の正法を覺了し、一切諸趣の受生を示現し、諸佛の所に生れて衆生を教化し、未だ曾て時を失はず。衆生の爲に受生の自在を現じ、諸佛の刹に於て自在雲を現じ、常に一切諸の如來の家に生る。我當に云何が彼の諸の功德を能く知り能く說くべき。佛子、迦毘羅城に釋迦女有り、名けて瞿夷と曰ふ。汝彼に詣りて問へ、『云何が菩薩は生死の中に遊びて衆生を教化するや』と。」時に善財童子、頭面に彼林天の足を敬禮して、遶り畢りて辭退せり。

彼城に向ひ、正念に明淨の菩薩の受生自在の法門を思惟し增廣し、漸漸に遊行して、菩薩會の莊嚴講堂の離憂妙德天の所に至れり。爾時、彼天は一萬の諸天を以て眷屬と爲し、來りて善財を迎へ、白して言さく、「善くぞ來りし大智慧の人、不思議の菩薩の法門を修し、淨直心を以て大願を滿足し、菩薩行を廣め、正法の城に向ひ、菩薩の無量方便を究竟す。我仁者を觀るに、勇猛精進して菩薩道を修し、心に懈倦無く、威儀庠序として、諸根調伏

【善財答へて言はく】以下二に善財の印述。

せり。久しからずして必ず當に無上清淨に莊嚴せる佛の身口意を逮得すべし。相好もて身を嚴り、十力の智慧もて其心を莊嚴し、十方に遊行して衆生を敎化すべし。我仁者を觀るに、修行の勇猛精進力の故に、必ず當に三世の諸佛を見て、諸〻の如來の一切法雲を受け、菩薩の禪定の法門、寂滅の法を修習し、甚深の如來の法門に入るを得べし。何を以ての故に、善知識に詣りて親近し供養し、正念に善知識の敎を思惟し、退轉疲倦の心有る無く、障礙を除滅し、諸魔を降伏して能く壞する者無く、一切衆生をして歡喜を得しむるが故に。【善財答へて言はく、天の說きたまふ所の如く、我願は是の如し。一切衆生をして歡喜して、煩惱、諸の不善法を除滅し、善法を具足し、安隱の樂を得しめんと欲するなり。一切衆生は、衆〻の惡業と煩惱の結とを以ての故に、三惡道に入りて無量の苦を受く、菩薩見已りて憂悲の心を起す。譬へば人有り、唯一子のみ有りて愛念の情重きに、忽ち人有り、來りて其身の肢節手足を割截せんに、慈父見已りて、悼惻悲念するが如し。菩薩若し衆生の惡業の緣、煩惱の結を造るが故に、三惡道に入りて無量の苦を受くるを見ば、是の如きを見已りて痛心悲念するも亦復是の如し。菩薩若し衆生の身口意の諸〻の善業を具ふるが故に天人の中に生れ、身心の樂を受くるを見ば、是の如きを見已りて、歡喜無量なり。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は自の爲の故に薩婆若を求めず。生死の五欲の快樂を貪らず、心想の諸見、顚倒、結使、纏縛、貪愛、邪見に隨はず、衆生の種種の樂想に著せず、禪味に著せず、結礙を爲して生死に流轉せず。菩薩は但諸〻の有海の中の一切衆生、無量の苦

【爾時、善財は】三に天衆供歎。

を受くるを見て、大悲の願を發して之を攝取す。常に大悲大願の力を以ての故に、菩薩行を行じ、諸佛を供養し、薩婆若を求め、衆生をして煩惱を遠離し、佛の世界を淨めしめ、一切の惡心の衆生を調伏して、悉く淸淨の身心を具足し、菩薩行を行じて疲倦無からしめんと欲す。若し菩薩行りて是の如く行ぜば、悉く能く一切衆生を莊嚴せん。天人の樂を出生し長養するが故に。父母と爲りて皆菩提心を安立せしむるが故に。養育と爲りて皆菩薩道を究竟せしむるが故に。衞護と爲りて皆三惡道を遠離せしむるが故に。大船師と爲りて皆生死の海を度るを得しむるが故に。歸依と爲りて諸魔煩惱の怖を捨てしむるが故に。導師と爲りて皆淸涼の處を逮得せしむるが故に。知濟と爲りて皆佛刹海に度るを得しむるが故に。主藏臣と爲りて皆法寶の洲に入るを得しむるが故に。淨妙の華と爲りて一切佛の功德の華を開かしむるが故に。大光明と爲りて普く功德の智慧光を放つが故に。歡喜と爲りて皆端嚴にして勝殊妙ならしむるが故に。所尊と爲りて一切諸の惡業を遠離するが故に。普賢と爲りて一切諸の功德を具足するが故に。燈明と爲りて常に智慧の淨妙の光を放つが故に。慶雲と爲りて常に一切の甘露の法を雨らすが故に。天神、菩薩摩訶薩は是の如く行ぜば、一切衆生悉く皆愛念せん、正法を樂ふが故に。爾時、善財將に法堂に昇らんとす。

彼離憂妙德天は、百萬の眷屬と與に、各各妙香華鬘及び諸の雜寶を齎持し、善財の上に散じて偈を以て頌して曰はく、

【無量無數劫に】十偈もて其德を歎ず、初三利生行、次三無礙行、次一求友行、後三は勇猛行を歎ず。

無量無數劫に、世燈或は出世し
普く衆生の爲の故に、正しく佛の菩提を求む
無量億の諸劫にも、見難く値遇し難し
功德日は今出でて、世間の闇を照除したまふ
諸の衆生の類を見るに、愚惑癡に覆はるゝに
廣く大悲の心を發して、專ら無師の道を求む
淸淨の正直心は、身と壽命とを惜まず
善知識に親近して、專ら佛の菩提を求む
一切所依無く、世間に著せず
離垢の淸淨心は、無礙なること虛空の如し
諸の菩薩行を行じて、妙功德を具滿し
大智慧の光を放ちて、普く一切世を照す
世間を離れず、亦世間に著せず
世を行くに障礙無きこと、風の虛空に遊ぶが如し
譬へば大災起りて、一切能く滅する無きが如く
勇猛精進の火の、道を求むるも亦是の如し
勇猛の大精進は、一切能く壞る莫し

【爾時、離憂等】四に昇堂推覓。
【法堂に昇り已りて】二に其勝報を見る。
【爾時、善財】三に敬を致して請問す。

金剛慧の師子、遊行するに畏るる所無し
一切法海の中の、一切の諸佛海に
善知識に親近して、速かに彼諸佛を見ん

爾時、離憂妙德天、偈もて讃歎し已りて、法を恭敬するが故に、倶に法堂に昇る。法堂に昇り已りて周遍して彼釋迦女を推求するに、即ち寶蓮華藏の師子の座に坐したまふを見る。八萬四千の采女に圍遶せらる。皆是れ貴族王者の女にして、悉く過去に彼菩薩の所に於て諸の行を修行し、彼菩薩の一切善根に同うし、常に布施愛語を以て衆生を攝取し、薩婆若を求めて一切を利益し、諸の衆生をして佛の菩提に同ぜしめ、大悲を首と爲し、普く衆生を念ふこと一子を想ふが如く、大慈を修習して普く一切を覆ふ。過去に已に曾て菩薩の所に於て、不思議の勝妙の智慧を修し、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得、諸の波羅蜜を具足し成滿し、心に所著無く、直心智慧皆悉く清淨にして薩婆若を求め、障蓋の網を離れ、諸難を超出し、淨法身を得、普賢の行を行じ、菩薩の一切の諸力を長養し、圓滿なる淨き智慧日を成就せり。

爾時、善財、五體を地に投じ、瞿夷を敬禮し、禮し已りて合掌して一面に於て住し、白して言さく「大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ知らず、菩薩は云何が生死の中に行きて而も所染無く、一切諸法の實相を覺了して、聲聞緣覺の地を超出し、如來地に住するも、而も菩薩の所行を捨離せず、菩薩行を修して佛地を離れず、世

【爾時、瞿夷】以下已が法界を示す初に問を勸ず。

【善男子、若し菩薩等】以下正しく己が法界を示す、中初に法義を示す中先づ長行。

間を超出し、法身圓滿にして世に應じて受生し、普く種種諸の方便身を現じ、法の無性を知り、一切衆生の身を示現し、甚深の法を解り、妙音聲を以て爲に法を說き、衆生の空を知るも、能く諸の世間を化するを捨てず、一切佛の不生不滅を知るも、而も能く供養して心に退轉無く、業報無きを知るも、而も善業を行じて休息有る無きや。』

爾時、瞿夷、是の如きの言を作さく、『善い哉善い哉、善男子。能く諸の菩薩摩訶薩の所行の法を問へり。普賢の諸の行願を修習する者は能く是の如く問ふ。諦に聽け諦に聽け、善く之を思念せよ。我當に佛の神力を承けて汝が爲に解說すべし。善男子、若し菩薩有りて十法を成就せば、則ち能く因陀羅網普智光明菩薩の行を滿足せん。何等をか十と爲す。謂ゆる善知識に依りて廣く無量の諸の弘誓の願を發し、淨き勝妙の正直の希望を修し、一切智の功德を集め、佛の出世を聞きて歡喜無量にして、心常に樂ひて三世佛の所に住し、一切諸の大菩薩に隨順し、悉く一切佛の護持する所と爲り、淸淨の大悲もて、生死を遠離す。是を十法と爲す。若し菩薩有りて此法を成就せば、則ち能く因陀羅網普智光明菩薩の行を滿足せん。佛子、若し諸の菩薩勇猛精進して心に退轉無ければ、佛の無盡の法を出生し修習せん。善知識に値ふが故に。佛子、菩薩に十法有りて善知識に値ふ。何等をか十と爲す。謂ゆる身命を惜しまず、世の樂を求めず、諸法の相を知りて、而も一切智願を捨離せず、法界を觀察して三有の海を離れ、依住する所無く、深く一切菩薩の諸願に入り、普く一切諸佛の世界を照し、菩薩の圓滿の智慧を淨修す。是を十法の善

【爾時、瞿夷】後偈頌十三中初二は前文の善知識に依るを頌し、次九は餘の九行を頌し、後二は行用を結歎す。

知識に値ふと爲す。』

爾時、瞿夷、佛の神力を承けて、十方を觀察し、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

知識に諂ふ無く、智慧廣く無量にして
專ら佛の菩提を求め、諸の衆生を利益す
善知識を恭敬して、其心を佛の想の如くし
勇猛精進の力もて、因陀網の行を具す
解脫の心を增廣し、其量虛空に均しく
三世の佛刹と、及び衆生とを攝取す
直心は虛空の如く、煩惱の垢を遠離し
佛の功德を出生す、是を身雲の行と爲す
不思議の智慧は、功德海を積習し
清淨の福業藏は、世間に染せず
一切諸佛の所にて、法を聞きて厭足無く
智慧の燈普く照す、是を照世の行と爲す
一念に皆能く、十方刹海の佛に詣りて
法を聞きて分別して知る、是を隨順の行と爲す

【善男子我已に等】法名を立つ。【善財白して言さく】以下法用を明す。

佛の眷屬海を見、三昧海を究竟し
諸の大願を滿足す、是れ因陀網の行なり
未來劫に修行して、諸佛に護念せられ
普く諸の世界を照す、是を法光の行と爲す
大悲もて衆生を見、智日世間に出で
法光癡闇を除く、是を智日の行と爲す
諸趣の衆生を見るに、生死の中に廻流せり
爲に淨法輪を轉ず、是を普賢の行と爲す
智慧の身は無量にして、應に隨ひて示現し
普く一切趣に於て、諸の群生を度脫す
大慈悲を發起して、普く一切を覆ひ
遍く諸の群生を照し、佛の菩提を得しむ

『善男子、我已に一切菩薩の三昧海を分別し觀察する法門を成就せり。』善財白して言さく『大聖、此法門は境界云何。』答へて言はく『善男子、我是法門に入りて、此娑婆世界の衆生、佛刹の微塵に等しき劫の中に此に死し彼に生じ、善惡の業を作して諸の果報を受くるを知る。生死道に在りて生死を出づる者に正定、邪定、及び不定聚あり、有使の善根、無使の善根有り、具足の善根、不具足の善根、不善の善根、善根に攝せらるる不善根、

不善根に攝せらる善根、善根の所起、不善根の所起、一切の善惡を皆悉く了知す。彼諸劫の中に佛世に興りたまふも、我悉く了知す。彼諸佛の初め道心を發し、菩薩行を行じ、一切諸の大願海を出生するを行じ、彼一切諸佛を供養し、菩薩行を具し等正覺を成じ、正法輪を轉じ、自在力を現じて衆生を化度するを知る。彼眷屬の聲聞緣覺の修行する所、過去に一切善根を修習して、明淨の智を得、寂滅自在の法門を成就し、種種の自在神力を顯現して、衆生を教化して般涅槃するを知る。彼眷屬の諸の菩薩衆、初め道心を發し、善根を修習し、種種諸の大願行を出生し、諸波羅蜜を成就し滿足し、種種の菩薩道を莊嚴し、菩薩の諸地の自在力、菩薩の諸地の住、諸の菩薩地を分別し修習し、菩薩地を淨め、菩薩地、菩薩の諸地の相を修し、菩薩の諸地の智、菩薩の諸攝の智、菩薩の善巧方便もて衆生を教化すること、菩薩の諸住、菩薩の圓滿の淨行、菩薩の自在行、菩薩の三昧海、菩薩の方便を知り、念念の中に於て悉く菩薩の三昧海、一切種智、電光法雲、諸法忍を得て、一切智底を盡すを知る。彼菩薩の諸佛の刹海を知り、法海を究竟し、衆生海を知り、一切菩薩の法門を修習し、大願を滿足し、種種の自在神力を顯現す、是の如き等の事を、我悉く了知す、此娑婆世界の如く、十方世界、世界性、世界海、世界輪、世界圓滿、世界分別、世界旋、世界轉、世界蓮華、世界須彌、世界相の中の事を知るも、亦復是の如し、盧舍那佛の本願力の故に、我悉く深く入り、分別し念知す。何を以ての故に。此法門は悉く一切衆生の心海を知り、一切衆生の積集する善根を知り、一切衆生の有垢、

【善財白して言さく】次に法根を顯す。

【答へて曰はく】初答中四あり、一初佛に於て修行聞法を明す。中先づ長行。中に十五段あり。初に古世の王都。

【其王太子】二に太子の福報。

【時に母人有り】以下三に寶女端嚴

【太子見已りて】以下四に太子求婚

有淨を知り、一切衆生の性を知り、一切聲聞の三昧自在の法門を知り、一切の緣覺、菩薩、諸佛の三昧、自在の法門を知る。是の如き等の事を悉く分別して知る。」

善財白して言さく「大聖、阿耨多羅三藐三菩提心を發してより來、其已に久如しきや。」

答へて曰はく「佛子、乃し往古の世、世界の微塵に等しき劫を過ぎて劫有り、勝光明と名け、時に世界有り、離恐怖と名けき。彼世界の中に四天下有り、彼閻浮提の中に一王都有り、妙德樹須彌山と名け、八十の王都に於て最殊勝と爲す。彼に王有り、一切寶主と名け、六萬の婇女、五百の大臣、五百の王子有り、端正勇健にして怨敵を摧伏す。其王太子を增上功德主と名け、顏貌姝妙にして、相好もて身を嚴り、萬の婇女と與に倶に妙幢蓋を持し、諸の寶華を散じ、諸の妓樂を作し、妙寶の車に乘りて香牙山に詣り、園林に遊戲せり。時に彼道路坦然として平正に、種種に莊嚴して、衆の妙華を散じ、寶樹行列し、衆の妙寶の帳を以て其上に覆ひ、彼路の側に於て、衆の寶樹、雜種の寶衣、諸の莊嚴具、肴饍飮食を積み、是の如き等の事を、其須むる所に隨ひて、皆之を給施す。時に母人有り、名けて善現と曰ひ、一童女を將ふ、離垢妙德と名く、端嚴姝妙にして、修短所を得、顏容倫無く、目髮は金色にして、脣齒は丹素、口より梵音を出し、才能は巧妙に、言語は聰辯にして慈心を修習し、見るもの厭く無く、貪恚癡少く、常に慚愧を懷ひ、心に諂曲無し。妙寶の車に乘り、婇女に圍遶せられ、母に從ひて遊觀せり。太子の前むに先ちて、香牙園に至る。太子見已りて、染愛の心を生じ、其母に語りて言はく「賢女を娉し以て我妻

【時に彼園外】以下五に佛興ると女夢む。

【夢より覺め已り】以下六に天勸めて佛に詣らしむ。

【時に彼女人】以下七に女天子を求む。十偈あり初三は自ら己が德の行侶たるに堪ふることを述べ、後七は太子の德を歎じて納受を請ふ。

と爲さんと欲す」と。母、女に語りて言はく、「太子今汝を求めて妃と爲さんと欲す、意に於て云何」と。女、母に白して言はく、「若し我をして彼の妃たらしめんと欲せば、當に自ら殞滅すべし」と。母、女に報げて曰はく、「此言を作す勿れ。所以は何ん。今此太子は悉く已に轉輪王の相を具足せり、必ず聖主と爲らんには、玉女寶有らん。汝爾時に當り給使にも堪へず。此處尊勝なり、雜心を生ずる莫れ」と。時に彼園外に一道場有り、法雲光と名く、勝日光如來、應供、等正覺有して、世に出興したまひ、彼道場に於て、無上道を成じたまへり。時に女は夢に彼如來の身を見たり。夢より覺め已りて、空中に天有り、之に告げて曰はく、「汝夢に見る所は是れ勝日光佛なり。成道より已來、始めて七日を經、今道場に在して無量の菩薩大衆に圍遶せられたまふ。彼佛の衆會には一切の天龍八部鬼神、乃至無量の淨居の諸天、地神、風神、海神、火神、山神、樹神、叢林、藥草、城廓等の神、皆悉く雲集し、世尊を奉覲して正法を聽受せり」と。

時に彼女人、是語を聞き已りて、太子の所に詣り、合掌して立ち、偈を以て白して言はく、

我色は世間に最たり、智慧倫匹無く
才妙にして言論を善くし、觀る者厭足無し
太子應當に知るべし、我心は善く貞潔にして
志尙く心端直に、淸淨にして所染無し

【爾時、太子】以下八に太子女に問

瞋恚、貪欲及び愚癡を遠離し
眞淨の直心を以て、諸の群生を饒益す
我太子の身を見るに、相好自ら莊嚴したまふ
見已りて喜ぶこと無量にして、諸根悉く調伏す
妙體は猶し淨きこと金のごとく、髮は美しく紺青の色
額は廣く目は明徹せり、必ず自在王と爲りたまはん
其身は金山を踰え、相好自ら嚴飾す
我今太子の所に、合掌し恭敬して住す
其目は淨く修くして廣し、方臆は師子の如く
觀る者厭足無し、妙音もて應に我を納れたまふべし
舌相を廣長にして妙なること、猶し赤銅色の如く
梵音の聲を演出して、聞く者踊躍して喜ぶ
口は方に牙は深くして固く、齒は白くして齊密なり
若し覩見するもの有らば、一切皆歡喜せん
離垢の淸淨身、相を具すること三十二
此妙相を成就せば、必ず轉輪王と爲らん

爾時、太子、彼女に語りて言はく、「汝は是れ誰の女にして、誰が爲に守護せらるるや。

ふ十一偈を説く中初四は己が過を離れたることを顯し後七は勸めて勝行を成ぜしむ。

若し他に屬せば我則ち宜しく染愛の心を起すべからず」

爾時、太子偈を説きて問うて言はく、

淸淨功德の身、見るもの厭足無し
誰をか汝が父母と爲す、誰が爲にか守護せらる
若し先に屬する所有らば、我欲想を起さざらん
分に非ずして婬心を生ずれば、命終りて惡道に墮せん
豪貴、種種の富樂の爲の故に
是の如き等の、放逸貪亂の心を發起すべからず
種種に邪見を生じ、幻誑にして諸の諂曲あり
是の如くにして諸惡を造らば、世間に流轉せん
父母知識の所に、應に恭敬の心を起し
慈悲は廣く、一切諸の群萌を覆ひ護るべし
若し一切處に於て、從ひて法を聞く所の者は
能く諸善を生ずるが故に、應に恭敬の心を起すべし
一切諸の導師と、正法の菩薩衆と
衆僧の功德海とを、皆悉く應に恭敬すべし
諸の功德を修習し、一切の惡を遠離し

【時に彼女の母】以下九に女母の偈もて女に勝徳あれば納受を願ふと答ふ。二十四偈中初二は總じて女の縁を、次六は女の生處を、次五は勝れたる色聲を具へたることと、次四は智德人に勝れたること、次二は世患を遠離したること、後五は出世の行を具へたることを說く。

正法に安住して、廣く菩薩の道を行ぜよ
若し歸依無き者には、應に大慈の心を起すべし
諸の三惡道に在るものには、應に大悲の念を發すべし
一切諸の法界は、成る有れば必ず敗るる有り
捨心もて平等に觀じ、煩惱魔に隨ふこと莫れ
應に菩提心を發して、諸の群生を覺悟し
無量劫に修行して、疲倦の心を起さざるべし

時に彼女の母、偈を說いて白して言はく、

唯願くば太子、此女生れてより來
乃し今長成するに至るまでの、一切諸の因緣を聽きたまへ
太子、所生の日に、女は蓮華より生れ
其日は淨くして修く廣く、肢節悉く具足せり
我曾て春月に於て、娑羅の園に遊觀し
諸の卉木を觀見するに、種種の華榮え茂れり
同遊の八百の女は、容儀悉く端嚴にして
皆已に具足して、諸の巧技能法を知れり
彼園に浴地有り、名けて衆莊嚴と曰ふ

我池の岸に於て坐し、婇女衆に圍遶せられき
時に彼浴池の中より、千葉の蓮華生じ
寶の葉、瑠璃の莖、閻浮檀金の臺あり
衆の妙寶の香鬚は普く淨き光明を放ちて
遍く閻浮提を照すこと、猶し日の初めて出づるが若し
時に此玉女、彼蓮華より生れたるを見
觀る者皆念言すらく、此れ則ち善業の報なりと
目髮は紺青の色にして、其身は紫金の如く
衆寶を以て莊嚴し、觀る者心に厭くこと無し
垢を離れ淨くして穢無く、肢節悉く具足せるは
猶し眞金の像の、寶蓮華に安處せるが如し
毛孔の栴檀香は、善く一切に熏じ
口より蓮華の香を出し、妙梵音の聲を演ぶ
此れ是玉女寶は、世間に希に有る所
身相悉く具足し、種種妙に莊嚴す
一切諸の技術と、世間の言論の法とは
究竟じて悉く練せり、願くば爲に哀みて納受したまへ

此れ是玉女寶は、身分悉く圓滿し
功德具りて莊嚴せるは、宿行の得る所なり
善く衆生の病と、患を起す所由とを知り
又對治の法を知りて、衆の疑惑を除滅す
一切の閻浮提の、衆生の語言の法と
種種の妓樂の音とに、善く通達せざる無し
此女は功德を修め、女人の法を遠離し
能く衆生の心を轉ず、唯願くば哀みて納受したまへ
嫉妬の心を捨離し、五欲に醉はず
瞋恚の心を起さず、忍智慧を修習す
精進して淨戒を持ち、能く一切の事を辦じ
專ら諸の功德を求む、太子願くば納受したまへ
若し諸の貧窮、老病にして衆苦に逼られ
歸依する所無き者を見ば、大悲もて普く慈念す
常に衆生を利せんことを欲ひて、自ら安樂を求めず
功德もて身を莊嚴し、一切を饒益す
諸の威儀の中に於て、常に不放逸を修して

【爾時、太子等】以下十に太子母に答ふ、先づ長行。能く道を障へざれば受納すべきを答ふ。

【爾時、太子重ね】以下重頌、七偈半あり。

諸の善法を修習し、見る者惓ばざる無し
功德普く莊嚴し、染汚の心を遠離し
常に善知識を求めて、恭敬し樂ひて供養す
大慈の法を修習し、惱結の心を棄捨し
智慧與等無し、唯願くば哀みて納受したまへ

爾時、太子答へて言はく「善女、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、無量劫に菩薩行を行じ、一切の功德智慧を積習し、一切の諸波羅蜜を淨修し、一切諸佛を恭敬し供養し、正法を護持し、一切諸佛の世界を嚴淨し、如來の種をして相續して斷ぜざらしめ、衆生を敎化して生死の苦を滅し、究竟樂に住せしめんと欲す。衆生をして智慧の眼を淨め、菩薩道に住し、菩薩行を修し、一切菩薩の諸地を具足せしめ、一切衆生をして心大いに歡喜せしめんと欲して、我當に未來劫を盡して檀波羅蜜を行じ、悉く一切の國城妻子、支節手足、頭目髓腦を捨て、或は家に在りては布施し、家を出でては道を修むべし。汝爾時に於て障礙を作し、我道心を壞る莫れ。」

爾時、太子重ねて彼女の爲に偈を說きて言はく、

衆生を哀愍するが故に、我菩提心を發し
無量無數劫に、智と功德とを積集せん
無量劫海の中に、諸の大願を修習し

【時に女答へて】以下十一に命に順へば志を同うして唯納められんことを答ふ。十四偈あり、初三は求慕の心堅きこと、次六は勝行を同うせんことを希ふこと。後五は佛を說きて往詣を勸む。

　廣く菩薩行を修め、一切地を具足せん
　三世の諸佛の所にて、六波羅蜜を學び
　法を聞きて能く修行し、專ら菩薩道を求め
　十方垢濁の刹を、我悉く嚴淨ならしめ
　諸の群生の、三惡道の苦患を除滅し
　諸の方便力を以て、廣く一切衆を度し
　愚癡の闇を除滅して、一切智の道に住せしめん
　諸佛海を供養し、一切地を淨修し
　大慈悲を發起して、內外の一切を捨てん
　若し我、來り求むるものに、妻子諸の眷屬
　在家及び出家に施さんに、汝障礙を作す莫れ
　若し能く是の如くならば、我則ち汝を納受せん

時に女答へて言はく、「敬んで來教に從ひ、乃至出家したまふとも、敢て礙ふること有らじ」と。卽ち偈を說きて言はく、

　一切劫海の中に、地獄の火身を燒くとも
　若し能く我を眷納したまはば、甘心じて此苦を受けん
　一切生死の身を、碎末にして微塵の如くするも

若し能く我を容納したまはば、甘心じて此苦を受けん
無量劫に頂に、一切の金剛山を戴くとも
若し能く我を容納したまはば、甘心じて此苦を受けん
一切の生死海に、我を以て施したまふも悔ゆる無し
若し法王の處を得ば、願くば我も亦然らしめたまへ
無量無數劫に、菩薩道を修行し
來りて我を求むる者有らば、歡喜して願くば施與したまへ
太子衆苦を見て、菩提心を發起し
無量の大慈悲もて、衆生及び我を攝したまへ
我豪富を求めず、五欲の樂を貪らず
但願くば共に法を行じて、太子の妻と爲らん
廣明の淨眼を修して、慈愍もて衆生を觀じ
染汚の心を起さざれば、必ず菩薩道を成ぜん
太子遊行の時、地より衆の寶華を出す
此相は疑有る無く、必ず轉輪王と爲りたまはん
我昔夢に於て、正覺勝日光
菩提樹下に坐したまひ、大衆悉く圍遶せるを見き

【爾時、太子】十二に太子佛の出世を聞き歡喜して寶を贈る。
【時に彼女の母】十三に母意を遂げ重ねて女の德を歎ず、十偈中初三は德は太子と同じきことを歎じ、餘の七は三業の勝れたることを歎ず。

夢中に彼佛を見るに、手を以て我頂を摩でたまへり
覺め已りて大いに歡喜し、踊躍量有ること無かりき
空中に時に天有り、名けて淸淨身と日ふ
彼天我爲に、道場に佛世に興りたまふと說けり
我是の如きの念を發さん、若し太子を見ば
當に爲に分別して、勝日光佛の興りたまひしを說くべしと
我昔志願せし所は、今に於て悉く成滿す
唯願くば俱に往詣して、彼如來を供養せん

爾時、太子、彼如來世に出興したまひたるを聞き、心大いに歡喜し、踊躍無量にして、彼佛を見んと欲し、五百の寶を以て彼女人に散じ、又妙德光藏淨周羅寶、並に妙衣の服を與へたり。時に彼女の母は、卽ち太子の爲に偈を說いて言はく、

今此玉女寶は、功德もて身を莊嚴す
我昔志樂せし所の、此願は今成滿したり
戒を持ちて放逸ならず、智慧諸の功德は
普く一切世に於て、最勝にして倫匹無し
此女は蓮華より生れ、種姓に譏嫌無く
諸の不善を遠離して、太子と志願を同じうす

【時に彼太子】以下十四に相與に佛の許に詣る。

此女の身は柔軟なること、猶し天の繒纊の如し
彼手摩を蒙る者は、衆の患悉く除滅せん
毛孔より出す所の香は、芬馨倫比無し
衆生若し聞ぐ者有らば、悉く淨戒に住せん
其身は淨くして垢無し、譬へば眞金の像の如し
若し覩見するもの有らば、害を離れ慈心を具へん
口より微妙の音を出し、聞かんことを樂はざる者無し
若し斯音を聽く有らば、諸の惡業を遠離せん
心淨くして瑕穢無く、質直にして諂曲無し
其聞く所の法に隨ひて、說の如く能く修行す
善知識、及び尊重せらるる者を恭敬して
貪欲の心を遠離し、專ら正法を求む
此女の心は、妙色の蓮華より生れたると
世間の諸の榮樂とを恃まず、唯無上道を求むるのみ

時に彼太子、此女と倶に並に一萬の婇女ありて、香牙園を出で、各寶車に乘り、道場に往詣し、車を下りて歩を進め、遙に如來の相好嚴身を見、其心澄淨なること、鏡、淵渟の如く、諸根の調伏せること猶し象王の如くにして、心大いに歡喜し、踊躍無量なり。婇

【時に彼太子】以下十五に太子還つて父王に告ぐ。中にて父王の出家、聞法得益、弘法、結會古今等を明す。文に就きて知るべし。

女衆と佛所に往詣し、頭面に足を禮して、恭敬し供養し遶ること無數匝し各五百の衆妙の寶華を持して、彼佛を供養し彼如來の爲に五百の衆香の樓閣を興立し、雜寶もて嚴飾せり。時に彼如來の爲に普門燈明修多羅を說きたまふ。經を說きたまふを聞き已りて、一切法の中に於て三昧海を得たり。謂ゆる諸佛願海三昧、普く三世を照す光藏三昧、一切の諸佛を對見する三昧、普く一切衆生を照す三昧、普く世界海を照す淨智の燈光明三昧、普く衆生の根海を照す智の光明三昧、衆生を救護する光雲三昧、衆生を教化する現前の智燈明三昧、諸佛の法輪を聞持する三昧、普賢行を具する淨雲三昧なり。一切法の中に於て是の如き等の諸〻の三昧海を得たり。時に彼玉女は、諸法の中に於て不可壞寂靜の法門を得、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得たり。時に彼太子、諸〻の眷屬と彼如來を禮し、遶ること無數匝し、辭退して宮に還り、父王の所に詣りて頭面に敬禮して、白して言さく、「大王、彼道場の上に、勝日光佛、始めて正覺を成じたまへり。」と。王、太子に問はく、「誰より聞けるや。」と。答へて言はく、「彼離垢妙德女より聞けり。」時に王聞き已りて、歡喜無量なるは、猶し貧人の大寶藏を得たるが如くにして、是の如きの念を作さく、「佛は無上の寶にして難値難遇なり、能く衆生の惡道貧苦を滅したまひ、無上醫と爲りて對治の法を善くし、衆生の諸〻の煩惱の患を除滅し、善導師と爲りて、生死海に於て衆生を濟度し、涅槃の處に置きたまふ。」と。是念を作し已りて、諸〻の小王及び諸〻の群臣、並に婆羅門、刹利、居士を召すに、皆悉く集會せり。而して之に告げて曰はく、「我太子の無上

の吉語を聞けり、云はく、勝日光佛世に出興したまへりと。我是を聞き已りて、歡喜無量、以て酬報する無し。今王位を捨て太子に授與すべし」と。王位を捨て已りて、諸の眷屬と與に道場の勝日光佛の所に往詣して、頭面に足を禮し退きて一面に坐せり。

爾時、如來、彼王及び諸の眷屬を觀察して白毫相の中より大光明を放ちたまふ。名けて一切衆生心燈と曰ひ、普く十方無量の世界の一切の諸王を照し、如來の不可思議の自在神力を顯現し、應に化を受くべき者には彼心を淨めしめ、不可思議の功德を具足して、世間を超出し、其身清淨にして、微妙の音を以て大衆の爲に離癡翳の法、眞實燈陀羅尼門を説きたまひ、佛刹の微塵に等しき陀羅尼を以て眷屬と爲す。彼王聞き已りて即ち廣大の智慧の光明を得たり。閻浮提の微塵に等しき菩薩も此陀羅尼を得、六十那由他の人は諸漏盡くるを得、一萬の衆生は皆離垢清淨の法眼を得、無量の衆生は悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。又不可思議の自在神力を以て、十方刹に於て三乘の法を以て衆生を化度したまへり。爾時、彼王、是の如きの念を作さく、「此諸の功德は若し出家せざれば即ち辨ずる能はず。我今應當に如來の所に於て出家修道すべし」と。前んで佛に白して言さく、「今世尊に從ひ出家學道せん。」と。佛、王の言に答へたまはく、「宜しく此時を知るべし。」と。時に王即ち一萬の眷屬と倶に出家して道を修し、皆離癡翳の法、眞實燈陀羅尼門及び世界の微塵に等しき陀羅尼を得、又菩薩の十明及び無量の辯と、塵無礙の身とを得たり。諸佛の所に詣りて、悉く佛の正法輪を聞きて受持し、大法師と爲り、神通力を以て、諸

の世界に遍く化すべき所に隨ひて、彼が爲に身を現じ、佛の法と並に諸々の過去の菩薩の所行と菩薩の本生とを讃歎し、又佛の無量無邊の自在神力を讃歎して正法を守護せり。

爾時、太子は月の十五日、王の道を得たる時に、其正嚴に於て婇女に圍遶せられ、七寶自ら至れり。一に金輪寶、勝自在と名く。二に象寶、名けて靑山と曰ふ。三には紺馬寶、勇疾風と名く。四に神珠寶、光藏雲と名く。五に主藏臣寶、名けて大財と曰ふ。六に玉女寶、淨妙德と名く。七に主兵臣寶、離垢眼と名く。是七寶を得て閻浮提に於て轉輪王と作れり。時に千の子有り、端正にして勇猛、能く怨敵を伏す。時に彼人民は熾盛にして豐樂自在なり。八萬の王城有り。城に各五百の樓閣と大なる僧伽藍とを建立し、衆寶もて莊嚴し、一一の僧伽藍に廣大の塔を起し、一切衆寶を以て莊嚴と爲し、香華繒蓋もて之を供養せり。一一の王城に次第に佛を請じ、不思議の衆妙の供具を以て如來を供養せり。時に佛城に入りたまひ、無量の衆生は皆大いに歡喜して、善根を長養し、菩提心を發して廣大の悲を以て衆生を饒益し、正しく佛法を求めて眞實の義を知り、平等に三世の諸法を觀察し、明淨の智慧は普く三世を照して、三世の佛の次第に世に出でたまふを知り、衆生を攝取して菩薩道に向ひ、菩薩行を行じ、菩薩の平等の正法に安住し、如來の法輪の智光を逮得し、深く法海に入り、能く己が身に於て一切刹を見、能く諸根と弘誓の願海とを知り、一切智を得たり。爾時、如來次第に彼諸王の請を受けたまひし時、是の如く無量の衆生を饒益せり。佛子、爾時、太子增上功德主は豈異人ならんや。今の釋迦牟尼佛是なり。爾時

【彼佛の滅度】以下二に更に六十百千億那由他佛に値ひ修行供養するを明す。

の王、寶主は寶華佛是なり、寶華如來は今東方に在す。世界海の微塵に等しき世界海を過ぎて一世界海有り、法界虛空光雲と名け、中に世界有り、佛圓滿光妙德燈と名く、彼に道場有り、名けて一切天王光幢と曰ふ。彼佛始めて正覺を成じ、不可說の佛刹微塵に等しき菩薩大衆の爲に圍遶せられて法を說きたまふ。彼寶華佛、菩薩たりし時、彼刹海を淨めたり。彼刹海の中に三世の諸佛世に出興したまふは、皆寶華佛の菩薩たりし時に、敎化して阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめたまひしなり。爾時、女の母善現は、今の我母善目是なり。王の眷屬は彼如來の所の大衆是なり、皆悉く普賢の諸行を具足し、大願成就して、淸淨の法身は普く世間を照し、其心壞する無く、菩薩の諸の三昧門を逮得し、淸淨眼を以て皆悉く一切諸佛を對見し、一切如來は虛空に等しき妙音聲雲を以て正法輪を轉じたまひ、悉く聞きて受持し、諸法の中に於て自在力を得、出入の息の頃に、遍く一切諸佛の世界に遊び、微妙の音を以て衆生の爲に法を說き、而も未だ曾て一切の佛所を離れず、未來劫を盡して菩薩行を修し、化すべき所に隨ひて悉く爲に身を現ず。爾時の離垢妙德寶女は、增上功德主轉輪王と共に、四事もて勝日光佛を供養したてまつりしは、我身是なり。

彼佛の滅度の後に、其世界の中に六十百千億那由他の佛有して世に出興したまへり。其最初の佛を明淨身と名け、次を淨明月普照智と名け、次を智觀幢と名け、次を廣智光明王と名け、次を精進金剛那羅延と名け、次を不壞智と名け、次を智普緣と名け、次を淨

【其最後の佛を等】三に末後佛所に於て此法門を得るを明す。

【佛子我此法門等】以下四に後塵數劫中に於て此法を修治するを明す。

徳智雲と名け、次を師子智光と名け、次を周羅光明と名け、次を功徳光幢と名け、次を智日幢と名け、次を開寶蓮華身と名け、次を功徳光と名け、次を智光雲と名け、次を普明淨月と名け、次を莊嚴蓋妙音と名け、次を師子勇猛智照と名け、次を法界慧月と名け、次を覺樂生身虛空電光と名け、次を善鼻妙香と名け、次を寂滅響と名け、次を甘露山と名け、次を法海雷音と名け、次を無壞智音と名け、次を覺空電光周羅と名け、次を月光白毫相雲と名け、次を圓面淨慧と名け、次を善覺智華光と名け、次を寶焰山妙德王と名け、次を廣德夜光と名け、次を妙寶月幢と名け、次を具三昧身と名け、次を勝寶光王と名け、次を現普智光と名け、次を焰海門燈と名け、次を離垢妙音王と名け、次を無等功德と名け、次を勝幢と名け、次を修臂と名け、次を本願淨月と名け、次を眞實智燈と名け、次を法上妙音と名け、次を明淨妙德藏王と名け、次を乘幢と名け、次を法海蓮華と名けたてまつる。佛子、彼一劫の中に是の如く次第に六十百千億那由他の佛世に出興したまひ、我悉く親近し恭敬し供養せり。其最後の佛を廣解脱光と名け、彼佛所に於て淨智の眼を得たり。佛子、爾時、彼佛、初め正覺を成じ、城に入りて敎化したまへり。我時に王の夫人と爲り、彼大王と與に恭敬し供養して、彼佛の如來性起燈修多羅を說きたまひしを聞き已りて淨智眼を得、又觀察菩薩三昧海の法門を得たり。

佛子、我此法門を得已りて、世界の微塵に等しき劫に於て受持し修習し、是諸劫の中に、無量の佛の世に出興したまひしに値ひて、我悉く恭敬し供養せり、佛子、我或は一劫に

一如來世に出興したまひしに値ひて恭敬し供養し、或は二、或は三、或は不可說、或は一劫に於て世界の微塵に等しき佛の世に出興したまひしに値ひて、我悉く恭敬し供養せり、而も未だ諸の大菩薩の身量、像貌及び其身業、心行、智慧三昧の境界を知る能はず。佛子、我若し菩薩の行を修する者を見ば、歡喜無量にして恭敬し供養し、諸の方便を以て之を攝取し、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得しめん。佛子、我世界の微塵に等しき劫に於て諸佛に値遇して恭敬し供養し、彼佛の說法を悉く聞きて受持せん。時に彼諸佛は各種種の修多羅を以て我爲に此法門を說きたまへり。我之を聞き已りて悉く三世の佛刹海の中の諸の如來の所、佛の眷屬の所に於て此法門を修し、又菩薩行を行じ、菩薩の大願海種種の法門の中に此法門を修せしも、猶未だ普賢菩薩の所行の法門を知る能はず。何を以ての故に。佛子、普賢の法門は猶し虛空の無量無邊なるが如く、又衆生及び三世海、十方刹海、及び諸の法界の無量無邊なるが如し。佛子、普賢菩薩の法門は諸佛の身の境界と齊等なり。我世界の微塵に等しき劫に於て菩薩の身を觀じて心に厭足無し。何を以ての故に。我菩薩の一一の毛孔の中に於て念念に悉く無量無邊の莊嚴せる世界に、佛道場に坐して等正覺を成じ、大衆の中に於て微妙の音を以て正法輪を轉じ、種種の修多羅、種種の諸乘、種種の淸淨を說きたまふを見たてまつるなり。復次に佛子、我菩薩の一一の毛孔の中に於て、念念に悉く諸の衆生海、各所住有り、及び其境界諸根は同じからず、三世の中に於て菩提心を發し、菩薩行を行じ、大願海を具し、諸の菩薩の無

【爾時、瞿夷】上來總じて四十一人寄位修行相の善知識を明し竟り、以下會緣入實相の善知識十人を明す。初に摩耶の智幻法門を得るを明す。
【摩耶】マーヤー（Maya）幻生、大智母等と譯す、釋尊の生母。
【爾時、瞿夷】次に偈もて前法を頌す、三十三中初一は總じて已が行を顯し、次十七は遠

量無邊の波羅蜜海及び諸の菩薩の本生海を淨め、無量無邊の大慈悲海もて衆生を攝取し、悉く歡喜せしむるを見る。乃至悉く一切の菩薩中宮に現處し、婇女に圍遶せらるるを見る。佛子、我菩薩の一一の毛孔の中に於て、皆悉く是の如き等の事を覩見す。

佛子、我唯此法門を知るのみ。諸の大菩薩は皆悉く諸の方便海を究竟し、一切衆生に等しき身を顯現して世間に隨順し、一切の毛孔に於て普く一切相海の光明を放ち、法は無性にして諸の衆生の類は等しく虛空の如く、一切至る處皆悉く如如なりと了り、神變を顯現して諸の法界に於て自在力を得、普門の一切諸地の法門海中に遊戲せり。我當に云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。」

爾時、瞿夷、善財に語げて言はく、「善男子、此迦毘羅城に摩耶夫人あり、汝彼に詣りて問へ、『云何が菩薩は諸行を修習し、世法に染まず、諸佛を供養し、菩薩行に於て不退轉を得、障礙を除滅し、他に由りて悟らず、諸の法門に入りて常に能く一切の佛所に應現し、衆生を攝取して、盡未來劫に菩薩行を修して退轉せず、究竟じて大乘の諸願を滿足し、一切衆生の善根を長養するや』と。」

爾時、瞿夷、佛の神力を承けて、重ねて此義を明さんと欲して、偈を以て頌して曰はく、

我樂ひて、菩薩の諸行を修行する者を見ば
歡喜の心無量にして、皆悉く之を攝取す
乃昔、久遠の世に、百の刹塵劫を過ぎて

く前劫に佛に事へしく因緣を說き、下十五頌は正しく前長行所說の因緣を說く。

劫有り淸淨と名け、世界を光明と名けき
爾時彼劫の中に、六十百千億
那由他の諸佛、世間に出興したまひき
最後の等正覺を、號して法幢燈と爲す
彼佛の滅度の後に、王有り智山と名く
大自在力を以て、王閻浮提を領し
悉く能く廣く、一切諸の怨敵を降伏せり
王子五百有り、端正にして身は殊妙
其體は淨く圓滿にして、見る者厭足無し
深く諸佛の法を信じ、恭敬し供養して
正法藏を守護し、受持し樂ひて修習せり
彼王に太子有り、名けて善光明と曰ひ
三十相もて身を嚴り、諸の群生を饒益せり
五百億の人と倶に、出家して學道を行じ
勇猛精進の力にて、彼佛の法を護持せり
王都を智樹と名け、一億の城圍遶す
林有り靜德と名け、衆寶の樹もて莊嚴せり

善光此林に住して、廣く佛の正法を說き
辯才究盡無く、衆をして悉く清淨ならしむ
或は乞食の爲の故に、彼王の都城に入るも
庠序として威儀有り、見る者欣ばざる莫し
遊歩することは師子の如く、志意常に安諦にして
諸根悉く調伏し、念慧現じて前に在り
爾時長者有り、名けて歡喜幢と曰ひ
我は長者の女と爲り、名けて隨順光と曰ふ
時に我城中に於て、善光明に遇ひ見えしに
相好もて身を莊嚴し、歡喜の心無量なり
次に乞うて我門に至る、我染心を以て施し
摩尼莊嚴の具を、彼善光の鉢に投じぬ
染愛の心を以て、彼佛子を供養すと雖も
二百五十劫に、三惡道を經ず
常に天人の中に於て、尊貴なる王の家に生れ
恆に善光明の、妙相莊嚴の身を見る
後過ぐる所の劫、二百有五十に於て

普現女の家に生れ、離垢妙德と名く
我勝自在のものを見て、供養の心を發起し
身と壽命とを惜まず、其所に隨ひて施與せり
時に太子と倶に、佛勝日光を觀たてまつり
歡喜の心無量にして、菩提心を發起せり
彼劫の最後の佛を、廣解脱光と名けて
世間に出興したまひ、我値ひて悉く供養せり
彼最後の佛に從ひて、淨智慧の眼を得
諸の法相を了知し、虛妄の倒を除滅せり
菩薩の、三昧海の法門を觀察するを得て
一念に悉く、不可思議の刹を覩見す
彼諸佛の刹を見るに、或は淨く或は垢穢なり
淨に於ても貪り樂はず、穢に於ても憎惡せず
普く諸の世界に、如來道場に坐したまふを見
一念に諸佛の、不思議の光海を見る
亦佛の眷屬を見るに、一切の三摩提と
一切の諸の法門とは、皆悉く障礙無し

又彼業行を知り、其所住の地
及び諸の大願海に随ひて、一念に悉く了知せり
我菩薩の身に於て、諸の菩薩等を見
無量劫に修行して、一切能く測る無し
一一の毛孔に、阿僧祇劫の刹
風輪、水火輪、一切の大地輪
種種の所依の住、世界の形類の相
諸の妙莊嚴の具、衆生身の差別を見る
又世界海の、一切諸の世界に
諸佛世に出興したまひ、法を說きて衆生を度したまふを見る
我無量劫に於て、菩薩行を修習するも
猶菩薩の、身業心の智慧を知らず

時に善財童子、頭面に彼羅夷の足を敬禮し、遶り畢りて辭退せり。

大方廣佛華嚴經　卷第五十七

東晋天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之十四

【爾時、善財】依教趣入中、後を念ず。

爾時、善財童子は、是の如きの念を作さく、『我當に云何が善知識に見ゆべき。善知識は世間を遠離して無所住に住し、諸入に著せず、障礙を超出して無礙の道に趣き、淨法身と善業の化身とを具へ、明淨の智を以て諸の世間を觀じ、大願成滿して佛の法身、如意の法身、非生滅の身、非來去の身、非虛實の身、非聚散の身、一切諸相即一相の身、邊見を離れたる身、所著無き身、窮盡無き身、衆の虛妄を滅して電光の如き身、幻夢の如き身、鏡像の如き身、淨日の如き身、一切諸方に充滿する化身、三世の中に於て壞する無き法身、非身の身を持し、是の如き等の身は一切世間の見る能はざる所、唯是れ普賢菩薩のみの所見なり。彼善知識は無礙の行を行ず。我當に云何が能く見えて親近し、其相貌を知り、法を聞きて受持すべき。』

【是念を作し已り】以下次に伴善識知の方便引導を明す。中に三あり、初に城天教へて心城を守らしむ。

是念を作し已りて時に城天有り、名けて寶眼と曰ひ、眷屬に圍遶せられ、虛空の中に在りて、善財の爲に妙莊嚴の身を現じ、天の寶冠と寶莊嚴の具とを以て善財を供養し、是の

如きの言を作さく、「善男子、應に心城を守護すべし、生死を離れんが故に。應に心城を莊嚴すべし、十力を得んが故に。應に心城を淨むべし、慳嫉と諸の諂曲とを遠離せんが故に。應に熾然猛焰の心城を滅すべし、諸禪三昧の法門相續して自在を得んが故に。應に心城を照すべし、常に般若波羅蜜の光を以て如來海及び眷屬を照さんが故に。應に心城を長養すべし、諸佛の方便道を攝取せんが故に。應に心城を堅固にすべし、普賢の諸の行願を出生せんが故に。應に心城を修すべし、諸魔、魔民及び餘の怨敵能く壞る莫きが故に。應に心城を明かにすべし、諸の如來の智光明を得んが故に。應に無壞の心城を修すべし、能く如來の正法雲を受けんが故に。應に心城を具すべし、已が心に悉く一切如來の功德海を受けんが故に。應に心城を廣くすべし、大慈普く一切衆生を覆はんが故に。應に心城を蓋ふべし、法を以て普く不善を覆障するが故に。應に心城に進むべし、無量の大悲もて一切衆生を救はんが故に。應に心城の門を開くべし、正しく一切三世の佛を念ぜんが故に。應に心城に達すべし、悉く諸佛の轉じたまふ正法輪修多羅の法門は因緣より起ると知るが故に。應に心城の道を知るべし、一切智の道を開示し顯現せんが故に。應に心城を持すべし、三世佛の諸の願海を具するが故に。應に心城の力を知るべし、法界の功德力を長養せんが故に。應に心城の普照の光明を放つべし、一切衆生の諸根、欲性、結業、習氣、諸の垢淨を知らんが故に。應に心城の自在力を知るべし、一切諸の法界を攝取せんが故に。應に心城を瑩すべし、佛の念に住せんが故に。應に心城の實相を知るべし、

【爾時、天有り】以下第二に法德天讃じて加持するを明す。

【時に菩薩の法堂羅刹等】以下第三に羅刹王の教へて行を起さしむるを明す

諸法は實性無しと了達せんが故に。應に心境の如幻なるを知るべし、一切智の正法域に入らんが故に。菩薩摩訶薩、若し是の如く諸の心境を知らば、則ち能く一切善根を積集せん。何を以ての故に。無量の諸の障礙を鋤除するが故に。謂ゆる佛を見るの障、法を聞くの障、佛を供養するの障、衆生を攝するの障、佛刹を淨むるの障なり。佛子、菩薩摩訶薩に若し是の如きの無障礙の心有らば、少方便を以て能く一切諸の善知識に見え、一切種智を究竟し成就せん」と。

爾時、天有り、法妙德と名く。虛空の中に在りて、妙聲もて摩耶夫人を讃歎し、又種種の色光明網を放ちて、普く無量の諸佛の世界を照せり。爾時、善財、光明網を見るに、諸佛の身を照し、遶ること一匝し已りて、然る後に還り來りて善財の頂に入り、其身に充滿せり。爾時、善財、則ち離垢の淨光明眼を得て、一切の愚癡の闇障を除滅し、翳眼を離るるを得て一切衆生の實生を了知し、離垢眼を得て一切法の性を觀じ、淨慧眼を得て一切刹の性を觀じ、淨光眼を得て佛の法身を見、普明眼を得て不思議の如來の色身を觀じ、無礙光眼を得て一切世界の成敗を觀察し、遍光眼を得て、一切佛の正法輪を轉じて修多羅を出生したまふを見、普境界眼を得て無量の諸佛の神力もて衆生を教化するを觀察し、普見眼を得て一切世界は因緣に隨ひて起り、諸佛の世に興りたまふを觀ず。

時に菩薩の法堂を守護する羅刹鬼王有り、名けて善眼と曰ふ。妻子と倶なり。一萬の羅刹の眷屬に圍遶せられ、虛空の中に在りて衆の妙華を散じ、善財に語りて言はく、「善男

子、若し菩薩有り、十法を成就せば則ち能く諸の善知識に親近せん。何等をか十と爲す。謂ゆる直心清淨にして諂曲を遠離し、大悲を壞せずして衆生を攝取し、衆生の眞實性に非ざるを觀察し、薩婆若に於て心退轉せず、佛の大衆に於て堅き信力を得、淨慧眼を以て諸法の性を觀じ、無壞の大悲もて普く衆生を覆ひ、明淨の慧光もて諸の法界を了り、對治の法を善くし、甘露の雲を雨らして生死の苦を除き、善知識に順ひ、明淨眼を以て諸法の性を相續して斷ぜざるを觀ず。菩薩此十法を成就せば、則ち能く諸の善知識に親近せん。復次に佛子、菩薩は十の三昧門を成就せば、則ち能く諸の善知識を覩見せん。何等をか十と爲す。謂ゆる淨法虛空圓滿三昧、一切の方海を觀察する三昧、一切境界を分別する三昧、十方諸佛に對見する三昧、功德藏海を長養する三昧、念念に善知識を捨てざる三昧、現前に一切如來の功德と善知識とを見る三昧、善知識に詣る三昧、常に一切の善知識を離れざるを得る三昧、善知識を恭敬し供養して過失無き三昧なり。善男子、菩薩此十の三昧門を成就せば、則ち能く諸の善知識を覩見せん。又諸の善知識の微妙音聲もて正法輪を轉ずる三昧の法門を得ん。若し菩薩有りて此法門に住せば、悉く一切諸佛の平等を知り、常に能く諸の善知識を覩見せん。」爾時、善財、羅刹に答へて言はく、「善い哉善い哉、哀愍を以ての故に。方便して我を教へて善知識に見えしむ。願くば我爲に說きたまへ、云何が善知識の所に往詣し、何の方處、城邑、聚落に於て善知識を求むべき。」答へて言はく、『善男子、十方を敬禮して善知識を求め、正念に一切境界を思惟して善知識を求

【爾時、善財】次第四に勝依正を見るを明す、

【攝取法界方藏】十方を攝取し各法界を盡し其中に羅在する故に藏といふ。

め、勇猛自在に遍く十方に遊びて善知識を求めよ。身を知り行を知ること夢の如く電の如くにして善知識に詣れ。」

爾時、善財、其敎に隨順して卽時に大寶蓮華を覩見す、地より涌出し、金剛を莖と爲し、摩尼を葉と爲し、淨寶を臺と爲し、諸の妙香鬚あり、阿僧祇の摩尼寶の網を以て其上に羅覆せり。蓮華臺の上に一樓觀有り、名けて攝取法界方藏と日ひ、金剛を地と爲す。樓に千柱有り、一切摩尼の衆寶もて合成し、種種に莊嚴して阿僧祇の妙寶の瓔珞を懸け、阿僧祇の寶を以て欄楯と爲せり。爾時、善財、樓觀の中を見るに摩尼寶の師子の座有り、衆寶もて莊飾し、雜寶の欄楯あり、衆の妙衣を敷き、寶網を上に覆ひ、寶幢の蓋を建て、金鈴の中に於て妙音聲を出し、妙香華を雨らし、諸の寶鈴の中より諸の菩薩の願行の音聲を出し、寶月幢の中より佛の化身を出し、淨摩尼の中より如來の次第受生を顯現し、日摩尼の中より無量の光を放ちて十方刹を照し、摩尼寶王光明幢の中より一切の佛の圓滿の光明を放ち、明淨寶の中より衆の供具と一切衆生燈佛正法雲を出し、如意寶の中より念念に普賢の自在を出生して法界に充滿し、須彌幢の中より天の妙聲を出して如來を讚歎したてまつる。

爾時、善財は此不可思議の莊嚴せる高座と、不可思議の眷屬の圍遶するを見、摩耶夫人彼座上に處したまふを見る。端正姝妙にして淨き色身を具へたまひ、三世間を出づる色身、一切世間に對現する色身、一切の有趣を遠離する色身、其所應に隨ひて敎化する色身、一

切衆生に染せられざる色身、廣大を起す色身、一切衆生に等しき色身、一切衆生無等の色身、一切衆生見るに虚しからざる色身、種種の色身、化すべき所に隨ひて顯現する色身、無量の形像の色身、普門の形像の色身、一切衆生に對現する色身、廣大の自在門にて莊嚴する色身、一切衆生を教化する色身、一切衆生に對現して形を垂るる色身、一切時に現じて種種不壞の色身、一切衆生究竟不究竟住の色身、不去の色身、一切趣に於て滅する所無きが故に。不來の色身、一切趣に於て生ずる所無きが故に。不起の色身、起らず現ぜざるが故に。不滅の色身、一切世間の語言道を離るるが故に。不虚の色身、所得に隨ふが故に。不欺の色身、世間に隨應するが故に。至る所無き色身、生ぜず死せざるが故に。不壞の色身、法性は無壞の故に。無相の色身、三世に語言斷ゆるが故に。一相の色身、無相にして善く相を說くが故に。如電の色身、一切衆生の心に隨應するが故に。如幻の色身、智幻滿するが故に。如焔の色身、衆生の想を持するが故に。如影の色身、一切衆生の本願は相續不斷の故に。如夢の色身、衆生に隨應して壞すべからざるが故に。法界を究竟する色身、淨きこと虚空の如くなるが故に、大悲を現ずる色身、一切衆生を成就するが故に。無礙の門を顯現する色身、念念の中に於て法界に滿つるが故に。無量無邊の色身、一切世間を淨め語言の道を離るるが故に。所依無き色身、衆生を教化して願を究竟するが故に。住持の色身、能く一切衆生の事を辦ずるが故に。不生の色身、幻願滿ずるが故に。無比の色身、世間を出づるが故に。隨應の色身、應に隨ひて度するが故に。不雜の色身、業に隨ひて相

續するが故に。如意珠の色身、一切衆生の願を滿足するが故に。虚妄を離れたる色身、一切衆生は虚妄に起るが故に。覺觀を離れたる色身、一切衆生思察する能はざるが故に。不究竟の色身、生死を除滅するが故に。清淨の色身、如來の覺觀を離れたるが故に。是の如きの色は色に非ず、色は電の如くなるが故に。受も受に非ず、世間の苦受を除滅するが故に、一切の想を離る、一切衆生の想を分別するが故に。出生の行は行に非ず、諸の業は幻の如くなるが故に。識の境界を離る、菩薩の智慧の願を滿足するが故に、空にして所有無し、一切衆生の語言斷ゆるが故に。色身成就す、妙色滅せざるが故に。爾時、善財、摩耶夫人の衆生に隨應して是の如き種種無量の色身を示現したまふを見る。衆生或は他化自在天王女の身に過ぎ、乃至四天王女の身に過ぎたるを見、或は龍王女の身に過ぎ、乃至人王女の身に過ぎたるを見る。

爾時、善財、是の如き等の種種の色身を見て、一切衆生の善根を長養し、不可壞の檀波羅蜜を行じて、大悲普く一切衆生を念ひ、如來の無量の功德を出生し、勇猛精進して薩婆若を求め、一切法は皆寂滅の相なるを知りて深忍海に入り、一切無壞の禪定を具足して、一切三昧の境界を修習し、如來の圓滿の禪定を逮得し、一切衆生の諸の煩惱海を滅し、皆悉く一切法界を嚴淨して、諸佛の法輪を分別し了知し、明淨の智を以て一切法海を觀じ、一切佛を見て心に厭足無く、次第に三世の如來を觀察して一切佛の門を開き、三世の佛の次第に世に興りたまふを見、佛の道戒を淨め、如如は空の如く、一切衆生を攝して

【爾時、善財】以下第五に見已つて敬を致すを明す。

【一面に…白して言さく】以下第六に請を申ぶ。

【答へて言はく】以下第四大段己が法界を示す。中に四初に名體を標す。

【大願智幻の法門】大願とは行願力此

之を教化し、淨法身を得て一切佛刹を淨め、諸の大誓願もて究竟じて一切衆生を化度し、一念に遍く諸佛の境界を充し、菩薩の自在神力を出生し、無量の清淨色身を顯現し、一切の魔力を降し、功德力を增長し、善法力を生じて一切の佛力を得、菩薩力を具へ、一切智力を生ず。如來の智慧は普く一切を照して、悉く無量の衆生の心海を知り、衆生の諸の根、欲、性を了知し、一身にして十方の無量無邊の佛刹に充滿し、悉く分別して佛刹の成敗を知り、淨智の眼を開きて、三世海、諸佛の法海を見て、一切如來の功德を出生し、一切菩薩の修する所の功德を知り、初發心より乃し究竟に至るまで、一切衆生の善根を長養し、一切世間に於て、一切諸佛の功德を讚歎し、一切菩薩の行願を成滿せり。

爾時、善財、摩耶夫人に是の如き等の閻浮提の微塵に等しき未曾有の事有るを見て、卽ち己身を變化すること悉く摩耶夫人と等しく、合掌し敬禮して五體を地に投じ、卽ち無量無邊の諸の三昧門を得、正念し修習し、分別し觀察し、隨順し、出生し印證せり。證し已りて三昧より起つ。起ち已りて摩耶夫人及び諸の眷屬を敬ひ遶り、恭敬し合掌して、一面に於て住し、白して言さく、「大聖、文殊師利菩薩は往昔我に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、善知識を求めて親近し供養するを教へたまひき。我已に漸く求めて大聖の所に至れり。願くば爲に云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するやを演說したまへ。」答へて言はく、「佛子、我已に大願智幻の法門を成就せり。此法門を得たるが故に、盧舍那如來の母と爲りて、此閻浮提の迦毘羅城の淨飯王の宮に於て、右脇より悉達太子を生み不可思

に由りて、生生常に佛母たり、大智とは即ち般若を母となす、幻とは願智の所作、佛を生ずるの義なり、謂く己身に於て小を壞せず、廣く佛身を容れ、實に生なくして生を現ずるなり。

【此法門を得たるが故】以下二に其業用を明す。初め舍那佛の母となる

議の自在神力を顯現せり。善男子、菩薩兜率天に於て命終する時、一一の毛孔より大光明を放ち、一切如來受生と名けて功德を圓滿し、不可說不可說の佛刹微塵に等しき菩薩の受生の莊嚴を顯現して、普く一切世界を照す。照し已りて來りて我頂に觸れ、遍く我身の一切の毛孔に入れり。入り已りて普く菩薩の受生自在の莊嚴を見る。又出家し道場に往詣し、等正覺を成じ、菩薩、天人、大衆に圍遶せられ、恭敬し供養せられて正法輪を轉ずるを見る。彼諸の如來は過去世に於て菩薩行を行じ、諸佛の所に於て恭敬し供養して菩提心を發し、諸佛刹を淨め、無量の化身は法界に充滿して衆生を敎化し、乃至大般涅槃を示現せり。是の如き等の事を皆悉く覩見す。又善男子、彼妙光明來りて我身に入る。我身爾時世間を超出して虛空と等しく、亦人身に過ぎずして、悉く能く十方の菩薩の莊嚴せる宮殿を容受せり。

爾時、菩薩、兜率天より降神して下りたまふ。時に、十佛刹の微塵に等しき菩薩と倶なりき。皆悉く行と大願と善根と莊嚴と法門とを同じうし、智慧の自在なること一切諸地の淸淨の法身、無量の色身、普賢の諸の大願行を究竟すること悉く皆同等なり、是の如きの菩薩の眷屬に圍遶せらる。又八萬の諸の龍王と倶なりき。娑伽羅龍王等及び諸の夜叉八部神等、恭敬し供養し、降神して下りたまひし時、大光明を放ちて普く世界を照し、自在力を現じて一切諸の惡道の苦を除滅し、巧方便を以て不可思議の衆生を敎化し、皆悉く宿世の業行を知らしめ、諸の菩薩をして不放逸を修め、染著する所無

【善男子我盧舍那等】以下次に總じて賢劫千佛の母となる。

く、衆生を救護し、悉く此菩薩身は是の如き等の諸の奇特の事を現ずるを覩見せしめ、大衆と俱に來りて我胎に處せり。彼諸の菩薩は我胎内に於て遊行自在なり。或は三千大千世界を以て一步と爲し、或は不可說不可說の佛刹微塵に等しき世界を以て一步と爲し、又念念の中に十方一切世界の一切の佛所の、不可說不可說の菩薩の眷屬、及び四天王、忉利天王、乃至梵王、是の如き等の一切の天王、皆我胎に入りて菩薩を見て恭敬し供養し、正法を聽受せんと欲へり。悉く皆是の如き等の衆を容受して、而も胎廣大ならず、亦迫迮せず。此世界に於て是の如きの神變受生を示現し、十方一切の閻浮提の中も亦復是の如し。亦身を分たずして種種に現化し、其所應に隨ひて菩薩の母と爲る。何を以ての故に。此大願智幻の法門を修するが故なり。

善男子、我盧舍那佛の母と爲り、拘樓孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、彌勒佛、師子佛、法幢佛、善眼佛、淨華佛、妙德華佛、提舍佛、弗沙佛、歡喜意佛、自在佛、離垢佛、明淨月佛、執炬佛、樂靜佛、金剛楯佛、清淨義佛、阿私陀佛、度彼岸佛、高焰山佛、執燈佛、寶蓮華佛、功德稱佛、無量德持佛、妙德燈佛、莊嚴身佛、善威儀佛、妙德慈佛、善幢佛、智盛佛、無量音佛、無諍佛、散疑佛、清淨佛、廣光佛、速淨佛、妙德雲佛、莊嚴頂髮佛、樹王佛、莊嚴寶冠佛、智海佛、淨寶佛、堅天冠佛、具諸願佛、大自在佛、妙德王佛、勝妙德佛、栴檀雲佛、廣淨眼佛、殊勝慧佛、修習智佛、高王佛、自在慧佛、離色佛、師子喜佛、無上王佛、妙德頂佛、金剛智山佛、妙德藏佛、寶網嚴身佛、善慧佛、自在天佛、大地天佛、無著功德佛、衆牙佛、慧光佛、妙德天佛、

【爾時、善財】以下法の根原を得るを辨ず。

無上座佛、無上德佛、仙人伏根佛、隨順語佛、自在德幢佛、明淨幢佛、分別支佛、毘舍佉佛、放一切衆生香光明佛、金剛寶嚴佛、歡喜眼佛、滅欲覺佛、高大身佛、善天佛、無上天佛、向寂滅佛、覺智佛、離塵垢佛、光焰王佛、安住佛、毘舍佉天佛、金剛山佛、智焰盛妙德佛、安隱佛、優波提舍佛、具淨德佛、樂賢德佛、第一義勇佛、百光焰佛、一增上佛、深音聲佛、大地王佛、自淨佛、山音聲佛、殊勝佛、不可壞佛、無上醫佛、功德月佛、不違逆佛、功德聚佛、月出佛、功德天佛、光明盛佛、婆羅陰佛、藥王佛、勝寶佛、金剛慧佛、八十妙德佛、一切無壞佛、大名稱王佛、勇健進持佛、無量光佛、大莊嚴焰佛、法王不虛佛、不退地佛、明淨天佛、苦行佛、淨天佛、同意佛、解脫音佛、無壞王佛、滅諂僞佛、淨薝蔔光佛、善勝月佛、執明炬佛、淨嚴身佛、不可說佛、觀衆生佛、無量光佛、無畏音佛、最勝天佛、無畏智慧佛、妙德華佛、月光焰佛、不退意佛、離愛佛、不著慧佛、長養德聚佛、滅惡道佛、無量化佛、師子吼佛、義不退佛、見無礙佛、降衆魔佛、不著相佛、離虛妄佛、淸淨海佛、不可沮壞須彌山佛、無著智佛、無量座佛、眞魔戰佛、隨師行佛、無上調佛、常月佛、饒益王佛、不動陰佛、饒益名佛、饒益慧佛、壽持佛、壽名佛、淸稱佛、無壞慧佛、色明淨佛、無相智佛、勇無動佛、難思妙德佛、同月行佛、無量身佛、隨順王佛、增壽天佛、佛子、是の如き等の賢劫の一切佛、此世界に於て等正覺を成したまふは、我悉く母と爲り、亦十方一切の世界に於て衆生を教化す。』

爾時、善財白して言さく、『大聖、此法門を得たまひて其已に久如しきや。』答へて言はく、『佛子、乃し往古の世、不可思議にして諸の菩薩の通明の境界に非ざる不可數の劫を

過ぎて、劫有り淨光明と名けき。彼に世界有り、名けて妙德須彌山王と曰ひ、其土は清淨にして諸の垢壞無く、衆寶もて合成し、種種に嚴飾して見る者厭く無し。彼世界の中に千億の四天下有り、諸の四天下の中に一四天下有り。彼一四天下の中に、八十億の大王の都有り。彼王都の中に一王都有り、名けて智幢と曰ひ、轉輪王有り、名けて勇盛と曰へり。彼王都の北に一道場有り、月光明と名け、其道場神を慈妙德と名けき。時に菩薩有り、離垢幢と名け、道場に坐して正覺を成ずるに臨み、時に惡魔有り、金剛光明と名け、眷屬と俱に菩薩の所に至り、其道行を壞らんとせり。時に勇盛王、菩薩の神力自在を具足し、兵衆の彼魔軍より多くを化作して之を摧伏せり。時に彼菩薩正覺を成ずるを得たり。時に道場神此事を見已りて歡喜無量にして是の如きの願を發すらく「此轉輪王は乃し成佛に至るまで、我其母と爲らん」と。善男子、我曾て彼道場に於て十那由他の佛を供養せり。善男子、彼道場神は豈異人ならんや。我身是なり。轉輪王は盧舍那佛是なり。善男子、我爾時願を發してより已來、盧舍那佛、一切有に於て菩薩行を行じて、衆生を教化し乃し最後の受生に至るまで、我當に母と爲れり。復次に善男子、現在過去の十方無量無邊の諸佛、大光明を放ち、來りて我身と宮殿と住處とを照したれば、彼が最後の生まで、我悉く母と爲れり。善男子、我唯此大願智幻の法門を知るのみ。諸の大菩薩は大悲藏を具して衆生を教化し、心に厭足無く、自在の法を得て一一の毛孔より一切佛の自在神力を現ず。我當に云何が彼功德行を能く知り、能く說くべき。」

【爾時、摩耶夫人】第二に幻智念力の知識を明す。

【天女答へて言はく】以下己が法界を示す。

【我菩薩の解脫を得】人を以て法に簡ぶ、佛解脫と同じからず、解脫は即ち是れ法門なり

【無礙念清淨莊嚴】憶念するところに隨つて現前せざる無きを名けて無礙となし、所念分明なるを清淨、佛境具德を念ずるを莊嚴と名く、宿命念智を以て體となすなり。

爾時、摩耶夫人、善財童子に告げて言はく、「善男子、此世界の三十三天に於て王有り、正念王と名け、王に童女有り、天主光と名く。汝彼に詣りて問へ、『云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや』」と。時に善財童子、敬んで其教を受け、頭面に禮を作し、遶ること無數匝し、戀慕し瞻仰し、却行して退けり。

遂に天宮に往いて彼童女に見え、足を禮して圍遶し、合掌して前みて住し、白して言さく、「聖者、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。我、聖者は、能く誘誨したまふと聞けり。願くば我爲に說きたまへ」。天女答へて言はく、「善男子、我菩薩の解脫を得、無礙念清淨莊嚴と名く。善男子、我過去を念ふに最勝の劫有り、青蓮華と名けき。我彼劫の中に於て恆河沙に等しき諸佛如來を供養せり。彼諸の如來始め出家より我皆瞻奉し、守護し供養し僧伽藍を造り、什物を營辦せり。又彼諸佛の菩薩と爲り母胎に住せし時より、誕生の時、七歩を行く時、大師子吼の時、童子の位に住して宮中に在りし時、菩提樹に向ひて正覺を成ぜし時、正法輪を轉じ佛の神變を現じて衆生を教化し調伏せるの時、是の如き一切諸の所作の事、初發心より乃し法の盡くるに至るまで、我皆明かに憶ひて、遺餘有ること無く、常に現在前し、念持して忘れず。又過去を憶ふに劫を善地と名く、我彼に於て十恆河沙に等しき諸佛如來を供養せり、又過去の劫を爲妙德と名く、我彼に於て一佛世界の微塵に等しき諸佛如來を供養せり。又劫を無所得と名く、我彼に於て八十四億百千那由他の諸佛如來

【善男子迦毘羅城に】以下第三幻智師範の知識を明す

を供養せり。又劫を善光と名く、我彼に於て閻浮提の微塵に等しき諸佛如來を供養せり。又劫を無量光と名く、我彼に於て二十恆河沙に等しき諸佛如來を供養せり。又劫を精進德と名く、我彼に於て一恆河沙に等しき諸佛如來を供養せり。又劫を善悲と名く、我彼に於て八十恆河沙に等しき諸佛如來を供養せり。又劫を勝遊と名く、我彼に於て六十恆河沙に等しき諸佛如來を供養せり。又劫を妙月と名く、我彼に於て七十恆河沙に等しき諸佛如來を供養せり。善男子、是の如く恆河沙の劫を憶念するに我常に諸佛如來、應供、等正覺を捨てざりき。彼一切諸の如來の所に隨ひて、此無礙念清淨莊嚴の菩薩の解脫を聞き、受持し修行して恆に間斷せず。隨順して趣入せり。是の如き先劫の有ゆる如來の初の菩薩より乃し法の盡くるに至るまでの一切の神變は、我淨嚴解脫の力を以て、皆隨ひて憶念し、明了に現前に持して順行し、曾て懈廢無し。善男子、我唯此無礙念清淨の解脫を知るのみ。諸の菩薩摩訶薩の生死の夜を出でて、朗然として明徹し、永く癡冥を離れて、未だ曾て惛寐せず、心に諸蓋無く、身行輕安にして、諸の法性に於て清淨に覺了し、十力を成就して群生を開悟せるが如きは、我云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、迦毘羅城に童子師有り、名けて遍友と曰ふ、汝彼に詣りて問へ「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。」

時に善財童子、聞法を以ての故に身心遍悅し、不思議の善根を流派し增廣して、頭面に天主光の足を敬禮し、遶ること無數匝し、戀仰して辭去せり。

天宮より下りて漸く彼城に向ひ、遍友の所に至り、足を禮して圍遶し、合掌し恭敬して一面に於て立ち、白して言さく、『聖者、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。我、聖者は能く誘誨したまふと聞けり。願くば我爲に說きたまへ。』遍友答へて言はく、『善男子、此に童子有り、善知衆藝と名け、菩薩の字智を學べり。汝之に問ふべし。當に汝が爲に說くべし。』

爾時、善財即ち其所に至りて、頭頂禮敬して一面に於て立ち、白して言さく、『聖者、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。我聖者は善能く誘誨したまふと聞けり。願くば我爲に說きたまへ。』時に彼童子、善財に告げて言はく、『善男子、我菩薩の解脫を得て善知衆藝と名く。我恆に此解脫に入る根本の字を唱持せり。阿字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを菩薩の威德各別の境界と名け、羅字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを平等一味最上無邊と名け、波字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを法界無異相と名け、者字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを普輪斷差別と名け。多字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを得無依無上と名け、邏字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを離依止無垢と名け、茶字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを不退轉の行と名け、婆字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを金剛場と名け、茶字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを名けて普輪と曰ひ、沙字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを名けて海藏と爲し、他字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを普生安住と名け、那字

【遍友答へて言はく】以下第四に幻智輪具門の知識を明す。
【善知衆藝】衆藝とは所知所解世間の技藝、則ち文字等なり。善知とは能知の善なり。
【我唯知】以下業用を明す中、別して四十二字門を說く、每字四十二字を唱へて其字義を觀ずる一種の觀法
【阿字を唱ふる時等】威德を、梵に阿答摩といふ、是故に世の阿字を唱ふる時、即ち轉じて般若の威德に入る。阿般同じきな以ての故、即ち此彼を得るを以て難しとなす故なり。除門準知すべし。

を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを圓滿光と名け、邪字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを差別積集と名け、史吒字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを普光明息諸煩惱と名く、迦字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを差別一味と名け、娑字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを霈然法雨と名け、摩字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを大流湍激衆峯齊峙と名け、伽字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを普上安立と名け、娑他字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを眞如藏遍平等と名け、社字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを入世間海清淨と名け、室者字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを一切諸佛正念莊嚴と名け、拕字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを觀察圓滿法聚と名け、奢字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを一切諸佛教授輪光と名け、佉字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを淨修因地現前智藏と名け、叉字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを息諸業海藏蘊と名け、娑多字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを蠲諸惑障開淨光明と名け、壤字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを作世間了悟因と名け、頗字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを智慧輪斷生死と名け、婆字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを一切宮殿具足莊嚴と名け、車字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを修行戒藏各別圓滿と名け、娑摩字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを隨十方現見諸佛と名け、訶婆字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを觀察一切無緣衆生方便攝受令生海藏と名け、訶字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを修行趣入一切功德海と名け、伽字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを持一切法雲堅固海藏と名け、吒字を唱ふる時、般

【根本の字を唱ふ】根本に二義あり、一に此等の字並に是れ卌字中の根本字を以ての故、此に依て般若門に入るを以て首となすといふも、理實に無量なり、二に此等の字を以て所依の根本となし之に依て以て般若法門を顯すなり。

若波羅蜜門に入るを十方諸佛隨願現前と名け、拏字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを不動字輪聚集諸億字と名け、娑頗字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを化衆生究竟處と名け、娑迦字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを諸地滿足無著無礙解脫光明輪遍照と名け、闍字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを宣說一切佛法境界と名け、多娑字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを一切虛空法雷遍吼と名け、侘字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを曉諸迷識無我明燈と名け、陀字を唱ふる時、般若波羅蜜門に入るを一切法輪出生藏と名く。善男子、我是の如き諸の解脫に入る根本の字を唱ふる時、此四十二の般若波羅蜜門を首と爲して無量無數の般若波羅蜜門に入る。善男子、我唯此善知衆藝の菩薩の解脫を知るのみ。諸の菩薩摩訶薩の如きは、能く一切出世間の善巧の法に於て、智を以て通達して彼岸に到り、殊方の異藝を、咸く綜べて遺すこと無く、文字算數に其深解を蘊み、醫藥呪術もて善く衆の病を療し、諸の衆生の、鬼魅に持せられ、怨憎呪詛し、惡星の變怪、死屍奔逐し、癲癇羸痩、種種諸の疾行らんも咸能く之を救ひて、痊愈を得しめ、又善く金、玉、珠、貝、珊瑚、瑠璃、摩尼、硨磲、雞薩羅等の一切寶藏の出生する處、品類の不同、價値の多少を別知し、村營鄕邑の大小、都城、宮殿、苑園、巖泉、藪澤、凡そ是一切人衆の居る所を、菩薩は咸能く方に隨ひて攝護せり。又善く天文地理、人相の吉凶、鳥獸の音聲、雲霞の氣候、年穀の豐儉、國土の安危を觀察し、是の如き世間の有ゆる技藝を該練して其源本を盡さざる莫し。又能く出世の法を分別して、名を正し義を辯じ、體相を觀察し、隨順し

【善男子此摩竭提國】以下第五幻智無依門の知識を明す。

【婆咀那】ヴルダナ(Vardhana)圓備又は增益と譯す。

【無依處道場】阿賴耶染分の依處なく、淨分圓滿道場あり、勝德を出生して窮盡すべからず、即ち轉依究竟德を顯すこと無盡なり。

修行して、智其中に入り、疑ふ無く、礙ふる無く、愚闇無く、頑鈍無く、憂惱無く、沈沒無く、現證せざる無し。而も我云何が彼功德の行を能く知り能く說くべき。善男子、此摩竭提國に一聚落有り、彼中に城有り、婆咀那と名け、優婆夷有り、號けて賢勝と曰ふ。汝彼に詣りて問へ『云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや』と。』時に善財童子、頭面に衆藝の足を敬禮し、遶ること無數匝し戀仰して辭去せり。

聚落の城に向ひ、賢勝の所に至り、足を禮して圍遶し、合掌し恭敬して、一面に於て立ち、白して言さく『聖者、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。我、聖者は善能く誘誨したまふと聞けり。願くば我爲に說きたまへ。』賢勝答へて言はく『善男子、我菩薩の法門を得て無依處道場と名く。既に自ら開解し、復人の爲に說く。又無盡三昧を得たり。彼三昧の法は有盡無盡に非ず。能く一切智性の眼を出生すること無盡なるを以ての故に。又能く一切智性の耳を出生すること無盡なるが故に。又能く一切智性の鼻を出生すること無盡なるが故に。又能く一切智性の舌を出生すること無盡なるが故に。又能く一切智性の身を出生すること無盡なるが故に。又能く一切智性の意を出生すること無盡なるが故に。又能く一切智性の種種の慧明を出生すること無盡なるが故に。又能く一切智性の周遍神通を出生すること無盡なるが故に。又能く一切智性の海の波濤の如き、無量の功德を出生すること皆無盡なるが故に。又能く一切智性の遍世間の光を出生すること無盡なるが故に。

【善男子南方に城有り】以下第六幻智無著門の知識を明す。

【無著清淨念】正念現前して所知障を離るるが故に無著といひ、煩惱障を離るる故に清淨といふ。謂く理に順ずるの念二障を雜へざるが故に名となす。

【善男子即ち此城の】以下第七に幻智光明門の善知識を明す。

善男子、我唯此無依處道場の法門を知るのみ。諸の菩薩摩訶薩の一切無著の功德行の如きは、我云何が盡く能く知りて說くべき。善男子、南方に城有り、名けて沃田と爲す。彼に長者有り、堅固解脫と名く、汝往きて問ふべし、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。爾時、善財、賢勝の足を禮し、遶ること無數匝し、戀慕し瞻仰し、辭退して南に行けり。

彼城に到り、長者の所に詣りて、足を禮して圍遶し、合掌し恭敬して、一面に於て立ち、白して言さく、「聖者、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。我、聖者は能く誘誨したまふと聞きぬ。願くば我爲に說きたまへ。」長者答へて言はく、「善男子、我菩薩の解脫を得て、無著清淨念と名く。我自ら是解脫を得てより已來、發願充滿して、十方の佛所に於て復希求無し。善男子、我唯此淨念解脫を知るのみ。諸の菩薩摩訶薩の、畏るる所無き大師子吼を獲て、高廣福慧の聚に安住せるが如きは、我云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、即ち此城の中に一長者有り、名けて妙月と爲す。其長者の宅に常に光明有り。汝彼に詣りて問へ「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。」時に善財童子、堅固の足を禮して、遶ること無數匝し、辭退して行けり。

妙月の所に向ひ、足を禮して圍遶し、合掌し恭敬して一面に於て立ち、白して言さく、「聖者、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學

【淨智光明】内證に障を離るる故淨智といひ、後智物を攝する故光明といふ。

【善男子此南方に】以下第八に幻智無盡門の善知識を明す。

【無盡相】所成の德相に窮盡なきが故に。

【善男子此城南に】以下第九幻智誠語門の善知識を明す。

し、菩薩道を修するやを知らず。我聖者は善能く誘誨したまふと聞けり。願くば我爲に說きたまへ。」妙月答へて言はく、「善男子、我菩薩の解脫を得て、淨智光明と名く。善男子、我唯此智光解脫を知るのみ。諸の菩薩摩訶薩の無量の解脫の法門を證得せるが如きは、我云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て城有り、出生と名け、彼に長者有り、無勝軍と名く。汝彼に詣りて問へ、『云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや』と。」是時、善財、妙月の足を禮し、遶ること無數匝し、戀仰して辭去せり。

漸く彼城に向ひ、長者の所に至り、足を禮して圍遶し、合掌し恭敬して一面に於て立ち、白して言さく、「聖者、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。我、聖者は善能く誘誨したまふと聞けり。願くば我爲に說きたまへ。」長者答へて言はく、「善男子、我菩薩の解脫を得て無盡相と名く。我此菩薩の解脫を證せしを以て、無量の佛を見、無盡の藏を得たり。善男子、我唯此無盡相の解脫を知るのみ。諸の菩薩摩訶薩の無限の智と無礙の辯才とを得たるが如き、我云何が彼功德行を能く知り能く說くべき。善男子、此城南に於て一聚落有り、之を名けて法と爲す、彼聚落の中に婆羅門有り、尸毘最勝と名く、汝彼に詣りて問へ、『云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや』と。」時に善財童子、無勝軍の足を禮し、遶ること無數匝し、戀仰して辭去し、漸次に南に行けり。

彼聚落に詣りて尸毘最勝に見え、足を禮して圍遶し、合掌し恭敬して一面に於て立ち、

【誠願語】二義あり、一初發心より弘誓の言を立てて後必ず誓の言の如くして行じて先言に乖かざるが故に、二に菩薩行を行ずる時誓の如くに行ずるが故に。

【善男子此南方に】以下第十幻智歸幻門の善知識を明す

【幻住】二義あり一に所知諸法緣に

白して言さく、「聖者、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。我、聖者は善能く誘誨したまふと聞けり。願くば我爲に說きたまへ。」婆羅門答へて言はく、「善男子、我菩薩の法門を得て、誠願語と名く。過去現在未來の菩薩、是語を以ての故に、乃し阿耨多羅三藐三菩提に至るまで退轉行ること無し。已に退きしこと無く、現に退くこと無く、當に退くべきこと無し。善男子、我誠願語に住するを以ての故に、意に隨ひて作す所成滿せざる莫し。善男子、我唯此誠願語の法門を知るのみ。諸の菩薩摩訶薩は、誠願語と行止して違ふこと無く、言は必ず誠にして、未だ曾て虛妄ならざるを以て、無量の功德之に因りて出生せるが如き、我云何が能く知り能く說くべき。善男子、此南方に於て城有り、妙意華門と名く。彼に童子有り、名けて德生と曰ふ。復童女有り、名けて有德と爲す。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」と。」時に善財童子、法を尊重し、婆羅門の足を禮し、遶ること無數匝し、戀仰して去れり。

漸次に南に行き、彼城に至り、童子童女に見えて、其足を頂禮し、圍遶すること畢已りて、前に於て合掌し、是言を作さく、「聖者、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。唯願くば慈哀をたれ、我爲に宣說したまへ。」時に童子童女、善財に告げて言はく、「善男子、我等は菩薩の解脫を證得し、名けて幻住と爲す。斯淨智を以て觀ずるに、諸の世間は皆幻住なり、因緣より生

依て虚しく名を立つるを幻住となす二に能知の智幻境中に住す、此則ち幻に住する故幻住なり。

ずるが故に。一切衆生は皆幻住なり、業煩惱の起す所なるが故に。一切法は皆幻住なり、無明有愛等展轉して緣より生ずるが故に。一切の三界は皆幻住なり、顚倒智の生ずる所なるが故に。一切衆生の生滅、生老死、憂悲苦惱は皆幻住なり、虚妄分別の生ずる所なるが故に。一切の國土は皆幻住なり、想倒、心倒、無明の現ずる所なるが故に。一切の聲聞辟支佛は皆幻住なり、智斷分別の成ずる所なるが故に。一切の菩薩は皆幻住なり、能く自ら衆生を調伏し教化する殊勝の智心及び諸の行願の成ずる所なるが故に。一切菩薩の衆會、變化、調伏、諸の施爲する所は、皆幻住なり、願及び智の攝成する所なるが故に。善男子、幻の境は自性不可思議なり。善男子、我等二人は、但能く此菩薩の解脫を知るのみ。諸の菩薩摩訶薩の如きは、善く無邊の諸事幻網に入る。彼功德行は、我等云何が能く知り能く說くべき。」時に童子童女自らの解脫を說き已りて、諸の善根力不思議なるが故に、善財の身をして柔軟にして光澤ならしめ、自ら本願を說けり。

【又是言を作さく】以下大段第三、攝德成因相の知識彌勒菩薩を明す。前既に緣に會うて實に入り定んで成佛に堪ふる故に一生補處成因の義を辨ずるなり。初に擧法勸修。

【汝彼に詣りて問へ】往を勸めて問を教ふる中、初に教起の十問を擧ぐ

大方廣佛華嚴經　卷第五十八

東晉天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之十五

又是言を作さく、「善男子、此南方に於て一國土有り、名けて海澗と曰ふ。彼に園林有り、大莊嚴藏と名く。彼林中に於て大樓觀有り、嚴淨藏と名け、菩薩の往昔の善根の起せし所なり。菩薩の諸願、自在の諸通、智力の巧妙、方便の功德、大悲の法門の起せし所なり。彼園中に菩薩摩訶薩有り、名けて彌勒と曰ひ、常に父母、親戚、眷屬及び同行の者を化す。又復其餘は無量の衆生の善根を長養して、大乘に住せしめ、亦汝が爲に菩薩の方便の法門を顯現せんと欲し、菩薩の受生の自在を明さんと欲し、一切衆生に對現し教化して諸有を厭はしめんと欲し、菩薩の大慈悲力を宣明し、菩薩の無相の法門を覺悟し、諸の有趣は悉く自相無きを明したまはんとす。汝彼に詣りて問へ、「云何が菩薩は菩薩道を淨め、云何が菩薩は菩薩戒を學し、云何が菩薩は菩薩心を淨め、云何が菩薩は諸の大願を發し、云何が菩薩は功德の具を積み、云何が菩薩は菩薩地を得、云何が菩薩は一切諸の波羅蜜を滿足し、云何が菩薩は諸の忍法を得、云何が菩薩は功德行に住し、云何が菩薩は善知

【何を以ての故に】以下廣問の所以を釋す、文中總じて八十句の無量あり初二十句は救生斷障の行、次の十句は己が心志根欲の行、次の九句は力用自在の行、次の十句は攝德治惑の行、次の十句は供佛攝生の行、次の十句は求法攝生の義、次の十句は菩薩の深願を攝成す

識に近づくや」と。何を以ての故に。彼菩薩摩訶薩は、一切諸の菩薩行を究竟し、衆生の心行を分別し了知し、巧便智を以て之を教化し、一切諸の波羅蜜を滿足し、菩薩地に住し、諸の忍門を得、菩薩の離生の法を證し、諸佛の所に於て受記を得、菩薩の法に於て自在に遊戲し、諸佛の持を持し、無量の諸佛は一切智の甘露の正法を以て其頂に灌ぎたまひければなり。善男子、彼菩薩摩訶薩は、能く汝を示導する眞の善知識にして、菩提心を堅くし善根を長養し、正直心に住せしめ、菩薩の根を現ぜしめ、無礙の法、平等の諸地を說き、菩薩の出生する所の道を讃歎し、諸の菩薩の願行の功德を具へ、能く廣く普賢の所行を演說したまはん。善男子、汝應に一善根の中に於て知足の想を生じ、一の光明法、一行、一願、一の授記別、得法忍門、六波羅蜜、菩薩の諸地、所淨の佛刹、近善知識、是事の中に於て知足の想を生ずべからず。何を以ての故に。善男子、菩薩摩訶薩は、應に一向に無量の善根を求め、無量の菩提の具を積集し、無量の菩提の因緣を積集し、無量の諸の大廻向を修習し、無量の衆生を教化し成熟し、無量の諸の衆生心と諸の根、欲、性と衆生の所行とを了知し、無量の衆生の煩惱、結業、習氣を除滅し、無量の衆生の邪見と諸の染汚心とを除滅し、無量の諸の清淨心を發さしめ、無量の諸の苦惱の刺を拔出し、無量の愛欲の海を消竭し、無量の愚癡闇冥を遠離し、無量の大憍慢の山を壞散し、無量の生死の繫縛を解散し、無量の煩惱有流を越度し、無量の受生界の源を煎竭し、無量の愛欲の淤泥より拯拔し、三海の獄に於て苦難を免濟し、悉く八聖道支

る行、後の九句は無盡を結す。

に安立せしめ、普く三毒の熾然を除滅せしめ、無量の諸魔の鉤餌を斷絕し、無量の諸の惡魔の業を遠離し、無量の菩薩の直心を淨修し、菩薩の無量の方便を長養し、菩薩の無量の諸根を出生し、菩薩の無量の欲性を淨修し、深く菩薩の無量の等法に入り、菩薩の無量の勝行を修行し、菩薩の無量の功德を淸淨にし、菩薩の無量の威儀を淨修し、菩薩の無量の隨順世間を示現し、無量の不壞の信心を發起し、無量の大精進力を發起し、無量の諸の正念力を淨修し、無量の諸の三昧力を成滿し、無量の諸の大慧力を開發し、無量の諸の欲性力を堅固にし、無量の諸の功德力を積聚し、無量の諸の淨智力を長養し、無量の菩薩の諸力を發起し、無量の諸の如來力を成滿し、悉く無量の法門を分別して知り、普く無量の諸法の方面に入り、無量の法門を淨修し、無量の法明を發起し、無量の法、無量の諸根を照し、無量の諸の煩惱病を了知し、無量の諸の妙法藥を積習し、善方便を以て衆の結病を療じ、無量の甘露の正法を修習し、諸の佛刹に詣りて無量の如來を恭敬し供養し、遍く菩薩大衆の源底に入り、無量の如來の正法を護持し、無量の衆生の罪咎を護らず、無量の惡道の諸難を除滅し、無量の衆生をして天人の中に生ぜしめ、無量の諸の衆生の類を總攝し、無量の陀羅尼門を淨修し、無量の諸の大願行を成滿し、無量の大慈願力を修習し、壽命を惜まずして無量の法を求め、無量の寂滅法力を修習し、無量の淨智通明を出生し、無量の衆生の諸趣の受生を知りて爲に無量の化身を應現し、無量の心、諸の語言の法を知り、悉く菩薩の無量の諸行に入り、菩薩の法を修

【是故に善男子】以下正しく善知識を求めんことを勸む。中に七段あり、初に總じて敬求を勸む。

【何を以ての故に】二に行は善友に因ることを明す。中に四十句行あり、初十句は願行堅心行を明し、次十句は備に勝德行を具ふるを明し、次十句は攝法益生行を

し、菩薩の甚深の法門を觀察し、菩薩の難知の境界を覺悟し、諸々の菩薩の難至の趣に到り、菩薩の勇猛の功德を攝持し、菩薩の離生淨妙難盡の法を諳り、菩薩の諸の莊嚴行を覺悟し、一切處に於て菩薩の自在神力を顯現し、菩薩の無壞の法雲を受持し、菩薩の無量無邊の淨智慧の行を增廣し、無量の諸の波羅蜜を究竟し、菩薩の無量の記別を受け、深く菩薩の無量の忍門に入り、菩薩の不思議の地、諸々の正法門を修治し、無量劫に於て大弘誓を以て自ら莊嚴して諸佛を供養し、不可說の諸佛の世界を淨め、不可說の菩薩の願行を發すべし。善男子、略して說くに菩薩は一切衆生を敎化し、一切劫に於て菩薩行を行じ、一切趣に於て應現受生し、明淨の智を以て一切の三世を了り、一切刹を淨め、一切願を滿じ、一切佛を供養し、一切菩薩と同じく願行を修して、一切諸の善知識に親近すべし。是故に善男子、應に一向に諸の善知識を求むべし。若し法を見聞せば恭敬し供養し、善知識に於て嫌疑を生じ、身心懈厭すること勿れ、一切の善知識をして心大いに歡悅せしめよ。

何を以ての故に。善知識に因りて、一切諸の菩薩行を究竟し、一切菩薩の功德、一切菩薩の大願、一切菩薩の善根、一切菩薩の助道法を成滿し、一切菩薩の明法を生じ、一切菩薩の法門を淨め、一切菩薩の禁戒、一切菩薩の禪定三昧、一切菩薩の堅固の無上菩提の心、一切菩薩の總持辯才を淨修し、一切菩薩の功德藏を淨め、一切菩薩の大願に同じうし、一切菩薩の密法を解り、一切菩薩の法寶、一切菩薩の諸根を長養し、一切菩薩の智聚

後十句は殊勝超過の行を明す。

【何を以ての故に】三に善知識は能く障を除き行を成ぜしむることを釋す

を積集し、一切菩薩の功德の法藏を護り、一切菩薩の受生を清淨にし、一切菩薩の法雲を開持し、一切菩薩の正道を出生し、一切菩薩の道心を發起し、一切諸佛の菩提と一切菩薩の諸行とを成就し、十方一切の法界を了知して一切菩薩の直心の功德を讃じ、一切菩薩の大慈悲力を起し、一切菩薩の無量の善根を攝し、一切菩薩の道支を得、一切菩薩の樂生を饒益する心を得、惡道を遠離して大乘に安住し、菩薩行を修して、惡知識を遠ざけ、菩薩法に於て心退轉せず、凡夫、聲聞、緣覺を超出し、一切の世間の心に惑亂無く、染著する所無く、廣く菩薩の無量の諸行を修し、一切諸善の功德を長養し、煩惱を除滅し、一切諸魔も能く沮壞する莫し。善知識に因りて悉く能く是の如き等の事を成辦す。

何を以ての故に、善知識は能く諸の障礙を除滅せしむるが故に。不善の法を遠け、惡知識を離れ、無明の闇と諸の邪見の縛とを滅し、生死一切の世間を超出し、魔の鉤餌を斷ち、苦惱の刺を拔き、無智の險難と邪惑の山澗とを出でしめ、有流の諸の惡邪の徑を越度せしめ、清淨の菩提の正道を示導し、菩薩法を教へ、四道を修習し、慧眼を明淨にし、薩婆若を安立し、菩薩心を增長し、廣大の慈悲もて波羅蜜を修し、菩薩地に住し、深き法忍を得、一切の善根を淨め、一切菩薩の功德を積集し、一切菩薩の功德を施與し、一切佛を見て心に大いに歡喜し、淨戒を護持し、眞實の義を解し、正法門を出し、諸の邪道を離れ、明法門を現じ、普く一切を照して無量の諸佛の法雲を開持せしめ、一切の煩惱を滅し、一切智を增益し、一切の佛法に住せしむればなり。

【復次に善男子】以下四に善知識は必ず勝れたることを顯す。

【又善男子】五に勝心を起すことを敎ふ。

復次に善男子、善知識は則ち慈母たり、佛家に生ずるが故に。善知識は則ち慈父たり。無量の事を以て衆生を益するが故に。善知識は則ち養育たり、守護して一切の惡を爲さざらしむるが故に。善知識は則ち大師たり、敎化して菩薩の戒を學ばしむるが故に。善知識は則ち導師たり、敎化して彼岸の道に至らしむるが故に。善知識は則ち良醫たり、一切の煩惱の患を療治するが故に。善知識は則ち雪山たり、明淨智慧の藥を長養するが故に。善知識は則ち勇將たり、一切諸の恐怖を防護するが故に。善知識は則ち牢船たり、悉く生死の海を越度せしむるが故に。善知識は卽ち船師たり、一切智の法寶の洲に至らしむるが故に。是故に善男子、應當に是の如く諸の善知識を正念し思惟すべし。又善男子、善知識に詣りて大地の心を發すべし、一切の事を持して疲倦無きが故に。金剛の心を發すべし、堅固正直にして壞すべからざるが故に。金剛山の心を發すべし、一切の苦患も壞する能はざるが故に。無自の心を發すべし、彼意に隨ふが故に。弟子の心を發すべし、一切の敎に違はざるが故に。僮僕の心を發すべし、一切の苦役も疲厭せざるが故に。養育の心を發すべし、煩惱に汚染せらるるを提れざるが故に。傭作の心を發すべし、受くる所の敎に隨ひて違逆せざるが故に。卑下の心を發すべし、自の大增上慢を遠離するが故に。成熟の心を發すべし、善く時と非時とを知るが故に。寶馬の心を發すべし、㦕悷不調を離るるが故に。大車の心を發すべし、一切を載するが故に。大象の心を發すべし、諸根を伏するが故に。大山の心を發すべし、一切の惡風も動ずる能はざるが故に。小犬の心を發すべし、

【栴陀羅】チャンダーラ（Caṇḍāla）居者と譯し、印度の四姓の下に位す

瞋恚を離るゝが故に。栴陀羅の心を發すべし、憍慢を離るゝが故に。折角の心を發すべし、威勢を離るゝが故に。大風の心を發すべし、所著無きが故に。大船の心を發すべし、彼此の岸に於て往反して疲れざるが故に。橋梁の心を發すべし、善知識の教に度るが故に。孝子の心を發すべし、善知識を見て厭足無きが故に。王子の心を發すべし、君の教に順ふが故に。又善男子、應に自身に於て病苦の想を生じ、善知識に於て醫王の想を生じ、所說の教に於て良藥の想を生ずべし。又自身に於て遠行の想を生じ、善知識に於て導師の想を生じ、所說の教に於て正路の想を生ずべし。又自身に於て彼岸に趣くの想を生じ、善知識に於て知濟の想を生じ、所說の法に於て涼池の想を生ずべし。又自身に於て農夫の想を生じ、善知識に於て龍王の想を生じ、所說の法に於て時澤の想を生じ、隨說の行に於て成熟の想を生ずべし。又自身に於て貧窮の想を生じ、善知識に於て毘沙門寶天王の想を生じ、所說の教に於て珍寶の想を生ずべし。又自身に於て弟子の想を生じ、善知識に於て大師の想を生じ、所說の法に於て修學の想を生ずべし。又自身に於て怯劣の想を生じ、善知識に於て勇健の想を生じ、所說の法に於て器仗の想を生ずべし。又自身に於て商人の想を生じ、善知識に於て導師の想を生じ、所說の法に於て珍寶の想を生じ、隨聞說行に勝寶の想を生ずべし。又自身に於て子息の想を生じ、善知識に於て慈父の想を生じ、所說の法に於て立家の想を生ずべし。又自身に於て王子の想を生じ、善知識に於て大臣の想を生じ、所說の法に於て王教を學ぶの想あるべし。善男子、善知識に詣りて、應に正しく思念して、是の

【何を以ての故に】以下六に勝想の所因を釋す。

【善男子略して說くに】以下七に順友益成を明す。

如きの想を發すべし。何を以ての故に。淨き直心に依りて善知識を見、其教に隨順して善根を增長するは、雪山に依りて衆の藥草を出すが如く。佛法の器と爲ること、海の流を吞むが如く。諸の勝德を生ずること、海の寶を出すが如く。菩提心を淨むること眞金を錬るが如く。世間を超出すること、海と須彌との如く。世間に染まざること、水と蓮華との如く。諸惡に沒せざること、海と死屍との如く。白淨の法を長ずること月の盛滿なるが如く。普く法界を照すこと日の迴に曜くが如く。菩薩の身を長ずること母の子を養ふが如し。善男子、略して說くに菩薩摩訶薩は、若し能く善知識の教に隨順せば、十不可說の百千億那由他の諸の功德を得、十不可說の百千億那由他の淨直の深心を明かにし、十不可說の百千億那由他の菩薩の諸根を增長し、十不可說の百千億那由他の菩薩の諸持を淨め、十不可說の百千億那由他の諸の障礙の法を滅し、十不可說の百千億那由他の諸の惡魔の業を超え、十不可說の百千億那由他の菩薩の法門に入り、十不可說の百千億那由他の諸の妙功德を滿じ、十不可說の百千億那由他の菩薩の所行を修し、十不可說の百千億那由他の菩薩の大願を具へん。善男子、略して說くに、菩薩は善知識に因りて、一切菩薩の行、一切菩薩の波羅蜜、一切菩薩の地、一切菩薩の忍、一切菩薩の陀羅尼、一切菩薩の三昧門、一切菩薩の通明智の自在、一切菩薩の廻向、一切菩薩の大願を究竟せり。善男子、是の如き等の一切法は善知識を本と爲し、善知識に依りて起り、善知識に依りて生じ、善知識に依りて取り、善知識に依りて發し、善知識に依りて長じ、善知識に依りて住し、善

【爾時、善財】次に依教趣入を明す

【過去際に修せし等】次に見佛中請先づ見中初に依報を見る、中に三あり初に初念を起す

【爾時、善財】以下身禮智觀を明す

知識に依りて得べし。」

爾時、善財、是の如き等の善知識を讃ずる諸の菩薩行、如來の正法を聞きて、心大いに歡喜し、踊躍無量にして正念に菩薩の所行を思惟して、漸漸に遊行して海潤國に向へり。「過去際に修せし身業の力及び清淨身を以て惡行を遠離し、世間の虛妄惑倒を超出し、佛法の實義を求め、諸根を長養し、大願を滿足し、精進力を具へ、身命を惜まずして衆生を饒益し、菩薩行を修し、佛の法を積集し、諸の如來を見、一切刹を淨め、法師を供養し、正法を護持し、菩薩の諸の淨願身を成就し、善く緣起を知り、不可思議の善根を修習せん。」是念を作し已りて、淨心に一切菩薩を信敬して世尊の想の如くし、善根を修習して心顚倒せず、正念に恭敬して世間の想を離れ、諸願を滿足して、無量の菩薩の化身を出生し、三世一切の諸佛菩薩の法門を讃歎し、智慧もて如來菩薩の一切至處の自在神力、乃至一毛孔の中に佛菩薩の身は皆悉く充滿せるを覺悟し、無礙の智眼もて十方法界及び虛空界の三世の諸法を觀ず。爾時、善財、是の如く恭敬し供養して、諸の願忍を具へ、無量の智を以て境界智を觀ぜり。

爾時、善財、五體もて彼嚴淨藏高大の樓觀を敬禮し、是の如きの念を作さく、「此は是れ諸佛菩薩、諸の善知識なり、是れ諸佛の塔なり、是れ如來の像なり、諸佛菩薩の法寶の住する處なり、是れ聲聞、緣覺なり、亦是れ其塔なり、此は是れ衆聖なり、亦是れ父母なり、亦是れ福田なり、此は是れ一切法界の境界なり。」是念を作し已りて又復等觀するに法

界の如く障礙有ること無し。等觀するに實際の如く一切處に至る。等觀するに如來の如く諸の虛妄を除き染著する所無し。等觀するに、影の如く、夢の如く、電の如く、響の如く、悉く緣より起り、有に非ず無に非ず。深心に諸業の因に隨ひて果報を受くると信解し、信心より等正覺を成ずと知り、佛の功德を解するに因りて諸佛を供養し、恭敬の心に因りて佛の化身を出し、善根を修するに因りて諸佛の法を起し、般若波羅蜜に因りて、一切の波羅蜜を起し、堅固の願に因りて諸佛の法を起し、諸の廻向に因りて一切の菩薩行、一切智の境界法界を起し、廻向を解了するに常に非ず斷に非ず、生に非ず滅に非ず、因無くして作るに非ず。有見、諸の顚倒の惑、謂く、自在よりして諸法を生じ、本有の實性あり、次第に出づるを捨離し、我我所を離れ、深く緣起に達して諸の法界に入る。有爲の法を見るに猶し鏡像の如く、有無の見を離れ、不生不滅にして邪癡の惑を滅し、諸法は空にして悉く自在無しと了り、諸相を超出して無相の際に入り、而も亦種の芽を生ずるの法に違はず、悉く一切は因緣より生ずと知る。印に因るが故に印象を生ずるが如く、鏡中の像の如く、電の如く、夢の如く、響の如く、幻の如く、各因に隨ひて有り、一切諸法も亦復是の如く、業に隨ひて報を受け、善方便を以て諸法を潤澤す。爾時、善財禮して未だ起たざる間に、法を知ること是の如くして、不思議の善根を得、身心柔軟となれり。

稽首し禮し畢りて、敬ひ遶ること十匝し、合掌し諦觀して、復是念を作さく、〔二〕此は是れ

【自在よりして諸法を生ず】外道の梵天自在天等に執して諸法を生ずるなり。

【本有の實性あり、一等】二釋あり、一に外道冥諦の中の本有その性なり、二に小乘一切有部の未來藏中に先づ體性あつて次第に緣を待つて生ずるなり。

【稽首し禮し畢りて】次に身遶りて

念讃することを明す、中に三ある中初に身業遶旋。
【復是念を作さく】以下次に意業念觀中に八十句あり、一一皆能住者の德を擧げ、所住處樓觀を歎ず。

空、無相、願を解る者の所住の處、虛妄を離れたる者の所住の處、法界に住する者。衆生の實有に非ざるを了知する者。不生を知る者。一切世間は所著無しと知る者。方便もて一切衆生を分別する者。一切所依無き者。一切の相を離れたる者。一切法の無自性を知る者。虛妄に一切の業を取らざる者。一切の心意識の相を了知する者。一切の道は出に非ず不出に非ざるを知る者。一切甚深の大智度に住する者。方便もて普門の法界に充滿する者。一切衆の煩惱を寂滅する者。智慧もて見、愛、慢を斷除する者。一切の禪定解脫三昧もて神通遊戲する者。一切菩薩の三昧の境界を修する者。一切如來の所に安住する者。一劫を以て一切劫と爲し、一切劫を以て一劫と爲す者。一切刹を以て一刹と爲し、一刹を以て一切刹と爲すも、而も亦諸刹の相を壞せざる者。一法を以て一切法と爲し、一切法を以て一法と爲すも、而も亦諸法の相を壞せざる者。一衆生を以て一切衆生と爲し、一切衆生を以て一衆生と爲すも、而も衆生に差別無しと解る者。一佛を以て一切佛と爲し、一切佛を以て一佛と爲すも、而も諸佛に二有ること無しと解る者。三世を以て一念と爲し、一念を以て三世と爲す者。一念の中に於て一切刹に詣る者。普く照して一切衆生を饒益する者。一切入を得たる者、衆生を出過するも教化せんが爲の故に而も捨離せざる者。一切刹に依らずして而も遊行して一切の世界を莊嚴し佛を供養する者。一切佛に詣りて染著無き者。善知識に依りて法を味はざる者。一切の魔宮に住して樂欲せざる者。一切相に入りて而も一切智を捨離せざる者。一切衆生の身は我無く衆生無しと了りて二の觀無き者の自身に一切世界

を客受して而も法性を壞せざる者。盡未來劫に諸の願行を修して而も劫の長短の相を取らざる者。一毛端の處を離れずして而も一切世界に現じ普く衆生の爲に正法を說く者。尊重すべき者。甚深の法を解る者。無二に達する者。無性を了る者。善く對治する者。法空を體する者。慈悲に住する者。一切の聲聞、緣覺の地を遠離する者、一切の魔の境界を超出する者。一切世間の境界に染まざる者。一切菩薩の法門を究竟する者。一切佛の法門に隨順する者。一切の生死を厭うて聲聞の離生の法を證せざる者。一切法は無生なりと知るも而も亦不生の見を起さざる者。不淨の法を觀ずるも離欲の法を證せずして染愛せざる者。大慈を修習するも瞋恚の法を除滅せんが爲にせざる者。緣起を觀ずるも一切法の中に愚癡無き者。四禪に住するも隨生せざる者。四無量に住するも無色に生ぜずして教化を爲す者。止觀を修習するも明脫を證せずして衆生を化する者。空三昧に住するも無見を滅する者。無相三昧に住するも衆生を化せんが爲に相を捨てざる者。無願三昧に住するも菩薩の一切の願を捨てざる者。一切煩惱業の中に自在力を得るも、教化せんが爲の故に煩惱業に隨順するを示現する者。生死を離るるも而も受生を現じて教化を爲す者、一切趣を離るるも現じて諸趣に入り衆生を化する者。大慈悲を修するも愛に隨はざる者。喜心を修習するも衆生の苦を見て常に憂感する者。捨心を修習するも而も利他の事を捨離せざる者。九次第定を得るも而も欲界の生を厭離せざる者。諸受を離るるも而も實際を證せざる者。三脫門に住する而も聲聞の解脫法を證せざる者。四眞諦を觀ずるも而も諸果を證せざる者。

【爾時、善財】次に語業の偈讃、五十五偈中初二は總じて彌勒の徳の勝れたることを顯す

【一切諸の佛子は】以下別釋中初八は自分行の勝れたるを歎ず。

緣起を觀ずるも邊見を離るる者。八正道を修するも而も永く生死の難を出でざる者。凡夫地を超ゆるも而も二乘地に墮せざる者。陰の熾然なるを觀ずるも而も永く五陰を滅せざる者。四魔の道を離るるも而も永く諸魔の覺を捨てざる者。六入の障を捨つるも而も現受する者、眞如の相を觀ずるも而も實際の法を證せざる者、現に一切乘を學ぶも而も摩訶衍を捨離せざる者。此の如きの樓觀は、一切功德に住する者の所住の處なり。」

爾時、善財、偈を以て頌して曰はく、

大慈の心に安住する、彌勒摩訶薩は
妙功德を具足して、諸の群生を饒益したまふ
灌頂地に住する、諸佛の長子は
佛の境界を思惟して、此法堂に安住したまふ
一切諸の佛子は、常に大乘の行を履み
諸の法界に遊行して、此法堂に安住せり
施と戒と忍と精進と、禪と智と方便と願ともて
彼岸を究竟する者は、此法堂に安住す
無礙の智は空の如く、普く三世の法を照し
一切を了知する者は、此法堂に安住す
一切法に、眞實に生相無く

【衆生は苦を受けて】次九偈は利他行の勝れたるを歎ず。

鳥の空に遊ぶが如しと解了する者は、此法堂に安住す
貪、恚、癡と、一切諸の顚倒とを除滅して
常に寂靜を樂ふ者は、此法堂に安住す
三脫門の道もて、陰と入と界と緣起とを觀じ
惡道を遠離する者は、此法堂に安住す
深く無礙の智に入り、衆生と刹とを等觀して
法の無性を知る者は、此法堂に安住す
三世の法は無礙なること、猶し空中の風の如く
染著する所無き者は、此法堂に安住す
衆生は苦を受けて、歸依の處有ること無きを見て
大悲もて普く濟ふ者は、此法堂に安住す
盲冥なる衆生は、正を捨て險路に入るを見て
爲に正道を示す者は、此法堂に安住す
諸の有爲の中にて、生、老、病、死に逼らるるを見て
恐怖を免れしむる者は、此法堂に安住す
衆生の結患を見て、智慧の藥を積集し
悲心醫王のごとき者は、此法堂に安住す

【一一の諸剎の中等】以下八偈は功德の勝れたるを歎ず。

無量の衆生の、生死の海に漂溺するを見て
大悲の船もて度す者は、此法堂に安住す
深く生死の海に入りて、煩惱の流を摧滅し
佛の智寶を採る者は、此法の中に安住す
願地の慈悲の眼もて、海を觀じて衆生を出すこと
金翅鳥の如き者は、此法堂に安住す
法界の空中に行くこと、猶し淨き日月の如く
慧光普く照す者は、此法堂に安住す
一一の衆生の爲に、未來際を盡す劫に
諸の苦を荷ひ負ふ者は、此法堂に安住す
一一の諸剎の中にて、未來劫を盡して修行し
金剛精進する者は、此法堂に安住す
一たび坐する處に、諸佛の法を聞持して厭くこと無き
大智慧海の者は、此法堂に安住す
遍く世界海、及び諸の大衆海に遊びて
佛海に供養する者は、此法堂に安住す
一切劫海の中に、諸の願行海を修し

【一切諸の佛子】次の九偈は方便の勝れたるを歎ず。

功德を出生する者は、此法堂に安住す
一一の毛孔の中に、佛刹と劫と衆生とを
無礙の眼もて見る者は、此法堂に安住す
一念の中に遍く、不可說の諸劫に入り
念の無礙なるを知る者は、此法堂に安住す
一切刹は微塵に、衆生は水滴に等し
此等の願を生ずる者は、此法堂に安住す
無量劫に、總持、禪定、願と
解脫の法門とを修行する者は、此法堂に安住す
一切諸の佛子の、無量の德を出生して
衆生を饒益する者は、此法堂に安住す
無礙の智を成就し、通明と巧方便ともて
應に隨ひ生を現ずる者は、此法堂に安住す
初め道心を發してより、一切行を究竟するまで
化身法界に滿ちて、自在力を顯現し
一念に正覺を成じて、無量の智業に入り
能く測量する莫き者は、此法堂に安住す

【佛子此堂に住し】以下十一偈は三昧の勝れたるを歎ず

無礙の淨慧力もて、諸の法界に遊行し
無垢の智もて觀ずる者は、此法堂に安住す
無礙の足を成就して、一切所著無く
刹の無二なるを了る者は、此法堂に安住す
諸の寂滅の法を觀ずるに、皆悉く虛空の如くにして
垢の境界を離れたる者は、此法堂に安住す
大悲もて衆生は、諸の苦に逼迫せらるるを觀じ
拔濟し饒益する者は、此法堂に安住す
一たび坐する處を離れずして、普く衆生の前に現じ
明淨なる日月の如く、魔の鉤餌を除滅す
佛子此堂に住して、諸の群生を哀愍し
無量の化身を出して、諸の法界に充滿す
佛子此堂に住して、遍く諸の世界の
一切如來の所に遊ぶこと、無量無數劫
無依にして此堂に入り、佛の境界を稱量して
無量無數の劫にも、其心に厭倦無し
佛子此堂に住して、念念に諸定に入り

【善く諸の最勝】後の入偈は願行の勝れたるを歎ず。

一一の三昧門に、佛の境界を顯現す
佛子此堂に住して、一切の刹と
三世一切の劫と、衆生と佛の名號とを覺了す
佛子此堂に住して、諸劫を一念と爲し
妄想の惑を遠離して、衆生に隨順す
佛子此堂に住して、諸の三昧を修習し
一一の心念の中に、三世の法を了達す
佛子此堂に住して、一處に跏趺して坐し
普く一切刹、一切諸趣の中に現ず
佛子此堂に住して、悉く佛法の海を飲み
深く智慧の海に入りて、功德の海を超度す
無礙の智もて、三世無數の刹と
諸劫の諸の如來と、無數の衆生の類とを思量す
佛子此堂に住して、常に一念の中に於て
三世の諸佛の、刹の成敗を了知す
善く諸の最勝の、修する所の諸の行願と
並に衆生の諸根とを知りて、佛の境界を修習す

【爾時、善財】以下二正報を見ることを明す。

一一の微塵の中に、一切の劫刹と
諸佛及び眷屬と、一切衆生の類とを見る
佛子此堂に住して、常に一切法を觀ずるに
衆生と刹と世劫と、皆悉く自性無し
衆生等しく、法等しく如來等しく
願等しく世界等しく、三世悉く平等なりと觀察す
佛子此堂に住して、諸の群生を教化し
諸の如來を供養し、諸の法界を思惟す
無量の智慧の業は、諸の大願を滿足し
無數劫に演說すとも、窮盡するを得べからず
一切諸の佛子の、無量の德を具足して
此法堂に安住するを、我合掌して敬禮す
諸佛の長子たる、彌勒の無礙の行を
我今合掌して禮す、唯願くば慈もて矜憫みたまへ

爾時、善財、樓觀の諸の菩薩を讚歎し已りて合掌し恭敬し、供養し禮し訖りて、門下に於て立ち、彌勒菩薩を見んと欲す。爾時、遙に彌勒菩薩を見るに、無量の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等と與に大衆に圍遶せられ、外より來り

【爾時、善財】次に敬を致して請問す。

【爾時、彌勒】以下已が法界を示す中に於て初に善財の法器利益を歎ず六段あり、一に歎己が眷屬の爲に善財の徳を歎じ人を做習せしむ。

たまへり。威徳特に尊く普く一切を照し、世法に染まず、一切世間の衆魔の境界を超出し、諸の障礙を滅し、深く如來菩薩の境界に入り、諸佛を供養し、諸佛の法に等しく、解脫の繒なる淨妙の天冠を冠り、大智網に住し、諸佛の所に於て一切智を得、甘露もて灌頂し、諸佛の法を生じ、薩婆若を得たまへり。

爾時、善財、頭面に敬禮し、一心に合掌して白して言さく、「大聖、云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや。既に修學し已りて一切の佛法を具へ、請ふ所の衆生に隨ひて悉く度脫せしめ、大願を成就し、一切菩薩の所行を究竟し、一切の諸天と世人とを安慰し、本心に負かず、三寶に違はず、天人を欺かず、衆生を捨せず、佛種を斷ぜず、菩薩の家なる如來の正法を持す。是の如き等の事を唯願くば演說したまへ。」

爾時、彌勒、大衆を觀察し、善財を指して言はく、「汝等是童子の菩薩行を問ひ、一切功徳を具足する者を見るや不や。此童子は勇猛精進して專ら實義を求め、正直心を以て不退轉を得、常に勝法を修して心に厭足無く、頭然を救ふが如くし、善知識を求めて親近し供養し、法を聞きて受持す。此童子は昔頻陀伽羅城に於て文殊師利の教を受け、善知識を求め、展轉して一百一十の諸の善知識を經由して、菩薩行を問ひて心に疲倦無く、次に我所に來れり。是童子の如く大乘を學ぶ者は、甚だ稀有と爲す。大願を成滿して能く大事を辨じ、大莊嚴を具して常に大慈を以て衆生を救護し、大精進波羅蜜を起して大衆を示導し、大法の船に乘じて生死の海を度り、大道に住せしめ、大法の寶を得て大智を長養せし

む。是の如きの人は聞見すること得難く、親近して共に住し、同じく行ずるも亦難し。何を以ての故に、此童子は發心して一切衆生を救護し、衆苦惡道の諸難、邪見の險路、愚癡の闇を除滅して生死を超出し、一切趣輪を壞し、魔の境界を度り、一切世間に於て染著する所無く、欲の泥を出で貪の縛を解き、邪倒を除き、慢の幢を摧き、使の刺を拔き、諸の蓋を壞し、愛の網を裂き、無明を滅し、有流を竭し、諂幻を離れ、心の垢を淨め、疑惑を釋く。無智の海を度り、生死の苦を厭ひ、大法の船に乘りて四使の流を濟り、大愛の河に於て智慧の橋を造り、愚癡の闇中に智慧の燈を然し、生死の路に於ては示すに正道を以てし、煩惱の病者には法藥を服せしめ、生老死する者には甘露の法を授け、三毒の盛なる者には滅するに定の水を以てし清涼なるを得しめ、諸の憂怖する者には施すに無畏を以てし、三有の獄は開くに智の門を以てし、邪見の縛は斷つに慧の劍を以てし、三界の城に住するには解脱の門を開き、危險に在る者には安隱の處を示し、結の賊を懼るる者には施すに無畏を以てし、三惡の塹に墜つる者には俯接して出でしめ、陰賊の爲に害せらるる者は涅槃の城に置き、衆生に著する者には八正道を示し、六入の空聚に住する者は拯ふに慧明を以てし、津要を失ふ者には示すに正濟を以てし、惡知識に近く者は善友に親ましめ、童蒙を樂ふ者は誘ふに聖法を以てし、生死の宅を樂ひ住する者は普く一切智の城に超入せしむ。一切衆生の類を救護して清淨を捨てず、菩提心を求め、大乘を積集して心に疲倦無く、正法の雨を飲んで厭足無く、勇猛にして諸の功徳の事を究竟し、諸の法門を淨

め、菩薩行を修して心に疲れ懈ること無く、方便を退せずして大願を出生し、善知識を見て心に樂みて厭くこと無く、所爲を奉給して其教に隨順し以て苦と爲さず。諸の善男子、世間に能く無上菩提心を發起する有る者は、甚だ希有と爲す。若し發心し已りて、是の如く精進して佛法を求むる者は亦甚だ希有なり。是の如く淨き菩薩道を樂欲し、菩薩行を具へ、身命を惜まずして善知識を求め、其教に違はず、菩提分を集あて利養を貪らず、菩薩の正直の心を捨てず、家業に著せず、五欲に染まず、父母及び諸の親族を戀せず、但樂ひて專ら一切種智を修む。是の如きの人は倍復希有なり。諸の善男子、若し菩薩有りて是の如く學ばは、則ち能く菩薩の所行を究竟し、大願を成滿し、佛の菩提に近き、一切刹を淨め、衆生を敎化し、深く法界に入り、一切諸の波羅蜜を具足し、菩薩行を廣め、本意の性を畢り、魔業を出で、一切諸の善知識に値遇し、一生中に於て能く普賢菩薩の諸行を具へん。此童子は威儀海と諸の智慧海とに入り、菩薩海と菩薩の行海とを修し、一切諸佛の願海を成滿し、諸の刹海に詣り、諸佛海を見、眷屬海に入り、供養海を行じ、正法海を聞き、妙法海を飲み、一切の菩薩の力海を成滿し、一切の自在力雲を顯現し、一切衆生見ざる者無く、一切の煩惱處を滅し、一切の佛處に入り、諸の法門處に入り、諸の三昧處に入り、諸の通明處に住し、法界處に遊行し、日月の出づるが如く一切衆生處を照し、諸相に依らざること虛空中の鳥の如く、常に寂靜無壞の法門を樂ひ、遍く因陀羅網の世界、諸佛の世界に遊びて、風の如く無礙なり、深く法界に入り、諸の

【善財汝今最大の等】二に正しく善財の爲に德を歎じて喜ばしむ。

【童蒙の地を過ぎ已】十住の位に入るなり。

【功德地に住し】十行十廻向の位に入るなり。

【智慧地を具へ】十地の位。

【一生に皆悉く等】普門該攝に約して說く。

世間に現じ、三世の佛を見て心大いに歡喜し、踊躍無量にして、諸佛の教に隨ひて聖法の器と爲り、諸の法門を得、菩薩行を具へ、自在力を現ず。

善財、汝今最大の利を得て、無量劫に於ても聞見し難き者を、汝悉く聞見し、彼功德を知れり。謂ゆる文殊師利を見るを得て無量の德を積み、一切の險難惡道を遠離して正法に安住し、童蒙の地を過ぎ、諸の菩薩の功德地に住し、智慧地を具へて、諸佛の地と菩薩の行海とを得、虛空に等しき諸佛の智藏を成滿し、專ら無量の諸の妙功德を求めて心に厭惓無し。若し能く是の如く堅き直心の者は、則ち能く諸の善知識を樂ひ求め、菩薩行を具へ、衆生を敎化せん。不思議清淨の信と諸の妙功德と正法の義とを具せん者は、悉く一切佛子を親見するを得ん。善財、汝今大善利を獲て、次第に諸佛の眞子を覩見す。彼自ら願行の所得を說くに隨ひて、汝從ひて聞き已り、皆悉く具に得たり。是の如きの行者は、無量劫に於ても辨じ難き所なり。是因緣を以て、諸の佛子等は次第に爲に說き、聞見し難き者を汝悉く聞見し、彼に從ひて法を聞き、自在力を現じ、一切佛の爲に護念せられ、菩薩に攝せられ、彼敎に隨順して大善利を得、一切諸の菩薩の性を長養し、諸の功德を學び、佛種を斷ぜず、常に諸佛の甘露の灌頂と爲り、久しからずして當に諸の佛子と等しく前の衆生に順ひ、其修善に因りて皆悉く勝妙の果報を獲しむべし。善財、汝應に大歡喜を發すべし、久しからずして當に大果報を得べきが故に。無量の菩薩は無數劫に於て菩薩行を修するも、汝は今一生に皆悉く具に得たり、皆直心の精進

【直心の精進力】心中異念を雜へざる故、趣入猛盛の故、精進とは心に稱つてなす故。此普賢法は圓融相攝一位則一切の故に一生皆得と雖も亦必ず直心の精進に由りて方に速成を得るなり。

【爾時、彌勒】三に勸めて文殊に歸せしむ。

力に由るが故に。其れ是の如きの法を得んと欲する者有らば、當に善財の修學する所の如くなるべし、便ち諸の菩薩行を究竟し、一切の願を滿じ、一切法に達するを得ん。譬へば慶雲の所覆の處に隨ひて能く甘澤を降らすが如く、智慧の願に隨ひて菩薩行を具ふるも亦復是の如し。善財、當に知るべし、我顯說する所は皆是れ普賢菩薩の所行なり、應當に了知して善知識に近くべし。過去の諸佛は專ら菩提を求めて、此行を修習し、無量劫に於て諸の有爲の中に無量の苦を受けたるも、猶過去の諸佛に値遇せず、是行を具へず。善財、汝は今皆成就するを得て、諸佛の法を聞き菩薩行を行ぜり。其れ衆生有り、是行を聞かん者は大善利を得、大願を成滿し、諸佛に親近し、佛の眞子と爲り、必ず佛道の清淨の解脫を成じ、諸の惡を除滅し、衆苦を遠離し、功德を積みて聚し、清淨法身は十方に遊行して、諸の如來、菩薩大衆を見、善根を長養すること水と蓮華の如く、諸佛に値遇し正法を聞持し、佛道に安住し諸佛の願を具へ、諸佛の功德彼岸を究竟すべし。』

爾時、彌勒、善財に告げて言はく、『汝往きて文殊師利に詣りて、諸の法門と智慧の境界と普賢の所行とを問ふべし。彼當に汝が爲に分別して演說すべし』。爾時、善財是語を聞き已りて、悲泣して淚を流す。文殊師利は即時に臂を伸べ、遙かに善財に華寶の瓔珞を授けたまへり。善財得已りて、歡喜して彌勒菩薩に供散せり。彌勒菩薩、即ち右の手を以て善財の頂を摩で、讚じて言はく、『善い哉善い哉、佛子。汝亦久しからずして當に我と等しかるべし。』

【爾時、善財】以下四に善財自ら慶べ重ねて請ふを明す

爾時、善財、踊躍無量にして、偈を以て頌して曰はく、

無量無數劫に、見聞する得難き者を
我今、無上の善知識に奉覲するを得たり
文殊は我尊ぶ所、功德の岸を究竟し
善知識を見るを蒙れば、願くば速かに還りて親近せん

爾時、善財、五體もて彌勒菩薩を敬禮し、合掌して白して言さく、「大聖、我已に先に阿耨多羅三藐三菩提心を發せるも、而も未だ菩薩は云何が菩薩行を學し、菩薩道を修するやを知らず。大聖、今者已に諸佛の爲に一生の記を授けられ、菩薩の離生の正法を證し、菩薩住に住し、一切諸の波羅蜜を究竟し、一切諸法の忍門を具足し、菩薩の一切諸地を成就し、自在に一切法門に遊戲し、一切三昧を得て菩薩に到り、所至の趣に隨ひて、一切の陀羅尼、辯才方便、光明を逮得し、菩薩の自在を具足し成就し、一切の助菩提分を積集し、巧方便の慧に遊戲し、一切の通明を得、修學する所に隨ひて悉く已に菩薩の諸行を究竟し、一切願を具し、諸乘の門を知り、如來持を持し、佛の菩提を攝し、一切諸佛の法藏を守護し、智寶菩薩の功德と、如來の密教とを出生し、常に菩薩大衆の上首と爲り。煩惱の賊に逼迫せらるる者の爲には、勇猛力を以て能く爲に摧滅して安隱を得しめ、生死の曠野にて正路に迷ふ者には示すに正道を以てし、煩惱に患ふ者には治するに良醫を以てし、諸の衆生は尊んで天中の天と爲し、無上の聖にして二乘を勝出せりと爲し、生死

【爾時、彌勒等】五に彌勒偈もて重ねて善財の德を歎ず。【善財童子は】偈に六十八あり、初一偈は總じて專求を歎ず。【善くぞ來りし】次十偈は別して善く來れることを歎ず。

海の者には爲に導師と作りて之を度脫せしめ、大敎の網を張りて生死海を亙し、諸々の調伏の者は攝して之を取り、善根を長養して、菩薩を無礙の乘に安立し、一切諸の菩薩の事を究竟し、諸佛の所に住せしめたまふ。唯願くば大聖、我爲に云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するやを演說したまへ。」

爾時、彌勒菩薩摩訶薩、善財を觀察し、大衆に指示して、其功德を歎じ、偈を以て頌して曰はく、

善財童子は、淨き直心と智慧ともて
專ら菩薩行を求めて、我所に來至せり
善くぞ來りし大悲の雲、能く甘露の法を雨らし
三淨眼を具足して、菩薩の行に厭くこと無し
善くぞ來りし正直の心、精進して懈倦無く
諸根悉く調伏して、專ら菩薩行を求む
善くぞ來りし無壞の行、常に善知識を求めて
一切法に了達し、諸の群生を敎化す
善くぞ來りし淸淨の道、功德の藏に安住し
勇猛精進の力もて、最勝の地を逮得す
善くぞ來りし難見の者、諸佛の功德の子は

【智慧の網を成就】次八偈は其來意を歎ず。

諸の善根を增長して、深く無量の境に入る
善くぞ來りし平等の者、利衰及び毀譽と
苦樂世間の法とは、其心に所染無し
善くぞ來りし安樂の者、直心にして諂曲を離れ
憍慢と瞋恚と、放逸の法とを除滅す
善くぞ來りし最勝の藏、一切業を觀察して
功德藏を長養し、其心に疲倦無し
善くぞ來りし三世の智、諸の法界を圓滿し
佛の功德藏を了り、其心に疲倦無し
善くぞ來りし妙蓮華、名稱の雲を增長せる
諸の佛子教へて來らしむ、我無礙の趣を示さん
智慧の網を成就して、不思議を了達し
廣く菩薩行を修して、諸の群生を教化す
專ら佛の菩提を求めて、離垢の行を修習し
諸の大願を聞持し、此に至りて疲倦無し
去來現在の佛の、成じたまふ所の諸の行業を
善財修學せんと欲す、故に來りて我所に至れり

【譬へば須彌山】次十偈は行位の成立を歎ず。

眞の法師を志求し、正道の法を演說して
善く菩薩を敎ふる者、故に來りて我所に至れり
佛子智慧を修め、菩提を具足し
善知識に親近す、故に來りて我所に至れり
衆生は慈父母のごとく、諸の功德を長養し
菩提道を究竟す、故に來りて我所に至れり
生、老、病、死の者には、無上の良醫王となり
衆生の釋天となりて、甘露の法藥を雨らす
衆生の明淨日となり、普く諸の正道を照す
衆生の淨月となる、功德圓滿なるが故に
譬へば須彌山の如く、怨親に心動ぜず
猶し大海の水の如く、未だ曾て增減有らず
猶し海導師の如く、無量の衆を度脫し
一切所著無し、故に來りて我所に至れり
勇猛精進の力もて、諸の衆生を拯救ひ
悉く安樂を得しめんとて、專ら善知識を求む
正法幢を建立して、佛の功德を顯現し

【善財衆生を見るに】次の二十二偈は利他と兼ねては自行を歎ず。

惡道の苦を除滅して、諸の善趣門を開く
能く諸の導師に詣りて、佛の妙身を覩見し
彼密教を聞持せんとて、專ら黠慧の師を求む
妙智の色を具へ、種姓の家に託生し
諸の功德を究竟せんと欲す、故に來りて我所に至れり
無比の正直心もて、善知識に親近し
其說く所の敎を聞きて、皆悉く能く奉行せり
昔の無量の德に因りて、文殊發心せしめ
其教命に隨順して、專ら佛の菩提を求む
天宮と家屬と、父母と諸の親戚と
世間の一切の樂とを捨てて、謙苦して知識を求む
是の如きの清淨の行は、此に於て命終し已りて
諸の勝妙の果を得、佛法の堂に昇入す
善財衆生を見るに、生老病死の苦あり
大悲の心を發さんが爲に、專ら佛の菩提を求む
五道の輪轉を見るに、衆苦に逼迫せらる
智の金剛輪を修して、苦趣の輪を壞散す

衆生の田は荒穢して、貪、恚、邪見の刺あり
淨め修治せんが爲の故に、專ら利智の犂を求む
衆生は癡闇に處し、盲冥にして正路を失ふ
善財は導師と爲りて、慧光もて正道を示す
忍辱を密鎧と爲し、慧の利劍を執持し
三脱門に乘じて、煩惱の賊を摧滅す
善財の勇猛の力は、普く三界の衆の爲に
諸の恐怖を除滅し、安隱の處に置かしむ
善財は海師と爲りて、大法の船を造立し
爾炎の海を越度し、淨寶の洲に住せしむ
善財は一切の、法界の中に淨日と爲り
願と智慧との光を以て、普く衆生の類を照す
善財は覺月と爲り、妙法悉く圓滿し
慈定の淸涼の光は、諸の煩惱の熱を滅す
善財は智海の依、直心金剛の地なり
菩薩の行漸く深くして、妙法の寶を出生す
菩提心は龍王のごとく、法界の空に昇り

【迦羅邏】カララ(Kalala)凝滑と譯す、胎内五位の一、托胎後初七日の間をいふ。

雲を興して甘露を雨らし、白淨の果を長養す
淨き信心を炷と爲し、慈悲を香油と爲し
正念を寶器と爲し、彼世を燿す燈を然す
道心は迦羅邏にして、慈悲を胞段と爲し
菩提分を肢節として、如來藏を長養す
功德藏を增益し、智慧の藏を淸淨にし
智慧の藏を熾盛にし、諸願の藏を成滿す
是の如きの大莊嚴もて、諸の群生を救護するは
一切の天人の中に、聞き難く見るを得難し
是の如きの智慧の樹は、根深くして動かすべからず
勇健は敷き茂りて、諸の群生を饒益すと爲す
一切法を聞きて、諸の疑惑を除滅し
妙功德を具足せんと欲して、專ら善知識を求む
煩惱の塵を摧滅し、邪愛の垢を消滅し
悉く解脫を得しめんとて、專ら智慧の者を求む
功德の道に安住し、究竟じて三塗を滅し
諸の善趣を開示して、涅槃の道を具へしめ

【諸の法界を分別し】後の十七偈は自他行を雙結す。

八正路を顯現して、諸の邪見を除滅し
煩惱の網を壞り裂き、愛欲の海を消竭す
善財は明淨の日のごとく、普く群萠の類を照し
能く調御師と爲りて、三有の衆を拯濟す
一切を覺悟して、永く五欲の泥を出でしめ
虛妄の想を除滅して、爲に解脫の門を開く
諸の法界を分別し、如來の刹を嚴淨し
一切法を究竟す、善財應に歡喜すべし
勇猛に方便を修し、信心壞すべからず
妙功德を積集して、諸の大願を成滿す
久しからずして諸佛を見て、一切法を了達し
諸佛の刹を嚴淨して、佛の菩提を成就せん
威儀海に隨順し、諸行の海を究竟して
一切無量の、衆生海を度脫せしめん
諸の善法を出生し、妙功德を具足して
諸の佛子と等しく、解脫の法を圓滿す
諸の大願を成滿して、一切の魔を降伏し

清淨の業を具足して、諸の煩惱を除滅す
一切智を成就して、甚深の法を了達し
諸の群生の、煩惱衆苦の患を除滅す
一切衆生の輪は、生死の輪を廻流す
爲に淨法輪を轉じて、衆苦の輪を除滅す
佛の種姓を守護し、法の種姓を淨修し
僧の種姓を攝取して、三世の種姓を了る
大願の網を成滿して、邪見の網を壞散し
諸の愛の網を觀裂して、衆苦の網を決破す
直心の性を成就し、智慧の性を具足し
世界の性を嚴淨して、衆生の性を度脫せしむ
善財は一切の、無量の諸の群生と
諸佛及び菩薩をして、皆悉く大いに歡喜せしむ
善財は淨慧光もて、普く諸刹の法と
一切衆生の類とを照し、皆無量の佛を見奉らしむ
諸の法界を照明し、衆生界を清涼にし
諸の惡道を遠離し、三有の苦を除滅す

衆をして邪道を離れて、諸の善道を顯現し
八正道を修習して、解脱の道に安立せしむ
普く諸の群生をして、生死の海を度脱し
諸の煩惱を除滅して、功德の海に安住せしむ
煩惱の海を消竭して、三有の海を度らしめ
諸根悉く調伏して、世間に染まざらしむ

【爾時、彌勒等】六に廣く菩提心の無盡の德を歎ず。

【何を以ての故に】以下廣く發心の功德を顯す、中に二百十八句あり、初百十五句は菩提心の殊勝の功德は高く佛果に齊等なるを明す。

大方廣佛華嚴經　卷第五十九

入法界品第三十四之十六

東晋天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

爾時、彌勒菩薩、是の如き等の善財の諸の妙功德を讃歎するを以て、無量の衆生をして道心を發さしめ已りて、善財に告げて言はく、『善い哉善い哉、童子。乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、專ら一切の佛法を求め、一切の世間を饒益し、一切衆生を救護せり。善男子、汝善利を得て、人身と壽命とありて、諸佛に値遇し、文殊師利大善知識を見るを得、汝は法器となりて善根潤澤し、淸白の法を長じ、欲性を淨勝にし、善知識の總攝する所と爲り、諸佛に護念せらる。何を以ての故に。菩提心は則ち一切諸佛の種子たり。能く一切諸佛の法を生ずるが故に。菩提心は則ち良田たり。衆生の白淨の法を長養するが故に。菩提心は則ち大地たり。能く一切の世間を持するが故に。菩提心は則ち淨水たり。一切の煩惱の苦を洗濯するが故に。菩提心は則ち大風たり。一切世間に障礙無きが故に。菩提心は則ち盛火たり、能く一切の邪見愛を燒くが故に。菩提心は則ち淨日たり、普く一切衆生の類を照すが故に。菩提心は則ち明月たり。諸の白淨法悉く圓滿す

るが故に。菩提心は則ち淨燈たり。普く一切諸の法界を照すが故に。菩提心は則ち淨眼たり、悉く能く邪正の道を覩見するが故に。菩提心は則ち大道たり、皆一切智の城に入るを得しむるが故に。菩提心は則ち正濟たり、悉く出要の處に到るを得しむるが故に。菩提心は則ち大乘たり、一切諸の菩薩を容載するが故に。菩提心は則ち門戶たり、一切菩薩の行に入らしむるが故に。菩提心は則ち宮殿たり、三昧の法に安住し修習するが故に。菩提心は則ち園觀たり、中に於て遊戲し法樂を受くるが故に。菩提心は即ち勝宅たり、一切衆生の歸依する所なるが故に。菩提心は則ち依止たり、因りて一切の菩薩行を修するが故に。菩提心は則ち守護たり、能く菩薩の諸の大願を滿ずるが故に。菩提心は則ち慈母たり、一切諸の菩薩を增長するが故に。菩提心は則ち養育たり、一切諸の菩薩を守護するが故に。菩提心は則ち善知識たり、一切の惡と諸の恐怖とを離るるが故に。菩提心は則ち大王たり、諸の聲聞緣覺の心に勝るるが故に。菩提心は則ち最勝たり、一切の無比の願を成滿するが故に。菩提心は則ち大海たり、悉く能く諸の功德を容受するが故に。菩提心は則ち須彌山王たり、等しく衆生の心を觀じて動ぜざるが故に。菩提心は則ち金剛圍山たり、一切諸の衆生を攝持するが故に。菩提心は則ち雪山たり、智慧清涼の藥を長養するが故に。菩提心は則ち香山たり、一切の功德の香を出生するが故に。菩提心は則ち虛空たり、諸の妙功德に邊際無きが故に。菩提心は則ち蓮華たり、一切世間の法に染まざるが故に。菩提心は則ち寶象たり、悉く能く一切の根を調伏するが故に。菩提

【天の德瓶】索むる所の者は悉く皆中より出づること如意珠の如きなり【恆娑】ハムサ

【鑷】くぎぬき。

心は則ち寶馬たり、諸の惡と儱悷の法とを遠離するが故に。菩提心は則ち調御師たり、悉く能く摩訶衍を守護するが故に。菩提心は則ち良藥たり、一切の煩惱の病を療治するが故に。菩提心は則ち沃焦たり、一切の不善の法を消盡するが故に。菩提心は則ち金剛たり、一切諸の惡法を壞散するが故に。菩提心は則ち和香たり、一切の功德の香を出生するが故に。菩提心は則ち妙華たり、一切世間の愛樂する所なるが故に。菩提心は則ち白栴檀たり、五欲の諸の熱病を除滅するが故に。菩提心は則ち樂器たり、微妙の音聲法界に聞ゆるが故に。菩提心は則ち勇健たり、煩惱諸の怨敵を摧滅するが故に。菩提心は則ち善鑷たり、一切煩惱の刺を拔出するが故に。菩提心は則ち尊主たり、餘の一切に於て能く勝るもの莫きが故に。菩提心は則ち毘沙門天王たり、一切諸の貧苦を捨離するが故に。菩提心は則ち妙德たり、一切諸の功德を莊嚴するが故に。菩提心は則ち莊嚴具たり、一切諸の菩薩を嚴飾するが故に。菩提心は則ち火災たり、一切の有爲の法を焚燒するが故に。菩提心は則ち無壞の藥王樹の根たり、一切諸佛の法を長養するが故に。菩提心は則ち龍珠たり、無量の煩惱の毒を除滅するが故に。菩提心は則ち水珠たり、諸の心垢と煩惱の濁とを淨むるが故に。菩提心は則ち如意珠たり、一切の功德の利を具足するが故に。菩提心は則ち天の德瓶たり、一切の欲樂する所を滿足するが故に、菩提心は則ち劫初の樹たり。一切の莊嚴具を出生するが故に。菩提心は則ち恆娑衣たり、一切諸の塵垢を受けざるが故に。菩提心は則ち正業たり、本性淨なるが故に。菩提心は則ち利犁たり、一切

(Haṃsa)鵝と譯す、此を以て衣となせば水濺ぐも著かず、菩提心の塵垢に染らざるを喩ふ。

【七使】貪等の五鈍使に身邊二見を取るが故に七。

衆生の田を修治するが故に。菩提心は則ち那羅延の箭たり、悉く能く身見の鎧を鑽徹するが故に。菩提心は則ち厭離たり、決定して苦患の相を了知するが故に。菩提心は則ち利稍たり、能く一切の煩惱の賊を刺すが故に。菩提心は則ち甘露の雨たり、能く一切の煩惱の火を滅するが故に。菩提心は則ち利劒たり、一切の煩惱の惡を斬除するが故に。菩提心は則ち金槌たり、一切の憍慢の山を壞散するが故に。菩提心は則ち利刀たり、七使の煩惱の鎧を斬截するが故に。菩提心は則ち勇健の幢たり、一切諸の魔の幢を傾倒するが故に。菩提心は則ち釿斧たり、無知と諸の苦との樹を斫伐するが故に。菩提心は則ち器仗たり、一切諸の艱難を防護するが故に。菩提心は則ち善手たり、一切諸度の身を防護するが故に。菩提心は則ち妙足たり、一切諸の功德に安立するが故に。菩提心は則ち眼藥たり、一切無明の翳を除滅するが故に。菩提心は則ち善く刺を拔くと爲す、悉く能く身見の刺を拔出するが故に。菩提心は則ち安隱の床たり、一切の生死の苦を除滅する床なるが故に。菩提心は則ち善友たり、無量の生死の難を度脫せしむるが故に。菩提心は則ち善利たり、一切の衰耗の法を遠離するが故に。菩提心は則ち天人の師たり、善く菩薩の出要の道を知るが故に。菩提心は則ち寶藏たり、無量の功德盡くべからざるが故に。菩提心は則ち涌泉たり、淸冷の智慧は窮盡無きが故に。菩提心は則ち淨鏡たり、一切諸の法門を顯現するが故に。菩提心は則ち淨地たり、一切諸の垢穢を洗濯するが故に。菩提心は則ち大河流たり、諸度と四攝法とを引くが故に。菩提心は則ち龍王たり、悉く能く普

【波羅提毘叉藥】燈照藥と譯す。

く甘露の法を雨らすが故に。菩提心は則ち命根たり、菩薩の大悲の法を任持するが故に。菩提心は則ち甘露たり、能く不死の法に安住せしむるが故に。菩提心は則ち羅網たり。一切の所應化を網取するが故に。菩提心は則ち善羂たり、一切諸の衆生を攝取するが故に。菩提心は則ち鉤餌たり、生死の淵に居る衆生を釣り出すが故に。菩提心は則ち阿伽陀藥たり、一切諸の惡患を除滅するが故に。菩提心は則ち波羅提毘叉藥たり、悉く能く五欲の毒を療治するが故に。菩提心は則ち大池たり、無量の邪想の水を消滅するが故に。菩提心は則ち風輪たり、一切諸の障蓋を壞散するが故に。菩提心は則ち寶洲たり、道品の功徳の寶を出生するが故に。菩提心は則ち種姓たり、一切の白淨の法を長養するが故に。菩提心は則ち居宅たり、一切の功徳の寶を納受するが故に。菩提心は則ち大城たり、菩薩の商人の所住の處なるが故に。菩提心は則ち金藥たり、煩惱の垢を消して淸淨ならしむるが故に。菩提心は則ち香蜜たり、一切の功徳の味を具足するが故に。菩提心は則ち正道たり、一切智の城に入らしむるが故に。菩提心は則ち寶器たり、一切の白淨の法を容受するが故に。菩提心は則ち時澤たり。悉く能く煩惱の塵を除滅するが故に。菩提心は則ち安住たり、菩薩の所住を出生するが故に。菩提心は則ち壽行たり、聲聞の諸の解脱を取らざるが故に。菩提心は則ち瑠璃寶たり、其性淨妙にして垢を受けざるが故に。菩提心は則ち伊尼羅寶たり、諸の聲聞緣覺の智に勝るか故に。菩提心は則ち法鼓たり、煩惱に長く寢る衆生を覺悟するが故に。菩提心は則ち淨水たり、其性淸淨にして垢濁無き

【毘樓那風】旋猛風の義。

【善男子譬へば人等】次の百三句は菩提心の自在の功德は廣多にして無量なることを明す

が故に。菩提心は則ち閻浮檀金たり、有爲の善をして聚墨の如くならしむるが故に。菩提心は則ち山王たり、一切諸の世間を超出するが故に。菩提心は則ち歸依たり、悉く能く諸の衆生を救護するが故に、菩提心は則ち實義たり、一切の虚妄の法を遠離するが故に。菩提心は則ち無上寶たり、悉く歡喜して滿足を得しむるが故に。菩提心は則ち大壞たり、彼の須むる所に隨ひて充悦せしむるが故に。菩提心は則ち尊長たり、諸の衆生に於て倫匹無きが故に。菩提心を則ち寶藏たり、一切の諸佛の法を受持するが故に。菩提心は則ち因陀羅網たり、諸の煩惱阿修羅を攝するが故に。菩提心は則ち毘樓那風たり、衆生の心を震動し教化するが故に。菩提心は則ち因陀羅火たり、一切の煩惱習を焚燒するが故に。菩提心は則ち無上塔たり、一切の天の人供養に應ずるが故に。佛子、菩提心は是の如きの無量功德を成就して、悉く一切の諸佛菩薩の諸の功德と等し。何を以ての故に。菩提心に因りて一切諸の菩薩行を出生し、三世の諸佛正覺を成じたまふが故に。

善男子、譬へば人有り自在の藥を得て、五の恐怖を離るるが如し。何等をか五と爲す。謂ゆる火も燒く能はず、水も漂はす能はず、毒も中る能はず、刀も傷くる能はず、熏も害する能はず。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心を發して薩婆若を攝すれば、五の恐怖を離る。何等をか五と爲す。謂ゆる慾火の燒く所と爲らず、諸有の流水も漂はす能はざる所、瞋恚の惡毒も中つる能はざる所、煩惱の利刀も傷くる能はざる所、邪なる覺觀の煙熏ずるも害する能はず。善男子、譬へば人有りて解脫の藥を得れば、終に橫死せざるが如し。菩

【頻伽陀】ギガタ(Agada)除去といふ。能く毒惡刺を除くが故。

【删陀那】サンダーニカ(Saṃdhānika)續斷藥と譯す、傷ける骨肉等を接ぎ復せしむる藥。

【阿藍婆】ラティラムバ(Ratilambha)得喜藥と譯す、身に塗れば痛を去り、心に喜悅を生ずる故に此名あり。

薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の妙智慧の藥を得れば、生死の過患も害する能はざる所なり。善男子、譬へば人有りて龍王の藥を得んに、若し毒蟲有りて其藥の氣を聞がば、卽ち避けて遠く去るが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の大龍王藥を得ば、一切の煩惱の諸の惡毒蟲、其藥の氣を聞ぎて皆悉く散滅す。善男子、譬へば人有りて不可壞の藥を得ば、一切の怨敵其便を得ざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の不壞の法藥を得ば、一切の煩惱、諸魔、怨敵の壞る能はざる所なり。善男子、譬へば人有り頻伽陀藥を得て、能く毒刺を出すが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の頻伽陀藥を得ば、能く三毒の諸の邪見の刺を出す。善男子、譬へば人有りて善見藥王を得て、一切の病を滅するが如し。菩薩摩訶薩も又復是の如く、菩提心の善見藥王を得ば、一切衆生の諸の煩惱の病を滅す。善男子、譬へば删陀那大藥王樹の如し。其衆生有りて彼樹の蔭に在れば、身の諸の瘡痏皆除愈するを得ん。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の删陀藥樹を得んに、其れ衆生有りて此樹に依りて蔭すれば、一切の煩惱と不善業との瘡は皆除き愈ゆるを得ん。善男子、譬へば藥王樹の無壞根と名くるものの如く、其力を以ての故に、一切の閻浮提の樹を長養す。菩提心の樹も亦復是の如く、其力を以ての故に、一切の學無學の菩提の善根を長養す。善男子、譬へば藥草の阿藍婆と名くるものの如し、若し用ひて體に塗れば、身柔澤を得、意諸惡を離る。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の阿藍婆藥を得ば、身口意の諸の善行の業を長ず。善男子、譬へば人有りて念力の藥を得て、有所聞の法を

終に忘失せざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の念力藥を得ん者は、一切佛法を聞持して忘れず。善男子、譬へば藥有りて名けて蓮華と曰ふ、其服する有る者は住壽一劫なるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の蓮華藥を服する者は、阿僧祇劫にも自在を得ん。善男子、譬へば人有り翳身の藥を執れば、一切衆生見る能はざる所なるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の翳身藥を得る者は、一切諸の魔の見る能はざる所なり。善男子、譬へば大海に摩尼寶有り、積衆寶と名く。若し他方に至らざれば、設ひ火災起るも、乃至海水の一滴をも消滅せんこと是處り有ること無きが如し。菩提の心の積衆寶の珠も亦復是の如く、菩薩の直心海の中に處して、乃至一善根を以て薩婆若に廻向するも、忘失する有らば、是處り有ること無し、而も薩婆若は染著する所無く、善根を離れず。善男子、譬へば摩尼の淨光明と名くるは、人有りて此を以て身に瓔珞せん者は、餘の寶光を蔽ひて悉く聚墨の如くならしむるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の摩尼寶珠を以て其身に瓔珞せば、聲聞縁覺の心寶を映蔽す。善男子、譬へば水珠を濁水の中に置けば、水即ち澄清なるが如し。菩提心の珠も亦復是の如く、一切煩惱の垢濁を除滅す。善男子、譬へば人有りて住水の寶珠を得、其身に瓔珞せば、深水の中に入るも而も沒溺せざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の住水の寶珠を得ば、生死の海に入るも而も沈沒せず。善男子、譬へば人有りて大龍の寶珠を得ば、往いて龍の所に到るも、龍は害を爲さざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の大龍の寶珠を得ば、

欲界の中に入るも、煩惱の惡龍は害する能はざる所なり。善男子、譬へば帝釋の摩尼寶有りて其身に瓔珞せば、天中に於て尊きが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の寶の瓔珞を著くる者は、悉く一切の三界の中に於て尊し。善男子、譬へば人有りて隨意の珠を得、一切の貧窮困苦を除滅するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の隨意の寶珠を得ば、一切の邪命貧苦を除滅す。善男子、譬へば火珠の日光の、發するに因りて、能く猛焰を出すが如し。菩提心の明淨の火珠を得るも亦復是の如く、大慧の光を感發する所に因るが故に、智慧の火を出す。善男子、譬へば月珠の月光の發するに因りて、清涼の水を出すが如し。菩提心の淨月の寶珠を得るも亦復是の如く、彼善根を廻向する月光の感發する所に因り、善根諸の大願の水を出生す。善男子、譬へば龍王は如意寶の冠を著け、恐怖を遠離するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の大悲の如意寶冠を著け、一切の惡道の諸難を遠離す。善男子、譬へば莊嚴一切衆生藏摩尼寶は悉く能く一切の所願を成滿して、損減する所無きが如し。菩提心の妙莊嚴藏摩尼寶珠を得る者は、菩薩及び餘の衆生の欲する所の願樂を成滿して、損減する所無し。善男子、譬へば轉輪王の摩尼寶を有して普く宮殿を照し、一切の闇を滅するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の摩尼寶を得る者は、悉く能く普く五趣の宮殿を照し、一切の闇を滅す。善男子、譬へば人有り、紺色寶の光明の觸る所と爲れば、即ち其色に同ずるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の紺色寶の光を得て、諸法を觀察し、善根を廻向して、薩婆若の

色に同ず。善男子、瑠璃寶は百千歲に於て不淨の中に處するも、爲に染せられざるが如し。菩提心の淨き瑠璃寶も亦復是の如く、百千劫に於て欲界の中に住するも、五欲の爲に染汚せられず。其性淨きが故なり。善男子、離垢の光ある淨き摩尼寶の、一切の寶を出すが如し。菩提の心の離垢光の寶も亦復是の如く、凡夫、聲聞、緣覺、菩薩、諸佛の功德の珍寶を出生す。善男子、譬へば大摩尼寶は悉く能く一切諸の闇を除滅するが如し。菩提心の寶も亦復是の如く、一切の無知の闇冥を除滅す。善男子、譬へば大海に無價の寶有りて、商人船車に之を載せて城に入れば、餘の摩尼寶は與に等しき者無きが如し。菩提心の無價の寶珠も亦復是の如く、生死の海に處し、菩薩摩訶薩大願の船を以て載せて解脫の城に入れば、聲聞、緣覺の諸の功德の寶は及ぶ能はざる所なり。善男子、譬へば離垢の大摩尼寶は閻浮提に處して、能く四萬由旬の日月の宮殿を照し、皆悉く顯現するが如し。菩提の心の離垢の寶珠も亦復是の如く、生死に住して法界の空を照し、佛の境と宮宅とを悉く顯現せしむ。善男子、譬へば摩尼風王は、能く日月の照す所の境界、有ゆる香華、一切の品類を持するが如し。菩提の心を摩尼風王も亦復是の如く、悉く能く一切種智の照す所の境界、一切の天人、聲聞、緣覺、諸佛、菩薩及び諸の有漏無漏の善根を攝持す。善男子、譬へば海中に摩尼寶有り、名けて海藏と曰ひ、海中の諸の莊嚴事を顯現するが如し。菩提の心の海藏寶珠も亦復是の如く、一切智の境諸の莊嚴事を顯現す、善男子、譬へば閻浮檀金は如意寶を除きては一切の寶に勝れたるが如し。菩提の心の閻浮檀金も亦復是の如

【優陀伽婆羅栴檀】ウラガサーラ、チヤンダナ（Uragasaracandana）妙腹行堅固と譯す、此栴檀は龍宮に在りて堅固に勝出するが故に名く。

【波利質多】パリチトラ（Paricitra）香遍樹と譯し、その枝葉果實皆香なるが故に此名あり

く、一切智を除きては諸の功德に勝れたり。善男子、譬へば人有り、善能く龍を呪すれば、諸の龍の中に於て自在を得るが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の善き呪術の法を得れば、一切の煩惱の龍の中に於て自在を得。善男子、譬へば勇士の鎧仗を被執すれば、一切の怨敵も壞る能はざる所なるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の大莊具を被れば、一切の煩惱、諸魔怨敵も壞る能はざる所なり。善男子、譬へば優陀伽婆羅栴檀の若し一銖を燒けば、香氣普く小千世界に熏じて、三千大千世界の珍寶も及ぶ能はざる所なるが如し。菩提心の香も亦復是の如く、妙功德を以て普く法界に熏ずれば、一切の聲聞緣覺の功德の及ぶ能はざる所なり。善男子、譬へば白栴檀を以て其身に塗れば、諸の惱熱を除き、淸涼の樂を得るが如し。菩提心の香も亦復是の如く、覺觀、貪、恚、癡の熱を除滅して、智慧身をして悉く涼樂を得しむ。善男子、譬へば須彌山の衆生の品類は、若し彼山に近き者は悉く其色に同じうするが如し。菩提心の山も亦復是の如く、若し近き者有れば皆彼薩婆若の色に同じうするを得。善男子、譬へば波利質多樹の華香は、閻浮提の中の諸の婆師華、薝蔔華等の及ぶ能はざる所なるが如し。菩提心の香も亦復是の如く、妙功德の香は、聲聞緣覺の、無漏の戒、定、智慧、解脫、解脫知見の及ぶ能はざる所なり。善男子、譬へば波利質多樹の華未だ開敷せざる時に、其香普く閻浮提の內に熏じ、一切の華香の及ぶ能はざる所なるが如し。菩提心の華も亦復是の如く、一切の天人の有漏無漏の功德の華香の及ぶ能はざる所なり。善男子、譬へば波利質多樹の華は、一日衣に熏ずれば、

【那利羅】ナリケーラ(Narikela)莖等能作と譯す、此樹の莖果實等悉く有用にして衆生を益す。

【阿羅婆】ハータカラサ(Hatakarasa)金光汁藥と譯す、山中の井より出で之を呑めば仙人となるといふ。

薝蔔華、婆師華を千歳熏ずと雖も、及ぶ能はざる所なるが如し。菩提心の華も亦復是の如く、一日熏ずる所の功徳の香は、十方の佛所に徹し、一切の聲聞緣覺の無漏心を以て諸の功徳を熏ずること百千劫に於てするも及ぶ能はざる所なり。善男子、譬へば那利羅樹の根莖枝葉及び其華果は、悉く衆生を益するが如し。菩提心の樹も亦復是の如く、菩薩の大慈悲の生ずるに因りて、初發心より乃し一切の佛法を究竟するに至るまで、常に能く一切衆生を饒益す。善男子、譬へば一兩の阿羅婆藥を千兩の銅に變じ、以て眞金と爲すも、彼藥分に於て損減する所無きが如し。菩提心の藥も亦復是の如く、廻向の智を攝して一切の煩惱業障を除滅し、一切法を淨め、薩婆若の色に同ずるも、煩惱惡業は損減する能はず。譬へば小火も、焚燒する所に隨ひて其焰轉た盛なるが如し。菩提心の火も亦復是の如く、所緣の法に隨ひて慧火猛盛なり。譬へば一燈にて百千の燈を然すも損減する所無きが如し。菩提心の燈も亦復是の如く、悉く三世諸佛の慧燈を然すも、損減する所無し。譬へば明燈の大いなる闇室に入りて、悉く能く一切の闇冥を照除するが如し。菩提心の燈も亦復是の如く、心の闇室に入りて、無量劫に於て積集する癡闇を悉く能く除滅して、菩薩の明淨の智慧を具足せしむ。譬へば燈炷の其精麤なるに隨ひて光明も亦爾なり。若し膏油を益せば、光明も轉た益すが如し。菩提心の炷も亦復是の如く、其本願に隨ひて智慧の光を出し、普く法界を照し、大悲の油を増せば、衆生を教化し、佛の世界を淨め、諸佛の事を行じて、窮盡有ること無し。譬へば他化自在天王の、閻浮檀金の自然の天冠を

【迦毘伽】カラビンカ（Kalaviṅka）といひ、美音鳥と譯す。

冠れば、欲界諸天の壞る能はざる所なるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の大願の天冠を冠れば、聲聞緣覺の壞する能はざる所なり。譬へば大いなる師子吼ゆれば、小なる師子聲きて皆悉く勇健となり、一切の禽獸は遠く避けて竄伏するが如し。佛師子吼したまひ、諸の菩薩等、若し菩提心を讃歎する聲を聞かば、法身を長養し、妄見の衆生潜伏し退散せん。譬へば人有りて師子の筋を用ひて以て琴の絃と爲さんに、音聲既に奏すれば、餘の絃は斷絕するが如し。一切如來の波羅蜜身は菩提心の功德の音聲を出す。若し五欲二乘の法を樂ふ者は、聞きて悉く斷絕せん。譬へば牛馬羊の乳、合して一器に在るに、師子の乳を以て彼器中に投ずれば、餘乳は消盡し、直に過ぎて礙ふる無きが如し。如來の師子の菩提心の乳を、無量劫に積む所の諸の業煩惱の乳中に著くれば、皆悉く消盡して聲聞緣覺の法中に住せず。譬へば迦毘伽鳥の殼中に在る時、大勢力有りて餘鳥の及ばざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、生死の殼に於て菩提心を發さば、功德勢力は聲聞緣覺の及ぶ能はざる所なり。譬へば金翅鳥の初始めて生るる時、其目は明淨にして、大勢力有り、大小の諸鳥の及ぶ能はざる所なるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、如來の家に生れて菩提心を發し、慧眼明淨にして大勢力有り、聲聞緣覺の、百千劫に於て修習する智慧も及ぶ能はざる所なり。譬へば健士の、那羅延金剛の利箭を以て堅密の鎧を射るに、直に過ぎて礙ふる無きが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の智慧の利箭を以て、諸の邪見煩惱の密鎧を射るに、徹過して礙ふる無し。譬へば摩訶那伽大力勇士の、

【阿夜犍多】アヤカンダ（Ayahkanda）勝伏鐵と譯し、鐵の最も勝れたるもの。

【摩伽羅】マカラ（Makara）極大魚と譯す、是れ巨鼈なり。

威を奮つて怒る時は、閻浮提の人能く壞る者無きが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、大慈悲を發して菩提心を修すれば、一切世間の諸魔眷屬及び煩惱業の壞する能はざる所なり。譬へば人有りて大技術を學びて、未だ究竟せずと雖も、諸の餘の功能は及ぶ能はざる所なるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の願を學ばば未だ究竟せずと雖も、聲聞、緣覺、諸の餘の衆生の及ぶ能はざる所なり。譬へば人有り、善射術を學ばば、先づ自ら安立するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、一切智地を學ばば先づ自ら菩提の心に安立し、必ず一切の佛法を得ん。譬へば幻師の、先づ幻術を讀み、然して後に一切の幻事を示現するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心を發して、然して後に一切の諸佛菩薩の正法を顯現す。譬へば幻術の色に非ずして色を現ずるが如し。菩提心の相も亦復是の如く、法界の功德莊嚴を顯現す。譬へば人有りて閻浮檀金の莊嚴の具を著くれば、一切を映蔽して悉く聚墨の如くならしむるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く。菩提心の莊嚴の具を以て、諸の衆生、聲聞、緣覺の有ゆる功德を蔽ふ。譬へば阿夜犍多鐵の如し、此鐵は少分にして悉く能く一切の餘の鐵の、諸の鉤鎖の縛を毀壞す。菩提の心も亦復是の如く、諸の邪見、煩惱、愛の縛を斷つ。譬へば疾風の去るに隨ひて礙ふる無きが如し。菩提心の風も亦復是の如く、所行の處に隨ひて、諸の煩惱を除きて、悉く障礙無く、聲聞緣覺の解脫に住せず。譬へば人有り、善く大海に入りて沒溺せず、摩伽羅魚も害する能はざる所なるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心を以て生死の海に入れば、生死の染汚する

所と爲らず、亦實際を證せず、聲聞緣覺の摩伽羅魚も害する能はざる所なり。譬へば人有りて甘露を服食すれば、一切衆の患も害する能はざる所なるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の甘露の法藥を服すれば、聲聞緣覺の地に墮せず、大悲を修習して願行を滿足す。譬へば人有りて翳身藥を用ひて以て其目に塗れば、自在に遊行して能く見る者無きが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心を得て大願を滿足すれば、自在に遊行して魔の境界に入るも、一切の衆魔は見る能はざる所なり。譬へば人有りて大王に依恃すれば餘人を畏れざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の大力法王に依れば、障蓋を除滅し、惡道を畏れず。譬へば人有り、深水の内に居れば火焚を畏れざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の善根の水の内に居れば、聲聞緣覺の解脫の火も燒く能はざる所なり。譬へば人有り、猛將に依恃すれば怨敵を畏れざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心に依れば諸の惡を畏れず。譬へば釋天の金剛を執持して、一切諸の阿修羅を降伏するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心を執りて諸魔及び餘の外道を摧滅す。譬へば人有りて阿羅婆藥を服すれば瘦せず老いず、延壽窮り無きが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の阿羅婆藥を服すれば、無量劫に於て生死の中に在りて菩薩行を修し、染著する所無し、譬へば阿羅婆藥は、初め淨水を用ふるが如し。菩提心の藥も亦復是の如く、一切菩薩の修する所の行の中にて、最も先首と爲す。譬へば人有りて諸根の法の中にて、命根を首と爲すが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、諸佛の正法は菩提

の心を最も其首と爲す。譬へば人有りて命根斷つが故に、父母親族を利益すること能はざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心を離れては、一切衆生を饒益する能はず。譬へば大海の能く壞する者無きが如し。菩提心の海も亦復是の如く、聲聞緣覺は沮壞する能はず。譬へば日光は諸の星宿の光の蔽ふ能はざる所なるが如し。菩提心の日も亦復是の如く、大願智慧の日光を圓滿し、聲聞緣覺の無漏の慧光の蔽ふ能はざる所なり。譬へば太子初生のとき、已に大臣の尊重する所と爲るが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心を發せば、已に一切の聲聞緣覺の共に尊重する所と爲る、大悲を修するが故に。譬へば王子は年幼少なりと雖も、一切の大臣皆悉く敬禮するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心を發せば、聲聞緣覺皆悉く敬禮す。譬へば王子は未だ自在ならずと雖も、已に具に國王の儀相を成就するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、煩惱業障の爲に覆はると雖も、已に具に菩提心の相を成就す。譬へば目瞖すれば眞の淨寶を見るも、不淨たりと謂ふが如し。菩提心の寶も亦復是の如く、無智不信なれば不淨の想を起す。譬へば呪藥は、若し衆生有りて見聞し共に住すれば、一切衆の病は皆悉く除癒するが如し。菩提心の藥も亦復是の如く、善根を長養し、智慧の藥を攝し、大願を滿足す。菩薩の慧身も、若し衆生有りて、見聞し共に住し、修し、正念する者は、皆悉く煩惱の諸病を除滅せん。譬へば恆娑衣の塵垢を受けざるが如し。菩提心の衣も亦復是の如く、一切生死の塵垢を受けず。譬へば人有りて常に甘露を持し、專念して散ぜず、而も能く一切の諸法を分別

するが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、菩提心の甘露の正法を持し、正念して散せず、而も能く一切衆生を敎化し、大願を具し智慧身を成ぜしむ。譬へば犂の軛有ること無ければ、卽ち用に堪へざるが如し。菩提の心も亦復是の如く、正直心を離るれば、如來の法に於て實義有ること無し。譬へば轉輪王に妙天冠有り、名けて象藏と曰ふ、彼冠を洗ふ時は、四種の兵衆虛空に遊行するが如し。菩提心の冠も亦復是の如く、諸の菩薩の一切の善根を淨め、三有を遠離し、如來の智慧は無爲の境界の虛空の中に行く。譬へば金剛は金性より生じて、餘寶より生ずるに非ざるが如し。菩提心の寶も亦復是の如く、大悲もて衆生を救護するの性より生じ、餘の善より生ずるに非ず。譬へば樹有り、根より生ぜずして而も能く枝葉華果を長養するが如し。菩提心の樹も亦復是の如く、依止する所無くして、而も能く一切種智を長養し、通明大願普く世間を覆ふ。譬へば金剛は一切器の盡く善く發明するに非ず、亦諸器の盡く能く容持するに非ざるが如し。菩提心の寶も亦復是の如く、小心にして慳結なる無智の者の器は發明する能はず。諂曲、邪見の衆生の器の中には容持する能はず。譬へば金剛の能く衆寶を壞するが如し。菩提の心も亦復是の如く、決定して一切の諸法を了知す。譬へば金剛の能く衆の山を壞するが如し。菩提の心も亦復是の如く、一切諸の邪見の山を壞散す。譬へば金剛の破れて全からずと雖も、一切の衆寶は猶し及ぶ能はざるが如し。菩提の心も亦復是の如く、少しく懈怠すと雖も、聲聞緣覺の諸の功德の寶の及ぶ能はざる所なり。譬へば破れたる金剛も、猶し能く諸の貧困の苦を除滅す

るが如し。菩提の心も亦復是の如く、復少しく威儀趣法を失ふと雖も、猶能く諸の貧窮の苦を除滅す。譬へば小金剛も悉く能く一切の諸物を破壞するが如し。菩提の心も亦復是の如く、小境界を緣じて能く一切の無知、癡、惑を破る。譬へば金剛は常人の得る所に非ざるが如し。菩提の心も亦復是の如く、小心の衆生の能く得る所に非ず。譬へば金剛は智術無き者の識る能はざる所なるが如し。菩提の心も亦復是の如く、無智の衆生の識る能はざる所なり。譬へば金剛は能く消滅する無きが如し。菩提の心も亦復是の如く、一切諸法も能く消盡せず。譬へば金剛の器仗は一切衆生、乃至摩訶那伽も執持する能はざるが如し。那羅延力をば除く。菩提の心も亦復是の如く、聲聞緣覺は受持する能はず、諸の菩薩摩訶薩をば除く。譬へば金剛の器仗の貫徹せざる無きこと、餘の器仗の能く爲す所に非ざるが如し。菩提の心も亦復是の如く、三世を觀察して衆生を敎化し、阿僧祇劫に無量の苦を受くること、聲聞緣覺の及ぶ能はざる所なり。譬へば金剛は、餘の持する能はざるが如し。金剛の地をば除く。菩提の心も亦復是の如く、菩薩の行願功德を出生し、聲聞緣覺の持する能はざる所なり。薩婆若の正直心の者をば除く。譬へば金剛の器の中に水を盛るに、消盡すべからざるが如し。菩提の心も亦復是の如く、勝妙に安住し、善根を廻向し、生死の趣に入り、諸の不善の法も消盡する能はず。譬へば金剛の能く大地を持して墜沒せしめざるが如し。菩提の心も亦復是の如く、諸の菩薩の一切の願行を持して、墜落して三界に沒せしめず。譬へば金剛は百千劫に於て水中に處するも而も爛壞せず、亦變異無き

【善男子菩提の心は】後に前の功德の廣多無量なることを結す。

【善男子、汝先に問ひし所等】以下大段第二に正しく己が法界を授く、中四段、初に法體を授く。更に五あり、一攝入方便を明す。

【爾時、彌勒菩薩】以下彌勒加して證入せしむ。

【爾時、善財】以下證所見の境界を明す、初に依報の淨土を見て益を得るを明す。

が如し。菩提の心も亦復是の如く、無量劫に於て生死の中に處するも、諸の煩惱業も斷滅する能はず、亦損滅すること無し。譬へは金剛は、一切の大火も燒熱する能はざるが如し。菩提の心も亦復是の如く、一切生死の貪、恚、癡の火も燒熱する能はず。譬へば金剛道場の座は、能く菩薩を持し諸魔を降伏し、等正覺を成じ、餘は持する能はざるが如し。菩提の心も亦復是の如く、能く一切の菩薩の願行、諸の波羅蜜、諸忍、諸地、廻向、受記、菩提道を修し、諸佛の供養し、聞法受行を持し、一切諸心の持する能はざる所なり。

善男子、菩提の心は是の如き無量の功德を成就す。若し衆生有りて菩提心を發さば、即ち是の如き無量の功德を具へん。是故に善男子、汝善利を得て、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、菩薩行を修すれば、是の如きの無量の功德を具足す。

善男子、汝先に問ひし所の「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修するや」とは、汝今是明淨莊嚴の大樓觀に入らば、則ち能く菩薩行を學し、菩薩道を修するを了知して、無量の功德を具足し成就せん。」

爾時、善財童子、彌勒菩薩を敬ひ遶り、合掌して白して言さく「唯願くば大聖、樓觀の門を開き、我をして入るを得しめたまへ。」爾時、彌勒菩薩、即ち右の指を彈きたまへば、門は自然に開き、善財即ち入る。入り已りて還つて閉ぢぬ。爾時、善財、樓觀を觀察するに、廣大無量なること猶し虛空の如し。衆寶を地と爲し、阿僧祇の窓牖有り、却敵、欄楯は七寶もて合成し、阿僧祇の幡幢は蓋もて莊嚴し、阿僧祇の寶瓔珞を垂帶とし、阿僧祇の

【又無量なる自在等】次に正報の因果を見ることを明す。

大師子の幢、半月の寶像、諸寶の繒綵あり、又阿僧祇の天冠寶衣を以て莊嚴し、阿僧祇の寶網にて其上に羅覆し、阿僧祇の金鈴は自然に微妙音聲を演出し、又無量の寶華雲、諸の妙香雲を出し、阿僧祇の細末金屑を雨らし、阿僧祇の勝妙の光明を放ちて普く一切を照せり。阿僧祇の異類の衆鳥有りて、和雅の音を出し、阿僧祇の優鉢羅、鉢曇摩、分陀利華を雨らし、阿僧祇の摩尼寶の光を出して普く一切を照せり。樓觀の內に於ては、百千諸の妙樓觀を具有し、相障礙せず、莊校嚴飾も亦上に說くが如し。爾時、善財は樓觀の不可思議樂妙の莊嚴を覩見て、心大いに歡喜し、踊躍無量にして、其心柔軟となり、諸の妄想を離れ、一切の愚癡闇障を除滅し、正念に思惟して專ら妙趣を求め、無礙の身を以て恭敬して禮を作せり。禮し已りて、彌勒菩薩の威神力の故に、諸の樓觀の中に自ら其身を見る。

又無量の自在神力の不思議の事を見る、或は彌勒の本の種姓に隨ひ、壽命、知識、善根を長養せしこと、諸劫の世界、一切の佛所、及び諸の眷屬、諸の大願に因りて、初め阿耨多羅三藐三菩提心を發したまひしを見。或は初に慈心三昧を得、因りて以て名と爲ししを見、或は彌勒菩薩の行を行じ、一切の諸波羅蜜、諸忍、諸地を滿足し、佛の世界を淨めしを見、諸の如來に法を聞きて受持し、正法を守護し、大法師と爲り、無生忍を得たるを見、某の方處、某の如來の所にて、劫數多少にして受記を得たるを知り、或は彌勒、轉輪王と爲りて、十善もて世を化し、或は四天王と爲りて一切衆生を饒益し、或は帝釋と

爲りて五欲を訶責し、或は夜摩天王と爲りて不放逸を讃じ、或は兜率天王と爲りて一生の菩薩の功徳を讃歎し、或は化樂天王と爲りて自在の法を讃じ或は魔王と爲りて無常の法を說き、或は他化自在天王と爲りて菩薩の莊嚴せる化身を讃歎し、或は梵王と爲りて四無量心を讃歎し、或は阿修羅王と爲りて眷屬を調伏し、大智の海に入りて諸法悉く幻化の如しと了達し、或は閻羅王と爲りて大光明を放ち、普く地獄を照して一切の苦を滅し、或は香膳飲食を以て諸の餓鬼に施與し、或は畜生と爲りて種種の身を受け、爲に法を說きて其癡闇を除き、或は四天王の眷屬の爲に法を說き、乃至諸の梵天王の眷屬の爲に法を說き、或は諸の龍の眷屬の爲に法を說き、乃至人、非人等の眷屬の爲に法を說き、或は聲聞、緣覺、及び諸の菩薩の大衆の爲に法を說き、或は發心の菩薩、乃至十地の菩薩の爲に法を說きたまひしを見、或は初發心の菩薩、乃至十地の菩薩の功徳を讃歎せしを見る。

或は一切の波羅蜜を滿足して、平等なる諸法の忍門、廣き三昧門、樂深の法門に入り、禪三昧を修して通明を出生し、一切に充滿して菩薩行を行じ、世間に隨順して大願を成就したまひしを見、或は同行の菩薩と倶に衆生を饒益したまひしを見、或は一生の菩薩の諸佛の現前に記を授けられたる者と倶なりしを見、或は彌勒の百千劫に於て經行し、經卷を誦念し書寫して、懈怠有る無く、或は法門を觀じ、實義を思惟し、或は諸禪四無量心に入り、解脫三昧一切に入りたまふ等を見、或は菩薩の通明を出生したまひしを見る。

或は變化三昧を正受して、一一の毛孔より化身雲を出したまひしを見る、謂ゆる天身雲、

【或は樓觀に於て等】次に諸佛攝化の德を見ることを明す。

諸の龍、夜叉、乃至摩睺羅伽身雲、四天王身雲、乃至梵王身雲、轉輪聖王、王子、大臣、長者、居士、聲聞、緣覺、如來身雲なり。復一一の毛孔の中より一切衆生に等しき化身雲を出し、或は菩薩の法門を出したまひしを見る、謂ゆる菩提心の功德を讚歎する門、檀波羅蜜門、乃至願波羅蜜門、四攝、諸禪、無量の三昧、通、明、總持、諸諦、諸辯、止觀、解脫、緣起、念處、正勤、神足、根、力、覺、道の聲聞、緣覺の二乘の所行、菩薩の大乘の諸地、諸忍、菩薩の願行なり。是の如き等の一切の法門を現ず。

或は樓觀に於て諸の如來、大衆に圍遶せられたまふを見る。又諸佛の家族同じからず、種姓同じからざるを知り、其身の壽量、劫刹、無量の法門を教授すること、正法の世に住することも、分別し了知して、皆悉く同じからざるを知る。爾時、善財、諸の樓觀の中にて一樓觀を見るに、高廣にして嚴飾せること前よりも勝妙にして、三千大千世界の百億の閻浮提、百億の兜率天を包容し、菩薩命終し、降神し受胎し出生し、遊行すること七歩にして、十方を觀察して、大師子吼したまひ、帝釋梵王恭敬して奉侍し、童子の身を現じて宮殿の中に處し、園觀に出遊し、薩婆若の心を以て出家し苦行し、乳糜を受くるを現じ、道場に往詣して、衆魔を降伏し、菩提樹を觀じて正法輪を轉じ、天の宮殿に昇り、方土の劫數、眷屬の壽量、菩薩行を行じ、大願を滿足し、正法を演說して衆生を教化し、舍利を分つを現ずること皆悉く同じからず。

大方廣佛華嚴經　卷第六十

東晋天竺三藏佛駄跋陀羅譯す

入法界品第三十四之十七

【又樓觀の諸の金鈴】以下次に法音を聞くことを明す

爾時、善財、自ら己が身を見るに、諸佛の所に在りて是の如き等の諸の奇特の事を見る。又樓觀の諸の金鈴の中より、不思議微妙の音聲を出すを聞く。謂ゆる初發菩提心の聲、菩薩の行ずる所の諸の度願の聲、不可思議の諸佛を恭敬し供養する音聲、佛刹を淨むる聲、佛の法雲の聲なり。諸の莊嚴具も亦是の如き等の微妙の音聲を出す。又某の菩薩某の世界に在り、某の劫の中に於て某の知識に化せられ、善根を廻向して大願を出生し、某の佛所の大衆の中に於て、菩提心を發すの聲を聞く。又菩薩、諸行を修習し、劫數多少にして、某の刹の中に於て正覺を成ずるの聲を聞く。是の如きの名號、壽量の長短、大願を滿足し、衆生を教化するの聲、諸の菩薩、聲聞、緣覺の大衆の中に於て、般涅槃を現じ、法世に住するの聲を聞く。又菩薩、某の世界に於て、悉く能く廣く檀波羅蜜を行じ、禁戒を淨持し、忍辱を修習し、精進を發行し、諸の禪定に入り、智慧を習應し、法を求めんが爲の故に、諸の珍寳、國城、妻子、頭目、手足を捨て、正法

【爾時に善財】以下終に出生を見ることを明す。

を守護し、大法師と爲りて清淨の法を施し、大法會を設け、大法幢を建て、法鼓を撃ち、法螺を吹き、法雨を雨らし、塔廟を興立して種種に莊嚴し、衆生を安樂にし、佛の法藏を護ることを聞く。又某の佛某の世界に在し、某の劫の中に於て等正覺を成じ、眷屬の多少、壽命の長短、大願を滿足して衆生を教化することを聞く。是の如き等の不可思議微妙の音聲を聞き、身心柔軟となり、歡喜無量にして、卽ち無量の陀羅尼門、辯才門、忍門、精進門、大願門、通明門、智慧門、解脱門、波羅蜜門、三昧門を得たり。

爾時、善財、寶鏡の中に於て、諸の如來及び其眷屬、諸の大菩薩、聲聞、縁覺、淨き世界、不淨の世界、雜世界、或は世界に佛有し、或は世界に佛無く、或は上中下の世界、或は世界有りて因陀羅網の如く、或は翻覆仰伏の世界有るを見る。又復平正の世界を覩見、悉く分別して五道の別異を知り、又無量阿僧祇の諸の大菩薩の經行し、禪定し、諸法を觀察し、大悲心を發して普く衆生を覆ひ、種種の論を造りて衆の義趣を辯じ、或は經卷を書き、或は問ひ或は答ふるを見、或は三種の廻向、及び諸の大願を出生するを見る。悉く皆是の如き等の事を覩見る。又諸の寶柱の中より普く無量の青、黃、赤、白の淨玻瓈の色、因陀羅寶、閻浮檀金の諸の光明網を放つを見る。又諸の瓔珞の中より八功德の香水を出し、瑠璃寶の中より無量の光明を出すを見る。又優鉢羅、鉢曇摩、分陀利の中に諸の妙華を生じ、大さ車輪の如きを見る。華の中に悉く男女の大小なる、釋、梵、四王、諸龍、夜叉、乃至人、非人等及び諸の象馬、聲聞、菩薩、一切衆生の種種の形

【爾時、彌勒菩薩】以下四に問答して其見を辨定す。
【譬へば等】以下譬を以て其見を辨

類は、皆悉く恭敬し合掌して佛を禮するを見る。又寶樹の中に悉く種種の妙色の身を見る。謂ゆる如來の身、菩薩の身、天龍八部等の身、釋梵天の身、轉輪王の身、四部衆の身なり。各各衆の供養の具を執持して、尊重し讃歎し、恭敬し禮拜せり。又半月像の中より阿僧祇の日月の光明を放つを見る。又彌勒、過去世に於て菩薩行を修して、頭目髓腦、手足肢節、一切の身分、國城妻子、種種の諸物を布施し、其須むる所に隨ひて盡く之を給施したまひしを見る。又彌勒、諸佛を讃歎し恭敬し供養し、或は醫王と爲りて衆の病を療治し、正路を失ふ者には示すに正道を以てし、或は大船師と爲り導きて寶洲に至らしめ、或は馬王と爲りて衆生を荷負し鬼難を離れしめ、或は論師と爲りて諸の經論を造り、或は轉輪王と爲りて十善もて世を化するを見る、或は父母に孝順し、善知識に近きて其教に違はず、或は聲聞、緣覺、菩薩、如來の形色を現じて衆生を教化し、或は法師と爲りて佛法を讃歎し、禪思し誦念し、諸の福業を興し、塔廟、諸の妙形像を造立して、香華鬘を以て恭敬し供養し、或は衆生に三歸、五戒、八齋、十善を教へて、出家して道を學び、法を聞きて受持し、正念に思惟し、菩提心に住せしむるを見る。又彌勒、無量劫に於て、六波羅蜜を行じて衆生を化したまふ事を見る。又彌勒の無量劫の中の諸の善知識を見る。

爾時、彌勒菩薩、善財に告げて言はく「善くぞ來りし童子。汝、樓觀の諸の大菩薩の不可思議の自在力を見しや否や」「唯然り、已に見たり」。譬へば人有りて夢の中に山林、河池、大海、須彌、諸天の宮殿、四天下の中の一切の像類を覩見るが如し。是の如きを見已り

定す、中に十喩あり、一に夢に山海を見る喩、善財の妄を超えて勝境を見るに喩ふ。

【譬へば…命終らん等】二に臨終業現の喩、難思の境の冥に現ずるに喩ふ。

【譬へば…非人の爲等】三に非人所持の喩、加持して勝法を見しむるに喩ふ。

【譬へば…龍宮に等】四に龍宮淹久の喩、長劫を須臾と謂ふに喩ふ。

【譬へば梵宮の等】五に寶藏廣現の喩一の中に多事を現ずるに喩ふ。

て歡喜無量なり。爾時の善財も亦復是の如し。大菩薩の威神力を以ての故に、虚妄を遠離して三界の法を見るに、皆悉く夢の如し。菩薩の智慧無礙の法門は、諸の菩薩の莊嚴法門に入り、菩薩の不可思議の諸の妙方便を究竟し、菩薩の神力自在を顯現す。譬へば人有りて命終らんとする時に當り、中陰の相を見るが如し。謂ゆる惡業を行ずる者は、地獄、畜生、餓鬼に於て諸の楚毒を受くるを見、或は閻羅王、諸の兵仗を持して囚執して將ゐ去るを見、或は刀山を見、或は劍樹を見、或は利葉もて衆生を割截するを見、或は鑊湯にて衆生を煮治するを見、或は種種に悲み苦む音聲を聞く。若し善を修する者は、命終の時に當り悉く一切の諸天の宮殿を見、或は天女の種種に莊嚴して遊戲し快樂するを見る。是の如き等の諸の勝妙の事を見て、而も自ら此に死し彼に生ずるを覺らず。但不可思議の行業の境界を見るなり。善財童子も亦復是の如く樓觀の内に於て、諸の菩薩の不可思議の勝業の境界を見る。譬へば人有りて非人の爲に持せられて、種種の形類を見、若し問難するもの有らば、悉く能く應答するが如し。善財童子も亦復是の如し。大菩薩の威神力を以ての故に、悉く能く分別して、正念に一切の諸法を思惟す。譬へば人有りて龍宮に入りて、七日、半月、一歲、百歲をも、須臾と爲すを謂ふが如し。善財童子も亦復是の如く、彌勒菩薩の神力の宮殿に入りて、百千劫に於ても須臾の如しと謂ふ。譬へば梵宮の莊嚴藏と名くるは、中に於て悉く三千世界の異類の形像を見るが如し。善財童子も亦復是の如く、樓觀の中に於て悉く一切の未曾有の事を見る。譬へば比丘の一切の入定を

【譬へば比丘の等】六に遍處定境の喩勝境心に隨って現ずるに喩ふ。
【譬へば…乾闥婆等】七に乾城無礙の喩、所見の無礙法に喩ふ。
【譬へば…天の宮殿】八昇天見人の喩、所見の法に於て自在を得るに喩ふ。
【譬へば大海の中】九に海に三千を現ずるの喩、所見の明了の德に喩ふ。
【譬へば幻師の等】十に幻現無礙の喩威力の奇を現ずる德に喩ふ。
【爾時、彌勒】五に彌勒威を攝して起たしむ。
【爾時、善財】第二に法名を顯す。
【入三世智正念思惟莊嚴藏の法門】前後際を攝するを以ての故に入三世智といふ、即ち是九世中の三現在なり、正念思惟とは

得ば行、立、坐、臥、彼境界に隨ひて、悉く現じて前に在るが如し。善財童子も亦復是の如く、樓觀の中に於て彼境界に隨ひて悉く分別して知る。譬へば人の乾達婆城を見るに、障礙する所無きが如し。善財童子も亦復是の如く、樓觀の中に於て一切の法を見るに障礙する所無し。譬へば人有りて天の宮殿に昇り、人の住處を見るに、障礙する所無きが如し。譬へば大海の中に於て悉く三千世界の一切の品類を見るが如し。譬へば幻師の悉く能く一切の形色を顯現するが如し。善財童子も亦復是の如く、樓觀の中に於て、彌勒菩薩の威神力の故に、悉く一切の未曾有なる事を見て障礙する所無し。

爾時、彌勒菩薩、威神力を攝して、即時に彈指し、善財に告げて言はく、『善男子、汝定より起て。』定より起ち已りて、之に告げて言はく、『汝此菩薩の神力自在の大願、功德の依果を觀見し、菩薩の莊嚴、奇特の、諸の深妙行を修習すること、生死の道を出づること、一切の法門の無量の莊嚴、諸佛の大願、不可思議の菩薩の三昧、是の如き等の事を、汝悉く見しや不や。』善財答へて言はく、『唯然り、已に見たり、善知識の威神力を蒙るが故に。』

爾時、善財白して言さく、『大聖、此れ何の法門なりや。』答へて言はく、『入三世智正念思惟莊嚴藏の法門なり。善男子、一生の菩薩は是の如き等の不可説不可説の法門を得たり。』『大聖、此諸の奇特の妙莊嚴の法は、何の所よりか來れる。』答へて言はく、『菩薩の神力の出生する所にして、而も亦神力の中に在らず、來らず去らず、積聚する處無し。譬へば龍雨の身心よりせず、但發意を以て雨らさんと欲すれば則ち雨る、然も彼境界は不可思

議なるが如し。善男子、此の諸の奇特の妙莊嚴の法も亦復是の如く、從來する所無く、但菩薩の神力を以てのみ出生す。善男子、譬へば幻師の種種の事を現ずるが來去の處無く、但幻力を以てのみ種種の事を現ずるが如し。此の諸の奇特の妙莊嚴の法も亦復是の如く、來無く去無く、住無く著無く、生ぜず滅せず、但菩薩の智願力を學するが故に、是の如きの事を現ず。」

爾時、善財白して言さく、「大聖、何の所よりか來りたまへる。」答へて言はく、「佛子、菩薩は無來の趣、無行住の趣、無所著の趣、不生不死の趣、不往不至の趣、不離不起の趣、不捨不著の趣、無業無報の趣、無起無依の趣、不常不斷の趣よりす。善男子、菩薩は但衆生を教化し救護せんが爲に大慈悲より來る、衆生の苦を滅せんが故に。菩薩の淨戒の道より來る、其樂ふ所に隨ひて自在に生ずるが故に。菩薩の大願の道より來る、本の發意なるが故に。菩薩の神通の道より來る、衆生の苦を滅して佛所に住せしめんが故に。菩薩の增損無き趣より來る、身心の諸の善業を失はざるが故に。菩薩の慧方便より來る、一切衆生の類に隨順するが故に。菩薩の化身の趣より來る、電、鏡像の如くなるが故に。善男子、汝問ひし所の我何の所よりか來れるとは、我生れし處の摩離國より來れるなり。彼に聚落有り、名けて樓觀と曰ひ、長者子有り、瞿波羅と名く。我爲に法を說きて菩提を立てしめ、我本生れし處の、諸の群生等は化すべき所に隨ひて爲に法を說き、亦父母及び諸の親屬の爲に、應に隨ひて法を說き、大乘に安立せしめて來りて此に至れり。」

能見の智明了無倒を顯し、莊嚴藏とは所見の境の具德合藏を明し、即ち樓觀中に一切劫一切刹を攝し、各勝德を具して皆出生ある故に此名を立つ。

【大聖此諸の等】以下第三に來處を辨ず、初に依報を明す。

【爾時、善財】次に正報を明す。

【無來の趣等】以下十句の無趣あり趣とは是れ處の義、從來する處なく、亦所思處なし、趣とは又是れ趣向の義、亦來去發趣なき故なり。

【摩離】マラヤデーシャ(Malayadeśa)蠻地と譯す、南天竺の國名。

【瞿波羅】ゴーパーラ(Gopāla)守護地と譯す。

【善財白して言さく】以下第四に生處を明す。

【善男子菩薩に等】答中二、初に法の家に依りて行德を生ずる處を明す、中に五段あり、一所生の處を顯す。

【善男子…般若等】二に生緣の眷屬を明す。

【佛子是の如くして】以下三に校量して勝れたることを顯す。

善財白して言さく『大聖、何等をか菩薩の生處と爲す。』答へて言はく『善男子、菩薩に十種の生處有り、何等をか十と爲す。謂ゆる菩提心は是れ菩薩の生處なり、菩薩の家に生るるが故に。正直心は是れ菩薩の生處なり、善知識の家に生るるが故に。諸地に安住するは是れ菩薩の生處なり、諸の波羅蜜の家に生るるが故に。大願を出生するは是れ菩薩の生處なり、菩薩行の家に生るるが故に。大悲は是れ菩薩の生處なり、四攝の家に生るるが故に。眞實の觀法は是れ菩薩の生處なり、般若波羅蜜の家に生るるが故に。摩訶衍は是れ菩薩の生處なり、方便波羅蜜の家に生るるが故に。衆生を敎化するは、是れ菩薩の生處なり、菩提の家に生るるが故に。智慧方便は是れ菩薩の生處なり、無生法忍の家に生るるが故に。諸法に隨順するは、是れ菩薩の生處なり、三世の諸佛の家に生るるが故に。善男子、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を以て母と爲し、大方便もて父と爲し、檀波羅蜜を乳と爲し、尸波羅蜜を乳母と爲し、羼提波羅蜜を莊嚴の具と爲し、毘梨耶波羅蜜を養育者と爲し、禪波羅蜜を潔淨と爲し、善知識を師と爲し、菩提分を朋友と爲し、一切善根を親族と爲し、一切菩薩を兄弟と爲し、菩提心を家と爲し、說の如く修行するを家地と爲し、菩薩の所住を家處と爲し、菩薩の忍法を豪尊と爲し、大願を出生するを巨富と爲し、菩薩行を具ふるを家法に順ずと爲し、摩訶衍を讚ずるを家法を紹ぐと爲し、甘露の灌頂せる一生の菩薩を王太子と爲し、能く淨く三世の佛家を修治す。佛子、是の如くして菩薩は凡夫地を超え、離生の法を證し、如來の家に生れ、佛の種姓に住し、三寶を斷たず、一切菩薩の種姓

【佛子菩薩摩訶薩は】以下四に所知自在を明す。

【善男子、我淨法身】以下五に業用の廣大を明す。

【若し諸の同行等】以下二に事の家に依りて化身を生ずることを明す。【拘提聚落】具に拘吒迦羅、此に樓觀といふ。

を守護し所生の處を淨め、諸の惡道を離れ、悉く一切の天、人、釋、梵、沙門、婆羅門の爲に、恭敬し供養せらる。佛家に生れ一切の大願藏を滿足せるを以ての故に。佛子、菩薩摩訶薩は是の如きの家に生れ、一切法は悉く電光の如しと知り、一切趣の中に生を受けて厭ふこと無く、趣は化の如しと了り、中に現處すと雖も而も所著無く、一切法は悉く我有る無しと達して、心に憂悔無く、大慈悲を以て衆生を教化して疲倦せず。生死は皆悉く夢の如しと了達して、一切劫に於て菩薩行を行じて懈廢せず。五陰は皆悉く幻の如しと了知して生死を畏れず、諸の法界を知りて心に所著無く、一切法は熱時の焰の如しと了り、一切行に於て倒惑を生ぜず、幻法に遊戲して、魔の境界を超え、淨法身を得て煩惱業を離れ、諸趣の中に於て自在を得、顚倒の惑無し。善男子、我淨法身は一切法界に充滿し、一切衆生に等しき色、一切衆生に等しき音聲、一切衆生に等しき名號、一切衆生に等しき威儀を現じ、一切衆生に等しき隨順世間を現じ、一切衆生に等しき受生を現じ、一切衆生に等しき童子身と、一切衆生に等しき想とを現じ、一切の菩薩の大願を出生して變化身と爲りて、衆生と等しく法界に充滿す。

若し諸の同行にして道心を失ふ者は、還つて菩提心を發起せしめんが故に、我此閻浮提の南界、摩離國の内の、拘提聚落の、婆羅門の家の種族の中に於て生れたり。彼憍慢心を滅せんと欲するが爲の故に、父母及び親族を化度せんが故に、中に於て生を受けたり。

善男子、我南方に於て諸の衆生の所應に隨ひて示現して之を化度し、此命終に於て兜率

【善男子汝今往詣し】以下第四に智照無二相の知識を明す。前の因法果を生じ體無分別に境智等の諸二相をして絶するを顯す故なり。

天に生る。彼諸天を化度せんと欲するが爲の故に、勝妙の智慧の功德を顯現して、欲の渴愛を消し、諸行は皆悉く無常にして、天趣は壽命なるも盛なるは必ず衰ふる有るを知らしめ、摩訶衍に入れる一生の菩薩は、皆悉く雲集し、諸の同行を教化せんと欲するが爲の故に、釋迦牟尼世尊の化したまふ所の蓮華を開かしめんと欲し、彼受生を現ずべし。善男子、我彼中に於て壽終りて下生し、正覺を成ずる時、汝及び文殊師利は倶に我を見るを得ん。

善男子、汝今文殊師利に往詣して問へ「云何が菩薩は菩薩行を學し、菩薩道を修し、普賢の所行を具足し成就するや」と。彼當に汝が爲に分別し演說すべし。何を以ての故に。文殊師利は無量億那由他の菩薩の願行を滿足して、常に無量億那由他の諸佛の母と爲り、又無量億那由他の諸の菩薩の師と爲り、勇猛精進して衆生を教化し、名稱普く十方世界に聞え、常に一切諸佛の衆中に於て大法師と爲り、悉く諸佛の爲に讚歎せられ、甚深の智慧の法門に安住して、一切法界を分別し、了知し、無量劫に於て諸の法門を修し、普賢菩薩の所行を究竟したまへり。善男子、文殊師利は是れ汝が善知識なり。能く汝をして如來の家に生ずるを得、善根を長養し、功德の聚を積ましめん、能く汝に諸の善知識は、大願を滿足し、一切菩薩の不可思議の功德を顯現するを示語せん。是故に善男子、汝應に一心に尊重し恭敬して、其所に往詣すべし。何を以ての故に。汝先に見えし所の諸の善知識によりて、菩薩行を修し、大願を滿足し、諸の法門を得しは、皆文殊師利の威

【普門城の等】別を攝して普に歸する故、謂く前の諸の差別位を攝して此文殊の普門に歸するなり。

【是念を作し時】次に正しく法界を證することを明す

【百十一由旬等】前の差別の位を微過して之の平等普門の所に至るなり善財の頂を摩づとは普法を以て其頂に灌ぐなり。

神力に由るが故なり。」時に善財童子は、頭面に彌勒菩薩を敬禮し、遶ること無數匝し、辭退して行けり。

爾時、善財童子は、是の如く百十一の城を經遊して、普門城の邊に到り、思惟して住し、十方を觀察して一心に專ら文殊師利を求むらく「何んが當に會遇して面り慈顏を奉ずべき。」是念を作し時、文殊師利は遙に右の手を伸べ、百十一由旬を過ぎて普門城に至り、善財の頂を摩でて、是言を作さく「善い哉善い哉、善男子。若し信根を離れば、憂悔に心沒し、功行具はらず、精勤を退失して、少功德に於て便ち以て足れりと爲し、一の善根に於て心に住著を生じ、菩薩行を發起せず、善知識の攝護する所と爲らず、如來の憶念したまふ所と爲らず。是等は皆悉く是の如きの法性、是の如きの理趣、是の如きの所行、是の如きの所作を了知する能はず。若は周遍して知り、若は種種に知り、若は源底を盡し、若は漸に趣入し、若は解說し、若は分別し、若は證知し、若は獲得せんこと、皆悉く能はず。」

是時、文殊師利、善財童子の爲に教誨を示し已り、慰喩して、其をして歡喜踊躍せしめ、阿僧祇の法門を成就するを得、無量の大智の光明、無量の菩薩の陀羅尼、無量の大願、無量の三昧、無量の神通、無量の智慧を得、皆悉く成就せしめ。復普賢の所行の道場の內に入るを得しめたまへり。既に善財を自ら住せる所に置き已り、文殊師利は還り攝して現ぜず。爾時、善財、三千大千世界の微塵に等しき諸の善知識を見るを得て、其教に遵

はず、薩婆若と大慈悲藏とを増長し、淨き慧眼を以て普く衆生を觀じ、菩薩の寂靜の法門に安住し、諸法の境界を分別し了知して、佛の甚深の大功德海に入り、解脫の道を具へて、精進し長養し、薩婆若の爲に正直心を修して、三世の甚深の法海に入り、諸佛の清淨の法輪に隨順して、現じて諸趣に入り、一切劫に於て菩薩行を修して大願を滿足し、明淨の慧光もて一切智の境を照し、菩薩の根を淨め、淨き慧光を以て愚癡の翳を除きて、一切法を照し、法界の一切佛刹及び諸の衆生を了達して、障礙の山を壞し、無礙の法に住して、諸地の法藏を具足し成就し、普賢菩薩の所行を修習せり。善財童子、普賢菩薩の名號行願、功德、諸地、地具、地法、地得、地次第、地修、地住、地境界、地持、地共、地正道を聞くを得て、一心に普賢菩薩に見えんと欲へり。

爾時、善財正念して、如來の金剛藏道場の一切寶蓮華藏の師子座の心、虛空界に等しき心、一切無著の心、一切刹を淨めて障礙無き心、一切法の境界に於て障礙無き心、一切十方に充滿する心、薩婆若の境界を得たる無量の心、道場を莊嚴する心、深く入りて法海を分別する心、一切衆生を教化し成熟する廣大の心、一切劫に於て菩薩行を行じ如來の十力を究竟する心を起せり。爾時、善財是心を起せる時、自の善根力と、佛の威神力と、普賢菩薩の諸の善根力ともて、即ち十種の瑞相を見る。何等をか十と爲す。謂ゆる一切淨刹は菩提を莊嚴せるを見、一切刹に諸の惡道無きを見、一切刹は淨きこと蓮華の如きを見、一切刹の一切衆生の身心柔軟なるを見、一切刹の無量の莊嚴を見、一切刹の一切衆

【善財童子】上來文殊般若門を覚り、以下第五に顯因廣大相の知識普賢菩薩に見えて法界に證入することを明す。前に照理無二その甚深を顯し、方に成佛廣大の因に堪ふるを以ての故に。第一舉法勸修。

【地具】助道法等。又釋す信等の行地法を成ずとなす。

【地法】諸地所行法、初地十願、二地戒法等の如し。

【地得】諸地所得果、謂く調柔等。

【地次第】諸地の連接等。

【地修】諸地中不住道の仰いで上地を修する等。
【地住處】功德住處の故、證智相應の故。
【地境界】二諦を境界となす故、又道行眞如等を所證の境となす故。
【地持】所餘の諸功德を任持する故。
【地共】三種同相の智、諸地同行の故。
【地正道】根本後得二智を體となす故。
【爾時、善財】第二教に依りて趣入することを明す。
【爾時、善財】第三に正しく法界を證することを明す。八段あり、初に見身得益。中初に所見の法身を明す。

生は三十二相もて其身を莊嚴せるを見、一切刹は莊嚴の雲に覆はれたるを見、一切刹の一切衆生は慈心を成就せるを見、一切刹の莊嚴せる道場を見、一切刹の一切衆生は皆悉く念佛三昧を修習せるを見る。是を十と爲す。又十種の光相を見る。一切世界の微塵は、一一の微塵の中より、一切如來の光明網雲を放ちて、一切世界の微塵と等しく、一一の微塵の中より、一切佛の種種の色光を放ちて、一切世界の微塵と等しく普く法界を照し、一一の微塵の中より、一切の寶雲光明を放ちて、一切世界の微塵と等しく普く法界を照し、一一の微塵の中より、如來の光焔輪雲を放ちて、普く法界を照し、一一の微塵の中より、一切の香雲を出して、普く法界に熏じ、普賢菩薩の所行、一切の大願、諸の功德海を讚歎し、一一の微塵の中より、一切の日月光雲を放ち、普賢菩薩の光明を放ちて、普く法界を照し、一一の微塵の中より一切衆生に等しき身雲を出して、相好莊嚴し、佛の光明を放ちて普く法界を照し、一一の微塵の中より、一切菩薩の身雲を出し、一切行を究竟して法界に充滿し、一一の微塵の中より、一切の寶形像雲を出し、十方一切の世界に充滿し、一一の微塵の中より、一切如來の身雲を出して、一切世界の微塵と等しく、普く一切の甘露の正法を雨らして、法界に充滿す、是を十と爲す。

爾時、善財は十種の瑞相を見已りて、即ち是念を作さく、『我今必ず普賢菩薩を見て、善根を增長し、菩薩の妙行を究竟して、一切佛を見ん。若し普賢菩薩を見ば一切智の想を得ん。』一心に恭敬して普賢菩薩を見んと欲す。

爾時、善財、卽ち普賢菩薩を見るに、金剛藏道場に在して、如來の前に於て蓮華藏師子の座に處し、大衆に圍遶せられ、心虚空の如くして染著する所無く、障礙を除滅し、一切刹を淨め、無礙の法を以て十方に充滿し、一切智に住し、諸の法界に入りて衆生を敎化し、一切劫に於て菩薩行を行じ、一切諸佛を恭敬し供養し、心に退轉無く、衆生の中に於て最勝最上にして、一切の世間能く壞る者無く、一切菩薩も其智慧の境界を察する能はず、不思議の諸の妙功德を具へ、普く三世等の諸の如來を觀じたまふ。

爾時、善財、普賢菩薩を見るに、一一の毛孔より一切世界の微塵に等しき光明を放ちて、普く一切の虚空法界に等しき世界を照したまひ、一切衆生の苦患を除滅し、悉く能く菩薩の善根を長養し、一一の毛孔より種種の香雲を出して、普く十方一切の如來及び諸の眷屬に熏じ、一一の毛孔より一切世界の微塵に等しき華雲を出し、一一の毛孔より一切世界の微塵に等しき諸の香樹雲を出し、衆の妙音を出して法界を莊嚴し、一一の毛孔より一切世界の微塵に等しき妙寶衣雲を出して虚空を莊嚴し、一一の毛孔より一切世界の微塵に等しき種種の寶樹を出して虚空に充滿し、以て莊嚴と爲し、種種の寶を雨らして佛の大衆に供へ、一一の毛孔より一切世界の微塵に等しき色界の天身を出し、一切法界の一切衆生界に充滿して菩提を讃歎し、一一の毛孔より一切の梵王の身雲を出して如來に妙法輪を轉じたまはんことを勸請し、一一の毛孔より一切の欲天の身雲を出して皆悉く諸佛の法輪を護持し、一一の毛孔より念念の中に一切世界の微塵に等しき三世の諸佛を出し

て虚空に充滿し、無依の衆生の爲に歸依と作り、一一の毛孔より念念の中に一切世界の微塵に等しき淸淨の佛刹を出して、諸佛菩薩其中に充滿し、無量の衆生を教化し成熟し、一一の毛孔より念念の中に、一切世界の微塵に等しき淨不淨の佛刹を出して虚空に充滿し、染汚の者をして皆悉く淸淨なるを得しめ。一一の毛孔より念念の中に一切世界の微塵に等しき不淨淨の刹を出して不淨の衆生を調伏し、一一の毛孔より念念の中に、一切世界の微塵に等しき一切衆生の身雲を出し、世間に隨順して衆生を教化し、一一の毛孔より念念の中に、一切世界の微塵に等しき菩薩の身雲を出して諸佛を讃歎し、一切衆生の善根を長養し、一一の毛孔より念念の中に一切世界の微塵に等しき初發心の菩薩の身雲を出して、一切刹に於て初發の菩提の心を示現し、一一の毛孔より念念の中に、一切世界の微塵に等しき菩薩の身雲を出し、一一の刹に於て一切佛の功德の願海と普賢菩薩の行ぜし所の妙行とを讃じ、一一の毛孔より念念の中に、一切世界の微塵に等しき普賢の所行を出し、甘露の法を雨らして、一切衆生をして薩婆若を修めしめ、一一の毛孔より念念の中に、一切世界の微塵に等しき佛、初めて正覺を成じ、世に出興したまふことを出したまへり。爾時、善財、是の如き等の不可思議の自在神力を見る。見已りて歡喜し、踊躍無量にして、重ねて普賢の一一の身分を觀るに、一一の肢節の一一の毛孔の中に、悉く三千大千世界の風輪、水輪、火輪、地輪、大海、寶山、須彌山王、金剛圍山、一切の舍宅、諸の妙宮殿、衆生の等類、一切の地獄、餓鬼、畜生、閻羅王の處、諸天、梵王、乃至、人、非人等、欲界、色界、及び無色

界、一切の劫數、諸佛菩薩の衆生を教化したまふを見る。是の如き等の事皆悉く顯現せり。十方一切世界も亦復是の如し。此娑婆世界の盧舍那如來、應供、等正覺の現じたまふ所の自在力の如く、東方の蓮華妙德世界の賢首佛の所に、神力を顯現するも亦復是の如し。賢首佛の所の如く、是の如く東方の一切世界の一切の佛所に、神力を顯現するも亦復是の如し。東方の如く南西北方四維上下の、一切世界の一切の佛所に、神力を顯現するも亦復是の如し。一切世界の一切の微塵の一一の微塵の中に於て、自在力を現ずるも亦復是の如し。

【爾時、善財】次に善財の得益を明す。

爾時、善財、普賢菩薩の不可思議の自在神力を見て、即ち十の不可壞の智慧の法門を得たり。何等をか十と爲す。謂ゆる念念の中に於て能く一身を以て一切刹に遍じ、念念の中に於て一切の佛所に詣り、念念の中に於て一切諸佛を恭敬し供養し、念念の中に於て一切の佛所にて正法を聞持し、一切佛の法輪智波羅蜜門を得、不思議の佛の自在の智波羅蜜門を得、無盡辯の智慧の法門を得、般若波羅蜜觀諸法門を得、一切法界海の大方便波羅蜜門を得、一切衆生の欲性を知る智慧波羅蜜門を得、普賢の所行の智慧波羅蜜門を得たり。

【爾時、普賢菩薩】以下二に摩頂して定を得たることを叙す。

爾時、普賢菩薩、即ち右の手を伸べて善財の頂を摩で、摩で已りて、善財復一切世界の微塵に等しき諸の三昧門を得たり。一一の三昧門は、各一切世界の微塵に等しき三昧有りて以て眷屬と爲せり。一一の三昧の中に一切世界の微塵に等しき諸の如來海を見、一切世界の微塵に等しき諸の功德具を長養し、薩婆若を生じ、大願海を滿じ、正道に安

【爾時、普賢菩薩】以下三に因深くして果厚きことを明す。

住し、一切諸の菩薩行を究竟し、薩婆若を發し、勇猛精進して、一切佛の光明の照す所と爲る。此娑婆世界の盧舍那佛の所の普賢菩薩、善財の頂を摩でて、一切世界の微塵に等しき三昧門と、諸の妙功德とを得しめしが如く、普賢菩薩は十方の一切世界の諸の如來の所に在りて、善財の頂を摩で、得る所の功德も亦復是の如し。

爾時、普賢菩薩、善財に告げて言はく、『善男子、汝今、我自在神力の奇特の事を見るや不や。』答へて言はく、『唯然り、已に見たり。此不思議は能く測る者莫し。唯如來をば除く。』『善男子、我過去の不可說不可說の世界海の微塵に等しき劫に於て、菩薩行を修して、專ら菩提を求め。一一の劫中に不可說不可說の世界海の微塵に等しき佛を見て、菩提心を修し、一一の劫中に、一切世界に於て不可說不可說の廣大の施會を設け、一切を給施し、或は妻子、城邑、聚落、頭目髓腦、肢節血肉、一切の身分を施し、壽命を惜まず、一向に專ら一切種智を求め。一一の劫に於て不可說不可說の世界海の微塵に等しき佛を恭敬し供養し、彼佛所に於て出家學道して正法を受持し、未だ曾て貪、恚、癡の心、我、我所の心、生死に樂著する虛妄の心、他を輕慢する心、諸の障礙の心を生ぜず、壞すべからざる佛の菩提心を修して、未だ曾て忘失せず。善男子、我修行せし所の菩薩の諸行は、佛の世界を淨め、衆生を敎化し、大悲を長養し、諸佛及び善知識を供養し、正法を護持し、悉く一切內外の諸物を捨て、世間出世間の智を修習し、一切衆生をして生死の苦に背かしめ、一切諸佛の功德を讃歎せるなり。是の如き等の事は不可說不可說の劫中に於て演說せんに、

【善男子汝且く】以下四に益を擧げて觀を勸む。

劫は猶盡すべくも、此諸の功德は窮め盡すべからず。善男子、我是の如きの功德具の力、諸の善根力、勝法を樂ふ力、功德を修する力、諸法の寂滅性を觀察する力、淨き慧眼の力、佛の威神力、諸の大願力、大慈悲の力、淨き通明の力、善知識の力を得たり。是力を得たるが故に、本性清淨の法身を逮得して、三世にも壞せず、又無上清淨の色身を得て、一切世間を超出し、應に化すべき者に隨ひて、覩見せざる無く、一切刹に遊びて處として至らざる無く、自在力を現じて見る者厭く無し。善男子、汝且く我清淨法身を觀ぜよ。無量劫海に菩薩行を行じて成就する所、無量劫の中にも聞き難く見難し、少善根を種ゑたる聲聞菩薩は、猶尚我名字すら聞くを得ず。況んや我身を見んをや。

善男子、若し衆生有りて我名を聞かん者は、阿耨多羅三藐三菩提に於て復退轉せじ。若は見、若は觸れ、若は迎へ送り、若は隨行し、若は光明を見、若は諸佛の世界を震動するを見、乃至夢中にも我を見聞せん者は亦復是の如し。若は思惟して我を念ずること、若は一日一夜、若は七日七夜、若は半月、若は一月、若は一歲、若は百歲、若は一劫、若は百劫、乃至不可說不可說の世界の微塵に等しき劫、若は一生に我を念じ、若は百生、乃至不可說不可說の世界の微塵に等しき生に、我を念ぜんも亦復是の如し。是の如き等の世界の微塵に等しき諸の妙方便を以て、一切衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を發し、不退轉に住せしむ。善男子、若し衆生有りて、我修習して佛刹を淨めたるを聞かん者は、必ず清淨の世界に往生するを得ん。若し衆生有りて我身を見聞せば、必ず我清淨身の中

【善男子汝復】以下五に奇特を觀見することを明す。

【爾時、善財童子】下六に所得を校量することを明す。

【爾時善財】以下七に位滿じて佛と齊しきことを明す。

に生ずるを得ん。善男子、汝復我淸淨法身を觀ぜよ。」

爾時、善財、普賢菩薩の相好の肢節、諸の毛孔の中に於て、不可說不可說の世界海の諸佛充滿し、一一の如來は不可說不可說の大菩薩衆を以て眷屬と爲したまへるを見る。彼一一の如來の刹海は、所依同じからず、形色も各異り、金剛圍山に大雲の彌覆せること、佛世間に興りて轉じたまふ所の法輪、是の如き等の事、皆悉く同じからざるを見る。又普賢菩薩、十方刹に於て一切世界の微塵に等しき如來の化身を出して、衆生を敎化し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむるを見る。

爾時、善財童子、一一佛世界の微塵に等しき諸の善知識を經由し親近して、得し所の功德は、普賢菩薩を見て得る所の功德に於て、百分が一にも及ばず、百千萬分、乃至算數も譬喩も及ぶ能はざる所なり。何を以ての故に。善財童子は念念の中に於て不可說不可說の佛の世界海に入り、不可說不可說の微塵に等しき諸の功德藏を得、諸佛海の次第に興世し、菩薩衆海の眷屬に圍遶せらるるを知り、衆生の根を了り、自在力を現じて之を化度し、或は一世界に一劫の中に於て菩薩行を修し、乃至不可說不可說の世界の微塵に等しき劫に菩薩行を修し、此世界に沒せず、彼世界に生ぜずして、而も能く無量無邊の世界の衆生を敎化して、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむればなり。爾時、善財童子、能く自ら普賢の行ぜし所の諸の大願海を究竟し、久しからずして當に一切佛と等しく、一身一切の世界に充滿し、刹も等しく、身も等しく、行も等しく、正覺も等しく、自在力も等しく、轉法

【爾時、普賢】以下八に偈頌、九十九偈半中、初五偈は聽を誡め許說す略して佛德を歎ず

【時に諸の菩薩衆】次の三偈は衆、勸を領して說を歎じ聽受せんことを頌す。

輪も等しく、諸の辯才も等しく、妙音聲も等しく、方便も等しく、無畏の力も等しく、佛の所住も等しく、大慈悲も等しく、不思議の法門自在力も等しかるべし。

爾時、普賢菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

汝等煩惱を離れて、清淨の心もて諦に聽け
佛の一切行と、眞實の波羅蜜とを說かん
諸の世間に超出したまへる、無上の調御士は
煩惱の垢を遠離して、清淨なること虛空の如し
圓滿なる智慧の日は、煩惱の闇を除滅して
普く一切法を照し、諸の群生を安樂ならしむ
如來は無量劫に、時に乃し世に出興したまふ
譬へば優曇華の、見難く値遇し難きが如し
普く諸の群萠の爲に、苦行して無量劫に
諸の世間に隨順したまふも、其心に染著無し
時に諸の菩薩衆は、既に普賢の教を聞きたれば
敬心に如來の、自在眞實の義を聽かん
普賢は佛の眞子にして、一切行を究竟し
常に佛の歎じたまふ所と爲り、言必ず虛妄ならず

【諸佛の微妙の智】次二十偈半は十方の報佛の勝德を歎ず。

普賢の功德の華は、三界の法に染まず
大衆を勸發して、無盡の智慧海を聽かしむ
諸佛の微妙の智は、淸淨なること虛空の如く
明かに一切行を了りて、其心に所著無し
一念に悉く、三世の一切法を了達し
善く衆生の根を知りて、其應に化すべき所に隨ふ
衆生心の煩惱と、諸業の善、不善と
樂ふ所とを皆悉く知りて、爲に正法を說く
或は如來の坐したまふを見るに、十方界に充滿すれども
衆生は罪に障へられ、近しと雖も而も見ず
或は初め發心してより、諸の放逸を遠離し
無量無數劫に、菩薩行を修習するを見るも
或は諸の最勝の、妙音もて法を演說したまふを聞くも
罪垢の衆生等は、佛の名號をも聞きたてまつらず
或は大菩薩は、三千界に充滿して
普賢の行を究竟し、如來爲に法を說きたまふを見る
或は盧舍那の、無量無數劫に

此世界を嚴淨して、最正覺を成ずるを得たまふを見
或は賢首佛、普賢大菩薩
斯等は悉く、蓮華妙德の刹に充滿したまふを見
或は阿彌陀、觀世音菩薩
灌頂し記を受けたる者の、諸の法界に充滿したまふを見
或は阿閦佛、香象大菩薩
斯等は悉く、妙樂嚴淨の刹に充滿したまふを見
或は月慧佛、金幢大菩薩
斯等は悉く、明淨鏡の妙刹に充滿したまふを見
或は日藏佛、智灌大菩薩
斯等は悉く、清淨光明の刹に充滿したまふを見
或は十方界の、諸佛光明を放ちて
衆の爲に法輪を轉じ、愚癡の闇を除滅したまふを見る
或は一毛孔の、不可說の佛刹に
諸佛の莊嚴身は、佛子の衆に圍遶せられ
爲に正法輪を轉じ、諸の群生を度脫したまふを見
或は一毛孔に於て、普く諸の佛子の

【或は釋迦文】次は別して釋迦佛化身の功德を歎ず、中に初二十偈半は佛の意業を歎ず、中初五は六度行の智用、次三は天身八相の用、次二は常在恆滅の用、次四は巧化隨機の用、次六半は身光壽刹の用を明す。

無數億劫の中に、菩薩行を修習するを見
或は一一の塵に於て、悉く無量の刹を見る
或は淨あり或は垢穢あり、諸の行業の起す所なり
或は盧舍那、彼に於て法輪を轉じ
自在力を顯現して、方便もて涅槃に入りたまふを見る
衆生の類の、一切の業煩惱を觀察し
自在力を顯現して、之を化して度脫せしめたまふ
是の如きの諸の法王は、十方世界の中に
自在力を顯現したまふ、我今少分を說かん
或は釋迦文、初め等正覺を成じ
諸の群生を饒益したまひ、一切能く測る莫きを見
或は菩薩と爲りて、一切佛を供養し
或は童子地に住して、自在力を顯現したまふを見
或は施、戒、忍辱、勤精進を行じ
深く諸の禪定に入り、慧方便地に住したまふを見
或は究竟じて、一切種智の地に住し
三昧陀羅尼、諸の通明を出生したまふを見

或は無量劫に、菩薩行を修習し
不退轉を逮得し、甘露の灌頂もて記せられたまふを見る
或は梵身、帝釋、四天王、刹利
婆羅門と爲り、此等の身を示現したまふを見
或は兜率より、命終し降神して生れたまふを見
或は宮殿に住し、欲を捨てて出家したまふを見
或は道場に坐し、魔を降して正覺を成じ
淨妙の法輪を轉じ、涅槃したまひて後に塔を起つるを見る
或は無量等の、最勝の天人尊
爲に灌頂の記を授けたまひ、無上の導師と成りたまふを見
或は十力の尊、教化し已り開く訖りて
般涅槃したまひしより已來、無量無數劫なるを見る
或は論師月となりて、梵王の宮に處するを現じ
亦大自在を、魔王の宮殿中に現じたまふを見
或は兜率の宮に、諸の天衆に圍遶せられ
彼が爲に正法を說き、悉く大いに歡喜せしめたまふを見
或は夜摩、帝釋、四天王、諸龍

【無上道に安住し】次の十九偈は佛の

夜叉王、八部の宮殿の中に處したまふを見
錠光如來の所にて、供養して受記を得
是の如き等の方便もて、諸の群生を教化したまふをみる
光明、身、壽命、淨慧、及び眷屬
教化威儀の聲、皆悉く數ふべからず
佛は衆生に同じく、或は身は須彌の如く
或は跏趺の坐を現じ、世界に充滿したまふを見
或は光一尋、或は百千由旬なるを見
或は現じて法界を照し、或は一切刹を照し
或は壽百歲、百千萬億歲
無量那由他、不可思議劫なるを現じ
無礙にして清淨なる慧もて、一念に三世を知り
悉く因緣より起り、而も實には自性無し
一刹に正覺を成じたまひて、普く諸の世界に現じ
能く一世界を現じたまひて、而も無量の刹と作し
無量の刹を示現して、而も一世界と爲したまふ
無上道に安住し、無畏の力を具足し

語業を歎ず、中に
初五は三乘の法輪
を轉ずるを、次五
は六度覺品對治の
法を、次五は五乘
の總別、乃至多乘を
次四は平等の語業
一切に應ずること
を明す。

無礙の智慧もて、十二の行法輪を轉じたまふ
苦集の盡道と、十二支の緣起とを知り
四辯の無礙智もて、一切法を演說したまふ
我無く我所無く、亦自性有る無く
生も無く亦滅も無く、來も無く亦去も無し
皆悉く虛空の如くにして、而も諸業を壞せず
如來は衆生の爲に、方便もて分別して說きたまふ
此法輪を轉じたまふ時、一切刹の
大海と金剛山とを震動して、恐怖する者有る無し
如來は一音もて說きたまひ、各所應に隨ひて解し
諸の煩惱の垢を滅して、薩婆若に住せしむ
如來は一音もて說きたまふに、或は施、戒、忍
精進、禪、智慧、慈悲及び喜捨
四念、四正勤、如意、諸根、力
覺、道、止觀、念、神通の諸の法門なりと聞く
如來は一音もて說きたまふに、八部、人、非人
梵、釋、四天王は、類に隨ひて音聲を解す

若し貪、恚、癡、憍慢、慳、嫉、結多く
八萬四千の垢あらんも、各對治の法を聞く
未だ淨業を修せざる者は、十善道を說きたまふと聞き
已に施戒を修せし者は、般涅槃を說きたまふと聞く
生死に染著する、懈怠の諸の群生は
解脫の門を說きたまふと聞きて、生死の苦を除滅す
少欲にして足るを知る者は、樂ひて閑靜に處す
是の如き等の衆生は、二乘の音を說きたまふと聞く
或は廣大心を修し、諸の功德藏を具へ
諸佛に親近する者は、大乘を說きたまふ聲を聞く
或は一世界有り、一乘を說きたまふ音
或は二三四五、乃至無量乘を聞く
智慧と行とに異り有るも、解脫には差別無し
猶し虛空の性の如く、若干の相有る無し
如來の微妙の音も、其性亦是の如く
應に所化の者に隨ひて、所聞各同じからず
佛は過去の行を以て、一微妙の音を得

【智と功德とを等】次の十五偈は身業を歎ず、中に於て初三は凡身を示現し、次二は聲聞身を、次三は外道身を、次三は大力身を、後四は諸天身を現ずることを明して結す。

彼此に心無くして、而も能く一切に應じたまふ
佛の口より妙光を放ちたまふこと、八萬四千の數にして
普く諸の世界を照して、衆の煩惱を除滅したまふ
智と功德とを具足して、三種の衆生に順ひ
世を離るること虚空の如くにして、常に世間に現じたまふ
復世に隨ひて、生、老、病、死の苦を現じ
或は復住壽を現じたまふと雖も、其性は虚空の如し
如來は、一切衆生の類の、諸根
及び性欲を分別して知り、薩婆若に住せしめたまふ
諸佛導師は、大樂に入るを示し
其化すべき所に隨ひて、善く威儀の法を現じたまふ
諸の聲聞の爲には、出家の威儀法を現じ
常に寂滅を樂修して、無餘涅槃を證したまふ
婆羅門衆の中には、羸老の身を示現し
縈髮して苦行し、語論窮り盡くる無し
氣を服し或は食を斷ち、五熱を以て身を炙り
是の如く苦行を現じて、諸の異學を降伏したまひ

【譬へば工みなる幻師の】次八偈半

或は異道の戒を持ち、善算、多くの方術
星歴、地動の相、種種の衆生の相もてしたまふ
深く諸の禪定、三昧及び解脱に入り
種種に嬉戯を現じて、薩婆若を得しめたまふ
衣服を樂ふを示現して、種種に身を莊嚴し
勇健にして兵法を善くしたまふ、刹利を降伏せんが故なり
治正の法と、時節諸の義利とを知り
軟語もて衆生を攝したまふを現ず、大臣を降伏せんが故に
或は四天王、八部鬼神の所に
方便もて爲に法を説き、皆大いに歡喜せしめたまふ
或は現じて帝釋と爲り、善法堂に安住して
諸の天衆に圍遶せられ、彼が爲に法を演説したまふ
夜摩或は兜率、化樂、化自在
梵王より淨居に至るまで、彼が爲に法を演説したまふ
是の如く無數なる、種種の威儀法を現じ
無量の方便力もて、諸の群生を度脱したまふ
譬へば工みなる幻師の、能く種種の事を現ずるが如く

は三業を喩顯す、中初五は身業、次一は意業、後二半は口業に喩ふ。

【如來の淨法身は】最後の六偈は法身の德を歎ず。

佛は衆生を化せんが爲に、種種の身を示現したまふ
月の虛空に遊び、觀る者增損ありと謂ひ
影は諸の河池に現じて、螢火の光を映蔽するが如し
如來の淨智の月は、增損有るを示現し
直心の水に處して、二乘の光を映蔽す
譬へば深き大海の、珍寶盡すべからず
中に於て悉く、衆生の形類の像を顯現するが如し
甚深の因緣海は、功德の寶盡くること無く
淸淨の法身の中に、像として現ぜざる無し
譬へば明淨の日の、世間の闇を照除するが如く
如來の淨智の日は、悉く三世の闇を除く
龍の慶雲を興して、普く一切に雨らし
身心より雨を降らすにあらずして、熱を除き淸涼を得しむるが如し
如來も亦是の如く、大悲の雲を興起して
普く甘露の法を雨らし、三毒の火を滅除したまふ
此法も亦、如來の身心より出づるにあらず
如來の淨法身は、三界に倫匹無し

諸の世間を超出して、有に非ず亦無に非ず
其實所依無く、去らずして而も遍く至る
譬へば夢の所見の如く、亦空中の畫の如し
色に非ず無色に非ず、相に非ず無相に非ず
有に非ず亦無に非ず、其性は虚空の如し
海の摩尼寶の、能く種種の寶を出し
衆生の諸の光明は、光に所有無きが如し
導師も亦是の如く、有なりと雖も而も有に非ず
一處の中に於て、功德の寶を積集せず
大仙の現じたまふは虚空のごとく、如、自性、實際
涅槃、離欲、滅、皆悉く是れ一性なり
衆生心の微塵も、海水の渧をも數ふべく
虚空も亦量るべくとも、佛の德は說くとも盡すこと無し
此法を聞きて歡喜し、心に信じて疑ふこと無き者は
速かに無上道を成じて、諸の如來と等しからん

大方廣佛華嚴經　終

昭和四年十月一日印刷
昭和四年十月十日發行

昭和新纂 國譯大藏經 經典部 第十二卷

不許複製

編纂者 昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者 三井晶史

發行者 東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社東方書院
代表者 坂戸彌一郎

印刷者 東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者 井波康三郎

發行所 東京市下谷區上野櫻木町五〇
株式會社東方書院
電話下谷四二五九
振替東京六八六一一

印刷所 西村由太郎 ・ 製本所 眞貝定次郎

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3936